

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第19集

寺家前遺跡 I

(古代・中～近世編)

第二東名No.81 地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

藤枝市-4

2012

中日本高速道路株式会社東京支店

静岡県埋蔵文化財センター



寺家前道跡より志太平野から駿河湾方面を望む（北から）



1. 寺家前遺跡遠景（南西から）



2. 寺家前遺跡遠景（南東から）



1. E-2区 中～近世調査面遠景（南東から）



2. E-3区 中～近世調査面全景

卷頭図版 4

E-3 区



1. E-3 区 中世井戸 SE8036 井戸枠北西面縦板状況 (北西から)



2. E-3 区 中世井戸 SE8036 井戸枠北西面縦板除去後 (北西から)



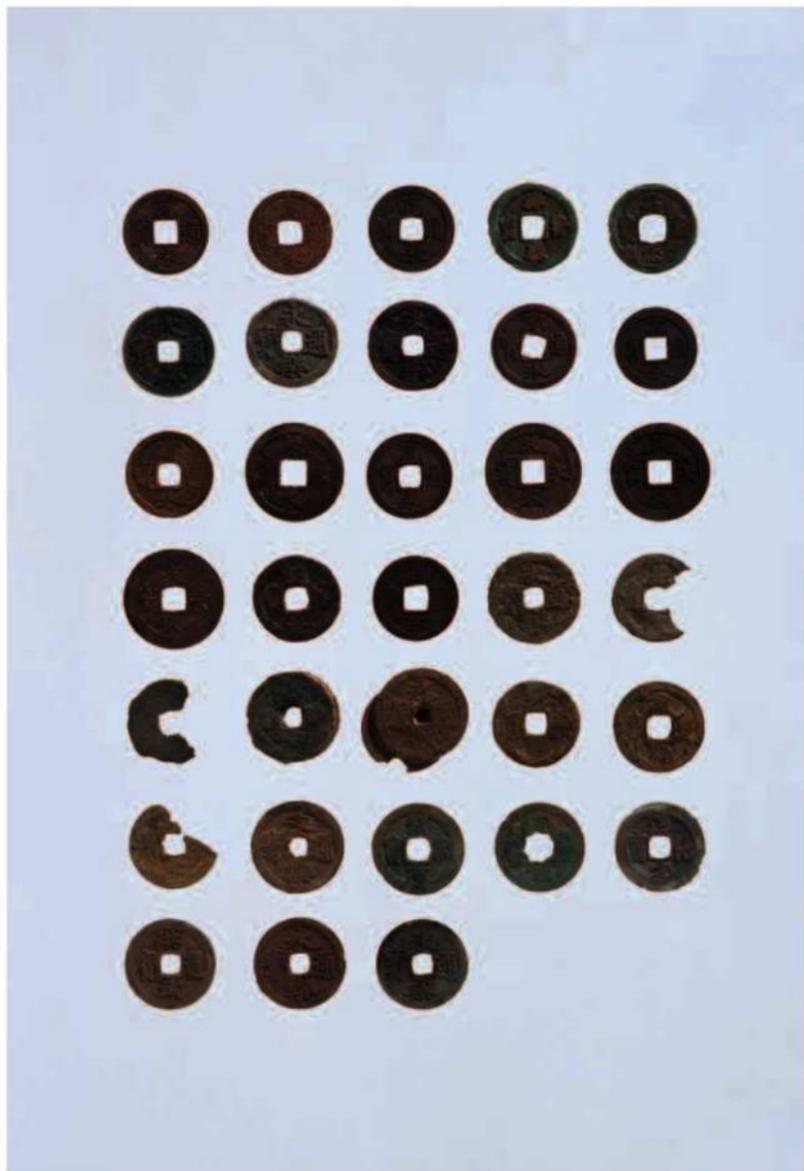
中世黒書土器



中世陶磁器（青磁・白磁）



近世墓出土かわらけ



近世墓出土錢貨

序

静岡県内の第二東名高速道路建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、平成8年に始まって以来、これまでにない大きな規模で長い期間にわたって実施されています。寺家前遺跡が発見された藤枝市中ノ合地内は第二東名の本線とパーキングエリア建設予定地にあたり、平成11年度より試掘・確認調査を開始しました。その結果、寺家前遺跡としては36,022㎡もの広大な面積を本発掘調査することになりました。藤枝市域ではすでに『衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古窯群』、『中ノ合イセ山遺跡・中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡』、『助宗古窯群 寺島大谷遺跡・寺島大谷古墳』の報告書を刊行しており、『寺家前遺跡Ⅰ』はこれに続く4冊目の報告書となります。

寺家前遺跡は藤枝市北東部の葉梨地区にあり、寺家山古墳群や衣原古墳群のある丘陵と葉梨川に挟まれた場所に立地しています。弥生時代後期や古墳時代後期、奈良・平安時代、さらに中世から近世に至るまでの集落跡と水田跡が見つかりました。弥生時代後期に初めて人による開発の手が入り、築かれた集落では堅穴住居跡や掘立柱建物跡、水田では畔跡などの多くの遺構が発見され、土器・石器や木製建築部材などの遺物も多く出土しました。その後も古墳時代後期の集落が断続的に営まれ、奈良・平安時代には条里制水田も整備されていました。中世（12世紀末～13世紀前半代）になると三箇所の屋敷地が築かれ、数多くの山茶碗や陶磁器類が出土しました。調度品などから屋敷の主は地位を持った富裕層であったことがうかがえます。

すでに報告書を刊行した衣原遺跡と合わせて、当時の人々の土地利用や生活の様子がわかり、古来より人々が活発に往来する地域であったことが明らかとなりました。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様にも広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、中日本高速道路株式会社東京支社ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2012年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長
勝 田 順 也

例 言

- 1 本書は静岡県藤枝市中ノ合字寺家前に所在する寺家前遺跡（第二東名No.81 地点）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、中日本高速道路株式会社東京支社の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（旧静岡県教育委員会文化課）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成23年度以降は、静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。
- 3 寺家前遺跡（第二東名No.81 地点）の確認調査・本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。
- | | | | |
|---------|------------------|------------------------------|---------------------------|
| 確認調査その1 | 平成12年6～9月 | 調査対象面積 37,616 m ² | 実掘面積 1,006 m ² |
| 確認調査その2 | 平成15年9月～平成16年3月 | 調査対象面積 35,750 m ² | 実掘面積 1,665 m ² |
| 本調査Ⅰ期 | 平成12年11月～平成13年3月 | 調査対象面積 16,340 m ² | |
| 本調査Ⅱ・Ⅲ期 | 平成15年9月～平成19年3月 | 調査対象面積 16,920 m ² | |
| 資料整理 | 平成19年4月～平成24年3月 | | |
- 4 調査体制は第1章第1節-2に記したとおりである。
- 5 本書の執筆は及川 司、中川律子、平野吾郎、松川理治が行った。
- 6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 地形・基準点・空中写真測量業務委託 株式会社フジヤマ、基準点測量業務委託 大鐘測量、掘削・発掘作業・注記業務委託 三愛工業、トイレ遺構分析業務委託 古環境研究所、井戸遺構花粉・珪酸化石分析業務委託 バレオ・ラボ、放射性炭素年代測定業務委託 轉加速器分析研究所、木製品樹種同定業務委託 東北大学植物園（鈴木三男）、整理作業・保存処理業務委託 株式会社パソナ、報告書印刷製本・発送業務委託 株式会社エム・クリエイション静岡支店
- 8 発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
- 足立順司 磯辺武男 伊藤延男 伊藤通玄 岩木智絵 岩木建太郎 河合 修 菊池吉修
篠原和大 柴田 稔 渋谷昌彦 鈴木三男 鶴間正昭 西尾太加二 長谷川 睦 平野吾郎
藤澤良祐 堀本真美子 松川理治 溝口彰啓 向坂鋼二 八木勝行 矢田 勝 山田昌久
湯之上 隆（五十音順・敬称略）
- 9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。



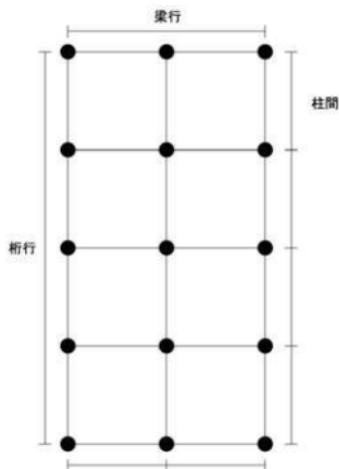
藤枝市の位置

凡 例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を基準とした。
- 2 調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
Na 81 地点（X=-121980, Y=-23160）=（89I-5）
- 3 出土遺物は4桁の通し番号（=遺物番号）を付して取り上げた。報告書中の挿図番号とは同一でない。
- 4 遺構図、遺物実測図の縮尺は、遺構 1/40・1/50・1/80・1/1,000・1/2,000、土器 1/3、石器 1/2、木製品 1/4、金属製品（銭貨）1/1、金属製品（銭貨以外）1/2 を原則とし、それぞれにスケールを付した。
- 5 色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修 1992）を使用した。
- 6 土層名は第1章第4節の基本土層柱状図（図8）に表示した名称を用いる。
- 7 第1章第2節の周辺遺跡地図（図3・4）は国土地理院発行 1:25,000 地形図「向谷」、「焼津」、「伊久美」、「静岡西部」を複写し加工・加筆した。

〈掘立柱建物〉



※柱板が残存している場合には●で表した。

〈遺物〉

木製品		漆（赤）
		漆（黒）
		圧痕・緊縛痕
		焦痕
		樺紐
石器		研磨痕・擦痕
		自然面

出土遺物の挿図番号は文中にゴシック体で示した。

() 内の数字は同一遺物の別個上での挿図番号である。

目次

巻頭図版	(2) 遺構の識別	50
序	2. 遺構の広がりと区分	
例言・凡例	(1) 上層1期の遺構	51
目次	(2) 上層2期の遺構	59
挿図目次・挿表目次・挿写真目次・図版目次	3. 遺構各節	
	(1) 掘立柱建物	87
	(2) 柵跡・塀跡	107
	(3) 井戸	110
	(4) 墓	129
	(5) 性格不明遺構	133
第1章 総論	第3節 古代、中世～近世の遺物	
第1節 調査に至る経緯	1. 遺物の概要と出土状況	
1. 第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いの経緯	(1) 遺物の出土状況	151
(1) 全体の経緯	(2) 遺物の概要	151
(2) 藤枝地区の経緯		
2. 調査の体制	第3章 まとめ	215
第2節 藤枝市の位置と環境	第1節 上層2期の遺構の性格	
1. 地理的環境	1. 寺家前遺跡の始まりと終わり	217
2. 歴史的環境	2. 遺跡の性格	218
第3節 確認調査	第2節 出土遺物について	
1. 確認調査その1	1. 寺家前遺跡出土の山茶碗	222
(1) 調査の方法と経過	2. かわらけを出土する遺跡	223
(2) 調査の結果	3. 輸入陶磁および古瀬戸前期の器種構成	226
2. 確認調査その2	第3節 考察	227
(1) 調査の方法と経過		
(2) 調査の結果	第4章 理化学的分析	231
第4節 本調査	1. 寺家前遺跡におけるトイレ遺構分析	233
1. 概要	2. 寺家前遺跡井戸遺構の花粉分析	243
2. 本調査Ⅰ期	3. 珪藻化石群集	247
(1) 調査の方法と経過	4. 放射性炭素年代測定	251
(2) 調査の結果	5. 寺家前遺跡から出土した古代～近世の木製品の樹種	257
3. 本調査Ⅱ・Ⅲ期		
(1) 調査の方法と経過	観察表	274
(2) 調査の結果	参考文献	316
4. 基本土層	写真図版抄録	
第5節 資料整理		
第2章 本調査の成果		
第1節 古代、中世～近世の調査		
1. 調査の経過		
2. 確認された層序と遺構		
第2節 古代、中世～近世遺構の概要		
1. 遺構の識別		
(1) 遺構の認識と分類		49

挿図目次

図1 藤枝市の地形図	8	図40 条里畔 SK583・9 出土木製品	83
図2 藤枝市と周辺の地質図	9	図41 道路遺構 A531・534 (1)	85
図3 藤枝市と周辺の遺跡分布図	10	図42 道路遺構 A531・534 (2)	86
図4 葉梨地区周辺の遺跡と路線図	12	図43 上層1期 SH101・102・103・104	87
図5 確認調査その1・その2対象範囲と調査配置	14	図44 上層1期 SH105・106・107・108・109	88
		図45 上層1期 SH201・202・203・204	89
図6 本調査対象範囲	17	図46 上層2期 SH101	91
図7 グリッド配置図	19	図47 上層2期 SH102	92
図8 基本層序	28	図48 上層2期 SH103・104	93
図9 全体図	36	図49 上層2期 SH105・135	94
図10 遺構全体図1	38	図50 上層2期 SH161・162・163・164	95
図11 遺構全体図2	39	図51 上層2期 SH151・152	96
図12 遺構全体図3	40	図52 上層2期 SH153・154・122・129	97
図13 遺構全体図4	41	図53 上層2期 SH141・142・138・165・166	98
図14 遺構全体図5	42	図54 上層2期 SH207	101
図15 遺構全体図6	43	図55 上層2期 SH207-2	102
図16 遺構全体図7	44	図56 上層2期 SH208	103
図17 遺構全体図8	45	図57 上層2期 SH209	104
図18 遺構全体図9	46	図58 上層2期 SH201・204	105
図19 遺構全体図10	47	図59 上層2期 SH202・203	106
図20 遺構全体図11	48	図60 上層2期 SH210	106
図21 上層1期全体図	51	図61 上層2期 SH205・206	107
図22 上層1期遺構配置図1	52	図62 上層2期 SA101・102-A・102-B	108
図23 上層1期遺構配置図2	54	図63 上層2期 SA102-C・103・104・201・202・203・204	109
図24 道路遺構 A535・536・537	57	図64 井戸各部名称	110
図25 上層2期全体図	59	図65 SE8608・8680・8637・8281・8609・8610・8247・532	112
図26 1群遺構配置図	61	図66 SE8036・8769・169	116
図27 区画溝 SD3839 流路 SR3964・3959・3942・3713 出土土器	62	図67 SE8036 井戸枠 (柱)	117
図28 区画溝 SD2452 出土土器	63	図68 SE8036 井戸枠 (縦板①)	118
図29 区画溝 SD2679 出土土器	64	図69 SE8036 井戸枠 (縦板②)	119
図30 区画溝 SD937・668・3134・3704 出土土器	67	図70 SE8036 井戸枠 (縦板③)	120
図31 2群遺構配置図	69	図71 SE8036 井戸枠 (縦板④)	121
図32 流路 SR9122 区画溝 SD9067・8033・8183・8088 出土土器	71	図72 SE8036 井戸枠 (縦板⑤)	122
図33 流路 SR8436・8280・8045 井戸 SE8036・169・8769 出土土器	73	図73 SE8036 井戸枠 (縦板⑥)	123
図34 SD9067 出土木製品	74	図74 SE8036 井戸枠 (桟木①)	124
図35 3群遺構配置図	78	図75 SE8036 井戸枠 (桟木②)・井戸内出土木製品	125
図36 整地層出土土器1	79	図76 SE558・559・281	126
図37 整地層出土土器2	80	図77 SE558 井戸枠 (縦板)	127
図38 3群大畔・水田・A534 出土土器	81	図78 SE558 井戸枠 (桟木)・出土遺物	128
図39 条里畔	82	図79 SE559・281 出土木製品	129
		図80 墓坑 SP2437・2763・3089・1055	130

図 81	墓坑出土土器	131	図 123	包含層出土山茶碗 (澁美・湖西系、尾張・知多系) 1	174
図 82	性格不明遺構 SX164・212	133	図 124	包含層出土山茶碗 (澁美・湖西系、尾張・知多系) 2	175
図 83	SX164 出土土器 1	134	図 125	出土白磁他	177
図 84	SX164 出土土器 2	135	図 126	出土青磁	179
図 85	SX164 出土土器 3	136	図 127	出土黒書土器 1	182
図 86	SX164 出土木製品・石製品	137	図 128	出土黒書土器 2	183
図 87	SX205 出土土器 1	139	図 129	出土黒書土器 3	184
図 88	SX205 出土土器 2	140	図 130	出土黒書土器 4	185
図 89	SX205 出土土器 3	141	図 131	黒書土器出土分布図	185
図 90	SX205 出土木製品	142	図 132	出土転用碗・灯明皿	187
図 91	SX205 出土石製品・金属製品・土製品	143	図 133	出土一石五輪塔・五輪塔	188
図 92	SX212 出土土器	144	図 134	中～近世石製品・碗他	189
図 93	SX212 出土木製品・石製品	145	図 135	中～近世石製品・砥石 (大型)	190
図 94	SD118 出土土器	146	図 136	中～近世砥石 (小型)	191
図 95	SE1820・SX93・SF1561・SP8681 出土木製品	147	図 137	包含層出土下駄・金剛草履・折敷 (中～近世)	193
図 96	1 群柱穴出土土器	148	図 138	包含層出土曲物 (中～近世)	194
図 97	その他の遺構 SF1187・SK5001・SP3550	149	図 139	包含層他出土漆桶他 (中～近世)	195
図 98	上層 2 期 SH207・209 柱間模式図	150	図 140	包含層他出土用途不明木製品 (中～近世)	196
図 99	包含層出土かわらけ・土師器鍋	151	図 141	7 層出土木製品 (平安～中世)	197
図 100	かわらけ分類図	152	図 142	7 層水田出土木製品 (平安)	198
図 101	中世後半～近世土器出土分布図	153	図 143	包含層出土木製品 (奈良～平安)	199
図 102	包含層出土陶磁器 1	153	図 144	時期不明木製品	200
図 103	包含層出土陶磁器 2	154	図 145	近世墓出土銭貨	201
図 104	包含層出土陶磁器 3	155	図 146	近世墓他出土銭貨	202
図 105	包含層出土陶磁器 4	156	図 147	近世墓出土銭貨模式図	203
図 106	包含層出土陶磁器 5	157	図 148	中～近世金属製品 (釘)	204
図 107	包含層出土陶磁器 6	158	図 149	中～近世金属製品 (鉄鏝)	205
図 108	その他遺構出土陶磁器	159	図 150	遺構出土金属製品	206
図 109	包含層出土陶磁器 7	160	図 151	包含層出土銭貨 (その他)	207
図 110	須恵器・灰軸陶器出土分布図	161	図 152	包含層出土銭貨 (近世)	208
図 111	須恵器器種組成	162	図 153	包含層出土銭貨 (中世)	209
図 112	包含層出土須恵器 1	163	図 154	中～近世包含層他出土金属製品 その他	210
図 113	包含層出土須恵器 2	164	図 155	奈良～平安時代包含層出土金属製品 (刀子他)	211
図 114	SR9124・包含層出土須恵器 3	165	図 156	出土土製品 (瓦)	213
図 115	包含層出土灰軸陶器	166	図 157	出土土製品 (羽口・土鍾・転用碗・土玉)	214
図 116	山茶碗時期別出土量 1	167	図 158	屋敷地復元図	218
図 117	山茶碗時期別出土量 2	168	図 159	寺家前遺跡孤立柱建物規模	220
図 118	包含層出土山茶碗 (東遠江系 I -1 期)	169	図 160	孤立柱建物規模比較図	221
図 119	包含層出土山茶碗 (東遠江系 I -2 期)	170	図 161	葉梨地区周辺の条里区画	228
図 120	包含層出土山茶碗 (東遠江系 I -2・II 期)	171	図 162	奈良～平安時代遺構図 (寺家前遺跡・衣原遺跡)	229
図 121	包含層出土山茶碗 (東遠江系 III -1 期)	172	図 163	SE532 位置図	233
図 122	包含層出土山茶碗 (東遠江系 III -2・III -3 期)	173			

図 164	SE532 における寄生虫卵ダイアグラム	240	図 168	SE8036 における珪藻化石分布図	249
図 165	SE532 における花粉ダイアグラム	240	図 169	曆年校正 1	254
図 166	SE8036 土層断面および試料採取層準	243	図 170	曆年校正 2	255
図 167	SE8036 の主要花粉化石分布図	244	図 171	曆年校正 3	256

挿表目次

表 1	周辺の遺跡地名表	11	表 15	出土土器観察表	274
表 2	確認調査その 1 工程表	14	表 16	瀬戸美濃系施釉陶器一覧	304
表 3	確認調査その 2 工程表	15	表 17	墨書土器一覧	305
表 4	本調査工程表	18	表 18	出土土製品観察表	306
表 5	調査面積	20	表 19	出土木製品観察表	307
表 6	中世土器一覧	225	表 20	出土銭貨観察表	312
表 7	寄生虫卵分析結果	234	表 21	出土金属製品観察表	313
表 8	花粉分析結果	235	表 22	出土鉄鏡観察表	314
表 9	種実同定結果	237	表 23	出土陶馬観察表	314
表 10	産出花粉化石一覧表	245	表 24	出土瓦観察表	314
表 11	SE8036 における珪藻化石産出表	248	表 25	出土羽口観察表	314
表 12	放射性炭素年代測定結果	252	表 26	出土土玉観察表	314
表 13	出土木材の樹種別出土時期	264	表 27	出土土鍾観察表	314
表 14	出土木製品の樹種別用途	265	表 28	掘立柱建物一覧	315

挿写真目次

写真 1	寺家前遺跡遠景 (西から)	7	写真 23	整理作業状況 2	30
写真 2	確認調査その 1 重機掘削状況 1	16	写真 24	整理作業状況 3	30
写真 3	確認調査その 1 作業状況 1	16	写真 25	整理作業状況 4	30
写真 4	確認調査その 1 作業状況 2	16	写真 26	整理作業状況 5	31
写真 5	確認調査その 1 重機掘削状況 2	16	写真 27	整理作業状況 6	31
写真 6	確認調査その 2 重機掘削状況 1	16	写真 28	整理作業状況 7	31
写真 7	確認調査その 2 作業状況 1	16	写真 29	整理作業状況 8	31
写真 8	確認調査その 2 作業状況 2	16	写真 30	五輪塔出土状況	56
写真 9	確認調査その 2 作業状況 3	16	写真 31	SE8036 解体状況	115
写真 10	本調査 I 期 重機掘削状況 1	21	写真 32	SE532 花粉寄生虫卵	241
写真 11	本調査 I 期 作業状況 1	21	写真 33	SE532 種実	242
写真 12	本調査 I 期 作業状況 2	21	写真 34	SE8036 花粉化石	246
写真 13	本調査 I 期 作業状況 3	21	写真 35	珪藻化石顕微鏡写真	250
写真 14	本調査 II・III 期 重機掘削状況 1	24	写真 36	出土木製品 顕微鏡写真 1	266
写真 15	本調査 II・III 期 重機掘削状況 2	24	写真 37	出土木製品 顕微鏡写真 2	267
写真 16	本調査 II・III 期 作業状況 1	24	写真 38	出土木製品 顕微鏡写真 3	268
写真 17	本調査 II・III 期 作業状況 2	24	写真 39	出土木製品 顕微鏡写真 4	269
写真 18	本調査 III 期 作業状況 1	25	写真 40	出土木製品 顕微鏡写真 5	270
写真 19	本調査 III 期 作業状況 2	25	写真 41	出土木製品 顕微鏡写真 6	271
写真 20	本調査 III 期 作業状況 3	25	写真 42	出土木製品 顕微鏡写真 7	272
写真 21	本調査 III 期 作業状況 4	25	写真 43	出土木製品 顕微鏡写真 8	273
写真 22	整理作業状況 1	30			

図版目次

<巻頭図版>

- 巻頭図版 1 寺家前遺跡より志太平野から駿河湾方面を望む(北から)
- 巻頭図版 2 1. 寺家前遺跡遠景(南西から)
2. 寺家前遺跡遠景(南東から)
- 巻頭図版 3 1. E-2区 中～近世調査面遠景(南東から)
2. E-3区 中～近世調査面全景
- 巻頭図版 4 1. E-3区 中世井戸 SE8036
井戸枠北西面縦板状況(北西から)
2. E-3区 中世井戸 SE8036
井戸枠北西面縦板除去後(北西から)
- 巻頭図版 5 中世墨書土器
- 巻頭図版 6 中世陶磁器(青磁・白磁)
- 巻頭図版 7 近世墓出土かわらけ
- 巻頭図版 8 近世墓出土銭貨

<図版>

- 図版 1 寺家前遺跡
1. 藤枝市北東部空中写真
(1946年10月27日米軍撮影)
2. 藤枝市葉梨地区空中写真
(1962年9月9日国土地理院撮影)
- 図版 2 寺家前遺跡
1. 寺家前遺跡遠景(西から)
2. 寺家前遺跡遠景(南東から)
- 図版 3 中～近世調査面全景(A-1区・E-1・2・3・5区)
- 図版 4 奈良～平安時代条里調査面全景
(A区・C区・E-4区)
- 図版 5 E-1区
1. E-1区 中～近世調査面遠景(西から)
2. E-1区 中～近世調査面全景
- 図版 6 E-2区
1. E-2区 中～近世調査面遠景(南西から)
2. E-2区 中～近世調査面(北東部分)遠景
(北西から)
- 図版 7 E-2区
1. E-2区 中～近世調査面(北東部分)全景
2. E-2区 中～近世調査面全景
- 図版 8 E-3区
1. E-3区 中～近世調査面遠景(南から)
2. E-3区 中～近世調査面全景
- 図版 9 A-1区
1. A-1区 中～近世調査面遠景(北東から)
2. A-1区 中～近世調査面遠景(南西から)
- 図版 10 A-1区
1. A-1区 中～近世調査面全景(北東から)
2. A-1区 中～近世調査面全景(北東から)
- 図版 11 E-1区
1. E-1区 近世掘立柱建物群遠景(南西から)
2. E-1区 近世掘立柱建物 SH102 柱穴 SP95
(北西から)
3. E-1区 近世掘立柱建物 SH103 柱穴 SP337
(北から)
4. E-1区 近世掘立柱建物 SH105 柱穴 SP222
(南から)
5. E-1区 近世掘立柱建物 SH107 柱穴 SP150
(東から)
- 図版 12 E-3区
1. E-3区 近世掘立柱建物群全景(東から)
2. E-3区 近世掘立柱建物 SH201 柱穴 SP8476
(南西から)
3. E-3区 近世掘立柱建物(南東から)
4. E-3区 近世掘立柱建物 SH202 柱穴 SP9086
(西から)
5. E-3区 近世掘立柱建物 SH204 柱穴 SP8309
(西から)
- 図版 13 A-1区・E-1区・E-3区
1. E-3区 近世遺構群(西から)
2. A-1区 近世井戸 SE532(西から)
3. E-1区 近世井戸 SE292(北西から)
4. E-3区 近世井戸 SE8360(南東から)
5. E-3区 近世井戸 SE8247(南から)
- 図版 14 E-3区
1. E-3区 近世井戸 SE8680(南東から)
2. E-3区 近世井戸 SE8608(南から)
3. E-3区 近世井戸 SE8281(南から)
4. E-3区 近世井戸 SE8609(南東から)
5. E-3区 近世井戸 SE8610(北西から)
- 図版 15 E-2区・E-3区
1. E-2区 近世墓 SF1426(東から)
2. E-2区 近世墓 SF2437(東から)
3. E-2区 近世墓 SF1137(東から)
4. E-2区 近世墓 SF3089(西から)

5. E-2区 近世墓 SF2763 (西から)
6. E-2区 近世墓 SF1055 (南から)
7. E-3区 近世墓 SF9089・SF9090 (東から)
8. E-3区 近世墓 SF9091 (東から)
- 図版 16 E-2区・E-3区・F区
1. E-2区 近世墓 (北西から)
2. E-3区 近世墓 銭貨出土状況
3. F区 近世墓 SF-F3-1 遺物出土状況(西から)
4. F区 近世墓 SF-F3-1 完掘状況 (西から)
5. F区 近世墓 SF-F3-2 完掘状況 (東から)
6. F区 近世墓 SF-F3-3 半截状況 (北西から)
- 図版 22 E-3区
1. E-3区 中～近世調査面遠景 (北から)
2. E-3区 中世掘立柱建物 2群 (東から)
- 図版 23 E-3区
1. E-3区 中世掘立柱建物 SH205 (南東から)
2. E-3区 中世掘立柱建物 SH205
柱穴 SP8504 (東から)
3. E-3区 中世掘立柱建物 SH205
柱穴 SP9120 (東から)
4. E-3区 中世掘立柱建物 SH206
柱穴 SP9100 (東から)
5. E-3区 中世櫓列 SA204
柱穴 SP8503 (東から)
- 図版 24 E-2区・E-3区
1. E-3区 中世区画溝 SD9067 (東から)
2. E-3区 中世区画溝 SD9067 土層断面 (南から)
3. E-3区 中世区画溝 SD9067
草鞋出土状況 (北から)
4. E-3区 中世区画溝 SD9067
草鞋出土状況 (南から)
5. E-3区 中世区画溝 SD9067
扇出土状況 (南から)
6. E-3区 中世区画溝 SD9067 杓子出土状況
7. E-3区 中世区画溝 SD8183 (西南から)
8. E-2区 中世区画溝 SD3134 山茶碗出土状況
- 図版 25 E-3区
1. E-3区 中世掘立柱建物 SH202～204
(南東から)
2. E-3区 中世掘立柱建物 SH210 (東から)
- 図版 26 E-3区
1. E-3区 中世掘立柱建物 SH202
柱穴 SP8943 (東から)
2. E-3区 中世掘立柱建物 SH203
柱穴 SP8911・SP8912 (東から)
3. E-3区 中世掘立柱建物 SH203
柱穴 SP8212 (南から)
4. E-3区 中世掘立柱建物 SH203
柱穴 SP8206 (南東から)
5. E-3区 中世掘立柱建物 SH203
- 図版 17 A-1区
1. A-1区 近世以降道路遺構遠景
A535・536・537 (南から)
2. A-1区 近世以降道路遺構遠景
A535・536・537 (北から)
- 図版 18 A-1区
1. A-1区 近世以降道路遺構遠景 A535
(南から)
2. A-1区 近世以降道路遺構 A535 上面
(東から)
3. A-1区 近世以降道路遺構
A535 側溝内蔵検出状況 (東から)
4. A-1区 近世以降道路遺構 A535 下面
(東から)
5. A-1区 近世以降道路遺構 A535
下面排水溝 (南西から)
- 図版 19 E-5区②
1. E-5区② 近世水田畦畔全景
2. E-5区② 近世水田畦畔 流水出土状況
(南西から)
3. E-5区② 近世水田畦畔 杭列検出状況
(北東から)
4. E-5区② 近世水田畦畔 完掘状況(南西から)
- 図版 20 E-2区
1. E-2区 中世掘立柱建物 1群遠景 (西から)
2. E-2区 中世掘立柱建物 1群近景 (南西から)
- 図版 21 E-2区
1. E-2区 中世掘立柱建物 SH101
柱穴 SP699 半截状況 (南から)
2. E-2区 中世掘立柱建物 SH104・SH135
柱穴 SP2403 (西から)
3. E-2区 中世掘立柱建物 SH153
柱穴 SP3025 (東から)
4. E-2区 中世掘立柱建物 SH154
柱穴 SP2985 (東から)

- 柱穴 SP8198 (南から)
6. E-3 区 中世掘立柱建物 SH203
柱穴 SP8200 (南東から)
7. E-3 区 中世掘立柱建物 SH203
柱穴 SP8199 (東から)
8. E-3 区 中世櫓列 SA203
柱穴 SP8684・SP8683 (東から)
- 図版 27 A-1 区
1. A-1 区 中世掘立柱建物 3 群遠景 (北西から)
2. A-1 区 中世掘立柱建物 3 群全景
- 図版 28 E-3 区
1. E-3 区 中世井戸 SE8036 (南東から)
2. E-3 区 中世井戸 SE8036 遺物出土状況 (南東から)
3. E-3 区 中世井戸 SE8036 南側支柱木組状況 (北から)
4. E-3 区 中世井戸 SE8036 井戸枠北西面縦板状況 (北西から)
5. E-3 区 中世井戸 SE8036 井戸枠北西面縦板除去後 (北西から)
- 図版 29 A-1 区・E-1 区・E-2 区
1. A-1 区 中世井戸 SE558 (北から)
2. A-1 区 中世井戸 SE559 (南西から)
3. A-1 区 中世井戸 SE281 (西から)
4. E-1 区 中世井戸 SE169 (西から)
5. E-2 区 中世井戸 SE1539 (南から)
- 図版 30 E-1 区・E-3 区
1. E-1 区 近世溝 SD118 (北東から)
2. E-1 区 近世溝 SD118 土鍾出土状況 (東から)
3. E-1 区 近世溝 SD118 遺物出土状況 (北西から)
4. E-3 区 SR8192 土層断面 (西から)
5. E-3 区 SR8192 土層断面 (東から)
6. E-3 区 SR-1 遺物出土状況 (南から)
7. E-3 区 SR8045 山茶碗出土状況 (西から)
8. E-3 区 SR8045 山茶碗出土状況 (東から)
- 図版 31 E-4 区
1. E-4 区 中世水田畦畔 SK5001 (南から)
2. E-4 区 中世水田畦畔 (南東から)
3. E-4 区 中世水田畦畔 SK5001 (南東から)
4. E-4 区 中世水田畦畔 (南西から)
5. E-4 区 中世水田面 (西から)
6. E-4 区 中世水田面 鉄鍬出土状況
7. E-4 区 中世水田畦畔 馬骨出土状況
8. E-4 区 中世水田面 木製品出土状況
- 図版 32 E-1 区
1. E-1 区 近世不明遺構 SX164 (南から)
2. E-1 区 近世不明遺構 SX164 土層断面 (南から)
3. E-1 区 近世不明遺構 SX164 東脇 杭列 (東から)
4. E-1 区 近世不明遺構 SX164 漆桶出土状況
5. E-1 区 近世不明遺構 SE103 土層断面 (東から)
6. E-1 区 近世不明遺構 SE102・SE103 土層断面 (西から)
7. E-1 区 近世不明遺構 SE105 土層断面 (東から)
8. E-1 区 近世不明遺構 SE106 土層断面 (南東から)
- 図版 33 E-1 区・E-2 区
1. E-1 区 近世不明遺構 SX212 杭列木組状況 (北から)
2. E-1 区 近世不明遺構 SX212 杭列検出状況 (南東から)
3. E-1 区 近世不明遺構 SX212 土層断面 (東から)
4. E-1 区 近世不明遺構 SX212 完掘状況 (東から)
5. E-1 区 近世不明遺構 SX91～SX94 完掘状況 (南から)
6. E-1 区 近世不明遺構 SX94 完掘状況 (南から)
7. E-1 区 近世不明遺構 SX214 礫検出状況 (南から)
8. E-2 区 近世不明遺構 SX3818 礫検出状況 (北東から)
- 図版 34 A-1 区
1. A-1 区 奈良～平安時代条里水田遠景 (南東から)
2. A-1 区 奈良～平安時代条里水田全景
- 図版 35 A-1 区
1. A-1 区 奈良～平安時代条里水田近景 (東から)
2. A-1 区 条里水田大畦畔及び杭列 A556 (南から)
3. A-1 区 条里水田大畦畔及び杭列 A556・A557 (南から)
4. A-1 区 条里水田大畦畔 A557 流木出土状況 (南から)
5. A-1 区 条里水田大畦畔 A557 大畦畔土層断面 (南から)

- 図版 36 A-2 区
1. A-2 区 奈良～平安時代条里水田遠景 (北東から)
 2. A-2 区 奈良～平安時代条里水田全景
- 図版 37 A-2 区
1. A-2 区 奈良～平安時代条里水田近景 (北東から)
 2. A-2 区 奈良～平安時代条里水田大畦畔 (東から)
 3. A-2 区 奈良～平安時代条里水田大畦畔 木製品出土状況 (南から)
 4. A-2 区 条里水田面 鉄織出土状況 (南から)
 5. A-2 区 奈良～平安時代 条里水田大畦畔上の柱穴完掘状況(西から)
- 図版 38 E-4 区
1. E-4 区 奈良～平安時代条里水田遠景 (南西から)
 2. E-4 区 奈良～平安時代条里水田全景
- 図版 39 E-4 区
1. E-4 区 奈良～平安時代条里水田畦畔 (南から)
 2. E-4 区 奈良～平安時代条里水田畦畔 (南から)
 3. E-4 区 奈良～平安時代条里水田畦畔 (南から)
 4. E-4 区 奈良～平安時代条里水田畦畔 (南から)
 5. E-4 区 奈良～平安時代条里水田畦畔 (東から)
 6. E-4 区 条里水田面 土師器甕出土状況 (南西から)
- 図版 40 E-5 ①区・C 区
1. E-5 ①区 奈良～平安時代条里水田全景
 2. C 区 奈良～平安時代条里水田全景
- 図版 41 C 区
1. C 区 奈良～平安時代条里水田近景(南から)
 2. C 区 奈良～平安時代条里水田 杭列縦断面 (東から)
 3. C 区 奈良～平安時代条里水田杭列 刀子出土状況 (西から)
 4. C 区 奈良～平安時代条里水田杭列(西から)
- 図版 42 A-1 区
1. A-1 区 中世道路遺構全景 A531・A534
 2. A-1 区 中世道路遺構近景 A531 (北東から)
 3. A-1 区 中世道路遺構近景 A534 (北東から)
- 図版 43 1 群区画溝 SD937・溝・流路出土土器
- 図版 44 1 群区画溝 SD2452・2679 出土土器
- 図版 45 1 群区画溝 SD2679・2 群流路・出土土器
- 図版 46 1 群柱穴・2 群区画溝 SD9067・8033・8183 出土土器
- 図版 47 2 群区画溝 SD9067 出土木製品・自然遺物
- 図版 48 3 群流路・井戸・条里水田・A534 出土土器
- 図版 49 3 群 A534・整地層出土土器
- 図版 50 条里畦畔 SK583・SK9 出土木製品
- 図版 51 2 群井戸 SE8036 出土木製品 1
- 図版 52 2 群井戸 SE8036 出土木製品 2
- 図版 53 2 群井戸 SE8036 出土木製品 3
- 図版 54 2 群井戸 SE8036 出土木製品 4
- 図版 55 2 群井戸 SE558 出土木製品
- 図版 56 3 群井戸 SE558・SE281・SE559 出土木製品
- 図版 57 出土かわらけ 1
- 図版 58 出土かわらけ 2
- 図版 59 SX164 出土土器
- 図版 60 SX164 出土木製品
- 図版 61 SX205・SX212・その他遺構出土土器
- 図版 62 SX205 出土土器・石製品・土製品・金属製品
- 図版 63 SX205 出土木製品
- 図版 64 SX205 出土土製品
- 図版 65 SX212 出土木製品・土製品
- 図版 66 SF1561・SE1820・SX93・SP8681 出土木製品
- 図版 67 SF1187・SK5001・SP3550 出土木製品
- 図版 68 包含層出土近世陶器 1
- 図版 69 1. 包含層出土近世陶器 2
2. 包含層出土麗美産陶器
- 図版 70 包含層出土須恵器 1
- 図版 71 包含層出土須恵器 2・灰軸陶器・緑釉陶器
- 図版 72 包含層出土須恵器 3
- 図版 73 包含層出土山茶碗 1
- 図版 74 包含層出土山茶碗 2
- 図版 75 包含層出土山茶碗 3
- 図版 76 包含層出土山茶碗 4
- 図版 77 包含層出土山茶碗 5
- 図版 78 包含層出土山茶碗 6
- 図版 79 出土輸入陶磁 1
- 図版 80 出土輸入陶磁 2
- 図版 81 出土輸入陶磁 3
- 図版 82 出土墨書土器 1
- 図版 83 出土墨書土器 2
- 図版 84 出土墨書土器 3
- 図版 85 出土墨書土器 4
- 図版 86 出土墨書土器 5・灯明皿・転用硯 1
- 図版 87 灯明皿・転用硯 2

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|----------------|
| 図版 88 | 包含層出土下駄・折敷・金剛草履（中～近世） | 図版 101 | 1. SF-F3 出土釘 |
| 図版 89 | 包含層出土漆碗他 1（中～近世） | | 2. 包含層出土釘 1 |
| 図版 90 | 包含層出土漆碗他 2（中～近世） | | 3. 包含層出土釘 2 |
| 図版 91 | 包含層出土漆碗他 3・曲物（中～近世） | 図版 102 | 1. 遺構出土金属製品 |
| 図版 92 | 包含層出土用途不明木製品（中～近世） | | 2. 遺構出土瓦 |
| 図版 93 | 7層出土木製品（平安～中世） | 図版 103 | 包含層出土銭貨（中～近世） |
| 図版 94 | 7層水田・包含層出土木製品（平安～中世） | 図版 104 | 包含層出土金属製品 1 |
| 図版 95 | 包含層出土木製品（奈良～平安） | 図版 105 | 1. 包含層出土金属製品 2 |
| 図版 96 | 時期不明木製品・遺構出土種子他 | | 2. 包含層出土金属製品 3 |
| 図版 97 | 出土一石五輪塔・五輪塔 | 図版 106 | 包含層出土金属製品 4 |
| 図版 98 | 1. 出土硯 | 図版 107 | 1. 出土瓦 |
| | 2. 出土砥石 1 | | 2. 出土羽口・土鍾他 |
| 図版 99 | 出土砥石 2・石製品 | 図版 108 | 1. SX212 出土土製品 |
| 図版 100 | 1. 出土鉄鏝 | | 2. 遺構出土瓦 |
| | 2. 近世墓他出土銭貨 | | |

第1章 総論

第1節 調査に至る経緯

1. 第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いの経緯

(1) 全体の経緯

混雑化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和62年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年1月に開催された第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛鳥村から神戸市間の第二名神高速道路とともに、横浜市から東海市に至る延長約270kmの第二東名高速道路（以下、第二東名）の基本計画が策定された。静岡県内は東西に貫く形となり、その延長は約170kmである。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年12月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置したが、県教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した。

その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む、環境影響調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図った上、平成3年9月24日には静岡県長泉町から引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と並行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団（現 中日本高速道路株式会社）は、平成4年2月17日付けで文化庁に通知を行うとともに、平成4年5月11日付けで、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町から引佐町間の埋蔵文化財分布調査の手続きの依頼を行った。また、平成4年8月27日付けで日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて県教育委員会は、平成4年9月29日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在についての照会を行った。踏査結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い県教育委員会が取りまとめたものを平成5年3月18日付けで、静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長あてに回答がなされている。この時点で調査対象箇所は136箇所、調査対象総面積は1,453,518㎡となっている。

その後、長泉町から引佐町間については、平成5年11月19日付けで日本道路公団に施行命令が出された。これに伴い日本道路公団東京第一建設局および静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で埋蔵文化財調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取り扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかしながら、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については、短期間に膨大な調査量が想定され、そのための調査体制をどのように確保していくかが大きな課題となった。

さらに平成6年度には、県教育委員会文化課職員が先述の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年に示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告および取りまとめがなされている。こうした状況調査や新たな踏査結果を基に見直しが行われた結果、この段階での調査対象地点は133箇所、調査対象総面積は1,286,759㎡となった。

平成7年度後半には、路線の一部では幅杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の調査の開始につい

てもかなり見通しができてきた。こうした状況の中で第二東名建設に係る埋蔵文化財の取り扱いを協議する場として、日本道路公団静岡建設所（平成6年2月設置）と県教育委員会文化課による「第二東名関連埋蔵文化財連絡調整会議」が設置され、第1回の協議が平成7年12月13日に行われている。これ以降、細かい埋蔵文化財の取り扱いについては、この会議において協議していくこととなった。なお、日本道路公団静岡建設所は平成8年7月1日をもって日本道路公団静岡建設局に改組されている。

平成8年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成8年9月24日付けで第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての確認書を締結、さらに調査実施機関である財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、平成8年9月25日付けで第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成8年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくことになった。年度後半には、掛川市倉真のNo.94地点、浜北市大平のNo.136地点、同市四大地のNo.137地点の確認調査が実施されている。その後、平成9年度からは発掘調査も本格化し県内各地の確認調査から順次着手していった。

一方、長泉町から御殿場市間についても日本道路公団に対し、平成9年1月31日付けで建設に係る調査開始指示が出され、さらに平成9年12月25日付けで施行命令が出されている。この区間については、建設省（現国土交通省）の依頼により平成6年度後半に踏査が行われ、調査対象地点のリストアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度平成10年9月2日付けで日本道路公団静岡建設局長より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて県教育委員会文化課は関係する市町村の教育委員会に平成10年9月25日付けで再踏査の依頼をするとともに、10月2日には踏査の実施に関する打ち合わせ会を行った。11月上旬には長泉町・裾野市・御殿場市教育委員会から踏査結果についての報告がなされ、県教育委員会文化課はそれを取りまとめ、平成10年12月17日付けで県教育長から日本道路公団静岡建設局長あての回答を行った。この区間で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は21箇所、調査対象面積は108,734㎡であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施することとし、平成11年3月5日付けで協定変更を行っている。

なお、第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的に本線およびサービスエリア・パーキングエリア、廃土処理場については財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工事用道路および取り付け道路部分については当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う事業量の増大に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の体制が追いつかず、本線部分の一部について沼津市や静岡市、浜北市、富士宮市、裾野市、富士市の各教育委員会に対応してもらうとともに、特に東部地域を中心に、民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

（2） 藤枝地区の経緯

上記のような経緯のなか、藤枝地区ではNo.79地点からNo.87地点の計9箇所が調査対象となった。

この9地点の発掘調査は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行うこととなり、用地買収が進み、調査が可能となった平成9年度から本調査に着手した。調査は平成9年度にNo.86地点、平成9年度から10年度にかけてNo.87地点、平成14年度にNo.79地点およびNo.82地点を実施した。また、平成14年度と15年度にNo.80地点、平成14年度から16年度にかけてNo.83地点、平成15年度にNo.84地点、平成12年度から13年度および平成15年から18年度にかけてNo.81地点の調査を実施し、全ての対象地の調査を終了した。基礎整理作業は現地調査と併行して実施し、本格的な資料整理は平成19年度から開始し、継続している。

2. 調査の体制

静岡県埋蔵文化財センター（旧：財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）では、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査にあたって、日本道路公団静岡建設局各工事事務所および中日本高速道路株式会社の管轄に合わせて工区を設定し、調査にあたることとした。本書で扱う藤枝市の寺家前遺跡は静岡工区に含まれる。現地の調査は、藤枝市上敷田に設置した藤枝事務所（旧：藤枝地区事務所）を拠点として行っている。

平成12年度に1回目の確認調査を行っており、遺跡の広がりを確認できたため、本調査を実施することとなった。本調査Ⅰ期は平成12年度～平成13年度にかけて行っている。本調査Ⅱ期は平成15・16年度に行っており、それに併行する形で2回目の確認調査を平成15・16年度に行っている。本調査Ⅲ期は平成16年度から始まっており全調査の終了する平成19年3月まで継続して行われた。

これらの調査で得られた成果については平成19年度から資料整理を実施した。基礎的な整理作業（各種台帳類作成、写真・図面整理、出土遺物の洗浄・注記）については藤枝事務所において現地調査と併行して実施した。

これらの確認調査、本調査、資料整理に関わる調査体制は下記の通りであり、より具体的な調査の方法・経過等は後の節にて詳述する。

平成12・13、15～23年度 寺家前遺跡調査体制

平成12年度

所長 齋藤 忠	副所長 山下 晃	総務部長兼常務理事 伊藤友雄
総務課長 杉木敏雄	経理専門員 稲葉保幸	総務係長 田中雅代
会計係長 大橋 薫	調査研究部長 佐藤達雄	
調査研究部次長兼調査研究一課長 及川 司		調査研究二課長 篠原修二
資料課長 大石 泉	主任調査研究員 飯塚晴夫	
調査研究員 川上 努 大林 元 蔵本俊明		

平成13年度

所長兼副理事長 齋藤 忠	副所長兼理事 山下 晃	総務部長兼常務理事 桑田徳幸
総務課長 本杉昭一	経理専門員 稲葉保幸	総務係長 山本広子
会計係長 大橋 薫	調査研究部長 佐藤達雄	
調査研究部次長兼資料課長 栗野克己		保存処理室長 西尾太加二
調査研究部次長兼調査研究一課長 及川 司		調査研究二課長 篠原修二
調査研究三課長 飯塚晴夫	主任調査研究員 鈴木良孝	調査研究員 川上 努 横山智之

平成15年度

所長兼副理事長 齋藤 忠	副所長兼理事 飯田英夫	総務部長兼常務理事 桑田徳幸
総務部次長兼総務課長 鎌田英巳		経理専門員 稲葉保幸
総務係長 山本広子	会計係長 野島尚紀	調査研究部長 山本昇平
調査研究部次長兼資料課長 栗野克己		保存処理室長 西尾太加二
調査研究部次長兼調査研究一課長 中嶋郁夫		
調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三		調査研究三課長 足立順司
調査研究員 三井文洋 筒井 京 河合 敦		

平成16年度

所長兼副理事長 齋藤 忠	副所長兼理事 飯田英夫	総務部長兼常務理事 平松公夫
総務部次長兼総務課長 鎌田英巳		経理専門員 稲葉保幸
総務係長 佐藤美奈子	会計係長 野島尚紀	調査研究部長 山本昇平
調査研究部次長兼資料課長 栗野克己		保存処理室長 西尾太加二
調査研究部次長兼調査研究一課長 中嶋郁夫		
調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三		調査研究三課長 足立順司
調査研究員 長谷川睦 河合 敦 大場隆幸 勝又直人 中田 出 増田充弘 小林正和 鈴木淑子		

平成17年度

所長兼副理事長 齋藤 忠	総務部長兼常務理事 平松公夫	
総務部次長兼総務課長 鈴木大二郎		主幹兼経理専門員 稲葉保幸
総務係長 佐藤美奈子	事業係長 野島尚紀	調査研究部長 石川素久
調査研究部次長兼資料課長 栗野克己		保存処理室長 西尾太加二
調査研究部次長兼調査研究一課長 中嶋郁夫		
調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三		
調査研究員 菊池吉修 河合 敦 永嶋宏一 小林正和 大場隆幸 北野寿一 井鍋誉之 鈴木淑子		

平成18年度

所長兼副理事長 齋藤 忠	総務部長兼常務理事 平松公夫	
総務部次長兼総務課長 鈴木大二郎		総務係長 芦川美奈子
会計係長 杉山和枝	調査研究部長 石川素久	調査研究部次長 佐野五十三
調査研究部次長 稲葉保幸	調査研究部次長兼調査課長 及川 司	
保存処理室長 西尾太加二	調査課係長 前嶋秀張	調査課係長 中鉢賢治
調査課係長 富樫孝志	調査課係長 河合 修	
調査研究員 菊池吉修 小林正和 伊藤嘉孝 北野寿一 松川理治 佐々木和也 中谷哲久		

平成19年度(資料整理)

所長兼副理事長 齋藤 忠	事務局長兼常務理事 清水 哲	
事務局次長兼総務課長 大場正夫		総務係長 芦川美奈子
会計係長 杉山和枝	事務局次長 佐野五十三	事務局次長 稲葉保幸
事務局次長兼調査課長 及川 司		保存処理室長 西尾太加二
東部調査一係長 中鉢賢治	東部調査二係長 笹原千賀子	中部調査係長 河合 修
西部調査係長 富樫孝志	調査研究員 菊池吉修 井鍋誉之 松川理治	

平成20年度(資料整理)

所長兼常務理事 清水 哲	次長兼総務課長 大場正夫	総務係長 山内小百合
会計係長 杉山和枝	次長兼調査課長 及川 司	次長兼事業係長 稲葉保幸
保存処理室長 西尾太加二	東部総括係長 中鉢賢治	東部調査係長 笹原千賀子
中部調査係長 河合 修	西部調査係長 富樫孝志	調査研究員 中川律子

平成21年度（資料整理）

所長兼常務理事 天野 忍
 会計係長 杉山和枝
 保存処理室長 西尾太加二
 東部調査係長 笹原千賀子
 調査研究員 中川律子

次長兼総務課長 松村 享
 次長兼調査課長 及川 司
 次長兼東部総括係長 中鉢賢治
 中部調査係長 河合 修
 西部調査係長 富樫孝志

総務係長 山内小百合
 次長兼事業係長 稲葉保幸
 調査第一係長 勝又直人
 調査第四係長 富樫孝志

平成22年度（資料整理）

所長兼常務理事 石田 彰
 総務係長 瀧みやこ
 調査第二係長 岩本 貴
 調査研究員 中川律子

次長兼総務課長 松村 享
 調査課長 中鉢賢治
 調査第三係長 溝口彰啓

専門監兼事業係長 稲葉保幸
 調査第一係長 勝又直人
 調査第四係長 富樫孝志

静岡県埋蔵文化財センター

平成23年度（資料整理）

所長 勝田順也
 総務係長 瀧みやこ
 調査第二係長 溝口彰啓

次長兼総務課長 八木利眞
 調査課長 中鉢賢治
 主査 中川律子

主幹兼事業係長 村松弘文
 調査第一係長 富樫孝志



写真1 寺家前遺跡遠景（西から）

第2節 藤枝市の位置と環境

1. 地理的環境

藤枝市は東経 138° 15′、北緯 34° 52′ 付近に位置し、総面積は 194.03 km² である。南北に約 22.2 km、東西に 16 km と、面積では県内 10 位の範囲を市域とする。北は静岡市、島田市、東は静岡市、南は焼津市、西は島田市に接している（2012 年 3 月現在）。市の中央部を瀬戸川が流れ、朝比奈川と合流した葉梨川を合わせ駿河湾に注いでいる。瀬戸川は市の最北部および西部の山地から発した流れを合わせて南流しており、平野部に出るとその流れを東へと変えている。朝比奈川、葉梨川の両河川も山間地域では南へと流れを取っているが、平野部で流れを東へと変えている点で共通している。市域の大部分は、この 3 つの河川と大井川によって形成された沖積地である志太平野に位置している。

志太平野は北部に連なる赤石山系から派生した山地に三方を囲まれ、東は駿河湾に臨んでいる。これら



図1 藤枝市の地形図

らの山地は南の平野に向かって少しずつ標高を下げながら丘陵部を経て平野へと至る。図1に示されるように、市内最高峰は、市北西部に位置し島田市との自然境界となっている高高山（871m）で、その南に位置する高尾山（675m）、さらにその南西に位置する菩提山（691m）など 600 m～800 m 級の山々が連なる。さらに南下して市の中央部に位置する城山（380m）、鳥帽子形山（392m）、塚塚山（245m）等の丘陵部を経て平野部に至っている。この赤石山系の末端に当たる丘陵の裾部は開析作用により、多くの深い谷とやせ尾根が鳥趾状に入り組んでおり、北から南に向かって変化に富んだ地形を呈している。

藤枝市内の地層は、図2に示されたように、北から三倉層群、瀬戸川層群、大井川層群および平野部の沖積層の4つに大別され、北の方がより古い時期に形成された地層である。檜峠から、舟ヶ久保にかけての市内最北部に分布する三倉層群は、中生代の白亜紀から新生代古第三紀頃、海底に厚く堆積した砂や泥によって形成された地層であり、南縁部は特に伊久美層群とも呼ばれる。その後の地核変動で褶曲や断層

を生じながら今日の山地となったもので、砂岩と頁岩・礫岩の互層である。

この南側の瀬戸川上中流域から葉梨地区にかけての標高300～500mの山地は瀬戸川層群と呼ばれ、新生代古第三紀に形成された海成の地層で、三倉層群と同様に砂岩と頁岩の互層が主となっている。三倉層群との相違点として、一部に玄武岩質の火成岩脈がみられる（静岡県 1974）。瀬戸川層群と三倉層群が接するところは褶曲帯の境界の断層になっており笹山構造線と呼ばれている。

さらに南の標高10～200mの丘陵地にかけては大井川層群が分布している。これも同様に海成の地層で新生代第三期に形成された地層であるといわれるが、古第三期に属するという説もある（藤枝市郷土博物館 2005）。大井川層群と瀬戸川層群との境界も断層で、十枚山構造線と呼ばれている。これより南側の平野部は大井川によって形成された扇状地であり、先述の志太平野に該当し、厚い砂礫層が堆積している。

また、大井川や瀬戸川の沖積作用による堆積が進む以前の志太平野は、海岸線が現在よりも内陸部に位置し、複雑に入り組んだ河口部を持っていたと考えられる。そのため、河口付近には中州状に取り残された川中島が数多く形成されていたと考えられる。それは藤枝市内に現在も残る、青島、前島、高洲、平島などという地名にも表わされている。また、五十海や潮、水上、水守、藪田などといった微高地の間に形成された湿地帯をその起源としている地名も複数見られる。

このように、大井川下流域は、現在とは異なり決して良い居住環境をもっていたとはいえない。そのため縄文時代から弥生時代にかけては、水の害を受けることの少ない丘陵の末端部や裾部、後背地上の微高地に集落域が形成されたといえる。このことがこの地域周辺の独特な遺跡分布と大きく関わっているとされる。

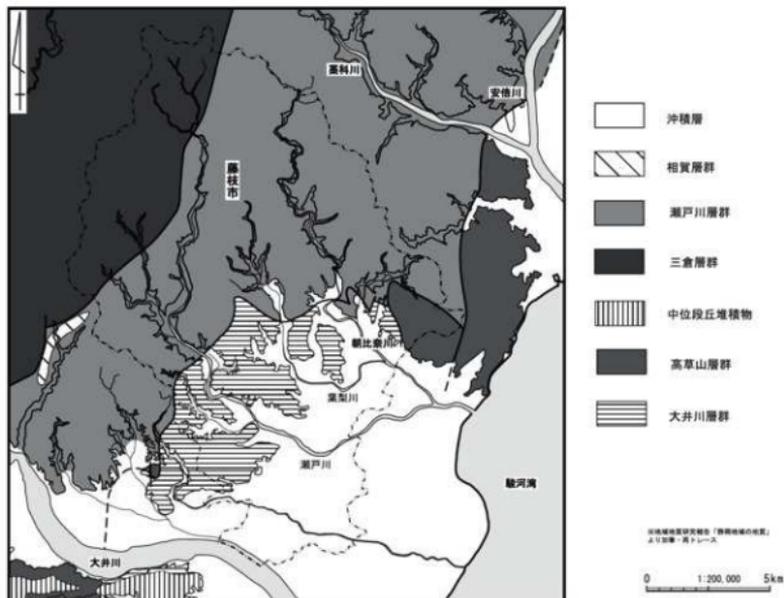


図2 藤枝市と周辺の地質図

2. 歴史的環境

藤枝市の歴史について遺跡を中心に概観する。また、志太平野に分布する遺跡も周辺遺跡として合わせて取り上げる。

旧石器・縄文時代

藤枝市および志太平野における旧石器時代の遺跡としては、藤枝市瀬戸新屋にある天ヶ谷遺跡があげられる。旧石器時代後期から末期に位置づけられる尖頭器や細石刃、ナイフ型石器などが出土している。縄文時代中期の遺跡としては先述の天ヶ谷遺跡や南新屋遺跡があげられる。両遺跡ともに遺構の存在ははっきりしていないが、前者では大量の縄文土器や石斧、石錘、石鏃など、後者では縄文土器、打製石斧、石鏃などの遺物が出土している。また、瀬戸川流域で最も上流に位置する舟ヶ久保遺跡では黒曜石製の石鏃や剥片が出土している。瀬戸川中流域に位置する遺跡としては、瀬戸川沿いの低い丘陵上に位置する寺畑遺跡や瀬戸川と滝沢川が合流する丘陵上に位置する中山遺跡があげられる。両者とも石斧や縄文土器などの遺物が出土している。また、100点以上の石鏃、打製石斧や磨製石剣、縄文土器など多くの遺物が出土しており、拠点的な集落であった可能性のある萩の平遺跡も瀬戸川中流域に位置する。萩ヶ谷遺跡は市内で初めて縄文時代の住居が検出された遺跡であり、土器や石器、剥片の出土が見られる。これらの遺跡の多くが段丘上や丘陵上に分布しており、当時の生活空間の中心が平野北端部の丘陵地であったことがうかがえる。

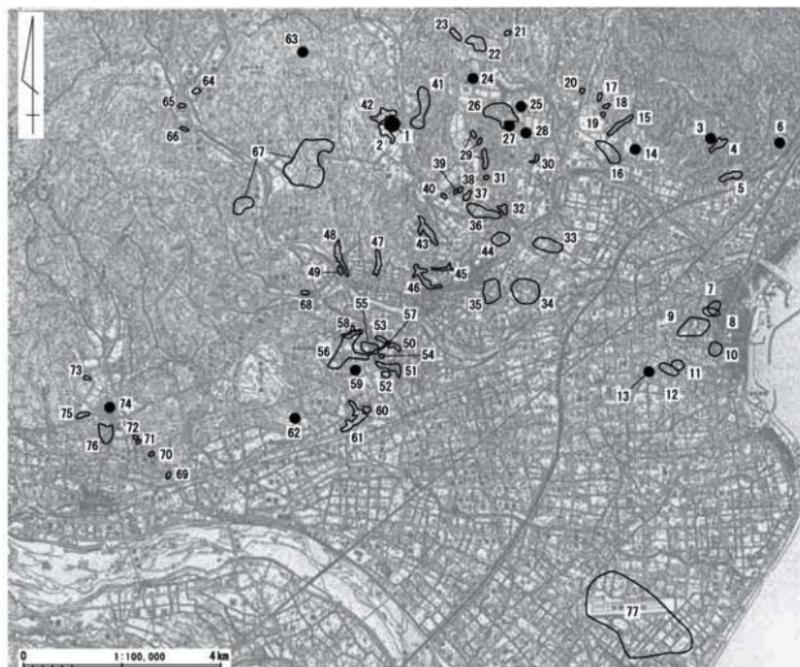


図3 藤枝市と周辺の遺跡分布図

弥生時代

藤枝市周辺において、弥生時代前期の遺物は荻ヶ谷遺跡Ⅰ地区で出土しているが遺構を伴った遺跡はまだ見つかっていない。集落遺跡が確認されるのは弥生時代中期以降で、河川下流域に面した丘陵上や丘陵辺縁部で遺跡数が飛躍的に増加する一方、大河川の氾濫原であり進出が遅れていた後背湿地や沖積微高地にも集落域の拡大が見られるようになる。上藪田川の丁遺跡や清水遺跡、郡遺跡などがその好例である。また、上藪田モミダ遺跡は葉梨川の沖積域に広がる弥生時代後期中頃の遺跡で、大型土坑からの出土土器は志太平野の土器編年やこの地域の特性をとらえる上で重要な資料となっている。

縄文時代晩期以降から、山を下り低地へと進出する動きは小規模ながらも継続的に見られていたが、弥生時代後期に再び丘陵上に集落を営む傾向が顕著になってきている。白砂古遺跡では丘陵上に多量の竪穴住居群や方形周溝墓が検出されている。また、荘館山遺跡や稲ヶ谷遺跡、東浦遺跡などでも丘陵部に集落が広がっていたことが確認されている。これは低地部の集落の増加やそれに伴う人口増により低地部への進出が困難になったことや、鉄器の普及により耕地の拡大が丘陵部においてもより容易になったことに起因していると考えられる（藤枝市 1980）。

古墳時代

古墳時代に入ると、志太地域においては多くの古墳築造のため遺跡数は飛躍的に増加する。前期初頭の古墳としては、方形墓が確認された焼津市の道場田遺跡が初現である。藤枝市内では葉梨川流域の丘陵部に位置する時ヶ谷五鬼免古墳群が前期後半に築造されたもので、市内最古の古墳に位置づけられる。前・中期の古墳は瀬戸川流域の丘陵頂部や突端部に多く分布しており、若王子古墳群や、東浦古墳群はこの典型といえる初期群集墳である。また、23基の古墳の存在が確認されており、御子ヶ谷遺跡とともに志太郡衙との関連を指摘される秋合古墳群や、かつて丘陵上に100基以上の古墳が群在していた瀬戸古墳群も群集墳の例としてあげられる。6世紀後半以降は平野に面したほとんどの丘陵斜面に群集墳が造られるようになる。また、後期に至ると墳丘外部施設として円筒輪列、形象埴輪など併せもち、朝比奈川流域の首長墓として位置づけられる高田観音前2号墳や瀬戸川流域の首長墓として位置づけられる荘館山1・2号墳のような前方後円墳も出現するようになる。また、総計33基という多数の古墳

表1 周辺の遺跡地名表

No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別
1	寺家古遺跡	弥生～近世	集・水・橋	27	後密地ノ坪古墳	古墳	古墳	53	御子ヶ谷遺跡	古代	官署
2	武原古遺跡	弥生～古墳	集・古・墓	28	飯野川古墳群	古墳	古墳	54	山部遺跡	縄文・古代・近世	集・墓
3	下柳風古墳	古墳	古墳	29	中野田遺跡	弥生・古墳	集・集	55	萩ヶ谷遺跡	縄文・弥生	集・集
4	雷吹古墳群	古墳	古墳	30	宮城遺跡	古墳	集・集	56	内瀬戸火葬場跡	古墳・古代	火葬場
5	箕沢古墳群	古墳	古墳	31	三ツ池古墳群	古墳	古墳	57	秋合古墳群	古墳	古墳
6	花沢群	中世・近世	城跡	32	女鬼ヶ谷古墳群	古墳	古墳	58	稲ヶ谷遺跡	縄文・弥生・古代	集・集
7	塩津古墳群	古墳	古墳	33	水守遺跡	古墳	集落	59	尾ヶ谷古墳	古代	古墳
8	道志遺跡	古墳～中世	集落	34	田中城	中世・近世	城跡	60	天ヶ谷遺跡	旧石器・縄文	散布地
9	宮之郷遺跡	古墳～中世	集落	35	群島群	弥生～中世	古墳	61	瀬戸古墳群	古墳	古墳
10	赤塚遺跡	古墳	散布地	36	下藪田遺跡	弥生	集落	62	岩間山遺跡	弥生・古墳・中世	集落
11	小塚山西遺跡	弥生・古墳	集・古・墓	37	東藪古墳群・東浦遺跡	古墳	古墳	63	花倉城	中世	城跡
12	道場田遺跡	弥生～中世	集・水・橋	38	島内遺跡	弥生・古代・中世・近世	集・集	64	寺郷遺跡	縄文	散布地
13	小川城	古墳～近世	集・城	39	上藪田川の丁遺跡	弥生	古墳	65	中山遺跡	縄文	散布地
14	松崎遺跡	古墳	散布地	40	上藪田モミダ遺跡	弥生・古墳・古代	集落	66	萩の平遺跡	縄文・弥生	散布地
15	西原古墳群	古墳	古墳	41	中ノ合遺跡	古墳・中世	集落	67	助宗古墳群	古代（奈良・平安）	古墳
16	清水遺跡	弥生・古墳	集落	42	寺家山（中ノ合）古墳群	古墳	古墳	68	谷根集・高草古墳群	古墳	古墳
17	丸丸遺跡	弥生	集落	43	時ヶ谷五鬼免古墳群	古墳	古墳	69	白砂寺古墳群	古墳	古墳
18	東ノ谷遺跡	弥生	散布地	44	水守遺跡	古代	散布地	70	法信寺古墳群	古墳	古墳
19	坂本遺跡	古墳	散布地	45	釣瓶塚古墳群	古墳	古墳	71	二俣古墳群	古墳	古墳
20	上原遺跡	弥生	集落	46	若王子古墳群	古墳	古墳	72	駒形古墳群	古墳	古墳
21	村良遺跡	弥生	散布地	47	藤ヶ谷古墳群	古墳	古墳	73	萩合古墳群	弥生・古墳	集落
22	入野東古墳群	古墳	古墳	48	白砂古墳群・遊跡	古墳	古墳	74	野田城	中世	城跡
23	入野西古墳群	古墳	古墳	49	庭瀬山古墳群・荘館山遺跡	古墳	古墳	75	伊ノ谷遺跡	縄文・弥生・古墳	集落
24	高田観音前2号墳	古墳	古墳	50	秋合遺跡	古代	官署	76	瀬戸古墳群	古墳	古墳
25	飯野城	中世	城跡	51	南新屋遺跡・南新屋古墳群	縄文・弥生	集落	77	藤守遺跡	古墳・中世	集落
26	綱目山城	中世	城跡	52	島越山遺跡	弥生	集落				

器など郡衙関連の遺物が多数出土している。御子ヶ谷遺跡から瀬戸川の upstream に 4 km ほど遡った丘陵部には、約 100 基にのぼる窯跡を有する助宗窯跡群があり、奈良・平安時代にわたり須恵器や灰釉陶器、山茶碗の生産供給を行ったことが確認されている。御子ヶ谷遺跡南東の丘陵裾部には、墨書土器等を出土し、郡衙関連の遺跡と考えられる秋合遺跡が、また、御子ヶ谷遺跡の南側丘陵緩斜面には、7軒の堅穴住居、3棟の掘立柱建物、井戸、溝状遺構などが検出された山廻遺跡が位置している。遺物としては鉄滓やフイコ羽口等が出土したため一種の工房址的性格を持つ遺跡と考えられ、郡衙周辺に設置された官営工房としての機能を果たした集落であると位置づけられる。また、低地に臨む丘陵南側斜面には、一基単独で存在する奈良時代前期の須恵器登窯の検出された滝ヶ谷窯跡や奈良時代を中心とした火葬墓と火葬施設ならぬ内瀬戸火葬墓群などの遺跡も立地している。潮山南方の沖積微高地上に立地する水守遺跡や水守西遺跡、平島遺跡では集落が形成された跡や郡衙関連の遺構、遺物が確認されており、益津郡衙とのつながりが考えられる。群衙との関連が比較的少ない一般の集落遺跡としては蛭ヶ谷遺跡や東浦遺跡があげられる。

中世以降

平安時代末になると、有力貴族の一部が自己防衛のため武装して武士団を組織するようになっていった。志太平野でも藤原氏の流れを汲む岡部氏や朝比奈氏などが台頭していた。駿河国は、南北朝時代に今川範国が所領を与えられて以降、長らく今川氏の勢力下におかれる。今川氏は駿府を本拠地としたが、駿府進出以前は直轄領である葉栗庄を拠点とした時期があり、花倉城を築城したのも今川氏とされている（静岡県教育委員会 1981）。今川義元の死後、氏真の時代になり今川氏の勢力が衰えると北からは武田氏、東からは北条氏、西からは徳川氏が版図拡大のため進出してくる。その中でまず武田氏が台頭し今川氏に代わって駿河国を治めた。長篠の戦いを経て武田氏の勢力が衰えた後は、徳川家康が駿河国を領有するが、小田原攻めのため、新たに中村一氏が駿河国に配された。中村一氏は田中城に横田村詮を置き、新しい支配体制を展開した。また、岡部氏の山城である朝日山城は、潮山北側丘陵に自身の領地を見下ろす形で立地している。その北東には岡部氏館跡の伝承が残る仮宿館も立地している。藤枝市内における中世の集落遺跡としては仮宿堤ノ坪遺跡や谷田遺跡、寺下遺跡があげられる。

江戸時代の志太地域は幕藩体制の下、田中藩、掛川藩、横須賀藩の3つの藩によって統括された。藤枝は東海道の整備に伴い、品川から数えて22番目の宿場町となり活況を呈した。藤枝宿の特徴は、他の宿場町と異なり、藤枝という場所があり、その一町がそのまま宿駅となったわけではなく街道筋に連なる村々がその親村に属しながら、その一部を宿駅のために割いていた点である。また、駿河国内において沼津宿と並び、幕府領ではなく私領地に位置する宿駅であった点や小規模ながらも瀬戸川の川越が行われたことも特徴としてあげられる（藤枝市教育委員会 1969）。田中藩は江戸時代の前半には城主が短期間で交代する時期が続いたが、本多氏が城主となるころから次第に安定し、代々世襲されることになった。城主は廃藩置県により廃城となる1871年までに12氏、21代を数え、入城、転封に際して加封されたり、幕府の要職に就いた者もあり「出世城」とも呼ばれた。

中世以降は、平野の沖積化や開発が進み、現在により近い景観が形成され始めた。「和名類聚抄」に登場する地名はいずれも丘陵周辺、あるいは海岸部の微高地に位置すると考えられ、少なくとも律令期以前の志太平野は河川の氾濫原や湿地が大部分を占めていたと考えられている（藤枝市教育委員会 1981）。そのことが、古墳時代までの集落のほとんどが丘陵部や丘陵辺縁部の微高地上、河川沿いの自然堤防や後背湿地で営まれた理由の1つと考えることができる。また、平野部では何度も繰り返された河川の氾濫により、砂礫層が厚く堆積しており、遺跡が地中深くに埋没している点も、遺跡発見に至らない要因であるといえる。

第3節 確認調査

1. 確認調査その1

(1) 調査の方法及び経過

本調査に先立ち、平成12年6月12日から同9月29日にかけて確認調査その1を行った。当該地域は、衣原古墳群との間にある水田および住宅地であり、北から西にかけては丘陵が広がり、東側には葉梨川が流れ、南に開けた調査地点である。

調査区をA-1区、A-2区、B区、C区と設定し、それぞれ10箇所、16箇所、16箇所、10箇所のテストピットを掘削し調査を行った。B区から、表面積4m×4m、深度3m（部分的に5m）のテストピット掘削を行い、8月のお盆明けにはB区、C区の確認が終了した。引き続きA区に移動し調査を行ったが台風などの雨が多く、その度に調査地点に水が貯まるなどの問題も発生したが、9月いっぱいをもって予定していた調査を終了した。

表2 確認調査その1工程表

	月	6月					7月					8月					9月				
		週1	週2	週3	週4	週5	週1	週2	週3	週4	週5	週1	週2	週3	週4	週5	週1	週2	週3	週4	週5
テストピット	A区																掘削・実測・埋め戻し				
	B区						掘削・実測・埋め戻し														
	C区											掘削・実測・埋め戻し									

(2) 調査の結果

調査の結果、A区およびB区のテストピットで杭列およびそれに伴う畦畔を検出し、同時に古式土器もしくは弥生土器と考えられる土器片が出土した。

また、B区、A-2区でも同じ南北方向を持った杭列やそれらに直行する杭列が検出された。C区で



図5 確認調査その1・その2対象範囲と調査配置

も杭列が検出されたが、A区やB区のと比べて検出面が浅く、出土した土器も紀元1000年頃の須恵器と思われるものであった。A-1区では南北方向に溝状遺構が確認され、青磁、山茶碗、かわらけ等の土器も多数出土した。合わせて、先述の杭列とはほぼ同時期と思われる遺構も確認された。また、A区北側の東西100m～南北40mくらいの広い範囲からは山茶碗を中心に中世の土器が多数出土した。

以上の確認調査の結果を受け、遺構のさらなる広がりが考えられる当該地域を遺跡と認定し、本調査を行うこととした。

2. 確認調査その2

(1) 調査の方法と経過

平成15年9月29日から平成16年3月25日の期間で確認調査その2を実施した。9月30日より打ち合わせ等準備に着手し、用地の立会い、測量方法等の打ち合わせを経て10月14日より安全対策、プレハブ整備等の準備工に着手した。調査対象地は丘陵部、低地部を含む広大な範囲であり、また隣接地での本調査と併行して実施することになったため、断続的な調査となった。調査対象地を丘陵部と低地部とに分け、低地部の調査を先行して実施した。調査はトレンチ（以下Trと記す）、テストピット（以下TPと記す）により、平面断面で遺構の有無を確認、出土した遺物とともに写真、実測図で記録をとる方法で行った。各Tr、TPは記録終了後に埋め戻しを行った。掘削には重機および人力を併用して実施した。3月10日までに全ての調査を終了し、翌11日に埋め戻しを行い、撤去工を行い全ての調査を終了した。

表3 確認調査その2工程表

月	10月				11月				12月				1月				2月				3月			
	第1週	第2週	第3週	第4週	第1週	第2週	第3週	第4週	第1週	第2週	第3週	第4週	第1週	第2週	第3週	第4週	第1週	第2週	第3週	第4週	第1週	第2週	第3週	第4週
トレンチ掘削 (重機・人力)																								
丘陵部	写真・測量																							
	埋め戻し																							
低地部	TP掘削 (重機)																							
	写真・測量																							
	埋め戻し																							
準備・撤去工																								

(2) 調査の結果

低地部のTrおよびTPの掘削は4つのラインを設定し、それに沿う形で行い、それぞれ土層柱状図を作成し、検出された遺構、出土遺物に関して検討を行った。A-A'ラインでは山茶碗を伴う包含層と柱穴の並びを確認した。また、水田遺構と考えられる黒色泥炭質粘土層の中に耕作痕を検出し、畦畔施設に用いたと考えられる板状木製品も出土した。B-B'ラインでは、地山を掘り込んだ柱穴、溝など古墳時代前期のものと思われる遺構群が検出され、また、中間層を挟んで上層に中世相当の包含層および遺構を確認した。また、A-A'ラインと同様に古墳時代に比定される水田遺構も検出された。C-C'ラインにおいても先述のもの共通する二時期（古墳時代と中世）の遺構面および包含層を確認した。D-D'ラインでは中世の遺構面と包含層が良好な状態で残存しており、また、遺物の出土状況や遺物の状態、包含層の土壌などから集落の端部であると判断した。ここでも同様に水田遺構の広がりを示す土層の堆積が確認された。

丘陵部のTrおよびTPの掘削は尾根部と谷部で5つの範囲（東谷部・東尾根部・中央谷部・西尾根部・西谷部）を設定して行い、それぞれ土層柱状図を作成し、検出された遺構、出土遺物に関して検討を行った。丘陵部では中世以前の遺構が明確に存在するのは、一石五輪塔およびこれに類する直方体や円柱状に加工された石材が出土した中央谷部のみで、残りの4箇所には遺跡は存在しないと判断した。西尾根部にはかつて古墳が存在した痕跡も見られるが現在は残存していない。

以上の確認調査の結果を受け、低地部には集落域と水田域が2面にわたり広範囲に広がると考えられたため、遺跡と認識し、本調査を行うこととした。



写真2 確認調査その1 重機掘削状況1



写真3 確認調査その1 作業状況1



写真4 確認調査その1 作業状況2



写真5 確認調査その1 重機掘削状況2



写真6 確認調査その2 重機掘削状況



写真7 確認調査その2 作業状況1



写真8 確認調査その2 作業状況2



写真9 確認調査その2 作業状況3

第4節 本調査

1. 概要

藤枝地区におけるNo.81地点（寺家前遺跡）の本調査は、平成12年度～13年度、15年度～18年度に実施した。本調査を実施した対象範囲は、前節に記した確認調査の結果に基づき、静岡県教育委員会から示されたものである。

平成12年度～13年度の調査は「本調査Ⅰ期」、平成15年度～18年度の調査を「本調査Ⅱ・Ⅲ期」と呼んでいる。「本調査Ⅰ期」は調査対象地の南半部で、現在まで水田として使われていた低地部分である。

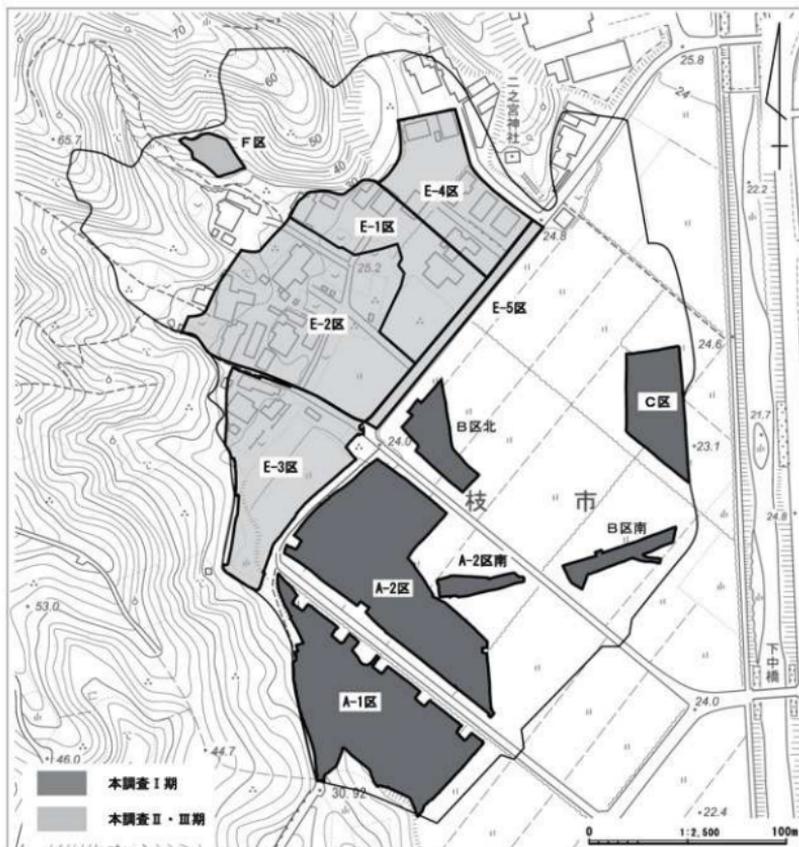


図6 本調査対象範囲

確認調査その1の結果から、遺構が見つかった範囲に調査区をA-1区、A-2区、B区、C区と設定した(図6)。「本調査Ⅱ・Ⅲ期」は対象地の北半部にあたり、丘陵から微高地と一部低地を含んでいる。現在まで果樹林、墓地、宅地や茶畑として利用されていた。確認調査その2と併行して本調査を実施することになり、着手順からE-1区、E-2区、E-3区、E-4区と設定し、南端の現道部分をE-5区とした。本調査の総面積は、36,022㎡、実掘面積は55,055㎡である。各区の面積と調査年次は表4・5のとおりである。

本調査の方法としては、いずれの調査区も表土の除去には重機を用い、包含層掘削、遺構検出・遺構掘削は人力で実施した。測量基準点については、旧測地系を基に、調査区内に10mまたは20m単位のグリッドを設置した(図7)。遺構実測・遺物取り上げにあたっては、トータルステーションを用いた。記録図の図化にあたって、縮率は1/20と1/100を基本としたが、必要に応じてその他の縮率も用いている。なお全体図と地形測量図の作成は空中写真撮影により行っている。写真撮影は、35mm判カラーネガ・カラーポジフィルム、6×7判カラーポジ・モノクロフィルムを用いることを基本とした。なお、詳細な調査の方法と経過は各調査で異なるため、各期調査の中で述べることにする。

表4 本調査工程表

期	Ⅰ期																								Ⅱ期					
	12												13												15					
	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	9	10	11	12	1	2	3	
確認調査	—————																								—————					
A-2区南	—————																								—————					
C区	—————																								—————					
B区北	—————																								—————					
B区南	—————																								—————					
A-1区	—————												—————												—————					
A-2区	—————												—————												—————					
E-1区	—————												—————												—————					
E-2区	—————												—————												—————					
F区	—————												—————												—————					
E-3区	—————												—————												—————					
E-4区	—————												—————												—————					
E-5区①	—————												—————												—————					
E-5区②	—————												—————												—————					

この期間調査実施せず

期	Ⅲ期																																		
	16								17								18																		
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2
確認調査																																			
A-2区南																																			
C区																																			
B区北																																			
B区南																																			
A-1区																																			
A-2区																																			
E-1区	—————																																		
E-2区	—————								—————																										
F区																																			
E-3区																																			
E-4区																																			
E-5区①																																			
E-5区②																																			

本調査と併行して、基礎的な整理作業を藤枝事務所あるいは各地点の現地事務所にて実施している。第二東名建設事業に関わる発掘調査は現地調査を優先させるという方針に基づき、本格的な資料整理作業は、上記の遺跡の調査に一区切りが付いた平成19年度から着手した。資料整理はNo.82・No.83地点(衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古窯群)と併行して行われ、同遺跡の報告書刊行後の平成22年度から寺家前遺跡単独で資料整理が進められた。

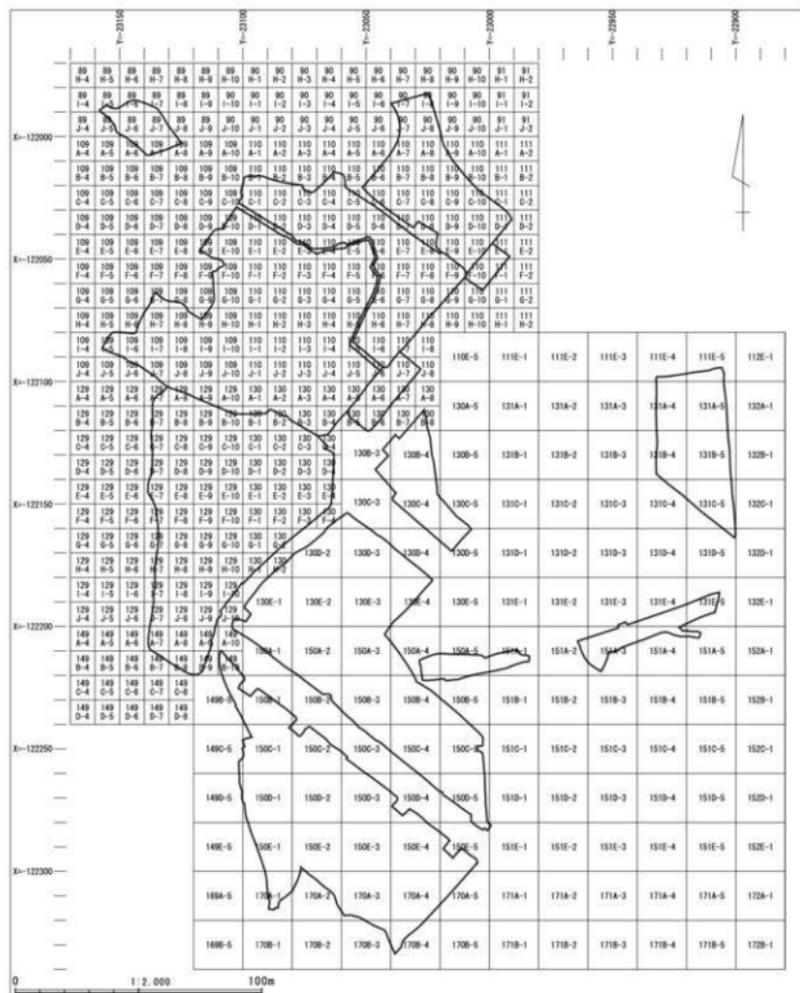


図7 グリッド配置図

2. 本調査 I 期

(1) 調査の方法と経過

寺家前遺跡の本調査 I 期は平成 12 年度に実施した確認調査その 1 の結果を受けて、同年 11 月 14 日～13 年 3 月 30 日、平成 13 年 4 月 2 日～14 年 3 月 29 日に実施した。

平成 12 年度の調査対象地は C 区、B 区北、B 区南と A-2 区南で、調査区面積は 8,930 m²である。調査の方法については前項で述べた通りである。本調査 I 期は水田部での広範囲な調査となるため、予め 100 m 方眼を 1 区画として、そのなかを 20 m 単位に区切ったグリッドを設定した (図 7)。

調査にあたっては、始めに準備工として 11 月 15 日から現地詰所となるプレハブおよび駐車場の造成、18 日には安全柵 (ガードフェンス) の設置作業を開始した。

11 月 27 日には重機による C 区の表土除去に取り掛かった。12 月 1 日は発掘作業員のオリエンテーションが行われ、4 日に人力掘削に着手した。6 日に重機掘削が終了し、人力による遺構検出作業を実施した。C 区と併行して重機による B 区北の表土除去に取り掛かり、18 日に重機掘削が終了した翌日の 19 日にはグリッド杭設定、21 日には水準点測量を業務委託により行った。27 日に年内の作業が終了となり、翌年の 1 月 22 日からは B 区南の表土除去を重機掘削した。調査区が増えたことにより 2 月 2 日より作業員を増員し調査にあたった。C 区、B 区北では水田跡や溝跡などが検出され、記録をとった出土遺物の取上げ作業を行った。2 月 6 日に C 区、B 区北の空中写真測量を実施した。B 区南の重機による表土除去終了後、引き続き 2 月 5 日より A-2 区南、2 月 9 日より A-1 区の表土除去に入った。写真測量の完了した C 区では出土状況図を図面と写真撮影により記録に残しながら杭列の解体作業を行った。表土除去後に B 区南、A-2 区南では人力による遺構検出と精査にかかった。B 区南では杭列を伴う水田畦畔が検出された。3 月 6 日に B 区南と A-2 区南の空中写真測量、7 日に写真撮影を行い、補測作業や遺構の解体をした後、同月 26 日に作業を完了した。A-1 区と A-2 区については次年度も調査を継続することとなった。

平成 13 年度の調査対象地は A-1 区、A-2 区で、No.82 地点の E 区が統合されて、調査区面積は 10,172 m²である。調査の方法については前項で述べた通りである。

調査は年度当初から、継続していた A-1 区の表土除去を開始した。グリッド杭は A-1 区・A-2 区を合わせて業務委託し、5 月 29 日から打設した。調査は 4 月 9 日からベルトコンベアを設置し、人力による遺構検出作業を行った。前年度より検出していた石敷遺構の検出を継続し、記録を作成した。7 月 6 日に南西部の山裾に整地層の範囲が確認されたため、重機により拡張した後に人力で遺構検出を行った。

表 5 調査面積

調査区	調査区面積 (m ²)	実掘面積 (m ²)	調査回数
A-2区南	8,930	330	1
C区		1,590	1
B区北		880	1
B区南		510	1
A-1区		7,970	3
A-2区	10,172	10,520	2
E-1区	3,200	2,480	1
E-2区	4,760	7,620	3
F区	400	400	1
E-3区	4,630	14,970	3
E-4区	3,060	5,835	3
E-5区①	870	750	3
E-5区②		1,200	3
計	36,022	55,055	-

併行して丘陵上で検出された竪穴住居跡の遺構を掘削し、測量・写真撮影等の記録を取った。10月25日と11月28日には中世面の空中写真撮影・測量を実施した。写測後、中間層を重機除去し、大畦畔と杭列、井戸跡等の検出を行った。12月26日に井戸跡の土壌サンプルを採取し、分析を専門業者に委託している(第4章-1・2)。翌年の2月2日には条里面の空中写真測量を実施した。補測後、条里面を解体し、新たに土層帯を設定してトレンチ掘削を始め、弥生～古墳時代の水田跡の検出にかかった。3月には小区画水田を検出し、同月8日に空中写真測量を行った。出土品を取上げ、記録類の作成を行い、調査を完了した。

A-2区は当初、A-2区北とA-2区南に分かれていたが、最終的に拡張区が加わり、合わせてA-2区となった。調査は前年度からの継続作業を4月より開始した。中世の水田面は検出されず、6～7月にかけて条里面の大畦畔を検出した。8月2日に同面の空中写真測量、3日には景観写真も撮影した。4日からは古墳時代以降の水田面を調査するため、大畦畔を解体、トレンチ掘削を開始した。9月以降は弥生～古墳時代の水田畦畔を検出し、杭列や出土品の記録をとった。10月25日にA-2区南の空中写真測量、12月13・14日にはA-2区北の写真測量を行った。写測後、杭列の記録・解体をして調査を終了した。

(2) 調査の結果

C区：遺構は調査区北西隅から中央を南北方向に延びる畦畔とそれに伴う杭を検出した。その畦畔とは別にやや東に外れた位置で平行した2列の杭列が見つかった。遺物は灰陶陶器、山茶碗、板状の木製品、鉄鏃などが出土した。出土品の年代から、杭列は平安時代末から中世初頭の時期である可能性が高い。

B区北：調査区北側に南北方向の杭列畦畔と、それに平行する畦畔を検出した。杭列畦畔の西側にはこれに直交する方向に杭列があった。さらに調査区の南側には東西方向の杭列を検出した。出土品は古式土師器と板状の木製品がある。これらの年代から畦畔は弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。



写真10 本調査1期 重機掘削状況



写真11 本調査1期 作業状況1



写真12 本調査1期 作業状況2



写真13 本調査1期 作業状況3

B区南：調査区の南半部に東西方向の杭列畦畔と南北方向の杭列畦畔を検出した。畦畔は横木や矢板を伴うものである。東西の杭列畦畔は西側に続き、A-2区の杭・矢板列に繋がる。矢板には建築材等が転用されている。畦畔より南側は谷状に窪んでおり、古墳時代以降も谷地形であったようである。出土品は、台付甕、高坏、小型丸底埴、打製石斧、鉄刃が装着された鏝柄がある。これらの年代から弥生時代後期～古墳時代前期の遺構であろうと判断される。

A-2区：奈良・平安時代相当の条里面と弥生時代～古墳時代前期と思われる水田跡の合計2面の調査を行った。

条里面では現在の地割とほぼ同じ方向に水田が広がっていることがわかった。東西方向に幅1.5mほどの大畦畔を検出し、それを軸に10～13mの間隔で東西方向の畦畔を検出した。南北方向にも大畦畔に向かって、あるいは大畦畔から延びる畦畔が見つかった。東西方向の畦畔は作りが頑丈で、一部には水口も作られていた。A-2区は北西から南東方向に傾斜する地形であるため、北側の寺家山周辺からの沢水を引き入れて水田耕作に利用するため、東西方向の畦畔をしっかり作る必要があったのであろう。条里以降の水田は、条里の畦畔の位置をほぼ踏襲しており、現在の地割に至るまで、条里の影響が残っている。出土品は須恵器、土師器などの土器や木製品がある。

弥生時代後期～古墳時代前期の水田面では、畦畔は正方位に近い東西方向性をもち、杭や矢板で補強された大畦畔が見つかった。やはり東西方向の畦畔がしっかりと作られ、区画も壘一枚から二枚程度の大きさの小区画水田が、調査区南隅を中心として扇状に広がっていることがわかった。調査区の南隅は溝状遺構が見つかり、地形が下がっている。南側にはおそらく葉栗側の旧流路が存在するため、この溝はその流路に繋がっていくと想定される。出土品は大畦畔の交差部分から大量の杭や板材などの木製品が出土し、包含層より高坏や碗などの土師器や弥生土器が見つかった。

A-1区：中～近世面と、奈良・平安時代相当の条里面、弥生時代後期～古墳時代前期と思われる水田跡の合計3面の調査を行った。

中～近世面では調査区中央部で帯状に続く石敷きや、西側の低丘陵の山際に整地層の範囲、井戸跡、道路遺構等を検出した。この整地層は居住域と捉えたが、周囲は溝状遺構で区画されている様子はなく、明確な境が確認できなかった。整地層には木組みの井戸や曲物を井戸目に据えた井戸があった。上面では常滑や古瀬戸、青磁が出土し、下面では山茶碗が出土した。このことから居住域は12世紀末から13世紀初頭に造成され、数回の改修ののち、15世紀末から16世紀初めごろまで続いていたと考えられる。また15世紀末から16世紀初めの土器の大半が火を受けていることから火事などで焼失した可能性がある。西側の低丘陵には石敷きの道路遺構が見つまっている。

居住域の下面にはA-2区から続く条里水田があり、大畦畔の続きも検出した。大畦畔の脇にはそれ以前に作られた畦畔が確認出来たことから、大畦畔はこれを作り変えたものと想定される。出土品は須恵器や土師器と杭等である。

条里面の下面では弥生時代後期～古墳時代前期の水田を検出した。A-2区と同様に大畦畔は杭や矢板で補強されていた。西側には自然流路が山裾に沿って流れ、その所々から水田へ導水していたと考えられる。流路に規制されて、水田跡はこの流路より東側で見つまっている。

確認調査時にNo.81地点へ統合したNo.82地点E区では、低丘陵の西端で南北方向石が敷かれた道路遺構を検出した。石敷きの左右には部分的に排水溝も切り込まれていた。この遺構の年代を示すような出土品はないが、中～近世の土器が混じった層よりも下層で検出している。斜面では古墳の周溝の残存かと思われた浅い溝があり、溝の底から須恵器が出土した。さらに、山裾に近い斜面には方形の溝を伴った竪穴住居跡と、弥生時代末～古墳時代初頭と思われる焼土を伴った竪穴住居跡が見つまっている。

本調査I期は、No.81地点の南半部（現水田部分）の調査を実施した。この調査の結果、調査区の高

域に渡って弥生時代後期～古墳時代前期に開田された水田が広がっていたことがわかった。B区とC区の間やA区南側には葉梨川が蛇行して流れていたようで、この影響によりかなり湿地の状態であったが、耕作可能な部分には水田を作っていた。それ以降、奈良・平安時代には条里地割を持った水田となり、葉梨川の氾濫を受けながらも連綿と水田が営まれていた。水田には北側の寺家山や西側の低丘陵から流れ出る沢などの水が西側の山裾を流れ、その水を水田に引き込み、北から南側に傾斜している地形を上手く利用して水田に水を回し、南側の葉梨川に排水していたのであろう。水田は中世にも引き継がれていくが、西側の低丘陵の一部を切って埋め立て、整地して居住域を作っていた跡も見つかっている。本対象地の大半は、現在も水田であったのと同様に、開田以降、常に生産域であったといえる。したがって、本調査Ⅰ期の段階から、本調査Ⅱ・Ⅲ期に対象地となる北北部には弥生時代後期からの集落が存在する可能性が指摘されていた。

3. 本調査Ⅱ・Ⅲ期

(1) 調査の方法と経過

本調査Ⅱ期は平成15年度に実施した確認調査その2の結果を受けて、同年9月26日～16年3月25日と平成16年4月1日～16年10月28日に2箇年に渡って実施した。本調査Ⅱ期はE-1区の調査開始から終了までを指し、一部、本調査Ⅲ期(E-2区)と併行して行っている。調査対象地はE-1区で、調査対象面積は3,200㎡である。

本調査Ⅲ期は確認調査その2の結果を得て、平成16年6月9日～平成17年3月31日、平成17年4月1日～平成18年3月31日、平成18年4月1日～平成19年3月23日までの3箇年をかけて実施した。本調査Ⅲ期はE-2区調査開始から全工期終了(E-3区、E-4区、F区、E-5区)までを指す。調査対象地の面積は表5の通りである。

調査の方法については基本的には概要で述べた通りである。本調査Ⅱ・Ⅲ期は丘陵から丘陵裾の微高地までの広範囲な調査となるため、予め100m方眼を1区画として、そのなかを10m単位に区切ったグリッドを設定した(図7)。

現地調査における自然科学分析は、プラントオパール、珪藻分析、花粉分析、植物珪藻体分析、放射性炭素年代測定、樹種同定等を実施した。また平成19年度以降も整理作業のなかで出土品の理化学分析を行った。分析は各専門分野の研究者や業者に委託し、その結果については第4章に掲載した。

調査の経過は以下の通りである。

平成15年度 本調査Ⅱ期

- | | |
|--------|----------------------|
| 9月29日 | Ⅱ期調査打ち合わせ および 準備工 |
| 11月14日 | E-1区 重機による表土除去開始 |
| 11月26日 | 人力掘削開始、集落域 中～近世面調査開始 |
| 12月16日 | 水田域 調査開始 |
| 1月23日 | 集落域 中～近世面、空中写真撮影 |
| 1月30日 | 集落域 中間層除去 |
| 2月3日 | 集落域古墳時代面調査開始 |
| 3月10日 | 現地調査終了 |
| 3月11日 | 基礎資料整理開始 |
| 3月31日 | 基礎資料整理終了 |

平成16年度 本調査Ⅱ期・Ⅲ期

Ⅱ期

- 4月5日 Ⅱ期調査打ち合わせ および 準備工
- 4月12日 E-1区 水田域 遺構検出開始
- 6月19日 現地説明会 開催
- 7月29日 E-1区 水田域 空中写真撮影
- 8月2日 矢板・杭列を伴う大畦畔の解体・実測開始
- 10月28日 矢板・杭列を伴う大畦畔の解体・実測終了

Ⅲ期

- 6月9日 E-2区 北部 重機による表土除去開始
- 6月16日 E-2区 人力掘削開始
- 10月14日 E-2区 南部 重機による表土除去開始
- 12月17日 E-2区 北部西側 空中写真撮影
- 12月20日 E-2区 北部西側 第二面人力掘削開始
- 1月27日 E-2区 北部東側 空中写真撮影
- 1月31日 E-2区 北部東側 第二面人力掘削開始
- 2月9日 E-3区 重機による表土除去開始
- 3月18日 現地調査終了 撤去工 現地養生
- 3月22日 基礎資料整理開始
- 3月31日 基礎資料整理終了



写真14 本調査Ⅱ・Ⅲ期 重機掘削状況1



写真15 本調査Ⅱ・Ⅲ期 重機掘削状況2



写真16 本調査Ⅱ・Ⅲ期 作業状況1



写真17 本調査Ⅱ・Ⅲ期 作業状況2

平成17年度 本調査Ⅲ期

- 4月1日 準備工
 4月6日 新規入場者教育 現地調査開始
 4月25日 E-2区 南部西側 空中写真撮影および測量
 5月31日 E-2区 北部および南部東側 空中写真撮影および測量
 6月14日 藤枝市郷土博物館 解説ボランティア 来跡
 7月28日 E-2区 南部西側 空中写真撮影および測量
 8月6日 現地説明会 開催
 8月9日 公団主催の親子見学会 開催
 9月16日 現地プレハブ移転 (E-4区→E-2区西側へ)
 9月20日 E-4区 準備工開始
 9月29日 F区 人力掘削開始
 10月7日 E-3区 中央部(掘立柱建物跡周辺) 空中写真撮影および測量
 11月14日 E-4区 重機による表土除去開始
 11月17日 イラク国立博物館員 保存処理研修のため来跡
 11月18日 E-4区 人力掘削開始
 11月28日 E-2区 南部東側およびF区 空中写真撮影
 12月1日 F区 調査終了
 12月7日 E-2区 調査終了



写真18 本調査Ⅱ・Ⅲ期 作業状況3



写真19 本調査Ⅱ・Ⅲ期 作業状況4



写真20 本調査Ⅱ・Ⅲ期 作業状況5



写真21 本調査Ⅱ・Ⅲ期 作業状況6

- 12月21日
 ～22日 E-3区 空中写真撮影および測量
- 12月26日 E-3区 中間層除去
- 1月12日 E-4区 重機による中間層除去開始
- 3月9日 現地調査終了
- 平成18年度 本調査Ⅲ期
- 4月1日 準備工
- 4月6日 新規入場者教育
- 5月2日 E-4区 高所作業車による景観写真撮影
- 6月26日
 ～28日 藤枝市立葉梨小学校 5年生児童遺跡見学に来跡
- 7月10日 藤枝市立葉梨小学校 遺跡見学会 来跡
- 7月29日 平成18年度 第1回 現地説明会 開催
- 8月2日
 ～3日 E-3区 空中写真撮影および測量
- 8月4日 小学校社会科研究部研修会 開催 小学校教諭約18名来跡
- 8月10日 藤枝市立中央小学校校内研修 遺跡見学 21名来跡
- 10月2日 E-3区 北東部拡張のための準備工開始
- 10月20日 E-3区 北東部人力掘削開始
- 10月31日 藤枝市立中央小学校4～6年生 遠足で来跡
 藤枝市立葉梨中学校 2クラス 60名 体験学習で来跡
- 11月1日 藤枝市立葉梨中学校 2クラス 60名 体験学習で来跡
- 11月10日 E-5区① 重機による表土除去開始
- 11月20日 E-5区① 人力掘削開始
- 11月22日 E-5区② 重機による表土除去開始
- 12月1日 E-5区② 人力掘削開始
- 12月7日 イラク国立博物館員 4名 保存処理研修のため来跡
- 12月22日 E-4区 空中写真撮影
- 2月7日 E-5区① 空中写真撮影
- 2月7日
 ～8日 E-3区 空中写真撮影および測量
- 2月15日 藤枝市郷土博物館職員および藤枝市議会議員 13名来跡
- 2月24日 平成18年度 第2回 現地説明会 開催
- 3月2日 E-4区、E-5区① 調査終了
- 3月8日 E-4区、E-5区① 中日本高速道路株式会社へ現地引き渡し
- 3月12日 撤去工 開始
- 3月16日 E-5区② 調査終了 中日本高速道路株式会社へ現地引き渡し
- 3月23日 E-3区 調査終了 中日本高速道路株式会社へ現地引き渡し
- 3月24日 基礎資料整理開始
- 3月31日 基礎資料整理終了

(2) 調査の結果

確認調査その2の結果では、本調査Ⅱ・Ⅲ期の対象地内には寺家山丘陵から低地に至るまでの間の微高地上に集落関連遺構が広く存在している可能性が指摘された。北から西側にある丘陵上には寺家山古墳や衣原古墳群が存在し、隣接地には須恵器生産窯や横口付木炭窯などの窯業生産遺構が発見された。前年度までの本調査Ⅰ期では、弥生時代後期～古墳時代初頭に開田された水田跡が見つかり、条里地割に改修されて以降も連綿と水田耕作が行われていたことがわかっている。また対象地内や周辺地には「寺家」、「寺前」、「寺家前」、「矢部屋敷」などの小字名が残り、それらに関連する遺跡が想定される場所でもあった。

各遺構の詳細については次章に譲ることとし、ここでは遺構と遺物の概要を記す。本調査対象の微高地上では、3時期の遺構面を調査した。

第1面は中～近世の集落遺構である。近世以降の遺構は、掘立柱建物や自然流路、井戸跡、墓跡など数は少ないものの、出土品は陶磁器類が多量に出土し、石製や金属製、木製の生活用具も数多く出土した(上層1期)。近世墓からは銅銭とかかわりが出土している。第1面の主体は中世の大型の掘立柱建物群とそれらを取り囲む溝跡や柵列跡、井戸跡、自然流路、土坑、墓跡等であり、A-1区で見つかった区画も合わせて3群の屋敷地が存在したことが明らかとなった(上層2期)。出土品は遺構内・包含層から灰釉陶器や山茶碗、かわらが多量に出土している。山茶碗は12世紀末～13世紀初頭のもので主体で、灰釉陶器に近い古相を示すものがある。少量ではあるが合子や蓮弁文を施した青磁や白磁、瓶類などの輸入陶磁器も出土している。その他の生活用具も多岐に渡っている。

奈良～平安時代の時期と断定できる遺構はないが、律令期の須恵器や長胴甕、平安時代の坏、陶馬、古代銭の「富壽神寶」などが出土している。本調査Ⅰ期では条里制の地割を持つ水田が見つかり、隣接する衣原遺跡でも丘陵上に当該期の堅穴住居跡が見つまっていることから、この時期にも当地が生活領域であったことがうかがえる。

第2面は古墳時代後期の集落遺構である。遺構は堅穴住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、自然流路および杭・矢板列を伴う畦畔や小区画水田跡を検出した。堅穴住居は竈を持ち、そのうち一軒は約90cmの長さの煙道を持つことが分かった。掘立柱建物は2間×2間または3間×3間の正方形の建物である。出土品は土師器や須恵器、ミニチュア土器のほか、装身具の耳環や木製の農具、種子などが遺構内や周辺の流路跡から出土した。

第3面は弥生時代後期の集落面である。遺構は堅穴住居跡、掘立柱建物跡、杭・矢板列を伴う畦畔、堰状遺構、自然流路、溝状遺構などを検出した。堅穴住居は長軸5～8mの規模を持つ円形、楕円形、略方形の3パターンの平面形があり、複雑に切り合った状況であった。一部では炉跡の存在も確認した。掘立柱建物は最大直径が1mの柱穴をもつ1間×3間の大型建物や、1間×1間の柱穴の周囲に幅80cmの溝が隅丸形状に巡るものがあつた。低地部で検出した杭・矢板列を伴う畦畔は、全長約15mの弓形をなし、杭に縦板や横木を噛ませてある構造で、水口状の集水部分も確認した。杭列の内側では夥しい数の建築材が出土した。出土品は弥生土器のほか銅鋼や銅環など装身具や磨製石斧、石鎌、砥石、木製農具等がある。なかでも倉庫などで使用されたと思われる建築材がほとんど再加工されていない状態で出土したことや、部材が組み合った状態で出土した背負板、柄付き鉄製鎌などは注目される。

本調査Ⅱ期の調査により、弥生時代後期に集落と水田が作られて以降、古墳時代、奈良～平安時代、中～近世まで、居住域として使われていた領域であるという成果が得られた。隣接する衣原遺跡では古墳時代後期の須恵器生産窯や古墳、奈良～平安時代の堅穴住居、横口付木炭窯など、居住域と生産域、墓域なども発見されていることから、今回の調査と合わせて、各時代の土地利用が見える貴重な発見となった。

4. 基本土層

本調査Ⅰ期からⅡ・Ⅲ期の現地調査結果を経て、寺家前遺跡の基本となる層序を図8にまとめた。各調査区の層位名は現地調査の段階で付けられたもので、出土品もこの層位名で取上げ作業を行っている。そのため層位名を変更することは混乱の原因になりかねないことから、それを避けるために、本報告書内では現地調査で付けた層位名をそのまま活かしている。

土層断面を記録した位置は図8に「●」で示してある。今回、基本とした層序は水田域を検出した低地部分で記録したものを基準とした。調査区によって年代と層位名が異なることもあるため、以下、遺物包含層と遺構検出面の年代について整理・解説する。

1層から4層までは表土～近・現代の層である。

5層は近世包含層にあたる。暗灰黄色～褐灰色シルト質粘土層で灰白色粒子、マンガン斑を多量に含む。中世から近世の陶磁器を含むが、主体は近世の陶磁器類である。本報告書内では「上層1期」とした遺構群がこの時期に含まれる。

6層は中世の山茶碗や陶磁器類を多く含む層である。黄褐色～褐色シルト質粘土層でマンガン斑を少量含む。6層下面までは比較的的水平堆積で攪拌は少ない。本報告内では「上層2期」とした屋敷地等の遺構群に伴う包含層である。

7層は古墳時代後期～古代の遺物が含まれる。しかし古墳時代後期の遺物量は比較的少なく、この層の主体は奈良～平安時代の須恵器や土師器である。土質は黒褐色～黒色粘土層で、褐色の泥炭質を含み、しまりがあり、粘性がある。7層の上面と下面は攪拌痕が多く、耕作など人為的な土地の改変が行われたことが考えられる。

8層は弥生時代後期～古墳時代の包含層にあたる。灰色粘土層で灰白色粒子や径10mm以下の灰色礫を多量に含む。遺物は弥生時代の土器よりも古墳時代の土師器が多く含まれることから、古墳時代後期

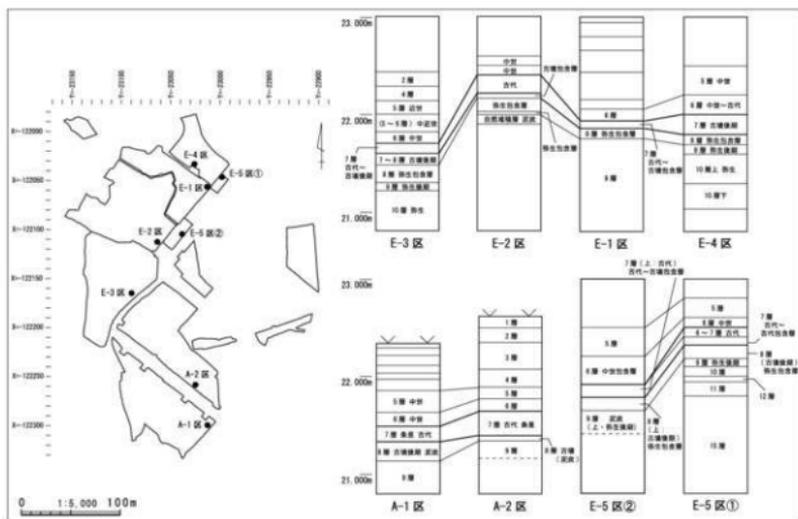


図8 基本層序

の集落面に伴う包含層であると言える。

9層・10層は弥生時代後期の包含層である。9層は暗灰色粘土層で、灰白色粒子や植物遺体を多く含む。しまりがなく粘性はややある。径5mm以下の灰色礫を少量含む。弥生土器や石器、金属製品等を多く含み、建築材等の木製品の多くはこの層より出土した。弥生時代後期の集落面に伴う包含層である。10層も弥生時代の遺物を含む層で、黒褐色～黒色粘土層である。植物遺体を含む腐食土層で、しまりがなく粘性も少ない。水田遺構が検出されたE-4区では10層は上層と下層に分けられている。10層の中間に建築材等の木製品が多く出土した。10層の下層では途中に植物遺体を含む砂質のラミナ層が咬む。9層から10層の上面にかけても土層断面上には攪拌痕が多く見られる。この時期に当地に人が入り、開田した痕跡であろうと思われる。11層以下は自然堆積層で遺物は含まない。各包含層の年代については以上である。

次に遺構検出面について整理する。寺家前遺跡の調査成果のうち、今回の報告書に掲載した年代は、奈良～平安時代と中世～近世までの遺構・遺物である。層位でいえば5層から7層までに該当する。

第2章で報告する「上層1期」とした遺構面は6層上面にあたる。「上層1期」では掘立柱建物跡のほか自然流路や井戸跡、天水槽、墓、道路などの遺構を検出した。しかし集落域では堆積土が薄く、その下層にある「上層2期」の中世遺構面を切り込んでいるため、井戸跡や天水槽など掘り込みの深い遺構覆土には弥生土器や土師器・須恵器等も含まれていた。E-5区では近世の水田面で畔の痕跡も検出した(図版19)。

第2章で「上層2期」とした中世の屋敷地は7層上面で検出した。図8の土層柱状図で上段の太線が検出面である。集落域では大型の掘立柱建物跡群やその周囲を取り囲む溝跡や柵列跡、井戸跡、土坑、墓等が見つかっている。水田域では当時の改変が7層にまで及んでいる。遺構覆土内から出土した土器は山茶碗が主体であるが、掘り方が下層にまで及んでいるため弥生土器や土師器・須恵器の混入もあった。

奈良・平安時代の条里面とした水田は8層上面で検出した。図8の柱状図下段の太線が条里面である。8層上面は集落域に近いほうでは攪拌は少ないが、南側の田面ではかなりの攪拌を受けていた。耕作や土地の改変に伴うものであろう。

寺家前遺跡の基本層序と遺構検出面については、現段階で以下のように整理した。なお、これはあくまでも現在の見解であり、今後、古墳時代と弥生時代の遺構面についての検討を行っていくなかで、加除・修正等があれば、その報告において訂正する。

5層・・・近世包含層	
6層・・・中世包含層	←近世遺構面(上層1期)
7層・・・奈良・平安包含層	←中世遺構面(上層2期)
8層・・・古墳後期包含層	←条里面
9層・・・弥生後期包含層	←古墳後期遺構面
10層・・・弥生後期包含層	←弥生後期遺構面

第5節 資料整理

第二東名に関わる埋蔵文化財は現地調査を優先するという方針に基づき、第二東名静岡工区内に所在する寺家前遺跡では、平成12年度から平成18年度まで現地での発掘調査を実施した。それと併行して記録類基礎整理作業と出土品の洗浄、土器の注記、木製品の応急劣化遅延措置、仮収納等の出土品基礎整理作業を現地および藤枝地区事務所（平成23年度末に藤枝事務所）にて行った。本格的な資料整理作業と報告書刊行作業は、平成18年度末に現地調査が完了してからの平成19年4月より静岡県埋蔵文化財センター藤枝事務所にて開始した。

資料整理の方法およびその経過については、まず概略を記す。出土品に関しては、遺物台帳の作成を行い、それをもとに洗浄・注記の完了した遺物から仕分け・分類・抽出を行った。その後、接合および復元作業を行い、必要なものは実測を実施した。この実測図を基に版組を行い、トレース作業を行った。また、遺構図、写真等の記録類については整理・収納と併行して台帳作成を実施した。なお、出土品については必要に応じて写真撮影をしている。遺物写真撮影は、4×5判カラーリバーサル、モノクロフィルム、6×7判カラーリバーサル、モノクロフィルムを用いて、当センター写真室にて実施した。また、報告書の前稿執筆と編集作業は上述の作業と併行して実施した。

資料整理作業には「出土品基礎整理作業」と「記録類基礎整理作業」、「出土品本整理作業」、「記録類本整理作業」、「報告書刊行作業」、「その他の作業」などがある。寺家前遺跡に関わる整理作業を作業ごとに解説する。



写真 22 整理作業状況 1



写真 23 整理作業状況 2



写真 24 整理作業状況 3



写真 25 整理作業状況 4

「出土品基礎整理作業」は洗浄・注記等の作業である。前述したように、これについては現地調査と併行して進めた。注記が完了していない一部の出土品については、平成19年度に株式会社三愛工業への業務委託により終了した。

「記録類基礎整理作業」は現地調査で記録保存のために撮影した写真整理と地形・遺構などを計測した図面整理、その他の作業がある。現地と併行して藤枝事務所で実施した。記録写真については当センターの「現地調査マニュアル」（平成23年4月改訂）と「資料整理マニュアル」（平成22年3月改訂）に基づき、ファイルへ収納し、その台帳を作成した（写真26）。記録図面についても同マニュアルの整理方法に即して収納し、台帳作成を行った。なお、台帳についてはすべてデジタルデータ化している。

「出土品本整理作業」は基礎整理作業が完了した出土品の分類・仕分けから開始した。出土品の種類に応じて作業工程が異なる。土器については、遺構出土のものと包含層出土のものとに仕分け、それぞれ土器の年代別に分類してから接合作業を行った（写真22）。このなかから図化する土器を抽出して実測した（写真24）。図化後、石膏で復元（写真23）してから写真の撮影をした。石器は実測とトレースの一部を平成21年度に株式会社フジヤマへ業務委託し、残りは藤枝事務所で実施した。木製品は実測と写真撮影を行った後に樹種同定用のサンプルを採取してから保存処理・修復をした。しかし脆弱で強度が保てない木製品については先に保存処理・修復をしてから図化と写真撮影を行うものもある。樹種同定用のサンプル採取と保存処理・修復作業については当センターの保存処理担当が行った。木製品の樹種同定は東北大学植物園の鈴木三男氏に依頼し、同定結果については第4章理化学分析に掲載した。金属製品は錆落としなどのクリーニングを保存処理担当が実施し、藤枝事務所で図化作業を行った。その他の出土品についても藤枝事務所で整理作業を実施した。出土品の写真については当センターの写真



写真26 整理作業状況5



写真27 整理作業状況6



写真28 整理作業状況7



写真29 整理作業状況8

室で撮影したフィルムを現像・焼付後、藤枝事務所で整理収納した（写真25）。出土品のトレースについては土器と土製品はロットリングを用いてトレーシングペーパーに墨入れした（写真28）。そのほかの出土品はスキャニングまたは描画ソフトを使ってデジタルトレース（写真27）したのち版組みを作成した。編集した図版に合わせて、写真も印画紙に焼き付けて版組みを行った。

「記録類本整理作業」は現地調査で得た記録図面の編集が主な作業である。記録類は平成12年度から18年度までの現地調査時に手書きで作成した遺構平面図や断面図とともに、全体の概略図面や地形測量図などがある。また測量については、基準点測量と空中写真測量を業務委託し、各調査区の俯瞰・鳥瞰写真と、1/20、1/100の遺構平面図とそのデジタルデータを得た。それらの全体図や個別の遺構図から遺構の性格や年代などを検討し、報告書へ掲載するための図面に編集する。編集を終えた図は出土品と同様に描画ソフトを使ってデジタルトレースをしたあとに版組みを行った。なお、迅速に作業を進め、省力化するために、記録類図面編集の一部を平成20年度・22年度・23年度と株式会社フジヤマに業務委託した。

「報告書刊行作業」については藤枝事務所で実施した。本書の編集については、一部、手書きのトレース図も作成したが大半をデジタルトレース後に版組みを作成していることから、編集ソフトを用いて作業を進めた。印刷製本に関わる校正作業は藤枝事務所で行った（写真29）。

「その他の作業」としては、保存処理前の木製品の劣化遅延措置や出土品の仮収納・保管作業などがある。なお、平成23年度は整理作業・保存処理については、株式会社パソナに業務委託している。

本報告書は平成24年3月刊行であるが、資料整理作業・報告書刊行作業は平成26年3月まで続く予定である。寺家前遺跡は広大な面積の現地調査を行い、幅広い年代の遺構・遺物が出ている。そのため、記録類と出土品の記録保存とするためには、寺家前遺跡の発掘調査報告書だけでも4分冊の構成となる。今後、平成26年3月までに順次刊行する予定の報告書は『寺家前遺跡Ⅱ（弥生時代・古墳時代編）』、『寺家前遺跡Ⅲ（遺物編1）』、『寺家前遺跡Ⅳ（遺物編2）』（いずれも仮称）である。

現地調査終了から新たに遺跡として周知されるまでに多少の時間が経過している。これまでも調査成果の一部を公表してきているが、公表した内容と本書の内容に相違がある場合は、本書を持って訂正することとする。なお、報告に関しては現時点での見解であり、今後、刊行する報告書において訂正する。

第2章 本調査の成果

第1節 古代、中世～近世の調査

1. 調査の経過

本書に掲載した遺構と遺物は、調査成果のうち、古代、中世～近世の年代のものである。調査に至る経過と方法については、前章で述べた通りである。本項では調査の経過について示す。

本調査Ⅰ期として平成12年度当初に取り掛かったのは、第二東名の工事との調整により、本線となる予定の低地部分からである。確認調査その1の結果に基づき、調査区を設定している(図6)。「A-2区南」と「B区北」、「B区南」、「C区」は杭列の畔が見つかった範囲に限定して調査範囲を設定したが、畔の延長部分を拡張して調査を行った箇所もある。中ノ合橋掛け替えの工事用道路建設のため、平成12年度に調査を完了し、用地の引き渡しを行った。遺構や遺物が比較的集中していた低地の西側では、山裾から現道までの間を「A-1区」と設定した。平成12年度末から調査を開始した「A-1区」は、平成13年度の調査で隣接するNo.82地点の一部が加わり、調査面積が増加した。当初、2面調査の予定であったが、奈良・平安時代の水田面の検出が可能と判断されたことにより、合計3面の調査となり、調査期間も延びることとなった。現道を挟んで東側は「A-2区」と設定し、当初、「A-2区北」と「A-2区南」として平成12年度に調査を開始した。平成13年度にはその中間も調査を行い、「A-1区」と同時進行で「A-2区」は2面の調査を行っている。「A-1区」、「A-2区」ともに平成13年度末に調査を完了した。

平成14年度は隣接する衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古窯群(No.82・83地点)の本調査や中ノ合遺跡他(No.80地点)の本調査を実施したため、寺家前遺跡の調査は一時中断し、平成15年度から再開することとなった。

平成15年9月より確認調査その2に着手し、平成16年3月まで断続的に本調査と併行しながら実施した。確認調査範囲は対象地の北半部にあたり、丘陵地はトレンチ掘削により、低地部は試掘坑による方法で行った。本調査Ⅱ期は、確認調査その2で遺跡の広がりか確認された範囲のうち、北東側の低地部分を「E-1区」として平成15年9月に取り掛かった。「E-1区」は平成16年度にも継続し、延べ2面の調査が行われ、10月末をもってⅡ期調査を完了した。

「E-1区」の西側を「E-2区」と設定し、平成16年6月より本調査Ⅲ期として開始した。丘陵裾の微高地には集落域を検出し、延べ3面の調査を実施した。「E-2区」は遺構が密集している北半部を西側と東側に分けて測量を行った。平成17年2月にはさらに西側の「E-3区」にも着手した。

Ⅲ期調査は平成17年度にも継続し、「E-2区」の古墳時代と弥生時代の集落面を調査した。9月には丘陵上の「F区」を人力掘削により調査した。同月、調査を完了した「E-2区」西側へ現地プレハブを移転し、調査区東端を「E-4区」として11月より調査を開始した。平成17年度のⅢ期調査は「E-2区」と「F区」を完了し、残る「E-3区」と「E-4区」は次年度に継続することとなった。

平成18年度は、Ⅲ期調査の最終年度である。「E-4区」と「E-3区」は引き続き集落域の調査が行われた。「E-3区」は10月に北東部を一部拡張している。11月より現道があった部分を「E-5区」とし、「E-4区」寄り「E-5区①」、「E-2区」の南側を「E-5区②」と設定した。集落は古墳時代と弥生時代の面を調査し、延べ3面の調査が3月に終了した。「E-4区」は中世、古墳時代、弥生時代の各面で畔を検出した。各調査区とも3月までには現地調査が完了し、順次、中日本高速道路株式会社に引き渡しを行った。

各調査区の空中写真測量の成果については図9～20に掲載した。図9は古代、中世～近世までの遺構全体図(1:2,000)である。図10～20は各調査区、または遺構が集中しているブロックごとの遺構図である。図10～17は集落域の遺構(1:200)、図18・19は「A-1区」、「A-2区」水田域の遺構(1:

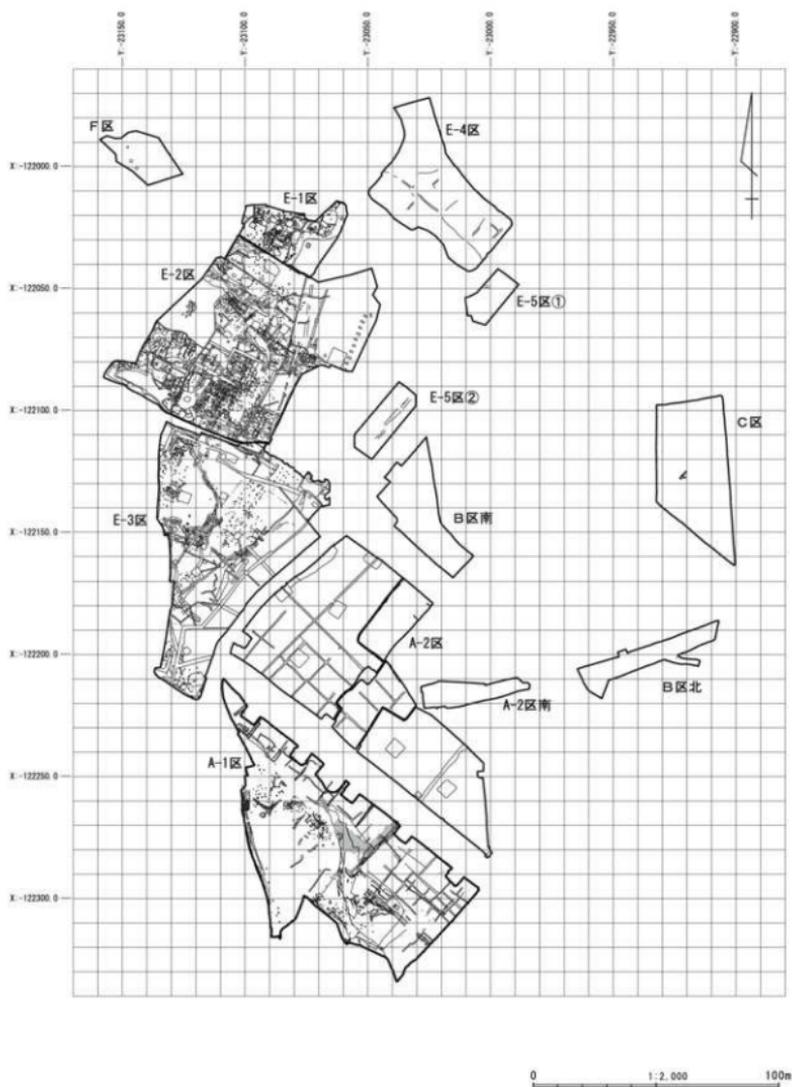


図9 全体図

500)、図 20 は「E-4 区」水田域の遺構 (1:400) である。

2. 確認された層序と遺構

寺家前遺跡の基本層序については、第 1 章第 4 節 - 4 で示したとおりである。第 1 章では主に水田域の場所ととらえた土層により、基本となる層序について解説してきた。ここでは、今回報告する古代、中世～近世の遺構が見つかった集落域の層序と、各面ごとの遺構を整理する。また、水田域で確認された条里地割をもつ水田が見つかった経緯についても解説する。なお、資料整理段階での検討から得られた各々の所見については、第 2 章第 2 節以降に詳しく述べる。

中世～近世の調査は、平成 15 年度に実施した確認調査その 2 の結果をもとに、同年、表土層を除去して土器等が含まれている包含層を掘削するところから始まった。調査に際して基準とした層序は図 26 に示した通りである。V 層上面で検出した遺構群は図 9 である。しかし、平成 19 年度以降の資料整理の段階で、各遺構から出土した遺物を調べたところ、中世と近世の遺構が重複していることがわかった。出土遺物を検討した結果、この検出面を「上層 1 期」と「上層 2 期」とに分けることにした。「上層 1 期」は近世の陶磁器類を伴う遺構とし、戦国時代から江戸時代にかけての時期幅を持つ。一方、「上層 2 期」は山茶碗を伴う中世前期段階の遺構群を指している。

「上層 1 期」の遺構群は図 21～23 のとおりである。遺構検出の経緯については第 2 節 - 2 遺構の広がり」と区分の項で詳しく触れている。「上層 1 期」の遺構は、掘立柱建物と井戸、墓、道路遺構、自然流路等である。各遺構については第 2 節 (1) 上層 1 期の遺構の項にまとめている。この他に水田域では A-1 区で井戸や畔、溝を検出した。

「上層 2 期」の遺構群は図 25・26・31・35 に示した。検出した遺構は、掘立柱建物と区画溝、柵列、井戸、墓、道路遺構、自然流路等である。特に集落域では、区画溝や柵列で囲まれた掘立柱建物群を伴う屋敷地が 3 箇所存在することがわかり、資料整理の段階でそれぞれ 1 群・2 群・3 群とした。各遺構については第 2 節 (2) 上層 2 期の遺構の項で詳しく解説している。この他に水田域では A-1 区、E-4 区、E-5 区①・②で畔や溝が見つまっている。

水田域に条里地割をもつ水田があるのではないかと指摘されたのは、平成 13 年度の現地調査が始まってからのことである。当年は本調査 1 期として、低地部の A-1 区と A-2 区の調査を同時進行で行っていた時期である。両調査区とも 2 面調査の予定で工程が組まれていた。初めに A-2 区で条里地割に伴うものと思われる大畔を検出し、その方向が A-1 区の南西側に向かっていたことから、その前年度に行われた確認調査その 1 の試掘坑の土層断面を、再度、確認を行った。A-1 区では中世の山茶碗が多く出土した道路遺構を記録調査しており、その解体をしながら A-1 区の西壁土層断面上で A-2 区から続く大畔を確認した (図 41)。さらに南壁土層断面でも大畔の位置を確認できた。これにより調査期間を延長して、条里地割をもつ水田面の掘削調査を決定している。

奈良～平安時代の遺構は、水田域で条里地割をもつ水田が見つかったが、集落域では当該期のはっきりした遺構は見つからない。なかには律令期の須恵器が覆土内から出土した遺構もあるが、遺構面としてとらえられるほどの数ではなかった。寺家前遺跡では古代の遺構は少なかったが、西側に隣接する衣原遺跡では、半谷川に面する微高地上に奈良～平安時代の堅穴住居が数件見つまっている。また 2 基発見した横口付炭窯もこの時期に属する遺構と見ている。

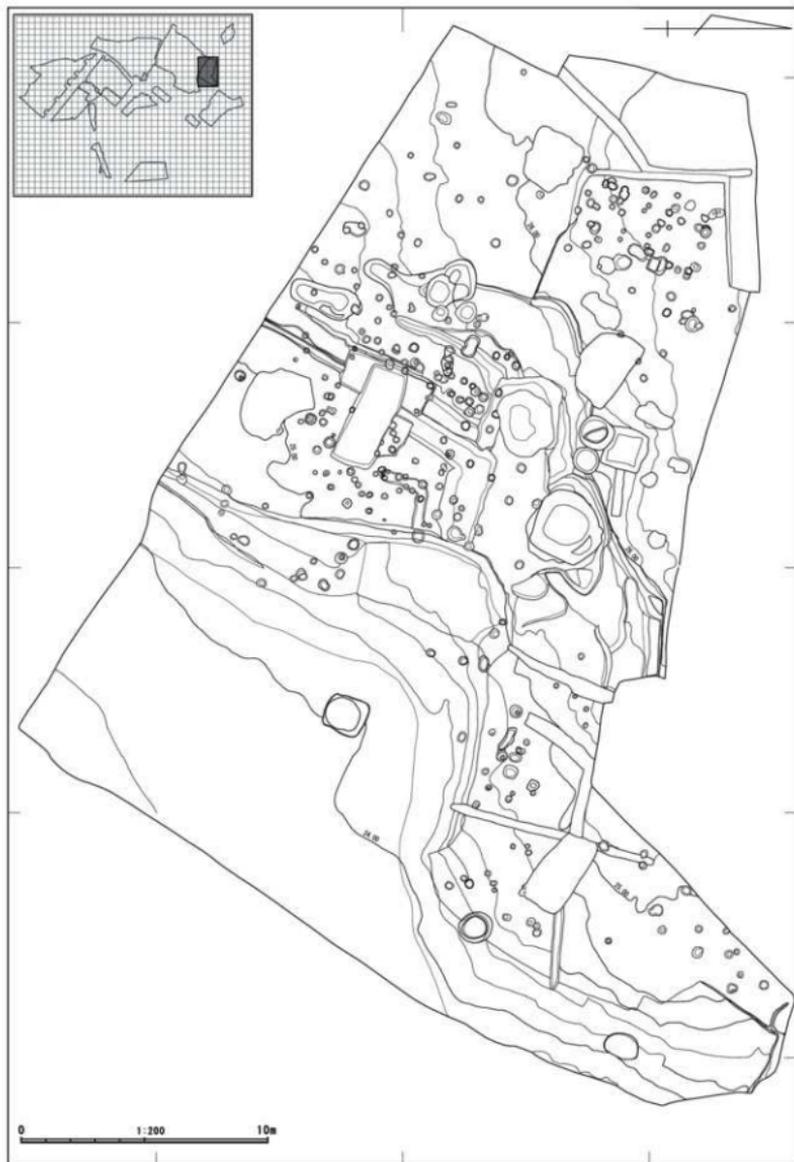


図10 遺構全体図1

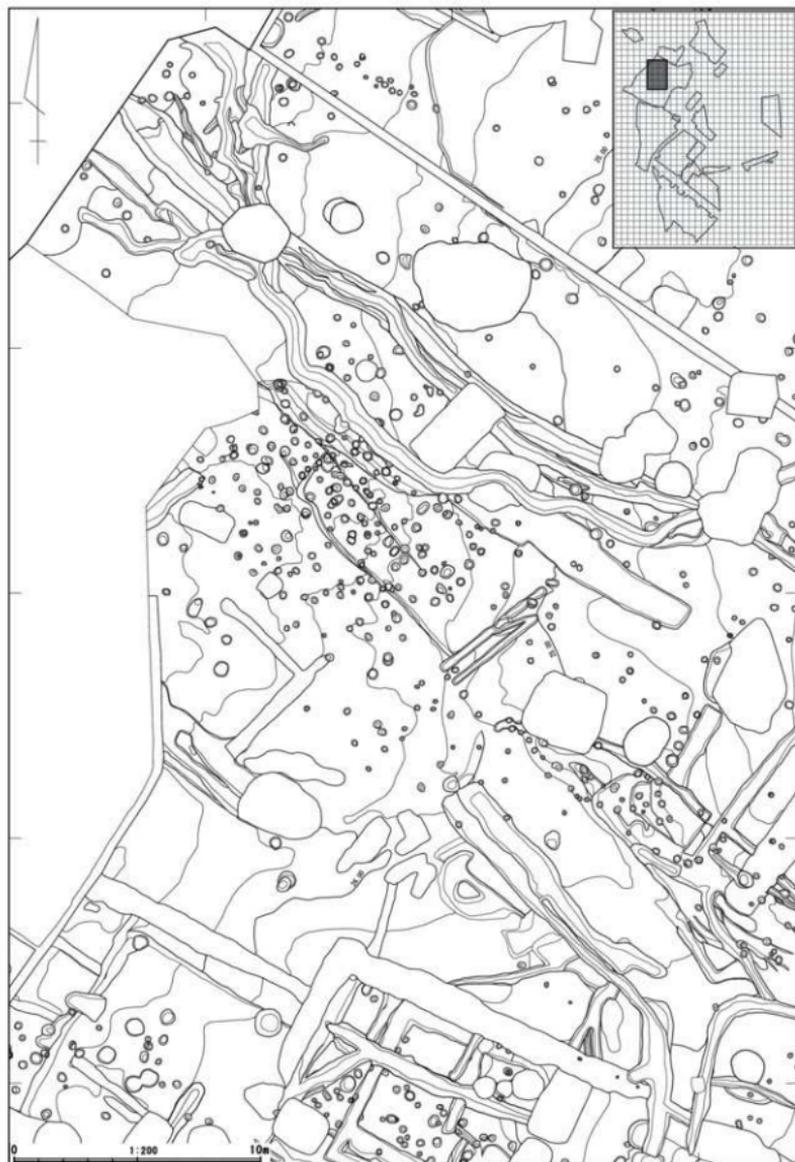


図11 遺構全体図2



図12 遺構全体図3

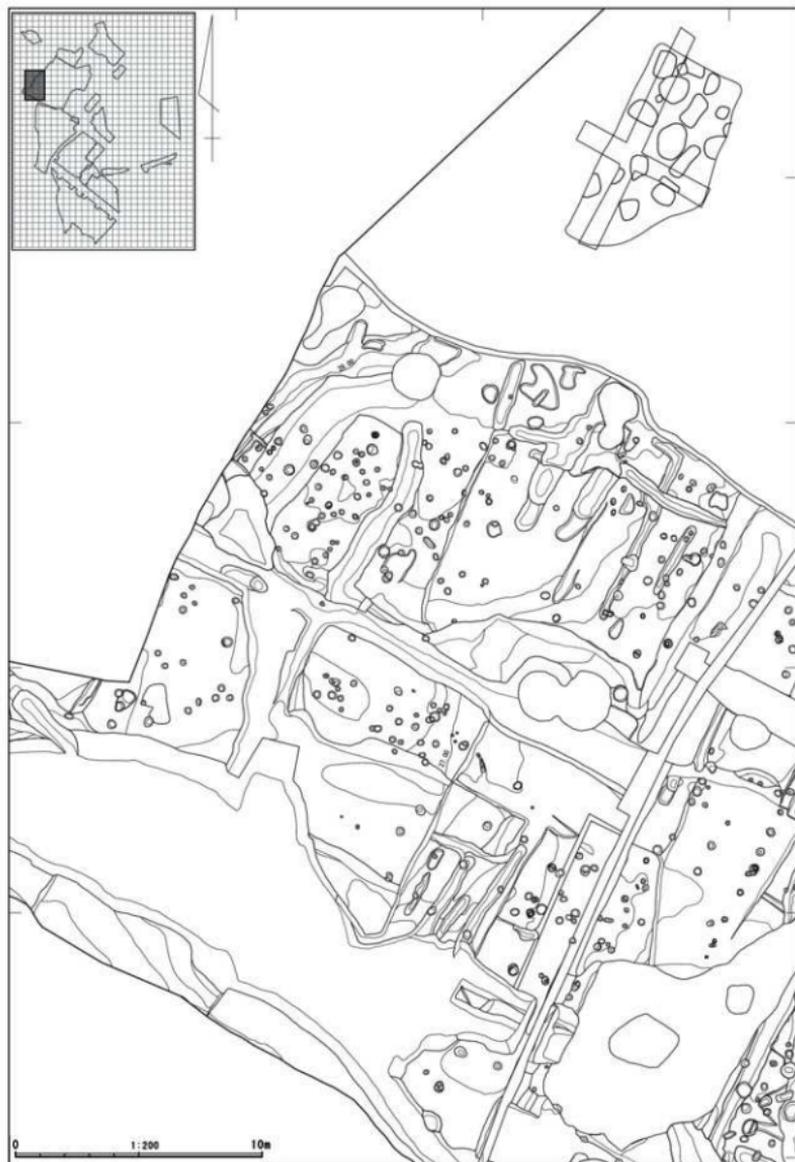


図13 遺構全体図4



図14 遺構全体図5

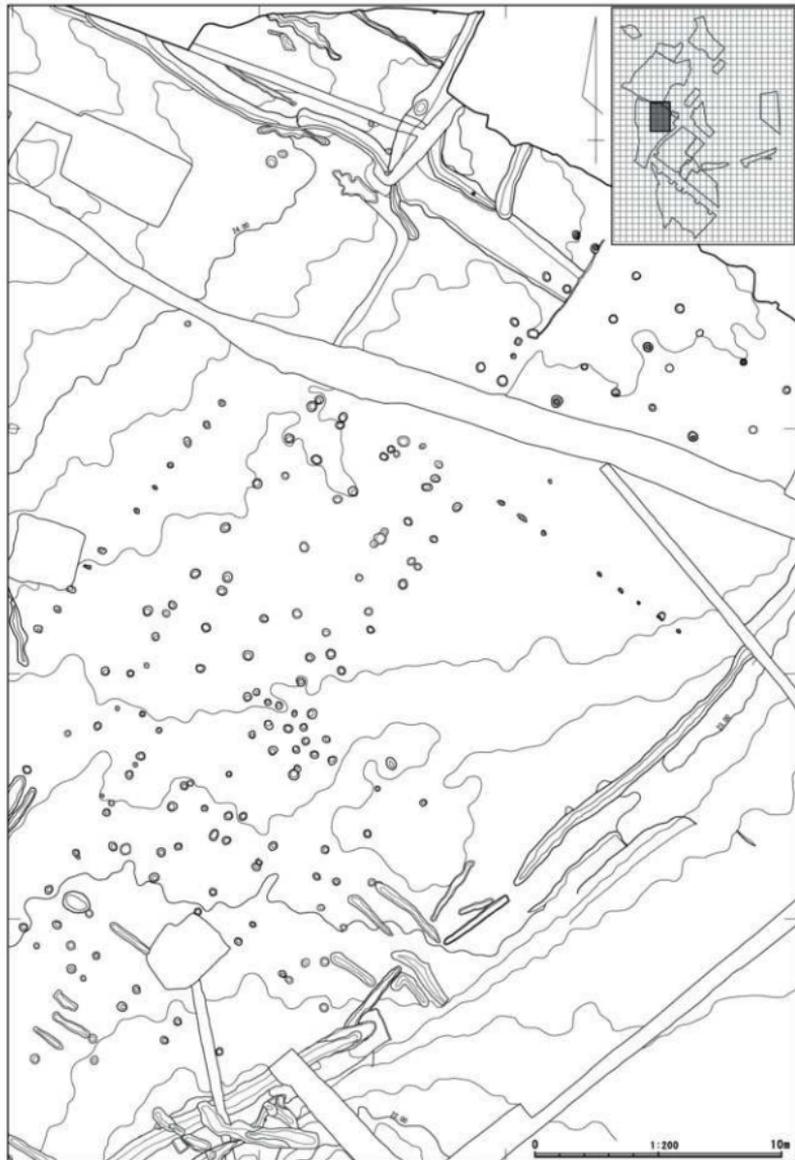


図15 遺構全体図6

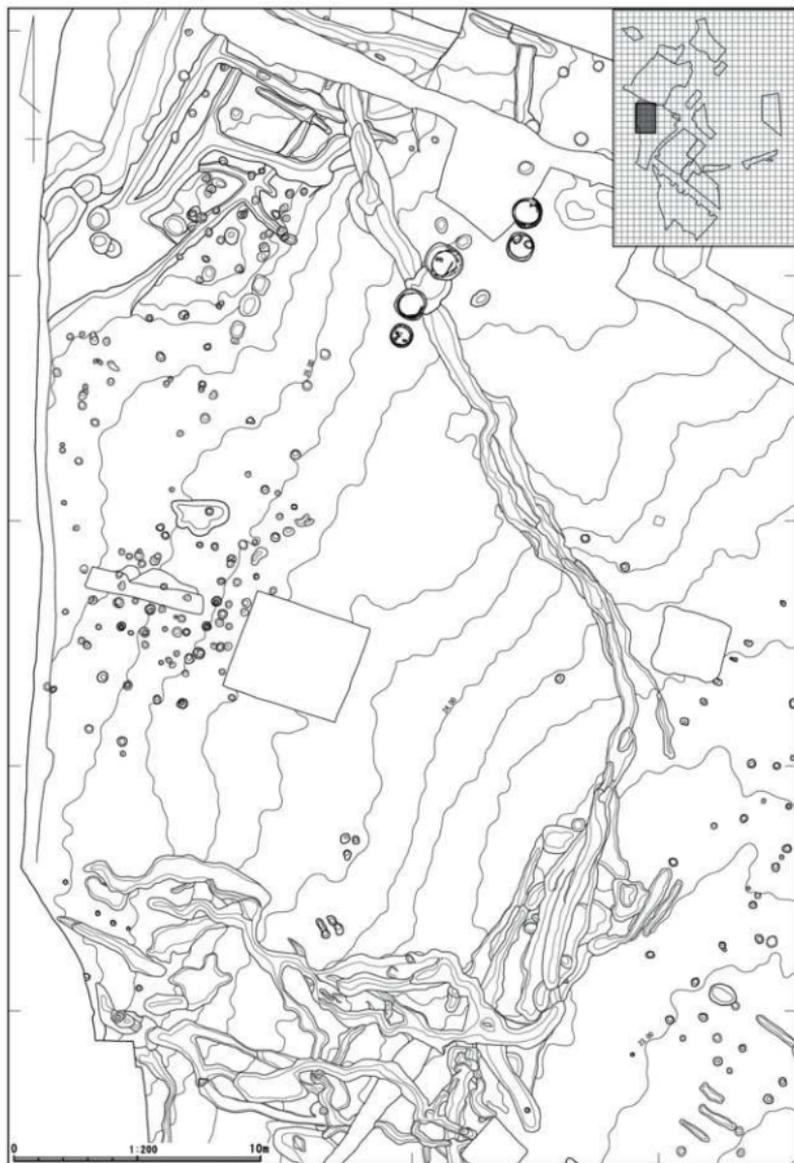


図16 遺構全体図7

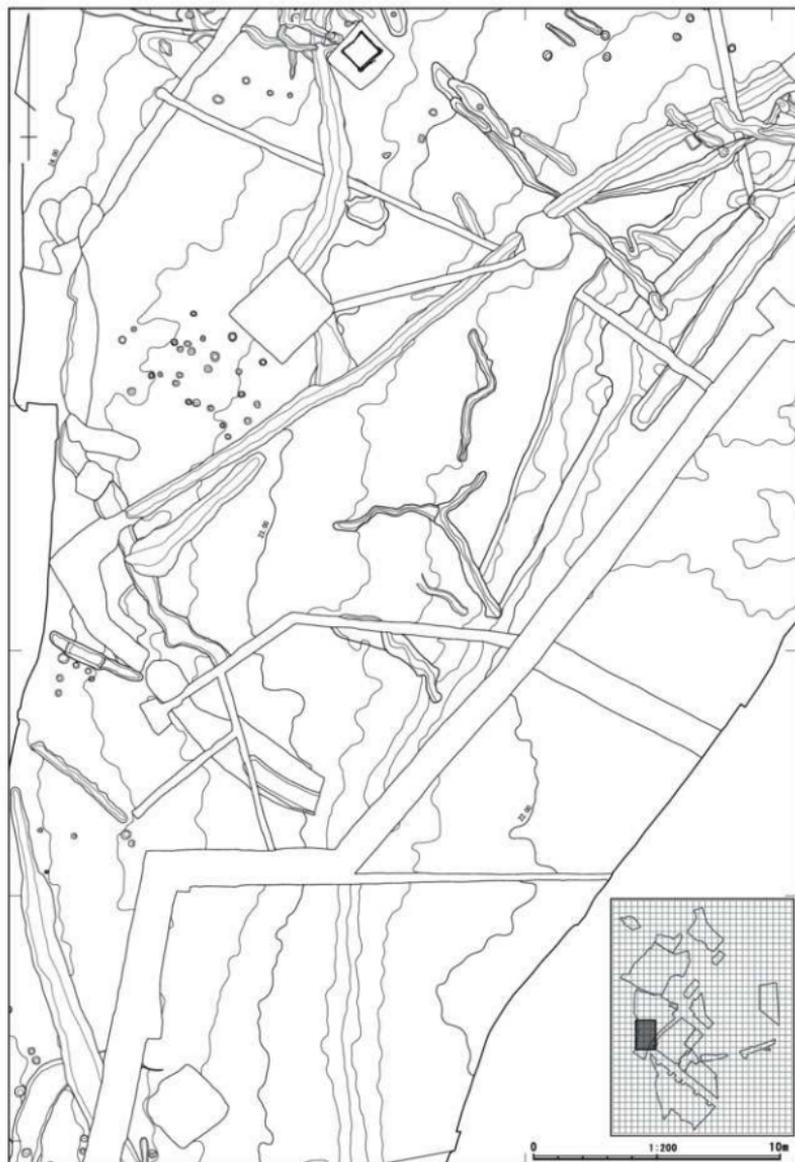


図17 遺構全体図8

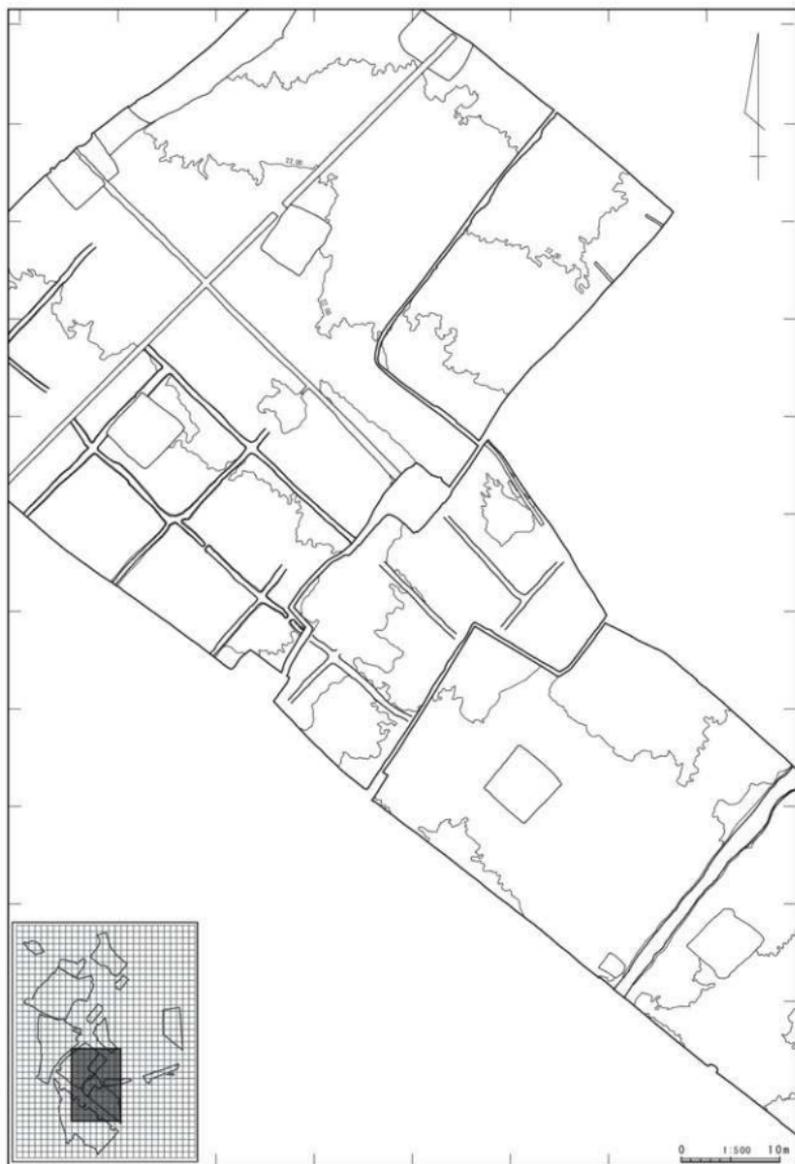


図18 遺構全体図9



図19 遺構全体図10

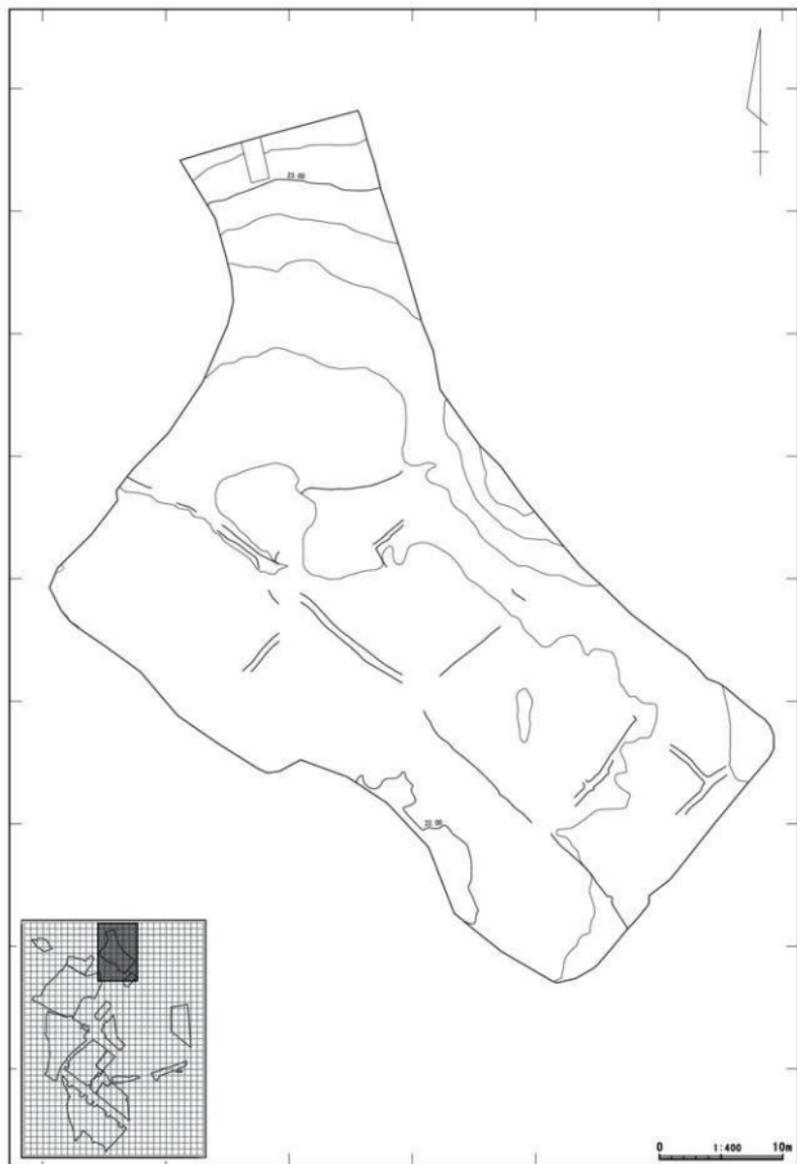


図20 遺構全体図11

第2節 古代、中世～近世遺構の概要

1. 遺構の識別

(1) 遺構の認識と分類

現地調査によって柱穴・井戸・溝・墓・道・その他後世の攪乱坑など、様々な遺構が多量に確認され、発掘されているが、柱穴などの多くがそうであるように、内部から遺物を全く出土せず、時期認定の難しいものが圧倒的に多かった。長い時間にわたって営まれた遺構が、比較的長い期間をかけて、継続的に発掘されたこともあって、現地調査の段階では、例えば柱穴が1つの建物遺構としてなかなかまとまらなかったように、遺構として認識できなかったもの、あるいは遺構の時期および性格が明らかにならなかったものの数は決して少なくはなかった。

したがって、現地調査終了後、遺構の分布図を中心に再検討の機会をもつことになった。資料整理の初期の段階ですべての遺構から出土している遺物の点検から始め、遺構の時期認定に勢力を注いだ。

各時代にまたがって、重複している遺跡の常で、検出された遺構からは各時代の遺物が混在して出土しているものが多いが、反対に全く遺物をもっていない小穴が数の上では圧倒的に多かった。これらの遺構を点検するにあたって、当初ごく初歩的な法則を決めて当たることとした。

1つは遺構から出土した遺物に従って、その時間を設定する方法である。当然ながら、いくつかの時代にまたがった遺物を出土する遺構は最も新しい遺物の時代に属することとした。具体的には、

- ① 近世の遺物のみが出土している遺構は近世の遺構。各時代の遺物が混じっている場合でも、近世の遺物が含まれていれば、その遺構は基本的には近世の遺構である。もちろん後世の攪乱によって後から入りこんでいる遺物もあるわけだが、その場合には遺構の位置・規模など他の遺構との関係を考慮して定めることとした。
- ② 中世の遺物までで終わっている遺構は基本的には中世の遺構である。
- ③ 古代の遺物のみが出土した場合は古代の遺構とした。

したがって、より古い段階の遺構とされたものの中にも新しい段階のものが含まれている可能性は残っている。このことは個々の遺構を検討する場合に問題になった。特に掘立柱建物の場合には時期の異なる柱穴が1つの建物として組み合わせになる場合があった。中には柱穴が重複している場合もあるし、現地調査の段階での認識に問題があった可能性も含まれており、再検討が必要になった。

2は、幸い寺家前遺跡では遺構群が上・中・下の3層に分かれて検出されていることから、中層・下層の遺物（弥生時代・古墳時代）のみを出土した遺構は、時期不明の遺構と同じ扱いにして、上層部分での検討では二次的資料とした。

3は、検出された遺構の多くが遺物を全く含んでいないことである。特に掘立柱建物柱穴では遺物が出土した柱穴は全体の1割程度である。他の9割近い遺構を無視して建物群の復元あるいは遺構群の性格を考えることは現実的ではない。したがって各調査区で時間的な比率を割り出し、遺物のない遺構をそれに従って割り振ることを行ってみた。たとえば、E-3区中央部分（2群の遺構群）では柱穴は252個で、遺物を出土した遺構は25個、すべて山茶碗を出土した中世の遺構である。したがって、ここでは検出された遺構は基本的にはすべて中世の遺構と考えることとした。また、E-3区の西側（2群遺構群の西区画）では柱穴203個に対して近世の遺物を出土した柱穴は16個、山茶碗など中世の遺物を出土した柱穴は6個であった。遺物を全く出土していない柱穴は181個になり、このうち73%を近世のもの、22%に当たる40個を中世のものと仮定した。

こうすることによって、この区域に近世の掘立柱建物だけではなく、少なくとも個々の遺構の一部には中世の掘立柱建物跡の存在することを推定できるし、柱穴の様子から、それらは、さほど大きな建物ではなかったことが読みとれることになった。こうすることによって中心部分の2群とした掘立柱建物群を囲む区画溝の外側に、小さな掘立柱建物が数棟存在したらしいことを理解できた。同様な操作を各区で繰り返して、その遺構群の時期と規模あるいは性格を推定することにした。こうして抽出した建物群のあり方から遺跡の性格を検討することにした。

(2) 遺構の識別

現地調査によって掘立柱建物(柱穴)・井戸・溝・墓など様々な遺構が検出されてきているが、井戸跡と後世に耕作などによって深く攪乱された穴、あるいは区画溝と西側の丘陵からの水の流れによって作られた流路の跡などの識別はかなり難しかった。数多くの柱穴を組み合わせると掘立柱建物を認定することも難しい作業である。多くは現地調査時に認定されてくるはずのものであるが、今回の調査では必ずしもそうならない例も含まれている。特に中世の建築遺構は、ある意味では発掘調査で見慣れている古代あるいは古墳時代の掘立柱建物よりも建物の構造が複雑になっているだけ、その認定は難しい例が多い。

井戸は現地調査段階では井戸枠が明確に残っているものだけが井戸と認定され、底まで抜かれているものは井戸ではなく攪乱穴とされてきたものが多かった。しかし、従来の発掘例でも素掘りの堅穴だけで井戸枠が残っていない井戸、あるいは「素掘り」そのものの井戸の例が決して少なくないこと、また民俗例でも井戸を廃棄するときには井戸の底まで抜く例が報告されていることから、その位置を再検討してみると、近世の井戸は中世の山からの流路あるいは区画溝の上、さらにはこれに隣接しているものが多く、中世の井戸には古墳時代の流路の上に位置しているものが認められた。

たとえば古墳時代後期の流路で、中世には、すでに大半が埋没していたと考えられるSR8280の上には中世のSE8769あるいは井戸枠が良好に残存するSE8036が作られていたし、近世の井戸であるSE8680・SE8608・SE8637等が、やはりこの埋没した水路の上につくられていることがわかった。こうした事例は他の区でも同じであった。これは前代の流路がすでに埋まって、表面からは明らかではないが、下部では水脈が残っており、この上に設定した井戸からは水が出たことによると考えてよい。したがって、攪乱穴として処理されてきた土坑を下層の流路あるいは溝との位置関係で整理し、本来「水が出たはずだ」と思われるものは井戸遺構として認定した。最下部まで掘り返されているものは井戸の廃棄に伴って井戸の底まで抜き取っていることを示していると考えている。

また、区画溝と山からの流路の関係は山からの自然流路が複数に枝分かれして流れているのに対し、区画溝は直線に掘られているものが多いことに注目して区分した。さらに区画溝も山からの流路を掘り直して使用している場合もあること、あるいは区画溝が廃棄された後に流路の水が流れ、自然の流路に復したことがあることなど様々な場合が推定されている。

2. 遺構の広がり区分

上層の遺構群全体を上層1期と2期との2つに大別した。1期としたものは主として近世の陶器を伴う遺構であり、多くは戦国時代から江戸時代にかけてのものである。したがってその年代幅はかなり広い。2期としたものは、主として山茶碗を伴う遺構で、中世前期段階のものである。

工事に先立つまでは、この遺跡の上に数軒の民家が建てられており、表土層は基本的には民家の土台などととともに、土木機械を使って掘削除去した。したがって後世の土地利用によって、攪乱されている

部分の多い中世後期から近・現代の遺構は大半が表土層として除去されることになった。しかしこの段階の遺構でも深く掘り込まれた部分は発掘調査によって検出されており、記録されている。それらが上層1期の遺構としたものである。現地調査の段階では攪乱坑として処理されたものが多い。

(1) 上層1期の遺構

ア. 遺構の位置と広がり

上層1期の遺構は調査区全体に疎らに広がっているが、その分布を細かく観察すると、遺構が集中している部分が何箇所かに認められる。E-1区には掘立柱建物とSR3871に掘り込まれた井戸が集中しており、E-2区の北側に、SD3839の上層に井戸、またE-3区北側のSR8280の上層にも井戸の集中している区域がある。E-2区南側とE-3区の東側には墓が集まっている。後に触れるところであるが、

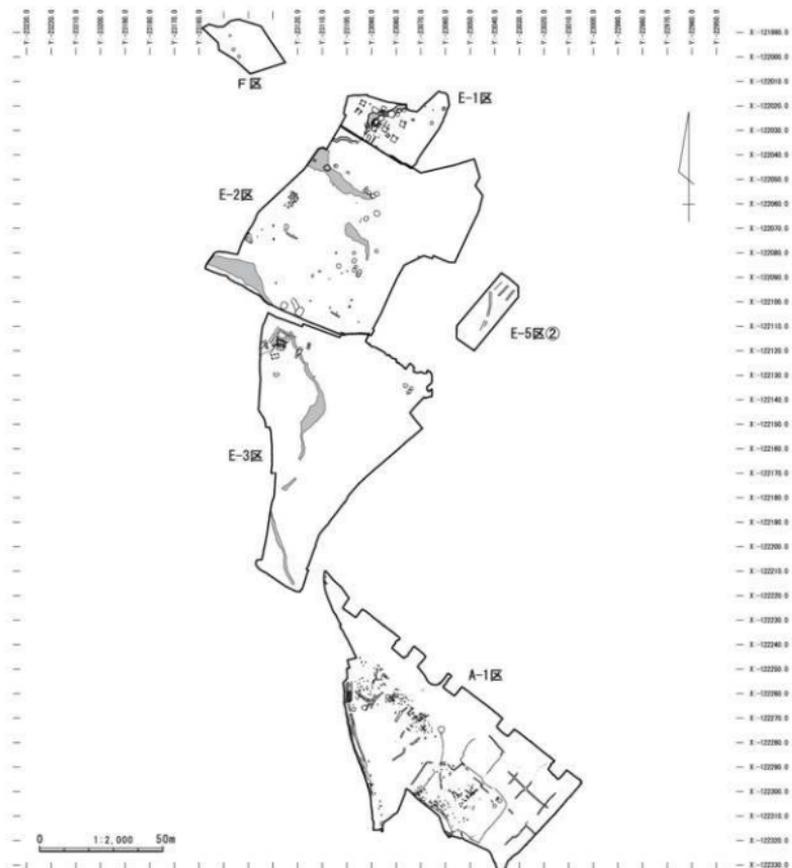


図21 上層1期全体図



図22 上層1期遺構配置図1

E-2 区の墓には中世後半のものが多く、E-3 区の墓は近世のものである。

こうした遺構の分布を中世後半から近世にかけての遺物の分布と比較したのが図 101 である。色の濃い部分は遺物量の多いところである。調査区の北側に当たる E-1 区から E-3 区の北にかけて陶磁器の集中している部分がある。掘立柱建物が検出されている E-1 区、井戸が発見されている E-2 区北側、さらに E-2 区南側から E-3 区北側にかけて遺物が集中していることが理解できる。また、A-1 区の中央から南側にも遺物の集中域がある。当然のことながら水田域の B・C 区には陶磁器の出土はごく少ない。A 区の北側に遺物の出土が多いのは E-3 区を削平した土が東側に押し出されていることによるのかもしれない。いずれにせよ、遺構のあった場所に遺物の出土が多いことが明らかであり、検出された遺構が比較的多かった区域にかつての居住区が設けられていたことは明らかである。

以下、遺構ごとに説明しよう。

(ア) 掘立柱建物

位置

調査区全体の広い範囲に柱穴が認められているが、集中して検出された部分は少なく、現状では 2 つの建物群が抽出されているのみである。確認された建物はすべて掘立柱建物で、現地調査の段階では明確に一棟の建物と認識されたものはなかったが、細い柱穴が集中する箇所が確認できることから、図上で復元すると比較的小さな掘立柱建物群を推定できる。

いずれも冬場の風上に当たる西側に丘陵を背負い、東側に広がる平坦面との変換点（東側の山裾）に営まれている、山裾で確認された路（A535・536・537、図23）に沿って、家屋が散在する村の様子の一部が復元できよう。

掘立柱建物1群

調査区の最北端に当たるE-1区を西から北東方向に流れる自然流路のSR3871（図22）の周辺に1間×2間あるいは1間×1間の小さな掘立柱建物が何棟か検出されている。これらの掘立柱建物は多くが一辺2mほどのいずれも非常に小型の建物で、通常の住居とは差がある。

SR3871から西側にある建物（SH101・102）は、柱穴が激しく重複しているのに対して、東側の建物は柱穴の重複が比較的少ない。柱穴が激しく重複している建物は、いずれも同一の規模で、同じ場所に何回かの建て替えをしていることが理解できる。同一規模で建て替えられたことは、かなり長い期間にわたって、この建物の規模さらにはその性格に変化のなかったことがうかがえる。建て替えが少なかった後者は比較的信託時間が短かったことが推測できよう。後者には、柱穴から近世の土器を出土しているものがある。様子が異なる両者の間に時期差があるのかもしれないが明確にはできなかった。また、上屋の構造はよくわからないが、母屋に当たる柱と壁の位置が同じであること、壁沿いに狭い間隔で、何本かの柱があることなどから、この建物は壁体で屋根を支えていた側柱の建物であろう。現地調査の段階では2間×4間あるいは2間×2間ほどの規模の建物を推定していた箇所もあるが、柱の位置がかわず、確認できなかった。

掘立柱建物2群

これらSH202からSH204の時期を直接示すものはないが、近世の水路に重なっていること、SE8918以下の近世の井戸とごく近い位置にあること、さらにはSH202に伴う柱穴から近世の遺物を出土することなどから、これらをいずれも近世の掘立柱建物と考えている。

この他に、A区で検出されている井戸（SE532）に伴って比較的細い柱穴が検出されている。周辺に広がる上層2期とした中世の建物群との識別ができていないが、この井戸に伴う近世の掘立柱建物が存在していることが推定されている。

(イ) 井戸

調査区全体に、疎らに井戸が確認できる。E-2区・E-3区では集中して検出されている。いずれも前代の区画溝あるいは山からの水路（埋没していたはずである）に重複して作られており、同一地点で何回かの掘り直しをしていることから、結果として井戸は同一の場所に集中して作られている。それぞれをE-2区・E-3区井戸と呼んでいる。

井戸は素掘りのものが多く、いずれも比較的浅い。特に上層が削られていることから、発掘調査では井戸底だけが確認されているものすらある。E-2区はほとんどが素掘りの井戸であるが、E-3区には井戸の底に曲物の側板を使った集水施設が作られているものが多く、あるいは他の群の井戸より丁寧に作られているといえるかもしれない。井戸の周辺には掘立柱建物あるいは柱坑が発見されているものがある。特にE-3区では近接して掘立柱建物を検出しているが、これらの建物群と井戸の関係は把握できなかった。

検出された井戸はいずれも浅いものが多い。特に上層での攪乱が深い場合には、井戸の「側」は大半が削られ、井戸底だけが検出されているものすらある。土層の断面観察からは井戸の検出面までほぼ0.5m程度が削られていることが知られるが、いずれにせよ井戸はさほど深くは掘られていなかったことが推定できる。

E-1区井戸

調査区の東北隅で1基（SE292）が検出された。周囲には他の遺構が少なく、性格は今ひとつ明らか

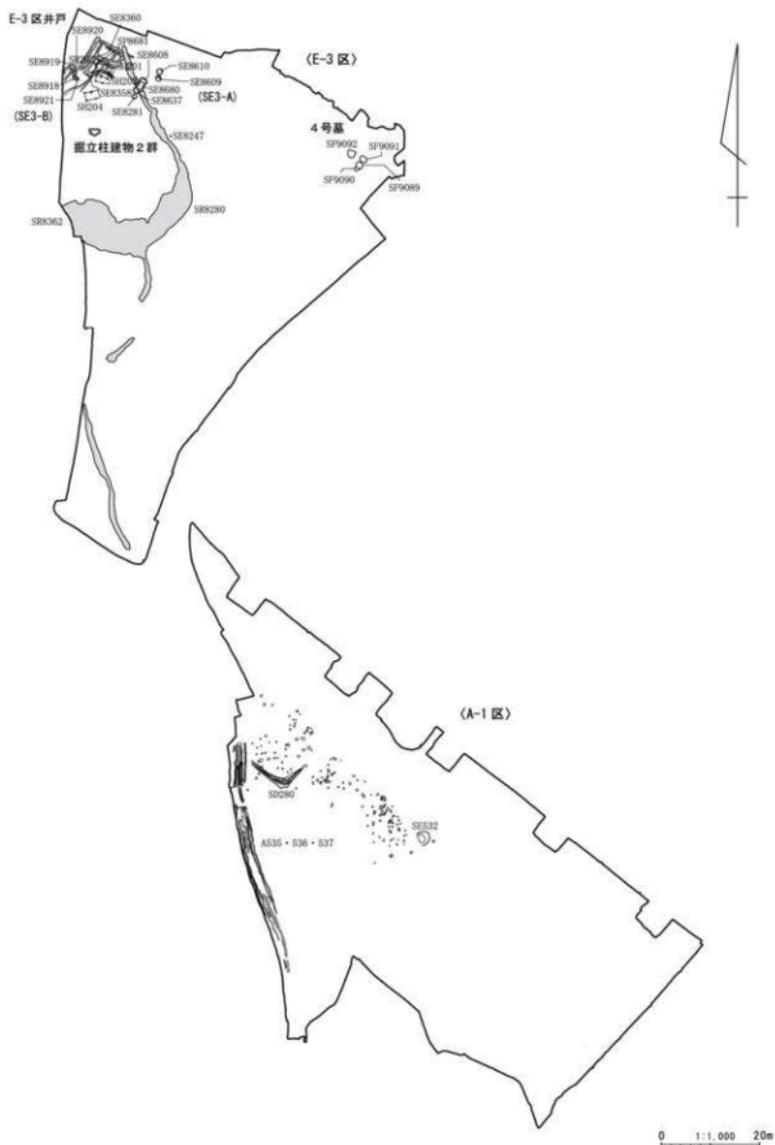


図23 上層1期遺構配置図2

ではないが、現地調査段階から「井戸」と認識してきたので、それに従っておく。

E-2 区井戸

中世の区画溝 SD3839 を掘り込んで、5～6個の土坑が検出されている。いずれも径1.5～2mほどの比較的大きな土坑である。SD3839 は上層2期の1群遺構とした屋敷地の北面の区画溝であるが、本来西側の山からの湧水の処理と東側に広がる条里水田への用水を兼ねたものであり、その方向は条里水田の畔方向と一致している。この溝(SD3839)は1群の区画を設ける時、それまで蛇行していた水路(SR3942)を改修して直線化したもので、かつての流路に沿って、溝が大きく蛇行する部分に大型の土坑が集中して掘られており、これらを井戸と推定している。土師器・山茶碗などを出土するが、瀬戸産陶器・染付を含んでおり、いずれも近世のものである。いずれも井戸枠などの施設は発見されておらず、素掘りの井戸あるいは井戸枠は全て撤去されたものであったのかもしれない。図101に示した陶器出土状況の最も濃い部分に重なっており、この部分の集落域に伴う井戸であろう。

後述する5基以外に隣接する位置にSE1820・SE1821・SE3522などがあるが、いずれも不整形の土坑で、SD3839に掘り込まれた、その位置から井戸と推定したものであるが、内部には側板など、井戸に関わる施設は全く認められていない。

E-3 区井戸

古墳時代の埋没した水路跡であるSR8280に重なっていくつかの井戸が確認されている。また、これから枝分かれしているSR8362などの水路に重なっても1群の井戸が検出されている。したがって、ここには近接して2箇所井戸が集中している(SE3-A、SE3-Bとしておく)。ともに埋没した河川に重複しており、水は出たものであろう。この地点で検出された井戸には井戸枠として使用した曲物の側板が残っているもの、あるいは底に設けられた集水施設が明瞭に残っているものがある。

ほかにA-1区でも1基が確認されている。

(ウ) 墓

出土遺物・構造など明らかに墓と推定できるものは比較的少ない。検出された遺構は、略方形の土坑墓および土坑の中に棺として桶を用いたもので、いずれも土葬によるものである。棺を検出できず土坑のみのものも銭貨あるいはかわらけ等が出土していることから、これらを墓坑と推定している。確認調査の3ITrで観察された火葬墓が1基認められるが、この部分は本調査の区域外にあたっており、平面的な調査は実施しなかった。

隣接する衣原遺跡ではかなりの数の火葬墓が確認されているが、寺家前遺跡では明らかに火葬と確認できる墓坑は今回の調査区内では検出されていない。これはあるいは調査地点の違いによるもので、寺家前遺跡でも西側の丘陵地域には火葬墓が存在する可能性が大きい。

墓坑は調査区全域に散漫に広がっているが、分布の比較的集中する区域を4箇所ほど確認することができた。これらを1群墓～4群墓とした。いずれも中世末から近世につながるもので、上層2期とした建物群が廃絶した後営まれた墓である。1および3群とした墓坑群は多くが調査区外に広がっており、近世から現代に続く集落域から外れた、背後の丘陵上あるいは丘陵の斜面に営まれたもので、その区域には現在でも連綿として墓地が継続している。

検出された墓坑はすべて上層1期に伴うもので、上層2期に伴う墓坑群は今回は検出されなかった。出土した銭貨から、中世後半から近世までのものが知られている。

土坑墓あるいは桶を用いた墓でも、内部からは銅銭・かわらけなどが出土しているものが多く、葬送儀礼の存在をうかがわせるが、特別なものを副葬している墓はなかった。中には歯・骨の一部あるいは頭髪などが残っている例があった。

1 群墓

調査区の北端であるE-1区とその西側（調査区外）の丘陵斜面に墓地が営まれている。丘陵の上に設けられたF区からは墓坑3基と五輪塔が出土している。また、この付近から渡来銭のみが4枚集中して出土しており、この地点に墓坑があったのであろう。これをSF-F3とした。また丘陵端部E-2区北側ではSF1555・SF1426が検出されている。SF1426からはロクロ成形のかわらけが出土している。SF1555からは寛永通寶（新）のみが3枚出土している。したがって、これは江戸後期にまで下る墓である可能性がある。これらが1群に含まれるか否かには多少の疑問があるが、これを含めれば、1群の墓地には中世末から近世にかけての墓坑が広がっていたことが推定される。

2 群墓

E-2区110J-10グリッドを中心に大型の土坑が広がっている。土坑の中に桶の底板が残っているもの（SF1137）があること、また、銭貨を出土した土坑（SF2437）があることから、この区域の大型土坑の多くは墓坑と考えられる。SF2437からは永楽通寶が出土しており（6枚が検出されたが、錆着しており、永楽通寶以外には貨幣の名を読めたものはない）、15世紀以後のものである。また、墓坑からは、攪乱層を含んで、山茶碗から近世の陶器まで種々の遺物が出土しており、その時期は今一つ明らかになっていないが、近世陶器を多く含んでいる。2群墓とした土坑のうち、明確に桶あるいは歯などを出土したものは2基、銭貨・かわらけなどで年代の明らかなものは4基ある。やはり16世紀を中心として集中的に営まれた墓だということになろう。上層2期の建物群が廃絶した後には営まれたものであろう。

3 群墓

E-2区109G-8・9グリッドに所在する一群で、2基が確認されているが、隣接する区域には西から張り出した丘陵上に現在まで続く墓域が広がっており、予備調査の段階でも時期は明らかではないが茶毘跡が確認されている。SF2763からは永楽通寶2枚を含む渡来銭を出土しており、江戸期の貨幣は含まれていない。また、SF3089は円形の土坑で内部からかわらけが2点出土している。底は平らであり、桶を用いた墓である。この西側の丘陵部には近世墓が多数検出されている。中世後半から近世、さらにはそれ以後までの墓域が営まれていたことが理解できる。

4 群墓

E-3区130D-3グリッドを中心に土坑が集中している。いずれも不整形の土坑の中に桶を掘えたもので、桶の一部が残っているもの（SF9089）、あるいは人骨や銭貨を出土しているもの（SF9090）がある。銭貨を伴う例には文久永寶と寛永通寶（新）を伴っているもの（SF9090）があり、これらはおそらく幕末から明治初年に下る墓であろう。4群墓からは墓坑は検出できなかったが、銭貨がまとまって出土した地点が2箇所ある。出土状態から、これらも墓出土のもので、墓坑の上層がすでに削り取られた結果だと理解している。これらをSF-E-3-1・SF-D-3-1と仮称している。また調査中に銭貨だけが出土したものもあり、調査地点近くの墓に伴うと考えたものもある。この区域に営まれた墓坑には出土銭貨から見て、江戸後期以降のものが多い。



写真30 五輪塔出土状況

寺家前遺跡で検出された墓坑には桶を納めた円形のもの、略長方形のもの二者がある。しかし、方形の墓坑でも、内部に桶を納めたものがあり（SF1137）、墓坑の形は必ずしも棺の形を示すものではないらしい。

また、墓にはかわらけを副葬したものと銭貨を伴うものがある。銭貨は6枚の例が多い。これは六道銭と考えられるものであるが、その銭貨にはかなり

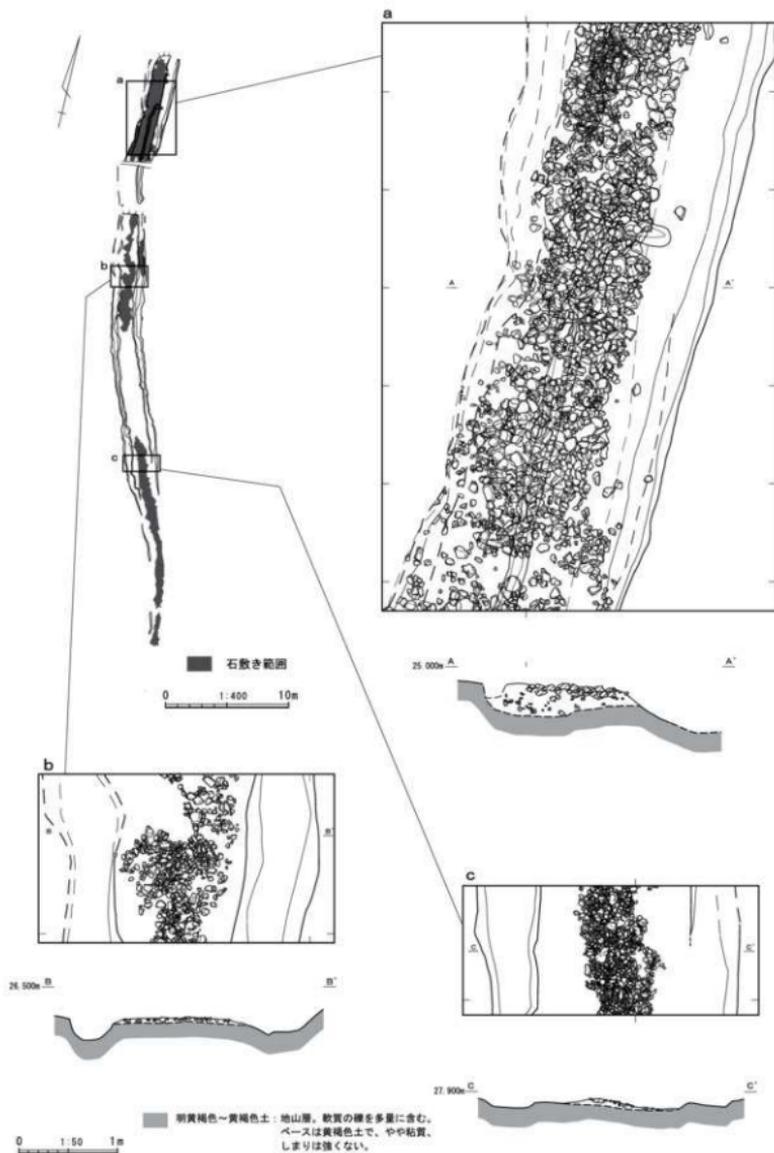


図24 道路遺構 A535・536・537

のばらつきがある。

出土した六道銭の銭貨の組み合わせには

- 1：渡来銭のみ 北宋銭+明銭（永楽銭）（SF2763）
- 2：渡来銭+寛永通寶（新寛永が伴う）
- 3：寛永通寶のみ新寛永のみのものが多い（SF1155）
- 4：寛永通寶+文久永寶（SF9090）

の4つの組み合わせが観察できる。おそらく永楽銭のみが入れられていた場合が含まれているが、SF2437のように錯着しており明らかではない。各墓坑から出土した銭は巻末の一覧に示したとおりである（表20）。出土した六道銭の様相からは江戸時代前期と後期に営まれた墓が多いことが理解できる。

（工）道路遺構

道路遺構 A535・536・537（遺構名は、現地調査で付けた遺構番号をそのまま踏襲している。「A」はA-1区の遺構であることを示すもので、道路遺構もその拡張範囲であったことから番号の頭に「A」を付けている）は、A-1区の西隅、衣原遺跡と接する場所に位置している（図18・23、図版17・18）。寺家前遺跡の西側にある低丘陵（標高35m）の東側山麓を通る道である。

当該地は当初、衣原遺跡（No.82地点）の確認調査対象地内になっており、No.82地点確認調査その1のトレンチ調査で発見した経緯がある。しかし、寺家前遺跡（No.81地点）の確認調査を経て、遺構の性格上、寺家前遺跡に統合したほうが良いとの判断から、この道路遺構までを寺家前遺跡の周知範囲とした。寺家前遺跡周辺の丘陵地は現在まで茶畑として使われていたところで、この遺構の上部も東側にある住宅地から丘陵上の茶畑を通して西側へ抜ける農道であった。

道路遺構 A535・536・537は山裾に沿って南北方向に約45mの長さに渡って伸びている。本来は前後にも道路が存在したと思われるが、後世の土地改変や茶畑の改植等で消滅してしまったのであろう。

道路面は疎らな石敷で、石敷の幅は0.5m～1.6mがある。石敷に使われている礫は、径15cm～20cm大の地山礫のほか、径10cm～15cm大の川原石が混じっている。人為的に持ち込まれて道路面に敷き詰められたのは明らかである。石敷もかなり密に敷かれているところと、礫が全くないところがある（図24）。敷き詰められた礫は必ずしも平坦面にはなっておらず、かなり表面の段差が激しい。また礫の堆積が深くに及んでいる場所もあったことから、何度か道路面の修復を行っている可能性がある。上面の単大礫下には径2～3cm程の小礫層がある。この層は地山層とは異なる黄灰色土である。黄灰色土層は客土の可能性もある。また、石敷の中に杭列が2列確認されている。

道路幅は1.2～1.7mほどあり、道路面の標高は低いところで24.8m、高いところでは29m以上ある。道路面の両側には側溝を持つ。側溝の中心間で約2mの幅がある。西側の側溝は地山層を掘り込んでいる。側溝の幅は30～70cmほど、深さは5～10cmと、ごく浅い溝である。東側の側溝も同様に掘り込まれているが、一部、攪乱を受け、消失してしまっているところもある。また東側の側溝には、一部、石敷の礫が流れ込んで集積している部分もあった。

出土遺物は、石敷面と側溝内から土器の小片が出土している。土器は山茶碗段階から始まっており、時期幅は中世末から近世、さらには近・現代の陶器までと幅広い。種類は山茶碗と小碗、搦鉢、鉢、古瀬戸の瓶、青磁碗などがある。陶磁器には近世志戸呂焼の製品も含まれていた。

道路が構築された年代を示す手掛かりが少なく、今のところ、最も年代の古い山茶碗段階が始まりであろうと見ている。ただし、当初から石敷の道路であったかどうかについては、検証のしようがなく、明らかには出来なかった。石敷の道路が使われていた時期幅は、出土土器の年代から中世末から近・現代まで、かなり長い期間にわたって使われていた可能性がある。

(2) 上層2期の遺構

ア. 遺構の位置と広がり

2期は山茶碗段階の遺構群で、溝で区画された掘立柱建物群が広がっている。掘立柱建物・区画溝・柵・井戸などからなる遺構を、その位置と区画溝を手懸かりに3群に分け、それぞれ1～3群と名付けた(図25)。1群と2群は隣接しているが、3群は南側にやや離れて設けられている。1・2群の区画は西から東に緩く傾斜する地形に合わせて、東西方向より南北方向が長く、中心の建物はいずれも東面している。西側に丘陵を背負い、東側には眼前に広がる水田域をもった遺跡の立地条件は、上層1期とした近世の集落の立地・景観とも良く似ている。3群とした区画は水田を一部埋め立てて整地した上に営まれている。2群および3群の区画は方向・位置ともに周辺に設定されていた条里地割に規制されており、2群の東側(正面)の地境溝(SD8185・SD9067など)は確認されている条里大畔(SK583)に平

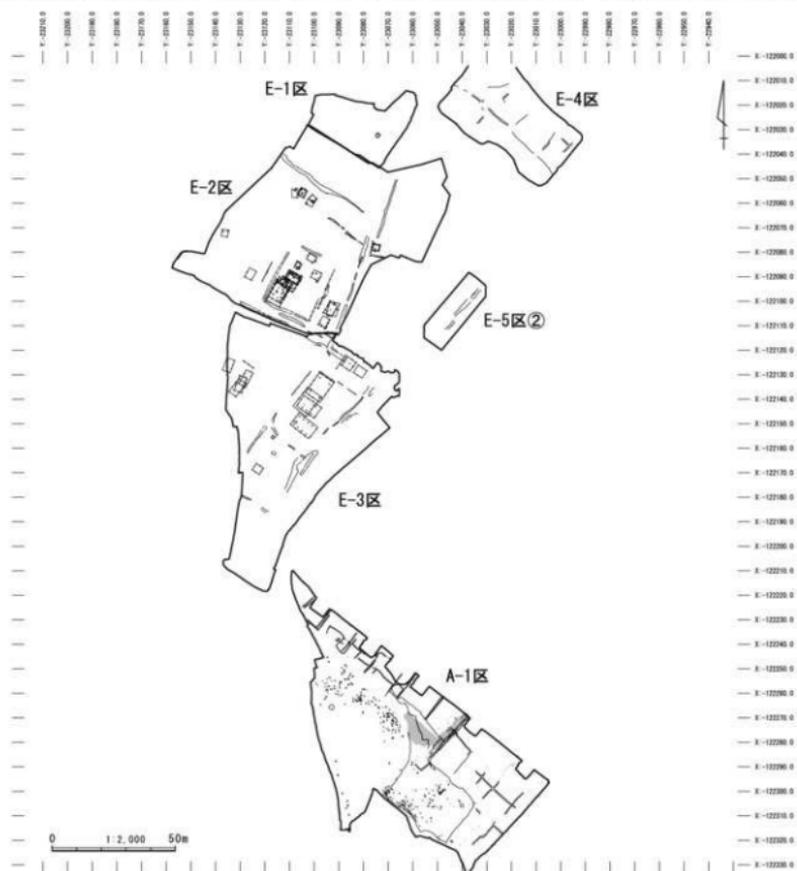


図25 上層2期全体図

行し、南面地境の溝（SD8927）も条里区画の方向と一致している。また3群の区画は山裾の傾斜地を削り、水田を埋めて整地している。その東面と南面も条里区画の方向に従っている。したがって2・3群の区画は遺跡の前面に広がる条里地割の規制を受けていることが明らかである。また、1群の区画溝の方向は条里地割の規制から外れているが、これは1群の区画が水田からやや奥まった丘陵の裾部に位置していることによるものだろう。しかし、外郭北面とした溝（SD3839）は条里地割の方向に沿っており、さらに区画内にもこの溝に平行する溝（SD101）が一部分検出されている。この溝は区画の拡大あるいは整備に伴って掘り直されたものであろうが、本来は条里水田に伴う水路の一部として利用されたものであろう。

各群ともに区画内には何棟かの掘立柱建物が建てられている。したがって、この溝で区画された部分の一つ一つは屋敷地で、検出された掘立柱建物はこの期の屋敷の様子を示しているものと考えてよい。寺家前遺跡にはこの時期3組の屋敷があったものと考えているが、区画の位置、確認された柱穴の数あるいは掘立柱建物の密度の差など遺構の様子からは、1群が早く、2群・3群はそれにやや遅れて出現するものと考えていたが、出土した遺物を見る限り、その差はさほど大きくはない。しかし、屋敷の位置だけでなく、遺物の出土状態からも、3群は1・2群に比べて、やや格が下るものであったことが推定できる。区画の規模、掘立柱建物の様子はともによく似ており、それらが密接なつながりをもつことが推定される（3群では掘立柱建物を検出できなかったが、これは整地層の上で柱穴の検出が難しかったためであり、本来は当然掘立柱建物が存在していたはずである）。

それぞれの区画の内部は溝あるいは柵によって、さらにいくつかに分けられ、各々に掘立柱建物・井戸などが配置されているが、それらの掘立柱建物の規模や形態には小区画ごとに差がある。このことは、この小区画がそれぞれ屋敷の中で異なった機能をもったことを示している。

イ. 遺構群の規模

1群・2群の遺構は溝・柵で区画されており、3群は整地層の範囲としてとらえることができる。また1群・2群は外側の溝・柵の内側に内郭ともいうべき主要な建物群を囲んだ区画がある。したがってここでは屋敷全体は外郭と内郭の2つの区画からなっていることがわかる。3群は水田を埋め立てて整地した南側部分と、この北側に続く区画の2つに分けることができる。

外郭の溝で囲まれた面積は、1群は50×50mでほぼ2500㎡であり、2群は南北70m×東西50～30mと西南の隅が丘陵にかかり変形しているが、その面積はほぼ2500㎡前後である。3群は内郭部分に当たる整地層の範囲はやはり600㎡であるが、外郭は北側に続く丘陵と水田の境の狭い範囲に長く伸びている（全体で750㎡ほどである）。主要な区画である内郭の面積は3つの群ともに600㎡程の広さであり、内郭で検出された建物は外郭で確認された掘立柱建物より柱穴も大きく建物の規模も大きい。

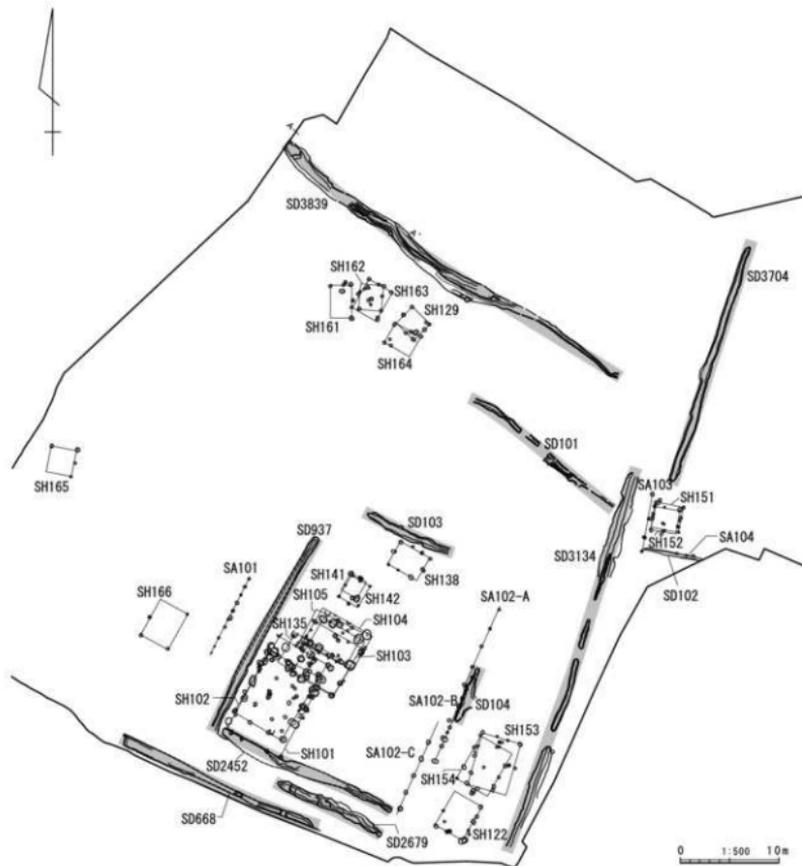
ウ. 遺構の概要

以下各群の遺構の概要を説明する。

（ア）1群の遺構

A. 区画の規模と区画溝

1群の遺構は四方を溝あるいは柵によって区画されており、区画は内郭と外郭の2重になっている。遺構群のうち、中心部分をなすものを内郭、その外側の部分を外郭と呼んだ。郭とした呼び方は必ずしも実態を示すものではないかもしれないが、主要部分と附属部分と同じ意味で使っている。また、外郭の溝は東面区画溝・西面区画溝と面を付け、内郭の溝とは別な呼び方をした。各区画には掘立柱建物が配されているが、内郭の建物が大きく、外郭の建物は柱も細く、建物の規模も小さい。外郭の溝に囲ま



確認調査その2 No.18-1トレンチ東壁土層断面図

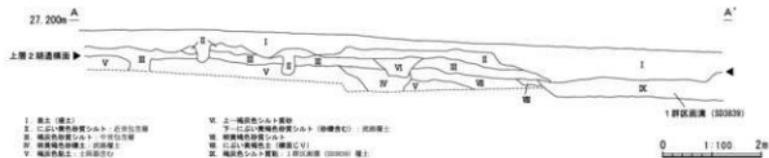


図26 1群遺構配置図

れた区域の面積は、ほぼ 2500 m²で、内郭の面積はほぼ 600 m²程である。

1 群の区画内で検出された掘立柱建物は全部で 21 棟程である。主要な建物は東面する門とその外を通る路、さらにその東に広がる水田を見渡すことのできるころに営まれている。溝はこの内郭と、外郭との 2 重に巡らされ、外郭の区画は溝・柵によってさらに細分されていることから、それぞれの区画を西・東・北区と呼んでいる。

内郭には、柱穴・溝などが密集しており、遺構は複雑に重複している。ここでは遺物を出土した柱穴(柱掘形を含む)236 個のうち、近世の遺物を出土した穴は 15 個で、中世の遺物を出土した穴は 221 個である。近世のものは全体の 6% にすぎない。したがって、この区画で検出された建物は大半が中世のものである。ごく一部に近世のものが含まれているということになる。同様な推計をすれば、西区では 1/3 は近世の柱穴であり、2/3 は中世の柱穴と推定できる。したがって西区では、内郭と比較して、近世の遺構が多いことが推定できるが、こうした傾向は西が高く、東側が低くなっている現地の微地形にも従っており、近・現代の建物は全体に西側の丘陵裾に沿ったところに営まれているものが多い。したがって、この部分では中世の遺構との重複も激しい。反対に調査区の東寄りでは近世の遺構は少なく、中世の遺構が単純に検出されてきている。遺物の出土量を比較してみても、1・2 群ともに掘立柱建物が検出された区域よりも、東側の外郭溝あるいはその外側部分で検出されている量が多い(図 116・117)。これは後世に高い部分を削って均した、現地の整地の影響を受けていることによるものであろう。

B. 外郭の区画溝

外郭の溝は東と南・北の 3 面に認められる。西側は丘陵の斜面に接しており、溝は設けられず、自然

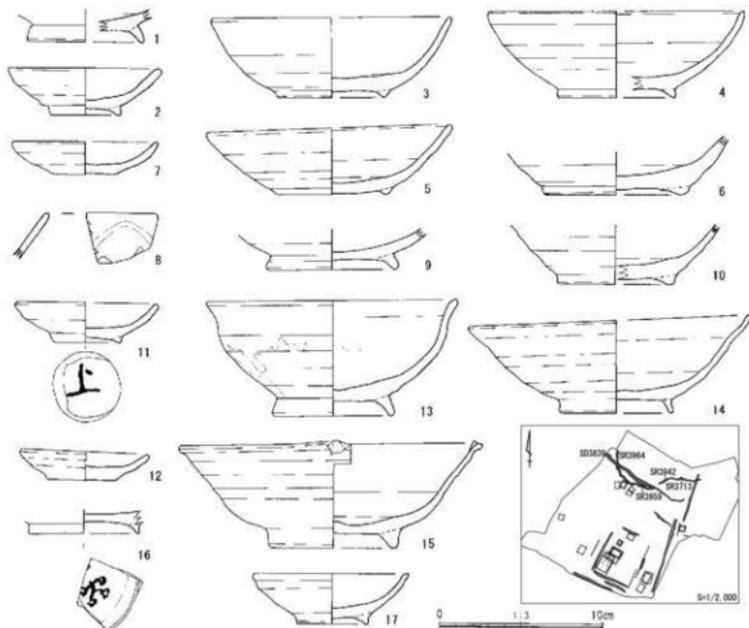


図 27 区画溝 SD3839 流路 SR3964・3959・3942・3713 出土土器

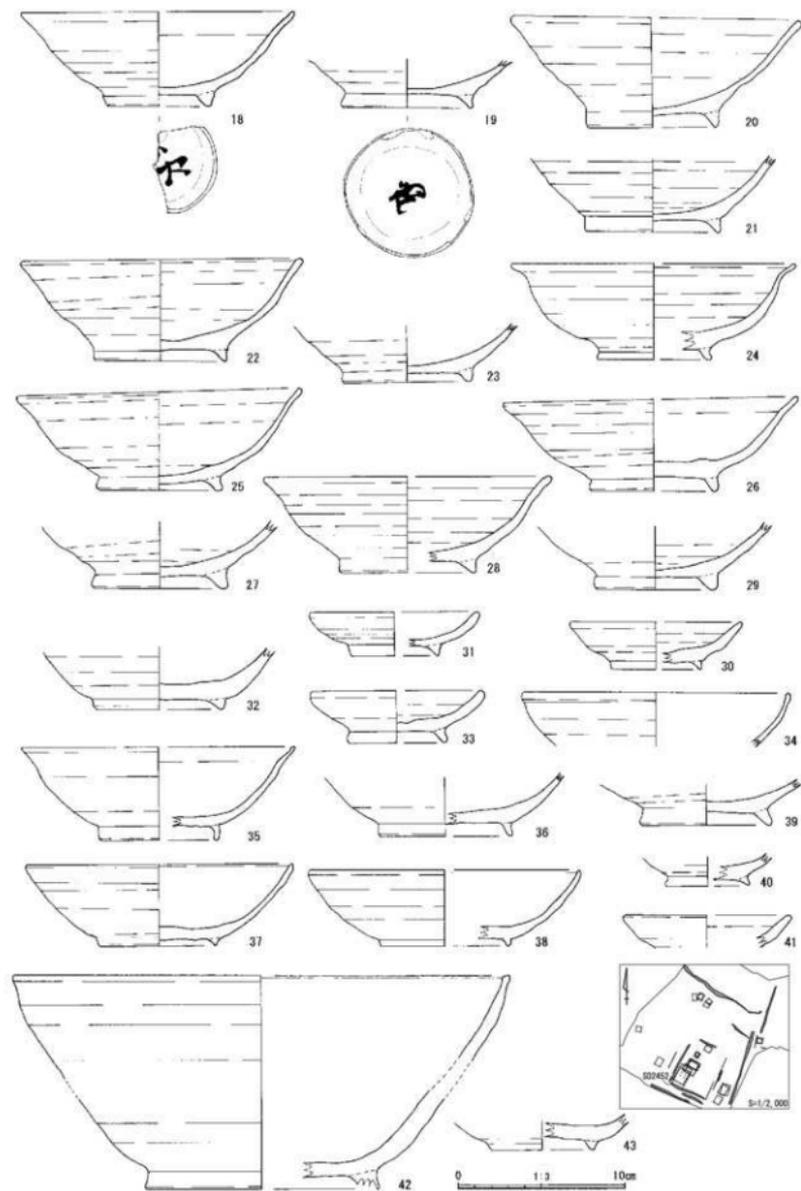


图 28 区画溝 S02452 出土土器

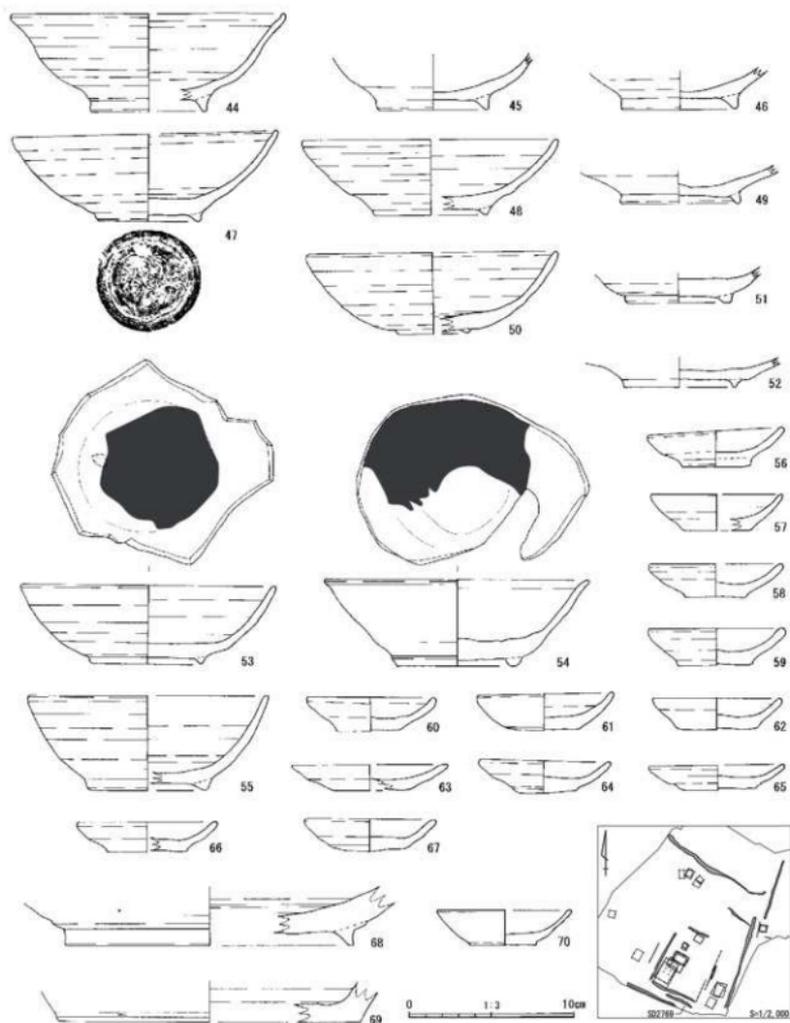


図29 区画溝 S02679 出土土器

の閉塞になったものであろう。

北面区画溝

西側の山裾から東にかけて直線に掘られている (SD3839)。幅2m、深さ1.1m、長さ40mほどが確認されている。溝の方向は内郭の溝・建物などの方向とずれて、東側に広がる条里水田の畔方向と一致

している。このため区画は全体に不正形を呈している。これは、この溝が本来は西側の斜面から引いていた条里水田に伴う水路を改修して、区画溝としたことによるものであろう。溝（SD3839）からは図27-1～6に示した山茶碗が出土している。碗（1）と小碗（2）は、山茶碗編年のⅠ期のものであり、6（893）と7はⅢ-1期あるいはⅢ-2期のものである。いずれも北面溝の時期を示すもので、この溝が山茶碗Ⅰ期からⅢ期まで機能をもっていたことを示している。また、8は編年未定をもった龍泉窯の青磁碗で、これらの山茶碗に伴ったものである。

SD3839に交差して流れるSR3942から灰釉陶器（13）あるいはⅠ期の山茶碗（9・14・15）が出土しており、この流路が、先のSD3839よりも一時期古いことがわかる。したがって、この流路（SR3942）は、北面の溝（SD3839）として整備される以前の流路であることを示しているよう。あわせて、SD3839が整備された時期をも示していると考えてよい。先に触れたようにSD3839の方向と条里水田の畔方向とは見事に一致している。SD3839が、外郭北面の溝として整備された後にも、SR3942は部分的には（溝の北側の部分）残っていたようで、山際からの排水路の機能は保っていたらしい。遺物が出土した地点の多くが西面外郭溝（SD3839）の外側であったこともこれを裏付けよう。

東面区画溝

南北方向に50m、ほぼ直線に溝が掘られている（SD3134）。北端は溝が途切れており、先の北面の区画溝SD3839とは連続していない。これは、東側では遺跡の基盤が下がっており、SD3839が東側では細くなって消えてしまうことと同様に、厚い堆積土の中で明確にとらえることができなかったことによるものであろう。SD3134の中央部分に何箇所か溝が切れている部分があり、この部分には屋敷への出入口が設けられていたものであろう。柱穴など門の構造をうかがわせるものは明らかではないが、溝の途切れた部分の内側には建物はなく、広場になっていることも、この位置に門があったことを推定させる。また、区画溝（SD3134）にほぼ平行して、北側に延長25mの範囲に溝が掘られている（SD3704）、あるいは東面する区画溝の延長であろうか。

SD3134からは図30-78に示した山茶碗底部が出土し、また常滑窯系Ⅰ期の大鉢（75）・無高台の小皿（77）、さらには、羽釜（76）が出土している。したがって、この東面の区画溝は山茶碗Ⅰ期の段階には整備されており、山茶碗の最終段階まで継続して保たれたものであろう。

さらに東面の区画溝の北側に延びるSD3704からはⅠ-1期と考えられる高台付きの小碗（79・83）、さらには同時期の山茶碗（82）などが出土しており、東面の区画が広い範囲にわたって、早い段階で整備されたものであることが理解できる。

南面区画溝

2条あるいは3条が確認できる。溝は平行しており、出土した遺物からも、それらに多少の時間差のあることが知られるが、外側（SD668）は南面区画溝、内側（SD2452）は内郭に伴う溝であったものかもしれない。平行する2条の溝の間隔は2mほどであり、ここは東西方向の通路であったものと思われる。同様な溝（SD937）と櫓（SA101）の組み合わせが内郭西面の区画にもある。

南面の区画溝は北面の区画溝と同じように、本来は山側からの排水路であったものを整備し、区画溝としたものであろう。SD668からは図30-85に示した山茶碗小皿の破片が出土しており、やはりこの溝が機能していた時期を示している。

1群からは全部で21棟の建物跡が検出されているが、各区で建物規模・形態に差がある。内郭では遺構の重複が激しく、柱穴の数に比べて建物跡と認定されたもの数は多くはなかったが、現状で建物と認定された以外にも、多くの柱穴が残っており、今後の検討によっては建物の数はさらに増えることが考えられる。遺構の密度、掘立柱建物の規模などからみて、1群内郭の建物が、寺家前遺跡の中心的部分であろう。

C. 内郭の建物と区画溝

内郭の区画溝は東・西・南・北の4面に掘られており、南(SD2452)は外郭の南面区画溝に近接している。

北側は、外郭の北面区画溝から南に25m程離れて設けられている(SD103)が、その方向は外郭の溝とは多少異なっている。この溝は部分的に検出されたのみであるが、内郭東側の柵(SA102)、西側の溝(SD937)と直交しており、以前からある自然の流路を改修したのではなく、新たに区画溝として掘られたものであろう。

西側は、ほぼ全長に溝(SD937)が設けられているが、北端は一部分が途切れている。中央部分は攪乱によって明らかになくなっているが、溝の一部は切れていたらしい。溝の西側に、これに平行するように延長10m程の長さの柵(SA101)がつくられている。この柵は先の西側の区画溝(SD937)の途切れた部分を補うような位置に設けられている。

東側は何本かの溝・柵が断続、重複していることから、それぞれに、多少時間差があったかもしれない。溝に重複して柵が設けられているが、この柵も途切れたり、重なっていたりしている部分があり、同一時期のものではないだろう。何回かの建て替えが考えられる。これらの溝と柵は東面区画溝としたSD3134に方向が一致しており、これと平行している。SA102と呼んだ柵は途切れており、それぞれSA102-A・SA102-B・SA102-Cとした。さらにこのSA102に重複している溝(SD104)も認められる。これらには重なっている部分あるいは方向が多少ずれている部分もあり、相互に時期差があるだろう。また柵の途切れた部分は出入口が設けられていた可能性がある。特に北側の部分(SA102-AとBの間)は柵の東にある掘立柱建物(SH154)の前面にあたり、屋敷地への出入口と考えるには都合がよい。またCは先に触れた内郭東側の区画溝SD2452に重複しているが、その前後関係は明らかにならなかった。

南側は外郭の南面区画溝と近接しており、SD2452およびその延長からも多くの山茶碗が出土している。図28-35は灰軸陶器であり、この他にI期に比定される山茶碗(22・25・28など)が多い。34(908)は玉縁をもった白磁碗である。出土した土器から、この溝は、最も古い様相を示す遺構であるが、同時にやはりIII期に比定できる山茶碗(37)も含んでおり、この遺跡の全期間にわたって機能していたことを示している。18・19はともに底部外面に墨書されているが、文字の判読は出来なかった。

SD2679は3条が平行する南面の溝の中央に位置するもので、現地調査では東側半分が確認できたに過ぎず、西側は攪乱されており、検出されていない。おそらく、さらに西に伸びていたものだろう。図29に示したように、ここからはI-2期(44・45)と考えられる山茶碗が出土している。この他に47・48・50など、III-1期に含まれる山茶碗も多く含まれており、この溝も長期間にわたって機能したものであることを示している。51(899)は胎土からみて、瀝美産の山茶碗であろう。53・54(892)は内面に煤が付着している。

図28-35に示した灰軸陶器には注目する必要がある。後でも述べるように、寺家前遺跡からは少量ではあるが、後半期の灰軸陶器が出土している。多くは包含層からの出土であり、遺構からの出土が確認できたものは少ないが、ここに示したものは南面の区画溝(SD2452の延長)からの出土であり、これによって、1群の遺構の形成時期を灰軸陶器の段階にまで引き上げることが可能になるかもしれない。

P-3463は口縁部をやや外側に引き出しているが、細めで、やや高い高台を持っている。猿投のO53段階以後のもので、造りの特徴から遠江産の灰軸陶器であろう。

内郭には数多くの掘立柱建物が確認されている。SH101は5間×3間と比較的規模の大きな東面する建物で、この区画の中心的な位置を占める建物である。これに隣接するSH104は棟方向がSH101とほぼ直角に交わっており、両者が組み合わせになって機能を果たしていたものであろう。これと同様にSH102とSH105も位置・棟方向ともによく似たあり方を示している。東面する規模の大きな建物と、こ

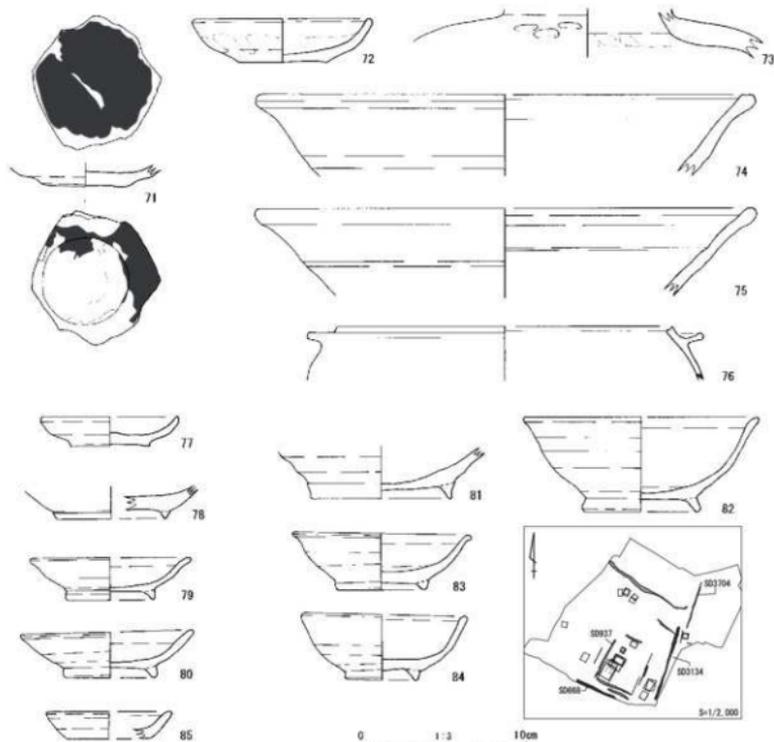


図30 区画溝 S937・668・3134・3704出土土器

れ隣接し、棟方向が直交する建物の組み合わせは、後述する2群の中心的な建物であるSH207・SH208あるいはSH207-2とSH209と良く似たあり方を示している。この建物の組み合わせは、いわば母屋と脇屋といったようなあり方を示しており、これが中心部分の建物群の中核をなしているもので、この屋敷の中心をなす建物であろう。建物の規模も大きく、他の建物に比較して柱の掘形も大きい。

D. 外郭と区画溝

東区

東区には南北2群の掘立柱建物がある。門の存在を推定している溝・櫓の途切れたところを境に、その南側の建物群（南群）と東面の外郭溝の外側に位置する建物群（北群）とにわけて考えることができる。南群では3棟、北群は櫓（SA104）の東側に2間×2間の倉庫風の建物（SH151）がある。両者ともにさらに数多くの柱穴が検出されており、建て替えられたものを含め、検出されたもの以外にも掘立柱建物が存在することを推定できる。

西区

SA101と呼んだ櫓の外側に掘立柱建物が2棟確認されている。いずれも規模の小さな建物で、SH166

は2間×2間の南北棟の建物で、SH165も2間×2間の倉庫風の建物である。周囲に柱穴が多く残っていることから、ここでもさらに掘立柱建物が増える可能性があるが、一部で近世の墓あるいは建物の存在も知られているので、山茶碗段階の建物は比較的散漫であったのかもしれない。

北区

区画の北端、SD3839に近接して5棟の掘立柱建物が検出されている。いずれも1間×2間あるいは2間×2間程度の小規模な建物であるが、中世の遺物を出土する柱穴が卓越する区域であり、この期の遺構と推定している。建物は重複しており、棟方向にも統一性はない。同じような規模の建物が多く、1群内郭の建物群の主に附属する建物群だと考えている。同じように小規模な建物が集中する2群の西区の建物群と共通するものであろう。以上のように1群とした建物群では中心的な内郭の建物群と東・西および北の区画に小規模な建物群の存在を認めることができた。建物群個々の性格については明らかにならなかったが、主要な建物である内郭とその他の区画では大きな違いがあり、外郭の建物群には倉庫など様々な性格のものが含まれていることが想定できる。

(イ) 2群の遺構

A. 区画の規模と区画溝

2群も周囲を溝によって囲まれ、その内部もいくつかの溝・柵によって3つ、さらに西側を含めれば4つの小区に分かれることになる。それぞれ内郭・北・南・西区と呼んでいる。

外郭東面は溝とその前を通る通路を介し、東側に広がる水田に面している。1群遺構のやや南東に隣接しており、標高もやや下がったところにある。また、全体に遺構の重複も少なく、1群に比べて遺構の検出は容易であった。

検出された遺構が比較的疎らな状況と合致して、遺物が出土した柱穴25箇所は全て中世の遺構であることから、近世の遺構はこの部分にはほとんど及んでいなかったと考えることができよう。また西側の柵列(SA201)の外側にも掘立柱建物跡が確認されている。

2群の区画溝の方向は東側に広がる条里地割の方向に一致しており、図39に示したように前面の調査区(E-5①区およびE-5②区)で検出された溝(水田畔に伴う水路SD10228)は水田大畔(SK583)から109mほど離れた位置にあり、その方向にも一致していることから条里水田の大畔に伴う水路であることが推定されている。東面の区画溝(SD9067)はこの大畔から10mほど西側に離れたところ(内陸側)に、大畔に平行して設定されている。また、南面の区画溝(SD8927)は大畔(SK556)と平行し、それより北側に40mほど離れた所に位置している(図39)。

さらに中心の建物SH207-2の棟方向あるいは建物群の西面の区画をなす柵(SA201)の方向も条里方向に一致している。したがって2群とした屋敷地は建物を含め東側に広がる条里地割を意識し、その地割に従ってつくられていることが知られる。

2群の遺構は区画溝と柵列から、やはり内郭・外郭の2つに分かれており、外郭はさらに南・北および西の3つの区画に分けることができる。内郭の中央には東面する大型の掘立柱建物(SH207)を中心に、これに付属する東西棟の掘立柱建物(SH208)と、これに重複して同じような規模の建物SH207-2、およびSH209とがある。これらが2群の中心的な建物で、SH207とSH208、SH207-2とSH209との組み合わせになる2組の建物で、一組はその建て替えに伴った姿であり、1群と同様に、東面する母屋とこれに直角に位置する脇屋というあり方を示すものであろう。

これらに伴って井戸・倉庫風の建物からなる南区、東柱を持った倉庫風の掘立柱建物他からなる北区などの建物群と、さらには柵列SA201を越えた西側に所在する規模の小さな掘立柱建物(西区)とがある。したがって、この4群で一つの屋敷を構成していたものであろう。内郭の掘立柱建物(SH207-2と

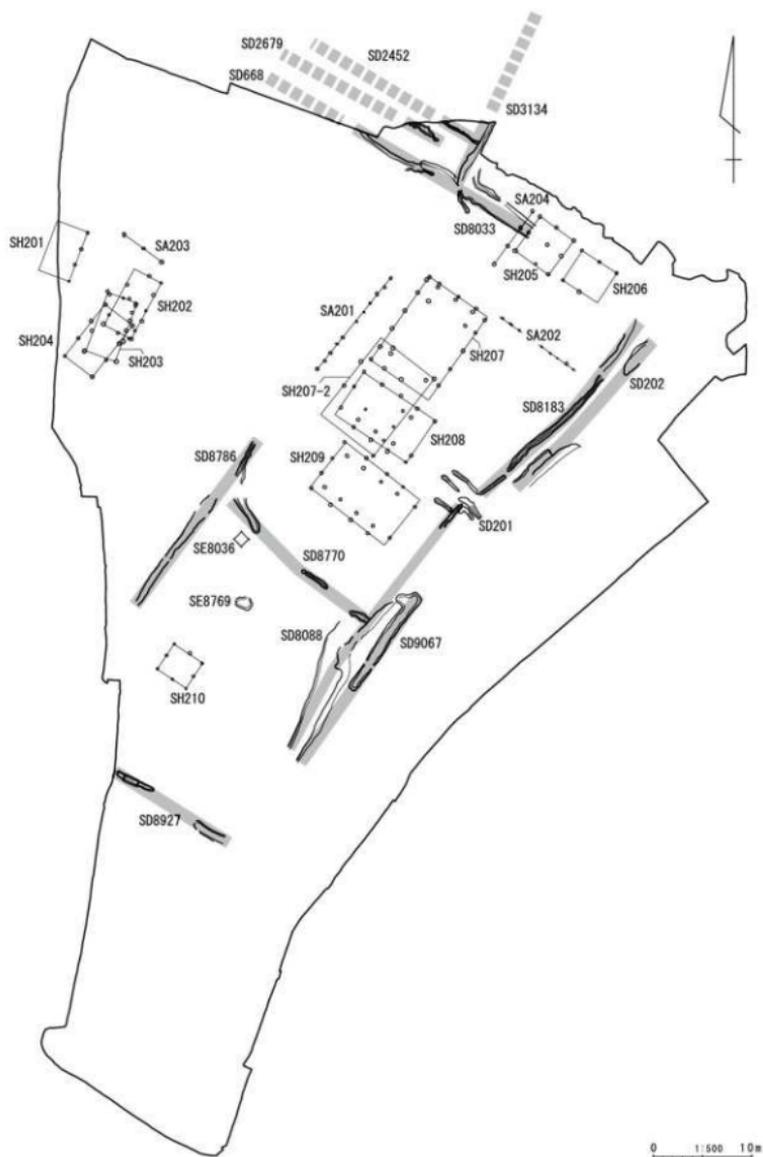


図31 2群遺構配置図

SH209)の棟あるいは側柱の方向は条里水田の方向と一致している。また、西側の柵列 SA201とも棟方向が一致(あるいは直交)しており、これがこの建物群の当初に建てられたものであろう。SH207およびSH208はSH207-2・SH209の建て替えに伴うものであろう。棟方向に多少の違いがあるSH207-2では柱穴が充分検出されていないが、これは調査段階でこの建物の存在を想定できなかったこと、大型の建物の内部にあたるため、検出にあたって十分削平することを止めたためであろう。SH209が存在することから、確認されている柱穴が多少少なくても、SH207-2の建物の存在は推定してよいだろう。

区画の規模

東・南の2面が溝で区画されている。西側は山裾まで、北側を調査区いっぱいまでとすれば、全体は70×50mほどで、一部変形していることを考慮しても2500㎡を超す広さになる。

また、内郭は北側と西側が柵、東と南が溝で区切られており、南北30m×東西20mのおよそ600㎡の広さになる。この広さは1群の区画の規模と大きな差はない。

さらに井戸を含む南区は400㎡、北区は未調査区域もあるが、ほぼ200㎡を数える。これらに西区を加えて、全体の面積ということになる。

B. 外郭の区画溝

北面区画溝

北面の位置は調査区外になるようで明確ではないが、多くは1群の南面区画溝と重なっている。1群の南面区画溝(SD668)の延長に当たるSD8033が、2群北区の掘立建物の下を通っており、区画溝の位置は必ずしも明らかにはならなかった。SD8033とSH205との間に重複関係があり、時期的に前後関係があったことは確かであるが、その前後は判別できていない。またSD8033は条里水田の群の方向とも一致しており、この部分は単純に1群の南面区画溝SD668の延長に当たるものではなく、2群の北面区画溝として新たにつくられたものであることが理解できる。SD8033からは図32-112に示したI-2期に含まれる小碗が出土しており、さらにこの溝に連続する1群東面の溝からも同時期の山茶碗が出土している(図30-81)。したがって、この溝が、遅くともI-2期の段階にはすでに設置されていたことが理解できる。したがって北区の倉庫が後の段階で追加されたことが推定できる。

東面区画溝

溝は部分的にしか確認できなかったが、内郭の南側に当たる部分では明瞭に確認している(SD8183)。井戸のある南区の東面では溝は一部分(SD9067)しか確認できないが、これは地形が傾斜していることによって、溝の縁が後世の耕作などによって、すでに削り取られていることによるものであろう。

区画のほぼ中央前面に溝の位置がずれるとともに、溝が途切れている部分があり、この部分には東西方向の溝(SD201)が確認されており、この部分に出入口に当たる施設が設けられていたものと思われる。ちなみに、この東西方向の溝は西面を区画する柵(SA201)あるいは溝(SD8786)とも直交しており、さらに周辺の条里地割の方向とも一致している。SD9067とこれに隣接するSD8088からは多くの遺物が出土している(図32)。

99はI-1期に属するもので、106はI-2期に、また102に示した小碗もI-2期に含まれよう。さらに、92～96の小皿はともにIII-1期に属するものである。したがって東面するSD9067とその延長溝はこの遺構群の初期の段階であるI-1期あるいはI-2期の段階にはすでに設けられて、III期にまで継続していたことがわかる。98はIII-1期に属する山茶碗であるが、底部外面に「花押」がみられる。この他にも「花押」が包含層出土の山茶碗にも認められる。所有者あるいは使用者を表したものであろうか。88の内面には煤が2箇所大きく付着しており、灯明皿として使用されたことを示している。この他に墨書された土器も検出されており、86は底部外面に「大」と記されている。

SD9067は2群の東面区画溝として機能していたことから、出土した木製品も12世紀末～13世紀初

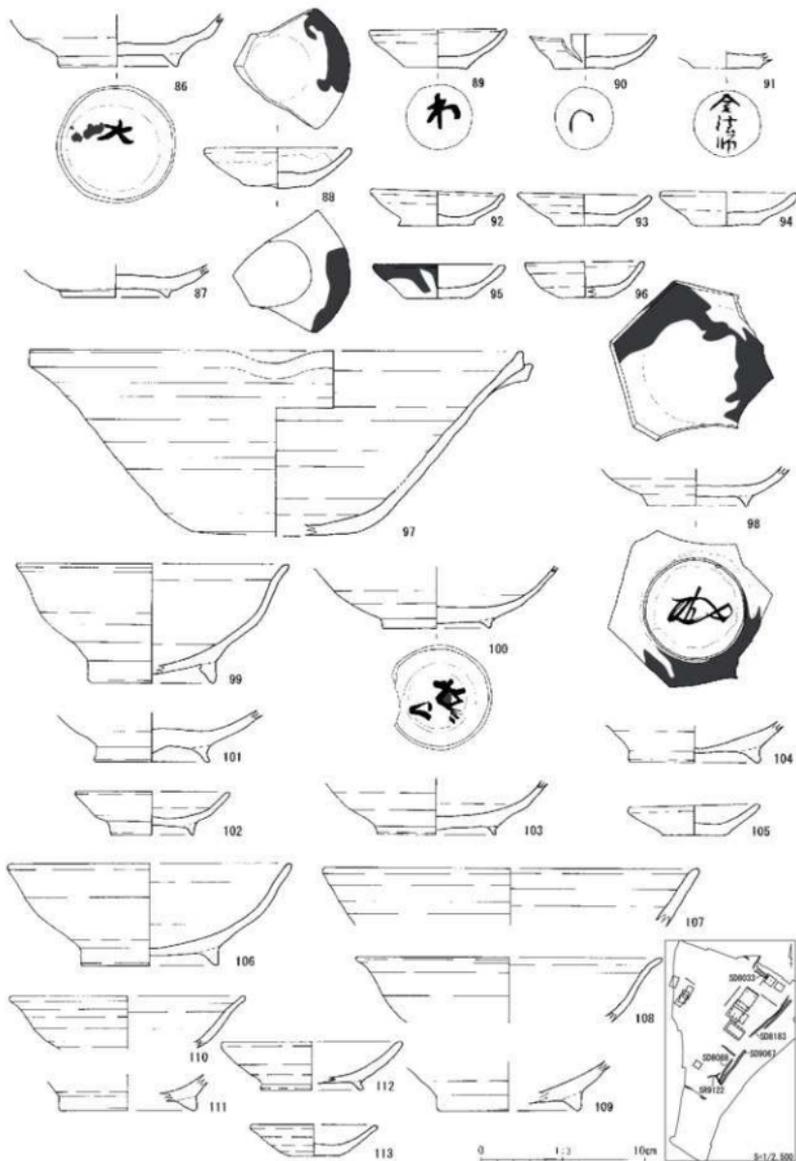


図 32 流路 SR9122 区画溝 SD9067・8033・8183・8088 出土土器

半代のものである。木製品の種類は生活用具が主体である。114・115・116は曲物の側板である。いずれもスギ材である。114の端部にはケビキが入っている。116には幅0.7cmの榫紐の緩じ跡が残っている。117は膳等の脚と思われる。中央に0.5cmの小孔があり、下面は緩い曲線状に削り込まれている。118は円形の曲物底板である。側縁部に木釘痕などの痕跡はない。大きさをからして柄杓であろうか。119はSD9067の底部付近に貼りついた状態で出土した(図34、図版24-3・4、図版47)。並んで出土していることから対になるものであろう。残存状況が悪かったため、現地調査で土ごと取り上げ、保存処理後に実測をしている。「緒(お)」は一部残っているように見え、「乳(ち)」は数箇所残っている。120はスギの柁目板で作られた杓子状木製品である。加工痕がわずかに残り、使い減りした様子はあまりない。121はクリの芯持材を加工した棒状木製品である。全面削り痕があり、上端部に向かって細く削っている。工具の柄であろうか。122は扇の骨で、親骨が1枚、子骨が3枚残っている。いずれもスギの板目材である。親骨は外側の両側面を削り、丸味を出している。長さ2.5cm、幅0.4cmの軸木も残っており、その長さからあと子骨1枚、親骨1枚の合計6枚であったと思われる。123～125は用途不明木製品である。124はヒノキの柁目材。厚さ0.3cmの薄板で先端を細く削ってある。125はスギの柁目板を加工している。側面には刃物痕や切り欠きがある。覆土7層上面では種子がまとまって出土している。

南面区画溝

SD8927とその延長が区画溝である。ここからは遺物が出土しておらず、時期は明確にはならなかったが、溝はほぼ東西方向に直線に延びており、周辺の条里地割の方向とも一致していること、A-1区で検出された水田区画の大畔(SK556)から40mほど東に当たる位置にあり、この溝が条里地割の方向だけでなく、区画を意識して設けられたものであることから、この溝を南面区画溝と推定している。

内郭と南区を区画するものにSD8770がある。東面・西面の区画溝にほぼ直交している。この溝は、本来は西側から流れる湧水を流す流路を改修したもので、山側では多くの自然流路が確認されており、改修以前の複雑な流れが確認されている。区画の西端から5mほどのところで溝が切れており、ここが内郭と南区を結ぶ通路であろう。通路の正面には井戸(SE8036)があり、その南側にSE8769とSH210がある。

C. 内郭の建物と区画溝

内郭

南区との境は溝(SD8770)、北区との境は柵(SA202)で区画されており、東側の区画は外郭東面の溝と一致している。SD8088とSD8183との間には、入り口と思われる溝の切れ目と東西方向の小溝が数本確認されている。溝によって区画された範囲はほぼ南北30m×東西20mで面積は600㎡を数える。内部の建物の数、規模からもここが2群の中心的な区画である。内部には掘立柱建物4棟が確認されており、SH207-2とSH209、SH207とSH208の良く似た2組の建物の存在を想定できる。SH208とSH209はともに東西棟の良く似た規模・構造の建物であり、位置的に近いことから、同時に存在したのではなく、おそらく建て替えによるであろう。SH207、SH207-2の2棟が建物の位置あるいはその規模からみても、この区画の中心的な建物であろう。ともに南北棟の東面する建物で、隣接するSH208あるいはSH209とは廊下でつながっている可能性がある。SH207-2とSH207は重複しており、おそらく建て替えによるものであろうが、区画の溝(柵)と棟方向が一致するSH207-2がより先行する建物と考えられる。ほかに柱穴が集中する部分があり、あるいは、さらに小型の建物の存在が考えられるかもしれない。

D. 外郭と区画溝

西区

内郭との境は溝(SD8786)と柵(SA201)とからなっている。南側部分の溝は古墳時代の水路(SR8280)と交差しながら、南端は調査区の外まで延びて、全長30mを数える。おそらく南端では南面区画溝

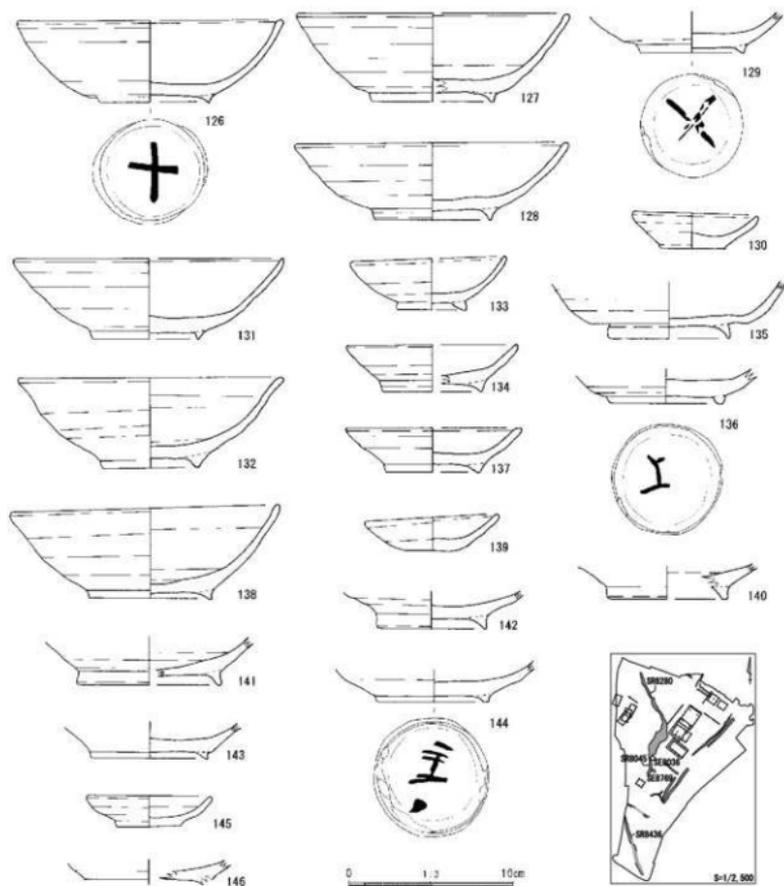


図 33 流路 SR8436・8280・8045 井戸 SE8036・169・8769 出土土器

(SD8927)に連続するのであろうが、北側の半分は槽(SA201)になっている。この部分が溝ではなく槽になっていることは北側に広がる規模の小さな建物群との関係があろう。この溝と槽の方向は先に触れたように、東側に広がる条里水田の方向と一致している。

西側は丘陵部の傾斜部分に当たっており、特別な施設は認められていない。南側は南区の区画溝であるSD8770あるいはSD8927の延長で区画されているものと思われるが、流路の跡と調査区外に当たっており明らかにならなかった。

SD8786からはI-2期の山茶碗(図33-135)が出土しており、この溝が建物群の初期からのものであることを示している。

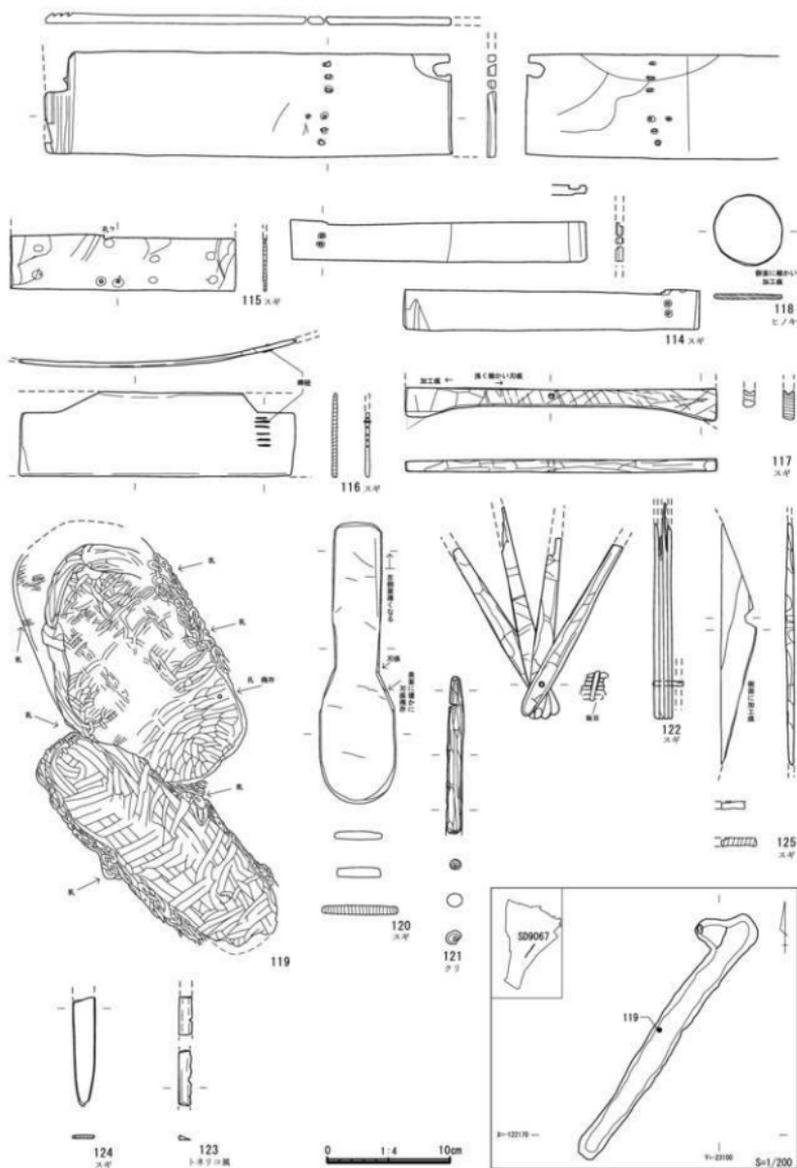


図 34 S09067 出土木製品

この区画には山裾に沿って南北棟の建物が4棟検出されている。いずれも南北方向に長い建物であり、比較的良く似た建物である。SH202からSH204は互いに重複していることから、この3棟は建て替えによるもので、同一時期には1棟が存在したものであろう。よく似た建物が調査区の端にさらに1棟認められている(SH201)。これを考慮すると西区には複数の建物があったのであろう。この建物(SH201)はSH203と棟方向が一致している。また建物群の北側に柵(SA203)があり、あるいはこの区画の北側を区画しているものかもしれない。この柵はSH204の棟方向と直交している。

北区

先に触れたように北面の区画溝は明らかにならなかったが、1群の南面区画溝の延長近くが北限になったもので、おそらく区画溝の本体は調査区の端に含まれているだろう(先に述べたように1群南面区画溝と2群の北側区画の建物群の関係は必ずしも明らかになっていないが、区画された面積がおおよそ東西20m×南北13mとすれば北区画の面積は260㎡ほどの広さというになる。

北区には掘立柱建物が2棟並んでいる。内郭との間の柵列(SA202)には中央に空間があり、この部分が通路になっていたことを示している。区画内にある2棟の掘立柱建物は、ともに2間×2間の倉庫風の建物であるが、西側のSH205は東柱を持っており、床張りの(高床の)倉庫であろう。SH206には床東は確認できなかったが、掘立柱建物の並びからおそらく東西棟の建物で、SH205と同様倉庫になろう。したがって北区は倉庫の区画ということになる。SH205の西側には建物に近接して全長7mほどの板敷あるいは柵が設けられている(SA204)。

南区

この区画には小型の掘立柱建物(床東をもった2間×2間の倉庫風の建物(SH210))と井戸2基(SE8036・SE8769)が確認されている。したがって、この南の区画は井戸を中心とした区画であろう。SE8036は方形の木組みの井戸枠をもっている(図66)。内部からは山茶碗・小皿などが出土している。図33-140～142はI-1期からI-2期段階のもので、143・144はIII-1期の段階のものである。また、小皿145はすでに高台を失っており、やはりIII-1期に属する。したがって、この井戸は建物群の形成期からその終末に至るまでの間、その機能を保っていたものであろう。

SE8769は素掘りである(あるいは井戸の廃絶時「井戸枠」が抜き取られたのかもしれない)。内部からはやはり山茶碗が出土している。138はほぼ完形品であり、器形からIII-1期に属する。136は底部の破片であるが、底部外面に墨書をもっている。高台の形から、やはりIII-1期に属するものであろう。このほかに、無高台の小皿(139)が出土している。したがって、この井戸もIII期の段階までその命脈を保っていたものであろう。両者とも古墳時代の溝(SD8045)に重複して掘られており、湧水は確保できたはずである。区画内は全体に遺構の分布は比較的薄く、その広がりも散漫である。

内郭と南区の境の溝はSD8770である。西側の山からの流路(SR8779)を改修して区画と水田の用水を兼ねたもので、SD8770は本来は東西方向につながっていたと考えられる。条里の畔方向と一致しており、南側の大畔(SK556)からの距離もほぼ70mほどである。東側はSD9067とした東面の区画溝に接続するものであろう。これにほぼ近接しているSR8779は、延長22m余が確認されている。確認された幅は50～70cmで、本来は山から流路であった。

南面区画溝SD8927はトレンチと他の溝によって切られており、連続して検出はできなかったが、東面する溝(SD9067)の延長と直角に交わっているはずで、東側の条里水田の畔方向とも一致している。かつては自然の流路で、何本か自由に流れていたものを改修したらしい。調査区の西側で確認された、蛇行する溝の残りは流路の痕を示すものであろう。

この流路は西側の山沿いでは数多くの分岐が発掘されているが、それは西側では地山が比較的高いことから、それを掘り込んだ流路の底が確認されたもので、東側で自然流路の痕跡が少ないのは、傾斜

面に入り表土が深く、流路が基盤層までは掘り込んでいなかったために検出が難しかったことによる。検出されている分岐した流路跡の時期は明らかになっていない。

2群の西から南区にかけてはSR8280と呼んだ大きな溝が長く蛇行している。この溝の下層からは古墳時代の須恵器・土師器が多量に出土しており、現地調査の段階では「古墳時代の流路」としている。この溝に中世(SE8036・SE8769)さらには近世の井戸が数多く掘り込まれており、流路が埋没した後も長く水流が保たれていたことが推定されている。この溝の上層から、山茶碗が多数出土しており(図33)、132・134などI期のものだけでなく、126・127以下に示したようにIII期のものが多く出土している。したがって、この流路跡は2群の建物群が設けられた後にも回っており、水流があったと考えられる。この水流は様々な面で使われたものであろうし、水路に隣接して設けられた井戸の深さも、水の流れと大きくは変わらない。当時の生活の一端をうかがわせる遺構である。

しかし、ここからは奈良・平安時代の須恵器・灰釉陶器は全く出土していない。このことは全体的に奈良・平安時代には遺物の出土量、検出された遺構の量も少なく、存在感が薄くなる寺家前遺跡では、この時期には溝(SR8280)の周辺にも人の動きは少なかったことを示している。

掘立柱建物

先にも述べたように、2群で検出された柱穴は1群と比較して少なく、建物としても把握しやすかった。全部で10棟の建物で検出されているが、4箇所に分散しており、各々建物の規模・形態が異なっている。

内部では大型の建物が4棟ある。規模・棟方向からSH207-2・SH209とSH207・SH208の2組の組み合わせが考えられている。いずれも2群の中心的な建物であろう。よく似た規模の建物で、棟の方向あるいは東側に開いた門との位置関係からみて、SH207-2が当初のもので、SH207はそれを建て替えたものであろう。SH208・SH209はそれぞれ東面する主要な建物に附属する建物である。

先に述べたように西区には高床式の建物SH205・SH206の2棟が並んでいる。2間×2間の建物であり、おそらく倉庫であろう(SH206では東柱の柱穴は検出されていないが、SH205の東柱穴の残りが浅いことを考慮して、ここで本来東柱があることを推定したが、あるいは東柱を欠いた土間の倉庫であったのかもしれない)。とすれば、この西区は2群の屋敷地の倉庫区画と考えることができる。SH205に隣接して塀あるいは柵(SA204)が設けられている。おそらく板塀であったと考えている。

南区にはやはり2間×2間の東柱をもった建物(SH210)が1棟検出されている。この区画には井戸が2基発見されていることから、SH210はそれに伴う倉庫であろう。厨房に当たる建物は把握されていないが、井戸の近くに柱穴が何本か検出されていることを考慮すれば、この部分にそうした機能をもった建物が存在したのかもしれない。

西区の西端(山裾)に近いところで検出された、SH201～SH204と呼んだ掘立柱建物は、いずれも南北棟に近い方向の東面する建物で、柱間は5間×2間。建物面積は20㎡強で規模・形態がいずれもよく似た建物である。さらに同位置の地域で重複して立てられていることから、よく似た性格の建物が、何回かの建て直しをしていた跡であることが推定できる。SH202～204は2間×3間程度の良く似た建物であるが、互いに重複しており、その前後関係は明らかではない。おそらく同様な性格の建物が建て替えられたことを示している。西側に隣接してSH201がある。棟方向はSH203と同じであり、同時期のものであろう。この建物群の北側にSA203があるが、これはSH204の棟方向と直交しており、これに伴うものと考えられる。この建物群は建物の規模あるいはその位置から、内部の建物群に従属する人々の住居あるいは作業場と考えてよいだろう。

柵跡

一列に並ぶ柱跡を柵としたが、あるいは板塀であったのかもしれない。2群からは4列の柵が検出さ

れている。櫓には溝と併用して区画をなすものと、SA204のように建物に近接して「目隠し」の役を果たしたものとがある。柱穴の大きさ、柱の間隔などには両者の間に差はない。

井戸

2群では南区に2基の井戸が確認されている。SE8036とSE8769である。前者は方形の井戸枠が検出されているが、後者は不正楕円形の大型の掘形が検出されただけで、井戸枠はない。両者ともに古墳時代の埋没した流路であるSR8280に掘り込まれており、水の出はよかったものと思われる。SE8036からは図33-142～145に示す山茶碗が出土しており、この井戸が山茶碗Ⅰ期～Ⅲ期に至る間使われていたことを示しており、またSE8769からも図33-136・138に見る山茶碗が出土している。いずれも山茶碗Ⅲ期のもので、この井戸がこの時期まで使われていたことを示している。

(ウ) 3群の遺構

A. 区画と整地層

2群の南東側の山裾から水田域にかけて東西30m×南北23mほどの区域、約600㎡強の範囲に整地された部分が検出されている。整地層の端辺方向は条里に従っており、各辺は東西・南北ではないが、便宜的に図示したような呼び方しておく。整地層は一部で条里水田の大群(SK556)を取り込んでいるが、その区画自体は畔方向に規制されており、ほぼ条里の畔方向に沿っている。整地層は西側では一部丘陵裾を削って東と北側の水田を埋めており、1群・2群の内郭に相当する部分であろう。整地層から出土した主なものは図36・37に示した通りであるが、①助宗窯産の須置器坏蓋・高台坏、および②灰釉陶器碗・皿および壺の底部(155)さらには、③山茶碗の三者が認められる。最も多いものは③の山茶碗と小皿であり、碗の多くは高台の退化したⅢ期段階のもので、小皿も無高台で器高の浅いものである。しかし、整地した時期を必ずしもこの段階に求める必要はないが、3群とした整地層に多くの建物が建てられた時期はやはり山茶碗Ⅲ期と言うことになる。

また整地層の南端に位置する井戸(SE558)からはⅠ期の山茶碗の底部(図78-286)が出土しており、この群が建てられた時期の一端を示している。さらに、A-1区の南端に当たる170A-4グリッドからはⅠ-1期段階の山茶碗が多く出土していることから、この段階にこの位置に建物が建てられていたことを知ることができる。したがって3群はⅠ期段階に営まれてはいるが、整地部分が拡大して、今見るような屋敷地が整備されたのは山茶碗Ⅲ期まで降ると考えてよいのであろう。

整地層の上からは掘立柱建物の存在を推定させる柱穴が検出されているが、現地調査の段階では建物としてまとまったものにはならなかった。整地層の端から条里の大群が北および東に延びている(SK583)が、これは石敷の路として畔の幅も広げ、補強している。これは大群が屋敷地に続く路として、何回かの補修工事が行われた痕跡であろう。この石敷は整地層に隣接する地点で西側に直角に折れ、北側に20mほどまでは確認できるが、それより先は丘陵裾に入ることによって石敷は消えている。出土した遺物を図38-209～214に示している。多くはⅢ期の山茶碗(211・212)であり、無高台の浅い小皿も含まれており、この段階に大群を改修して石敷の路が盛んに設けられたことを示している。また215はB4類に属する青磁碗(15世紀末)であり、この他にも近世陶器が出土している。したがって、これらの石敷は近世にも継続して長い間使われていたことが理解できる。

整地層の西側の山裾にも掘立柱建物の柱穴・溝などが広がっているが、建物としてまとまるどころまでにはならなかった。この部分は山裾に沿って東西80m、南北20mほどの範囲に広がっている。また遺構の端は「石敷遺構」の範囲にほぼ沿っている。したがって、この区域の遺構群の範囲もやはり条理地割の規制を受けていることが理解できる。石敷遺構の延長部分には3～4mの幅で柱穴等が検出されていない空き地が認められる。したがって、この地域は山裾に当たり、地盤がそれほど軟弱ではない

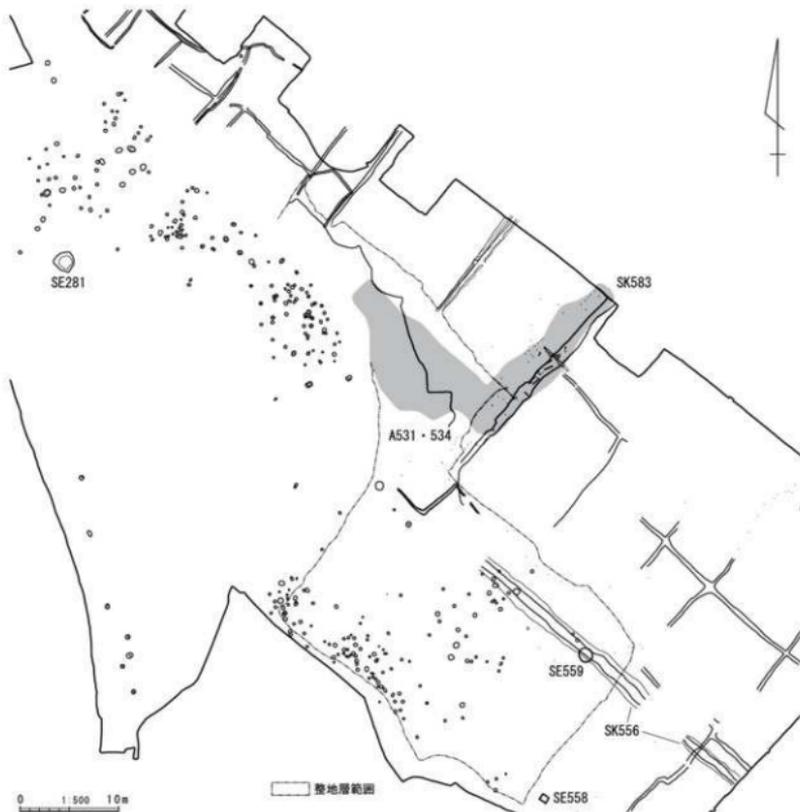


図 35 3群遺構配置図

めに石敷を設けていないが、当然ここは路の延長部分があったと考えてよいだろう。延長部分を含めて、この石敷（道路）の方向と2群の東面する溝（SD9067）はほぼ直角に交わっており、これらも条里地割による規制を受けていることが理解できる。ちなみに3群から東に延びる大群（SK583）と、2群の東面する溝との距離はほぼ109m前後である。このようにみると、3群とした整地層およびその周辺の遺構群は建物の区画（整地部分）と、その北西側に倉庫などの附属する建物群と、南側に井戸を伴った一連の屋敷地と理解することができよう。おそらく東側に延びる石敷（道路）の正面に屋敷の入り口が設けられていたものと理解してよい。

B. 区画の規模

先に述べたように整地層の範囲は東西方向にやや長い長方形を呈している。東西30m×南北20mで面積は約600㎡であり、面積からみて1・2群の内部に当たる屋敷の中心的な区画をなした部分であろうと考えている。整地層からは古墳時代須恵器・律令期の須恵器が数多く出土しているが、こ

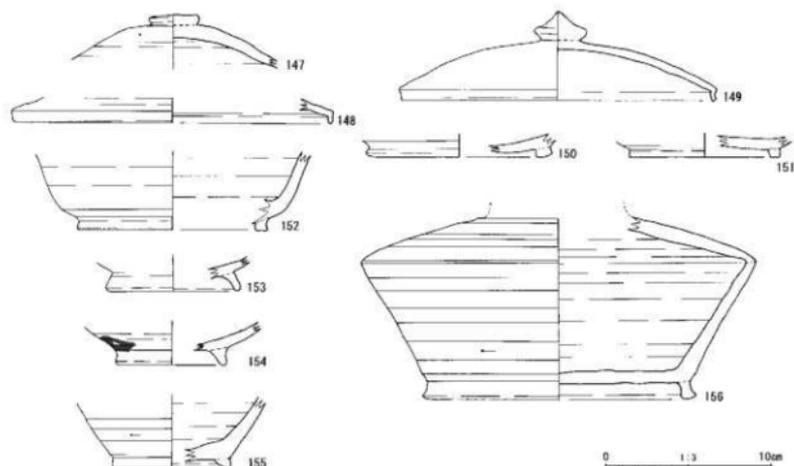


図36 整地層出土土器1

れは、E-3区からA-1区にかけて、希薄ではあるが律令期の遺構が広がっていたことを示していよう。ちなみにE-3区南端には律令期の溝の存在が知られているが、これらの溝はいずれもSRの名を付けたが、山側からの自然流路の痕跡であって、人の手によって造られた溝ではない。

C. 外郭の遺構

北区画

整地層の北側に南北20m×東西60m(面積1200㎡)ほどの範囲から柱穴・溝などが数多く検出されている。掘立柱建物としてまとまったものは検出されていないが、1群・2群と同じように比較的小規模な掘立柱建物が広がる区域だと考えられる。

南区画

3群からは3基の井戸が検出された。整地層の南側には井戸枠に板材を用いた一辺80cmほどの井戸が検出されている(SE558)。北側にSE559が設けられている。2群の場合と同じように中心区画に隣接して井戸を中心とする区画が設けられていたものであろう。

(エ) 条里水田

集落域の東側に水田が広がっている。A区の東側に大畔(SK583)と、これと直交する大畔(SK556)が検出されており、この大畔に沿ってほぼ10m間隔で小畔が広い範囲で確認された。大畔(SK583)の方向はN-41°-Eであり、これと同じ方向を持った水田区画は、藤枝市の都市計画図でみれば、現在も葉梨の谷に広く残っていることが読める。

志太平野広域の条里区画には大きく、広幅・益津地域に広がるA型と、西益津・八幡などに広がるB型の異なった方向をもつ2条里が知られている(矢田 2010)。益津郡衙跡とされる郡遺跡に隣接する水守遺跡の調査では益津の条里と方向が一致する溝、柵列などが確認されている。葉梨川流域の平野部ではこれらとは異なった方向の区画が観察されているが、この区画が設定された時期がどこまでさかのぼるかは、従来の調査では、明らかにはなっていなかった。今回の寺家前遺跡の調査によって、葉梨川

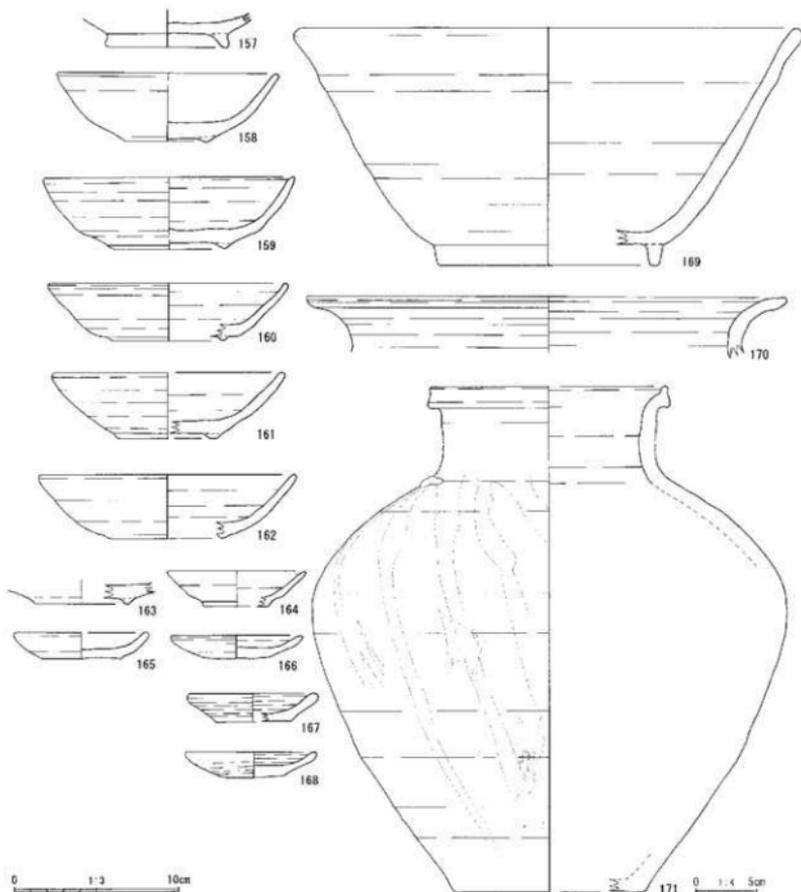


図37 整地層出土土器2

流域の表層条里の区画と検出された大群の位置と群の方向が一致することが確認され、さらに大群の盛土および水田の耕作土から出土した遺物（図38）によって、これらの群は奈良時代に作られ、中世さらには近世に引き継がれていることが確認できた。したがって、この葉梨川流域で確認される表層の条里区画はやはり奈良時代に設定された条里区画に連続するものと考えてよい。

条里水田は集落の東側全面に広がっていたが、工事計画との調整によって全域の調査はできなかったが、部分的に発掘された群には杭で補強した幅50cm程の大群と、杭をほとんどもたない20cm弱の小群の両者が検出された。大群は直交する2本が検出されたのみで、その間隔は明確にはならなかったが、2群の東面区画溝との関わりから、その間隔は110m前後のものとは推定できる。

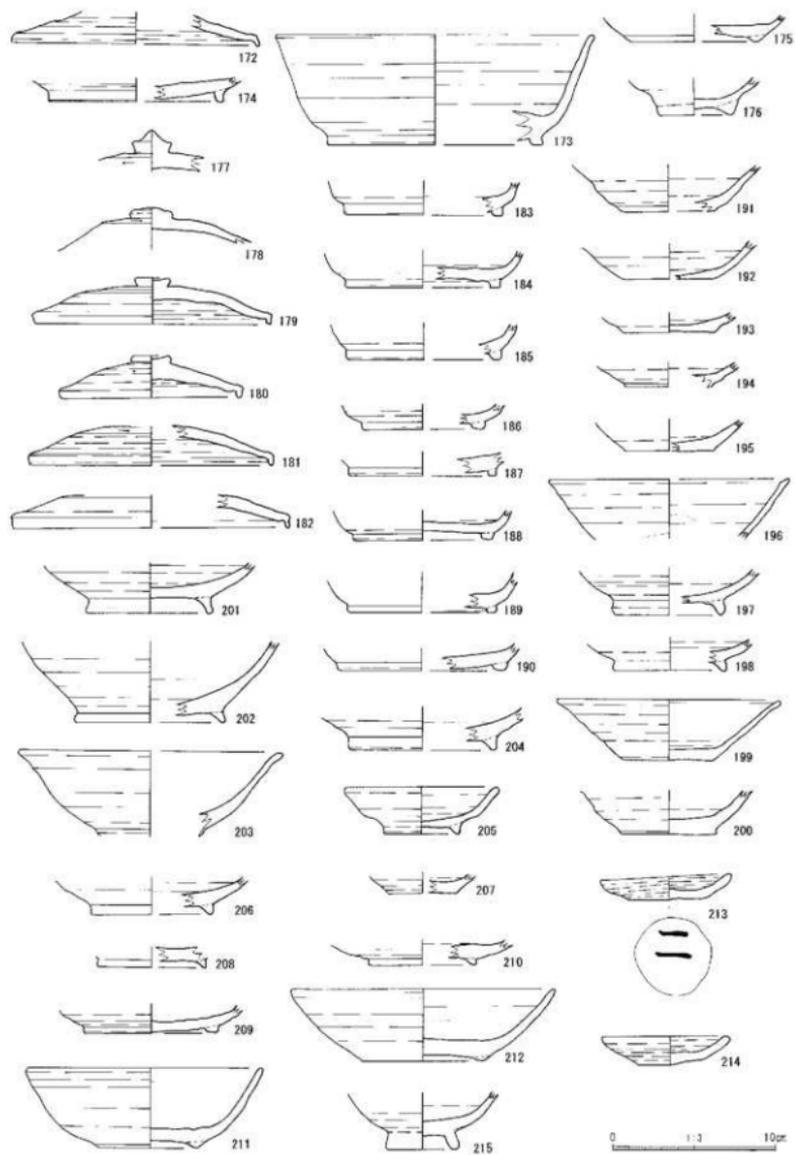


図38 3群大群・水田・A534出土土器

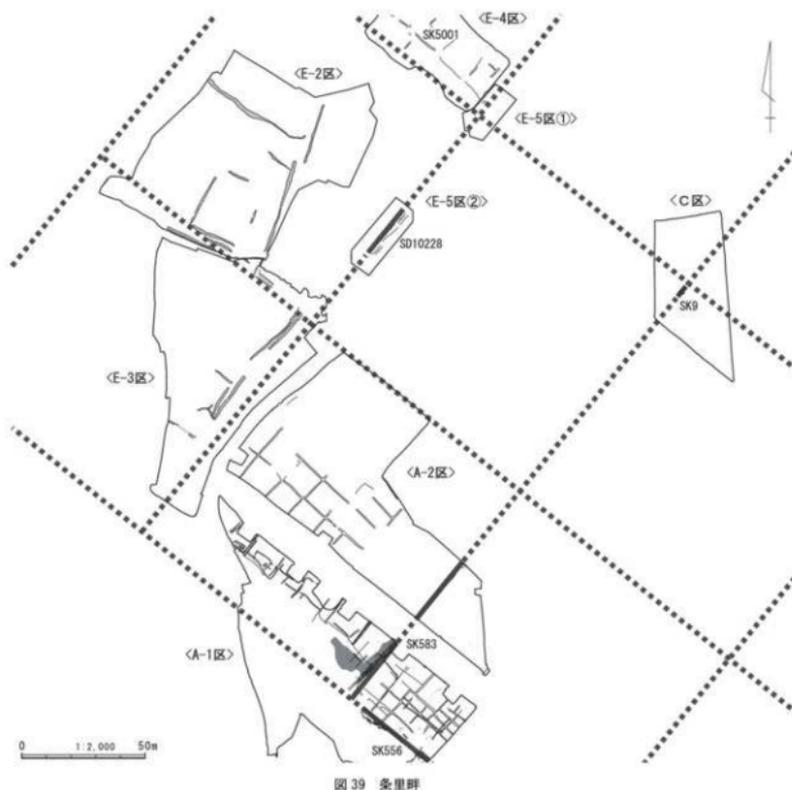


図 39 条里畔

A区の中央に大畔 (SK583) が検出されている。調査区の南端から始まり、長さ 80 m ほどが発掘されているが、その北側 200m ほど離れた所に設けられた C 区でも、同一の方向で連続する位置に杭をもった大畔が発掘されている。したがって両者をつなぐ 220 m の範囲には大畔が存在していたことが知られる (SK9)。先に述べたように SK583 から 2 群建物の前面に位置する E-5 区②で検出された水路 (SD10228) までの距離が約 110 m であり、さらに屋敷の西側を区画する柵 (SA201)・南面の区画溝 (SD8927) などの方向も条里の方向と一致しており、2 群の建物群が前面の条里水田の区画に大きく影響されていることが理解できる。SK583 の南側にこれに直交する大畔 SK556 が発掘されている。この大畔を基点にする現在の表層条里畔で約 110 m の範囲で一致する水路 (道路) が 2 本確認されている。

発掘調査の結果では上層で検出された大畔は下層の条里水田の大畔と連続しており、位置的な差はなく、継続していたことが理解できる。また図 39 に示したように大畔と方向あるいは間隔をほぼ一定に保った小畔が発掘されている。小畔はほぼ 10 m 強の間隔で検出されている。このほかに位置あるいは方向にも多少のズレをもつ小畔が観察できる (図 39 の A-2 区参照)。A-1 区あるいは E-4 区でも同様な方向をもった小畔が発見されているので、この上層に畔の方向の異なる水田が営まれた可能性がある。

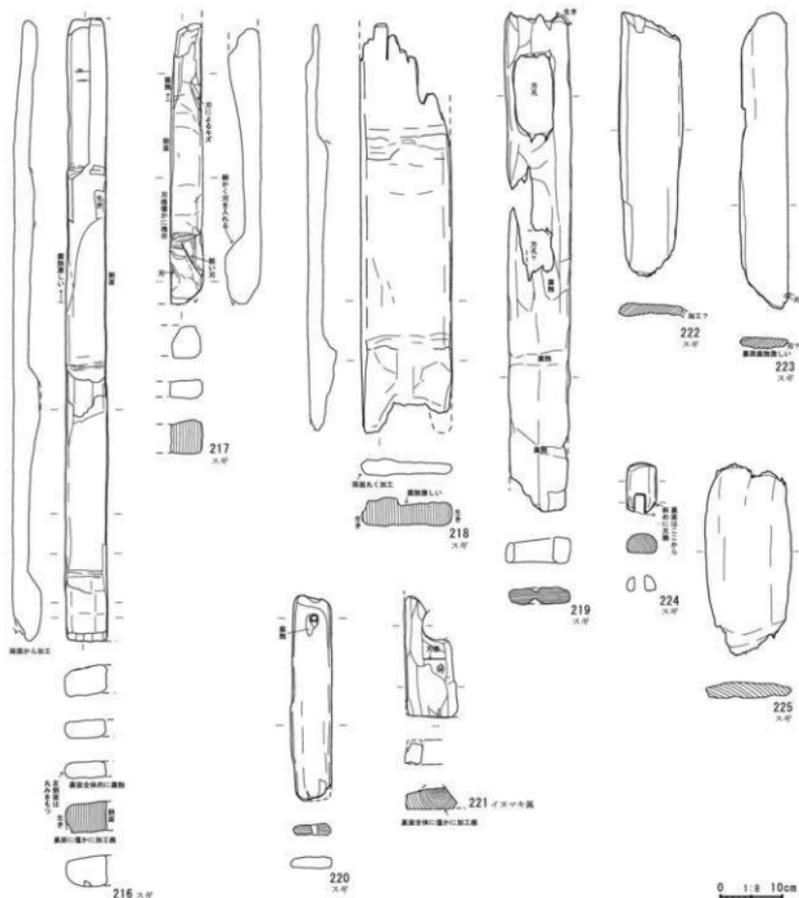


図40 条里群 SK583・9 出土木製品

しかしこれらは大畔・水路を伴っていないので、単に水田区画のズレを示すものであろう。この差は水路を伴い、水利系統に直結する大畔と単に水田区画をなす小畔の違いを示すものであろう。

水田跡からは本来、遺物が出土することは少ないが、水田の畔・通路に使用した大畔などから土器が出土している。中には条里水田の開田期を示すと考えられる律令期の土器も出土しているので、奈良・平安時代の土器についても多少ふれておくことにする。

これら、畔あるいは水田面出土の土器には畔の補強に伴って行われた客土に含まれていたものもあるが、中には水田耕作に伴う祭祀に伴うものが含まれていることは推定できる。しかし、出土状態あるいは出土遺物からは、そうした祭祀を明確に示すものはなかった。

図38に示したものは水田の大畔と石敷遺構および6・7層とした水田面から出土した土器である。172・173は南北方向の大畔(SK583)から出土した助宗窯産の須恵器蓋・坏である。助宗窯の須恵器編年(八木 1990)によれば、IV期(8世紀第2四半期)に位置づけられるもので、この地域の条里水田の設定時期を示すものであろう。また199・200はSK583の延長に当たる石敷遺構から出土したものである。体部が外側に開いた、無高台の坏で、平安期のものである。図示したものには山茶碗Ⅲ期のものが多いが、ここからは先にも触れたように、律令期の須恵器、灰軸陶器のほか鎌倉期、さらには近世の陶器が出土している。したがって、この石敷遺構が下層の畔はほかの大畔と同じように律令期に造られ、中世前期に石敷の通路として整備され、さらには近世の水田の畔として機能したものであることを示している。

7層水田の畔の近くから、やはり奈良から鎌倉期にかけて土器が出土している。須恵器はいずれも助宗窯産のもので、条里区画が設定された時期を示しているものであろう。また、199・200等は平安期の須恵器であり、203～208などは山茶碗Ⅰ期からⅢ期に至るもので、大畔出土の土器とともにこの水田が用いられていた時期を示している。

7層水田の大畔(SK583)およびC区で検出した杭列(SK9)より出土した木製品は図40にまとめた。216～218はA-1区内のSK583で出土した。216・217は建築材の梯子を畔の横木に転用している。同一個体であることは間違いないが接合点はない。218も梯子である。腐食が激しく調整痕などが見えないが、下端部が二又になっていることから、梯子の最下段部分であろう。219・222～225は同じくSK583のA-2区内より出土した。219は建築材の梁・桁材であろう。2箇所の方孔がある。222～225は用途不明品。224は丁寧に加工されて丸味を帯び、3.2×1.9cmの柄孔がある。220・221はC区大畔で出土した。220は方形の小孔を持つ板状製品であるが用途は不明である。221はイヌマキの芯材に近い材から加工された製品だが用途は特定できない。上部に円形の孔があったようであるが破損しているため原形が不明である。このほかにも7層水田からは大足や曲物などの木製品が出土している(図141・142)。

(オ) 道路遺構

道路遺構A531・534は、A-1区のほぼ中央から東寄りに位置している。(図35、図版42)。遺構番号は現地調査時のまま踏襲しており、東西方向の石敷にA531、南北方向の石敷にA534と付している。前項(ウ)3群の遺構の項で触れたとおり、A531とA534は西側で直角に交わり、さらにその西側は3群に直結している。当初、「整地層」の一部として捉えていたが、資料整理での検討の結果、1群や2群の屋敷地や周辺道路とに繋がる導線上に位置している道路であることがわかった。

A534は南北に20m、東西に8mの範囲に石敷が広がっている。礫は地山礫で、径5～10cm大が多く、なかには稀に30cm大の礫もあった。川原石などはなく、西側に接する丘陵地より産出する地山礫を使っている。礫は中央部に密集しているが、周辺部は比較的疎である。規則的に決まった範囲に並べていたような様子はなく、直線的でもない。低地の土壌が緩いところへ幾度かに渡って集中して投入したような感がある。出土遺物は弥生土器、須恵器、灰軸陶器、山茶碗(209～214)、近世陶磁器がある。A531は東西に20mほど、南北に4mの範囲に石敷がある。礫はA534とほぼ同じだが、径20～30cm大の礫が多く見られる。東側は調査区境まで礫が及んでいるが、調査区外を挟んでさらに東側のA-2区では石敷はなかった。下層で検出された条里地割の大畔(SK583)のほぼ真上に構築されている。先にも述べたように、道路遺構A534・531の年代は山茶碗の時期に改修が行われ、近世にも継続して使われていたと考えられる。

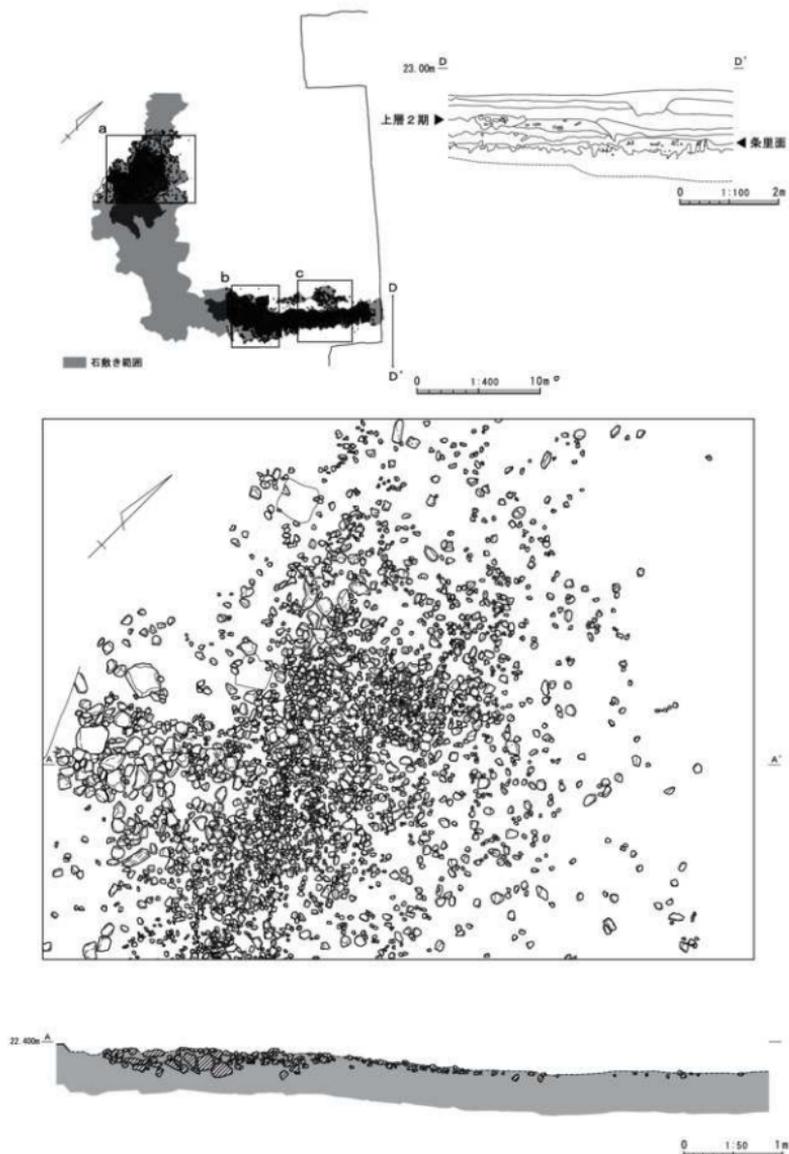


図41 道路遺構 A531・534 (1)

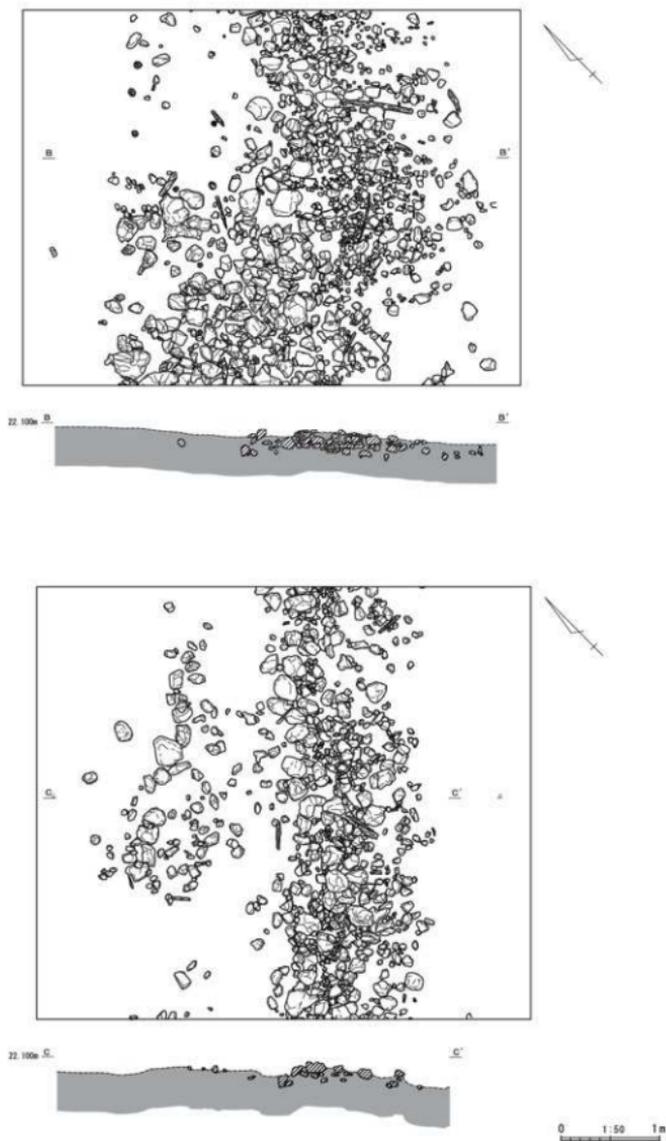


図 42 道路遺構 A531・534 (2)

第3節 古代、中世～近世の遺物

1. 遺物の概要と出土状況

(1) 遺物の出土状況

寺家前遺跡上層から出土した遺物には、土師器・山茶碗などの土器あるいは建材・農具・井戸枠などの木製品のほか、石製品・金属製品などがある。遺跡は各時期の遺構が激しく重複しており、さらには近代まで集落として使われていたことから、遺構や包含層の攪乱も著しく、現地調査の段階で1期・2期の遺構・遺物が層位的に十分に分離できた訳ではない。したがって、山茶碗に伴う遺構が比較的まとまっていることから、この段階を2期とし、それ以降のものを1期として分けることにした。上層1期の遺構に伴う遺物は墓坑出土のものを除いては性格不明な土坑出土のものが中心で、その他の遺物の多くは包含層出土である。

上層2期の遺物も多くは屋敷の区画溝から出土したもので、それ以外はやはり包含層出土である。

(2) 遺物の概要

ア. 上層1期の遺物

(ア) かわらけ (図 99-544 ~ 562)

寺家前遺跡からは破片数にして1,660片のかわらけが出土している。上層2期とした山茶碗に伴うかわらけは少なく、図示できたものはSH166の柱穴から出土した1点(531)のみで、大半が上層1期とした中世後半から近世にかけてのものである。

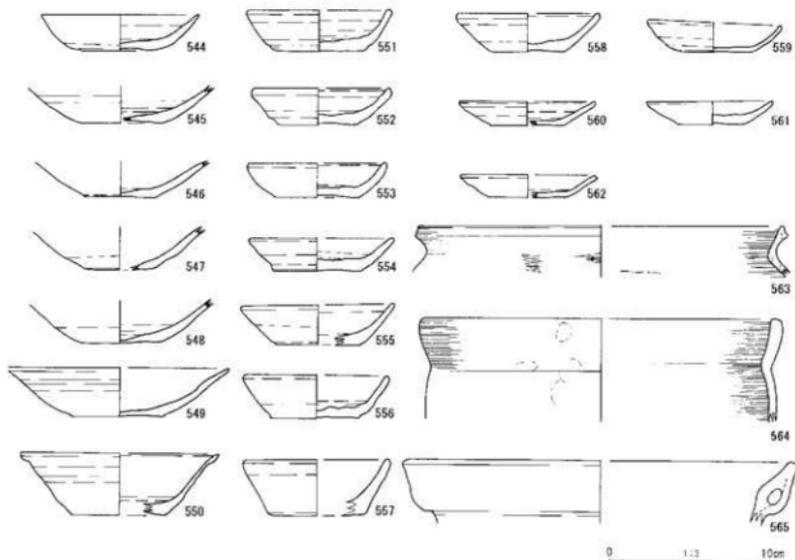


図 99 包含層出土かわらけ・土師器類

図100-289・290・291はSF1055から出土したかわらけである。SF1055は略方形の土坑であるが、一角からまとまって銭貨6枚(1177～1181)が出土しており、墓坑と考えている。銭貨は「永楽通寶」「元豊通寶」「熙寧元寶(?)」など、渡来銭だけで、寛永通寶など江戸期の銭貨は含んでいない。また、永楽通寶が中心を占めることから、その年代の大枠を知ることができる。291は口径13.7cm、他は口径11cm前後である。器形は底部が小さく、体部が直線的に外に開いた形態をしている。

294は楕円形の墓坑SF2437から出土したもので、口径11cmである。底部の粘土板の上に体部を輪積みで作った非ロクロ成形のかわらけである。色調もロクロ成形のかわらけとは異なり、全体に明るいついでである。この他に図示できなかったが、よく似たかわらけがもう1点含まれている。SF2437の墓坑内から「永楽通寶」「元祐通寶」「皇宋通寶」「元豊通寶(?)」など渡来銭のみの六道銭(1173～1176)が出土しており、年代的にはSF1055に近い位置にあることが理解できる。

この他に296・297もSF3089から出土したものである。口径11cm前後のものであるが、SF1055出土のかわらけに比べると、全体にやや厚手である。

図100上段に示したものはいずれも16世紀前半と推定されるもので、この期のかかわらけは駿府城内から良好な資料が検出されている((財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009)。それによれば、この段階のかかわらけにはロクロ成形のもの而非ロクロ成形のものがあるが、量的には前者が圧倒的に多い。寺家前遺跡でも出土したかわらけの大半はロクロ成形のものである。口径によって大・中・小の4段階

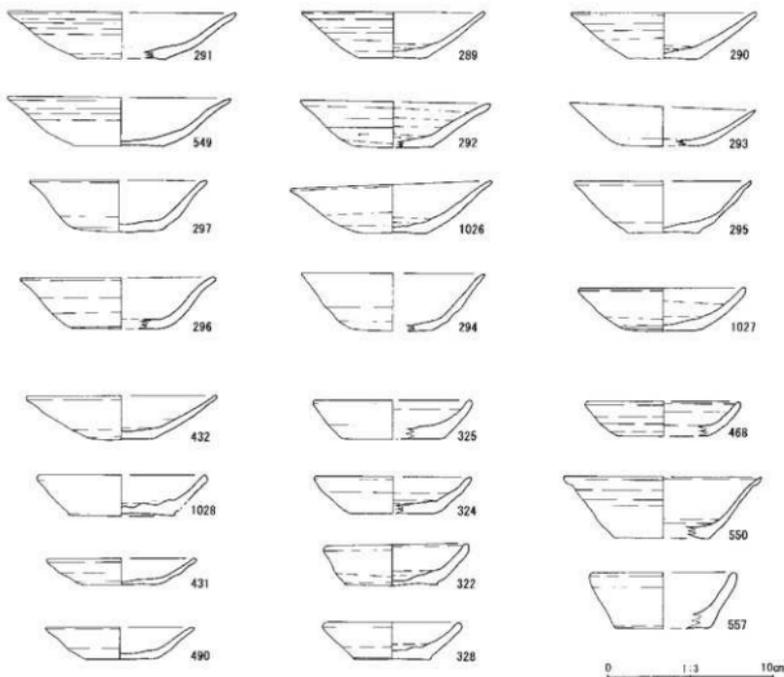
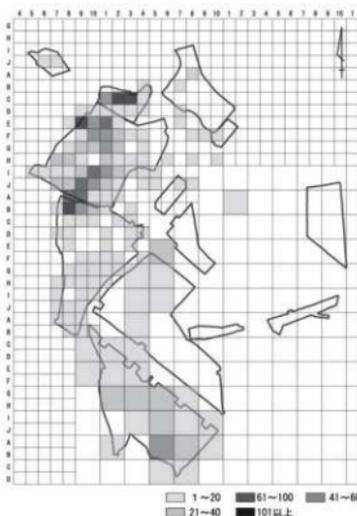


図100 かわらけ分類図

に分かれるようであるが、ここに示したものはいずれも中段階のもので、大あるいは小は含まれていない。形態的には比較的小さな底部から直線的に外に張り出す体部をもったものが多いが、295・1027のように多少異なった形態をしたものがある。とくに1027は体部がやや内湾している。前者は15世紀から16世紀前半にかけてと考えられるものに対して、後者は同一時期のバリエーションかあるいはやや年代が下るものかもしれない。

この他に図100下段に示したものはSX164・SX205などから出土したかわらけである。これらの遺構は図83～85、87～89に示したように、出土遺物の時期も長く、雑多なものを多く含んでおり、性格はよくわかっていない。これらに混じって、口径の小さなかわらけが出土している。いずれも近世18世紀代のかかわらけと考えられている。



(イ) 陶磁器 (図102～109)

中～近世の包含層より出土した陶磁器類について

図101 中世後半～近世土器出土分布図

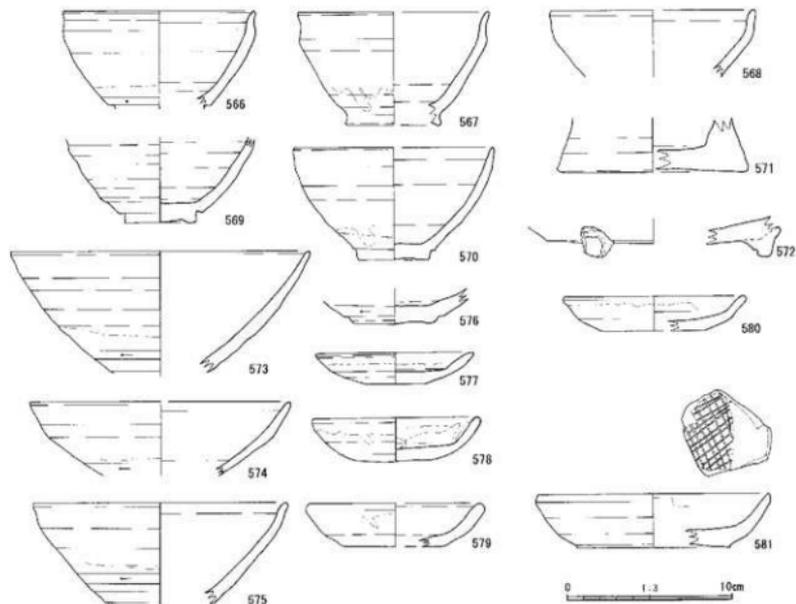


図102 包含層出土陶磁器1

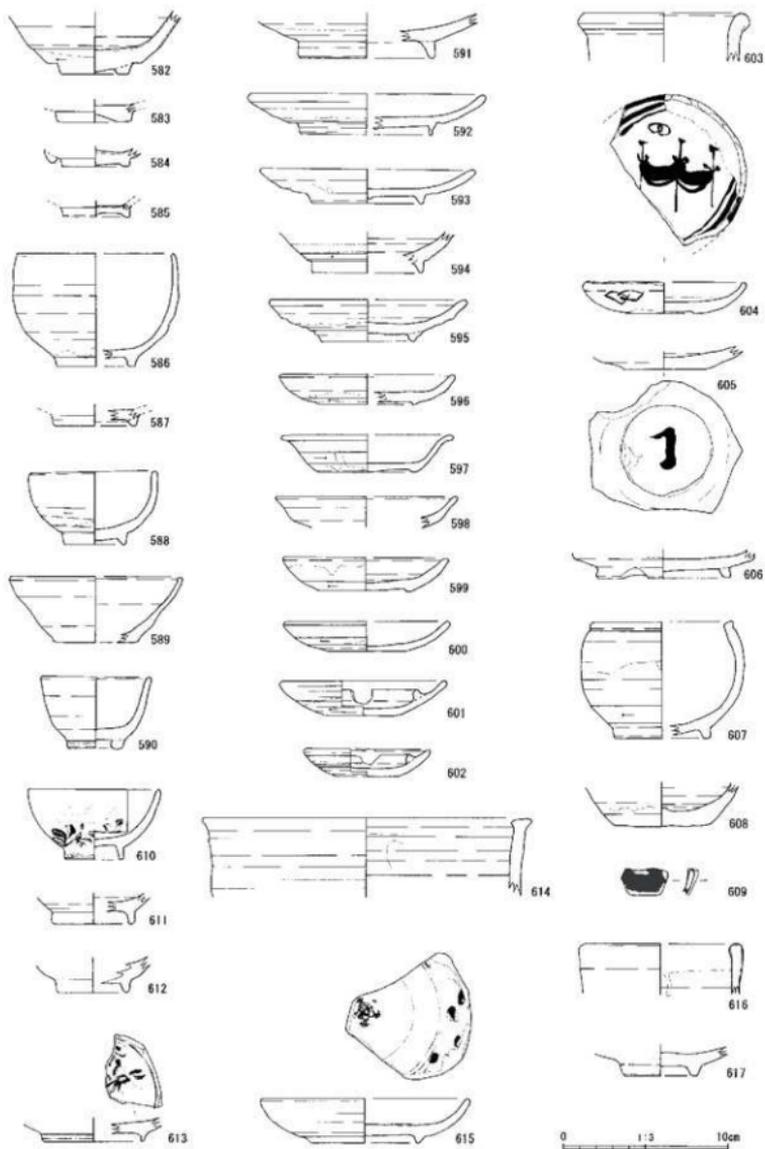


図 103 包含層出土陶磁器 2

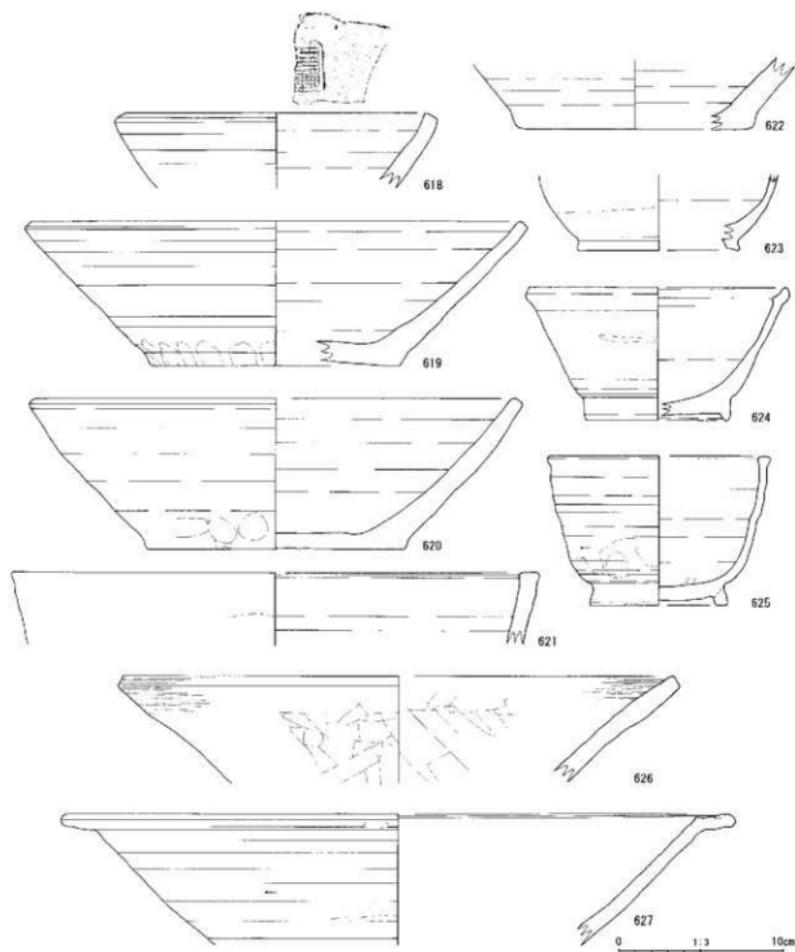


図 104 包含層出土陶磁器 3

図 102 ～ 109 にまとめた。

図 102 は中世の碗・皿類である。566 ～ 570 は天目茶碗である。566 は鉄軸の天目茶碗で初山のものである。大窯 3 段階に併行する。567 ～ 570 は古瀬戸産である。古瀬戸中 III 期～後 IV 期新段階までの製品である。571 は瓶子の底部である。瓶子 1 類で古瀬戸前 III 期か IV 期に含まれるであろう。572 は盤類の小片である。古瀬戸後 IV 期に属する。573 ～ 576 は平碗。575 だけが古志戸呂で、あとは古瀬戸製品である。577 ～ 580 は皿類である。577・578 は緑軸小皿。577 は底部内面が摩耗していることから硯に

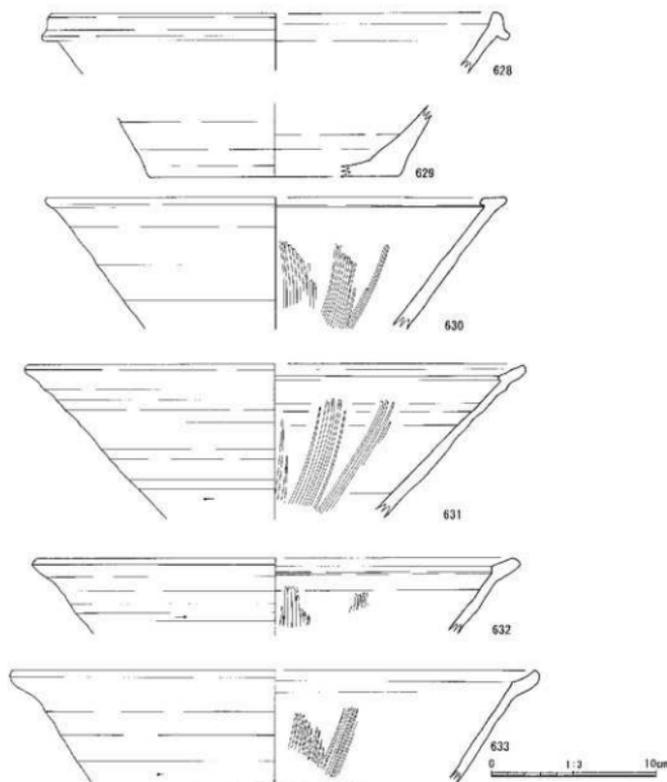


図 105 包含層出土陶磁器 4

転用されているか。578 は内面縁に煤が付着していることから灯明皿に転用された可能性がある。580 も内面底が摩耗している。581 は古瀬戸前Ⅲ期の卸皿である。

図 103 は近世の碗・皿類他である。582 ～ 585 は天目茶碗である。582 は瀬戸の鉄軸で登窯 3 または 4 の製品である。583 ～ 585 は瀬戸・美濃の大窯である。583 は大窯 4 段階、584・585 は大窯 1 段階に位置付けられる。

586 ～ 588 は碗物である。586・587 は近世志戸呂、588 は美濃の登窯 6 の小碗である。589・590 は志戸呂の小杯。591 は美濃の折縁輪壳鉢で、登窯 7 の製品である。592 ～ 596 は丸皿。592 ～ 594 は美濃、595 は志戸呂、596 は初山、597 は瀬戸の稜皿、598 は端反皿、599 は輪壳皿である。600 ～ 602 は灯明皿である。600 は京信楽灯明皿、601・602 は美濃の灯明皿である。603 は信楽の茶壺の口縁部にあたる。604 は織部皿。体部外面の文様は二箇所ある。605 は瀬戸の大窯 1 段階に属する縁軸はさみ皿である。底部の墨書は解釈不明である。606 は近世志戸呂焼の蓋物か。607 は近代の志戸呂焼の壺である。608

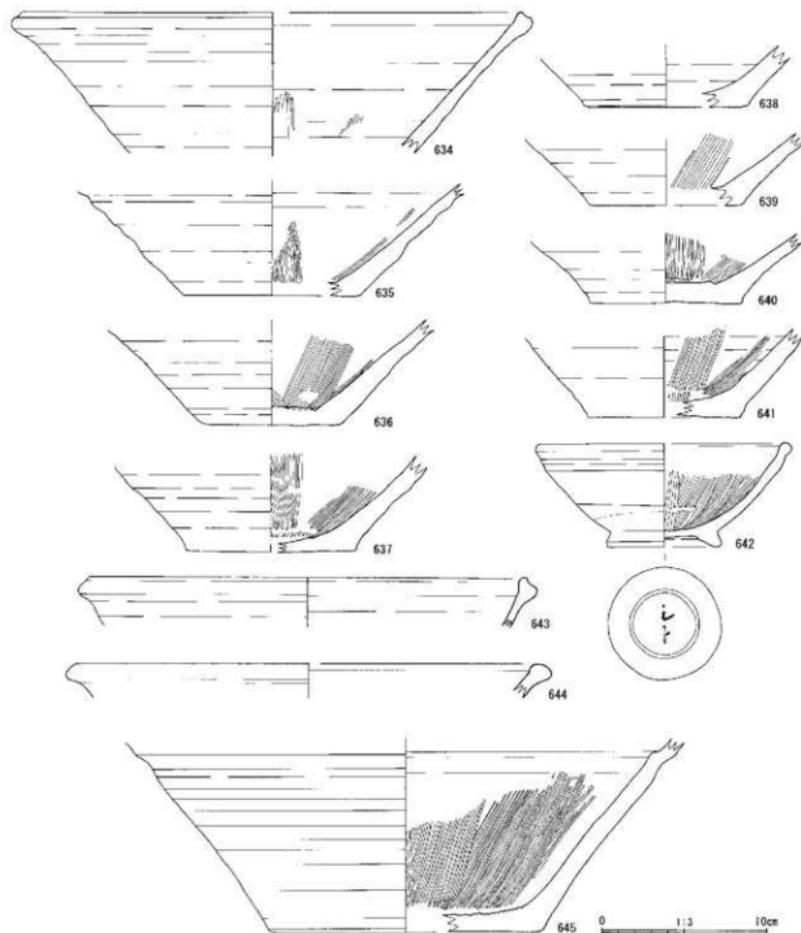


図106 包含層出土陶磁器 5

は美濃の小壺または小瓶か。609は瀬戸の入子である。口縁には摘み出しをもち、内面に紅が付着している。610～613・615・617は肥前の染付である。610はほぼ完形の小碗である。611・612も碗であろう。613・615・617は染付皿である。614は近世志戸呂製品の筒型香炉で口唇部から外面にかけて鉄軸がかかっている。616は肥前の香炉である。

図104は近世の鉢類である。618～622・626は常滑の片口鉢である。619・620・626は中野編年の6a型式の時期に属する。621は8型式であろう。627は折縁深皿で古瀬戸後1期に属する。623～625は近世の片口鉢である。623は近世志戸呂の片口鉢で17～18世紀代である。624・625は美濃の片口鉢。

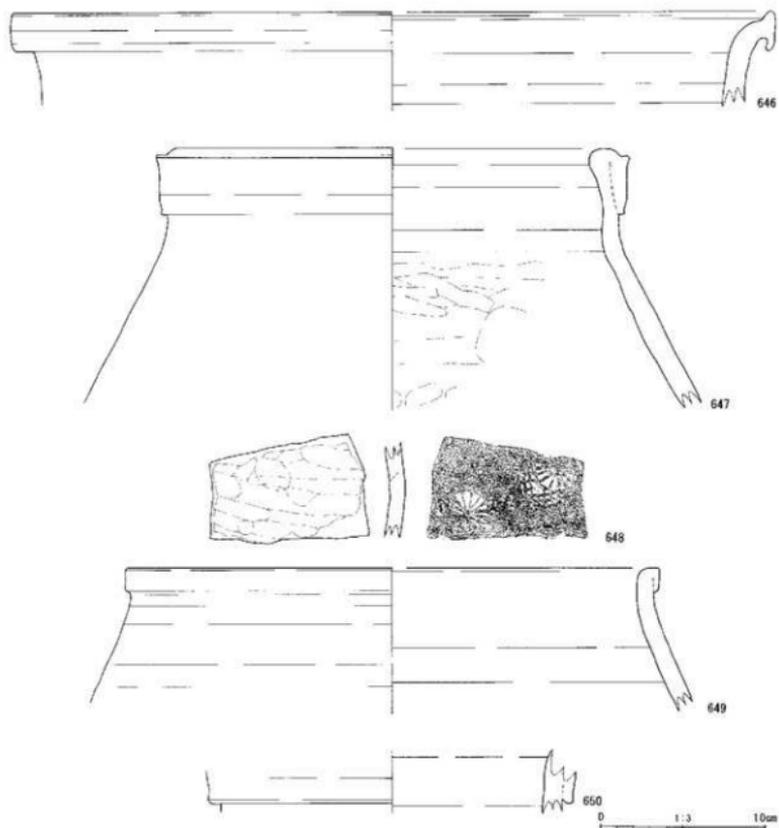


図 107 包含層出土陶磁器 6

624は登窯10の製品でトチン痕や重ね焼き痕が残っている。

図105～106は中～近世の播鉢である。図105は志戸呂製品、図106は瀬戸・美濃製品他を示した。628は大窯4後期の製品である。629は古志戸呂製品で後IV期の時期に属する。630～633は近世志戸呂の製品で17世紀代のものである。634・635・638～640は瀬戸後IV期新段階～大窯1段階の製品である。636・637・641～645は近世に属する。636・643は大窯1段階、641は大窯3段階である。644は登窯10または11、645は常滑の登窯9に該当する。642は近代の播鉢でほぼ完形に近い。外面底部の高台内側に墨書がある。

図107は中～近世の甕類である。646・647は中世常滑の大型の甕である。646は中野編年6a型式に属する。648は渥美の甕の小片で12世紀代に属する。外面には型押し文様の二種類がある。649・650

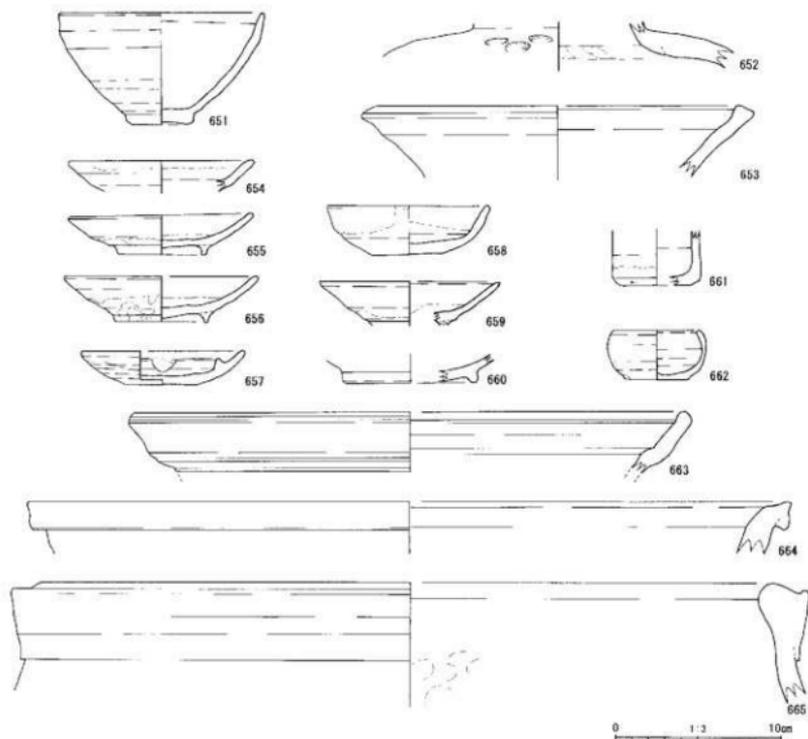


図 108 その他の遺構出土陶磁器

は近世志戸呂の甕である。

図 108・109 は中～近世のその他遺構から出土した陶磁器類である。一部、出土遺構別の図版でも収録しているが、ここで再録したものもある。651 は古瀬戸の天目茶碗で、古瀬戸後Ⅳ期に属する。652(73) は古瀬戸の四耳壺で前Ⅳ期の製品である。1 群の屋敷地の北面区画溝 (SD937) から出土している。653 は常滑のⅡ類に属する片口鉢で、16 世紀前半代の製品である。654 は古瀬戸後Ⅳ期古段階の縁軸小皿で溝 (SD3839) より出土した。この遺構は 1 群屋敷地の東面に位置する溝で、丘陵部から低地へと真っ直ぐに伸びている。屋敷地の向きを意識した方向であることから人為的に掘り込まれた溝であろう。655～666 は近世の陶磁器類。654～660 は皿類。655・656・659 は近世志戸呂の縁軸小皿で 17 世紀前半のものである。657 は美濃の灯明皿、658 は瀬戸の縁軸小皿、660 は肥前の皿であろう。661 は近世志戸呂の筒型容器である。662 も同じく志戸呂の傾鉢である。18 世紀代か。663 は瀬戸の挿鉢口縁部である。天水槽 (SE105、図版 32) より出土した。664 (907)・665・666 は常滑産の甕である。664 は常滑の 5 型式、665 は 9 型式に属するか。666 は口縁～底部までほぼ全体が残る大型の甕である。重ね焼きの痕跡があり、体部下半部はかなり凹んで変形している。調査当初は井戸跡との所見であるが、地中に据え置かれたも

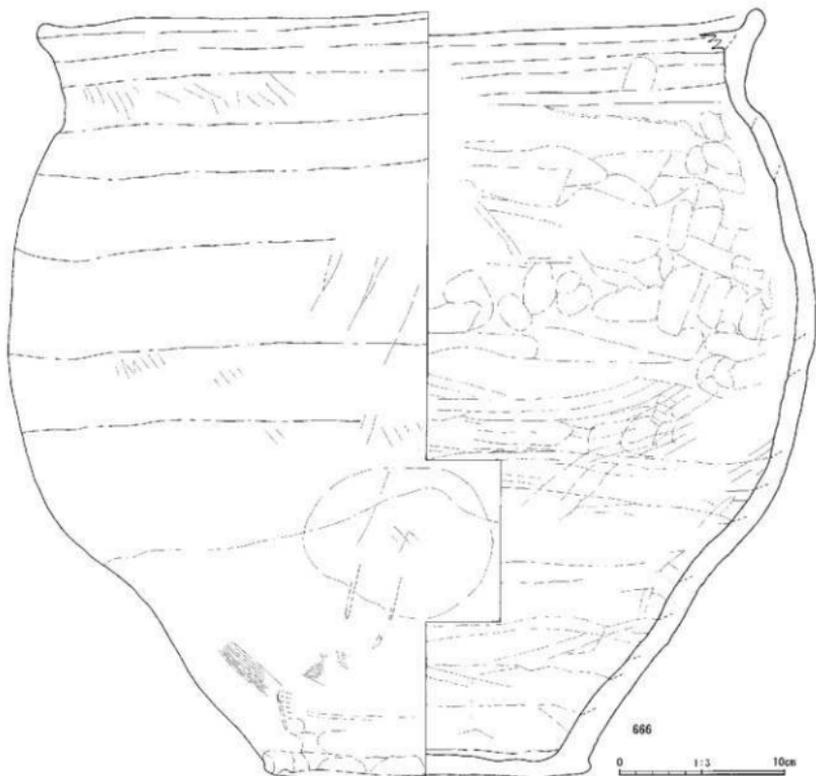


図 109 包含層出土陶磁器 7

のであった可能性がある。

中世陶磁器については、資料整理作業のなかで藤澤良祐氏（愛知学院大学）、足立順司氏（静岡県埋蔵文化財センター）、河合修氏（静岡県教育委員会文化財保護課）、溝口彰啓氏（静岡県埋蔵文化財センター）に指導をいただいている。以下、藤澤氏の所見をもとに当遺跡における中世陶磁器の概要をまとめた。

寺家前遺跡から出土した陶磁器全体を見ていえるのは、中世貿易陶磁が多いことである。少量であるが白磁の四耳壺等の威信財も入っている。おそらく屋敷地は12世紀後半に成立して、鎌倉時代にかかる。鎌倉時代にも良い陶磁器は入っているようである。一方、14世紀半ば以降の輸入陶磁器は少ない。染付もほとんど見られない。

大窯製品が少ないことも挙げられる。特に端反皿・丸皿が少ない。これらは供膳具の主体をなすものである。出土した陶磁器は大窯新が多く、大窯後は少ない。供膳具（端反皿・丸皿）は普通の集落ならば出土量は多い筈なのだが、寺家前遺跡では数が少ない。むしろ天目茶碗のほうが目立つ。

登窯時期は地元のものが多い。一方、瀬戸美濃物は少ない。瀬戸の製品は、前期のものがほとんど見られない。なかでも当遺跡から出土している突帯四耳壺は珍しい器種である。中期は文様のある水注や天目茶碗がある。しかし全体に見れば数は少ないといえる。後期になると瀬戸美濃製品が多くはなっているが、古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ期は少ない。古瀬戸後Ⅳ期古・新段階（15世紀中頃）から量が増えてくる。しかしこれも数としては多い方ではない。常滑・渥美製品も入ってきている。

屋敷地で使われた陶磁器は、全体に見て器種が揃っていない印象である。縁袖小皿や染付が非常に少ない。播鉢は数が多くあるので、ある程度の人が生活していた感はある。しかし人数は少なく、そう多くの人は住んでいなかったのではないと思われる。

イ. 上層2期の遺物

(ア) 土器・陶磁器

上層2期としたのは律令期から鎌倉期までのものであるが、この期の遺物には掘立柱建物の柱穴および区画溝・井戸さらには前面の水田畔など遺構から出土したものと包含層あるいは上層1期および、それ以後の攪乱層から出土したものとがある。後者は包含層出土の土器として一括している。

出土した土器の大半は山茶碗であり、全体の42.4%を占めている。それに一部に古瀬戸さらには青磁・白磁などの輸入陶磁器が含まれている。また、少量ではあるが律令期の須恵器・灰軸陶器および、土師質の鍋・釜・かわらけなどが含まれている。

遺構に伴ったものの大半は山茶碗であり、水田畔と水田面から出土したものには山茶碗に混じって、

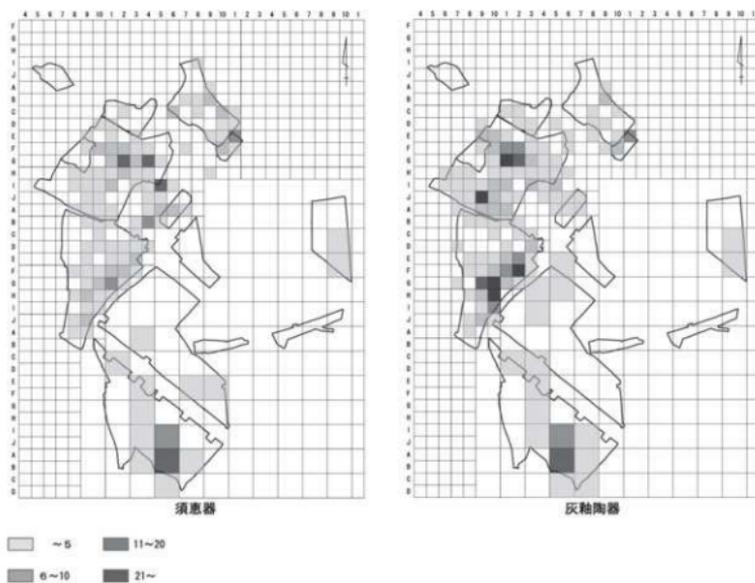


図110 須恵器・灰軸陶器出土分布図

須恵器・灰釉陶器が含まれており、この地域に条里水田が設けられた時期と、それが使われた時期を示している。また、須恵器・灰釉陶器はA-1区の整地層から比較的多く出土しているほか、各地点から散漫に出土している。

図110に須恵器・灰釉陶器の出土地点の概略を示した。須恵器はE-2・E-3区およびA区に分散して出土しているが、E-2区の北・東およびE-3区の東さらにA区の南に集中する区域が認められる。しかし、明確な遺構に伴ったものはごく少ない。詳細に観察すると遺物の出土量が多い地点は遺構群の東側に当たる場合が多い。これは、どの段階であるかは明らかではないが、後世に建物群を造る段階で、多少の整地が行われ、削平されたことによって、遺構もろとも削り取られ、東側の傾斜面に押し出された結果であろうと推定している。

灰釉陶器もE-2区中央部分と、E-3区南寄り、さらにA区南端に比較的多く出土する地点があるが、灰釉陶器は須恵器とは異なり、中世の遺構に重なっている部分が多い。灰釉陶器に伴う遺構は明らかになっていないが、検出された建物群の一部は灰釉陶器段階から始まっているものがあろう。

A-1区では須恵器と灰釉陶器の多く出土する地点がほぼ一致している。出土量の最も多いのは3群としたA-1区の整地層の部分で、この付近に律令期の遺構があったこととあわせ、A-1区の整地が灰釉陶器以後、山茶碗段階に行われたものであることが推定できよう。

図116から図117は山茶碗の出土量を時期別に示したものである。10m×10mのグリッド内から何片の山茶碗が出土しているかを示している。各期ともに建物遺構周辺からの出土量が多いが、山茶碗編年のI-1期・III-2期では出土量が少なく、III-3期には出土はほとんど認められない。III-1期に出土量が最も多いことが知られる。山茶碗の出土量の多さが、単純に遺跡の盛んな時期を示すとすれば、I-1期に形成された遺跡（先に記したように、灰釉陶器段階の末には建物群が形成され始めるらしい）は、I-2期には土器の出土量も、出土の範囲も拡大している。このときには2群とした建物群の周辺からの出土が最も多くなっている。

また、I-1期では3群からの出土量は少ないが、ともかくすべての建物群ともに遺物が出土しており、最初から3群の建物群ともに建物が営まれていたことを示している。

III-1期になると山茶碗の出土量が大幅に増加するとともに、やはり2群の建物群が中心になり、1群・3群がそれに続いている。

III-2期では遺構の数が減少するとともに、山茶碗の出土量も大幅に減少し、III-3期には山茶碗がほとんど検出されなくなることから、建物群もほぼ廃絶したものであろう。

山茶碗の出土量と遺物の広がりから、遺跡の盛衰を以上のように考えている（註1）。

寺家前遺跡出土の山茶碗の大半はいわゆる旧金谷町五和地域の窯で焼かれたものと推定されているので、その分類および編年はこの地域の土器を検討した松井一明・河合修両氏の分類に従う（註2）。

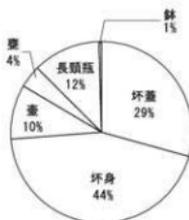


図111 須恵器器種組成表

出土した山茶碗はI期から始まり、III-2期にまで（すなわち山茶碗のほぼ全時期）及んでいる。山茶碗の出土量は表に示したとおり（註3）であるが、I-1期はごく少なく、碗は全体の2%にすぎない。I-2期になると急速にその数量を増し、最も多いのはIII-1期で、全体の30%を占めている。III-2期には出土量が急速に減少し、遺跡が衰退していることを示している（註4）。

A. 須恵器・灰釉陶器（図112～115）

須恵器は有蓋の坏蓋・坏身・無蓋坏・長頸瓶・壺蓋・陶臼等が出土している。各器種の出土比率を図111に示したが、特殊な器形は少なく、むしろ集落遺跡に一般的なものである。出土した資料のほぼすべ

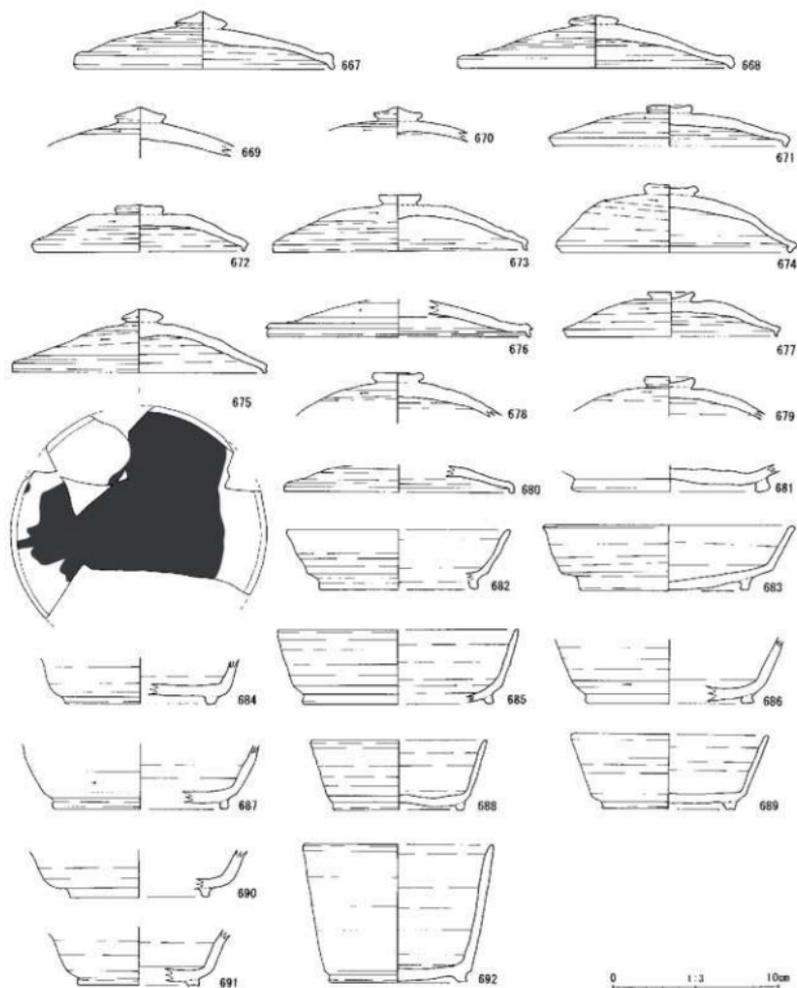


図 112 包含層出土須恵器 1

ては器形・成形技法から助宗窯で生産された製品である。

坏には有蓋の高台坏と無蓋・無高台の坏がある。図 112 上段は坏蓋で下段は坏身である。坏は口径から大・中・小に分けられるが、出土量が少ない上に口径を復元できる破片が少ないので、その比率はあまり意味をもたないであろうが、大の数が少なく、中・小のものが中心を占めている。これは近接する御ヶ谷遺跡など官衙関連の遺跡には口径の大きな坏が多いことと比較すると、寺家前遺跡出土須恵器

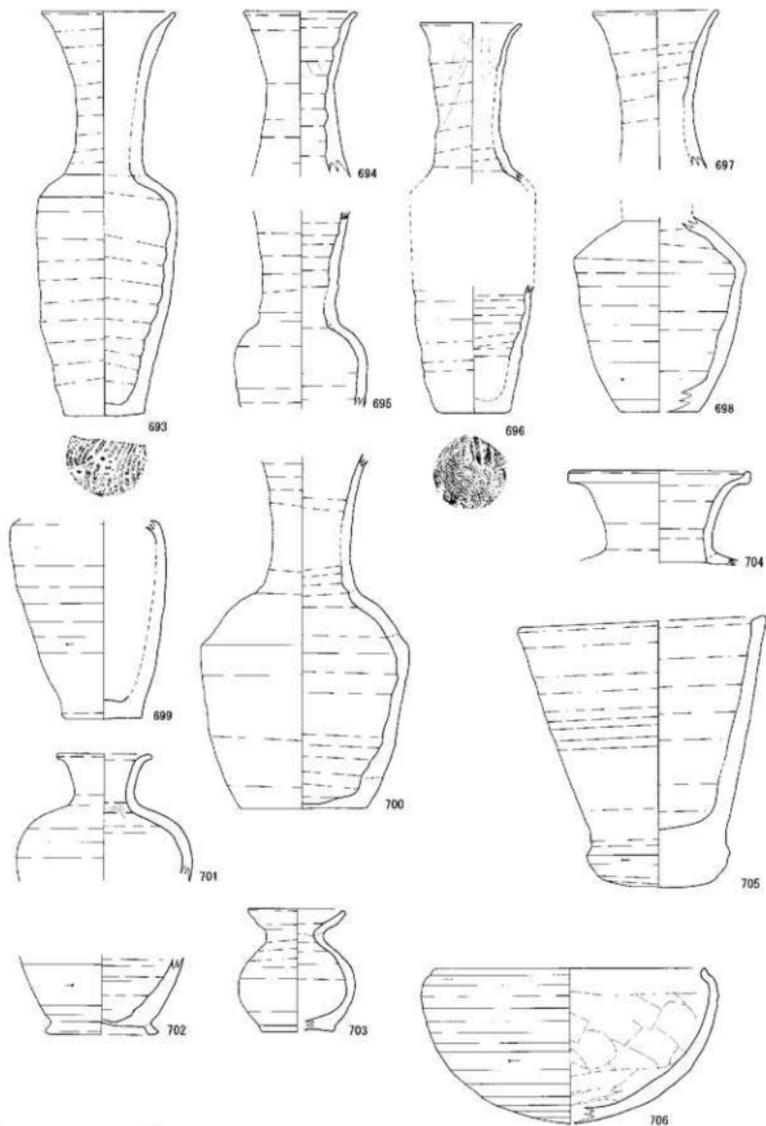


图 113 包含層出土須恵器 2

の特徴だといえる。やはり、こうした特徴は遺跡の性格を暗示している。

蓋は、いずれも蓋頂に摘みをもっており、摘みの形にも差がある。しかし、その形の差は口径の差と必ずしも一致するものではないらしい。しかし、**図 36-149** に示した先端の尖った擬宝珠状の摘みをもった環蓋は口径が大きく、他の遺跡でのあり方からもこうした形態の摘みは大型の環に多いらしい。環は角張った高台の形や鉄分を多めに含んだ胎土の特徴から見て、ほぼすべてが地元の助宗古窯の製品であることが理解できるが、**682** は高台の形・胎土に差があり、色調も明灰色で、湖西古窯の製品であろう。

また、環は口径が 14～15cm 代のものと 10cm 前後のものとの二者がある。さらに **692** でみるように器高が 8cm 代と深いものも含まれている。

図 114 に示したものは無蓋の坏で、底部に糸切り痕を明瞭に残している。**675** は蓋の内面に墨が残っており、硯に転用されたものであろう。しかし蓋頂部の摘みは残してあるので、単独で硯として使用されたものではなく、坏と組み合わせて用いられたものであろう。**図 113** は長頭の瓶である。また、3群整地層出土の**図 36-156** は頸部以上を欠いているが、長頭の平壺である。出土した須恵器は、総じて奈良時代中頃から後半のものが多く、**707～713** のような無高台の坏は 9～10 世紀にかけてのもので、灰釉陶器と伴出する。

灰釉陶器は遺構出土のものは少なく、大半が包含層から散漫に出土している。先にも触れたように、各調査区から出土した灰釉陶器の量をみると、各建物群にかかるように出土の多い部分があり、1群南面溝 (SD2452) からは何点かが出土している。これらに見るように、各群ともに何らかの遺構が灰釉陶器段階に営まれた可能性があろう。特に1群の北面区画溝の周囲には灰釉陶器の集中する区域があり、この区域には遺構があったのかもしれない。

図 38-196 は7層水田の耕作土からの出土であり、**図 27-13** はSD3959から出土したもので、深碗形態の灰釉陶器である。SD3959は1群北面の溝 (SD3839) として整備される以前の流路の一部と考えられている。また、**35** は1群の南面区画溝の一部であるSD3049からの出土であり、少なくともこの付近には灰釉陶器の段階に何らかの遺構が設けられていたものと考えてよからう。

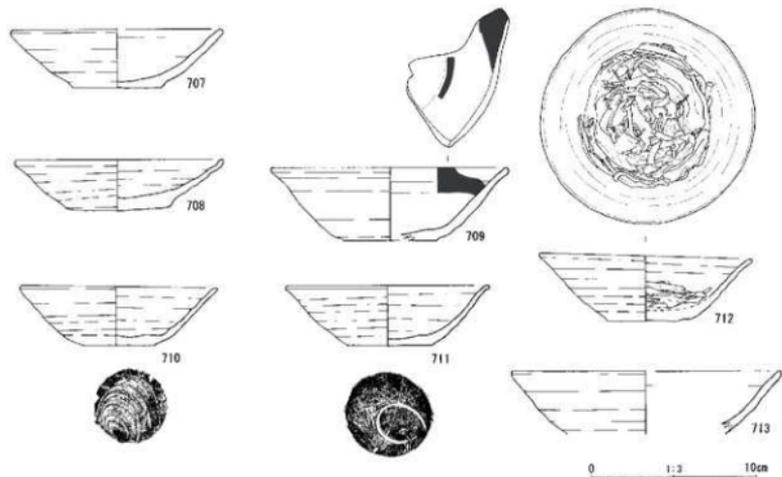


図 114 SR9124・包含層出土須恵器 3

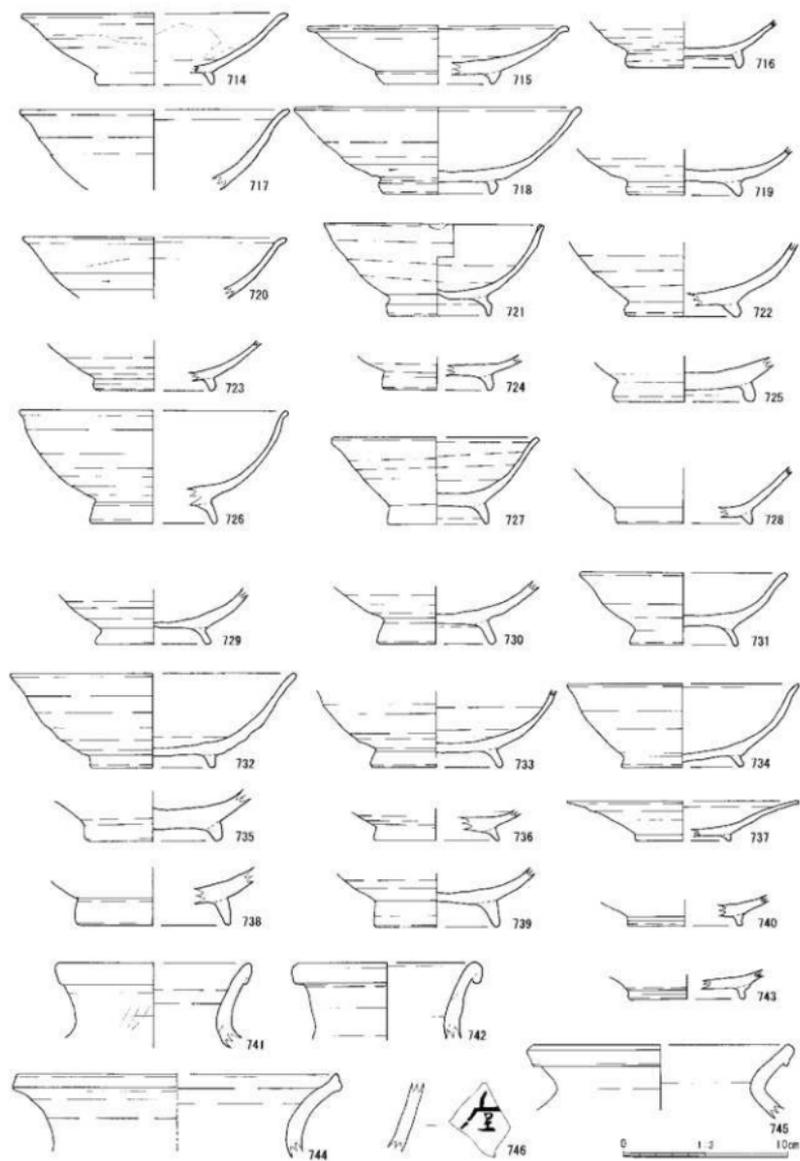


図 115 包含層出土灰釉陶器

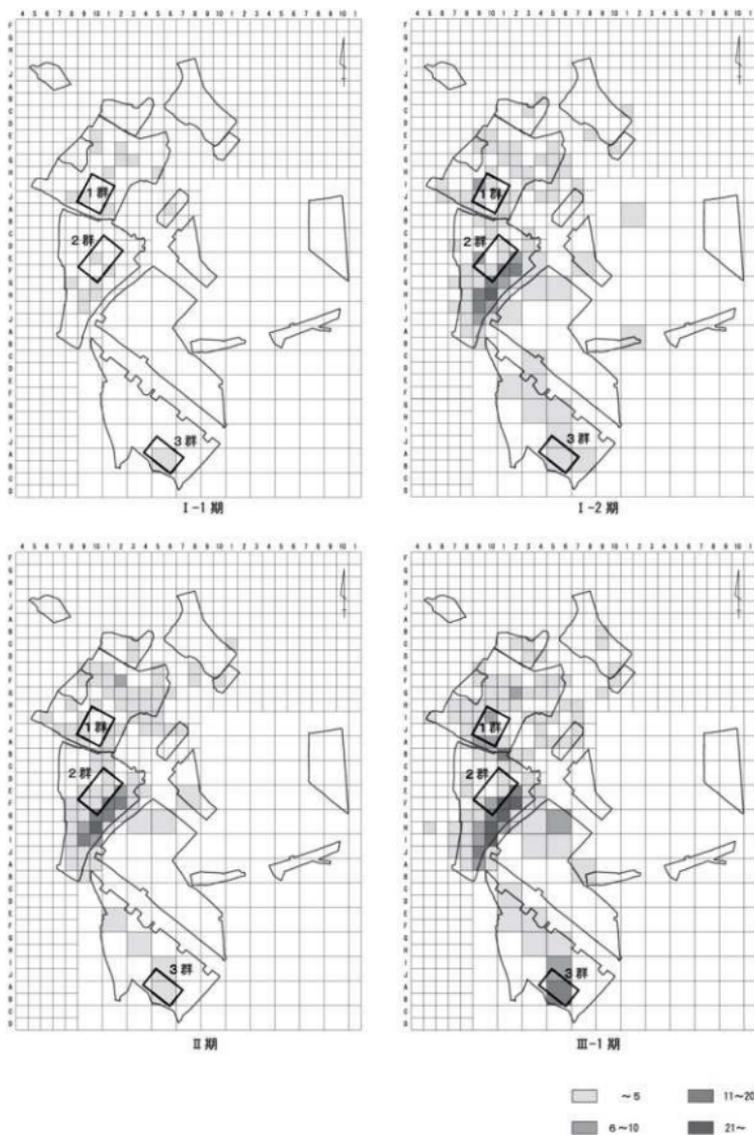


図 116 山茶碗時期別出土量 I

包含層から出土した灰軸陶器を図115に示した。全体を3期に分けているが、ほぼ全てが遠江産の灰軸陶器で、軸の発色が悪く、施軸の有無を見分けるのが難しい。また、施軸していても発色していないものが多い。

1群 器形・高台の形から猿投窯編年のK90段階に併行するもので、714・715・718などがこの段階に含まれる。717は高台部分が欠けており、明瞭ではないが、口縁部を外に引き出している形の特徴から1群に含まれるものであろう。

2群 719・722等で、高台の形が大きく変化するとともに口縁部の引き出しが弱くなっている。施軸しているか否かも明らかではなく、733は重ね焼きの痕跡が明瞭である。737は器形が整った皿であるが、底部に糸切り痕を明瞭に残している。いずれも遠江産のもので、猿投窯編年のO53段階に併行するものである。

3群 高台の高い深碗タイプのもので、726・732などに代表される。猿投窯編年の百大寺式段階に対比できよう。これらの灰軸陶器は軸の発色も悪く、施軸しているか否かも明らかでないものがある。多くは隣接する助宗窯で生産されたものであろう。助宗窯では一部で灰軸陶器の後半段階から生産が行われていることが知られている(渋谷 2007)。

図115下段に示したものは、これらの灰軸陶器に伴う壺である。この他に、底部外面に墨書を施したものがある。墨書については別に説明する。

B. 山茶碗

東遠江系(図118～122) 各遺構出土の山茶碗については、遺構の説明で触れているので、ここでは包含層出土の山茶碗について簡単に述べることにする。

出土した山茶碗の95%は東遠江系の山茶碗であり、これに湖西・渥美系の山茶碗(4%)を加えると碗・小碗・小皿の類のほぼすべてである。東遠江系の山茶碗は全体を3期に分け、さらに各期を細分している(松井 1993・河合 2001)。

I-1期 旗指21号窯あるいはアザミ沢古窯の資料を基準にしたもので、碗は丸みをもった胴部から口縁部を外に強く引き出している。高台は比較的高く、強く外側に張っている。図118に示したものはいずれも1類の山茶碗で、外に強く張った高台をもち、湾曲した胴部から口縁部を外に引き出した1類のものが中心で、体部が直線的に立ち上がる2類のものは見あたらない。口径はいずれも17cmほどあり、器高は6cm前後である。

小碗には1類(756・758)と2類(757・761)とがある。756は碗1類をそのまま小型にしたような形で、口径12.0cm、器高3.75cmである。小碗の数は比較的多く、10個体を数えている。全体に出土量は多くはないが、中心となる遺構、特に各区画溝から少量ずつが出土している。

I-2期 この期には山茶碗の出土量が急増している。II期と分別が難しいものまでを含めると全出土量の20%程度を占めている。768を除いた碗はす

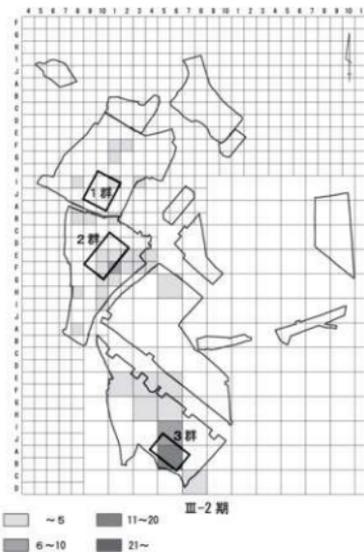


図117 山茶碗時期別出土量2

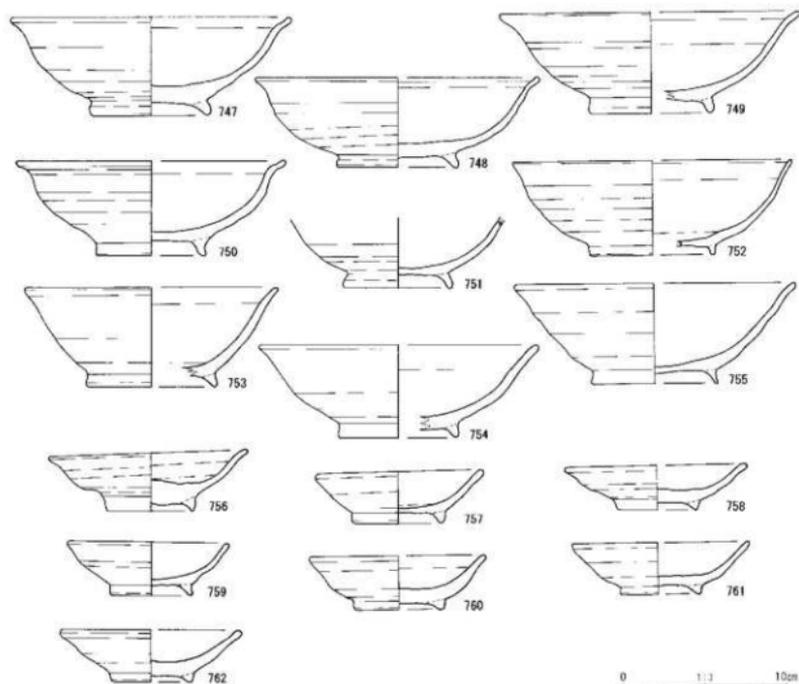


図118 包含層出土山茶碗（東遠江系 I-1期）

べて1類で、口径は15.6～18.6cmとI-1期に比べると口径がやや大きくなり、器高も6cm程度のものが多くなる。768は体部が直線的に上がっており、2類に含めてよい。

小碗には1類・2類の両者が含まれるが、2類が多く、1類の出土量は少ない。777は体部から口縁部内面にかけて縦方向に煤が付着しており、灯明皿に使われたものと思われる。小碗の用途の一端を示しているよう。

Ⅱ期 1類の碗(800)と、松井一明氏がC類とした球形胴のもの(804・806)がある(松井1993)。体部が直線的に引き上げられる803は2類に属すものかもしれない。口径は縮小しており、802は15.8cmほどである。800は指頭圧痕による輪花を施している。801は底部の糸切り痕の上に木葉痕が残っている。体部を成形した後の乾燥時に木葉を敷いたことを示しているよう。木葉痕が残っている範囲から見て、これは高台を付ける以前の乾燥時であることがわかる。

小碗と高台をもたない小皿の両者がある。808は1類の小碗で、口径8.25cmと大ぶりであるが、器高は2.4cmほどに縮小している。807は2類で口径は9.4cmと大きい器、器高は2.7cmほどと小さくなっている。高台を除いた坏部だけの器高は2cmで小皿との差はない。高台を欠いた小皿は出土数が少なく、5点ほどである。

Ⅲ期 出土した山茶碗の量が最も多い時期であり、全体の50%を数えるが、中でも、Ⅲ-1期のもの

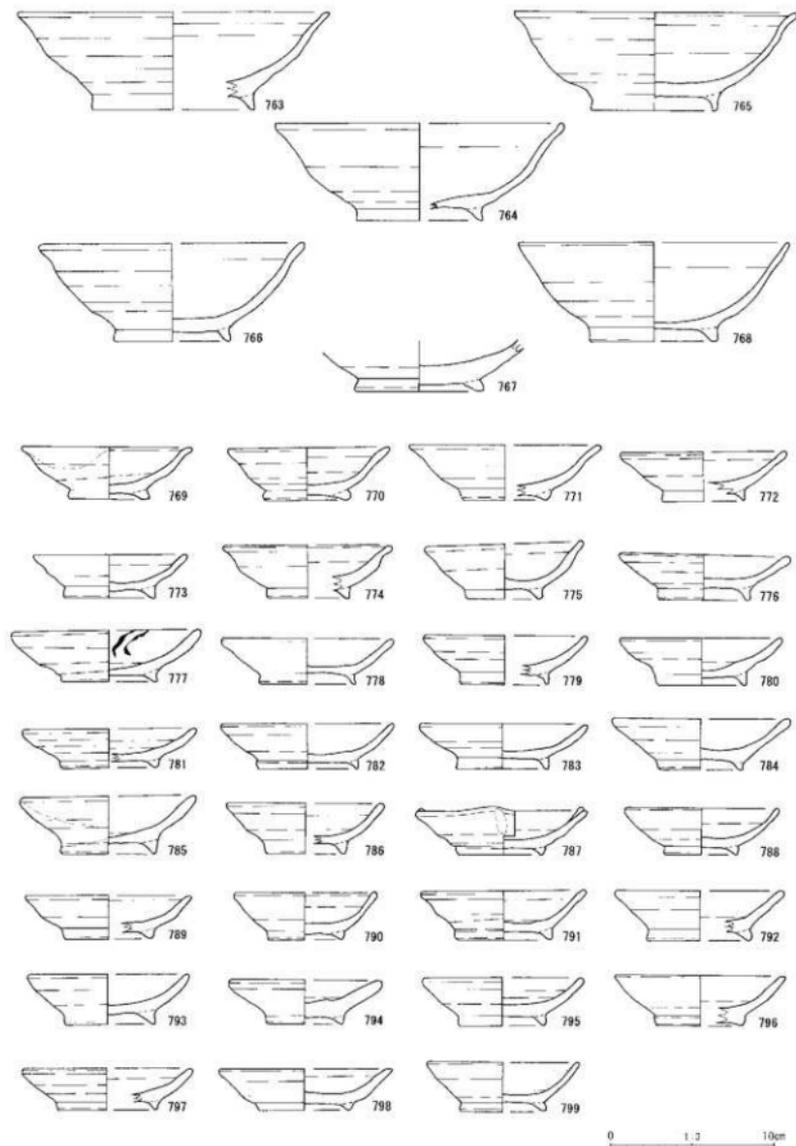


図119 包含層出土山茶碗（東遼江系 I-2期）

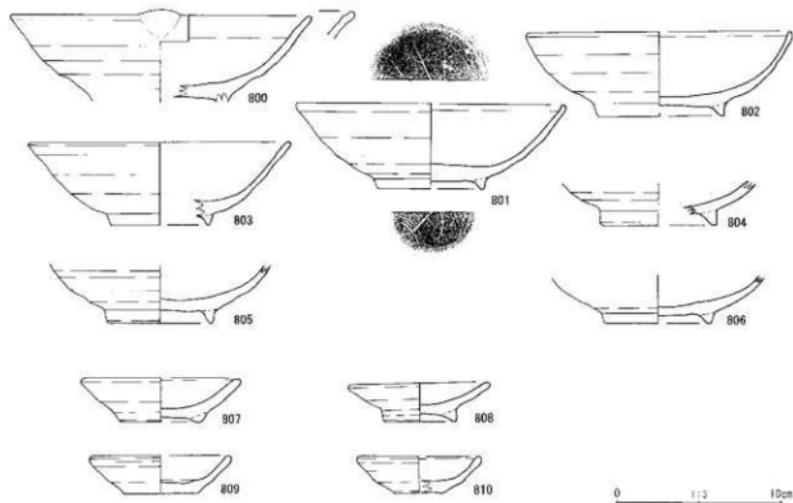


図120 包含層出土山茶碗（東遼江系 I-2・II期）

が多い。

Ⅲ-1期 1類・2類の碗はほとんど見えなくなり、大半は松井氏がC類とした球形胴の山茶碗である。高台は退化して小さな三角形をしているが、中には817のように扁平化した角高台に近いものも含まれている（あるいは成形後の乾燥時に起きた変形かもしれない）。

小皿は底部と体部の境が明瞭なもの（819～833）と体部から底部まで稜をもたずスムーズに連続しているもの（834～847）の両者がある。口径は8cm代、器高は2cm代のものが中心である。

Ⅲ-2期・Ⅲ-3期 この期はⅢ-1期と比較して、出土量が激減する。碗は63片が確認されているが、これは碗全体の5%を占めるにすぎない。小皿の減少はさらに激しい。

碗は低く崩れた三角形の高台をもつものが多いが、中には低い角張った高台をもったもので河合修氏が3群としたものも含まれている（河合 2001）。口径14cm代で器高は4cmと低くなっている。小皿も口径8cm代、器高も2cm弱と小さく、薄いものが中心になる。（Ⅲ-2期：848～877、Ⅲ-3期：878～884）

湖西・渥美系（図123・124） 両者の識別が難しく、一括して扱われることが普通である。寺家前遺跡から出土した湖西・渥美系の山茶碗の量は多くはないが、碗と鉢の両者をあわせて、破片数で全体の4%を占めている。時期的にはⅠ期～Ⅲ期までのものを含んでおり、東遼江系の山茶碗の時間幅とほぼ一致している。しかし、量的にはⅢ期に属するものが圧倒的に多い。湖西・渥美系、尾張・知多系を含め、碗よりも鉢・片口鉢が目につく。数量が少ないだけに比率で見れば高い数値を示すことになる。碗・皿は東遼江系で満たすのに対して、片口・大鉢などは湖西・渥美系など他地域のものに依存していたと言うことができるかもしれない。

I-2期 碗と小碗を図示した。888は口縁をやや外側に引き出し、体部の張った碗で、松井氏の分類によるA-3類に属するものであろう。口径は15cmほどである。内面には重ね焼きの痕跡が残るが、自

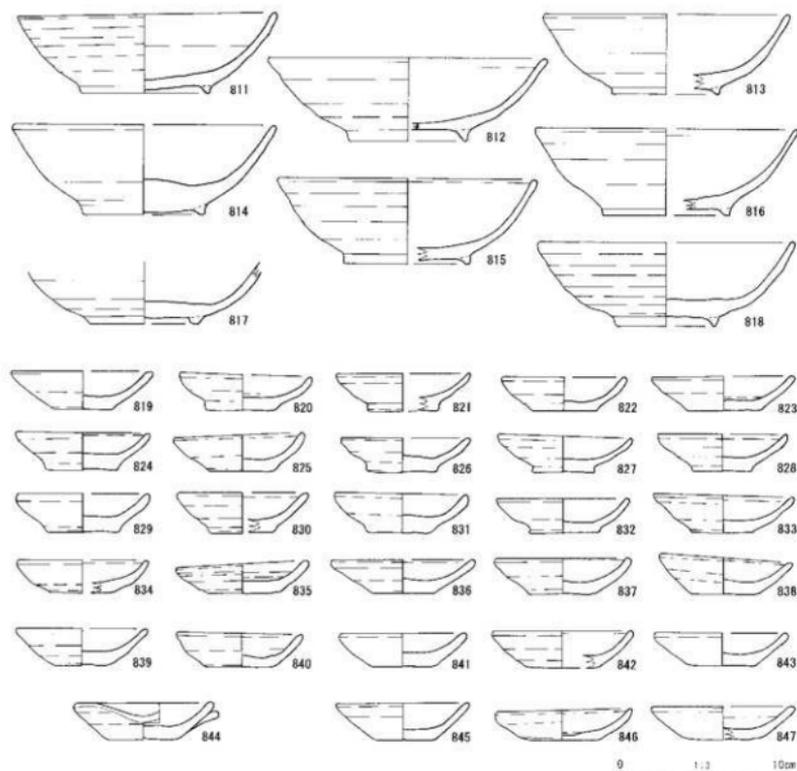


図 121 包含層出土山茶碗（東遠江系 III-1 期）

然釉が色濃く発色している。口縁部に指頭による輪花がある。口縁の一部が欠けているが、輪花は4箇所に付けられたものであろう。高台は内側が強くなでられた三角形を呈しており、端部にはモミガラ痕が残っている。

885は口径10cm弱の小碗である。低い高台をもったもので、やはり松井分類のA-3類に含まれるものであろう。重ね焼きをしているが、内面には自然釉が発色している。

II期 底部のみの破片であるが、889は高台の形からII期に含まれる。高台の先端はひしげているが、端部にはモミガラ痕が残っている。内面には降灰による自然釉が色濃く発色している。890(524)も同様の高台をもつ。890は底部の拓本を図示した。底部に糸切り痕を残し、高台を貼り付けているが、高台の先端にはモミガラ痕が残っている。したがって、このモミガラ痕は高台接合後の乾燥時に付いたものであろう。

III-1期・III-2期 この期のものが最も多い。892(54)は内面に部分的に墨が残っており、転用碗あるいは灯明皿として使われたものかもしれない。891と894は高台付きの碗である。両者ともに口径

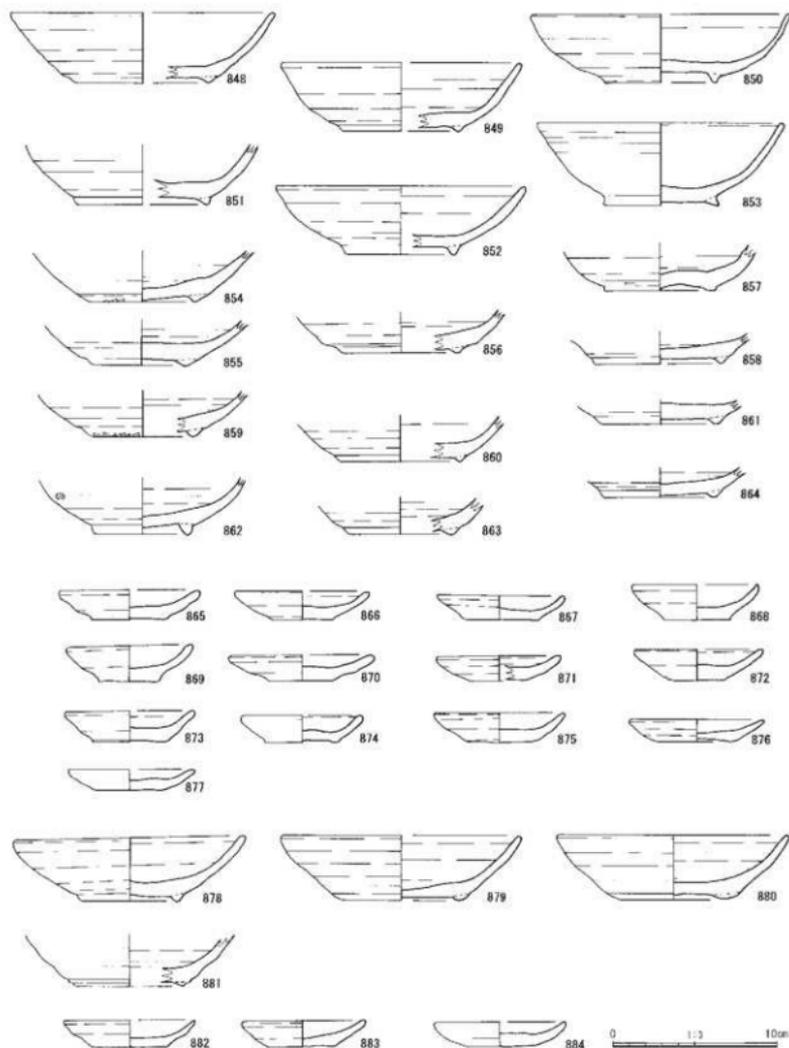


図 122 包含層出土山茶碗（東遠江系 III-2・III-3期）

は比較的大きく、16cmほどある。高台は退化して、低い三角の高台になっている。底部の破片であるが、893(6)もこれに含まれるものであろう。

III-2期 退化が著しく、形骸化した高台をもった892(54)がある。900は扁平化した小皿である。

高台をもたず、口径も8cmと小さい。

この他に、口縁部から胴部の破片であるが、口径の大きな鉢がある。底部を失っており、時期的には明確ではないが、903(42)はやや口縁を引き出したもので、906は底部近くの体部は回転ヘラケズリが施されている。上部にはヨコナデでの成形が施されている。

また、小破片ではあるが甕の破片が3片出土している。904(345)は肩の部分の破片で、上向きの蓮弧文が描かれている。この他に口縁部および頸部の破片がある。胴部の破片には細かな斜格子のタタキが施されている。いずれも渥美系山茶碗編年の1期に含まれるものである。

尾張・知多系(図123・124) ごく少量であるが尾張・知多系の山茶碗がある。碗は少なく、鉢・片口が多い。897(32)は底部から体部にかけての破片で、三角形の高台をもっている。同じく898は山茶碗底部の小破片で、退化した高台から中野晴久氏の5あるいは6型式に比定できるもの(中野1997)で、東遠江系の山茶碗のⅢ期に併行するものであろう。内部に重ね焼きの痕が強く残っている。また、902は片口の鉢で、高台は比較的しっかりしており、2型式に比定できよう。他に大鉢(905)がある。

壺は小破片ではあるが3点が確認できた。1点は肩に三筋の圏線を巡らし、灰釉を掛けたいわゆる三筋壺で、他は口縁端部が立ち上がる壺で常滑編年の5型式の壺である。無釉で褐色をしている。

この他に甕の口縁部破片が2点ある。907(664)に示したものは厚手の胎土をした大型の甕で、やはり口縁端部が上方に立ち上がっている。他は器壁の厚さから比較的小型の甕であろう。いずれの常滑窯編年の5型式に比定できる。

C. 古瀬戸

基本的には、古瀬戸前期のものを山茶碗に伴うものとした。藤澤氏の編年に依れば古瀬戸中期1段階

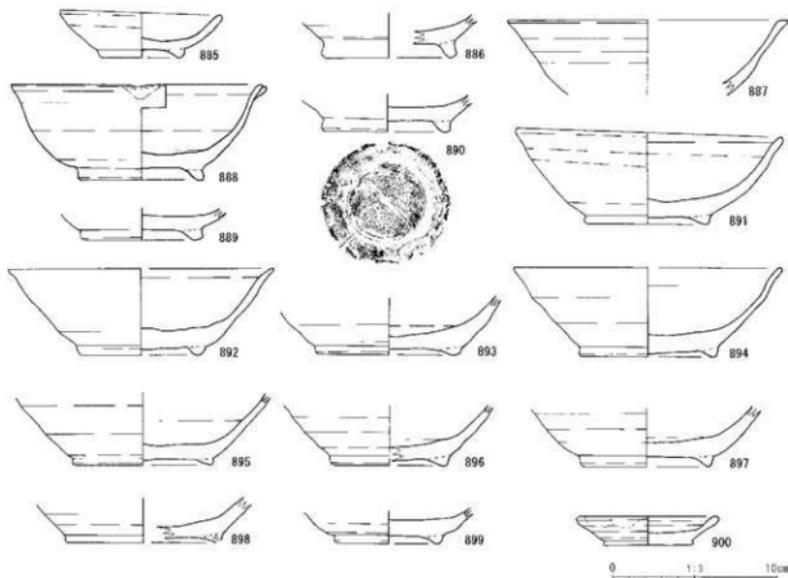


図123 包含層出土山茶碗(渥美・湖西系、尾張・知多系)1

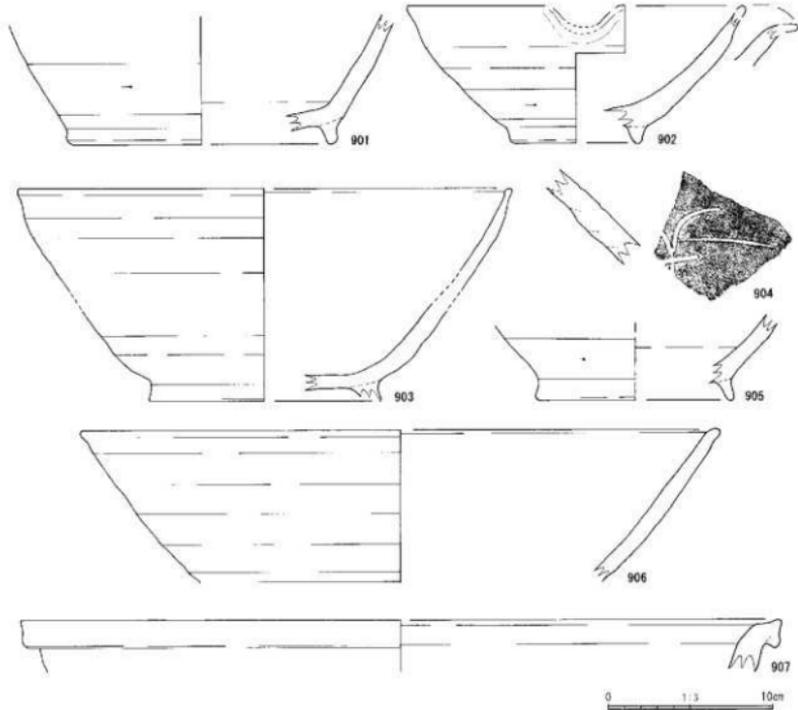


図124 包含層出土山茶碗（渥美・湖西系、尾張・知多系）2

くらいまでを山茶碗に併行すると考えられているようであるが、ここでは前期段階までにとどめた。いずれにせよ出土量は非常に少ない。

古瀬戸前期のものは13点、中期段階のもの8点で、その量はごく少ない。出土した陶器の大半は古瀬戸後期のものである。

古瀬戸前期段階のものは小破片も含めて13点が確認できた。卸皿1点を除いては、いずれも壺類である。内訳は表16に示したように四耳壺5点・瓶子2点・平瓶1点である。時期的には小破片で不明のものを除くと、古瀬戸前期Ⅱ段階のものが2点、Ⅱ～ⅢあるいはⅢ～Ⅳを含めたⅢ段階のものが3点、Ⅳ段階のものが2点である。古瀬戸前期段階のものは鎌倉を除いて、愛知県内あるいは、京都を含めても、集落遺跡からの出土が少ないことが指摘されている。（藤澤 2002）

寺家前遺跡でも出土量は多い数ではないが、壺を主体として出土していることに注目しておく必要がある。

蛇足かもしれないが古瀬戸中期・後期のものについて、簡単に触れておこう。

古瀬戸中期段階のものは表に示したように梅瓶1片・底卸目皿を含め皿が3点・天目茶碗が2点である。量は少ないが、前期では壺が中心だったのに比べ、天目茶碗・皿など様々な器形が含まれているこ

とが注意される。

量的にも器種の上でも急速に増大するのは古瀬戸後期の段階である。表に示したように前期・中期のものが21点に加え、後期のものは173点が出土している。碗・天目茶碗・播鉢が中心になり、三者で69%を占めている。このほかに小皿・盤・仏具などがあり、前期に中心であった壺はわずかに6点で全体の3%を占めるに過ぎない。最も多いものは碗類で48点、全体の28%を数え、ついで播鉢が39点22%を占めている。天目茶碗の35点で20%を数えている。天目茶碗は中期・後I期にはほとんど認められないが、後II期には現れ、後IV期には全体の16%を占めるまでに至る。また、播鉢は後IV期から目立つようになり、後IV期新には23点、全体の30%を占めている。加えて、後期から大窯にかけての播鉢が数多く出土している。

簡単に見てきたように古瀬戸は前期・中期段階は壺を主体に、出土する器種も限られている。これに対して後期には様々な器種が現れ、中でも生活用具が急速に増加していることが理解できる。

D. 貿易陶磁器 (白磁・青磁)

出土した陶磁器には白磁と青磁がある。全体で249片が出土しているが、そのうち山茶碗と伴出すると考えられるものは160点で、全体の70%を占めている。他は14～16世紀にかけてのものである。

白磁 (図125)

全体で63片の白磁が出土している。12世紀前半から16世紀に至るまでのものを含んでいるが、ここでは主に山茶碗と伴出するものを扱うことにする。したがって横田・森田両氏の分類のII類からIX類までのもの(横田・森田 1978)ということになるが、ここでは型式分類は基本的には『横地城跡』報告における原氏の分類(原 1999)に従い、森田氏の編年を参考にして分類を行った。

碗・皿・壺があるが、量的には碗が中心で、全体の48%を占めている。壺・皿の量はほぼ等しく、壺23%、皿が26%を占めている。壺には四耳壺と水注が1点含まれている。器種構成については後に触れることにして、中心を占める碗・皿をみる。

II類の碗が3片ある。幅の小さな玉縁の口縁部をもち、口縁部直下にやはり幅の狭い沈線を巡らせた口縁部の破片で、内・外面に施軸している。太宰府では12世紀の初めから見られるものようである。

IV類の碗はII類に比べて、口縁部に幅の広い玉縁をもったものであるが、口縁部の破片が4点ある。玉縁の直下に沈線を巡らせているものが認められるが、いずれも小破片で図示はできなかった。他に底部破片が3点あり、P-6652(図版79)は比較的大きな破片で、高台の削り出しは比較的浅く、底部は厚い。体部外面下半と底部外面、高台には施軸をしていない。胎土は白色である。内面は底部まで施軸している。体部と底部内面(見込み)の境には段を設けており、内面には重ね焼きの痕が残っている。P-5899(図版79)も小破片ではあるが、高台の削り出しが浅く、底部は厚い。高台と底部外面は無軸であるが、内面は底部まで軸がかかっている。12世紀後半と考えられているものである。

VIII類がある。体部にやや丸みをもち、口縁が外反した、いわゆる端反碗で、口縁端部は平坦に仕上げている。内・外面に軸を施している。909は軸調がやや緑灰色を呈している。やはり、12世紀後半には出現すると考えられるものである。

IX類 小破片ではあるが、口縁内面に施軸をしない部分をもった、いわゆる「口元」の碗と皿がある。体部はいずれも内・外面に施軸している。P-6394は無台の皿で、体部と内面底部との境に浅い沈線を巡らせている。これは、太宰府史跡SD605からは貞応3年(1224)銘の木札を伴い、13世紀中頃の資料と伴っていることが知られており、13世紀後半から14世紀前半と考えられている。この他に時期がよくわからない小破片の白磁が何点かある。

寺家前遺跡の白磁は包含層あるいは歴代にわたる遺構(攪乱坑を含む)から出土したものが多く、遺構では屋敷地の区画溝から出土したものが多い。したがって、残念ながら山茶碗との伴出関係を整理で

きるものが少ない。以下、遺構出土で山茶碗と伴出関係が理解できるものについて多少触れることにする。

908 (34) は1群建物の南面区画溝 SD2452 から出土したものであるが、ここからは数多くの山茶碗が出土している。山茶碗にはⅠ-1期あるいはⅠ-2期に属する古手の山茶碗が多く、下限はⅢ期の小皿を含んでいる。したがって、SD2452 は1群とした屋敷地の全期間にわたって存続したことを示している。908 が山茶碗のどの段階に伴ったのかは今一つ明らかにならなかったが、古手の山茶碗の出土量が多いことから、これらに伴ったと考えることができよう。

P-3122 は1群の北面区画溝の南端近く (SD3839) から出土した四耳壺の小破片である。この部分の溝からは図30に示したようにⅢ-1期の山茶碗が出土している。

P-6582 (図版79) は2群の屋敷地の東面区画溝 SD8183 から出土している。この溝の延長部分であるSD9067からはⅠ-1期あるいはⅠ-2期さらにはⅢ期の山茶碗が出土しており、この溝が屋敷地の全期間にわたって、存続していたことを示している。したがって、この四耳壺の年代もそれにあわせておくことになる。また、東面区画溝のSD9067からも白磁の小破片が出土している。SD9067からは山茶碗Ⅲ期の小皿がまとまって出土しており、おおよその時期を示している。したがって、寺家前遺跡から出土したⅡ類からⅨ類の白磁の多くは山茶碗と伴出したもので、基本的には1群～3群とした建物群に伴ったと考えてよい。

説明してきた、Ⅸ類までの白磁の他に14～15世紀と考えられる資料が多少出土している。量的には多いものではないが、多少の説明を行うことにする。

B群の皿がある。小破片ではあるが、体部から口縁部の破片が4点、高台部分が4点である。皿の外

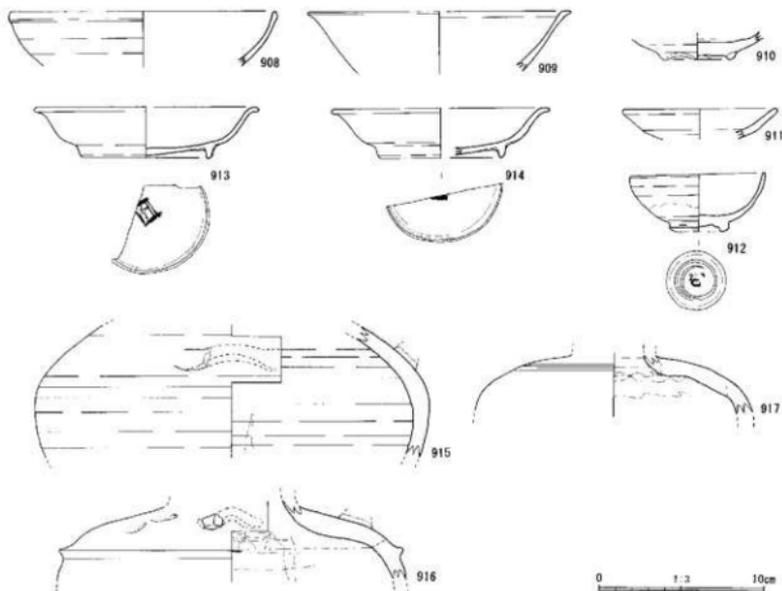


図125 出土白磁皿

面下半部はヘラケズリを施した上に軸がかかっているものとヘラケズリの部分は露胎のものとの二者がある。912 (483) はほぼ穹形の小さく内面は薄く施軸し、体部外面は上半部のみ施軸している。したがって、体部下半から高台にかけては露胎である。底部外面には墨書がある。

また、底部の破片は4点があるが、底部内面のケズリが少ないため、高台は低く、その上に4～5箇所弧状に挟り込みを入れている。やはり内外面ともに無軸のものと、高台端部(畳付け)以外には施軸してあるものがある。P-30 (図版79) は高台の挟り込みの内側まで軸がかかっている。森田氏の分類に従えば、D群に含まれ、15世紀に中心をおくものと考えられている。

C群には皿の破片が4点含まれている。いずれも口縁が外反した、いわゆる端反皿で、高台は細く比較的高い913・914の底部外面には軸の下に記号が書かれている。朝倉氏館跡などから出土しているものによく似ており、やはり15世紀に比定できるものであろう。

出土した白磁の多くは、包含層から出土したもので、他の土器との伴出関係は明らかではない。P-117 (図版79) はE-1区でSX205とされた流路の中の落ち込みから出土したもので、灰釉陶器・山茶碗・近世陶器など様々のものと混在している。

青磁 (図126)

青磁は全体で184片が出土しているが、大半は山茶碗に伴う13世紀代のもので、一部に14～16世紀にわたるものが含まれている。ここでは前者を中心に扱うことにする。出土した青磁の大半は碗で全体の94%を占めている。一部に皿が含まれている。したがって白磁に比べて器種は単純である。同安窯系のもの、龍泉窯系のものがあるが、大半は龍泉窯系のもので、同安窯系のもは23点、そのうち碗が18片、皿が5片で、他は龍泉窯系のものである。

同安窯系青磁 同安窯は福建省泉州市同安を中心とする地域に栄えた窯で、外国貿易(外銷)を中心とした窯(李 1999)と考えられているものである。軸調・施文方法など、龍泉窯の製品とよく似ており、区別が難しいが、緑に黄色味のかかったこの青磁は、日本では早くから「珠光青瓷」として珍重されてきた(李・李 1982)。寺家前遺跡からはいずれも小破片ではあるが、23片が出土している。碗の高台から底部にかけての破片が4点・口縁部をもった破片が4点、他は体部および皿の破片である。同安窯系の青磁はA・Bの2類に分けられているが、いずれも篋と櫛による花文が描かれている。今回出土しているものはいずれも細かな櫛描を施したB類である。以下、簡単に説明する。

碗921・922は底部の破片であり、体部下部和高台は無軸である。体部と底部内面の境には段をもっている。外面に縦方向の櫛文をもち、内面には篋描と櫛描をあわせ用いている。森田氏の分類によるI-1-b類に当たる。また、P-10097 (図版80) も底部の破片で、体部などの施文は不明であるが、底部内面と高台の境に段があることから、この類に含めてよいだろう。

P-10065 (図版80) はやはり底部の破片であるが、高台の削り出しが少ないことから、底部は分厚くなっている。内面に櫛描文を持っている。外面は小破片で、不明である。森田氏の分類のIII-1-bに含まれるものかもしれない。

918・923・P-5793 (図版80) はいずれも口縁部から体部にかけての破片である。体上部で内側にわずかに屈曲し、内面の上部に沈線を巡らせている。外面には細かな櫛描文を施しており、森田氏の分類によるI-1-bに当たるであろう。P-5770 (図版80) は胴部破片で、内面櫛描文であるが、外面は無文であり、I-1-aに当たるかもしれない。また、P-10061 (図版80) は口縁部の破片で、口縁をわずかに外反し、外面に篋描文、内面に櫛描文をもっており、森田氏の分類によるIII-1-cに当たるものである。

皿919・P-6478 (図版79) は同一個体と疑われるほどよく似た個体である。口縁部の破片で、体部中程で折れ曲がり、体部と見込みとの境で段を有する。内面の見込みに篋と櫛で施文している。底部は欠けており、様子は不明であるが、体部下半にまで施軸しており、全面施軸の後、底部のみ軸を掻き取っ

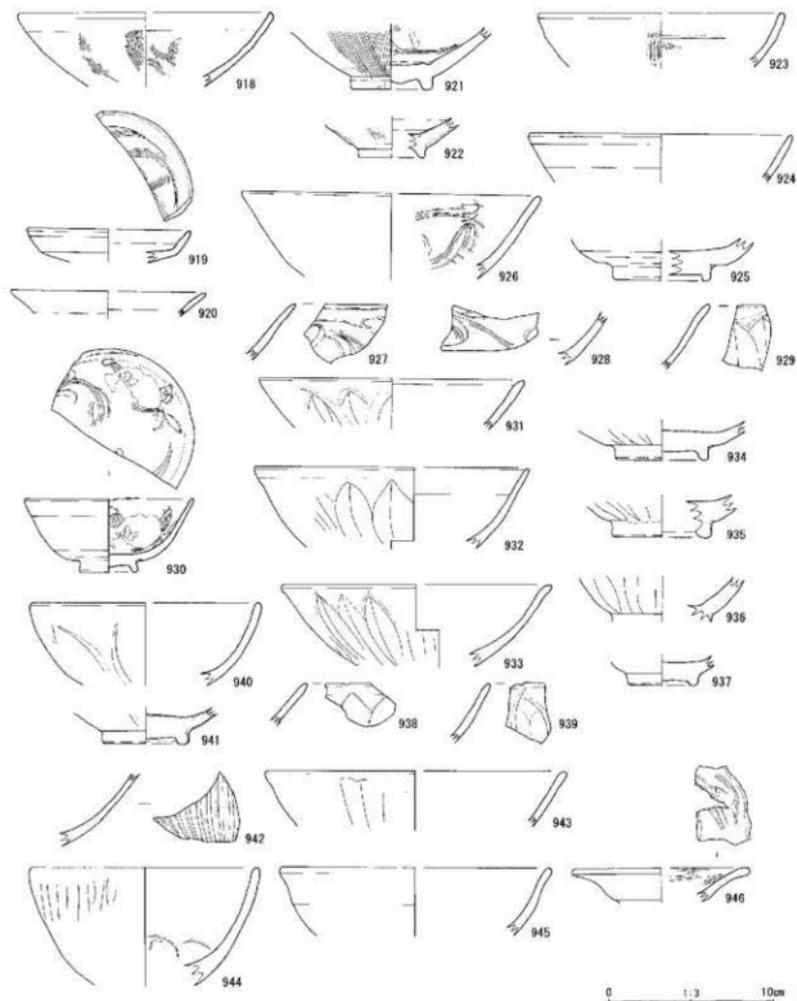


図 126 出土青磁

たもので、森田氏の I-2 に当たるものであろう。P-6533 (図版 80) は底部の小破片で、底は無軸であり、内面に櫛描を施している。やはり森田氏の I-1-b に当たる。同安窯系の青磁は龍泉窯の青磁 A 類とともに 12 世紀中頃から出土し始めるものようである。寺家前遺跡では白磁などとともに古手の山茶碗に伴ったと考えてよい。

龍泉窯系青磁 龍泉窯は言うまでもなく、浙江省南部の龍泉市を中心に、その周辺の地域にまで広く

広がった大きな窯業地域で、製品は日本にも越州窯製品に続いて、大量にもたらされている。寺家前遺跡でも出土した青磁の大半は龍泉窯系の青磁である。

龍泉窯系の青磁は全体で161片の出土が確認されているが、やはり碗が圧倒的に多く、山茶碗に伴うと考えられるものは、すべて碗である。量的には内面に篋描の花文をもつA2類、あるいは外面に篋描蓮弁文をもつB1類が中心である。表に示したようにB2類以後のものは急激に少なくなっている。白磁あるいは同安窯系の青磁さらには龍泉窯系の青磁のA類のものは建物の区画溝から出土するものが多く、それ以後のものは流路あるいは水田の畔からの出土が多い。以下、出土した龍泉窯系の青磁について簡単に説明しよう。

A類は断面四角形の高台をもち、底部の削り込みが少なくだけ底部が厚く、高台の先端と底部外面は軸がかかっている。内面に篋描の花文を施したものが中心である。

A1類は内外に施軸されているが、全面無文である。924は小破片ではあるがこれに該当しよう。龍泉窯系には軸は青味を帯びた緑が多いとされているが、やや黄色みを帯びており、むしろ明るい褐色味をもっている。あるいは先の同安窯系の青磁としてもよいかもしい。

A2類は内面に篋描の花文をもち、一部には櫛描文も加えられている。文様だけでは同安窯系のものと差がつかないが、篋描文を多用したものを龍泉窯系とした。A2類は寺家前遺跡出土の青磁では量的には中心的な量を占めている。軸が「青味を帯びた緑」にきれいに発色をしているものを龍泉窯系とし、黄味かかった軸のものを同安窯系としたが、必ずしもきれいに発色しているものだけではなく、多少灰色・褐色系のもも含まれており、明確には判断することが難しい。

930は小碗で、内・外面ともに青くきれいに軸が発色しており、内面に篋描の花文が連続して描かれている。高台の先端と底部外面は無軸である。

926は内面に篋で花文が描かれており、先の930とともに森田氏の分類ではI-2a類に相当するものである。P-58も同様である。この他に内面に篋描の花文をもった小破片が10片ほどある。

底部破片は4点ほどがある。高台は断面方形であるが、底部の削り込みが少なく、高台は低い。したがって、体部の下部に比べて、底部は分厚くなっている。こうした底部の特徴はA類・B類などに共通するものようである。P-1467は高台の先端部に軽く篋を当て、先端を狭くしている。高台の先端と底部外面は軸がかかっている（露胎である）。P-11044（図版80）は底部の削り込みが少なく、底部が一段と厚くなっており、底部内面には篋描花文が施されている。

このほかに、口縁部内面にための沈線を一条巡らせた碗が2点ある。A4類（森田氏のI-4b類）に含まれるものであろう。

B類は外面に篋描の蓮弁文をもった碗で、蓮弁が鏝をもったものをB1類、鏝をもたないものをB2類としている。量的にはB1類が最も多く、全体で32片を数える。

B1類の蓮弁には931のように間弁をもつものと、932のように間弁をもたないものがある。さらに、前者には938のように間弁の境界線が主弁とほぼ接しているものと、931のように間弁と主弁の間に空間があるものがある。底部はA類と同じように底の削り込みが少なく、厚くなっている。高台の先端と底部外面は無軸である。937のように、底部内面と体部の間に浅い段があり、ための沈線が巡っているように見えるものがある。13世紀後半から14世紀にかかるものとされており、各遺跡で最も多く見られる青磁であろう。

このほかに鏝を失った篋描の蓮弁文（B2類）あるいは線描の蓮弁、さらには縦の平行線に変化したもの等がある。14世紀後半から15世紀にまで及ぶもので、出土量は急激に減少する。以下簡単に説明を行う。

B2類は外面の蓮弁文に鏝がなくなり、単に篋描の蓮弁となるものである。P-1592（図版80）は篋描

のきれいな蓮弁で間弁も表現されている。940 もやはり篋描の蓮弁文ではあるが弁間が開いている。

底部内面に華文 (P-11317・P-2425) あるいはP-1375のように記号をスタンプしたものがある。森田氏のI-5c類に当たるものであるが、P-2425は底部の削り込みが深くなっており、あるいは多少時間が下るものであろう。940はI-b1類と差はないが、釉は明るい緑色(梅実的青)できれいに発色している。

B3類は外面に太い線描の蓮弁を施した碗で、942、943の2点を示した。出土量は少なく、4片を数えるのみである。

B4類は線描の蓮弁文をもつ碗で、P-623(図版80)は幅1cmほどの蓮弁を連続して描いている。また、944は口縁部近くに幅4cmの範囲で、縦方向の沈線が巡っているが、蓮弁の頭が欠落して平行沈線になっている。このように文様にはすでに蓮弁の形が失われているものが多い。出土量は多いものではない。

C類 口縁直下に横方向の平行条線あるいは雷文風の文様を描いたもので、C1類は口縁直下に横方向の条線を施したもので、C2類は雷文風のものの両者がある。

D類 口縁端部が外反する、いわゆる「端反り」の碗である。215は底部から体部にかけての破片で口縁部がないため、区別が難しいが、底部が露胎であり、ここに含めておく。

E類 内外無文で、口縁が直口する碗である。

E. 内耳鍋(図99-563～565)

寺家前遺跡から出土した鍋・釜などの煮炊き用の土器は多くはない。これは、この地域が鉄鍋の普及地域に含まれていることの反映であろう(吉岡 2000)が、近年各地の中世集落遺跡からそれなりに土師器の煮沸具の出土が知られてくるようになってきている。

資料整理の途中で目に付いた小さな破片を加えても内耳鍋の破片は50点足らずである。遺構出土のものに羽釜が1点認められる(図30-76)。SD3134とした区画溝から出土したものであるが、釜は口縁部が短く、口端部が方頭状に作られた「短口縁短鏝系統」の釜である。体部の内湾傾向が強い内湾型の羽釜(鈴木 1996)である。山茶碗に伴うものとしてよい。同様に口縁部が短く、鏝の身近な羽釜の破片がある。図示はできなかったが、体部の傾斜は76ほど強くはない。

この他に口縁を「く」の字に屈曲させた内耳鍋がある(図99-563)。全体に薄手で口縁部から頸部にかけて内・外面共に煤が付着している。同様な形態の鍋は袋井市十二所遺跡・磐田市元島遺跡など各地の遺跡から出土している。12～13世紀代のものと考えられており、山茶碗に伴ったとしてよい。

565に示したものは、口縁が直立し、内耳をもった鍋で、足立順司氏がⅢ期と位置づけた(足立 1991)ものである。鉄鍋を模倣した形態だと考えられており、16世紀代とされるもので、上層1期に伴う遺物であるが、駿府城跡・焼津市小川城跡あるいは先の元島遺跡など多くの遺跡から出土している。

(イ) 墨書土器(図128～131)

寺家前からは93点の墨書土器が出土している。このうち灰軸陶器の8点以外は山茶碗である。墨書土器の出土地点を各グリッド毎に集計したものを図131に示した。△で表示した灰軸陶器の出土地点が散在しているのに対して、山茶碗はE-3区の南東側に集中していることがわかる。この区域は2群の建物群の東南端にあたり、あるいは屋敷地を外れている地点なのかもしれない。墨書土器が後世大きく動かされたものではないとすれば、本来、この地点(屋敷地と水田区域の境)に集中していることになる。墨書された内容からみて、この地点で行われた祭祀の跡を示すのかもしれない。

山茶碗のうち、編年でⅠ期に含まれるもの12点、Ⅱ期に属するもの6点、Ⅲ期のもの70点で、Ⅲ期のものが圧倒的に多い(明らかにⅢ-2期に属するものは2点にすぎないので、多少の差はあるが、大半

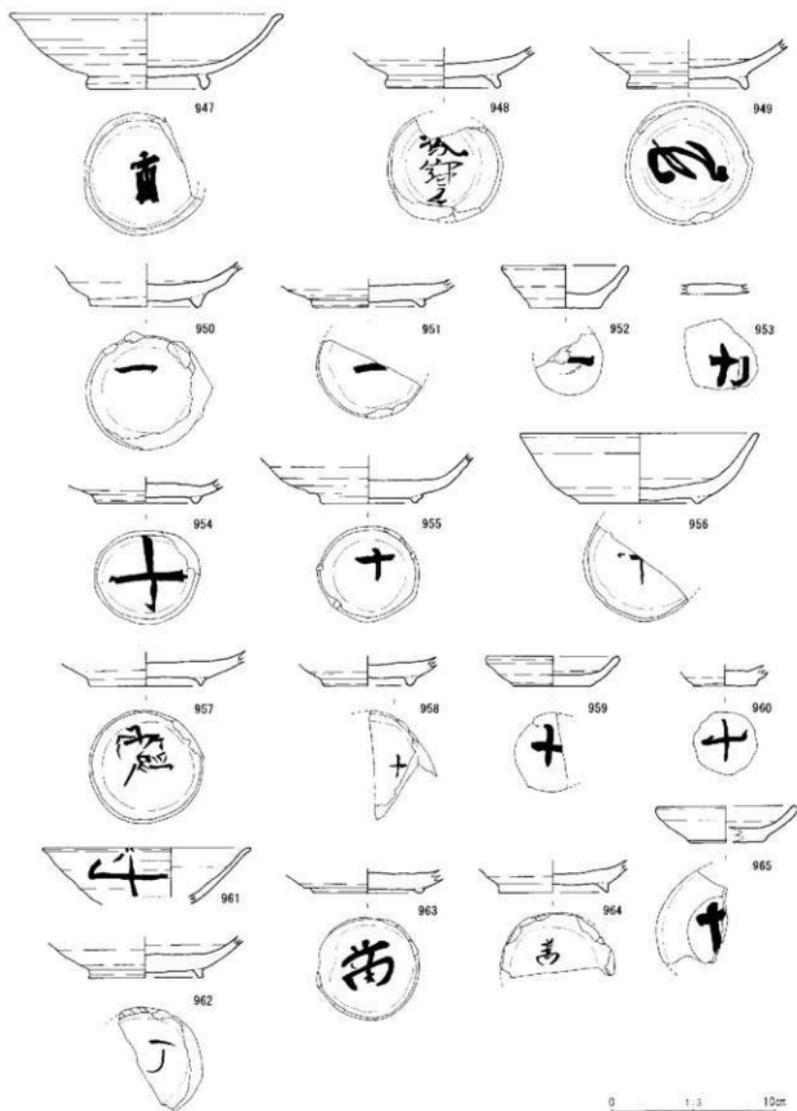


図 127 出土墨書土器 1

はⅢ-1期に属すものと考えている)。これは墨書土器全体の74%に当たり、Ⅲ期の山茶碗が全体の出土量の44%を占めることから見ても、墨書土器にはこの期のものが非常に多いと言うことができる。

また、碗に墨書されたもの50点、小碗2点、小皿は34個である。小皿が多いことはⅢ期にはすでに小碗が消滅し、小皿だけになることと関わっているよう。墨書されている部位は底部内面1点、体部外面にかかれた1点を除いて、全て底部外面である。灰釉陶器には壺の体部外面に墨書されたものが1点ある。

墨書の多くは、墨の痕跡だけで、読めないものが多く、また、墨は見えても明確な文字と判明しないものも多く含まれている。

一字のみ墨書されているものが多いが、中には「宮具」「二之口」と2字あるいはそれ以上の文字が書かれていた可能性のあるものも含まれている。

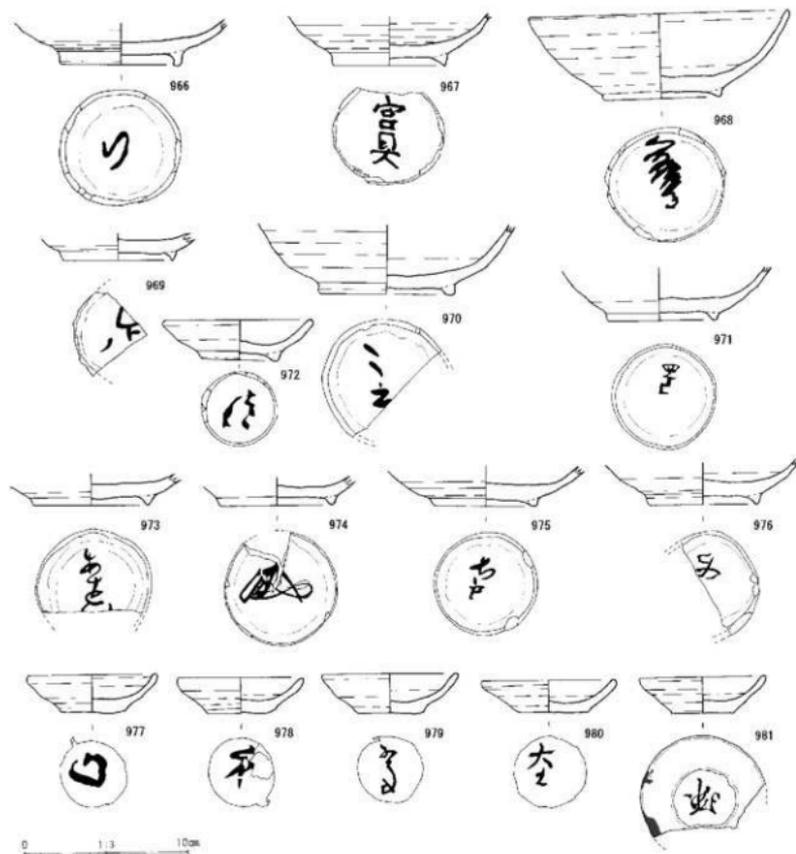


図128 出土墨書土器2

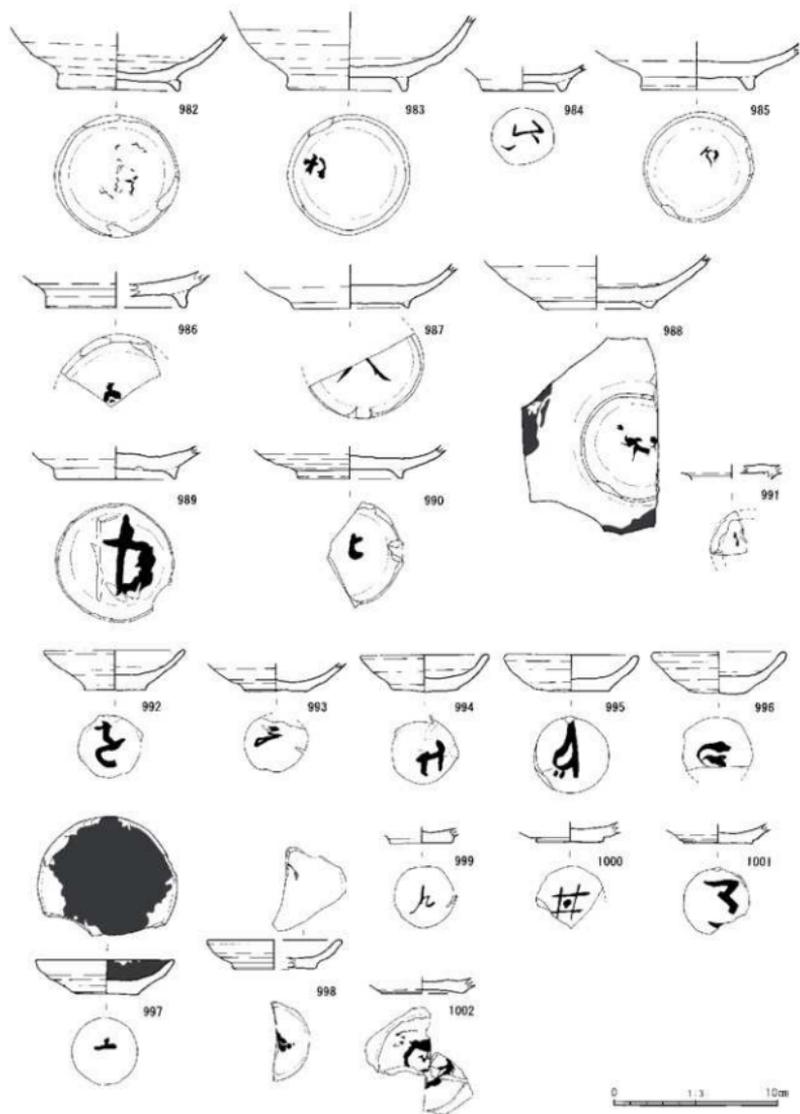


図 129 出土墨書土器 3

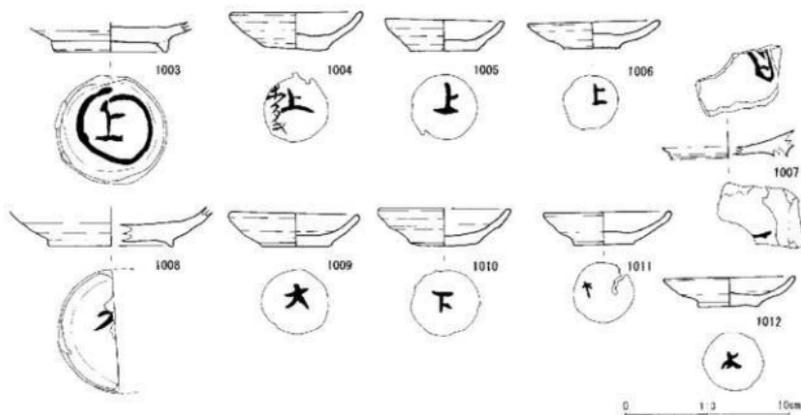


図130 出土墨書土器4

一字を記されたものには

①「一」「十」「千」「万」「萬」「カ」と数字あるいは記号を記したもの

②「大」「上」「下」としたものの、中には1003のように上を○で囲んだものも含まれている。

③「足」「岡」と漢字を記したもの。971は「岡」の異体字であろう。

④花押と思われる草書体の判読不能な文字を記したもの。98は2群東面の区画溝SD9067から出土したもので、花押だとすれば、この屋敷地に関わる者を示す可能性がある。974はこれと良く似た墨書で、やはり花押であろう(註5)。

他も草書体で書かれた968のように「花押」かとも思える墨書がある。

⑤身分あるいは所属を表したかと思われる「宮具」(967)、「大王」(980)、「金法師」(あるいは「全法師」)(91)等がある。

⑥判読不能な文字が記された977・978・979がある。あるいは梵字なのかもしれない。大半が小皿の底部に記してある。

①②は平安時代の墨書土器にも多く見られるもので、多くが吉祥句と考えられている。

⑥が梵字だとすれば、これも含めて、何らか

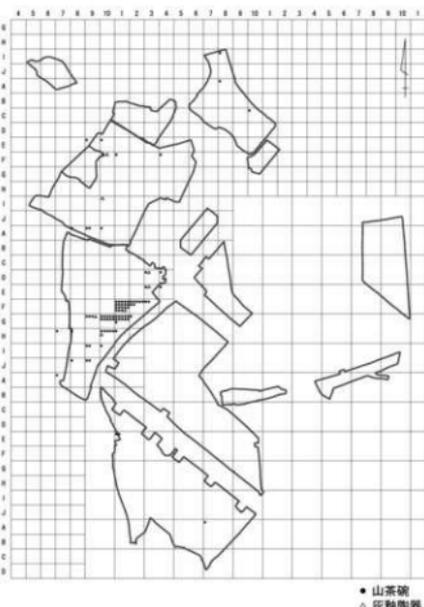


図131 墨書土器出土分布図

の祭祀に関わるものと考えられよう。したがって、判読できた墨書は何らかの祭祀に関わるものが多いとすることができよう。

974・98 など花押と思われるものは、「花押」だとすれば、器の帰属を示すと考えてよいだろう。967の「官具」は屋敷に隣接した「社」の存在を示すものであろう。ちなみに磐田市長江崎遺跡には「寺器」と記した墨書がある。980の「大王」は菊川市横地城下遺跡群あるいは袋井市新堀遺跡からも出土しており、梵字とあわせてやはり仏像あるいは仏教に関するものであろう。968 もやはり同じ例であろう。「略押」と考えられる記号とともに「花押」を描いたものはいくつかの遺跡から出土している。

(ウ) 転用硯 (図 132-1017・1020～1022)

墨書土器と共に内・外面に墨の付着した土器が出土している。こうした土器は通常、坏・碗を転用した硯(転用硯)と考えられる場合が多い。しかし寺家前遺跡の資料を詳細に観察すると、口縁部を中心に墨が残っているもの、あるいは外面に墨が残っているものなど、墨の付着している部分が様々であり、多少の検討を要することが明らかになった。したがって、ここでは底部外面に墨が付いているものと内面のみ墨があるものを転用硯とした。

転用硯には奈良時代の坏蓋(675)がある。これは、坏蓋の内面に墨が付いているが、蓋頂部には摘みが残っており、使用時には坏身と組み合わせにしたことを想定しなければならない。

山茶碗では内面に墨が付いているものと底部および外面に墨が付いているものがある。数は碗の内面を使ったものが多く、碗・小碗・小皿とともに用いられている。底・外面に墨が付いたものは器を伏せた状態で使用したものであろう。墨がそこからはみ出し、体部まで及んでいるものもある。1021は体部外面に墨が縦方向に付いており、一見灯明皿の「穂口」の痕とも見えるが、底部外面を使うことは不自然であるので、ここでは硯に含めている。

硯として使われた山茶碗には1-2期(1017)・Ⅱ期(1020)・Ⅲ-1期(1021)と各期に及んでおり、量的にはⅢ-1期のものが最も多い。

(エ) 灯明皿 (図 132-1013～1016・1018・1019・1022～1025)

内外面に墨・煤の付着したものを灯明皿と考えている。時に口縁部周辺に集中して煤が付いているものの(1019)がある。すべて山茶碗であり、土師器・須恵器・灰軸陶器等は含まれていない。1013は内・外面に墨が付着しており、外面には縦に墨の痕が延びている。また、1019は小皿で、口縁部の内・外面に墨が付いている。1018はやはり小皿であるが、内面の墨の広がり灯明の芯の横痕を示しているかのようである。

(オ) 漆容器 (図 132-1013)

内部に漆がこびりついた山茶碗(1013)がある。土器は全体のほぼ半分が残っており、内面底部には漆が厚く層をなしており、この部分の漆は変形して、ふくらんでいる(ふくらみの下は中空である)。口縁外面には漆が垂れている。Ⅲ-1期に含まれる山茶碗であり、E-3区包含層から出土していることから、おそらく2群とした建物群に属するものであろう。漆の上面に正目の板材が一部残っている。あるいは蓋が掛けられていたものかもしれない。

(カ) 石製品 (図 133～136)

1029はほぼ完形の一石五輪塔で、高さ24.45cm、下段の地輪で横9.8cm×縦7.4cmほどである。空輪の部分が擬宝珠状を呈しており、水輪もわずかに丸みをもっている。他はほぼ方形で、細かな加工は

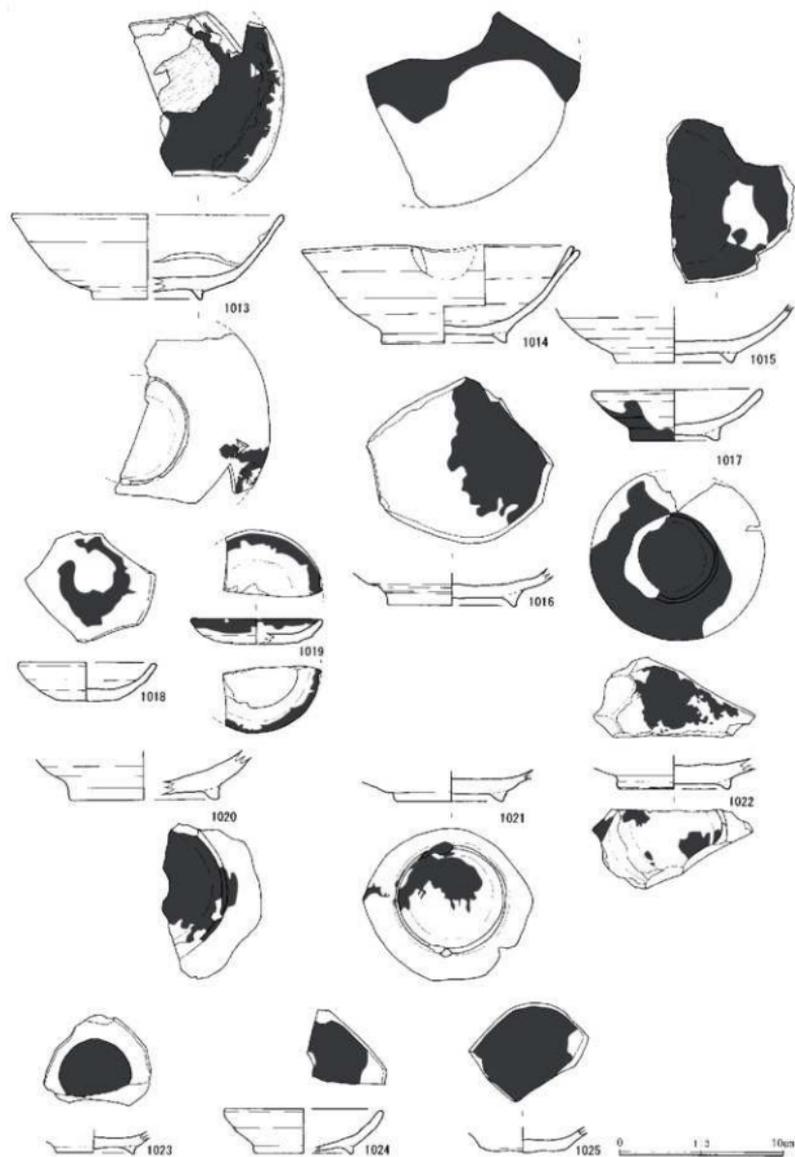


図 132 出土転用碗・灯明皿

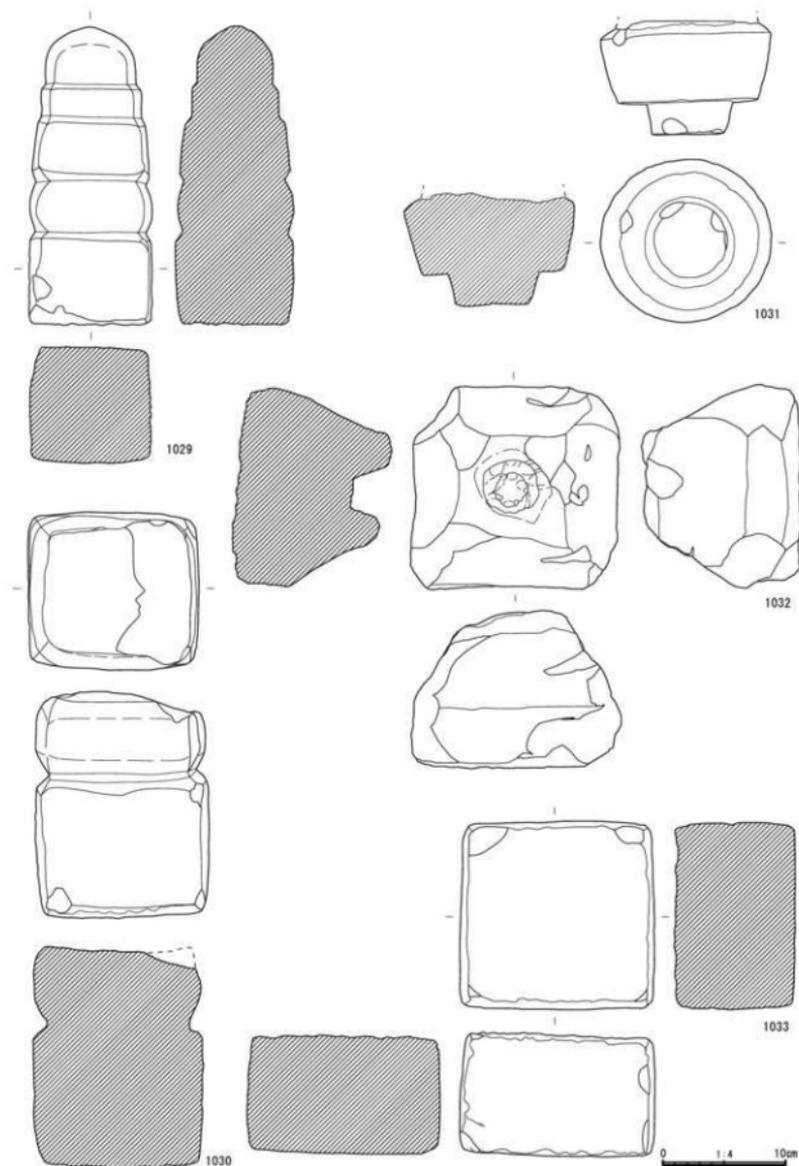


図 133 出土一石五輪塔・五輪塔

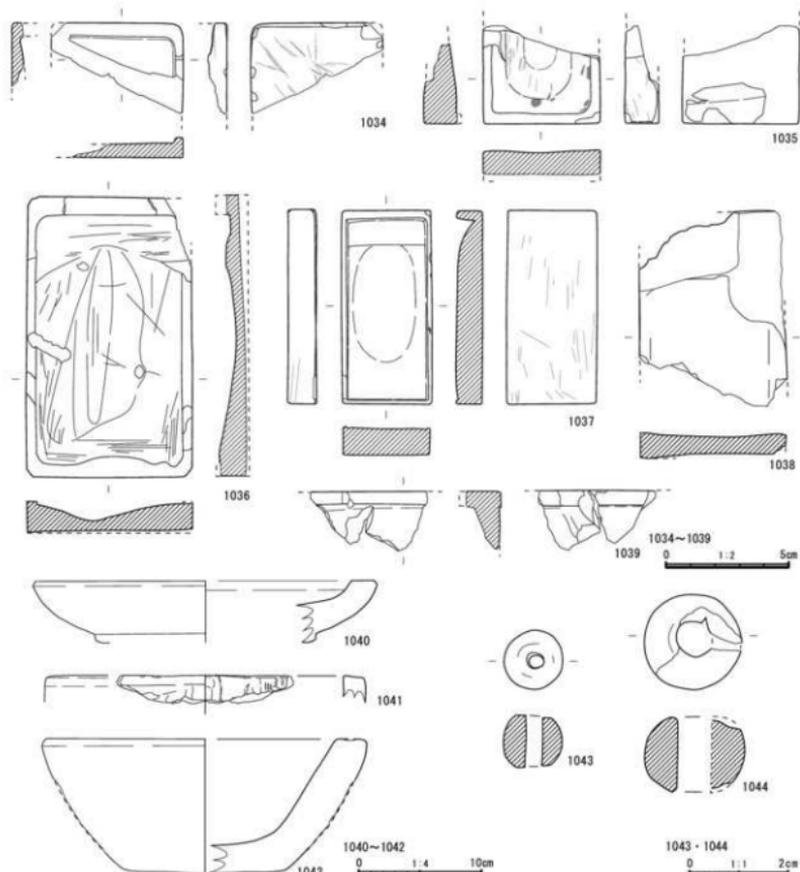


図 134 中～近世石製品 視他

していない。砂岩製であり、松井氏分類ではC類に当たるものであろう(松井 2009)。1030は一石五輪塔の下部に当たる水輪と地輪の部分のみで、上3段は折損している。やはり砂岩製である。水輪の部分は丸みが失われ、扁平になっている。1031は五輪塔の上部風輪であろう。空輪の部分は折損している。下部には火輪に差し込む凸が設けられて(出脚)おり、組み合わせ式になるのであろう。1033は方形の切り石で五輪塔の下端で、地輪に当たるものであろう。やはり砂岩製で正面15cm、高さ10cmで、平面はほぼ正方形である。

1034～1039は硯である。1034・1035は確認調査その2で出土した。1036は石鉢(1042)とともに近世の排水溝跡(SD118)より出土した。かなり使い減りして凹んでいる。1037は完形品で携帯用の硯と思われる。陸面には墨跡が残っている。1038と1039(458)は破片だが形態の特徴から硯と思われる

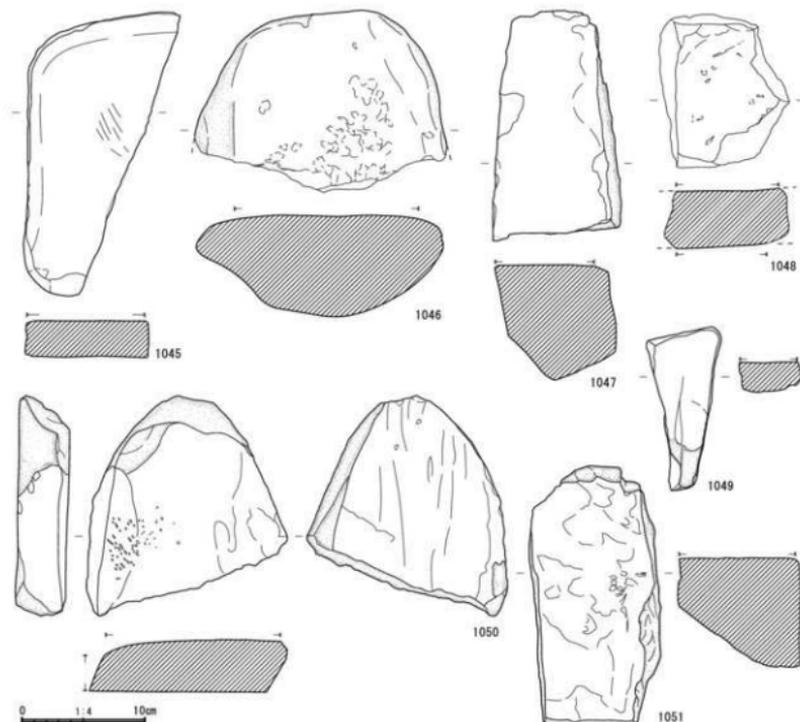


図 135 中～近世石製品 砥石（大型）

製品である。1038 は表裏とも剥離している。1039 は近世の遺構である SX205 から出土した。

E-2 区で検出した区画溝 (SD937) から茶臼 (1040) が 1 点出土している。茶臼は別名、「茶磨」、「茶碾」とも呼ばれる。かつては僧侶や武士階級の所持する品であったが、江戸時代に入ると、茶文化が町民へと普及浸透していくと同時に一般にも流通するようになったようである。一般的には石製で、擦り合わせの上石と挽いた粉を受ける下の台とが組み合わさっている。茶臼の寸法は様々あるようだが、下の台の径は 30 ～ 35cm、擦り合わせの径は 20cm ほど、高さは 20cm 前後ある。維新後の工業化によって次第に茶磨は使われなくなり、消滅する。寺家前遺跡から出土した茶臼は、下の台の破片である。縁辺から復元した直径は 27.4 cm ほどある。高さは 5 cm ほどあったと想定される。石材は赤褐色粗粒凝灰質砂岩。遺構内で共存する土器からみて江戸時代の製品であろう。

1041 は滑石 (?) 製の石鍋である。中～近世包含層より出土している。1042 は石鉢である。内面は研磨されており黒灰色に被熱している。外面は剥離調整のままで底面は調整後研磨されている。

1043・1044 は近世包含層より出土した石製の玉である。1043 は角礫状チャート製の小玉である。1044 も同質材の藁玉である。本遺跡ではこの他に奈良時代以降の玉類はなく出土量は少ない。

1045 ～ 1067 は砥石。図 135 には大型砥石、図 136 には小型の砥石をまとめた。1045 ～ 1049 は中世

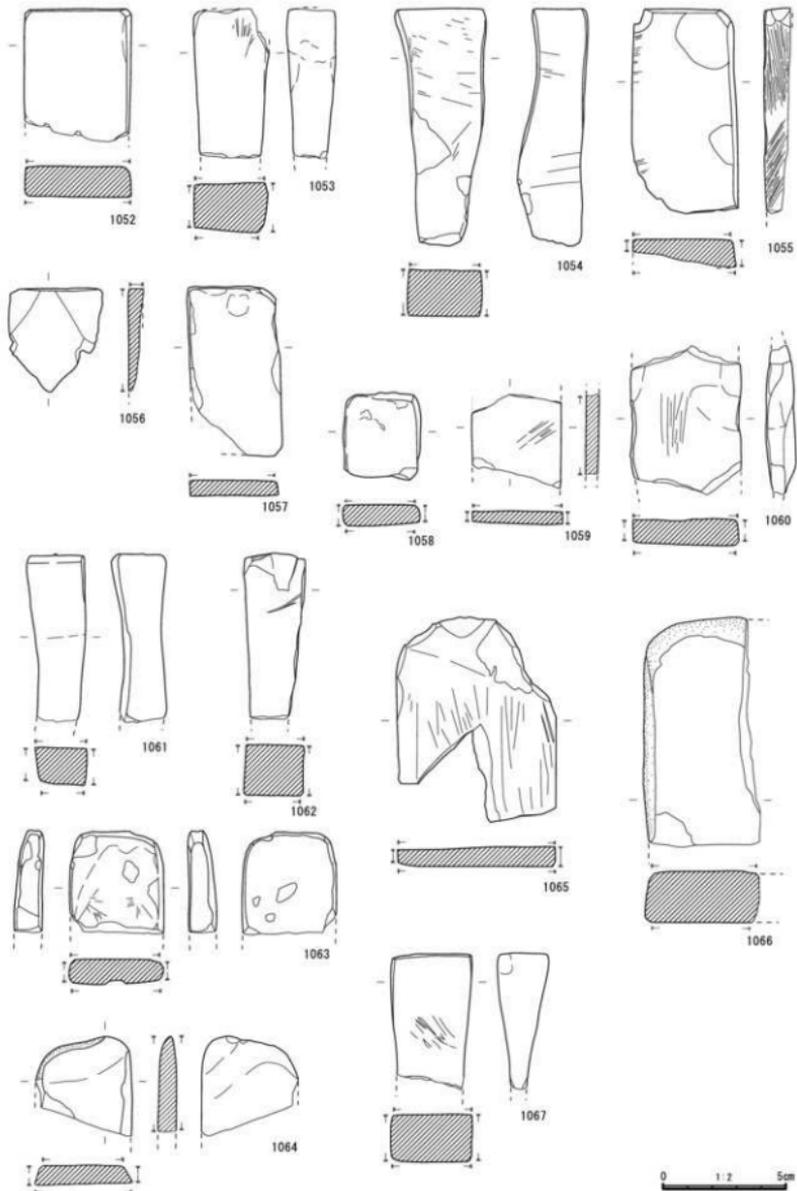


図136 中～近世石製品 礫石（小型）

遺構より出土した。1045は3群の屋敷地跡整地層で出土した大型砥石である。使用面は上面のみである。1046・1047はいずれも溝跡(SD2679)より出土している。溝跡は屋敷地1群の南面区画溝であり、覆土内の山茶碗はⅢ期が中心である。1049も条里水田以後の1・2層より出土している。1050(482)・1051(368)は近世の不明遺構(SX212・164)より出土した大型砥石である。いずれも据え置いて使用した置き砥石であろう。1052(457)・1055(456)はSX205より、1062(369)はSX164より出土した。いずれも近世の砥石であろう。1055(456)は硯から砥石に転用されている。1053・1059は中世包含層出土。1056は石板か。1058は不定形な掘形を持つ土坑(SF1139)より近世陶磁器に混ざって出土した。1060はE-4区6層より出土した砥石で時期は中世以前に遡る可能性がある。1061は近世の住居周囲にある区画溝(SD8362)より出土した。上部部に金属片のような異物が刺さっているが、携帯時に使用するものだろうか。1063は使用面が一部黒く変色(炭化?)している。1064・1067は近世井戸(SE8920)と思われる遺構より出土した。鉄製品や種子等と共伴している。

(キ) 木製品(図137～144)

1068～1070は一本の連歯下駄である。腐食が激しく残存状態は極めて悪い。1071・1072は差歯の陰卵下駄で、前歯と後歯が両方とも残っている。1071はコジイの柾目材で作られたもので歯も同材である。全長が15.75cmしかなく子供用と思われる。前壺がやや左寄りであることから左足用であろうか。1072も同じく陰卵下駄である。前歯と後歯は一部残存している。全長は22.3cmで成人用と思われる。履物はこの他に板草履(1077)がある。右側縁に0.9×0.6cmの切欠きがあり、面全体に植物繊維の条痕がある。

1073～1076、1078～1099は容器類である。1073～1076は折敷の底板と思われるものである。1073は0.6cm幅の樫紐が残っている。1076にも2箇所の手紐痕がある。1078は桶の側板である。表面にタガの圧痕が3箇所残る。1079～1085は曲物底板。樹種はスギ、ヒノキ、サワラ、アスナロで作られている。1079は想定径が119cmほどある大型品である。1080は側面に2箇所の木釘痕があり側板を固定していたと思われる。木釘は最大径0.3cm、長さは1.4cmほどある。1082～1085は想定径が10cm前後と小型の曲物である。1082は表面の縁辺に黒色の塗りが残存する。1083は側縁に1箇所木釘痕がある。1085には側縁に4箇所の木釘痕がある。木釘の径は最大0.3cm、長さは0.6～0.8cmある。1086～1099は漆碗をまとめた。1086・1087は中世包含層より出土した。内外面ともに黒漆が塗られている。1086は輪高台で中央に小孔がある。轆轤のツメ痕か。1087～1090には表面に轆轤の挽き痕が明瞭に残っている。1091は内椀面に赤漆で植物の葉の文様が描かれている。1092は小片だが皿であろうか。内面の漆は黒漆の下地に赤漆が施されている。1093は高台のみ残存。内面に黒漆が一部残る。1094は外面の口縁よりやや下に「かつら(漆を盛り上げている)」がある。1095は内・外面は赤褐色の漆、高台内部は黒漆を塗っている。1098も内・外面が赤漆で、外面に家紋が描かれている。家紋の種類は欠損のため不明。1099は内・外面とも黒漆だが、高台内面に赤漆で「中」と書かれている。後者は大半が近世のものであろう。

1100～1113は用途不明木製品である。1100は棒状に加工された製品である。下方の断面は方形に削られている。農具の柄か。1101はイヌマキの芯持材を用いて両端を有頭状に加工してある。1102はクサビ状の木製品である。腐食が激しく頭部に敲打痕は観察できない。1103は丁寧に加工された箸状木製品。1104は何かを組み合わせて使う部材であろうが用途は特定できない。1105・1106、1109～1112は板状木製品。1107・1108・1113は棒状木製品。1107・1108は工具または農具の柄になろうか。1109は先端に向かって細く削り、端部を丸く作りだしている。先端は焼けた痕がある。

図141は7層包含層より出土した木製品である。7層水田は平安時代の水田跡と考えているが、包含

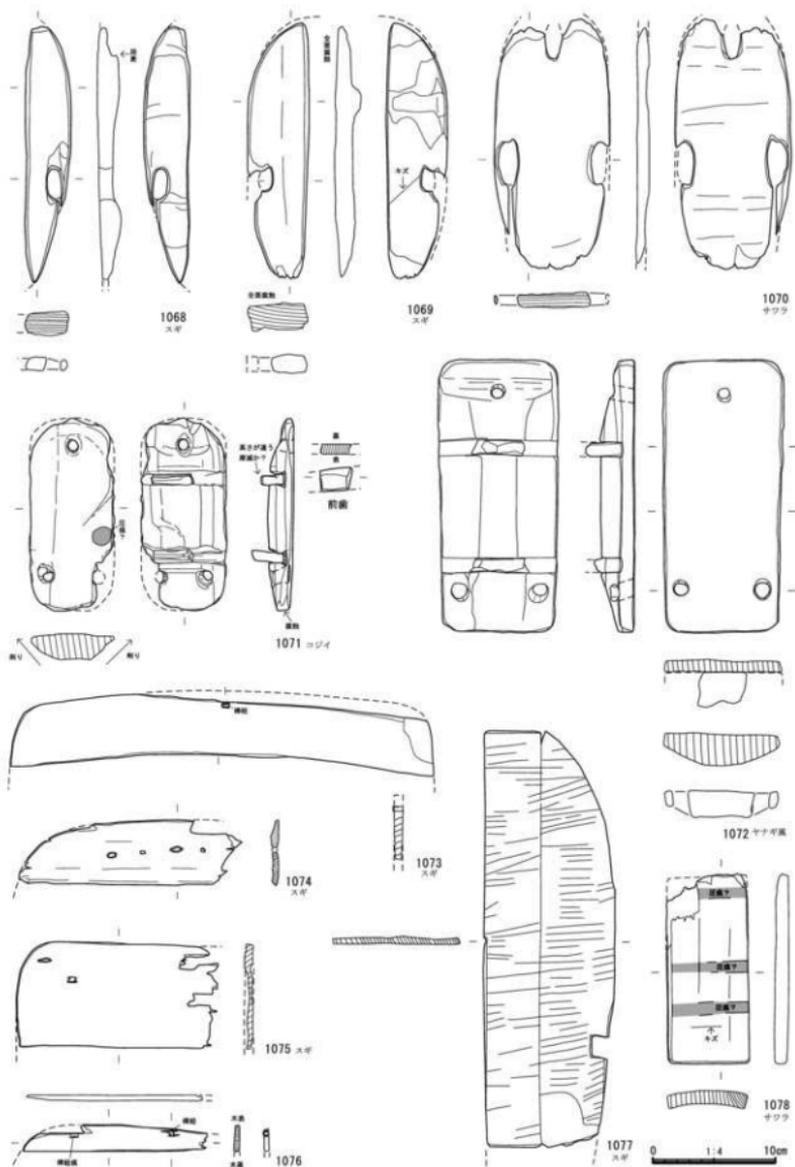


図137 包含層出土下駄・金剛草履・折敷（中～近世）

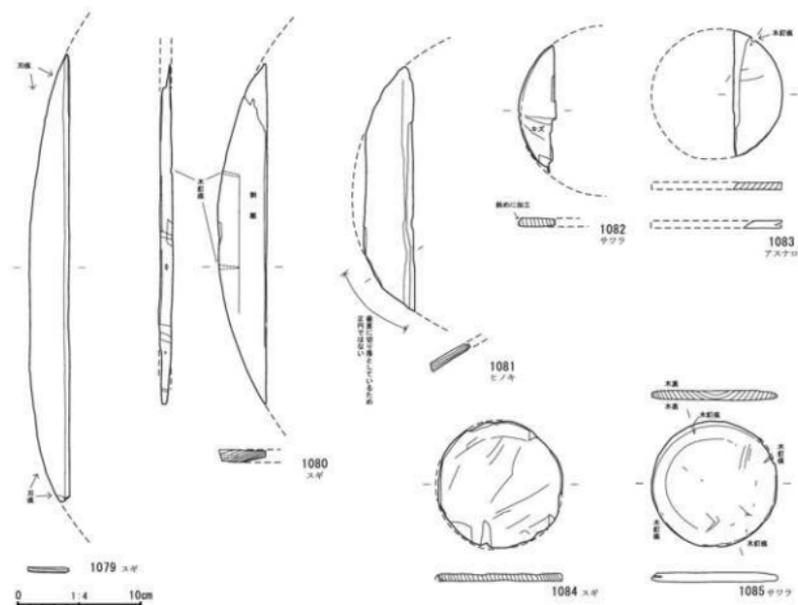


図 138 包含層出土土物（中～近世）

層中には一部、中世の土器も混入している。木製品も時期幅があるものと思われる。1114は桶の側板で板接ぎに木釘で固定している。内面は下半部が厚みもち、下方に貫通していない方形の柄孔がある。外面にはタガの圧痕が上下2箇所にある。孔に棒を差し込んで渡し、周囲をタガで固定している桶であろう。1115は曲物底板で、所謂、「カキゾコ」と言われる形のものである。側板の固定方法は榫紐で固定していたようで2箇所残っている。1116と1117はほぼ同じ場所から出土していることから同一個体であろう。1116には縦じ合わせ部がある。1118も曲物の側板でケビキ線がある。1119も曲物底板であろう。木釘で側板を固定する形か。1120は一木の連雀下駄であるが腐食が激しく右半分が欠損している。1121は「カキゾコ」形の楕円形曲物である。側板の固定方法は榫紐で2箇所残っている。その他にも対になった円形孔の痕が2箇所ある。スギの厚い板（1122）は大畹の西側の山際で出土したことから、3群の屋敷地で使われた柱の可能性もある。1125は横楯の形代と思われる製品である。屋敷地のある微高地からやや下がった低地で見つかっている。1129は紡織具の箆であろうか。0.7～1.7cmおきに刻みが入っているが箆であるかは不明である。その他は用途不明木製品である。

図 142 は7層水田より出土した。1130～1138および1139は角棒型田下駄、所謂、「大足」の部材である。1130は踏み板で、鼻緒を通す孔が3箇所ある。側縁に近い4箇所の孔は横棒と固定するためのものか。裏面の上下には横棒に差し込まれた時の圧痕がある。1131～1133は縦棒、1134～1138は杖である。特に1133～1138はほぼ同じ場所から出土していることから同一製品であったと思われる。

図 143 は奈良～平安時代の包含層より出土した木製品である。5～6層または古代層として取り上げられたもので7層水田よりも一時期前の段階と考えている。1139は大足の横木（横板もしくは横棒と

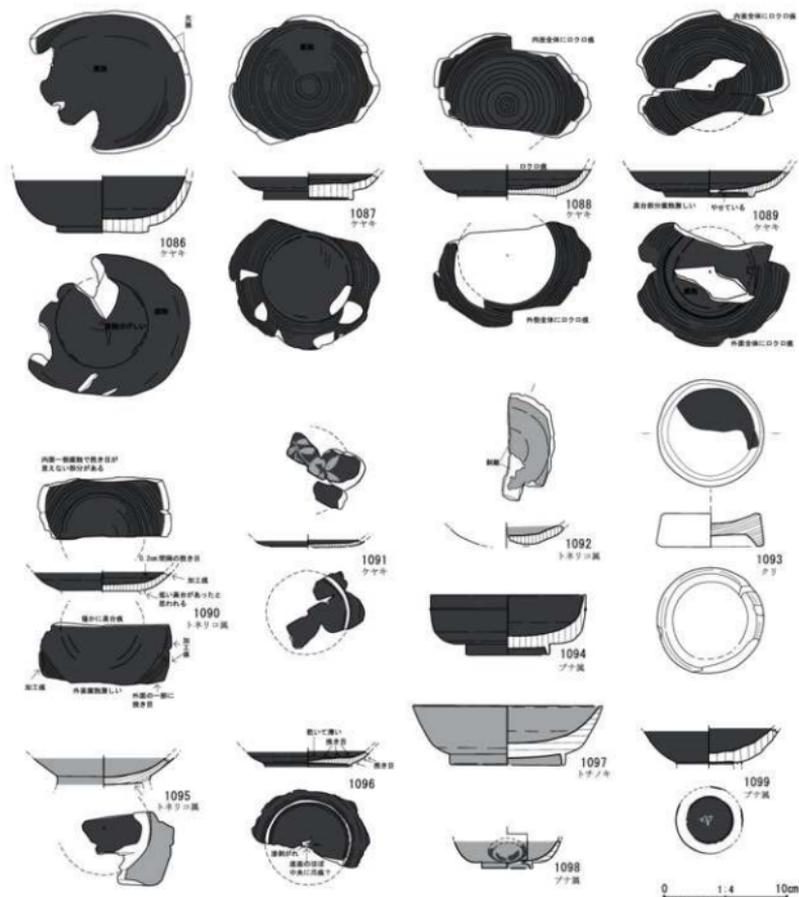


図 139 包含層出土漆碗他（中～近世）

も言う）である。7層水田で出土した角枠型田下駄（大足）の部材等と組み合わせる可能性がある。1140・1141は、やや細身だが枠（縦板もしくは縦枠）の部分であろうか。1142・1143は曲物底板である。1142は推定直径が30cmほどある。側板の固定は木釘止めの可能性がある。1143は「カキゾコ」形の楕円形曲物で、推定長は77cmほどと大型品である。1144は用途不明としたが、建築材の方立である可能性もある。表面に最大幅5.7cm、長さ20.6cmの柄が切り込まれている。幅上半部や裏面の腐食が激しい。1145も全体の腐食が激しいものの、建築材であるかもしれない。1146はツチノコか。イスマキ属の芯持材を使っている。使用した痕跡はあまりなく一部には樹皮も残っている。1147・1149は付け札状木製品である。文字の痕跡は見られなかった。板状に加工したスギ材の一端の両側面を切欠いて有頭状に

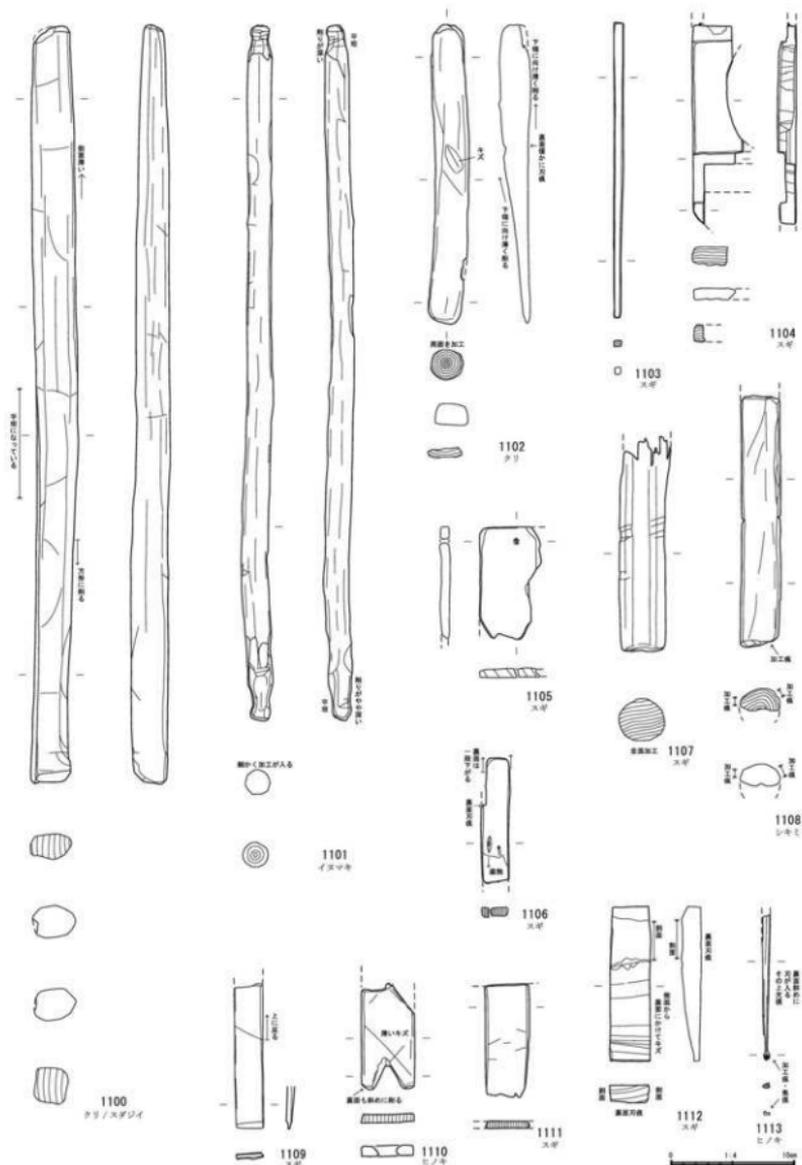


図 140 包含層出土用途不明木製品 (中～近世)

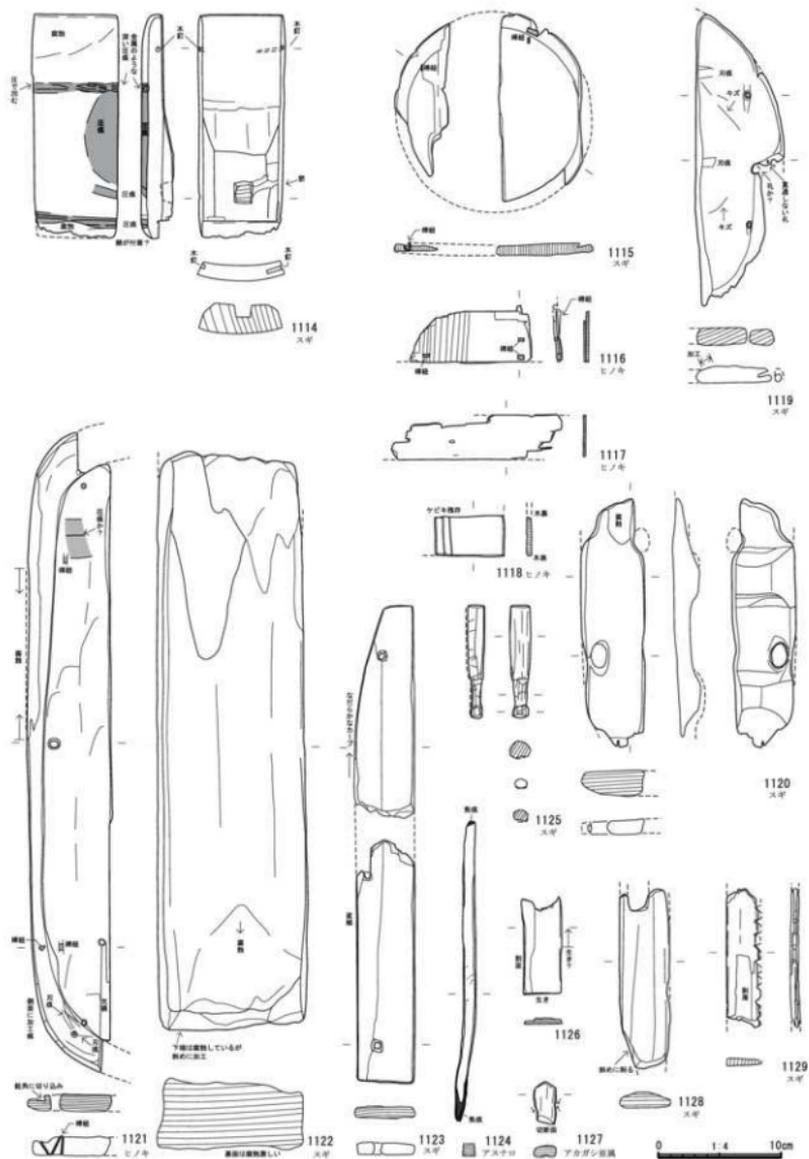


図 141 7層出土木製品 (平安～中世)

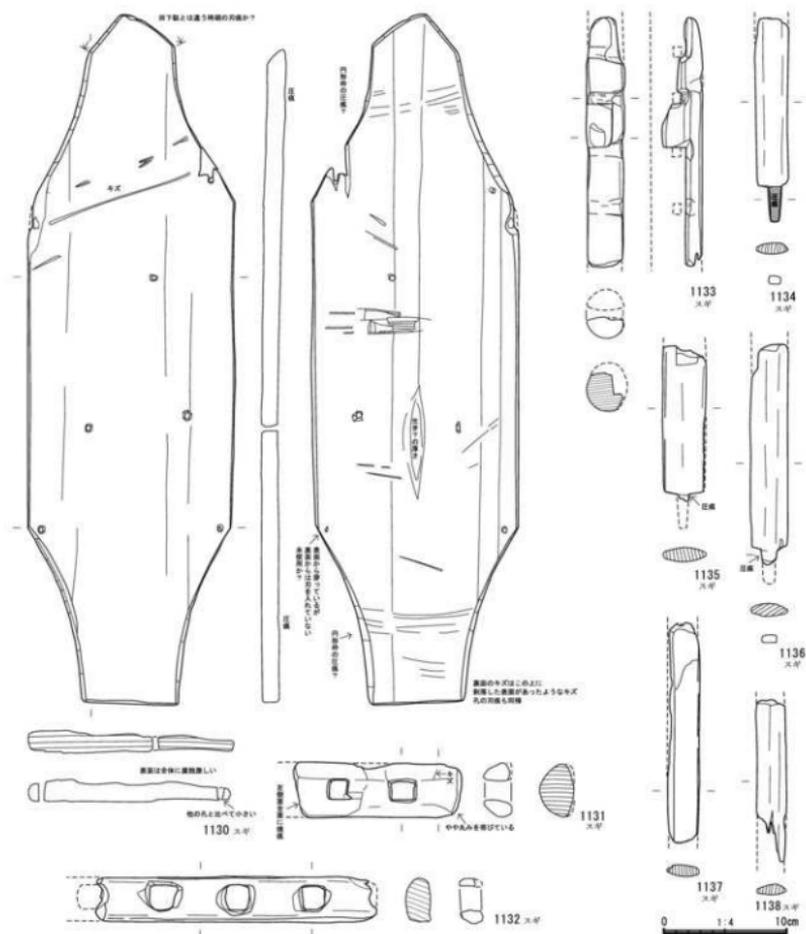


図 142 7層水田出土木製品（平安）

してある。1148は木簡である。文字は2～3文字あり、このうち1文字は「門構え」のつくりをもつが判読不明である。

図 144 は時期不明の木製品であるが調査時期から古代～中・近世に含めた。1150は長さが63.7cmほどあるイヌマキ属の芯持材を用いている。表面は樹皮や枝を払った丸木の状態である。両端部が有頭状に作り出されている。1151は幅6.3cm、厚さが3.0cmほどあるスギ板材に5箇所の方形をした柄孔が定間隔であけられている。建築材として使われていたものであろうか。1152はイヌマキ属の芯持材で一端は丸く加工されている。1151と同じ場所で出土したが接合点はない。1153はスギ材の板状木製品で

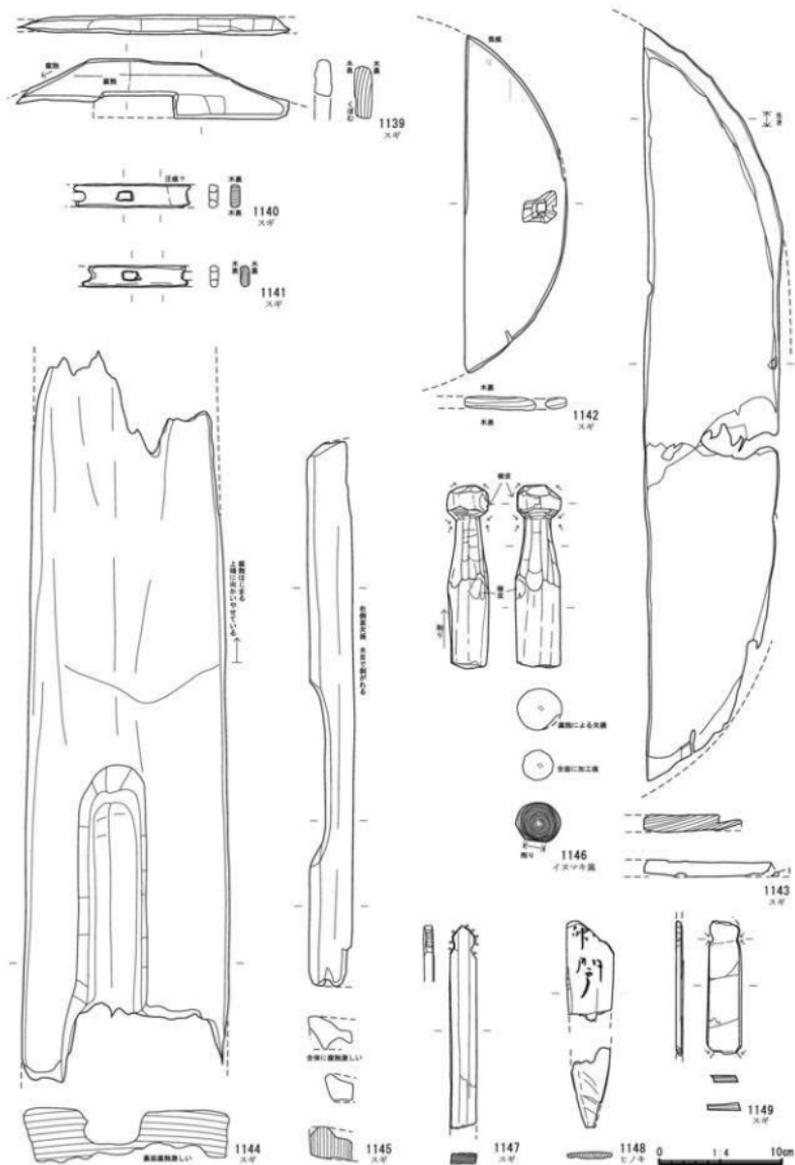


図 143 包含層出土木製品 (奈良～平安)

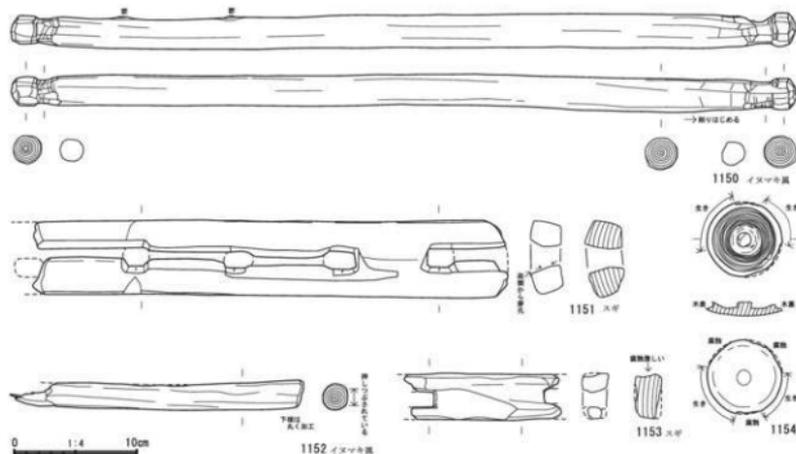


図 144 時期不明木製品

柄孔の痕跡が2箇所ある。1154は容器の蓋と思われる完形品である。広葉樹の柾目材を使って作られている。表裏に幅0.1cm程の挽き痕が残り、全体にうっすらと黒い顔料が見える。合子または茶入れ等の蓋に使われたものであろうか。

(ク) 金属製品

寺家前遺跡から出土した金属製品は上層1期と上層2期出土を合わせて、図145-1155～図155-1335にまとめた。このうち遺構に伴って出土した製品は図145～147、148の一部、150、包含層出土については図148の一部、149、151～155である(註6)。

1155～1157は近世墓SF1555より近世陶磁器とともに出土した。3枚組の出土であったが、副葬銭(六道銭)の一部であろう。新寛永銭による組成で、18世紀以降の年代であろう。1158～1161は丘陵上のF区西側の地山層に掘り込まれた土坑(SF-F3)より出土した。4枚組であることから墓であった可能性が高い。残存状態が悪く、縁が欠けている。銭貨の種類は永楽通寶が入っていることから中世末の時期である。1162～1164はE-3区近世層より3枚組で出土した。出土位置から近世墓であった可能性が高い。永楽通寶1枚と新寛永2枚(内1枚は背面に「元」。古銭界では大坂高津で寛保元(1741)年に鑄造とされる)の組合せである。

1165～1170はE-3区で検出した平面形が円形の近世～近代の墓(SF9090)周辺から出土した。墓では堀形内に桶・タガが残っていた。6枚組みの銭貨は副葬品(六道銭)で、新旧寛永通寶や文久永寶による組合せである。19世紀後半以降(文久永寶の初鑄1863年(発行期間は明治2年=1869年まで))である。4文銭の文久銭と1文銭の新・古寛永銭が混在している。六道銭(=6枚)の形式には則っているものの、近世末段階での銭貨自体の流通価値差にこだわりをみせていないことから、埋葬時期は近代にかかる可能性が高いと考えられる。

1171・1172は2枚とも新寛永通寶である。1171は残存状況が悪い。1172は背小(狭穿背小・小梅村元文2(1737)年)がある。E-3区130D-3グリッドでは近世墓がまとまっていることや、2枚組みで

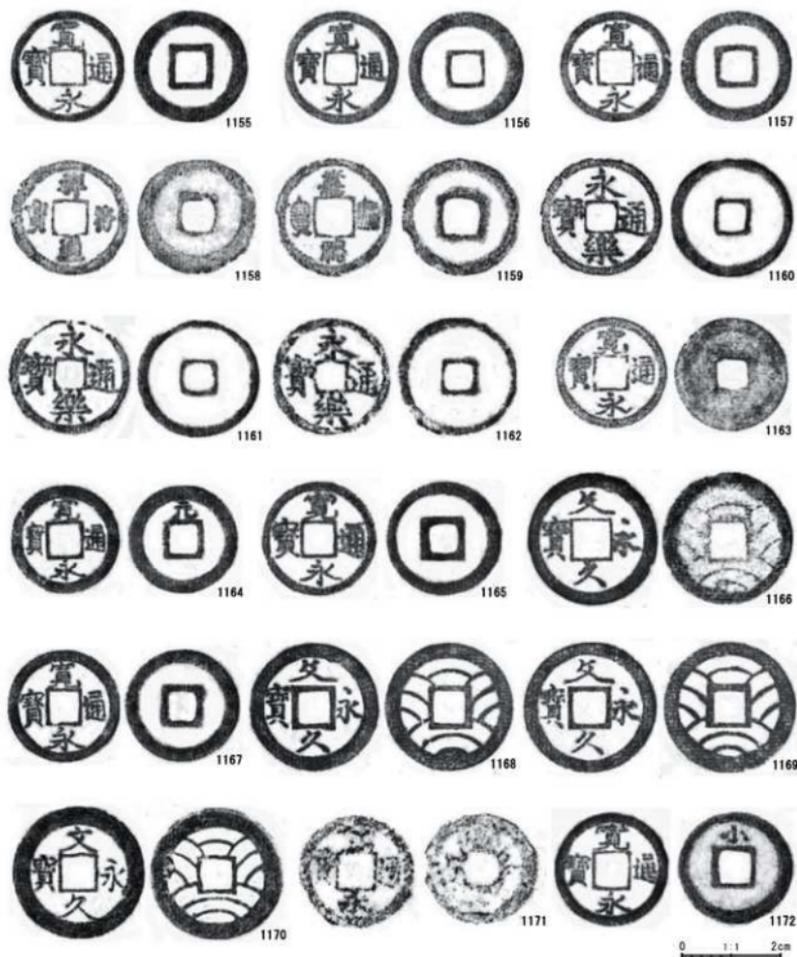


図 145 近世墓出土銭貨

出土した状況からみて、これも近世墓に伴うものであった可能性が高い。1173～1176はE-2区の近世墓SF2437(図80)より出土した。SF2437内では6枚あることから副葬品(六道銭)である。銭のほかに、かわらけ3点、頭髮(白髪)が出ている。1173は永樂通寶、1174・1175は腐食が激しく文字の判読は不可能であったが、1174は皇宋通寶(篆書)であろうか。1176は3枚癒着した状態で、1枚目は元祐通寶(篆書)、2枚目は不明、3枚目は元豊通寶?(真書)である。いずれも残存状態が悪い。銭貨は渡来銭による組成で、墓の年代は17世紀前半以前であろう。

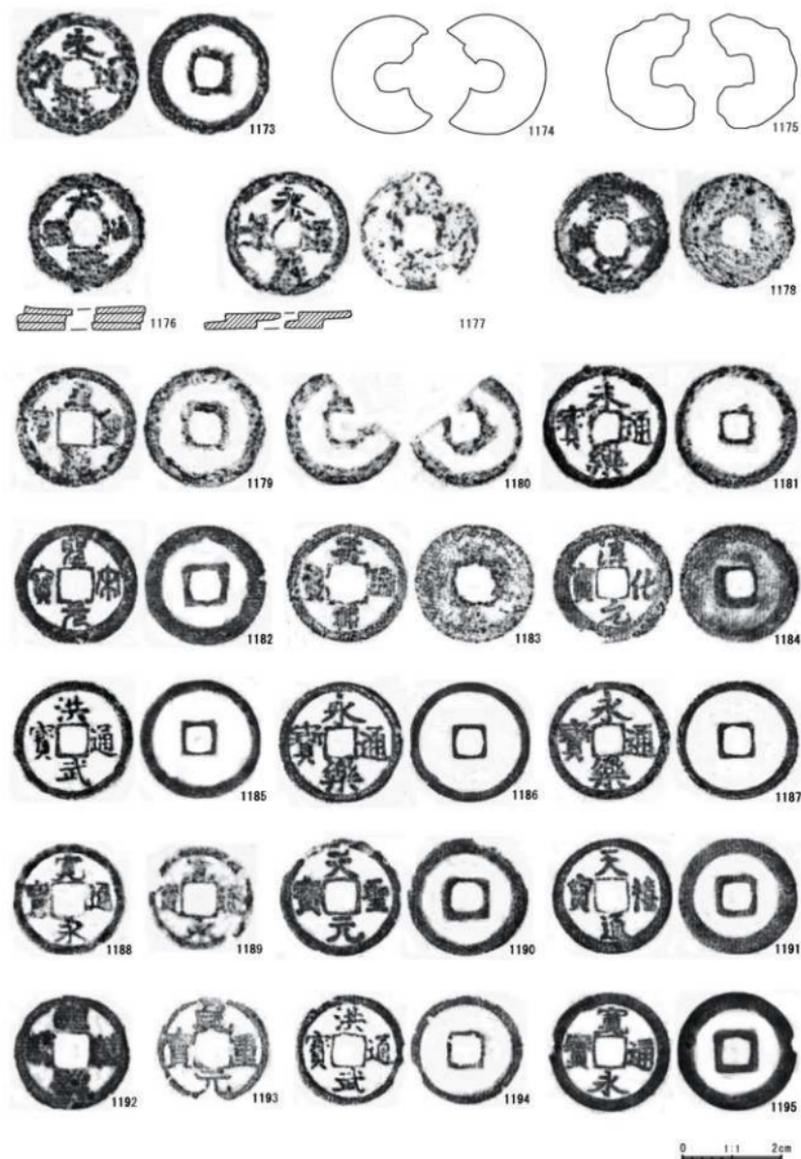


图 146 近世墓他出土銭貨

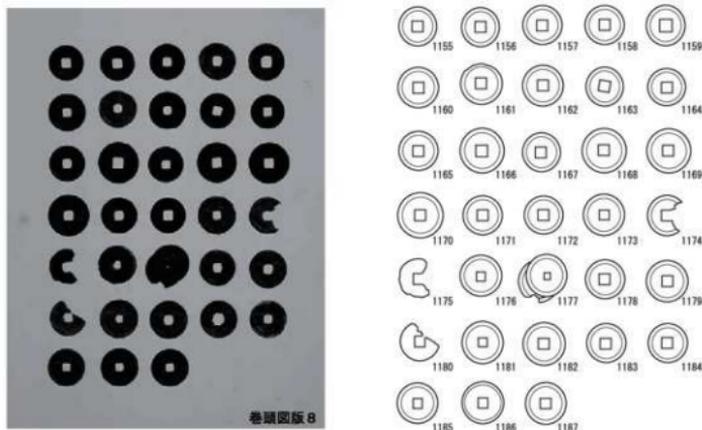


図 147 近世墓地出土銭貨模式図

1177～1181はE-2区の近世墓SF1055(図80)より出土した銭貨である。墓は平面形が略方形を呈する。被熱痕はなく、かわらけ、ヒトの歯とともに6枚の副葬銭(六道銭)が出土した。SF2437同様、渡来銭による組成で、年代も17世紀前半以前と思われる。1177は2枚壅着している。1枚目は永楽通寶、2枚目は判読不明である。1178は熙寧元寶(篆書)か。1179は元豐通寶(篆書)である。1180は元寶(真書)の文字だけ判読できるが渡来銭のひとつであろう。1181は永楽通寶である。表面の劣化が激しく破損しているものもある。

1182～1187はE-2区の近世墓SF2763(図80)より出土した。渡来銭による組成を持つ副葬銭(六道銭)で、17世紀前半以前のものである。墓内ではかわらけも共存している。1182は建中靖国元年(1101年)に初鑄の聖宋元寶(篆書)である。1183は嘉祐通寶(真書)。嘉祐元年(1056年)に初鑄の銭貨である。1184は淳化元年(990年)に初鑄の淳化元寶(行書)であろうか。1185は洪武通寶、1186・1187は永楽通寶である。

1188・1189はA-1区で検出した近世の溝SD280(図35)より出土した。ともに寛永通寶(新)だが、残存状態が悪く欠けている。1191は上層2期の2群屋敷地の北面区画溝SD8033より出土した北宋銭である。区画溝からは比較的古い時期の銭貨が出ている。天禧通寶(真書)は初鑄年が1017年である。SD8033では攪乱混じりの層から古墳～奈良時代の須恵器や灰釉陶器、山茶碗、近世陶磁器などが出土している。東西方向に延びるSD8033に直交して繋がる、1群屋敷地の西面区画溝SD3134からも、758年(唐)に鑄造された乾元重寶(1193)が出土している。

1190・1194・1195は柱穴より出土した銭貨である。1190はE-3区の上層2期遺構群の柱穴SP10483より単独で出土した。SP10483では柱根も残っていた。銭貨は天聖元寶(真書)である。1194はE-2区の北端で検出したSP3849より出土した。この付近は1群屋敷地からみて北東方向にあたり、主要な遺

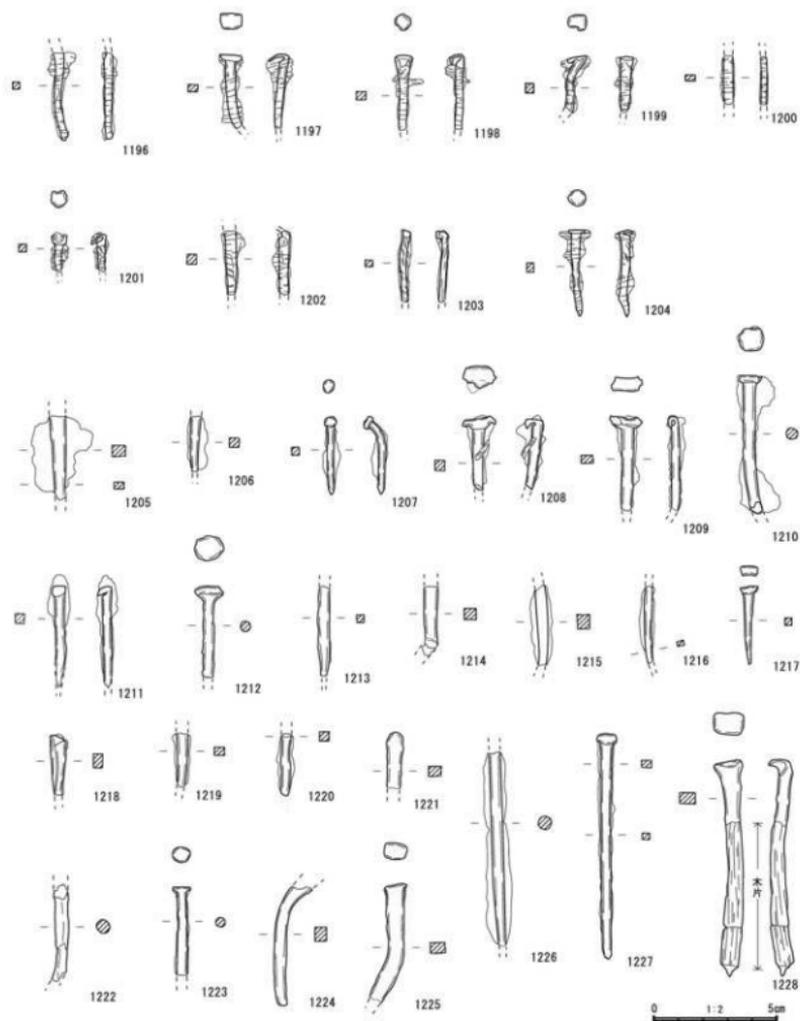


図 148 中～近世金属製品 釘

構群からは離れた場所にある。銭貨の種類は洪武通寶である。1195はE-1区の北端で検出した上層1期の柱穴 SP265(直径14cm程)より出土した寛永通寶(古)である。SP265は遺構の薄い北端に位置し、周辺には建物跡に復元できるような柱穴群ではない。1192はE-2区の近世攪乱1752より出土した天聖元寶(篆書)である。攪乱1752は1753と切り合っている。遺物はほかに山茶碗、甕破片、近世陶磁器(志

戸呂・瀬戸等)が出ているが、銭貨としては単独である。1193はE-3区のSD3134覆土内より出土した銭貨である。SD3134は上層2期遺構群のうちの1群屋敷地の西面区画溝にあたる。銭貨は貞元2年(759(唐)年)に初鑄の札元重寶か。区画溝内より単独で出土した。

銭貨は記録に残る物価であることから見て、商業目的の流通使用形態において、単独(1枚)で動くことは考えられない。また、銭孔に紐を通しまとめる構造上、1枚だけ遺失することのほうがかえって難しいものであるといえる。例えば、少額の銭のやりとり、もしくは数を数えるため褶銭を崩す空間(市場)などにおいては単独紛失の可能性が高くなる。寺家前遺跡の場合は、墓以外の土坑(建物跡と重複する)や溝、柱穴より出土した銭貨は、地鎮具の一部の可能性もある。主要な建物の柱穴から出土した1190や遺構群から離れた柱穴から出土した1194や1195がこれにあたるかもしれない。また、1188や1189、1191、1192、1193は、屋敷地を囲む区画溝から単独または2枚の単位で出土している。地鎮や結界を張るなどの意味合いをもつもの可能性がある。

図148-1196～1204は丘陵上のF区のSF-F3より出土した釘である。多くは頭部や先端を欠いているが、唯一完存している1204は3.5cmほどある。頭部の形状は0.7cmほどの円形または方形で、断面形は方形である。全体に木質片が付着し、錆で覆われている。SF-F3では、かわらけの破片や4枚の宋銭(1158～1161)も出土していることから、中世の墓坑ととらえており、釘は埋葬された木製の棺に打ち付けられたと想定される。

1205～1210は確認調査その2で西尾根部の26Trと31Trより出土した釘である。釘の形状は1205～1209まではF区のものと同く似ているが、1210は断面形が円形で長さも6cm以上ある。1211～1228は各調査区の遺構または包含層より出土した釘である。1211はA-2区の北側、水田層より出土し遺構に伴っていない。頭部は折り曲げられている。1212・1213はE-3区包含層より出土した。1212は

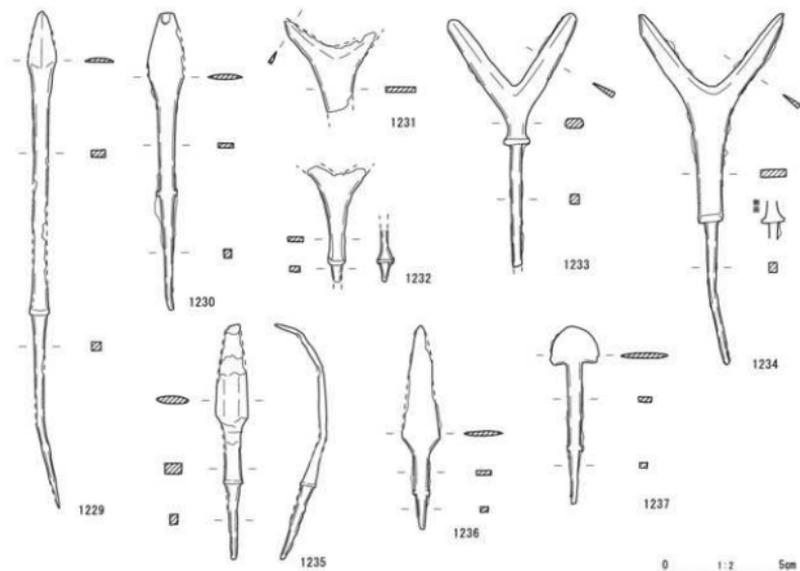


図149 中～近世金属製品 鉄釘

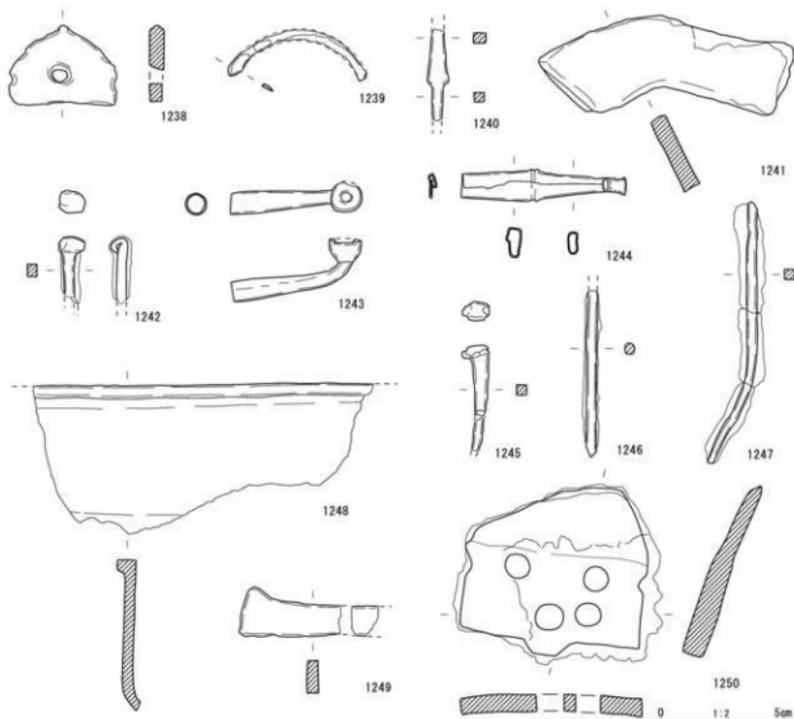


図150 遺構出土金属製品

頭部と断面形が円形である。

1214～1228はE-2区の遺構または包含層より出土した釘である。1218は近世初頭の柱穴（SP859）より出土している。それ以外は近世の攪乱土層で見つかっている。1214～1221、1224・1225・1227・1228は断面形が方形、1222・1223・1226は断面形が円形である。1217は3.2cmの完形品である。1227は長さ9.2cmある。1228は8.8cmの長さがあり、先端から6cmの部分に木質が付着している。上層調査では攪乱として扱ったが、なかには近世墓も含まれていた。釘はこれに伴っていた可能性もある。

図149～1229は水田跡から出土した鉄鍬である。水田域の5層から7層の間から出土しており、層位では奈良時代から中世までの年代であるが、水田層からの出土であるため年代の特定は困難であった。1229・1230は尖根系柳葉式長頭鍬である。1229は鍬身から茎の先端に至るまで残存し、全長20.3cmである。1230もほぼ全形が残っており、12.1cmを測る。1231～1234は雁又式の鉄鍬である。1234はほぼ完全な形が残り、全長は14.3cmである。1235もほぼ完形品であるが、鍬身が折れ曲がって湾曲している。想定長は10.7cmほどである。1236・1237もほぼ完存している。いずれも茎部に矢柄の木質や口巻きなどの痕跡はみられない。鉄鍬は集落域や古墳からの出土品ではなく、水田域の包含層より発見された。その要因として、ひとつは水田域の土壌が残りやすい環境であったということであろう。

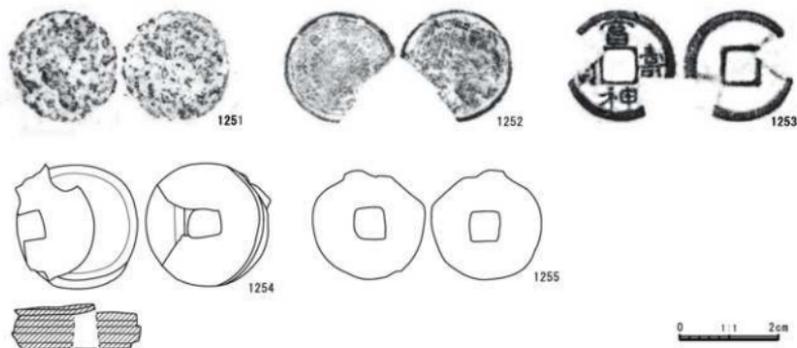


図 151 包含層出土銭貨（その他）

ほかには寺家前遺跡の周辺には、衣原古墳群や寺家山古墳群などがあり、後世の土地改変により造成土に混入していた可能性もある。いずれにしても、今後、鉄鏡の年代と周辺古墳群との関連などを検証していく必要がある。

図 150-1238～1250 はその他の遺構から出土した金属製品である。1238 は A-1 区の石敷を伴う道路遺構 A534 より出土した。板状で中央に円形の孔を持つが用途不明の鉄製品である。1239 は柱穴 SP3599 より出土した銅製品である。SP3599 は E-2 区北西部で検出した柱穴群のひとつで、建物跡にはなっていない。同遺構からは中世土器が出土し、周囲の柱穴も中世の時期と考えられることから本柱穴も中世と考えている。銅製品は薄い板状で湾曲しているが用途は不明である。1240 は E-3 区の掘立柱建物 SH203 の南東隅の柱穴 SP8198 より出土した。柱穴内からは柱根とともに山茶碗も出土している。鉄鏡形にもみえるが上下の断面形は方形を呈し、上下が欠損していることから別の用途が考えられる。1241 は E-2 区の掘立柱建物 SH102 の北西隅の柱穴から出土した鉄製品である。平面形は、くの字を呈し、0.7cm ほどの厚みを持つ板状であるが用途不明品である。1242 は溝状遺構 SD177 より出土した釘である。頭部は折り曲げられて、断面形は方形を呈す。1243・1244 は煙管である。1243 は上層 1 期の井戸 SE8637 (図 65) 内より出土した。煙管の雁首で火皿の一部を欠くがほぼ完形である。1244 は吸口である。全体に潰れて大きく折れ曲がっている。不明遺構 SX205 より出土したが近世のものであろう。1245～1247 は釘である。1245 は長軸が 90cm、短軸が 54cm の小土坑 SP2935 より出土している。炭化物が多かったことから墓の可能性もあるが、その他の出土品を伴わない。1246 は近世初頭の柱穴 SP2654 (54×49cm) より出土した。断面形は円形である。1247・1250 は A-1 区の丘陵部で検出した道路遺構より出土した。1248 は近世の小土坑 SP8920 より出土した鉄製品である。扁平な板状で上端部は折返しがあり、下端部は裏面側に内湾している。1250 は板状に 4 箇所円形孔がある。全体に錆びて石が付着している。1249 は近世初頭の柱穴 SP1216 より出土。5cm ほどの板状を呈すが用途は不明である。

図 151～153 は包含層より出土した銭貨を年代別にまとめた。図 151-1251・1252 は近現代の貨幣である。1251 は径 2.3cm、重量が 3g ほどであることから、大正 5～昭和 13 年に発行された「桐 1 銭青銅貨」か、昭和 13 年に発行された「カラス 1 銭黄銅貨」に近い。錆で腐食し判別不可能であった。1252 はカラス 1 銭黄銅貨である。1251 も同様の可能性がある。1253 は E-3 区中世層より出土した皇朝十二銭の「富壽神寶」(弘仁 9 年 = A.D. 818 年初鑄造) である。静岡県内では、浜松市城山遺跡、森町大門出土(中世大量出土銭)に続き 3 例目となる。出土層位は中世であるが、水田域では下層で奈良時

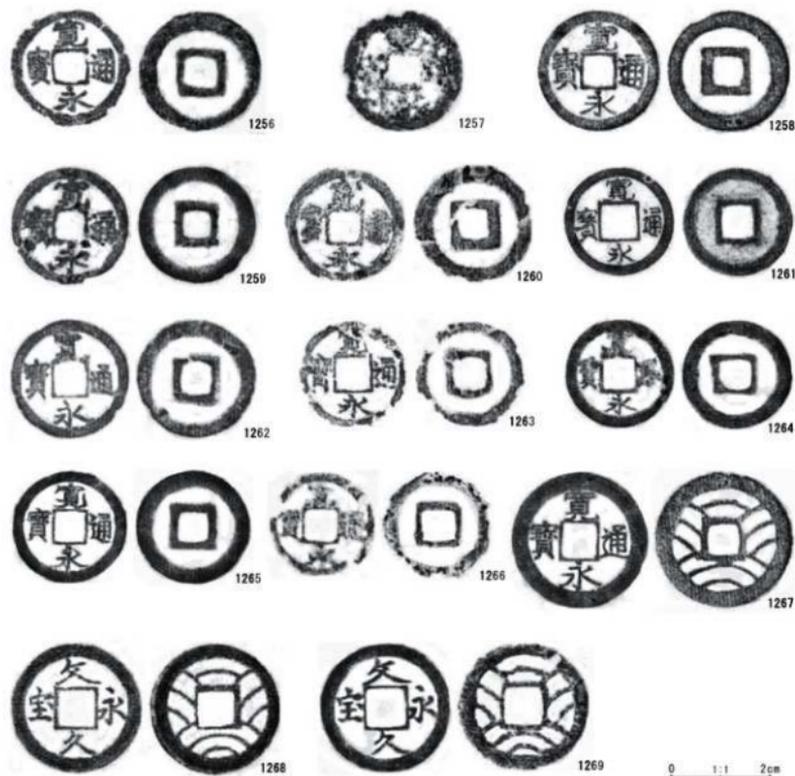


図 152 包含層出土銭貨（近世）

代の土器や条里水田も見つかっていることから、この時期に属するものであろう。1254・1255は銭種不明のため、年代の特定不可となった銭貨である。1254は6枚組で癒着している。E-2区の攪乱土除去層より出土した。墓坑の存在が把握できなかったものの、副葬品（六道銭）の可能性が高い。1255は確認調査その2で西尾根部の26Trから出土した銭貨である。同トレンチからは釘も出土していることから、かつて墓坑があったことが疑われる。図152は包含層より出土した近世銭貨である。1256～1267は寛永通寶、1268・1269は文久永寶である。ほとんどが表土除去または攪乱土除去作業中に見つかっている。1268の文久永寶は図153の聖宋元寶（1277）と一緒に見つかっている。図153は包含層出土の中世銭貨である。1270・1287・1288はE-2区の同一場所から出土した。このほかにもA-1区の1282のように渡来銭が3枚癒着した銭貨は、六道銭のような定型化された宗教祭祀の一部の可能性も含む。1283は13枚癒着している残存状況から緞銭であろう。1273は元豊通寶に別の銭貨片が癒着している。近世の渡来銭が市中に残置を示す共伴出土例について述べる。延奉2年（1674年）に寛永通寶以外の銭貨が禁止されると、これ以降に発行された銭貨と渡来銭が共伴している事例は、渡来銭が使用

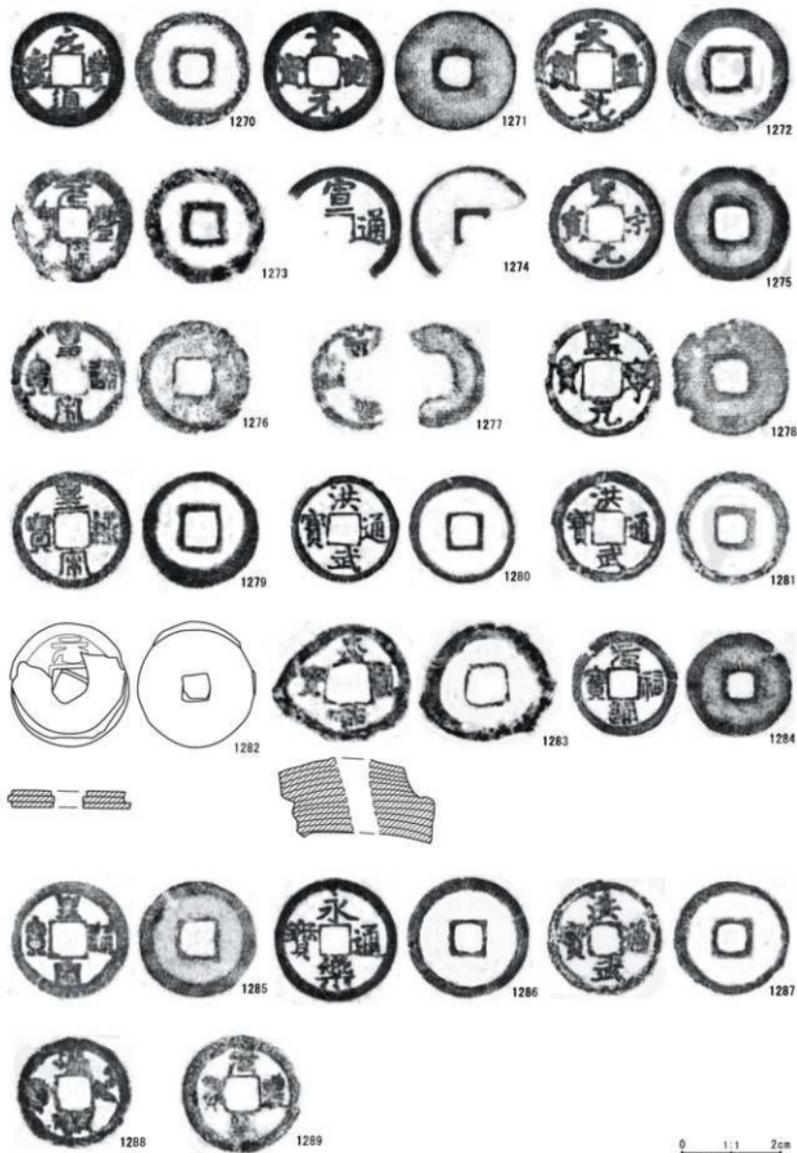


図 153 包含層出土銭貨（中世）

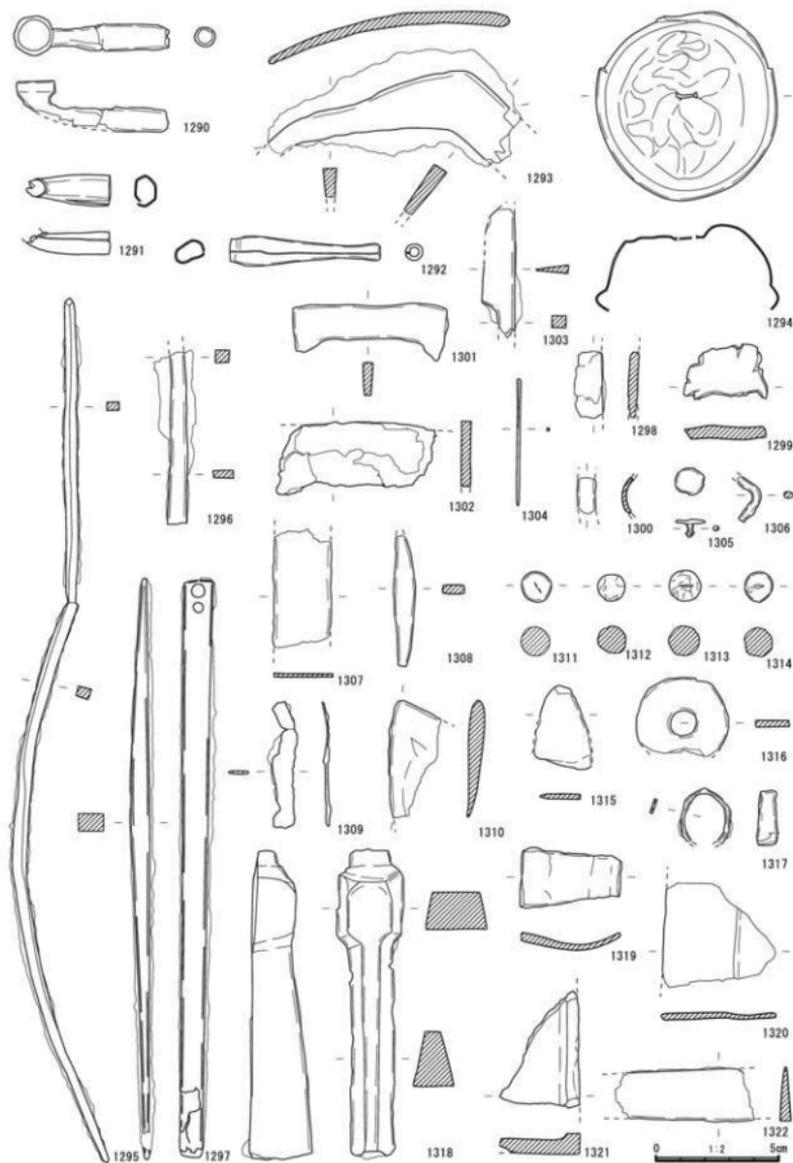


図 154 中～近世包含層地出土金属製品 その他

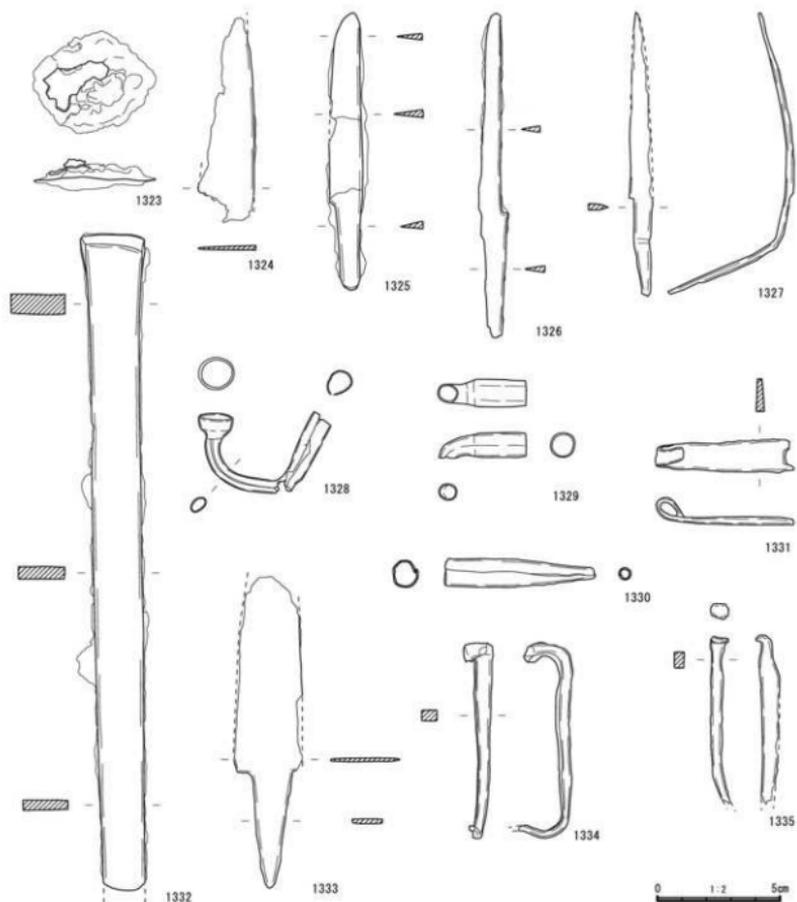


図 155 奈良～平安時代包含層出土金属製品 刀子他

禁止後、どれだけの時間、流通しなくとも市中（人々の手元）に残っていたかを示す。ただし、好古家の収集結果の可能性も考慮する必要がある。文久永寶（1268）と聖宋元寶（1277）は、渡来銭が19世紀後半まで人々の手に残っていたものであろうか。永樂通寶（1162）と新寛永（1163・1164は裏面に「元」。古銭界では大阪高津で寛保元（1741）年に鋳造とされる。）は、渡来（永樂）銭が18世紀前半まで人々の手元に残っていたのであろうか。図 154-1290～1322 は包含層より出土した金属製品である。掘乱土または排水溝、トレンチ内で見つかったもので、時期年代は不明である。1290～1292 は煙管の雁首と吸口である。1291 には文様がある。1293 は鎌。1294 は銅製で、体部は薄く、上部に紐の孔があり、下方は組合うように折れ曲がっていることから鈴の一部と考えられる。1301 は火打鎌、1303

は刀子、1304は針（材質不明）、1305は鋏である。1311～1314は鉄砲玉。1306は銅製だが用途不明品である。それ以外は攪乱土層より出土したものを中～近世以降と判断したが、明確な時期・用途ともに不明である。図155-1323～1335は、古代～中・近世の出土層位がわかっている金属製品である。1323～1327は平安時代の包含層出土で、このうち1324～1327は刀子である。1328～1330は中～近世の煙管の雁首と吸口である。1331は中世包含層より出土した板状製品で先端を輪状に折り曲げている。1332はA-1区で検出した整地層の掘り下げ時に出土した金属製の馬銜の歯である。先端は欠損している。1333はE-4区中世包含層より出土した。刃先は欠損しているが鉄鏝あるいは刀子であろうか。1334・1335はE-5区の中世5層から出土した釘である。頭部は潰れ、先端も欠損している。

(ケ) その他の遺物

その他の遺物は土製品と自然遺物がある。土製品は図156に瓦、図157に羽口・土鍾・転用硯・土玉がある。瓦は1336のみがE-1区の遺構SX205より出土した。その他の瓦は包含層から出土し、年代を特定できる資料ではなかった。1336は埴またはのし瓦と思われる。SX205では奈良時代以降から近世陶磁器まで含まれており、どの時期のものとするか特定するのは難しい。灰白色で0.35cm程の小礫が混じって板状を呈している。欠損して原形が不明である。1337は平瓦である。凸面は格子状の型押し紋、凹面には布目疋痕がある。端部のない破片のため天地左右が不明である。瓦の作成技法から年代が鎌倉期に遡る可能性がある。1338はE-2区の集落と水田の境界で出土した瓦である。隅切瓦であろうか。1339も埴またはのし瓦であろう。厚さ1.65cmの板状を呈し二方向の側面が残っている。1340は丸瓦の小破片である。凹面には布目痕がある。1341は平瓦である。凹面は布目痕がある。1342は丸瓦の玉縁部分破片である。凹面には整形時の摸骨痕がある。摸骨痕の上部は細い幅、下部は幅0.8～1.0cmの板状である。1343は軒丸瓦である。瓦当部表面は左巻三巴連珠紋で、直径は14.8cmほどある。裏面は指ナデ押さえがある。凹面には布目、凸面にはへら削りの整形痕がある。1344も1343とほぼ同径の軒丸瓦破片である。瓦が出土した区域は、北側の集落域（E-1～E-3区）である。しかし瓦の出土量からして、中世以前、当地に瓦葺きの建物があったとは考えにくく、後世、造成時の客土に混入していたと考えるのが妥当であろう。図化しなかった瓦については、図版102・108に掲載した。図157-1345～1347は輪の羽口である。いずれも体部の破片で原形を留めていない。全体に被熱している。E-2区の集落域やE-3区の西端で出土しているが時期不明である。1345は直径が8cmほどあったものと思われる。1346は下方に端部が残っている。復元径は9～10cmほどある。1347は上端部に付着物がある。復元径は6cmほどである。本遺跡内で製鉄に関連する遺構は見つかっていない。1348は土製の玉である。直径は0.8cmで上下に面がある。E-2区で出土しているが詳細な記録がなく時期は不明である。1349～1350は土鍾である。いずれも表面の色調は灰白色で硬く焼き締まっている。1349は完形品で上端は平坦な切り口を持つ。E-5区の畦畔を切る河道より出土した。1350はE-1区110-C～Dグリッド内にある自然流路（旧河道）跡（SD118）より出土した。中央部が膨らむ紡錘形の完形品で表面は整形時の指頭痕がある。上端面の切り口は平坦に切られている。SD118に共存する遺物は奈良時代から近世までと年代幅が広く、この土鍾もどの年代に属するかは不明である。1351は甕の破片を硯に転用している。

自然遺物の種子については写真図版に掲載した。図版47にある種子類は、上層2期の2群屋敷地に伴う区画溝SD9067より出土した。種子はウリ科の植物に似ている形状で、溝の覆土上層部より見ついている。この他にも桃核のような種子が多数出土している。同溝跡では墨書土器や扇、杓子、草鞋なども共存している（第2章第2節）。図版96の下段は遺構および水田より出土した種子である。E-1区水田域包含層、A-1区7層水田にあたる包含層では桃核のような種子が出土した。E-2区のSP859は近世初頭の柱穴ととらえており、覆土内には種子が2個体あった。E-2区SP2156も近世以降の柱穴で種子

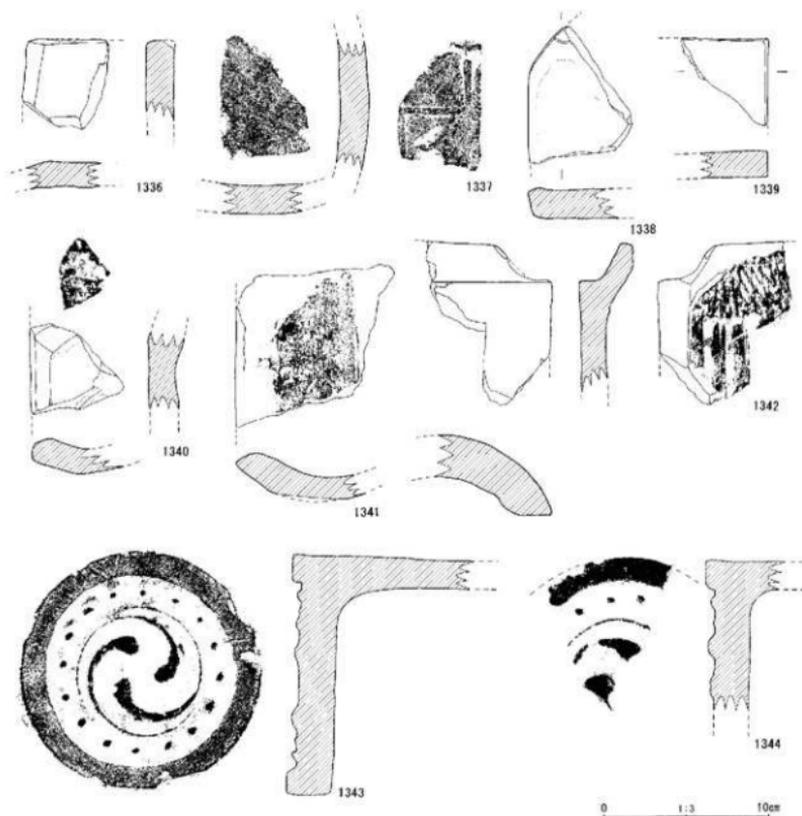


図156 出土土製品 瓦

は3点出土した。E-3区では2群屋敷地の西側で検出した井戸（SE8036）より二枚貝片が出土した。同区のSR9126では種子は2点ある。いずれも桃核のような形状である。SR9126では出土土器がなく年代を特定することができず時期は不明である。

註

1. これは山茶碗の出土量の多寡を単純に遺跡の盛衰を表現しているとした場合であり、これには山茶碗各期の存続時間幅を全く考慮していない。これ以外にも、遺構の密度、各種の遺物、特に「威信具」とされている遺物のあり方などを考慮する必要があることは言うまでもない。
2. 山茶碗の分類は河合修・溝口彰啓氏の手を煩わせた。また、東邊江では金谷以外にも菊川市嵐山古窯、牧ノ原土器谷古窯など何箇所かで山茶碗を使っていることが知られているが、肉眼では、それらの区別は難しいこともあり、ここではその分類については触れなかった。
3. 山茶碗を時期別の出土量を示したが、小破片のものもあり、時期が判別できないものは省いた。また、どの時期に属すのか

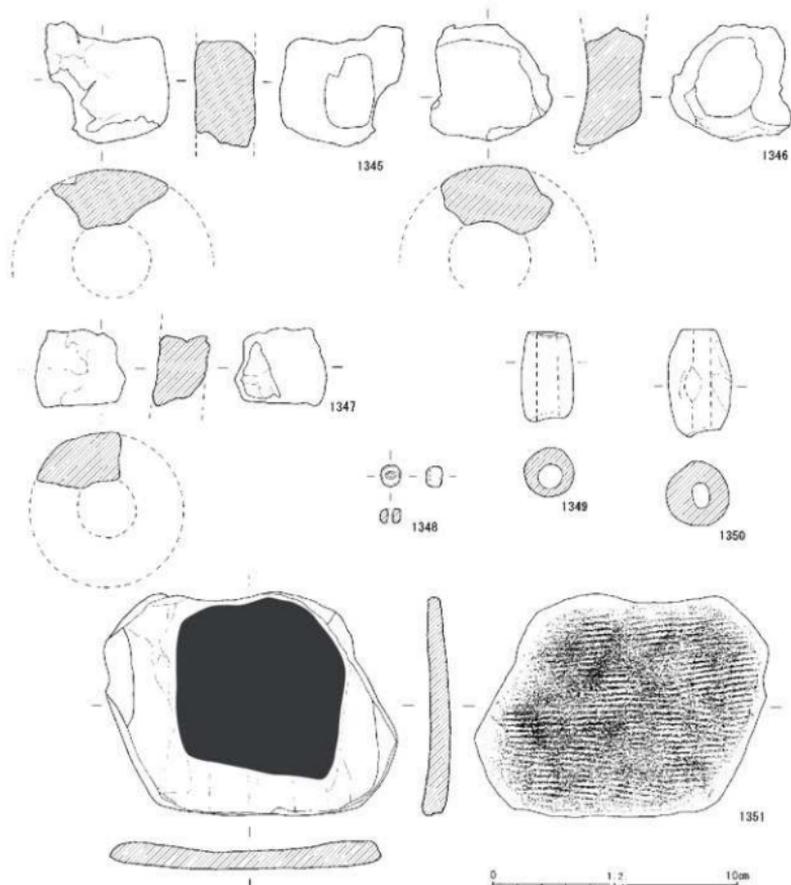


図 157 出土土製品 羽口・土鍾・転用硯・土玉

明確でないもの、たとえばⅠ-2期あるいはⅡ期、Ⅲ-1期あるいはⅢ-2期とされたものは両者の数に案分してある。したがって、ここに示した数値は出土の絶対数を示すものではなく、一つの傾向を示すものとしておきたい。

4. Ⅲ-2期は山茶碗の終了の時期であり、山茶碗の出土量の減少が他の容器に取って代わられたことによるものか、あるいは遺跡の盛衰に関わるものか否はにわかに決められなかった。特に上層1期とした時期の遺構が明らかでなかったことから、今回の調査からはその問題には触れることはできなかった。

5. 墨書の解説は湯之上隆氏（静岡大学教授）の手を煩わせた。98・974の両者は、ともにⅢ-1期に属す山茶碗でもあり、当初は同筆ではないかと考えたが、湯之上氏に「別筆であろう」との指摘を受けたので、それに従う。

6. 出土銭貨については岩名建太郎氏（静岡県教育委員会文化財保護課）より教示・所見を得た。本文の記載はこの所見をもとに記述した。

3. 遺構各節

現地調査および資料整理によって確認された各遺構について説明する。

(1) 掘立柱建物

ア. 上層1期の掘立柱建物

(ア) 1群

SH101 (図43) E-1区の北西隅で検出された1間×1間の小型の建物である。柱の間隔は南北1.8m×東西1.7mとほぼ等しく、正方形に近い。柱穴が重複していることから、何回かの建て替えが行われていることを想定できる。壁沿いに何本かの柱が認められるが、柱の間隔は不規則であり、柱の並びから、壁で屋根を支えたものであろう。柱穴の太さも50～30cmとそろってはいないが、径30cm程度のものが多い。側の柱に比較して隅の柱が太いということはない。柱の間隔は、北面では東から0.3+0.7+0.5m、南面は東から0.3+0.4+0.9m、東面は北から0.6+0.9+0.3m、西面は北から0.5+0.3+1.0mである。柱の間隔はそろってはいない。建物の面積は3㎡あまりである。東南隅の柱穴からかわらの小片が出土している。また、柱穴と重複する土坑からも近世志戸呂焼の破片が出土している。

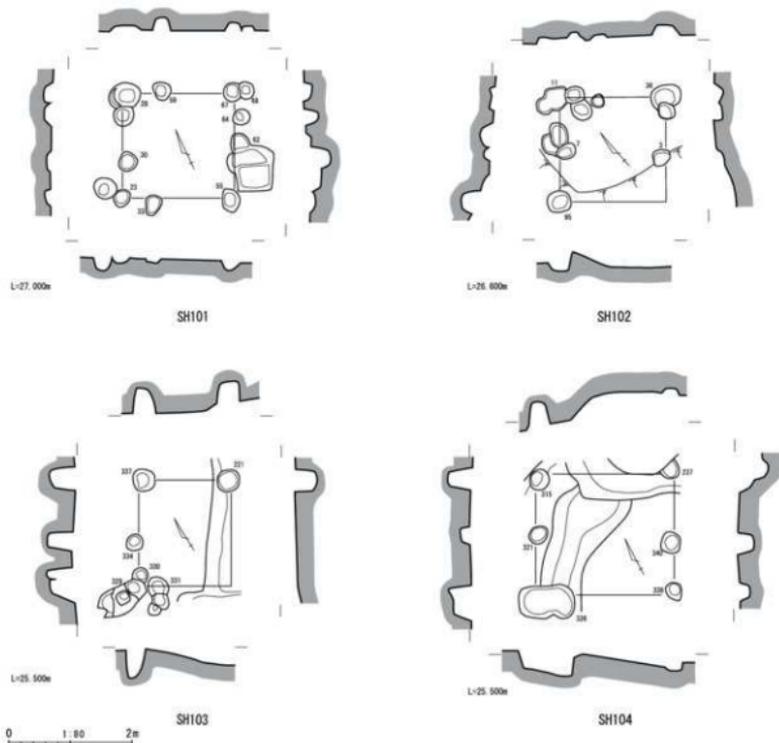


図43 上層1期SH101・102・103・104

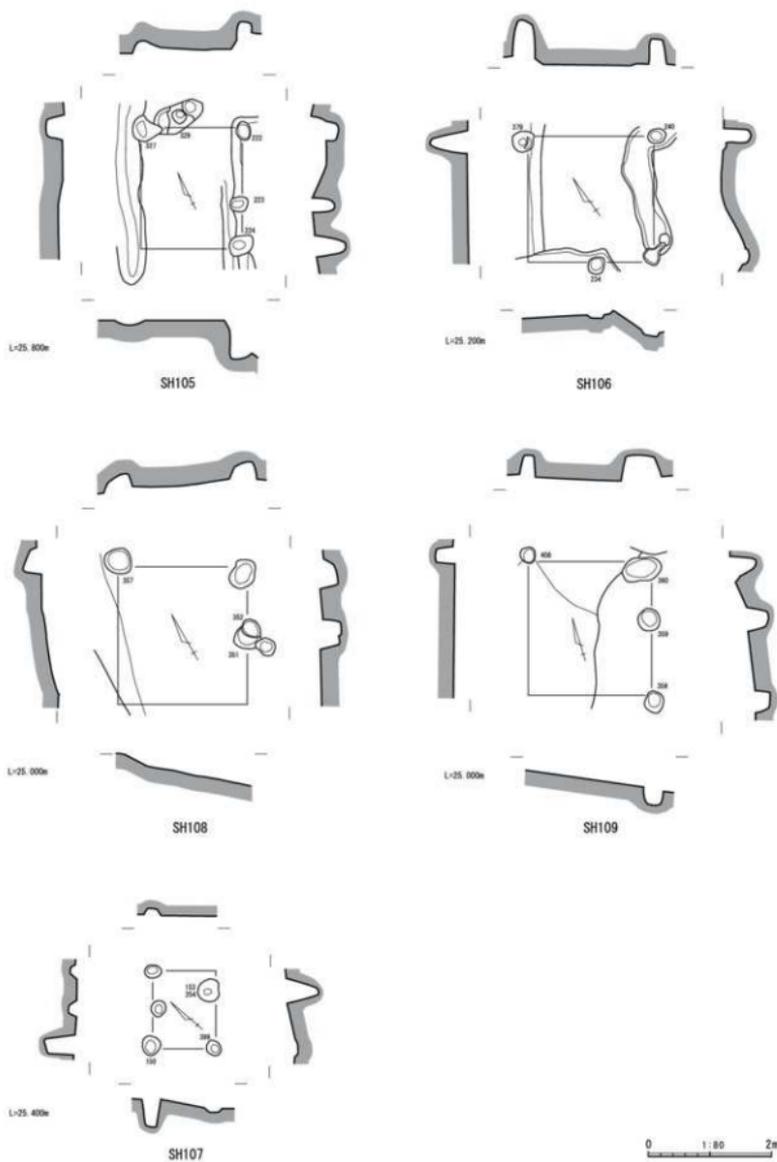


図 44 上層 1 期 SH105・106・107・108・109

SH102(図43) SH101の南側に隣接している。南北2間(1.7m)×東西1間(1.7m)ほどの大きさである。柱穴の径は50～30cmほどで、いくつかの柱穴が重複した状態を示しており、この建物が何回かの建て替えを経たものであることが理解できる。南側はすでに削平されており、東南隅の柱跡は検出できなかった。建物の面積は2.9㎡ほどである。

SH103(図43) E-1区のほぼ中央を流れるSR3871の東側に位置し、南北1間あるいは2間(1.7m)×東西2間(1.5m)程度の大きさの建物である。西壁沿いには柱穴が何本か観察できるが、東側では柱穴は確認ができなかった。2間×2間の建物を推定したが、あるいは壁で屋根を支える構造であったのかもしれない。建物の面積は2.5㎡余である。西南隅の柱穴およびこれに重複している柱穴から近世瀬戸焼の縁軸小皿が出土しているが、柱穴は複雑に重複しており、この縁軸小皿がこの建物の年代を確定するものか否かは明らかではない。

SH104(図43) SH103に一部重複して建てられている。やはり東西2間(2.3m)×南北2間(2.0m)ほどの建物で、平面形から東西棟であったのかもしれない。建物面積は4.6㎡である。柱穴に重複は少

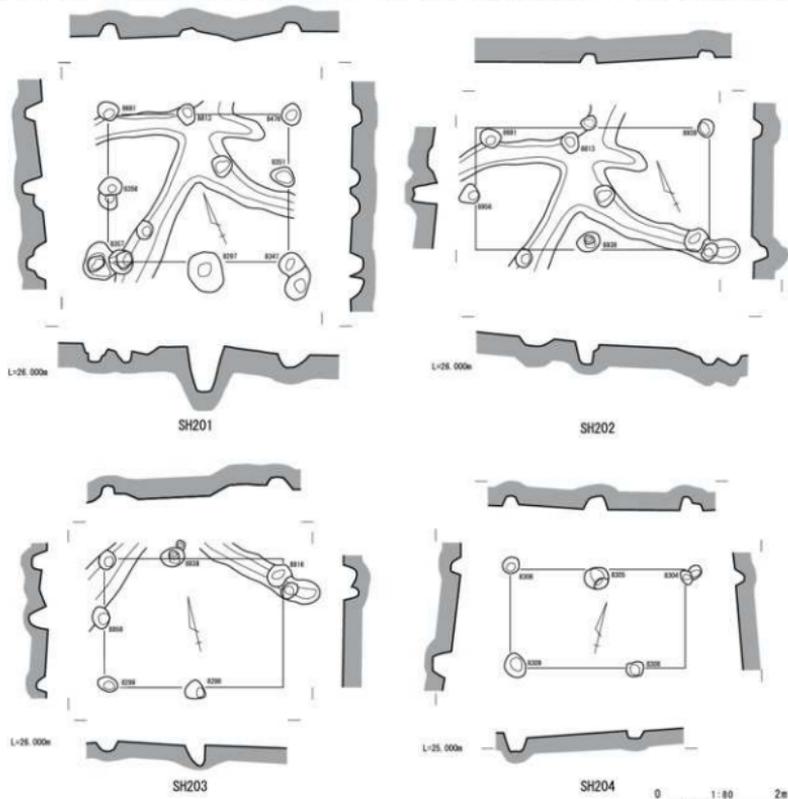


図45 上層1期 SH201・202・203・204

ない。柱穴からは全く遺物を検出しなかった。

SH105 (図 44) SH103の南に隣接する建物で、やはり南北2間(2.0 m)×東西2間(1.7 m)の南北棟であったと推定できる。北面の柱も中央ではなく片側に寄っている。西南隅の柱は近世の水路に重複しており、検出されなかった。建物の面積は3.4 m²ほどで、柱穴の重複はさほど激しくはない。東南隅の柱穴からは近世の陶器片が出土している。また、北西の柱穴と重複する土坑からも染付(肥前焼)と緑釉小皿が出土している。

SH106 (図 44) SH103の東側に位置する建物であるが、規模はSH106の方がやや大きい。棟方向は南北方向である。東西2間(2.0 m)×南北2間(2.1 m)の大きさであるが、間柱はどちらかに寄っている。建物の面積は4.2 m²ほどである。柱穴からかわかけ片あるいは近世の陶器片が出土しており、近世のものであろう。

SH107 (図 44) 東西1間×南北1間の小さな建物である。東北隅の柱は内側に寄っており、柱穴からかわかけの小破片が出土している。西側の壁沿いには柱が2本ある。また、西南隅の柱穴からもかわかけ片が出土しているが、小破片であり年代の推定は難しい。面積は1.3 m²ほどである。

SH108 (図 44) 東西2間×南北2間の建物である。削平されている部分があり、柱穴は明らかにならなかった箇所がある。建物の面積は4.4 m²と推定している。

SH109 (図 44) やはり2間×2間の建物と推定している。西側の柱は検出されているが、東側は削平されており、明らかにならなかった。面積は4.4 m²ほどと推定している。

(イ) 2群

E-3区の西端の山沿いで検出された建物群である。

SH201 (図 45) E-3区西端近く、2間×2間の建物で、柱根は残っていないが、痕跡から柱の太さは15～20 cmほどに復元できる。柱間は1.1+1.3 m×1.3+1.6 mであるが、柱の位置の取り方では柱間はかなり均一に近くなる。柱穴は近世の水路と重複しているが、その前後関係は確認されていない。周辺からは水路と重なって、井戸が数多く検出されている。床面積は7 m²ほどである。

SH202 (図 45) SH201に重なるように数多くの柱穴が検出されており、これらから何棟かの掘立柱建物が復元できるが、いずれも柱位置、柱間もSH201ほどには整っていない。SH201の南側部分に重なって検出された桁行2間×梁行2間の建物である。南西隅の柱は明らかにならなかった。柱間も桁行1.9×1.9 m、梁行1.1×0.9 mと一定していない。建物の面積は7.6 m²ほどである。

SH203 (図 45) やはりSH201の南側部分に重複して確認された2間×2間の建物であるが、南側の柱は明瞭ではない。桁行3 m、梁行2 mほどの小型の建物である。建物の面積は6 m²である。

SH204 (図 45) SH201の南側で検出された2間×1間の建物である。桁行2.8 m×梁行1.6 mの大きさに復元できる。柱間にもばらつきがあり、建物跡とすることは難しいかもしれない。

イ. 上層2期の掘立柱建物

(ア) 1群

SH101 (図 46) 区画の中央やや南寄りの部分で検出されたもので、ほぼ、南北棟の東面する建物である。規模は桁行5間(1.8+2.0+1.5+1.5+2.0 m)×梁行3間(1.9+2.4+1.5 m)で、9.0×5.8 mの平面積52.2 m²を数える大型の建物である。この建物は柱掘形の重複が激しく、同一の位置での建て替えが数回行われたことが推定される。桁行の柱間はばらつきがあり、北側の1間は柱間が狭く、柱も細く掘形も浅い。あるいは、この1間は追加されたものかもしれない。床張りの建物であることを推定しているが、束柱の一部は検出できていない。梁行も柱間は東から1.5+2.4+1.9 mと、中央部分

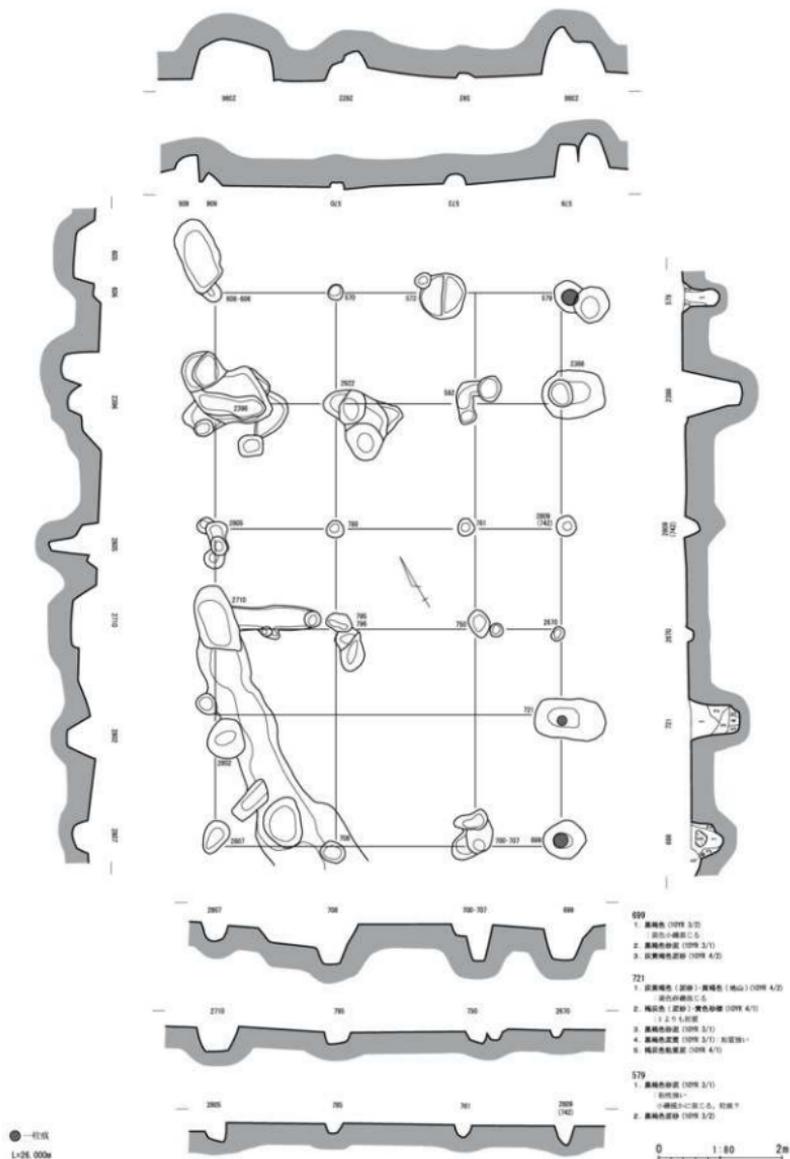


図 46 上層 2 期 SH101

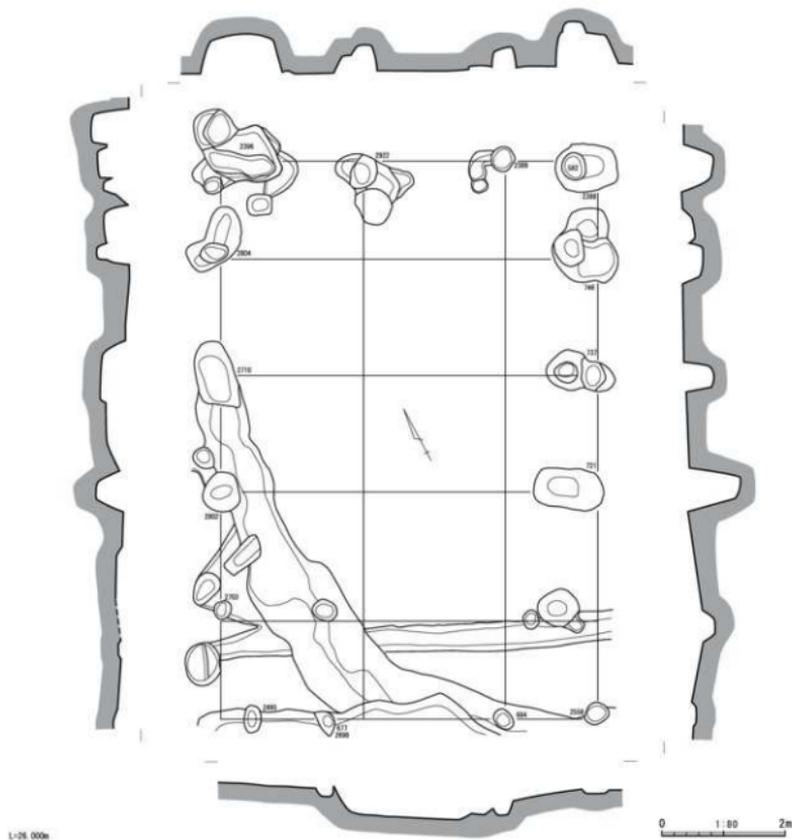


図47 上層2期 SH102

が広がっているが、これは重複しているSH102とも共通している。北側柱間の中央に小型の柱穴があり、出入口等なんらかの造作をしていたことが推定される。また、中央部の柱間の中間に棟の位置があるとする、建物全体を見ると東側に0.5mほど棟の位置がずれていることになろう。東面の側柱列に柱の痕跡が残っている部分がある（図中では網掛けで表示）。

SH102（図47） SH101に重複した桁行5間（9.1m）×梁行3間（6.1m）の建物である。南北棟の東面する建物で、ほぼ56.1㎡の面積をもっている。柱間は桁行の両端が1.5m、中の3間は2m前後であり、梁行の柱間は2.3m+2.3m+1.5mである。床張りの建物であろうが、東柱の痕は明瞭ならなかった。また桁行の両端で柱間が狭くなる1間ずつについては庇の可能性も考えられようが、そうすると身舎の側柱が明らかでないので、ここではこの建物には庇はなく、この部分を含めて南北5間の母屋であろうと考えている。SH101とほぼ同位置にあり、側柱も重複しているものが多いが、その前後関係

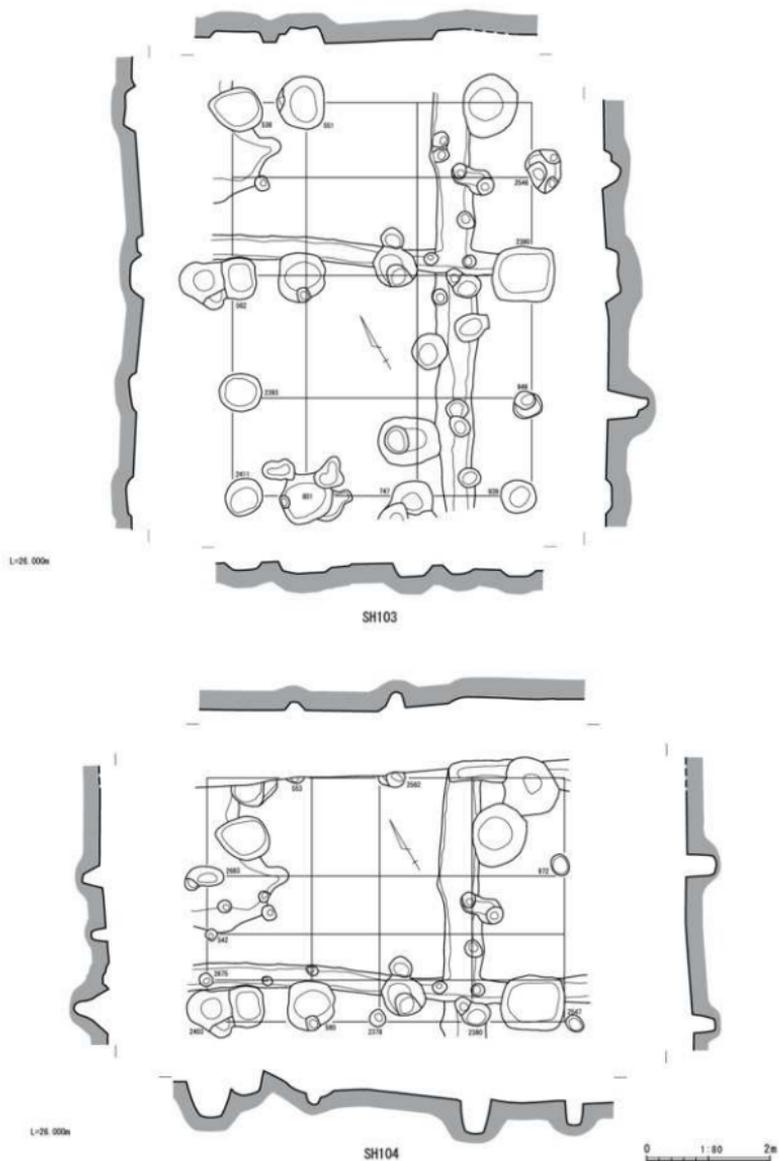


図48 上層2期 SH103・104

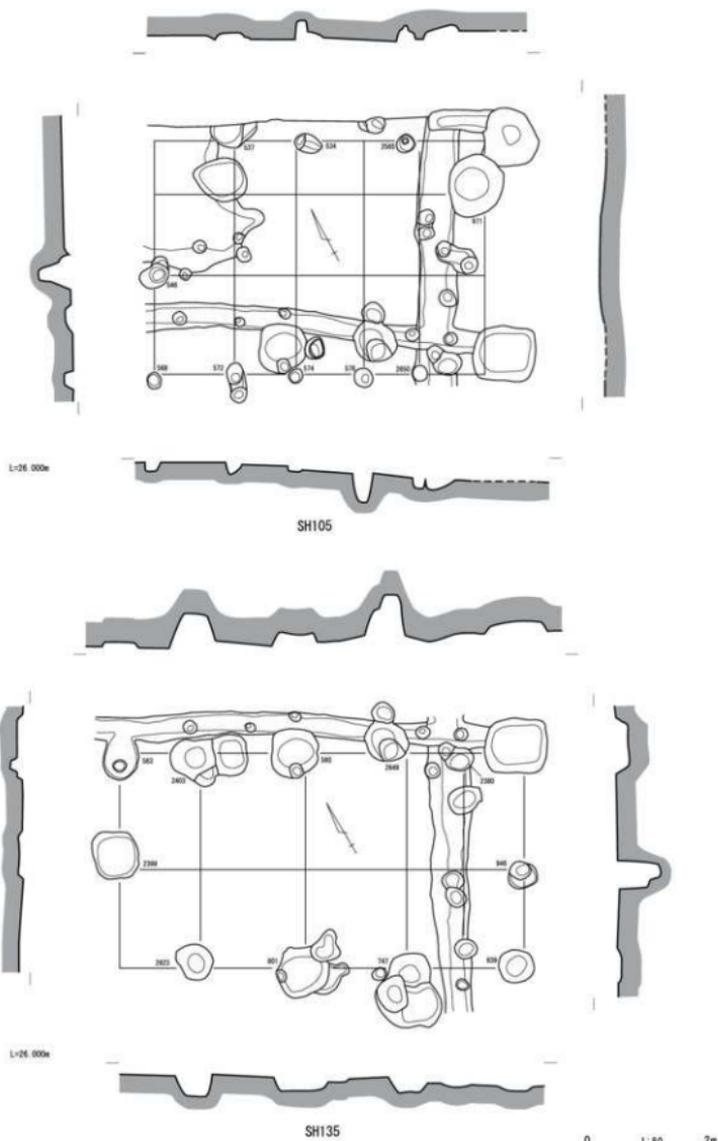


図49 上層2期 SH105・135

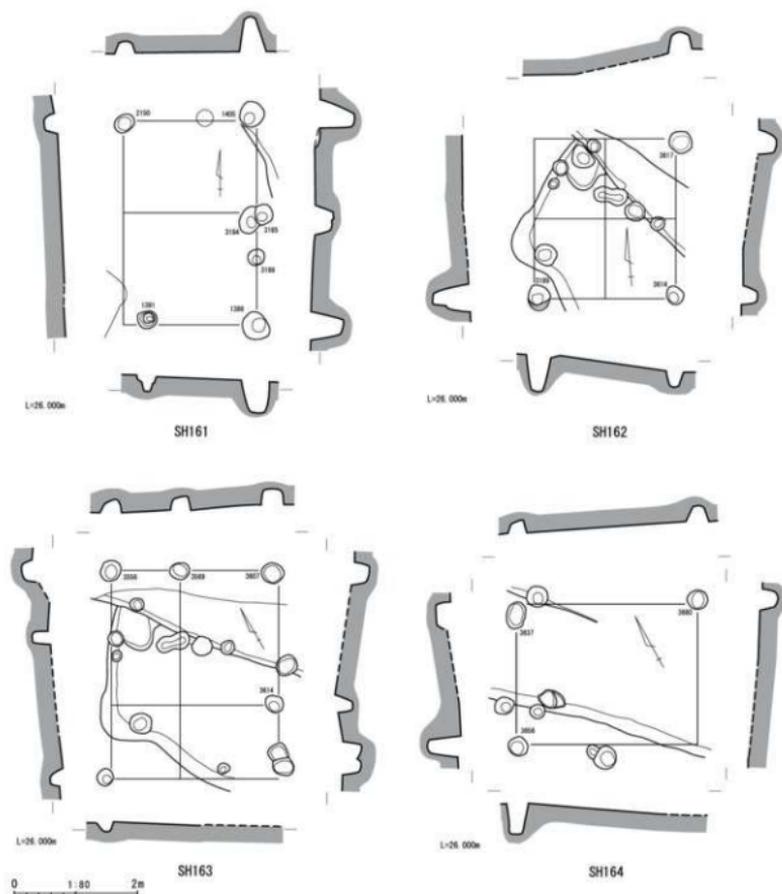


図50 上層2期SH161・162・163・164

は明らかにならなかった。この建物は建物群の西面を区画するSA101あるいはSD937とも方向が一致している。

SH103 (図48) 中央部にあり、SH101・SH104などと重複する位置にあるが、東面する南北棟の建物で、建物の桁行が比較的長い。桁行4間(6.4m)×梁行3間(4.8m)で柱間は桁行1.2+1.6+2.0+1.6m、梁行1.2+1.8+1.8mとなり、床面積は30㎡を越す。柱掘形が非常に大きい、これは柱が比較的太いことのほかに、何回かの建て替え、あるいは他の掘立柱建物の柱穴と重複していることによるものであろう。したがって、この建物は同じ位置に、同一の規模で何回かの建て替えが行われたことを示している。棟の位置はわずかに東側に寄っている。建物内から柱穴は多数検出されているが、東柱は抽出

が難しかった。しかし東面する大型の建物であり、当然床張りの建物であったものと思われる。建物の中央に柱穴が東西に並ぶところがあり、あるいは中に仕切りがあったのかもしれない。SH101などと棟方向は一致しているが、柱穴が切り合っており、同一の時期のものではない。あるいはSH101・SH102などに先行する建物かもしれない。

SH104 (図48) SH101に隣接し、棟方向がこれと直交する建物である。東西棟で、桁行4間(5.8m)×梁行4間(4.0m)の長方形の建物である。梁行の柱間は西側柱で観察すると1.6+0.8+0.8+0.8mとなり、桁行は1.7+1.1+1.5+1.5mとなり、床面積は23.2㎡ほどになる。柱間に多少のばらつきがある。北側は一部、排水のためのトレンチにかかって明確にならなかった。建物の位置・規模などからSH101に附属する建物であろう。とすると、SH101とSH104は母屋と脇屋の関係になるろうが、脇屋が母屋の左側に位置することになり、2群で観察された建物群とは位置関係が逆になっている。

SH105 (図49) SH104に重複する東西棟の建物で、棟方向はSH102と直交しており、これと密接な関係をもった建物であろう。そう考えるとSH102との間に2mほどの空間ができ、他の類似する建物より間が広がるが、両方からの庇の出を考えると、この程度の空間は認められよう。妻側の柱の位置が必ずしもそろわず、未検出の部分もあるが、桁行5間(5.4m)×梁行3間(3.8m)の建物を想定している。建物の面積は20.5㎡ほどになる。

SH135 (図49) SH101に一部重複して建てられているが東西棟で、棟方向はSH101にほぼ直交する。楕円形の大きな柱穴が多く、同じ位置で数回にわたって建て替えられたことを示している。桁行は5間で柱間は1.3m前後と比較的狭く、梁行は2間で、柱間は1.8m前後と比較的広い。建物の面積は23.1㎡ほどで、建物の内部に小穴が多く認められるが、SH101、SH103などと重複していることもあって、床東の存在は明らかにならなかった。しかし建物の位置・規模から、床張りの建物であったと推定している。

SH161 (図50) 1群の北面する外郭溝(SD3839)の内側で検出された建物群である。建物の位置は1群北区の北西端にあたる。山茶碗を出土する柱穴が密集して検出された地点で2間×2間程度の小規模な建物を4棟ほど検出したがさらに多くの建物があったのかもしれない。SH161は梁行1間(2.2m)×桁行2間(3.3m)の建物を想定しており、面積は7.2㎡ほどの建物である。桁行(南北)の柱間は1.6+1.6mで、南側の部分に柱があり、入り口に造作があったのかもしれない。梁行は北側には間柱があるが、柱の位置が多少ずれており、明らかでないので、ここでは1間としている。西南隅の柱は位置が

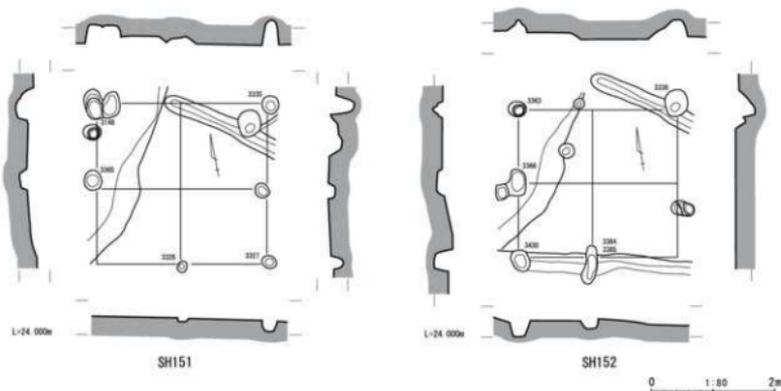


図51 上層2期 SH151・152

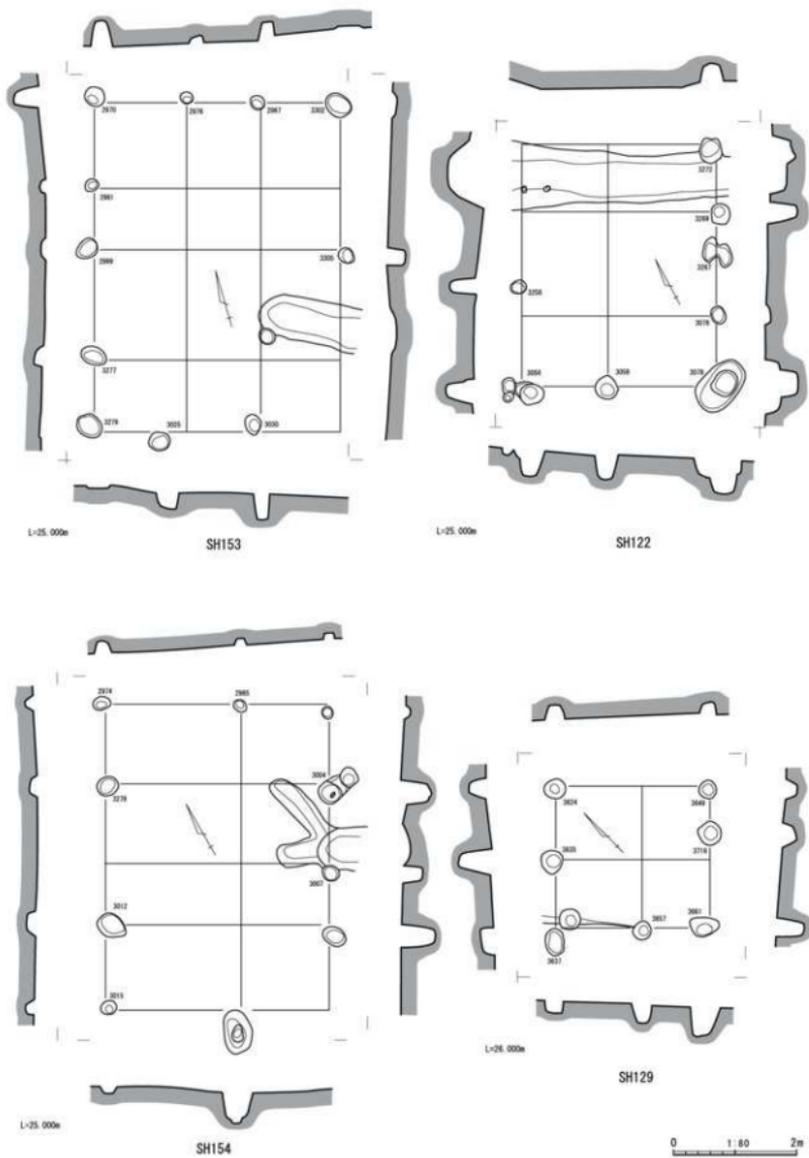


図 52 上層2期 SH153・154・122・129

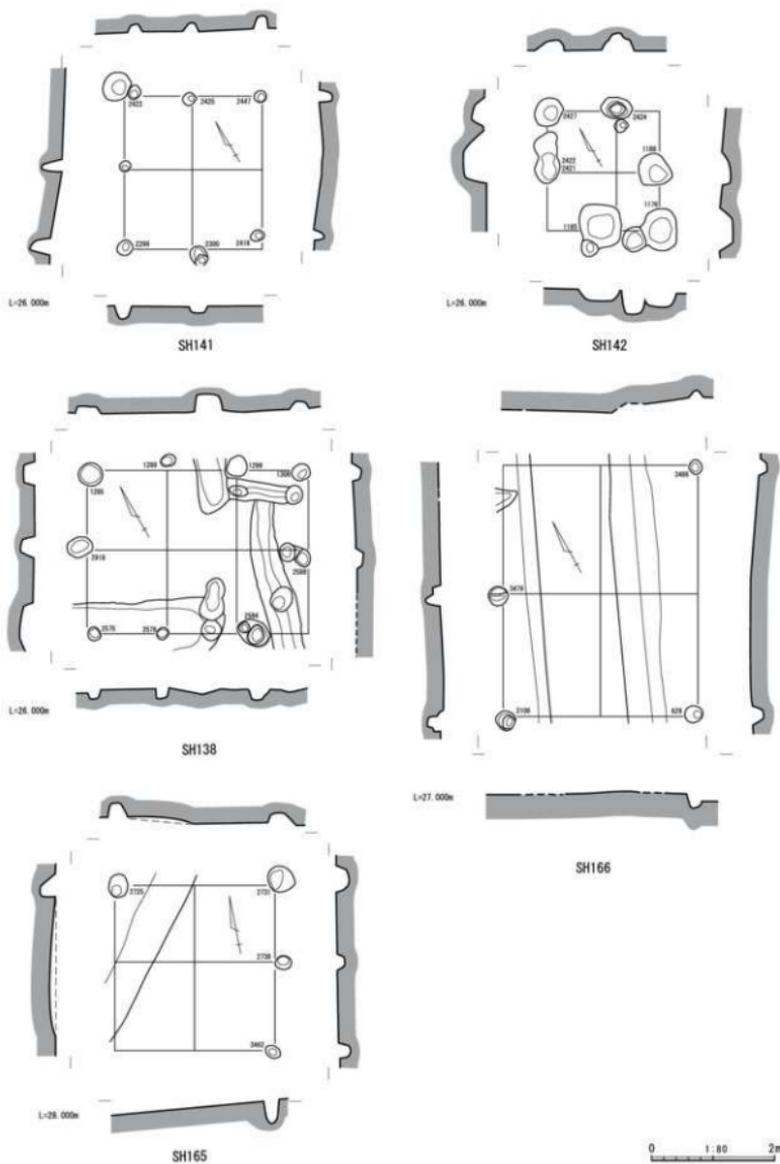


図 53 上層2期 SH141・142・138・165・166

ずれており、西面の側柱は明らかにならなかった。面積は7.2 m²ほどである。

SH162 (図 50) 2間×2間 (2.5×2.3 m) の正方形に近い建物を想定している。北西隅の柱は多少ずれがあるらしく、明らかではない。南面は間柱が検出されているが、北側は柱の位置に多少のずれがあり、明らかではない。SH163と重複しているが、建物の内部および周辺に柱穴が数多く検出されており、SH163以外にも建物が重複している可能性がある。建物の面積は5.98 m²で、その形、その規模から見てやはり倉庫であったものと考えられる。

SH163 (図 50) 南北2間 (3.4 m) ×東西2間 (2.8 m) の方形の建物で、建物の内部にも柱穴が検出されており、位置は多少のずれがあるが、東柱かもしれない。そう考えれば、高床式の倉庫風の建物が推定されよう。南北の柱間は1.8+1.6 mで、東西は1.6+1.1 mと、それぞれに多少のパラツキがある。建物の面積は9.18 m²である。

SH164 (図 50) 柱の数が十分に確認できなかったが、2間×2間程の建物であろう。南東隅の柱は確認できていない。また中間の柱は南面を除いて確認できていないので、建物の規模から見ても、あるいは1間×1間の建物であったのかもしれない。柱間は東西3.0 m×南北2.3 m、面積は6.9 m²で、東西棟の建物であろう。建物の規模から見ても倉庫と考えられる。

SH151 (図 51) 1群の主要な建物群と路を隔てた反対側に位置している。2間×2間の建物で、東西2.8 m×南北2.6 mのほぼ正方形に近い建物である。平面積は7.3 m²ほどである。東柱は検出されていないが平面形が正方形に近いもので、おそらく床張りの倉庫風の建物であったであろう。西側にこの建物に平行して柵列 SA103 が設けられている。柱間1.5+2.0+2.5 mと差があるが、何回かの建て替えを行っているらしい。また東側にもこの柵に直交して溝 (SD101) が掘られている。溝の幅20～40 cm前後で、溝というより板塀の跡かもしれない。一部は同一方向の柵 (SA104) と重なっている。柵と板塀に囲まれた高床式の建物はやはり倉庫であろう。

SH152 (図 51) SH151に重複して良く似た規模の2間×2間の建物がある。東西2.6 m×南北2.4 mで、ほぼ正方形である。東南の隅柱が検出されていないが、他の柱は検出されており、柱間も揃っている。面積は6 m²程である。やはり床張りの建物で、倉庫と考えられる。SH151の建て替えによるものであろう。

SH153 (図 52) SH154と重複する桁行4間、梁行3間の建物を想定した。建物の規模は5.4×4.0 m、面積は21.6 m²と比較的大きい。柱間に多少のパラツキがあり、また東面の柱も攪乱の溝に当たって欠けているものがある。桁行の柱間は西側では1.2+1.8+1.0+1.4 mで、中央部に多少狭い部分がある。梁行は南面では1.3+1.3+1.3 mと推定できる。

SH154 (図 52) SH122の北側にあり、棟方向は良く似た建物であるが、桁行4間 (5.0 m) ×梁行2間 (3.7 m) で平面積は18.5 m²とSH122よりやや大きい。桁行の柱間は1.3+1.3+1.1+1.3 mで、両面とも一致している。柱間が1.1 mと狭い部分は、やはり出入口等の造作が行われたところであろう。梁行は1.5+2.2 mで、棟の位置がやや東に寄っている。

SH122 (図 52) 1群の東端に当たる、SA102-B・Cの東側に位置し、3間×2間の南北棟の建物である。棟方向はSA102とよく似ており、桁行4 m×梁行3.2 mの規模で、12.8 m²程の面積をもっている。桁行の柱間は1.2+1.6+1.2 mで中央間の1.6 mは中間に柱があり、1 mと0.6 mとに分かれている。入り口などの造作があったのかもしれない。梁行は南側では1.7+1.5 mで、中間の柱が多少西側に寄っている。西側と北側の柱は溝・攪乱で失われている部分があり、明らかになっていない。

SH129 (図 52) 2間×2間の建物で、東西2.5 m、南北2.3 mで面積は5.7 m²ほどの小型の建物である。北面の柱間は明らかにならなかった。隣接して重複しているSH164よりやや小ぶりであるが、棟方向がよく似ており、あるいはその建て替えによるものであるかもしれない。両者の前後関係は不明である。

SH141 (図 53) SH105に隣接し、それと平行する棟をもった建物で、東西2間 (2.2 m) ×南北2間 (2.5

m)で、床面積5.5㎡ほどの倉庫風の建物である。SH142とほぼ重複しており、それとの建て替えによるものであろう。一部、東西隅柱に検出されていない柱穴がある。床束は検出されていないが、平面系は、ほぼ正方形で、床張りの倉庫であったと考えている。

SH142 (図53) SH141に重複しており、やはり2間×2間の小型の建物である。東西1.8m×南北2mで、床面積は3.5㎡程である。建物の大きさに対して柱穴の掘形が大きく、何回かの建て替えを行っていることが推定できる。SH104と側柱が平行しており、それに伴う倉庫と考えられる。

SH138 (図53) 桁行3間(3.6m)×梁行2間(2.7m)の建物で、おそらく東西棟の建物であろう。柱間は桁行が西から1.3+1.1+1.2m、梁行は1.3+1.4mで、建物の面積は9.7㎡ほどである。桁行は北面に比べて南面の柱間が狭くなっている部分があるが、おそらく出入口などの造作があったものであろう。SH101の北側に位置しており、SH104と棟方向が一致している。SH141・SH142とともにSH101に附属する建物であろう。

SH165 (図53) E-2区の西端で検出された2間×2間で面積7㎡の小型の掘立柱建物である。周辺に近世の流路あるいは柱穴が確認されているので、当初は「近世の建物であろう」と推定したが、北面の両隅の柱穴から山茶碗が検出されており、中世の建物と推定した。南西隅の柱穴は近世の流路によって削り取られたらしく、確認できなかった。柱間は東西2.6m×南北2.7mとほぼ正方形の建物で、面積は7㎡ほどである。東面の中央に柱穴がある。側柱であろう。東柱の存在は明らかにならなかったが、建物の規模・形から高床式の倉庫であろう。周辺には同じような径の細い柱穴が散在しており、なかには山茶碗を出土するものもある。他にも建物があったと推定できるが、建物としてはまとまらなかった。

SH166 (図53) SA101の西側にある2間×2間の南北棟の建物である。桁行は2.1+2.1mの4.2m、梁行は中央の柱が検出できていないので、不明であるが、1.6+1.5mの3.1mということになろう。建物の棟方向はSA101と平行している。したがって建物の棟方向はSH101の棟方向とも一致しているということになる。

柱穴3105から図96-531に示したかわらけが出土している。口径は推定で9cmほどの小型品であるが、ロクロ成形のかわらけで、底部は糸切り痕が残り、体部内外になで整形が行われている。

(イ) 2群

SH207 (図54) 2群の中心的な建物であり、ほぼ南北棟で東面する建物と推定している。桁行5間(10.39m)×梁行4間(7.13m)で面積は74㎡と規模が大きい。柱間は桁行がほぼ1.7+2.2+2.2+2.2+1.7mで、梁行は1.4+2.2+2.2+1.4mほどとなろう。屋根が寄せ棟形あるいは入母屋形なのかは明らかではないが、柱間の狭い東西両面は庇であったのかもしれない。仮に屋根が入母屋造りであるとすれば、2間×3間の身舎に四面の庇が付いた建物を推定出来るかもしれない(註2)。柱間の数値は31cmでほぼ割り切れることから、この建物は尺で表示すれば桁行は身舎7尺、庇は5.5尺、梁行は身舎が同じく7尺、庇は4.5尺で建てられていたものと推定している(註3)。

北の側柱の外側に0.8m程の間隔で柱が並んでいる。庇の外に付けられた廊下あるいは庇の付け替えに伴った痕跡のどちらかであろうが、柱間がそろっていることから庇の付け替えに伴うものだろうと考えている。また、東柱をもった床張りの建物だと推定しているが、東柱痕は充分検出できていない。柱穴の残りが少ないことから、掘形の浅い東柱の痕跡は、すでに削平されてしまっている可能性がある。

SH207-2 (図55) SH207・SH208に重複して、桁行5間×梁行4間の南北棟の建物が1棟推定できる。東面する建物で棟方向は隣接するSH209の棟方向と直交している。桁行9.9m、梁行6.8m、床面積は67.32㎡の広さで、SH207と良く似た大型の建物である。検出された柱穴が少ないので、建物の規模とその位置から、SH207と類似する建物と想定して、それと重ね合わせると桁行5間×梁行4間の建物が

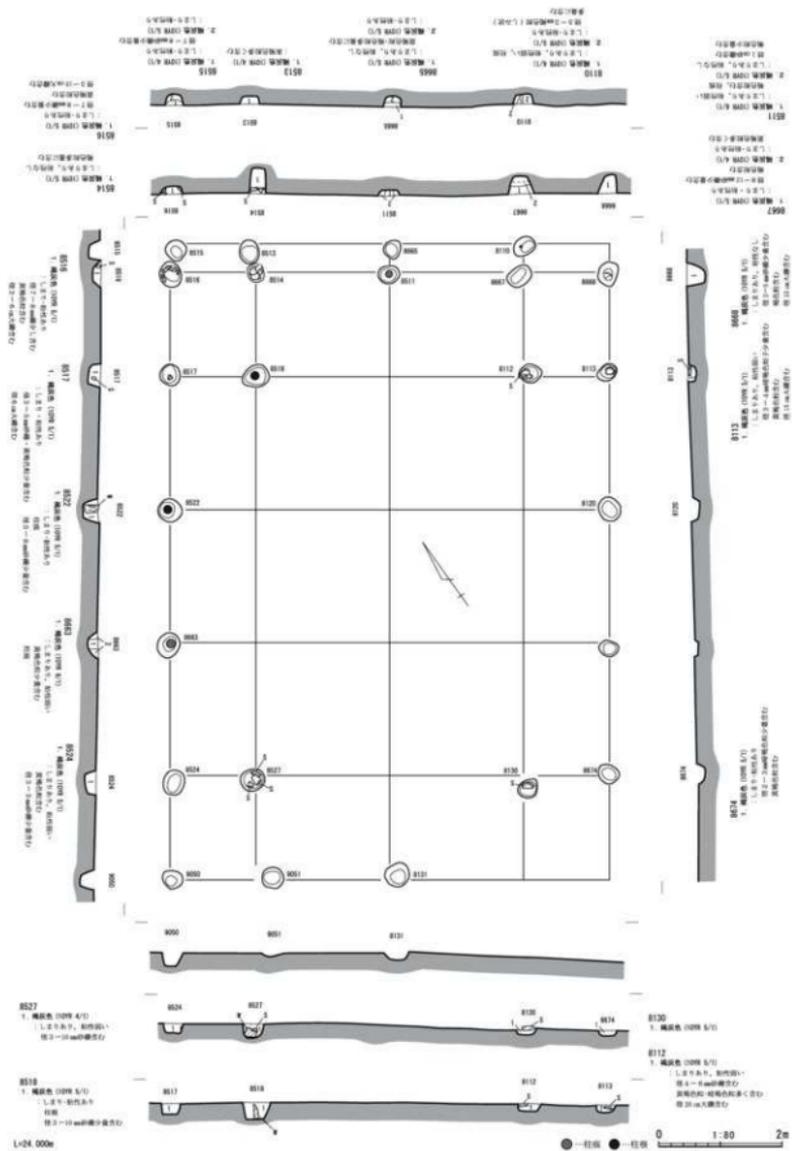


図 54 上層 2期 SH207

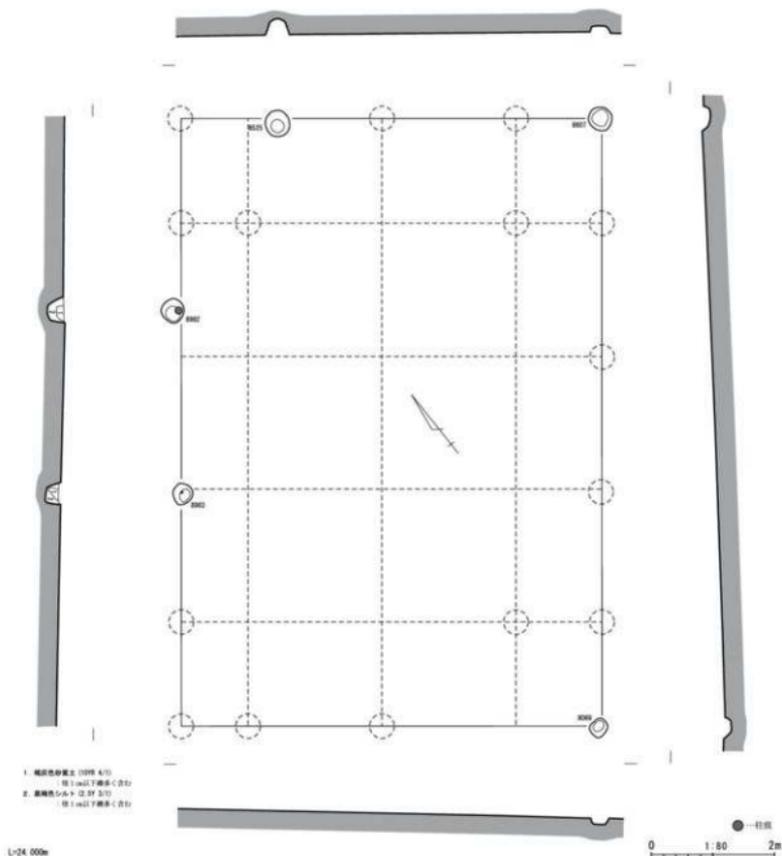


図55 上層2期SH207-2

推定される。検出された柱穴の位置は推定位置とほぼ一致しており、この規模の建物の推定は蓋然性であろう。したがって、桁行の柱間はSH207と一致させている。梁行もほぼSH207に準ずるが、中央の柱間がやや狭い。柱間は桁行5.5尺+7尺+7尺+7尺+5.5尺、梁行は4.5尺+7尺+7尺+3.5尺と推定できる。やはり身舎(2間×3間)に四面に庇を付けた建物であろう。

東南隅の柱掘形から灰軸陶器の小破片が出土しており、1群との境をなす溝(SD2679)などとともにこの建物群の初源を示すものかもしれない。

SH208 (図56) SH207に隣接する、東西棟の建物で、位置から見てSH207に附属する建物であろう。桁行8.6m×梁行5.3mほどの大きさで、面積45.7㎡ほどであり、4間×4間の建物を想定している。柱間は桁行が2.2+2.2+2.2+2.2mでほぼ7尺、梁行は1.2+1.8+1.4+1.0mで4尺

+6尺+5尺+3尺ある。梁行の南北1間はともに幅が狭く、庇であらう。東柱をもった床張りの建物を推定しているが、東柱痕はほとんど検出されていない。

SH209 (図57) SH208によく似た位置・規模の建物である。SH207-2に隣接する、やはり東西棟の建物で棟方向がSH207-2と直交している。やはり、これに附属する建物であらう。桁行5間(9.6m)×梁行4間(5.9m)で面積56.6㎡の大きさで、南北両面および西面に庇を付けたものであろう。

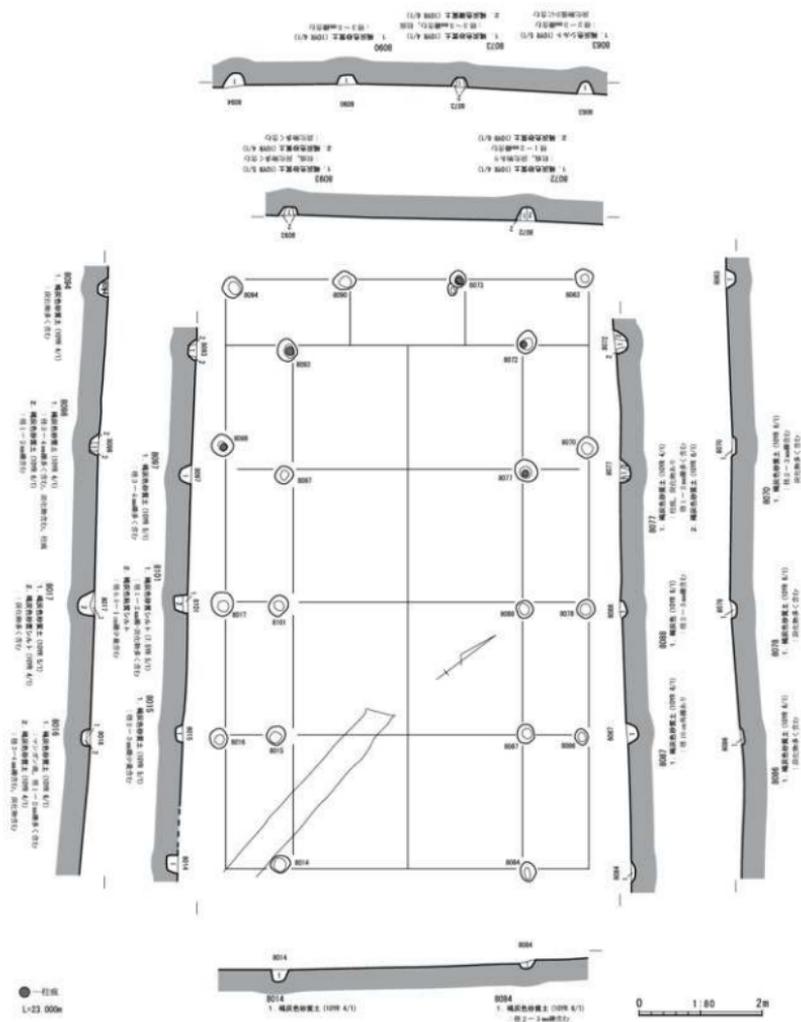
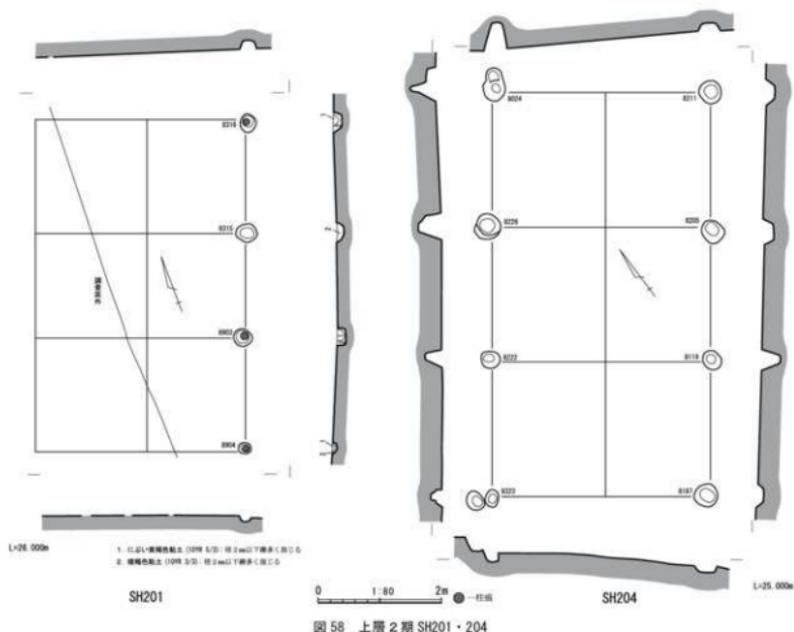


図57 上層2期 SH209



したがってこの建物は桁行4間×梁行2間の身舎に3面の庇を付けた建物と考えられる。柱間は身舎と庇の柱の通は北側2間では通っておらず、庇部分の側柱は4間になっている(註4)。

SH201 (図58) 調査区の西端で検出された建物で、西側半分は調査区外に当たり検出されていないが、隣接する建物を参考にして桁行3間(5.4m)×梁行2間(3.2m)の規模をもった建物を推定している(梁行は根拠が乏しい)。桁行の柱間はほぼ1.8+1.8+1.8mで各6尺(中央の柱間は5尺5寸かもしれない)ということになる。SH204と棟方向が一致しており、同時に存在したものであろう。

SH202 (図59) 桁行5間で柱間は1.5+1.8+1.2+1.2+0.9mと揃っていないが、東面の側柱の北から2間目が1.8mと広いのは、ここに扉が設けられていたのかもしれない。中央部分の柱間が広く、両側が狭い。床面積は20㎡程である。梁行は2間で柱間は1.4+1.6mで、西側が広い。屋根棟は東側に寄っていたのであろう。SH203と規模・形ともによく似ている。西側の柱穴が一部検出されていない。

SH203 (図59) SH202・SH204と重複している。桁行3間(6.3m)×梁行2間(3.3m)の建物で、規模・棟方向もSH202・SH204とよく似ている(棟の方向はこの地域の条里地割の方向とも良く似ている)。桁行の柱間は北から2.1+2.1+2.1mである。西側では間柱は確認できなかった。桁行は7尺を基本にしているようであるが、北側は6尺5寸かもしれない。梁行は1.5+1.5mで5尺5寸になっている。床の面積は21㎡程である。先に触れたように、同様の機能を持った建物が、近い位置で建て替えられた結果かもしれない。柱穴が重複しているものは明らかではないが、建物の様子からSH204→SH203→SH202の順序で建てられた可能性がある。柱掘形から出土した土器からみて、これら

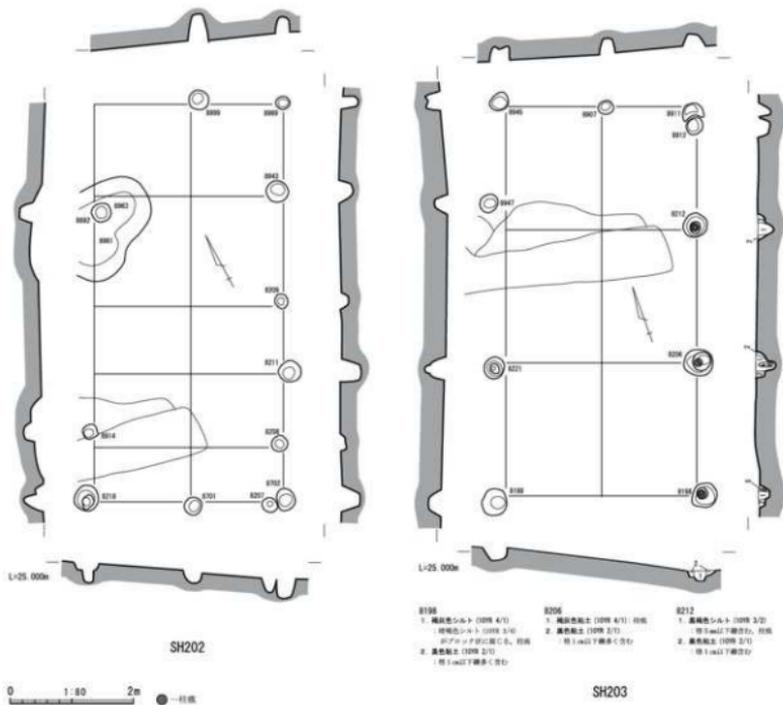


図59 上層2期 SH202・203

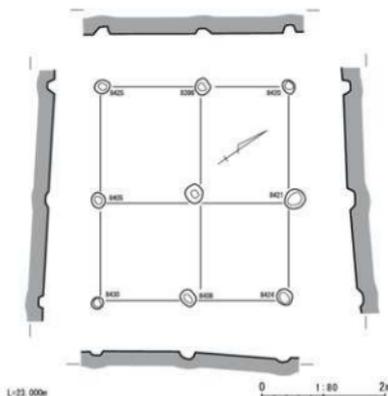


図60 上層2期 SH210

はいずれも中世の建物であろう。SH201とは棟方向が一致しており、同時に存在していた可能性が高い。SH204 (図58) 3棟のうち最も南にあり、桁行3間 (6.6 m) × 梁行2間 (3.6 m)、桁行の柱間は2.2 + 2.2 + 2.2 mの規模を想定できる。梁行の間柱の位置は明らかでなかったが、重複しているSH202を参考にして2間と推定している。柱間はほぼ7尺ということになる。床面積は23 m²程である。棟方向が北側のSA203の方向と一致しており、同一時期に建てられた可能性が高い。

SH205 (図61) 2群の北端にある倉庫風の建物で、柵SA202によって中心部の建物群とは分けられている。2間×2間で東柱をもった高床風の建物である。柱間は南北2.1 + 2.0 m、東西2.2 + 2.0 mほどで

ある。床面積は17㎡ほどである。南側に建物に平行して柵 SA204 が設けられている。

SH206 (図 61) SH205 の東側にある2間×2間の建物で、東西4.2m、南北3.6m程の規模をもつ。柱間は2.1+2.1m×1.8+1.8mに復元できる。床面積は15㎡ほどである。東南隅の柱と東柱は確認されなかったが、やはり高床風のものだと推定している。SH205 と棟方向もよく似ており、同時期に建てられていたものであろう。

SH210 (図 60) 井戸を中心とした南区にあり、2間×2間の高床風の建物である。東西3.5m×南北3.1mで床面積は10㎡ほどの広さである。おそらく倉庫であろう。周囲には柱穴が数多く検出されており、他にも建物があった可能性があるが、そうだとすれば、この建物の建て替えに伴うものであろう(註5)。

(2) 柵跡・堀跡

1群・2群ともに、直線に並ぶ柱穴が検出されている。多くの柱間は等間隔であり、柱穴が1列に並ぶものを「柵跡」とした。検出された柵の位置から見て、溝とともに区画に使われたものと思われる。柵なのか、あるいは細い溝と同じように板塀の跡であったのかは明らかにならない。また、柵であったとしても、その形態、たとえば、親杭(柱跡)に枝木を渡して、中に細木あるいは柴を建てた程度の簡易なものであったのかの詳細も今のところよくわかっていない(註6)。

SA101 (図 62) 1群内郭の西側を区画する溝(SD937)の西側にこれと平行するように設けられた柵列である。南北方向に延長9mほどに13本ほどの柱が列になっており、柱の間隔は

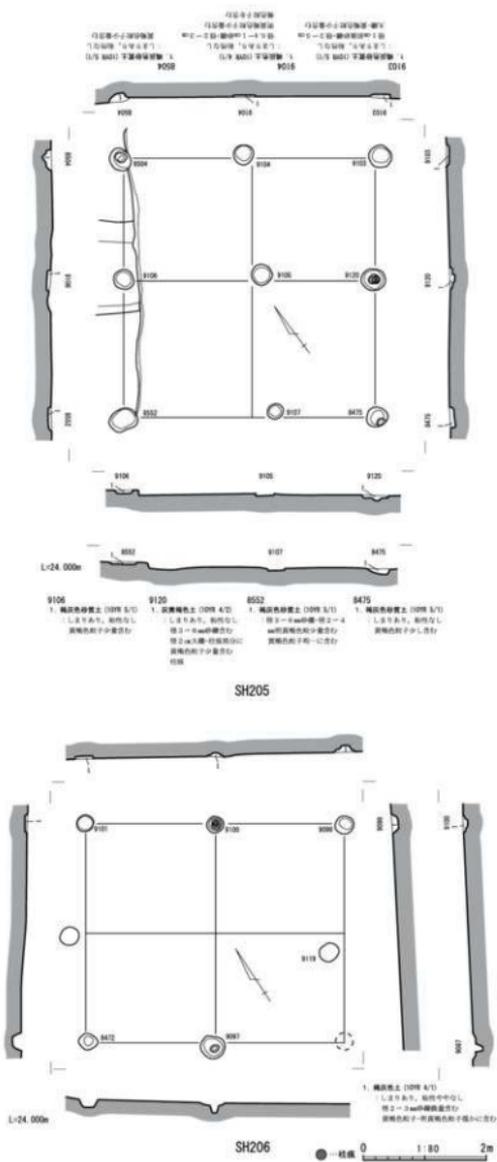


図 61 上層 2 期 SH205・206

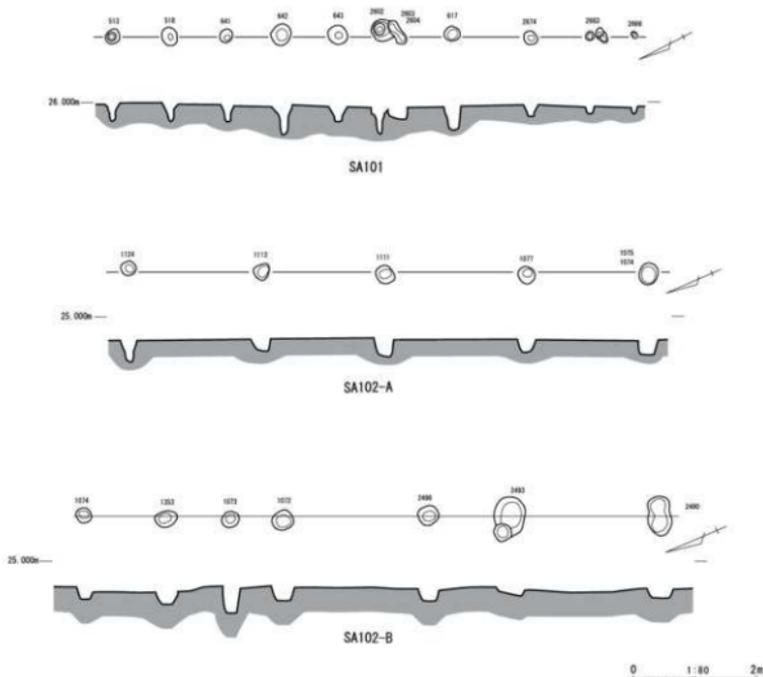


図 62 上層2期 SA101・102-A・102-B

0.9 mほどで比較的揃っている。柱の太さ、間隔などからみると比較的しっかりした柵である。内郭とSH166を中心とする西区とも区画する柵であろう。

SA102-A (図 62) 1群内郭の東側を区画した柵で、一部は溝に重複している。溝が比較的細いことから、これを板塀の跡と推定すると、少なくとも区画の中央部分は塀に変わって設けられたものであろう。3つに細分できることからSA102-A・B・Cとした。柵の方向はよく似ており、また柱間も比較的揃っている。同一の機能をもったものであろうし、一連のものであったのかもしれない。SA102-AとSA102-Cはあるいは組み合わせになるものかもしれない。SA102-Aは柱が6本、全長8.6 mで、柱間は2.0～2.2 mほどである。

SA102-B (図 62) SA102-Aに連続するように良く似た方向の柵列が検出されている。全長10 mほどで、7本分の柱からなるが、柱間は南側から1.5 + 1.5 + 2.2 + 1.0 + 1.0 + 1.0 mとなり、東側と西側では柱間に差がある。また中央部分は柱間が広く、この周辺には不規則な柱が検出されていることから、あるいはこの部分に出入口が設けられていた可能性がある。SA102-Aと一部で重複しており、両者は同時期に存在したものではない。SA102-Bが単独で設けられたとすると、1群の内郭は北側に柵の欠けた部分ができることになる。この部分に柱穴がいくつか見えることから、さらに北側に柵列が延びていたのかもしれない。

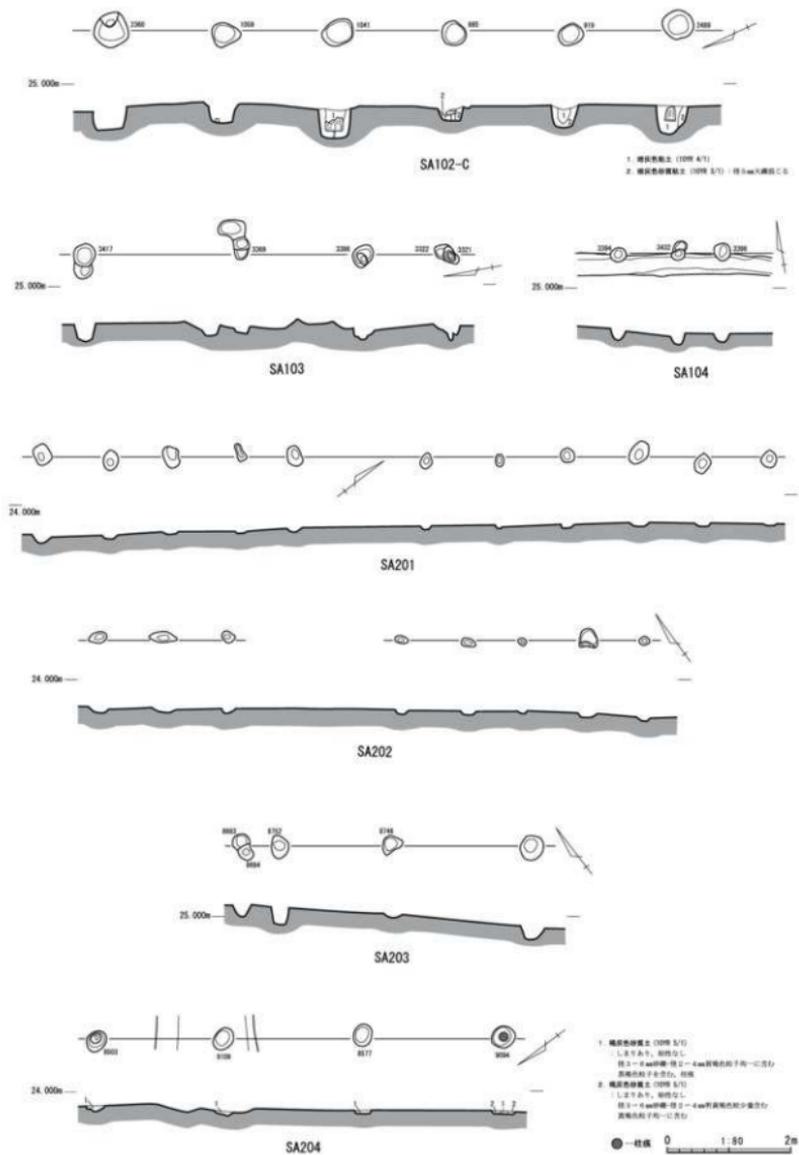


図63 上層2期 SA102-C・103・104・201・202・203・204

SA102-C (図 63) SA102-B に重なりながらほぼ同一方向で長さ 9 m ほどの柵が設けられている。柱は 6 本で柱間は 1.8 m とほぼ等間隔である。柱穴も太くしっかりしている。SA102-A と組み合わせになったものであろう。

SA103 (図 63) 東区、SH151 に隣接した柵で、建物の西側に建物の側柱の方向に沿って南北 6 m、4 本の柱からなる柵である。柱間は 1.5 + 2.0 + 2.5 m と差がある。あるいは北側の 1 間にはさらに柱があったのかもしれない。また柵は南側で東西方向の溝と直角に接している。この溝はあるいは板塀の跡かもしれない。両者をあわせて、倉庫風の建物 SH151 を区画する機能をもったものであろう。

SA104 (図 63) SH151 の南側に設けられたもので、柱 3 本、長さ 2 m 足らずが検出されただけであるが、東側は調査区外になっており、さらに延びているものと推定される。先の SA103 の方向と直角に交わり SH151 の棟方向とも一致している。

SA201 (図 63) 2 群の内郭建物の西側を区画する柵である。北側半分は柵 (SA201)、南側半分は溝 (SD8786) からなっている。検出された柵の長さは柱 11 本分で、12 m が確認されている。柱の間隔はそれぞれ 1.2 m ほどで、距離は比較的まとまっている。柱穴の径は 20 cm ほどのものが多く、太さも比較的揃っている。柵の南側部分は古墳時代の溝 SR8280 に重なっており、確認されていなかった可能性があるが、南区画の西側に当たる部分は柵でなく溝 (SD8786) が掘られているので、柵は北側の部分だけであったと思われる。柵と溝の間には空間があるが、この位置に、内郭から西区への通路が設けられていたものかもしれない。また、柵の中央部分に柱 1 本分が抜けている部分があり、ここが西側の区画との通路であった可能性がある。

SA202 (図 63) 内郭と北区の間を区切る柵である。中心的な建物 SH207 の北東の角近くから始まり、東側の区画溝にまで延びている。柵の延長は 9 m ほどで、8 本の柱からなっている。柱の間隔はほぼ 1 m である。柱穴の径は 20 cm ほどのものが多く、大きさは比較的揃っている。柵の中央部分に幅 2.5 m ほどの柵のない部分があり、やはり北区画への通路であった可能性がある。この柵の方向は掘立柱建物 SH207 の側柱の方向と一致しており、中心部分の建物の建て替えに伴って、設けられたものと思われる。

SA203 (図 63) 西区西端に短い柵 SA203 が設けられている。位置からみて西区の北端を区画するもの

であろう。SA203 の方向は内郭との境にある SA201 と直交しており、また掘立柱建物 SH204 の棟方向とも直交している。短い柵列 SA203 が 2 群の中心的な建物群の棟方向と直交すること、また条里地割の方向と一致することは 2 群の西区がその当初から設定されていたことを示すものと考えて良いだろう。したがって、主要な建物の周辺に様々な機能をもった建物群が存在するあり方が、この屋敷地の創設当初からのあり方であることを示しているとみてよい。

(3) 井戸

井戸の各部分の呼び方を整理しておく必要がある。

井戸には地上に出ている部分と地下に潜っている部分とがある。後者は井戸掘りの職人を別にすれば、普通の人の目に触れることはほとんどない。したがって井戸の地下部分の名称が関心を持たれるこ

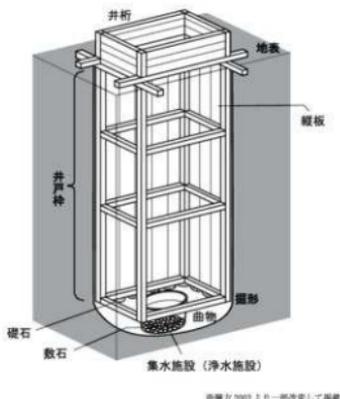


図 64 井戸各部名称

とはほとんどないことから、井戸の部分の呼び名も人によって様々である。ここでは主に鐘方正樹氏が整理した名称に従い、それに多少追加してある（鐘方 2003）。

地上部分の方形のものは「井桁」、円形のものは「井筒」。地下部分は「井戸枠」としている、円形の井戸の場合も井戸枠である。

井戸には様々な形態のものが検出されている。

ア. 上層1期の井戸

(ア) E-1 区

SE292 (図版 13) 円形の井戸底に曲物の側板が設置されており、これが井戸枠の最下段であろう。したがって、側に曲物を使った井戸だと考えられるが、上部はすでに削平されており、本来の深さはわからない。この曲物の外側には曲物の径よりやや大きい掘形が認められ、径1.4×1.2mのやや横に長い楕円形を呈している。内部から志戸呂製品の碗底部とロクロ成形かわらけが出土しており、この井戸の年代の一端を示している。

(イ) E-2 区

SE1794 埋没した中世の区画溝 SD3839 に重なっている。径2m程の不正円形の平面を呈する土坑で、北側ではSE1795と重複している。井戸枠などは全く検出されていないが、水路跡に重なっていることから、井戸と考えている。遺構の埋土から、瀬戸・美濃等の近世陶器とともに、完形に近いかわらけが出土している（図81-302）。手捏ねで、明褐色を呈し、形から16世紀のものであろう。本来は灯明皿に使われたものらしく、黒く汚れている。

SE1795 SE1794と一部重複した土坑である。やはり径2mほどの不正円形の平面形をもっている。やはり埋没した区画溝（SD3839）に接しており、井戸であろう。埋土から瀬戸・美濃の陶器が出土しているほか、志戸呂の灯明皿（図108-657）などが出土しており、やはり近世のものである。

SE1815 SD3839に掘り込んだ、径1.5mほどの不正円形の大型の土坑である。内部から山茶碗が出土しているが、同時に近世の陶器片を多く含んでおり、やはり近世の土坑である。SD3839に重なっていることから、水は豊富に出たと思われ、やはり井戸であろう。井戸枠は確認できていない。

SE1818 SD3839に重複して掘り込まれた、径2m弱の不正方形の土坑で、北側と同様な土坑SE1820と重複している。内部に複数の土坑が重なっていることから、平面形が不正方形になっているのであろう。周囲に同様な井戸がたくさんあることから、これも同様に井戸と推定した。埋土からは山茶碗も出土しているが、瀬戸天目茶碗や常滑の大甕片が出土しており、上層1期の井戸と判断できる。

SE1539 (図版 29) SD3839に隣接して設けられた径1mほどのほぼ円形の井戸である。深さは検出面から1.2mほどで、掘形の底に丸木で方形に組んだ木材が残っている。井戸の底であり、素堀の側から内側にあること、枠の中心部分が回んでいることなどから、井戸底に設けられた集水施設だと推定している。SD3839に沿っていることから水は充分出たであろう。掘形はほぼ円形で整っており、素掘りの井戸であったのかもしれない。埋土から18世紀以降と考えられているかわらけの底部破片が出土している。

(ウ) E-3 区

SE3-A 埋没した水路のSR8280に掘り込んで4基、およびそれに近接して2基の井戸が検出されている。

SE8608 (図65) SE8680・SE8637と重なっている井戸で、ともに古墳時代の埋没水路であるSR8280と重複している。井戸相互の前後関係は明確ではないが、SE8680の一部がSE8637およびSE8608に切られていること、SE8608の集水施設がほぼ円形をなすことから、図に示したようにSE8680→SE8637・

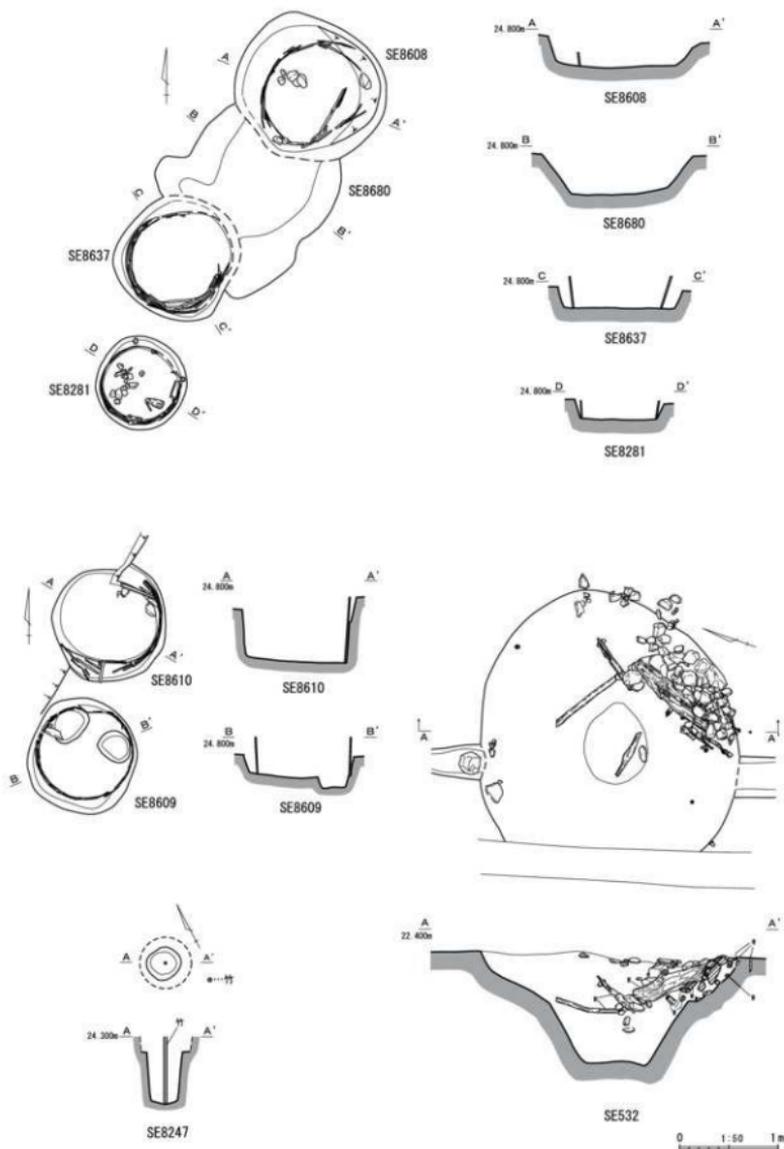


図 65 SE8608・8680・8637・8281・8609・8610・8247・532

SE8608の順にならうと考えている（図版14に示した写真は完掘状態であるため、井戸の前後関係を示していない）。

最下部に曲物を使った井戸が検出されている。曲物は径 0.1×0.9 mのやや楕円形を呈している。これは一部が土圧により変形したためであり、本来は円形をなしているものであろう。曲物の外側に径 1.4×1.2 mほどの大きさに土質の変った部分が確認されているが、これは井戸の掘形の位置を示すものであろう。とすると井戸枠は掘形の中心にならず、片方に偏して設けられている。検出した時点ですでに井戸枠の上部は確認できなかった。

SE8637 (図65) SE8680と切り合っており、SE8680を介してSE8608とも接続している。おそらく連続して営まれた井戸であろう。SR8280を掘り込んでおり、湧水は豊富であったと思われる。井戸の最下部が検出されただけであるが、井戸の底には円形の曲物をはめ込んでいる。これはおそらく井戸枠の最下段であろう。曲物の最大径は90～100 cm程のほぼ円形である。遺物は小破片のみであるが、山茶碗の他、古瀬戸などの中世陶器、登窯段階の瀬戸製品さらには志戸呂製品などの陶器が含まれている。また、煙管の雁首が1点出土している。

SE8680 (図65) 円形の土坑のみが検出されたがSR8280に重複しており、井戸と認定した。SE8608・SE8637とも重複している。曲物など井戸枠の構造に関するものは全く検出されず、円形の掘形だけが確認された。青磁片やかわかけ片が出土しているが、近世の陶器を伴っており、やはり近世の井戸だと考えている。

SE8281 (図65) 古墳時代の埋没水路SR8280に隣接した井戸で、径 0.91×0.90 mの円形で、検出面から底までの深さは0.2 mである。井戸底近くに曲物の側板を用いた井戸枠が残っている。内部には礫が配されており、やはり水の濁りを防止する役割を果たしたものであろう。井戸の内部から山茶碗高台片が出土しているが、これに常滑焼の播鉢が伴出しており、やはり近世の井戸であろう。

SE8609 (図65) 一連の井戸から北側に2 mほど離れて2基の井戸が検出されている。埋没した水路SR8280に直接連なっていないが、SD937が途中まで発掘されながら消滅していることなど、周囲には埋没した溝の存在が推定できることから、これらに連なり、水は充分出たと思われる。底部のみが確認されたものであるが、径 1.04×1.09 mの円形の井戸である。検出面から井戸底まで0.35 mで、底に曲物の側板を用いた井戸枠の最下段が検出されている。井戸枠の径は 1.15×1.0 mほどであり、施設の内部には大型の礫が埋められていた。おそらく水を汲む時の濁りを防ぐためのものであろう。井戸枠は掘形の片方に寄せて設けられており、必ずしも中央に作られてはいない。内部から瀬戸焼の播鉢、志戸呂焼などが出土しており、やはり、近世の井戸であろう。

SE8610 (図65) SE8609に隣接して設けられたもので、径 1.11×1.08 mのほぼ円形を呈した井戸である。円形の掘形に接して、曲物を用いた井戸枠が設けられていたが、側板は一部が土圧で押されて変形している。側板に近接して小さな棒状の木切れが確認されている。あるいは側板を補強する支柱であったのかもしれない。埋土から近世の陶器が出土している。

SE8247 (図65) SE3-A群から10 mほど南東方向に離れたところにSE8247が検出されている。やはり埋没した河川であるSR8280に近接している。半載写真（図版13）で見ると中央部に竹が立てられていることがわかる。井戸と確認できた部分が比較的狭いことから検出されたのは井戸の底にあたり、集水施設の井戸目の部分だけが検出されたものと思われる。外側に一回り大きく色の変った部分があることから、その部分が井戸枠であったのだろう。

SE3-B

SE8358 径 0.70×0.82 mほどで、検出面からの深さは0.42 mである。埋没した水路に近接して設けられたものであるが、底部からも目立ったものは検出されていない。素掘りの井戸であろう。

SE8360(図版 13) 径 0.67×0.57 mほどのほぼ円形の井戸である。SD8641に重なって発掘されており、検出面から井戸底まではわずかに0.15 mほどが確認されただけである。したがって、検出されたのは井戸底に近い部分のみであった。掘形がほぼ直線的に立ち上がっており、あるいは円形の井戸枠が設けられていたのかもしれないが、痕跡は確認できなかった。底の部分に井戸枠の径よりわずかに小さく、さらに一段と深く掘り下げた部分を確認できた。集水施設を作っていたのであろう。集水施設はきれいな円形であり、曲物の側板がはめ込まれていたのかもしれないが、現物は残っていなかった。集水施設の底には大型の角礫が敷かれていた。

底部の中央に竹が縦に置かれている。1節足らずの長さが残っているだけであるが、井戸廃棄の祭祀に伴うものと考えられている(長谷川 1978)。

SE8918 現地調査の段階ではSD8922内の凹凸ととらえていたようで、井戸とは認識していない。しかし、埋没した水路(SD8922)に掘り込まれており、平面形は略円形をしている。平面形は径 1.7×1.5 mほどで、深さは流路の底を掘り込んでおり、はっきりしない。北側でSE8919と重複している。井戸枠など井戸の構造に関わるものは全く発見されておらず、井戸とする論拠は薄い。埋没水路を掘り込んでいること、周辺に同様な井戸がいくつか検出されていることから、これも井戸と判断した。素掘りの井戸であろう。

SE8919 SE8918と同様にSD8922に掘り込んでいる。径1 mほどの略円形の井戸で、南側でSE8918と重複している。SE8918との前後関係は不明。井戸枠は全く発見されていない。近接して同様な遺構にSE8920・8921A・8921Bがある。いずれも規模・形状がよく似ており、出土した遺物から近世の井戸跡と考えている。

(工) A-1 区

SE532(図 65) 径 3.0×2.5 mほどの範囲に浅く掘り込まれ、内部に大型の礫が敷き詰められている。この土坑の中心部分に径1 mほどの範囲で、さらに掘りくぼまれている。深さは検出面から1 mほどである。おそらくこの部分が井戸であろう。外部の浅く掘り込まれた土坑は井戸の廃棄の時に掘られたものであろう。礫敷きの範囲はかつての井戸底に敷かれたものである可能性があるが、その範囲は明らかになっていない。したがって、この井戸は廃止するに当たって、底まで掘り起こされていることが知られる。井戸の埋土は土層がレンズ状に堆積しており、廃止に際して人為的に埋め戻されたのではなく、ある時期放置され自然に埋まったものであることを示している。遺物は全く出土していないので、時期は明らかではないが、遺構の位置から近世の井戸と考えている。

イ. 上層 2 期の井戸

(ア) E-1 区

SE169(図 66) 110D-3グリッドの東端近くで、他の遺構から離れて井戸が発見されている。径 4.3×3.7 mほどの方形の掘形の内側に径3.5 mほどのやや楕円形を呈する井戸が検出されている。井戸の上部は大半が削平されており、井戸底部分が発出されたのみである。掘形が方形であることから、方形の井戸枠をもったものであり、最下部に円形の集水部分を設けたものであろう。底に大型の礫を敷くことは他の井戸でもよく見られており、井戸の濁りを防止するための浄水施設であろう。位置的には埋没した水路の位置からは大きく外れており、水が出たか否かはよくわからない。地形の傾斜する部分に設けられており、それなりに水は出たのかもしれない。現地調査の段階から「井戸跡」と認識されてきた遺構であり、ここではそれに従っておく。内部から山茶碗の小破片(図 33-146)が出土している。井戸の位置からほどの建物群に属するかは不明だが、同じくE-1区に少数ながら中世の柱穴が認められている

ので、これらが掘立柱建物群であるとすれば、それらに伴うものであろう。

(イ) E-3 区

SE8036 (図 66) 2 群南区に属する井戸である。方形の井戸で、板材を用いた井戸枠が検出された。南区の区画溝 SD8779 の南側に位置している。井戸の掘形は埋没した古墳時代の流路である SR8280 と重複しており、水の出は豊富であったと推定している。

掘形は一边 1.5 m ほどの方形で、内部に四隅に支柱を配し、縦に板材を使った井戸枠が検出された。井戸枠は一边 1.1 m のほぼ正方形で、支柱の間に横に柵木を設けている。柵木は下段と中段が残っているが、おそらく上段にもう一段が設けられていたものであろう。柵木の間隔が等しかったとすれば、井戸底から柵木までの間隔から推定して、井戸は現況からさらに 40cm ほど上に延びていたもので、全体の深さは 1.6 m ほどになると推定できる。

井戸枠の支柱は図 67 に図示した (226 ~ 229)。12cm 角のスギ材で、226・229 は辺材、227・228 は芯材が使われている。それぞれ節跡が残っていることから、そう大きくない 15cm 以下のスギ材から作られたものであろう。一部割面を残すものの、ほぼ全面に刃幅の広い手斧痕がある。柵木の柄孔は中段・下段とも L 字型に切り込まれている。下端部は鋸で切断している。230 ~ 249 (図 68 ~ 73) は井戸枠の縦板である。各々の位置は図下の模式図に示した。縦板はスギまたはモミ属の板目材である。長さは最大で 127cm、板幅は広いもので 33cm ある。材は大径材から年輪界に沿って割られ、平滑面にするために一部を面調整しているのみで、割面がそのまま残った状態で枿材として使っている。逆に、隣の板と接する側面の下半分は丁寧加工されている。下端部は手斧によって切断されている。

柵木 (250 ~ 257) は四隅の支柱に柄穴をあけて、はめ込んである。外側に縦板をはめて土留めとしているが、縦板は幅 20 cm 程で 5 ~ 6 枚の板を使って一辺を保護している。土圧で柵木の中央部分が内側に湾曲している。板材はスギの板目材を使っている。柵木の長さは 109cm 前後で、板の厚さは 4 cm 前後と厚みがある。柄孔に差し込む部分はやや細身に削ってある。表面は手斧で面調整されているが、なかには割面が残っている部分もある。

井戸の底には大型の角礫が敷かれており、水の濁りを防ぐためのものであろう。部分的な集水施設は設けられていない。先に触れたように、この井戸は下層の埋没した流路である SR8280 に掘り込んであり、豊富な水に恵まれたであろう。

井戸の外側にいくつかの柱穴が検出されているが、井戸の覆い屋を想定させる程にはまともならず、井戸に伴う屋根の存在は明らかにはならなかった。

井戸の内部から山茶碗・小碗・小皿等が出土しており、図 33-140 ~ 142 は山茶碗の高台部分の破片であり、1 - 2 期に属す。井戸を開設した時期を示すものであろう。底部に墨書を施しているものもあり、144 は「主」と読めるかもしれない。145 は高台が無く、底部の糸切り痕が明瞭に残る小皿であり、山茶碗 III - 1 期のものであろう。井戸の下限を明示しているよう。



写真 31 SE8036 解体状況

この他に木製品や自然遺物等が出土している。木製品は図 75-258 ~ 261 に図示した。258 は曲物の側板、259・260 は折敷の底板である。側板 (258) は高さが 2.9cm ほどと低い。榫紐の級じ部とケビキ、木釘痕がある。折敷の底板は片面に墨書の痕跡がある。2 点あり同一個体と思われるが接合点はない。あるいは側板 (258) も折敷のものである可能

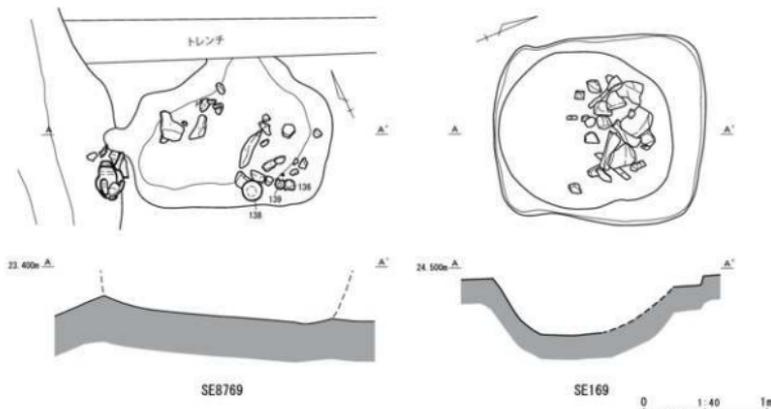
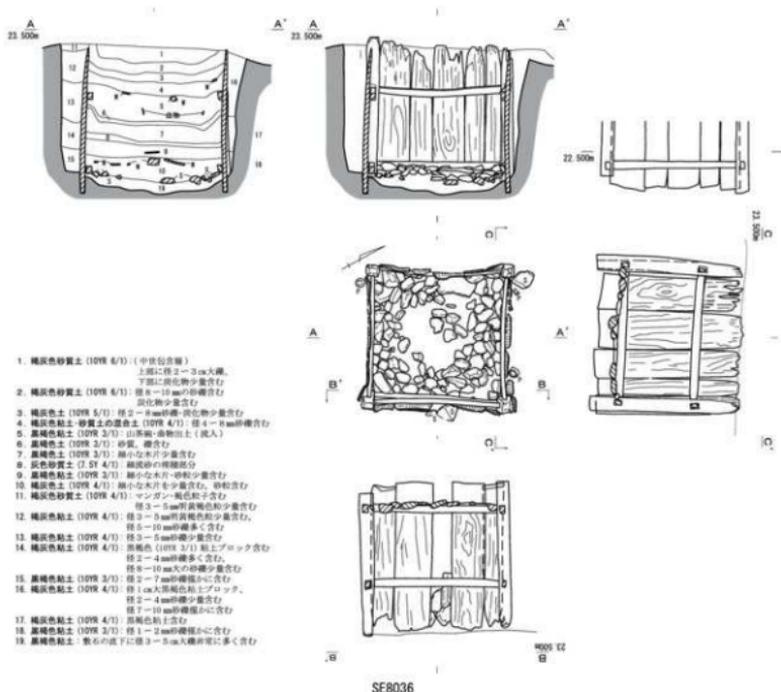


図 66 SE8036・8769・169

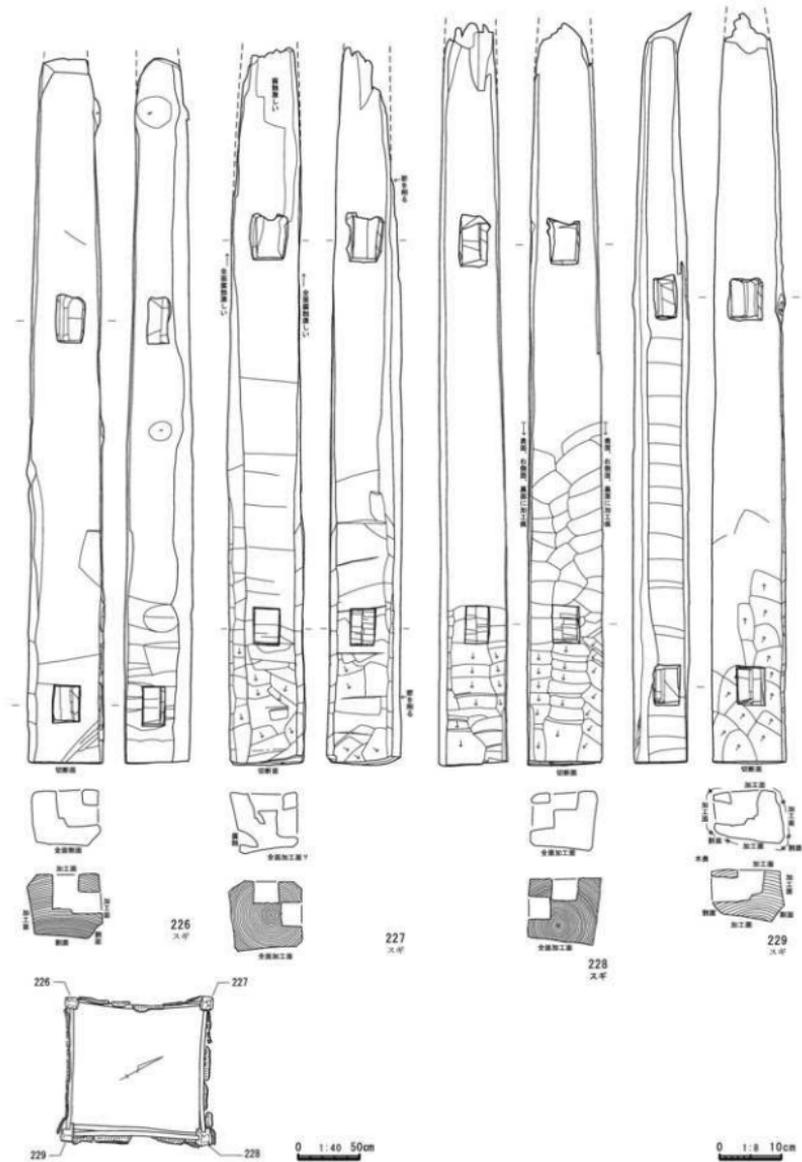


図 67 SE8036 井戸柱 (柱)

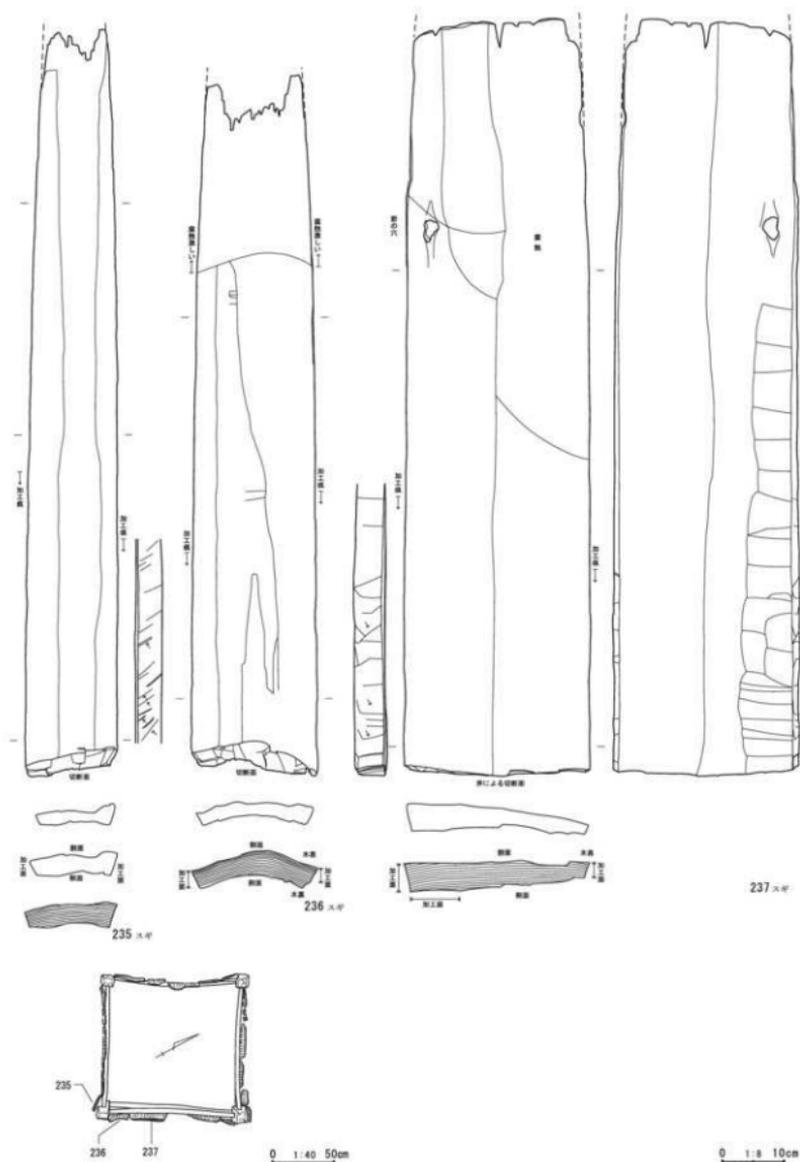


図69 SE8036 井戸枠(板②)

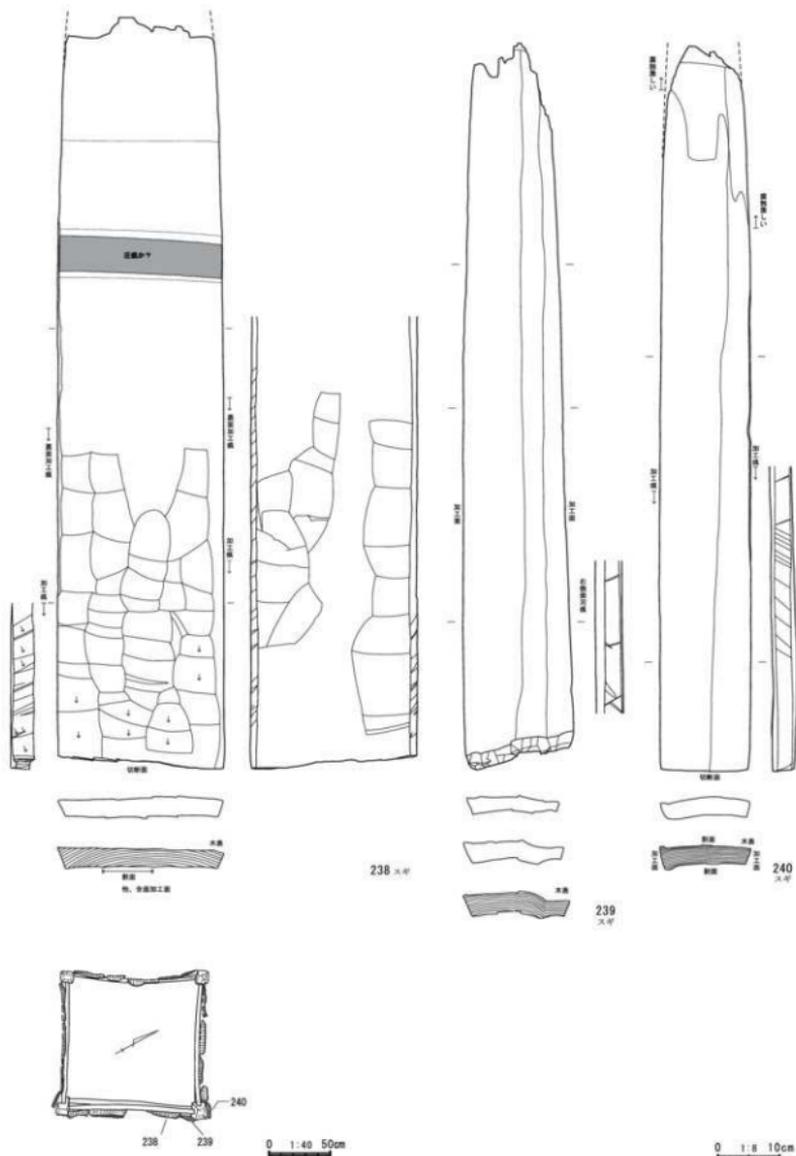
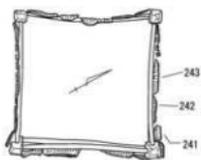
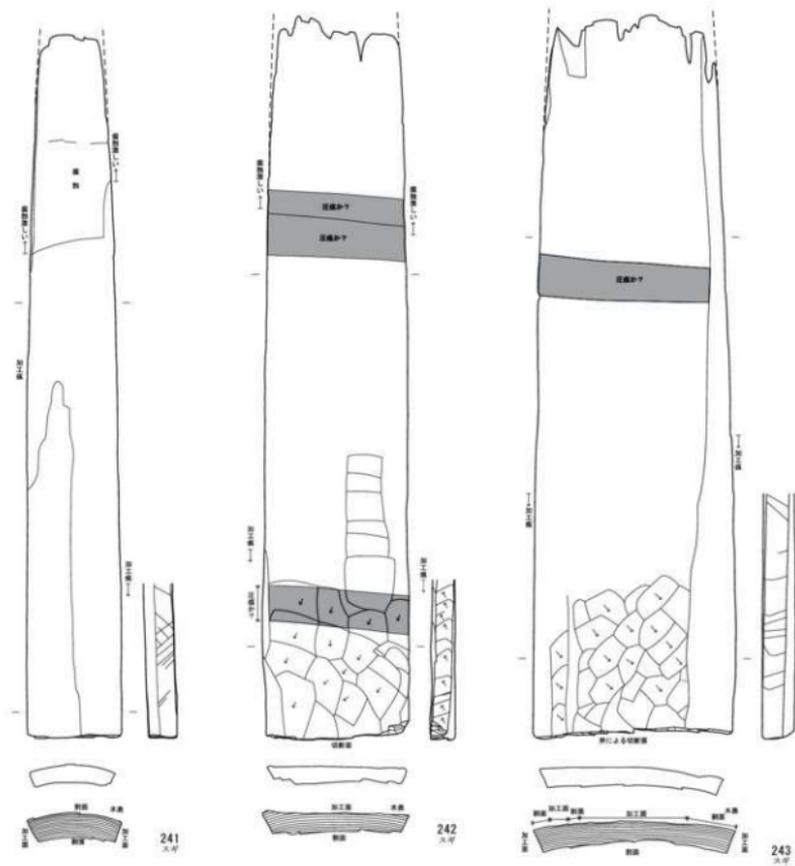


図70 SE8036 井戸枠 (板③)



0 1:40 50cm

0 1:8 10cm

図71 SE8036 井戸枠 (縦板④)



図 72 SE8036 井戸枠 (板⑤)

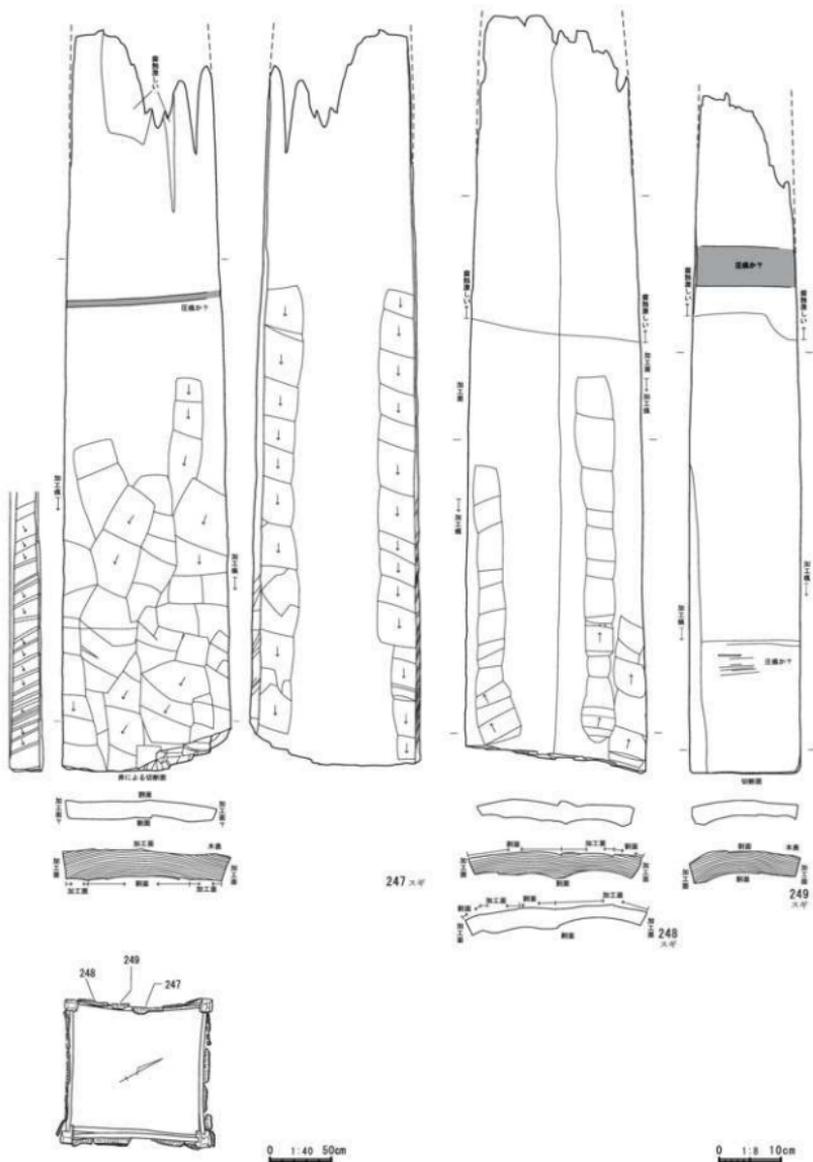


図73 SE8036 井戸枠 (板⑥)

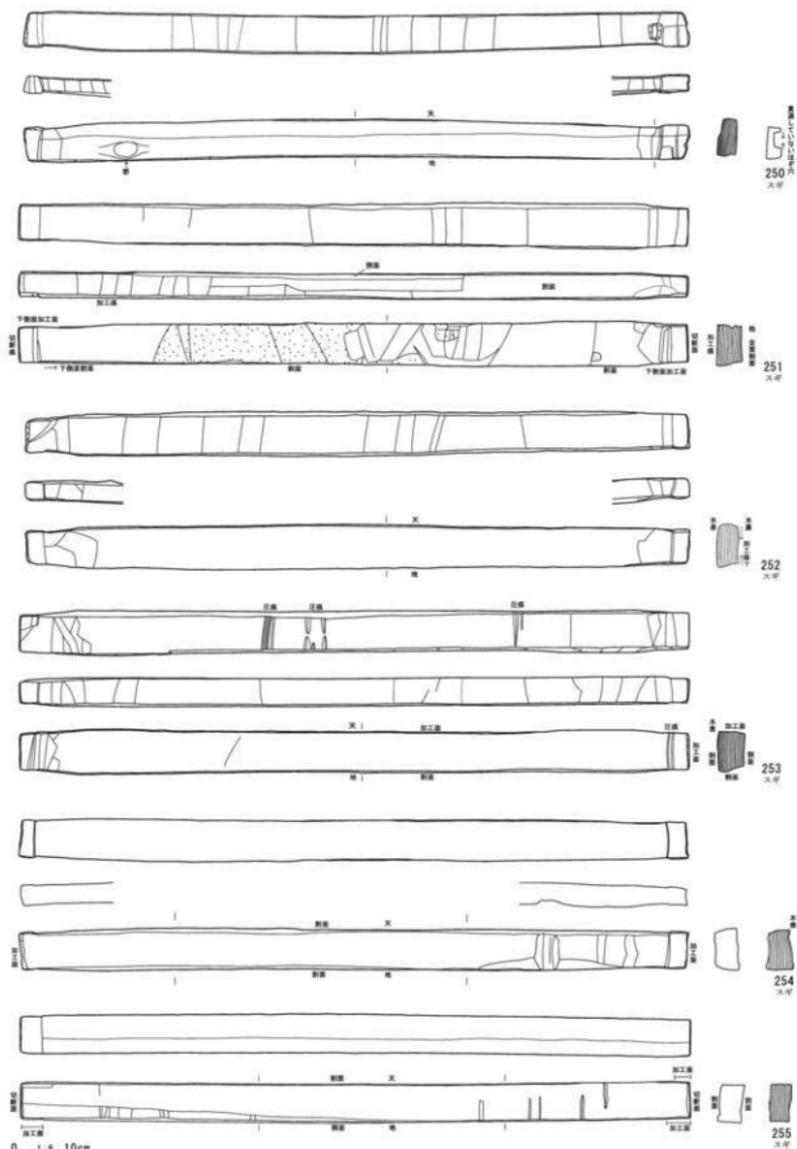


図 74 SE8036 井戸杵 (榎木①)

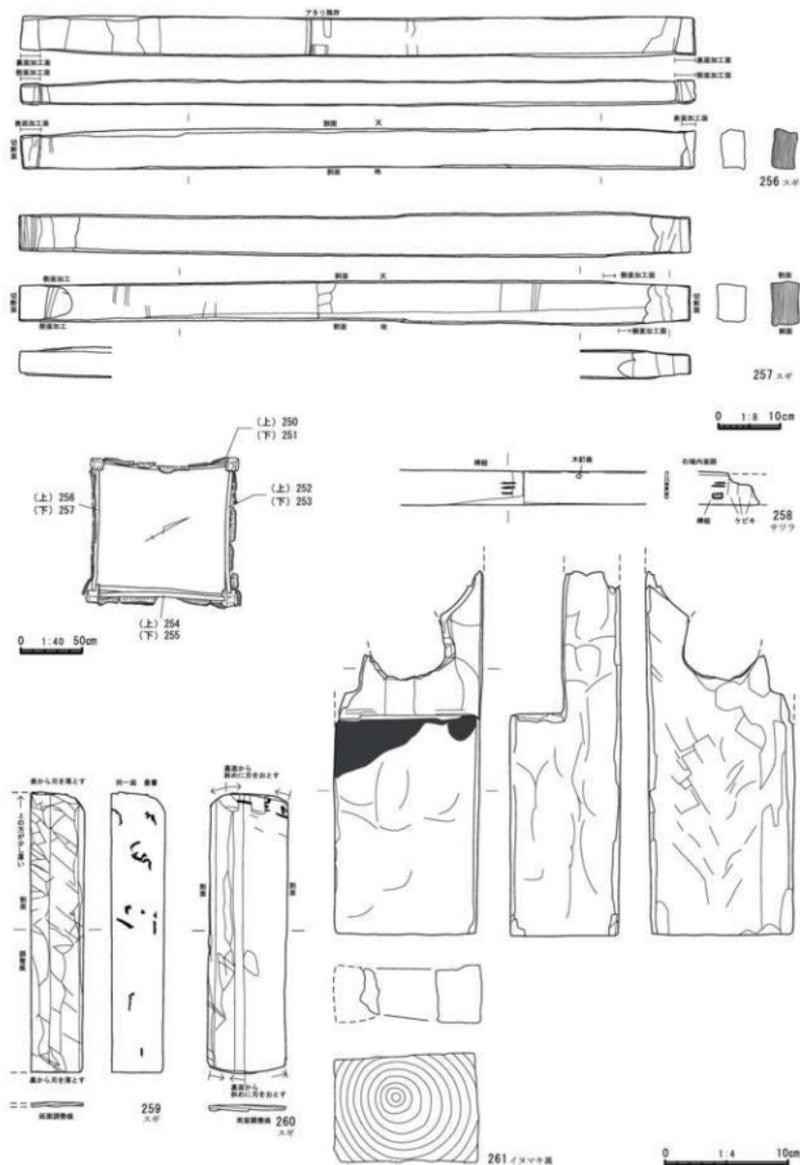


図 75 SE8036 井戸枠（桝木②）・出土木製品

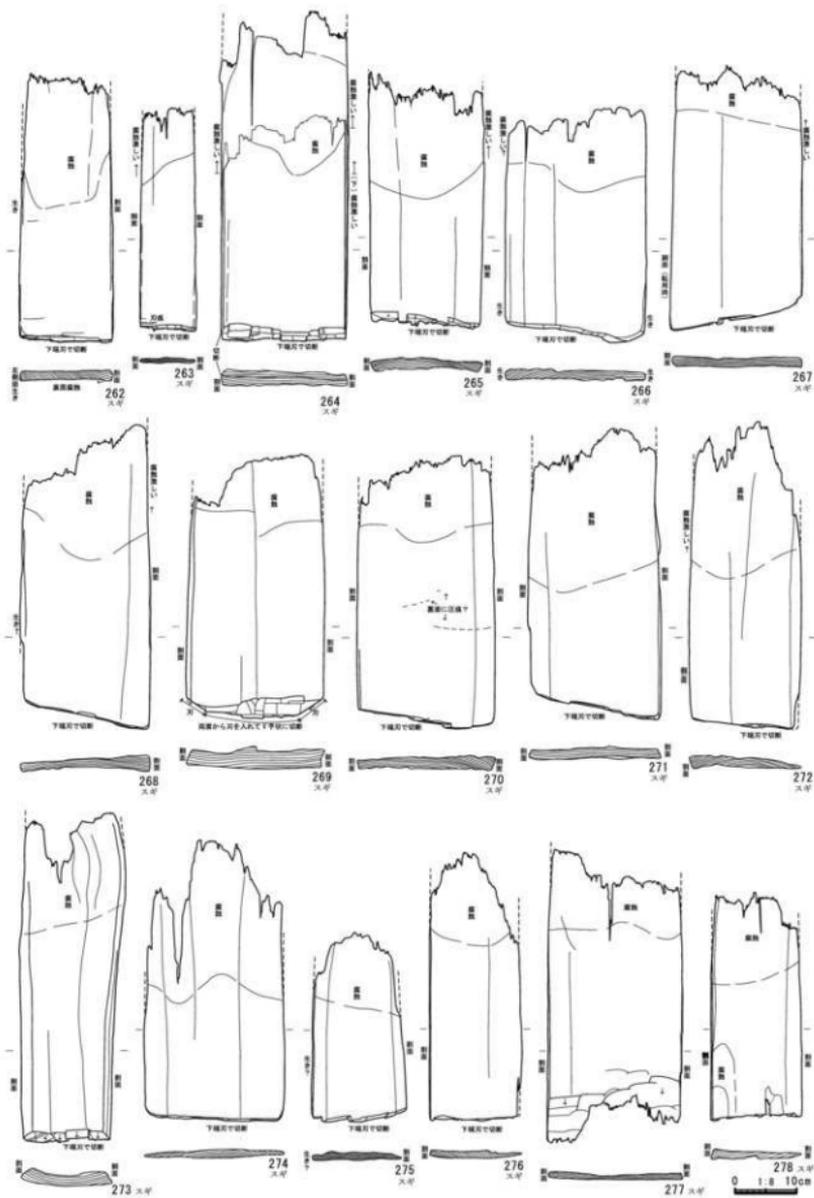


図 77 SE558 井戸枠 (縦板)

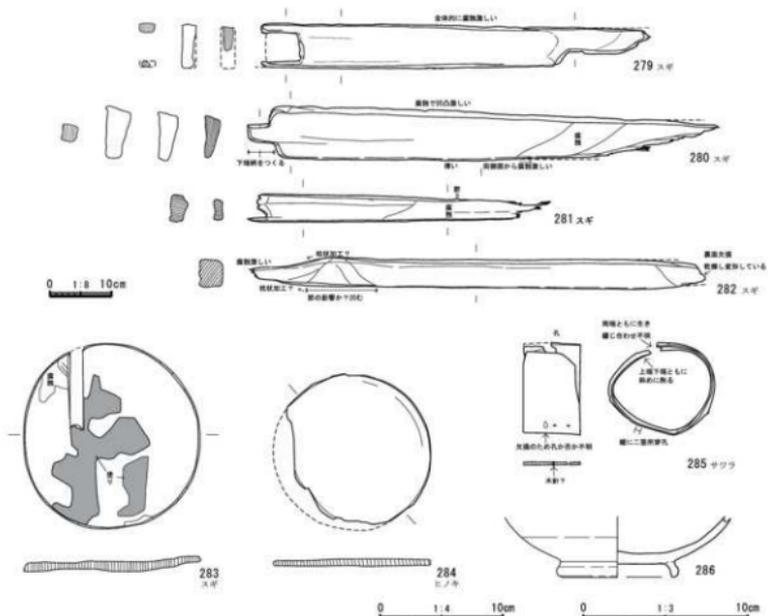


図78 SE558 井戸枠(棧木)・出土遺物

井戸底には稜を持った大型の礫と完形の土器が 0.6×0.7 mほどの略円形の範囲に広がっており、この部分が井戸の底あるいは集水施設と推定した。これらの礫は水の濁りを防ぐためのものであろう。井戸底から、山茶碗の完形品(図33-138)が出土しており、井戸にまつわる祭祀を示すものかもしれない。136は底部に墨書があり「上」と読める。また139は山茶碗小皿でいずれもⅢ-1期に属し、やはり、この井戸の下限を示している。したがってこの井戸はSE8036と时期的に重なっている。

(ウ) A-1区

SE558(図78) 板材を用いた四角の井戸枠を持った井戸である。全体に大きく壊れているが、横方向に4本の棧木を組んで枠を作り、それに4~5枚の板材を使って土止めとしている。板材はスギである。棧木は先端に四角な柄穴をかけたものと、先端に突起を作り出したものとを組み合わせて組んでおり、四隅に支柱を持たない。下段の一段分50 cmほどが検出されたのみであるが、当然さらに上段が設けられていたものであろう。井戸枠材は図77~78に図示した。井戸枠の縦板(262~278)はスギの板目材か追根目材を使っている。年輪界に沿って割り出し、表裏面や側面は割面のまま面調整されていないものが多い。また上端部や表面は腐食や風化が激しく調整痕が見えない。下端部は手斧により切断されている。279~282は横棧木である。検出時は279の棧木の柄孔と280の突起が組み合っていた。井戸枠内からは木製品と土器が出土した(283~286)。283・284は円形曲物の底板である。283は表面に褐色の塗りがわずかに残っている。285は曲物の側板で、径の大きさからして柄杓の可能性がある。

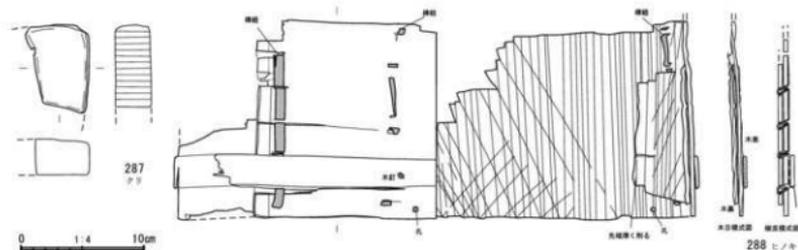


図 79 SE559・281 出土木製品

図 78-286 は I-1 期と思われる古手の山茶碗であり、この井戸の開始した時期の一端を示すものであろう。

SE281 (図 76) 上層の攪乱層を除去すると円形の掘り込みが確認された。土坑の径は 1 m ほどで検出された深さは 60 cm ほどである。土坑内から曲物の側板が出土しているので、底に曲物を用いた集水施設があったものと思われるが、調査では検出できなかった。井戸の断面にはレンズ状の堆積が観察されているので、この井戸は、人為的に埋め立てられたのではなく、廃棄後に自然に埋没したものと考えられる。図 79-287 は井戸内覆土より出土した。クリの柁目材で作られたものだが用途は不明である。角は丸味を帯び、表面には黒色の塗りが残っている。

SE559 (図 76) 埋め立て区域の端で検出されたもので、径 50 cm ほどの掘形の最下部に円形の曲物が埋められていた。おそらくは井戸の底に設けられた集水施設であろう。井戸の底近くまで削平されており、井戸枠など、井戸の構造を示すものは全く検出されていない。また集水施設の底にも敷石などの施設は確認されていない。

曲物は径 42 cm ほどのほぼ円形で、側板の幅は 30 cm 比較と比較的深い。曲物(288)は脆弱であったために、現地調査で発泡ウレタンを用いて土ごと取り上げ、保存処理・修復後に実測をした。そのため一部破損しているところもある。曲物は直径が 42.7 cm ある。榫紐の綴じ部が 2 箇所ある。底板は木釘で留めていたと思われる、孔痕が下方に複数箇所ある。途中、別材を留めている箇所にも木釘が残っている。内面には垂直方向と斜め方向にケビキ線が入っている。土器は出土していないので時期は不詳であるが、整地層の範囲に含まれていることから中世と考えている。

(4) 墓

A. 上層 1 期の墓

(ア) 1 群墓

SF-F3 調査区の北西側に設けた F 区から、渡来銭のみ 4 枚が集中して出土している。永楽通寶の他、嘉祐通寶・祥符通寶はいずれも北宋の通貨である。寛永通寶をもたない渡来銭のみの組み合わせであり、江戸初期以前の墓であろう。付近から五輪塔が採集されており、この丘陵部に比較的古手の墓が営まれていた可能性がある。

SF1426 (図版 15) 径 1.8 × 1.4 m ほどの略長方形の土坑で、坑の底から完形に近いかわらけが 3 点出土している。墓坑であろう。かわらけ (292・293) は口径 11.5 cm 前後でロクロ成形のかわらけである。口縁部がわずかに外反しており、底部の中央部分が凹んでいる。器形の特徴から 16 世紀のものであろう。

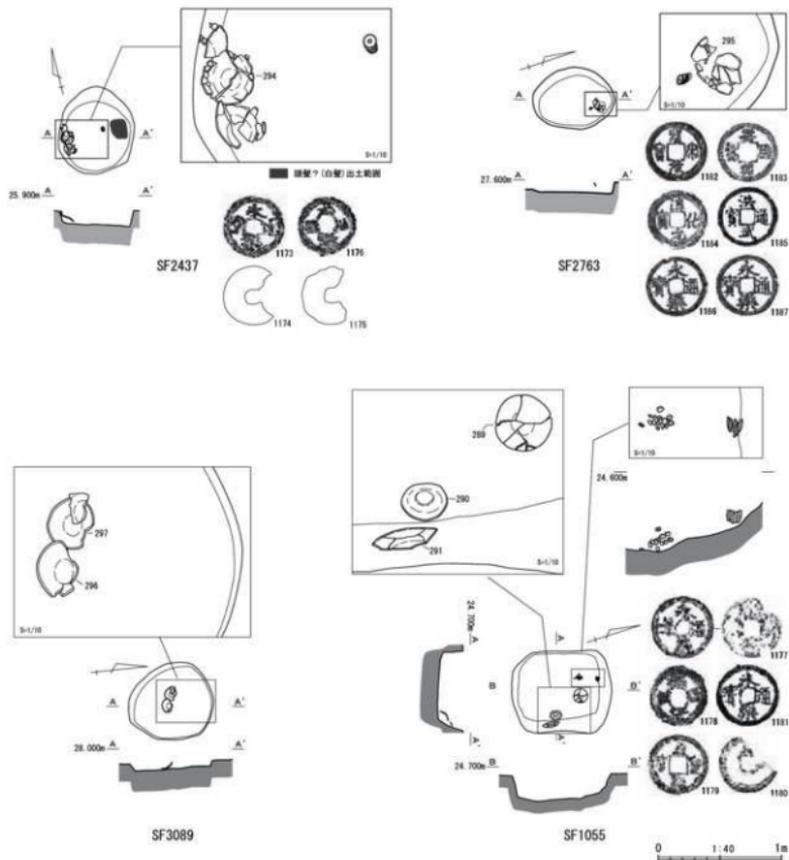


図80 墓坑 SF2437・2763・3089・1055

SF1555 径5×3mほどの攪乱坑を発掘後、その下から寛永通寶(新)が3点(1155～1157)出土している。おそらく攪乱坑の底に削り残った近世の墓坑が残っていたものと推定される。出土した銭貨は新寛永のみであり、おそらく江戸中期以降の墓坑であろう。墓坑の規模など詳細は不明である。攪乱坑から志戸呂・美濃・古瀬戸製品さらには産地不詳の近世陶磁片が多数出土している。

この他にF区から五輪塔が出土している。破片であったり、単独での出土であったり、墓坑との関係を示すものはなかったが、五輪塔の破片2基分と一石五輪塔が2基である(図133)。

五輪塔はいずれも砂岩製であり、この地域で砂岩製の五輪塔が広がるのは15世紀以後のことだと考えられている(松井 2009)。一石五輪塔も16世紀以後のものだとすれば、この地域にある渡来銭のみを出土する墓あるいは寛永通寶を出土する墓とも、時間的な矛盾はない。

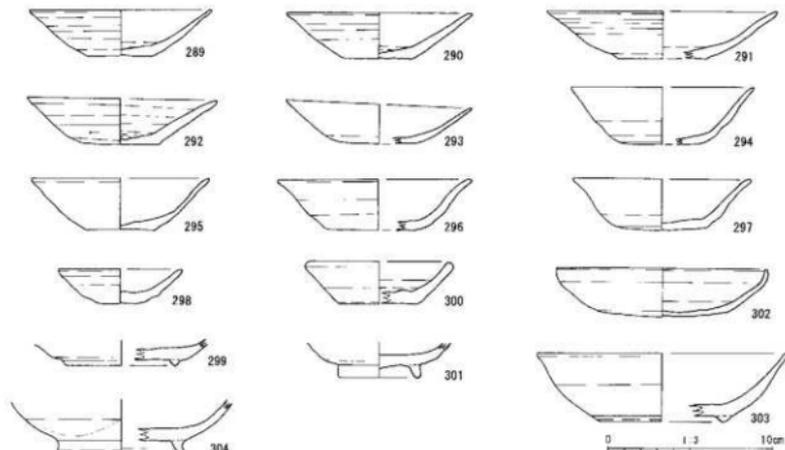


図81 墓坑・井戸地出土土器

(イ) 2群墓

SF1105 SF1106と掘形が連続しており、両者の掘形が合体して、長楕円形の土坑になっている。土坑内には径1.5mほどの円形の土坑が2つあり、南側の土坑をSF1105とし、北側のSF1106とした。おそらくこの円形の土坑はSF1137に見るように、桶を納めたものであろう。かわらけの小片と同じくかわらけの底部の破片が出土している。

SF1106 SF1105と掘形が連続するもので、底の円形の桶の跡が検出されている。覆土から龍泉窯青磁碗の小片(A2類碗)が出土しているが、覆土からの出土であり、直接この墓の年代を示すものではないだろう。棺内からは遺物は全く検出されていないが、よく似た土坑が集中する地点であり、墓坑と考えている。

SF1137 (図版15) 桶の底と側板の下端部が検出された。径2.0×1.5mほどの長方形の土坑の中に据えられていたものである。遺物は全く検出されていないが、周辺では桶の底板が発見され、内部から銅銭あるいは人骨が出土しているSF2437のような例があり、こうした桶が検出されている例を墓と考えている。SF1137も、それらと同様に土坑を掘り、中に桶を取めた墓であろう。

SF1139 近接してSF1137があり、桶が検出されていることから、墓坑と認定したが、その周辺にもよく似た大きさの土坑があり、いずれも墓坑だと考えた。SF1139もその一つである。攪乱を受けていた不正方形の坑を掘り下げることで、円形の土坑を確認した。土坑の覆土から弥生土器・山茶碗・内耳鍋・かわらけの小破片に加えて、近世志戸呂製品の破片が出土している。時期が今一つ明らかにならないがおそらく近世のものであろう。また、同じく覆土から凝灰岩製の小型の砥石の破片が出土している。

SF1140 SF1137・SF1139・SF2594と連続する土坑の一つである。径1.7×1.4mほどの楕円形の土坑の内部に円形の桶の跡が検出されている。土坑からは弥生土器・土師器の他に山茶碗小皿・小碗が出土しており、白磁皿の底部破片あるいは常滑の破片が出土している。しかし、同時に志戸呂あるいは肥前の染付が混じっており、時期的な判断は難しいがやはり近世のものであろう。

SF1187 径3mほどの遺構が重なっている土坑をSF1187と呼んでいる。現地調査の段階でも、この遺

構は2基の土坑が重なったものであることは理解されていたようであるが、両者の関係は明確には記録されていない。したがってここではSF1187とだけしておくが、本来2基の土坑であったことは明らかである。内部から、桶の底板と側板の一部が検出されている。底板の径は20 cm、側板の高さは19 cmほどが検出された。上層の擾乱層を含めて多くの遺物が出土しているが、瀬戸・美濃・志戸呂・初山製品など近世陶器が多く、15～19世紀に及んでおり、年代を特定することは難しい。

SF2437 (図80) 径1.4×1.2 mほどの楕円形の土坑の中に、径1.1 mほどの範囲に円く識別できる区域が残っている。おそらく桶が埋められていた痕跡で、黒く識別できる範囲は桶の底と考えられ、土坑は桶を埋めるための掘形であろう。黒色の範囲から銅銭(6枚)(1173～1176)とかわらけ3個体(294)が出土している。かわらけの反対側に頭髮(白髪)が残っていた。銅銭は「永楽通寶」「元佑通寶」「皇宋通寶」「元豊通寶」など、江戸期の銭は含まれていない。かわらけは口径11 cm、器高3.5 cmで、底部は摩滅が多いが、非ロクロ成形である。土坑の径からも、桶を用いた座棺であろう。

SF1055 (図80) 1群の建物部分を区画する柵に重なって作られている。径(南北方向)1.6 m×(東西)1.30 mの略方形の土坑である。深さは最大で0.50 mが検出された。平坦な部分に接してかわらけ・銭(6枚)とともに、ヒトの歯が出土している。明らかに墓坑である。土坑内は火を受けた様子は全く見られないことから、土葬によるものであろう。土坑からかわらけが3点出土している。291は口径14 cm、器高3.5 cmほどで、口縁をわずかに引き出している。292・293は口径11 cm、器高2.8 cmほどで、体部はほぼ直線であり口縁部の引き出しも乏しい。いずれもロクロ成形である。底部はロクロ成形で、底部内面が凹んでおり、器形からも16世紀のものであろう。銭貨は永楽通寶が2枚(1177)、「元豊通寶」「熙寧元寶(?)」が知られる。他は遺存状態が悪く銭種の確認ができなかった(1178～1181)。

(ウ) 3群墓

SF2763 (図80) E-2区の北端に近いところで検出された土坑である。径1.35×1.0 mほどの楕円形を呈し、大半が削平されており、底に近い部分が確認されたのみで、深さは0.10 m程が確認されたのみである。

土坑の片隅から、永楽通寶などの銭が6枚とかわらけの底部が発見されている。土坑は全く火を受けた痕跡が無く、土葬に伴う墓坑である。銭は1箇所からまとまって出土しており、銭入れに入れて取めたものであろう。銭は永楽通寶2枚(1186・1187)・洪武通寶(1185)・聖宋元寶(1182)・淳化元寶(1184)・嘉祐通寶(1183)の6枚で、全て渡来銭である。かわらけ(295)はロクロ成形で、口径10.7 cm、器高3.0 cm程度で、器形からやはり16世紀代のものであろう。ロクロ成形で体部をやや外に引き出しているが、底部が比較的大きい。底部内面を凹めており、15～16世紀にかけてのものであろう。

SF3089 (図80) 調査区の西端近くで発見された土坑で、SF2763に隣接して営まれている。径0.7×0.6 mほどの略円形を呈する。深さは0.15 mほどが確認されたのみである。内部からかわらけ2点と山茶碗小片1点が出土している。やはり桶を用いた座棺であろう。土坑の底は平らで、底に着くようにかわらけ2点(296・297)が出土している。土坑には火を受けた様子は全くない。

(エ) 4群墓

SF9089 (図版15) 調査区の東の端に4基墓坑が集中して発見されている。SF9090の一部を切って、不正方形の土坑が掘られ、土坑の底から桶の側板とタガの一部が検出された。タガは土圧で変形しており、もとの大きさを推定できないが径1.28×0.63 mを数える。出土遺物は明らかではないが、近接する墓との関係から近世の墓であろう。

SF9090 (図版15) 不正方形の土坑内に円形の桶の痕跡とタガの一部が検出されている。底の径は1.38

×1.36 mで、土坑の周囲から人骨と銅銭が出土している。銭貨は寛永通寶（新）2枚（1165・1167）および文久永寶4枚（1166・1168～1170）であり、銭貨を検出した遺構は特定ができなかったが、江戸末から明治初期にかけてのものであろう。周囲の状況からSF9090からの出土である可能性が高い。

SF9091（図版 15） SF9090に近接して、土坑が掘られており、土坑は径1.52×1.2 mの略方形である。方形の土坑の底から桶の底板（一部に側板が残っている）が検出されている。周辺によく似た規模・形態の土坑があり、また桶の底が検出されていることから、これらを墓と推定している。

SF-E-3-1（図版 16） 墓坑は検出できなかったが、銭貨が3枚集中して出土している。永楽通寶（1162）・新寛永2枚（1163・1164）である。周囲に近世の墓が集中しているところであり、一括して出土したこれらの銭貨も墓に伴う六道銭の一部であろうと推定し、墓とした。

SF-D-3-1 隣接するグリッドからも寛永通寶（新）が2枚（1171・1172）まとまって出土している地点がある。これも墓坑は確認できなかったが、墓であったものと思われる。寛永通寶（新）であり、近世後半の墓と理解している。

（5）性格不明遺構

SX164（図 82） E-1区のほぼ中央、110C-2グリッドに位置する。不定形な楕円形を呈する。長軸方向は4.8m、短軸方向は3.5m、深さは0.8mほどある。覆土は下層が有機質を含む泥質粘土層、中層は角礫を含む粘土層である。ちょうど下層の自然流路（SD118）内に位置していることから、常に水脈の

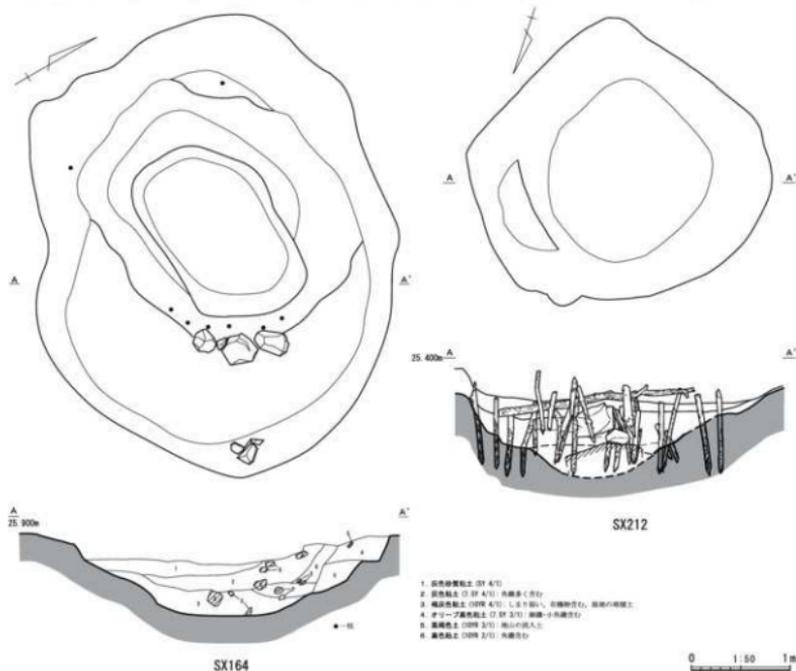


図 82 性格不明遺構 SX164・212

0 1:50 1m

ある場所であったのであろう。そのため自然流路が埋没したあと、後世に集水施設として掘り込まれた可能性がある。いずれにしても用途は特定できず不明遺構とした。覆土には北側の一段下がった肩付近に人頭大以上の角礫を含む。礫の傍には土留めの役割であろうか、丸杭が数本打ち込まれていた。

出土遺物は図83～86に示した。土器、石製品、木製品が多く出土した。陶磁器の量が多く、次いで杭、漆椀、下駄、用途不明木製品、砥石、自然礫などがある。陶磁器(図83～85)は志戸呂製品が多く見られる。305～308は丸碗、309は猪口、320は小皿か。309は掛川市原川遺跡出土品に類似する。17世紀代のものである。310～315・344は香炉。310～313に比べて314のみが高い高台を持つ。時期が新しいものであろうか。311・313・344は高台の断面形態が類似する。19世紀初頭頃の所産であろうか。316・317は山茶碗、318は仏龕具器、319は火入れか。320～330はかわらけである。図84は瀬戸・美濃・肥前の製品である。肥前の丸碗・輪禿皿等や瀬戸・美濃の天目茶碗(340)、美濃の菊皿(336・337)・折縁輪禿鉢(338)、碗、香炉(344)、甕(345)、片口鉢(346・347)、播鉢(348～351)などの種類がある。日用品が主体であることから集落で使われていたものであろう。図85は志戸呂の播鉢である。352・353は17世紀初頭～17世紀前半代の製品である。口縁内側に突起がある。上面が平垣～

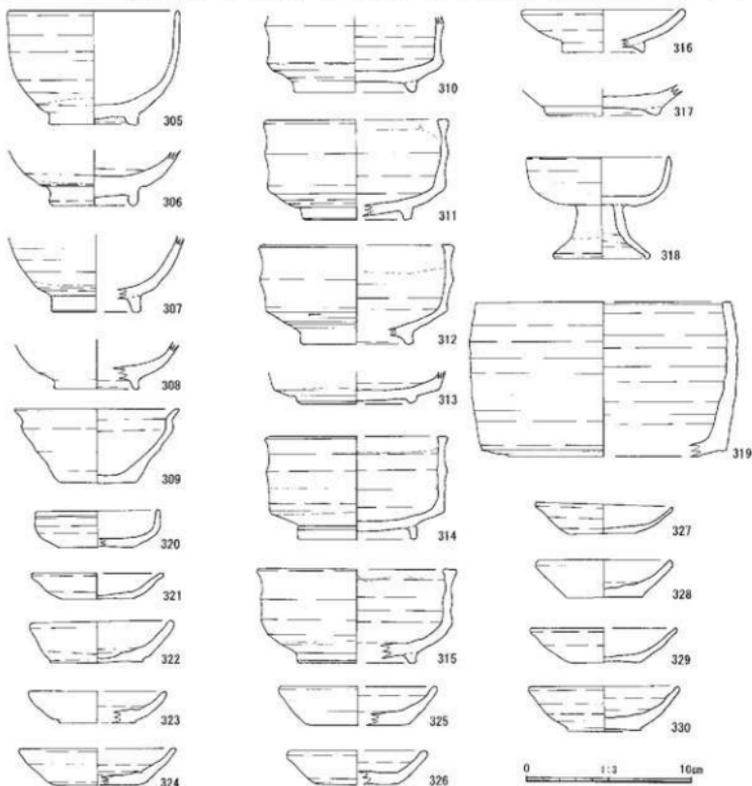


図83 SX164出土土器1

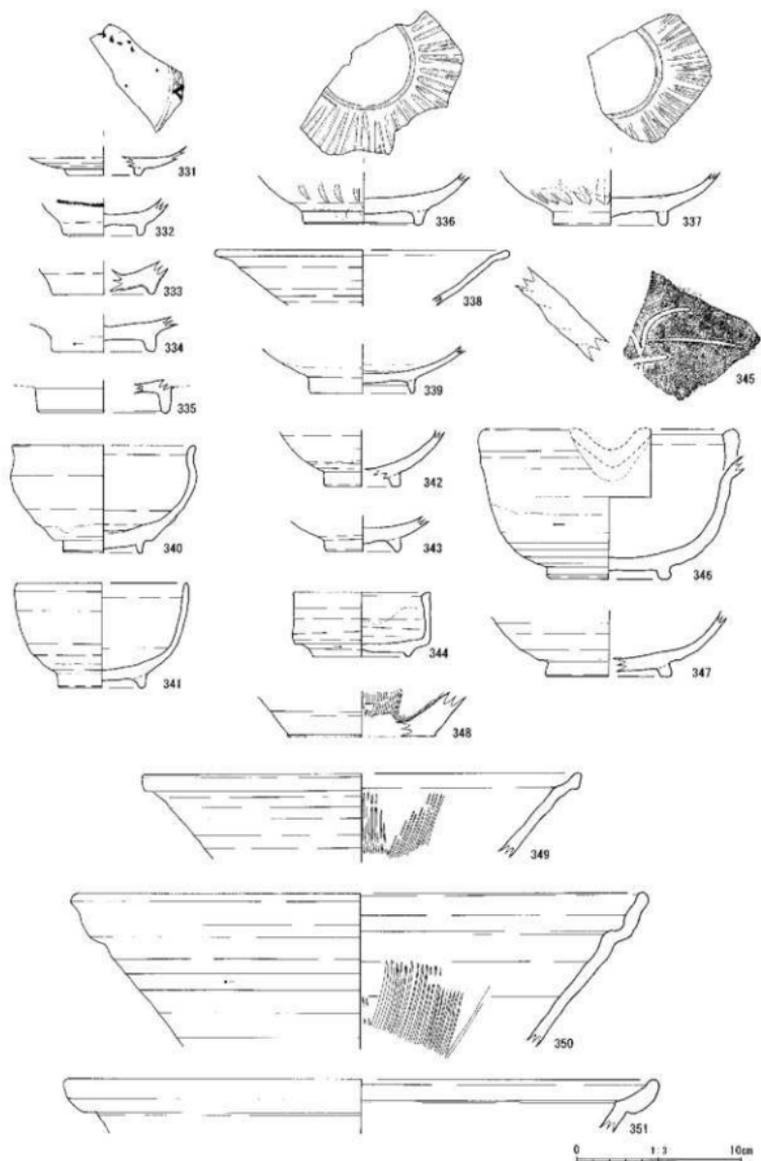


図84 SX164出土土器2

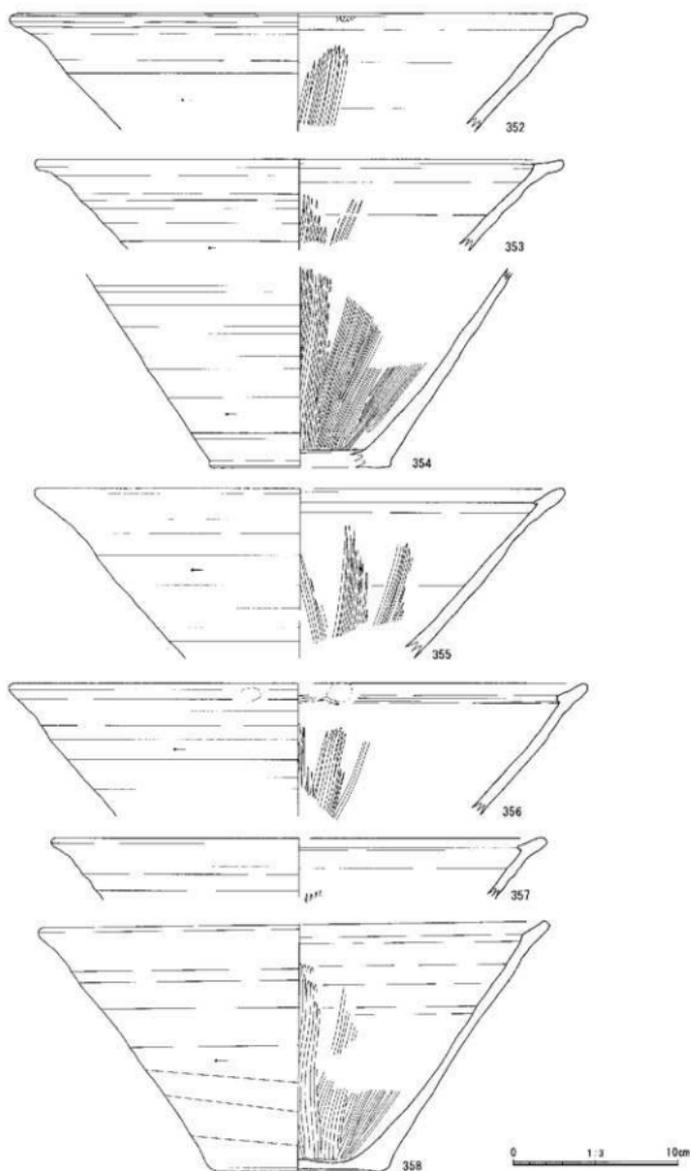


図 85 SX164 出土土器 3

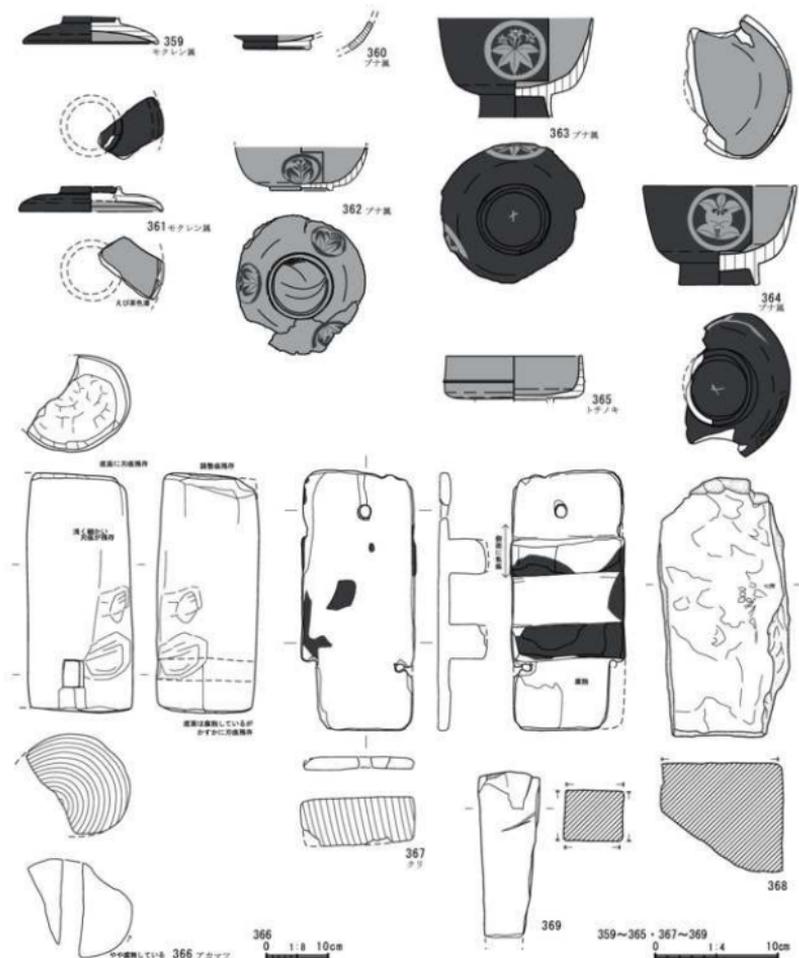


図 86 SX164 出土木製品・石製品

やや丸味を帯びる。両者はほぼ同時期であろうか。354 は 352・353 と同時期か。大塚編年では大塚 4 末～5 となろうか。355～357 は 17 世紀前半～半ば頃、硬質なので連房窯の製品である。口縁内側の突起があるものの内傾する。358 は 18 世紀後半。底部外面の縁を面取りする。口縁内側の突起がなくなり、断面形が「へ」の字状になる。

その他の遺物は図 86 にまとめた。漆碗 (359～365) のうち、359・361 は蓋で、その他は碗である。362 は丸に植物の紋が描かれ、363 は「丸に笹リンドウ」、364 は「丸に橘」であろう。359～364 の外

面は黒漆に赤漆の文様、内面は赤漆である。365は内外面とも黒下地の上に蝦茶色の漆が塗られている。用途不明木製品(366)はアカマツ材の芯持ち丸太で、両小口面は加工されている。幹下方に長方形の柄孔が貫通している。組合せの横杵の杵部であろうか。柄孔は真っ直ぐに貫通している。あまり使用された痕跡がなく、未使用であるか、もしくは使用後すぐに破損した可能性がある。下駄(367)は一木作りの長方形を呈し、長さ21.3cm、幅9.3cmと小振りである。爪先がやや左上がりである。歯のある面は炭化している。368・369は砥石である。368は長さ21.3cm、大型の置き砥石である。硬質細粒砂岩製で仕様面は一面のみである。369は小型の手持ち砥石である。凝灰質細粒砂岩製。仕様面は4面あり、片方の端部は折れている。共伴した土器の年代から、これらの製品はいずれも近世のものであろう。

SX164から出土した陶磁器の年代幅は17世紀初頭～19世紀代である。瀬戸の登8～9の製品が複数ある(344・346・347・350)。仏具の割合も多く遺構の性格が判然としないが、SX164は19世紀初頭の遺構であり、水場のような用途に使われていたと考えられる。

SX205 平成15年12月～同16年1月に遺構掘削調査しているが、記録したものがなく、遺構の形状や性格は不明である。遺構概略図に範囲を示す線が記されているのみである。現地調査での遺構写真は一枚あるが遺構の状態を示すようなものではない。当時の調査日報に「SX205掘削」の文字があるものの、遺構の状態に関する記載はない。「SX205の東の井戸は木枠も残っていた(保存状態良好)」の記載にある「東の井戸」はSX212(井戸ではなく堰跡であろう)を指すと思われる。同時期に調査しているSD118は当時の自然流路(河道)跡と思われる。SX205はこの上流部にあたり、集水施設を伴うことから見ても、SX205はSD118に続く旧河道であった可能性がある。奈良時代から自然流路として機能し、近世には埋没したが、水脈のある場所としてその後も井戸が掘られていたようである。

出土物は数多く、土器・土製品、金属製品、石製品、木製品等が大量に出土した。土器の種類は陶磁器が最も多く、曲物、自在鉤、硯(?)、煙管、陶馬、埴またはのし瓦等である。時代幅は、奈良時代～近世まで幅広い。図87～89に陶磁器類、図90に木製品、図91に土製品その他をまとめた。

供膳具は、18世紀代、志戸呂製品や瀬戸製品が用いられる。皿類や播鉢等、同器異産地のものが同時期に存在する。一方、19世紀前半代になると志戸呂製品や瀬戸製品を押さえて肥前系が大ブレイクする。本遺構出土の陶磁器は「肥前」、「志戸呂」、「混入品」に分けられる。肥前は広東碗・小杯・箱形湯呑など(374～388)、香炉(392)、いずれも19世紀前半代のものである。輪壳皿(412)は18世紀前半代である。志戸呂は18世紀前半代の灯明受皿(390・391)がある。若干小振りで受部の立ち上がりが比較的低い。志戸呂焼の新しい時期併行であろうか。天目茶碗(406・407)は18世紀前半代、窯の報告例はあまりない。播鉢(426～428)は18世紀前半～半ばの所産。体部上位がやや丸く立ち上がるものである。18世紀後半以降は直線状に立ちあがるものになる。421の広口壺は16世紀末～17世紀初頭のものと思われる。上志戸呂古窯で広口壺の類例が見られる(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所2009)。この他、志戸呂製品では香炉(392・393)、蓋物の身(394)、端壳碗(408・409)、縁袖小皿(413～416)、お引皿(417)、片口鉢(418)がある。混入品は灰釉陶器から近世陶磁器までである。370～372は青磁(詳細は第3節第1項(イ)～D)。373は美濃の菊皿、389は灯明皿である。396～399は灰釉陶器、401～403は山茶碗である。17世紀代代古瀬戸(登2～4のもの)は瓶子(395)、香炉(400)、播鉢(424)等が見られる。その他、瀬戸・美濃の天目茶碗(404・405)、志野皿(410・411)、美濃片口(419・420)、常滑鉢(422)、瀬戸播鉢(423・425)、かわらけ(429～432)がある。

図90-433～455は木製品である。433～439、441・442は曲物である。径10cm以下の底板(435・436・442)は柄杓であろう。440は一木作りの下駄である。両面とも一部黒くなっていることから塗りかかっていたか。451は自在鉤状の木製品で、切断面や加工の痕がそのまま残っていることから未完成の可能性もある。452は木鐘。長方形の柄孔が鉤状に切り込まれている。443～450、453～455は用

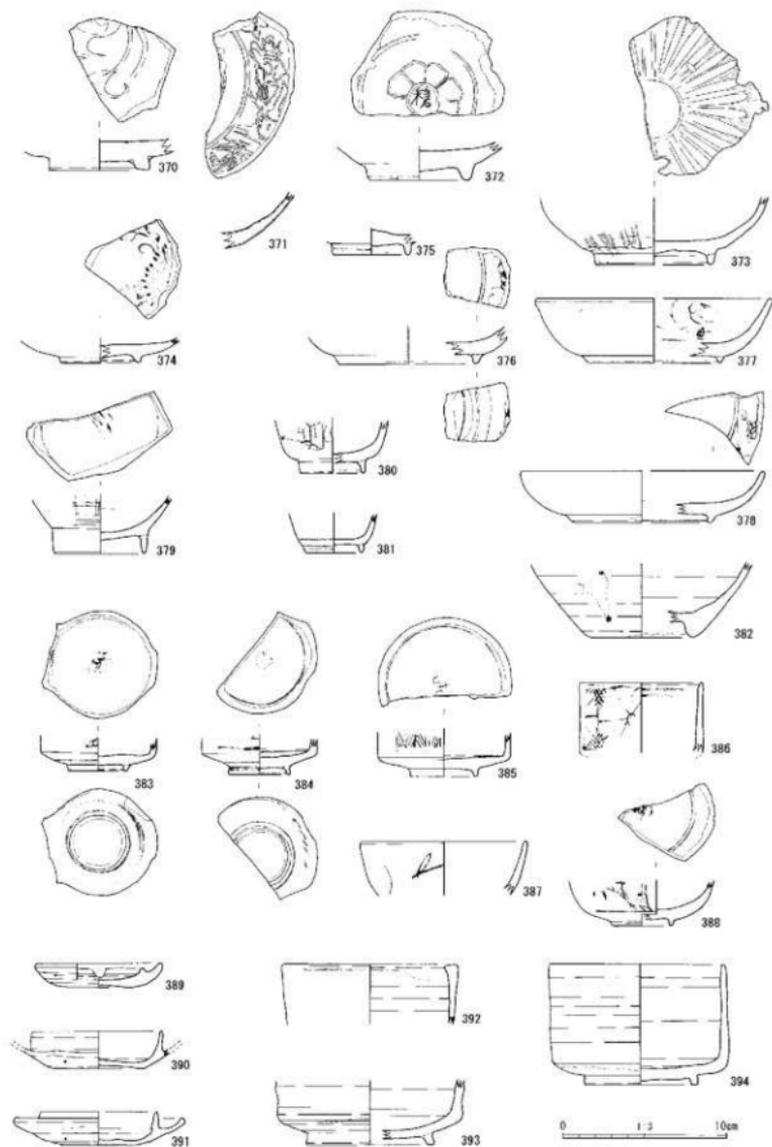


図 87 SX205 出土土器 I

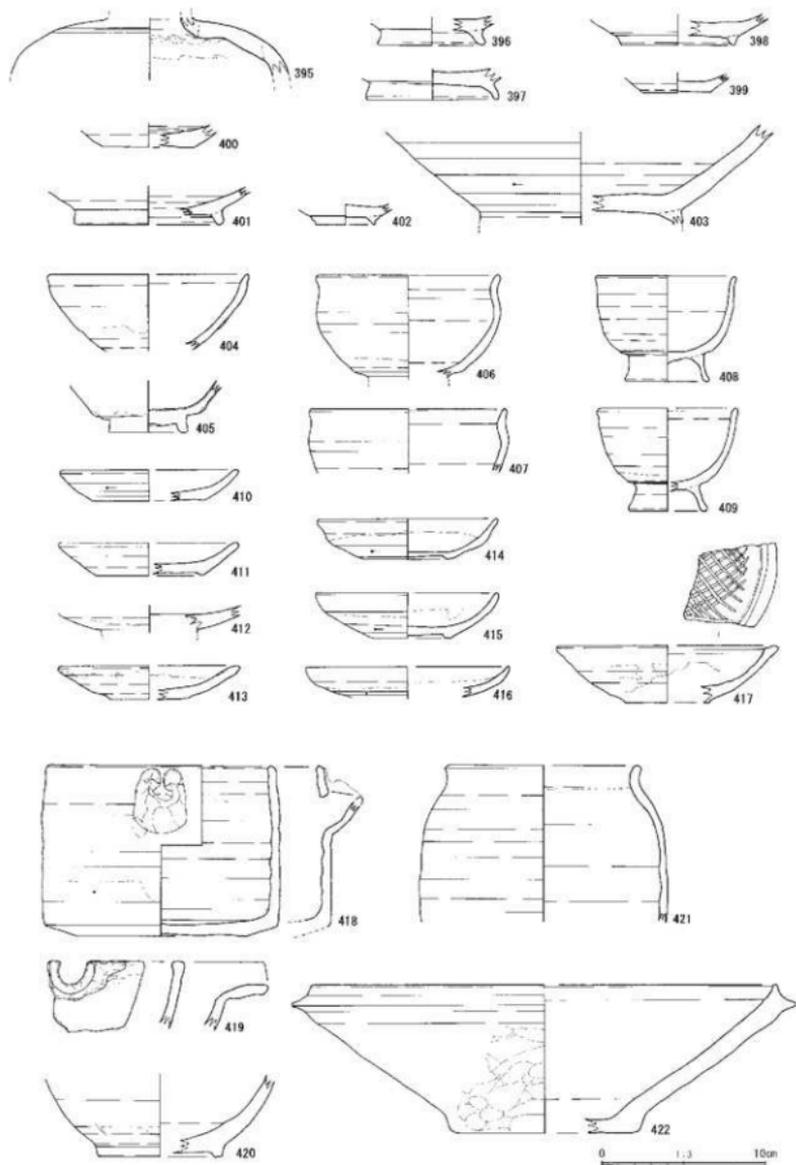


図 88 SK205 出土土器 2

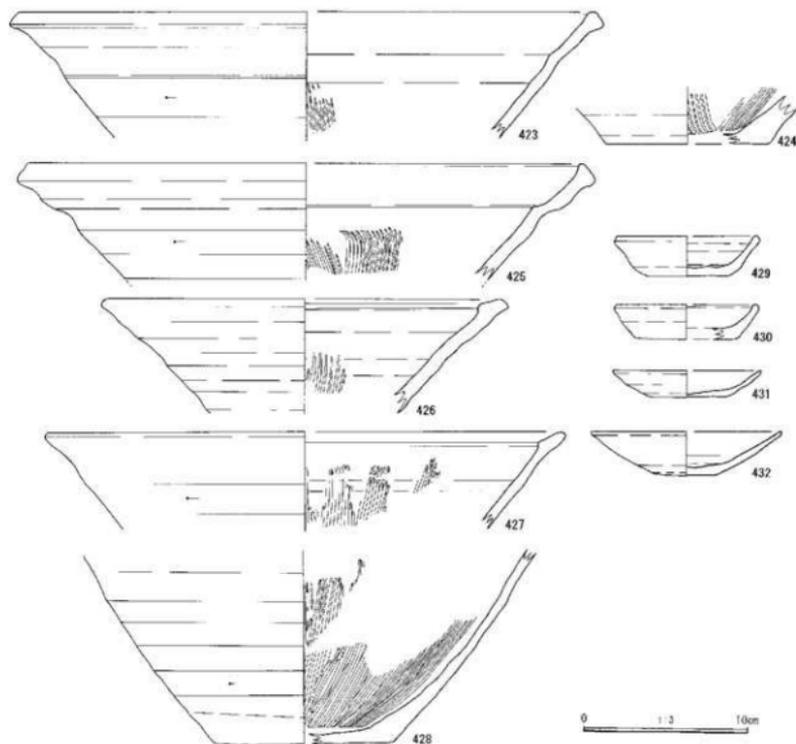


図 89 SX205 出土土器 3

途不明木製品である。

図 91 は SX205 より出土した石製品と金属製品、土製品である。456 は下層部より出土した。凝灰質粘板岩製で、裏面は剥離している。硯が破損した後に砥石へと転用している。457 は珪質凝灰岩製の小型砥石である。458 は中層より出土した。黒色粘板岩製で表裏面とも縁部を作り出している。材質から硯の可能性がある。460 は陶馬である。体部の上半と尾部の先端及び右後の脚を欠く。断面内部は半還元状態である。堆積土上部で出土している。本遺跡内ではこの他に土製の馬形や人形の出土はなく、唯一の土製形代である。

SX205 は 19 世紀前半代の肥前が多く出土していることから、19 世紀代も機能していたと考えられる。SX212 (図 82) E-1 区 110C-2 グリッド内、SX164 の東側に位置する。円形に近い不定形な土坑状を呈する。最大径は 3 m ほどである。SX205 の記述にもあるように自然流路 (SD118) 内にある。自然木の木組みがあることから、自然流路内の堰であった可能性がある。杭はすべて樹皮が付いたマツ材で、先端を尖らせてある。杭列は三面あり、上から見ると三角形になっている (図版 33)。東西方向に長さ 2 m ほどの横木が一本ある。杭の間には 30 cm を超える自然の角礫が複数みられる。遺構の性格については不明だが、SX164 のような集水施設のひとつとも考えられる。

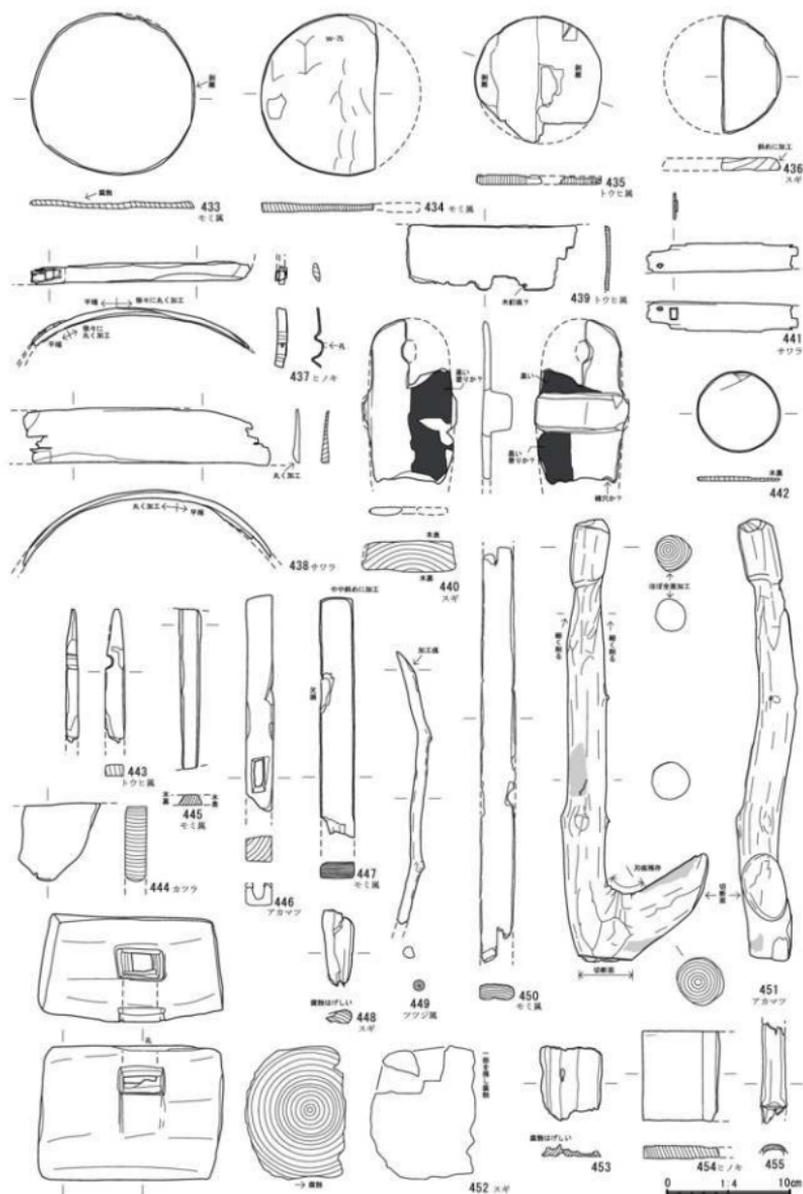


図 90 SX205 出土木製品

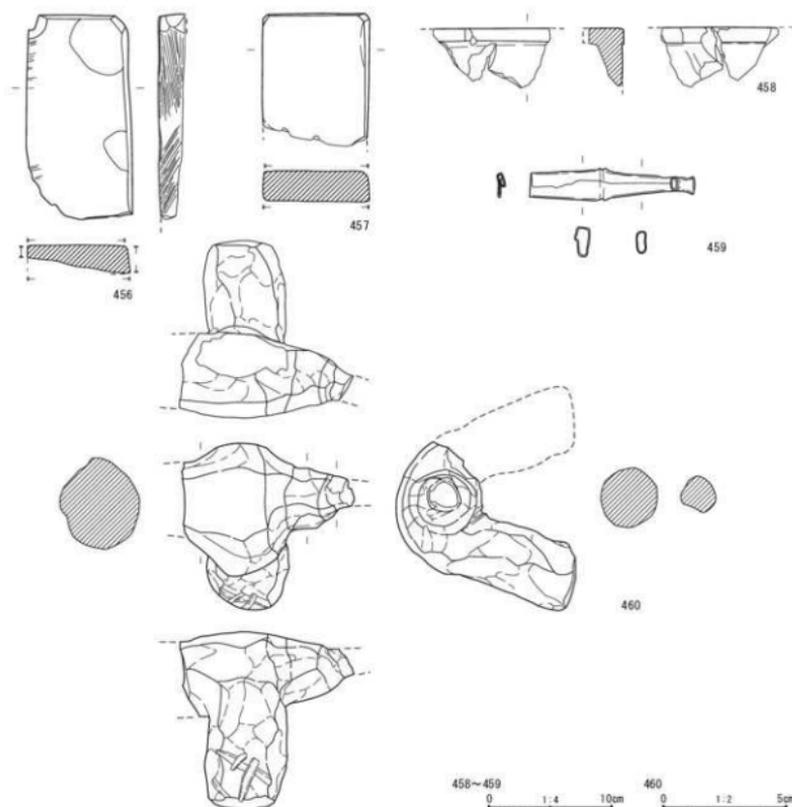


図91 SX205出土石製品・金属製品・土製品

出土遺物は近世の陶磁器が主体である（図92-461～474）。瀬戸の天目茶碗（461）を始め、せんじ碗（462）や卸目付大皿（472）、美濃の仏飴具（465）、肥前の輪杵皿（470）、9型式に該当する常滑の甕（474）などがある。地元の志戸呂焼では丸碗（463）や香炉（464）、茶壺（471）、播鉢（473）がある。このほか山茶碗（466・467）、かわらけ（468）、古瀬戸の縁袖小皿（469）が出土している。覆土内には木製品（図93-475～481）や石製品も見られる。475～477は曲物底板である。いずれも径の大ききから柄杓の可能性がある。478はクリの芯持ち材で作られた横槌である。敲打部はかなり使い込まれて凹んでいる。479は漆碗である。黒地に赤漆で丸の紋が書かれていたであろうが、残存状態が悪く紋の種類までは特定できない。480・481は用途不明木製品。いずれもスギ材である。480は板状の三辺に木釘が打ち込まれ孔には木釘が残存していた。体部に1箇所方形の柄孔がある。木釘で組み合わせた箱物の部材であろうか。481も部材だが用途は特定できない。上下端部に切り欠きと木釘孔がある。側面にも5箇所の木釘孔がある。482は大型の砥石である。置き砥石として使われていたであろうもので砥面は

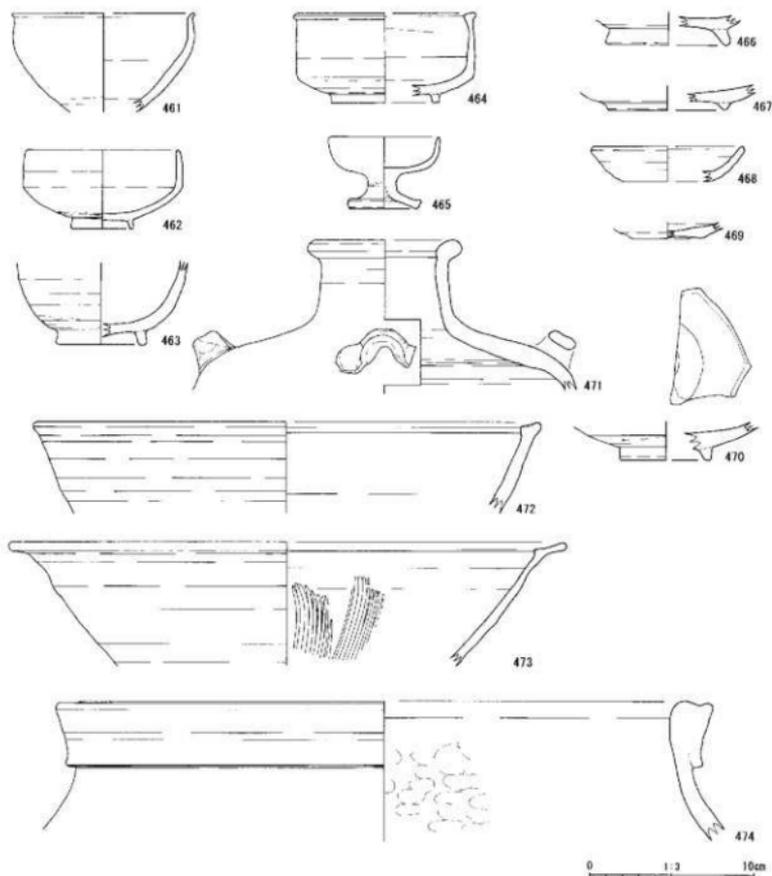


図92 SX212 出土土器

正面と側面の2面ある。出土した陶磁器の年代から、同じく19世紀代の遺構であろう。

SD118 (図版30) E-1区110-C～Dグリッド内に位置する。SD118からSX205の北東方向へ続く自然流路(旧河道)跡と思われる。流路は幅をもって浅く、覆土内には拳大強の自然礫を多く含んでいる。礫は流路の底部に堆積している。SX205に比べて覆土内に含まれる遺物量は多くないが、土器は細かい陶磁器片が目立つ。

出土土器は**図94**にまとめた。**483**(912)は白磁の皿である。底部高台内に墨書があるが解説できない。**484**は須恵器の大型の甕類である。外面にはタタキ後のカキ目、内面は当て具痕が残っている。**485**は輸入陶磁器で中国・建盞の天目茶碗である。下地の化粧掛けの上には黒色の釉をかけているのは日本に見られない。**486**は志戸呂焼の天目茶碗。**487・488**は古志戸呂の縁軸小皿、**489**は古瀬戸である。かわら

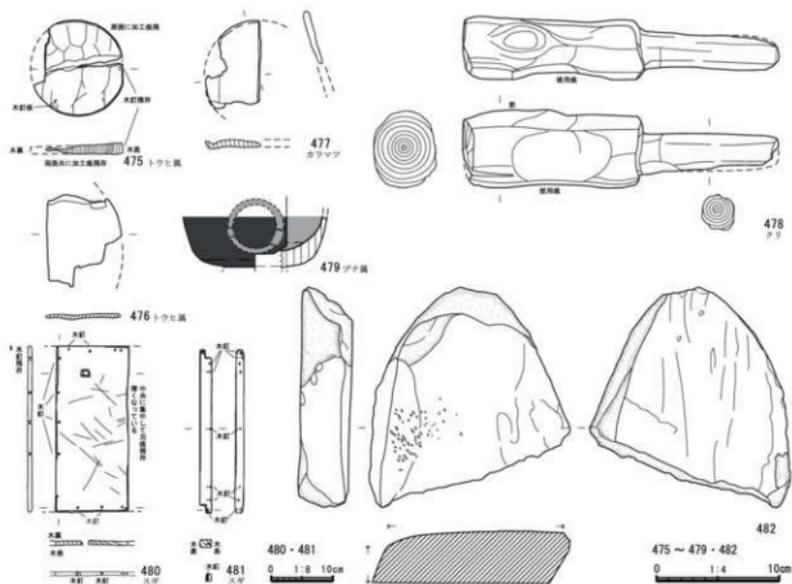


図93 SX212出土木製品・石製品

け(490)、古志戸呂の搦鉢(491)、瀬戸・美濃製の祖母懷茶壺(492)は大窯である。このほか覆土内からは硯(1036)、石鉢(1042)などの石製品や土師質の土錘(1351)が見つかっている。出土品の様相からSD118の年代も近世であろう。

SE103・105・106 109C-10 グリッド内に位置する。自然流路(SD118)の範囲内にある。近～現代の天水槽と思われる。

その他の遺構 図95-493～502、図97-534～542は、その他の近世以降の遺構より出土した木製品である。493～497はE-2区のSF1561から出土した。SF1561は調査区の北側で検出した攪乱土坑である。時期は近代に含まれるかもしれない。493はクリ材の整形板、494には長方形の柄孔がある。495は楕状に加工された製品である。496は棟札または表札であろうか。長方形に整形されたアカマツ材の板で、裏面には鋸で挽いた痕がある。表面に墨書があるが解読出来ない。表面から裏に貫通した金属製の釘が2箇所残っている。497はSX93より出土した竹類の破片である。SX93はE-1区で検出した天水槽のひとつである(図版33-5)。498～501はSE1820から出土した。SE1820はE-2区で検出した近世の井戸跡である。径2mほどの略円形を呈す。区画溝(SD3839)に重なっていることから水は充分でたであろう。重複しているSE1818・SE1820との前後関係は不明。様々な遺物が出土しているが、近世の陶磁器を伴っており、やはり近世の井戸である。木製品は漆碗(498)、櫛(500)、板状製品(499-501)が出ている。漆碗(498)は内面が赤漆、外面は黒漆で塗られ、3箇所に家紋が入る。家紋は丸に花(桔梗?)であろうか。500は櫛の破片でカバノキ属の材で作られている。16本の歯が残っており、歯の密度は1cm当りに4本ある。499-501は用途不明品である。502は近世掘立柱建物(E-3区SH201)の柱穴(SP8681)より出土した。大型の桶の側板であるが、内面にある隆起部を刃物で落とし再加工している。柱または

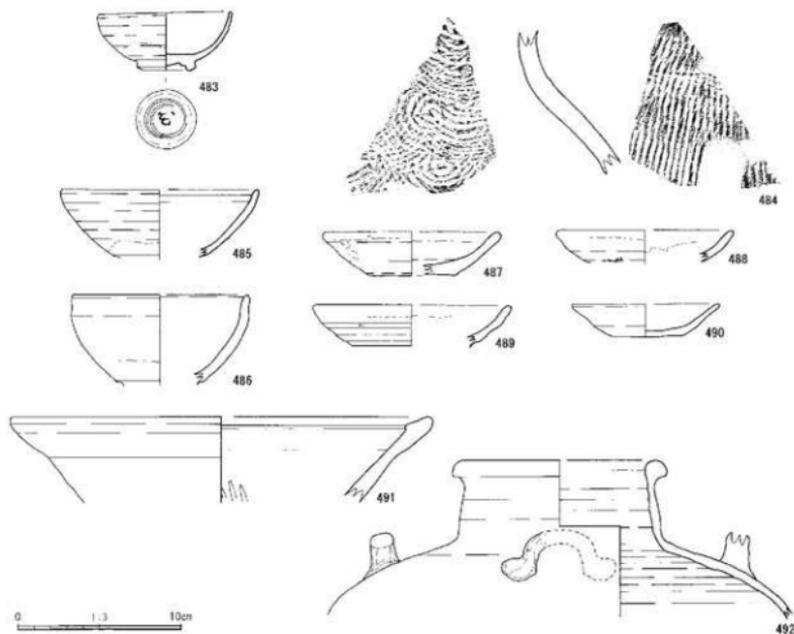


図 94 SD118 出土土器

柱の添え木として使われていたものと思われる。

534～540はSF1187より出土した木製品である。SF1187はE-2区中央部で検出した不定形の土坑で、井戸または墓の可能性はある。遺物の出土量は多いが、各時代のものが含まれている。上層の攪乱層は近世、中央の深い部分からは中世土器がある。534～540は桶である。覆土中より出土しているが同一個体であろう。但し、536だけは他の側板よりも長く寸法が異なる。別個体もしくは補修した側板である可能性もある。側板は追い柱目のスギまたはネズコ材で作られている。内面の下方には底板が当たった圧痕がある。540は径20 cmほどの曲物底板でスギ材である。木釘などの痕跡はない。SF1187からはこの他に覆土より漆碗の破片や灰軸陶器(543)などが出土している。

541はE-2区で検出した柱穴(SP3550)に残っていた柱根である。クリの芯持ち材で、外面に加工はない円形柱である。下端面には芯部に向かって入る切断時の刃物痕が複数見える。柱穴の周囲には近世掘立柱建物跡が複数あることから、この柱穴跡も近世と考えられる。542はE-4区で検出した中世の畔(SK5001)より出土した曲物底板である。約1/3残存しており、想定径は15.4 cmほどである。側面には径0.3～0.4 cmの木釘孔が1箇所ある。

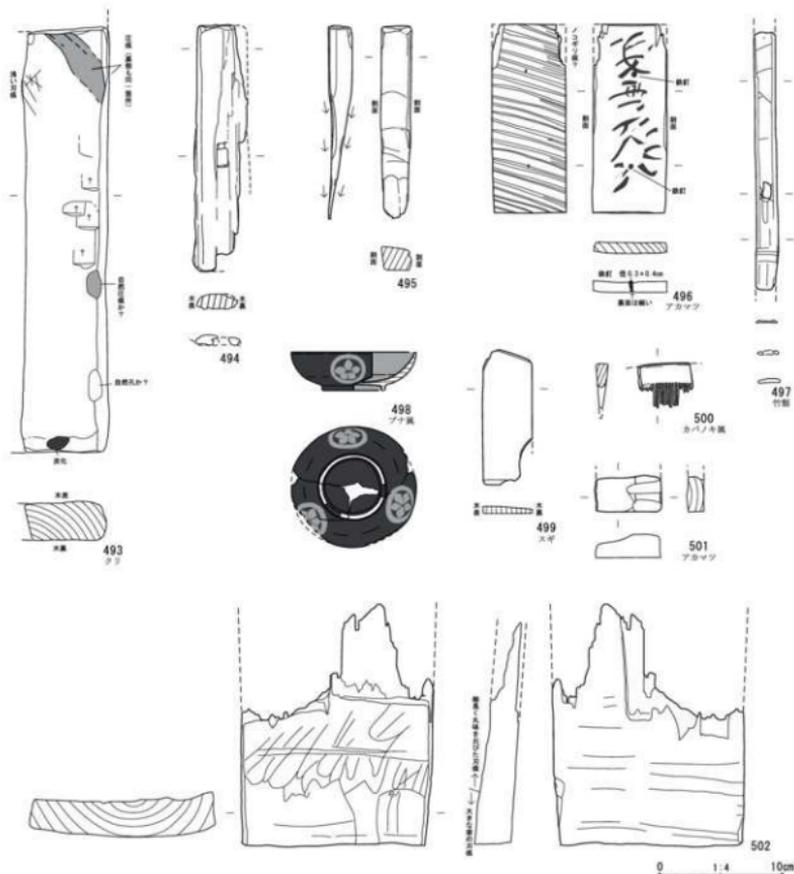


図 95 SE1820・SX93・SF1561・SP8681 出土木製品

註

1. A-1区で検出した石敷道路遺構は、調査時の名称をそのまま使用した。
2. 「一遍聖絵」5巻に「武士の住居（大井太郎の家）が描かれている。それは板葺きの屋根を持った入母屋造りの建物で、前面に庇を持っている。
3. SH207・SH209はそれぞれよく似た規模の建物と組み合わせによって2群の主屋を形成している。また、2群西区の建物群(SH201～204)も2間×3間程度の大きさの建物であるが、柱間は7尺程度のものが多い。こうした間尺は鎌倉市内で検出されている大型建物の場合とも一致しており、構（材）に規制があったと考えられている（服部 2001）。したがって寺家前遺跡では桁行の柱間はほぼ7尺程度で作られているものが多く、梁間も7尺を越すものはないようである。

また、1尺を天平尺の31cmと仮定して検討してみたい。その数字できれいに割り切れるものはむしろ少なく、1～2cm程度の

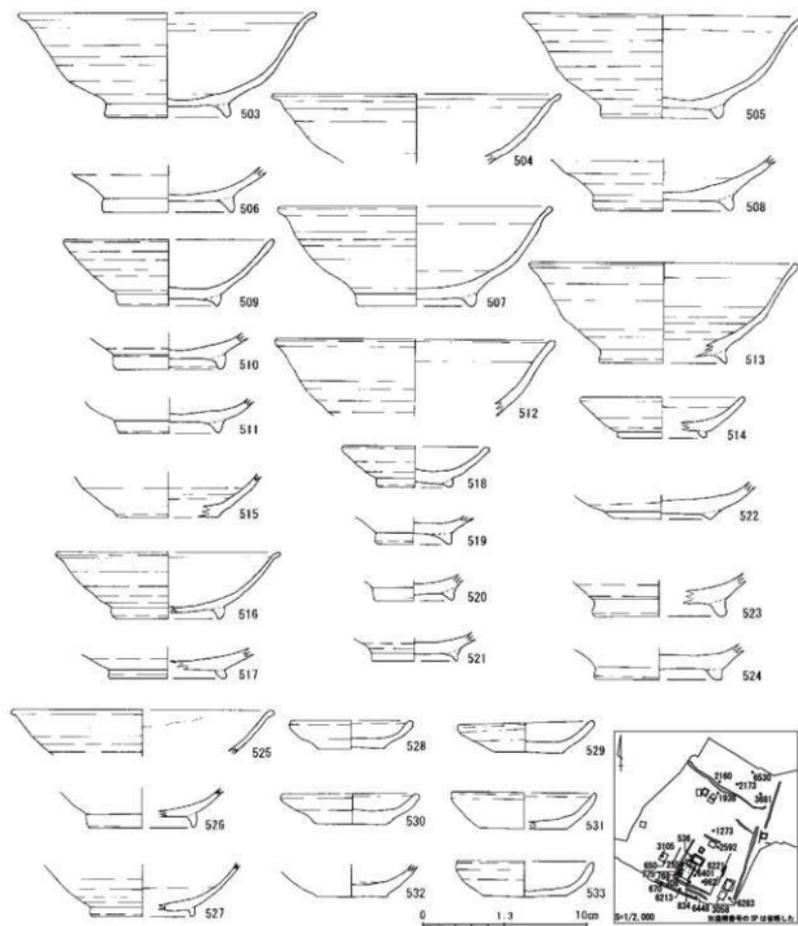


図96 1群柱穴出土土器

差を含んでいる。形相だけが検出された建物は当然であるが、柱の痕跡が残っている建物でも必ずしも完数が得られないものも含まれている。これは、掘立柱建物は柱の根本の位置で決まるのではなく、桁・梁の位置で決まるわけで、柱の多少の傾きを考慮すると細かな数値は必ずしも一致しなくてもよいこと、地方の小規模な建物がそれほど厳密に間尺を合わせて建てられてはいなかったこと、おそらく、その両者が合わさっての結果であろう。

4. 掘立柱建物の柱穴の断面図を観察すると、同一の建物でも、柱の高低にかなりの差がある。中にはそうした現象の解釈に苦しみものも少なくないが、これらは、現地調査時の図面、航空測量の図面を尊重して、そのままにしてある。調査期間に追われていた現地調査での遺構検出した時と測量図が作成された時との時間差が現れている面もある。

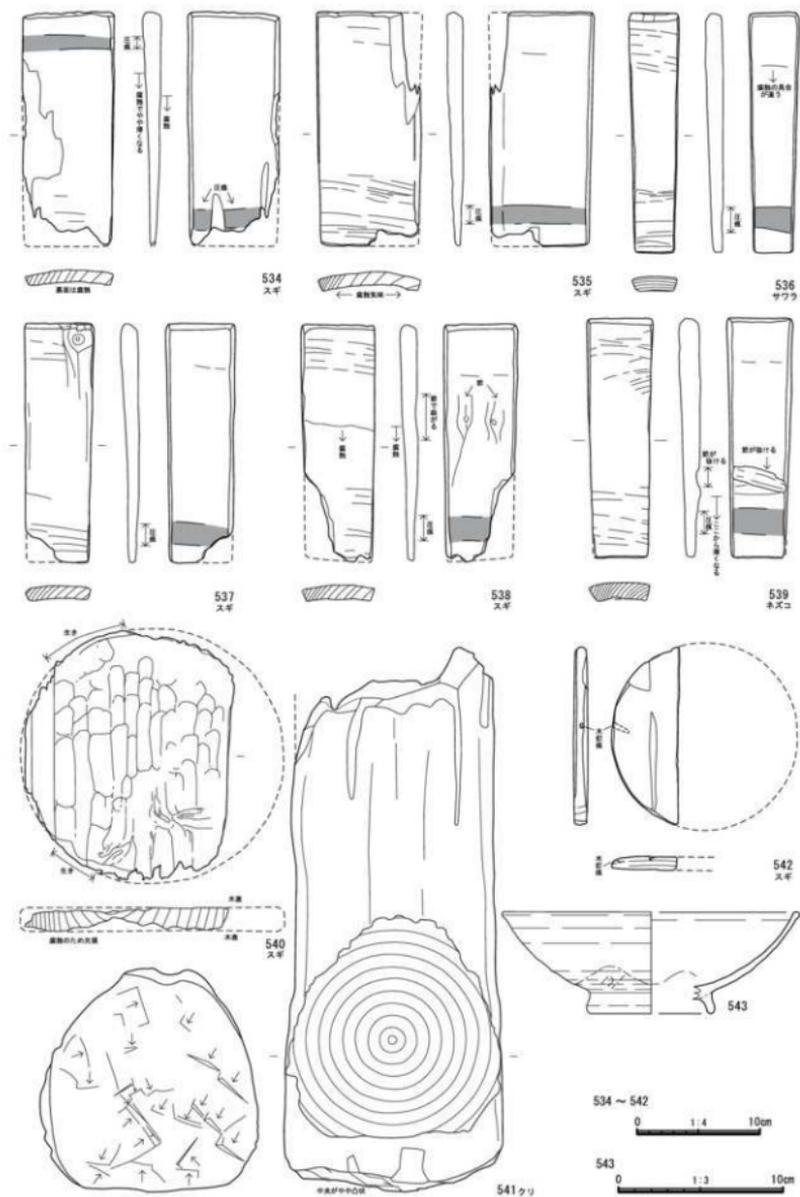


図 97 その他の遺構 SF1187・SK5001・SP3550 出土木製品

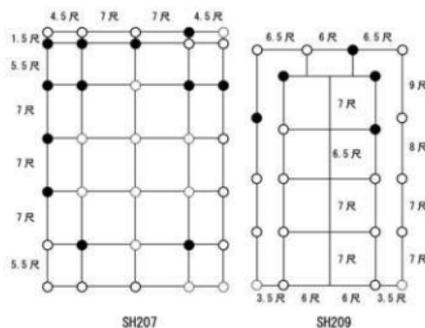


図98 上層2期SH207・209柱間模式図

柱穴を通る線を引いてみると(図98)、身舎4間に東・西・北の3面に1間ずつの庇を付けた建物が推定できた。身舎は桁行7尺+6.5尺+7尺+7尺、梁行が6尺+6尺と推定した。柱穴の位置から南北両面の庇の西側、西面の庇の柱位置と身舎の柱位置が合わないことがわかるが、身舎の柱間は基本的には7尺であるらしい(西から2間目は6尺5寸としたが、これは各柱間での多少の誤差が累積した結果であろうと推定している。庇の幅も7尺の1/2(=3.5尺)である)。

6. 櫓と扉跡は現地調査の段階でも区別はつかなかった。ここでは柱跡が等間隔で並ぶものを櫓とし、柱穴が検出されない、幅の狭い溝も単に溝とした。その位置、建物との関係から、櫓・溝と考えるより板敷と考えた方が良いものもあるが、ここでは判別が出来ないので櫓と溝とにしてある。したがって櫓・溝としたものの中には板敷が含まれているかもしれない。

5. 孤立柱建物を観察したが各々の建物では柱間が比較的揃っているものと柱間のバラツキが大きいものがある。前者は中心部にある大型の建物で、後者は小型の建物の場合が多い。

柱間が検討できる柱の痕跡が残っているいくつかの建物について検討してみると、2群の中心的な建物であるSH207では、柱の痕跡が5本、根石を含めて位置が明確なもの7本をすべて通る線を引いてみると図98のようである(南・東側から2本目の柱は根石さらには柱掘形からも多少ずれている)。身舎は7尺(1尺=31cm)3間に、5尺5寸の庇が南北に1間ずつ付いている。梁行も身舎2間(7尺)に4尺5寸の幅で庇が東西についていることが推定できる。したがって身舎は7尺を基本としているらしい。

同様にSH209では5本の柱に痕跡が残っていたが、この

第3章 まとめ

第1節 上層2期の遺構の性格

寺家前遺跡の遺構と遺物を説明してきたが、まとめに代えて、観察を通じて問題になったいくつかについて初歩的な検討を行い、遺跡の性格を考えることにしたい。

1. 寺家前遺跡の始まりと終わり

(1) 寺家前遺跡の始まり

寺家前遺跡の上層からは奈良・平安時代の須恵器・灰軸陶器と山茶碗さらには中世後半から近世に至る瀬戸・美濃焼を中心とした陶磁器が数多く出土している。奈良時代の須恵器はほぼすべて隣接する瀬戸川周辺にある助宗古窯の製品であるが、その量は多いものではなく、この段階に関わる遺構も明らかではない。灰軸陶器も出土しているが、やはりその多くが遠江産を含めた在地産のもので、遺構も明らかではなかった。したがって寺家前遺跡は中層とした古墳時代集落が営まれた後、律令期の痕跡は非常に少ないということになる。以上から、この遺跡は古代から連続している遺跡ではなく、早くみても11世紀後半になって新たに始まる遺跡(屋敷跡)だということができる。この地域の中世集落には古代から連続している遺跡は少なく、12世紀代からはじまるものが多いことが指摘されている(丸杉2002)が、寺家前遺跡もそうした例の一つであろう。

(2) 寺家前遺跡の終焉

寺家前遺跡では山茶碗段階が中心で、それ以後の様子はよくわからなくなっている。これは寺家前遺跡に特有の現象ではなく、山茶碗が盛行する東海地域に共通する要素で、山茶碗の終末以後、日常の供膳具がほとんど見えなくなることから、遺跡の様子がわからなくなっている。寺家前遺跡でも山茶碗の終末段階で遺構もつかめなくなり、大きな変化を迎えたことを知ることができる。しかし寺家前遺跡では、これで遺跡が途絶えたのではなく、上層1期とした段階では、瀬戸・美濃系の施軸陶器が多量に採集されている。しかし、山茶碗段階から瀬戸・美濃の製品が多量に流入してくる古瀬戸後期の段階までに多少の時間差があり、その間の遺跡の様子がわからなくなっている。ここでは中世前期と中世後期に共通する輸入陶磁器の出土状態を参考にして、寺家前遺跡の様子を考えてみた。

出土した青磁の量では、山茶碗に伴出する中世前期段階のものが、全体の65%を占めるのに対し、山茶碗が見られなくなる14～15世紀以後のものは34%である。白磁では、それぞれ74.5%と25.5%であって、14世紀以後には、その出土量が大幅に減少することがわかるが、それでもなお全体の3割前後の出土量がある。したがって、寺家前遺跡では、14世紀以後にも遺構の様子は明らかでなくなってくるが、屋敷自体は途絶えてしまったわけではなく、その規模を縮小しながらも遺跡(屋敷跡)そのものは存続していたことを知ることができよう。

したがって、寺家前遺跡は灰軸陶器の後半(11世紀後半)から始まり、遺跡の盛期は12・13世紀(山茶碗Ⅰ-2期～Ⅲ期)にかけてであったようで、山茶碗の終末を期に様子が大きく変わっている(註1)。

しかし、輸入陶磁器の出土量のみでみる限り、遺跡の規模あるいは遺構の様子は変わったかもしれないが、少なくとも14世紀代までは従前と大きくは変わらない在り方をしていたものと考えられる。

こうした遺跡の在り方を、この地域の文献史の研究成果に合わせて考えると「足利尊氏下文」の存在を考慮することができよう(藤枝市史編纂委員会 2008)。これは建武4年(1337)に足利尊氏が今川範国に対して恩賞として「葉梨の荘」を与えたことを示したものである。それ以前の「葉梨荘」に関わる

記録はなく、「立荘」の時期や、その領主なども不明であるが、少なくともこの建武4年段階には「葉梨荘」が存在したことは確かであり、この後、今川氏が地頭代に家臣の松井氏を充てた記事があることから、この段階で「葉梨荘」の領主が交代したらしいことも明らかであろう。

「葉梨荘」の位置を示す資料はないが、葉梨川流域の下之郷・中ノ合・西方・北方等が含まれていたとされており（椿原 2008）その位置は葉梨川上流域だと考えられている。この地域で11世紀後半から続いた有力な中世前期の屋敷跡である寺家前遺跡が14世紀には大きな転機を迎えていたことを考えると、この遺跡の消長と先の「下文」との関わりを考えることは興味のある事項である。

想像をたくましくすれば、「葉梨荘」の荘官（おそらく、この地域の開発領主であったろう）であった寺家前の屋敷の主は、この「下文」によって、領主が今川氏に交代し、新たな代官が任命されて以後、新領主である今川氏から様々な掣射を受け、その地位を失ってゆくことになるだろう。その具体的な現れが上層2期の屋敷地の放棄となって示されていると考えることができる。

2. 遺跡の性格

(1) 溝・柵で囲んだ屋敷地

先に述べたように、寺家前遺跡では溝・柵で囲んだ屋敷地が3箇所検出されている。屋敷地は外郭2500㎡、内郭600㎡ほどの規模をもっており、内郭には2あるいは3棟の大型の掘立建物がある。その外郭には小型の掘立建物が広がっている。内郭は四面庇の建物を中心としたもので主人が使用する空間（公的な空間を含む）であり、外郭の建物は倉庫・井戸（台所）さらには所従・下人などの住居であろうと考えている。

よく似た様子を示す遺跡に、島田市ミヨウガ原遺跡がある。ここでも区画で囲まれた中に規模の大き

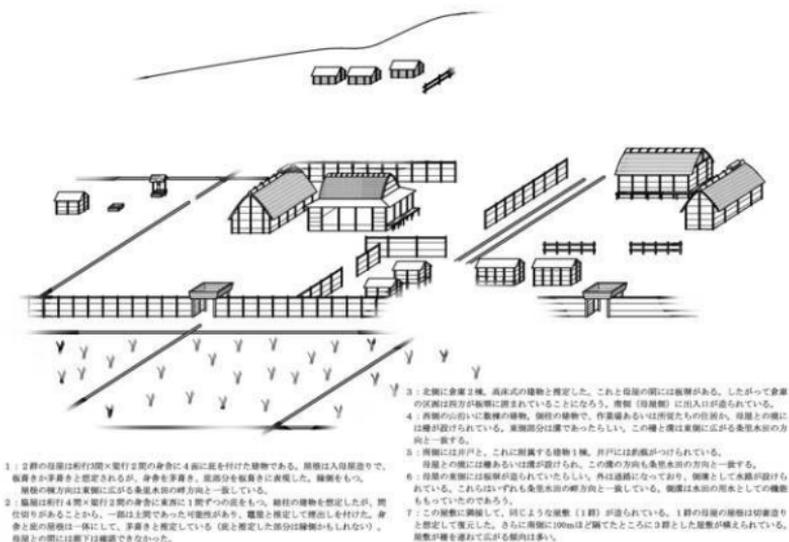


図 158 屋敷地復元図

な掘立柱建物と小規模な掘立柱建物とが検出されている。

また、早くに調査された磐田市玉越遺跡では1辺40mほどの堀に囲まれた方形の区画の中に庇付きの大型の掘立柱建物とこれに附属する小規模な建物群が発掘されている。これに隣接した土橋遺跡でも堀りに囲まれた掘立柱建物群が発見されている。こうした溝で囲まれた「居館と言うべき屋敷地」は遠江では12世紀には成立すると松井・溝口両氏は述べている(松井・溝口 2002)。

こうした溝で区画された屋敷地に対して、掛川市牛岡遺跡は8世紀から始まり、中断の時期を挟んで12～13世紀、さらには16世紀にまで続いた集落遺跡であるが、ここは東から西に緩く傾斜する細い丘陵上にあり、後世の開田作業によっていくつかの段が作られて削り取られた部分があるが、この段を中心に建物群が検出されている。報告書から12～13世紀を中心とする建物群を拾い出してみると、掘立柱建物群が3群検出されている事を知ることができる。水田化による地形の改変で、すでに削り取られた部分もあり、建物の数は本来さらに多かつたものと考えられるが、建物群の分布にはさほどの変化はないであろう。したがって牛岡遺跡の建物群は調査区内では3群であったと考えてよいだろう。東から1から3群としたが、1群は2間×2間の建物2棟、1間×3間の建物1棟からなっており、2群はやはり2間×2間の建物3棟、2間×3間の建物1棟から、3群も2間×2間の建物1棟、1間×3間の建物1棟からなっている。建物群の間には柵あるいは溝といった区画は施されていない。このように牛岡遺跡では比較的小規模な建物だけが集まっており、建物群の間には区画をもっていない。建物群1つ1つが個々に独立したものだだとすると、それらには明確な区画は設けられておらず、屋敷地として明確な表示はない。各建物群は、いわば等質な建物群で、大きな建物を持った領主の屋敷などを含まない、一般的な集落であろう。また、この遺跡の建物群は寺家前遺跡の外郭にある建物群あるいは先の新堀遺跡の建物群にも共通する様子をもっている。牛岡遺跡と寺家前遺跡の違いを手がかりに牛岡遺跡を一般的な農民の集落、寺家前遺跡を領主層の屋敷と考えている。

しかし、後に見る横地氏の屋敷群と比較すると、屋敷や建物の規模、附属する寺院跡・神社・墓など、周辺の様々な装置を含め、さらには出土する遺物の量・質など、両者の間には大きな差があることは明らかである。したがって寺家前遺跡で示されたのは小規模な領主の屋敷の様子であり、外見上は「上層の農民の屋敷」とも大きな差はない(註2)。

11世紀後半に始まる、この屋敷の主は、おそらく葉梨の谷の開発領主であり、「葉梨の荘」を所領とした小領主であったのだろう。

(2) 屋敷は「垣根」を連ねる

寺家前の屋敷は小規模な溝あるいは柵で囲まれているが、1群と2群は溝を接しており、3群も近接している。いずれも地形に従って、東向きの建物を配し、よく似た規模の屋敷地を作っている。特に1群と2群は母屋と脇屋の配置を含め、建物の規模までよく似ている。1群も2群もおそらく3群も含めて、各区画の建物群はそれぞれ独立した機能をもっていたものであろう。それは、それぞれに住居・竈屋・倉庫・井戸あるいは所従・下人の住居を含めた構成をしていることから想定できる。たとえば脇屋は玉井哲雄氏が述べたように(玉井 1996)竈屋であったとしたら、当然、個々に独立した消費活動を営んでいたはずである。

このように、よく似た規模の、建物群が隣接して検出される例は、発掘面積が大きな調査ではいくつかの例が発見されており、むしろ、建物群が単独で検出される例の方が少ない。

近くでの調査例を挙げてみれば、駿府城の下層から検出されている今川氏関連の遺跡では規模の大きな溝を境にいくつかの建物群が広がっていることが知られている。もちろん、こうした今川館の周辺の在り方は地方の領主層の屋敷地を考える場合には直接の参考にはならないことは明らかである。

遠江から駿府の代表的な地頭であった横地氏の本貫の地では、総領の屋敷と推定される「殿ヶ谷」の屋敷地に隣接して、丘陵の斜面あるいは小さな谷の出口に、いくつかの屋敷群が連続して広がっていることが知られている。大きく発掘された伊平遺跡はその一つで、横地氏の「庶子の屋敷」であろうと斎藤慎一氏は推定している（斎藤 2006）。これらは名のある御家人の本拠地の例で、室町時代には将軍の「お側衆」として仕えた、いわば上級の武士であり、そうした武士の本拠地における屋敷の様子は寺家前遺跡の在り方より、むしろ葦山の北条氏に関わる屋敷地の広がりとも共通する様にも見える（池谷 2008）。

先に触れたミョウガ原遺跡では細長く延びた丘陵上に掘立柱建物群が広く散らばっている。報告書に示された全体図から復元すると溝で囲まれた区画が4区画あるいはそれ以上検出されていることが理解できる。A群とB群は溝によって2重の区画がなされており、内郭が主屋とそれに附属する建物、外郭の小規模な建物は倉庫あるいは所従などの建物だと考えることができよう。D群には井戸も確認されており、おそらく各建物群に井戸が設けられていたと考えられる。したがって、各区画の建物群は個々に自立した屋敷で、独立した消費活動をしていたものと考えられよう。とすれば、こも屋敷地がいくつか集まっていることで、そうした在り方は寺家前遺跡での屋敷地の様子とよく似ていることになる（註3）。

静岡市の太田切遺跡は発掘面積が小さいこともあり、建物跡が2棟検出されているだけであるが、発掘された1棟は比較的大きな建物で、この屋敷の母屋と考えられる規模である。隣接して、飯田氏の居館と考えられる遺跡があり、同様な建物をもった区画が連続しているものであろう。

袋井市の新堀遺跡では溝で区画された中に小規模な建物だけがまぎらまぎら検出されている。1間×1間の小規模な建物と1間×2間の側柱の建物・2間×2間の倉庫風の建物など6棟と井戸が一つの区画（1400㎡）の中に集まっている。こうした様子は寺家前遺跡2群の井戸を中心とした区画あるいは西区の小規模な建物が集まっている様子とよく似ており、井戸・倉庫・作業小屋とそこで働く人の住居といった在り方を示している。

新堀遺跡は直線に延びる溝が東西南北に続いていることから、この区画以外にもまだいくつかの区画の存在が想定され、その中には主屋を核とする中心的な建物群もあるはずである。したがって、ここで検出されているのは寺家前遺跡でみた外郭に広がる小規模な建物群の在り方とよく似ている。

以上みてきたように横地城周辺の屋敷群、寺家前遺跡の屋敷群あるいはミョウガ原遺跡の屋敷群は、いずれも個々に独立した屋敷が連続して存在していることを示している。

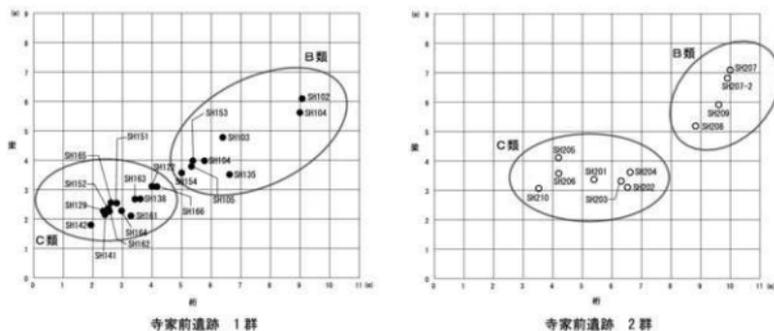


図 159 寺家前遺跡掘立柱建物規模

こうした屋敷地が連続する在り方は東国の武士の屋敷でもすでに数多く知られており、玉井哲雄氏が『一遍上人絵伝』の大井太郎の屋敷で「大きな屋敷の中ないし隣接した位置に、ある程度の規模を伴った小さな屋敷が併存していた」と指摘した(玉井 1996)様子とも一致するもので、こうした連続した屋敷の在り方は「一族・郎党」の言葉で示される中世武士社会の在り方の一端を示すものであろう。

(3) 掘立柱建物の規模

寺家前遺跡からは掘立柱建物が32棟検出されている。その規模を図159に示した。横軸に桁行、縦軸に梁行をとっている。建物の推定が明らかな2群を例にみると、その規模から、大きく2類あるいは3類に分かれることがみえてくる。最も大きな建物は母屋としたSH207とSH207-2であり、およそ70㎡の大きさである。この中心的な建物は四面に庇をもっている。これに続く規模のものは母屋に附属する脇屋としたSH208・SH209で45～55㎡ほどである。それ以外の建物の区別は難しく、一括してC類としたが、建物の平面席が20㎡前後のものとは10～15㎡のものに分けられよう。前者は2間×3間ほどの建物で、作業場あるいは所従とか下人とか呼ばれる人たちの住居に、後者は2間×2間の倉庫風の建物だと推定できよう。1群の場合も、ほぼ同様に考えることができる。

中心部の建物が「母屋と脇屋」(竈屋)、その周辺にある井戸を含めて、様々な建物が並ぶ姿は中世前期の屋敷跡ではよく認められる構造である。周辺地域で似たような建物配置を示す遺跡は小川城下層・伊平遺跡あるいは建物配置まではよくわからないが島田市石成遺跡等が挙げられよう。

建物の規模の比較は先に河合修氏が行っている(河合 1998)が、構造や配置はともかくにして、規模を取り上げ、考えてみることにしよう(註4)。

図160に示すように藤守遺跡では、A類とC類の建物が検出されている。飯田氏に関わる居館と考えられる太田切遺跡では、やはりA類とC類が検出されており、富士宮市の元富士大宮司館跡ではB類が検出されている。裾野市の大畑上屋敷遺跡ではA類のみが検出されている。ここでSB1とされた建物は桁行10間×梁行4間と、他の遺跡で発見されている建物に比較して、特別に大きく、単純に住居ではなく、他の性格をもった建物だと理解されている(渡瀬 1989・河合 1998)ようである。したがって、これを同一のレベルで論議することは難しい。

また、伊平遺跡の建物は全体に桁行が狭いが、梁行を中心にみればA・B・Cの3類がともに確認できる。一般的な農民の集落だろうと推定されている掛川市牛岡遺跡ではC類のみで構成されている。坂尻遺跡・新堀遺跡も同様にC類のみである。

こうしてみると、有力な地頭であった横地氏の一族に関わる屋敷(伊平遺跡)ではA類をもっており、飯田氏の一族の屋敷と考えられる太田切遺跡や藤守遺跡、大畑上屋敷遺跡でも同様である。藤守遺跡は大井川下流域の初倉荘の範囲に含まれており、古代の官道に近いと推定されている位置からも、初倉荘の管理と関わる遺跡と推定できよう。

元富士大宮司館と寺家前遺跡さらに磐田市の玉越

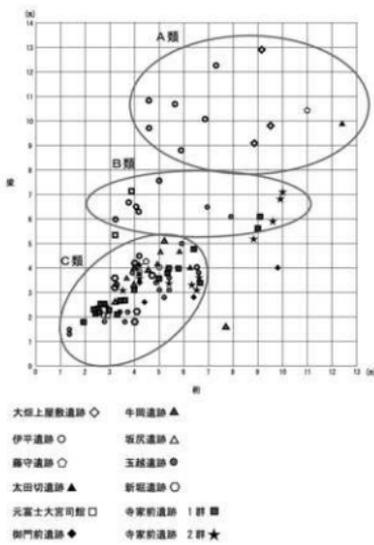


図160 掘立柱建物規模比較図

遺跡の建物がB類である。元富士大宮司館跡が遺跡のどの部分を掘っているのかはよくわからないが、検出されている掘立柱建物は桁行が狭く、屋敷の中心的な建物ではないと思われる。調査範囲が広がれば、さらに大きな建物が検出される可能性はあろう。

以上から、有力な御家人であった横地氏の一族や飯田氏の一族といった有力な武士の屋敷の建物はA類の規模をもち、寺家前遺跡や玉越遺跡は、それに次ぐ規模の屋敷であること、これらに附属する所従の住まい、あるいは一般の集落にはこうした規模の大きな建物はなく、C類の建物のみから構成されることが理解できよう。したがって母屋がB類の規模をもつ寺家前遺跡の屋敷の主は、小規模な領主層だと位置付けることができる。

註

1. この地域では山茶碗の消滅後、瀬戸産の陶磁器が大量に流入する（寺家前遺跡では古瀬戸後期になると急激に増加する）までの間（14世紀代）には多くの遺跡の様子がわからなくなっている。したがって、集落遺跡の検討でも12～13世紀、15～16世紀に中心が来ることになる（松井・溝口 2002）。遺跡の様子が14世紀代に不明確になるのはその通りであるが、やはりこれには「供納形態」の器をどう把握するかにかかっている可能性があろう。木製の器を含めてこの期の土器群の研究がさらに進展するのを待つ必要があろう。
2. ミョウガ原遺跡の性格をどのように考えるかはかなり難しいが、寺家前遺跡とミョウガ原遺跡の在り方を比較してみると、遺構の在り方あるいは出土した遺物の様子ともに、その差は非常に少ない。強いてその差を求めるとすれば、寺家前遺跡の方が母屋と考えられる建物の規模が大きいこと、あるいは青白磁の梅瓶・合子等の「威信財」とされるものをもっている程度で、外見には大きな差は感じられない。これは「上層農民の屋敷と武士（地頭）の屋敷には差がなかった」（斎藤 2006）とされることによるものだろう。
3. ミョウガ原遺跡の報告書の記載から必ずしも読み切れない部分があるが、地形と全体図と地形を手がかりに分析すると、調査区の中央に浅い谷頭が入り削り取られている部分があるが、A群とB群は溝・畑で2重に区画された建物群で、内部に母屋と考えられる比較的大きな建物と外部に小規模な建物群が存在している。D群もそう考えてよいであろう。
4. 寺家前遺跡では上層部分での複乱や削平された部分が深く、中世の遺構の多くは最下面で検出されているので、掘立柱建物も東柱が検出されたものは少ない。したがって、発掘された建物が総柱の建物であるか、側柱の建物なのかといった判断は難しかった。従来の調査例からみて、少なくとも内部の建物は総柱建物であろうと理解している。しかし並あるいは縁をもった建物があること、あるいは少なくとも2群の母屋は四面庇の建物であり、それなりの格式をもった建物であることを考慮すると、寺家前遺跡の2群で見た建物の規模を中心部分の母屋・脇屋を合わせてB類とし、7×4m程度以下の小規模な建物を一括してC類とした。図160でみるようにB類としたものより遙かに規模の大きな建物が検出されている例があり、これをA類とした。

第2節 出土遺物について

1. 寺家前遺跡出土の山茶碗

（1）産地の比率

西から大井川を渡った駿河西部は律令期の須恵器生産を大規模に行っていた助宗古窯を始め灰陶器段階から初期の山茶碗にかけての旗指古窯など多くの窯跡が存在していることが知られている。高田市横岡古窯群もそれらに含まれる、山茶碗生産の中心をなす窯跡群の一つである。

遠江東部から駿河西部にかけては、古代以来陶器生産の拠点であった東海地方の窯場の東端に当たる地域で、活発な陶器生産がおこなわれるとともに、その周辺から出土する陶器の大半が在地で生産されたものであることは早くから注目されてきている。いわば、山茶碗といった在地土器生産の卓越した地

域なのである。

寺家前遺跡でも出土した山茶碗の大半は横岡古窯群の製品であると考えられているが、中には渥美・湖西古窯あるいは尾張・知多古窯などの製品も含まれている。その状況は表6に示した。表を基礎に状況を観察しよう。

出土した山茶碗の大半は東遠江産の山茶碗であり、全体の94.7%を占めている。これに渥美・湖西産の山茶碗5.1%を加えると、全体の99%を占めることになり、尾張・知多産のものはごく少ない。したがって、食膳具はほぼ在地産のものだと言うことになる。これに対して、甕・壺類は全体で17個体分と少ないが、東遠江産のものは4/17で、渥美・湖西産が9/17、知多産が4/17であり、後者を合わせると80%近くを占めることになる。したがって、食膳具は圧倒的に在地産のものであるが、特殊な器形である甕・壺はより西方の産地からもたらされているということになろう。

(2) 碗と小碗・小皿の比率

山茶碗の出土量は先にも触れたようにⅢ-1期が全体の33.8%を占めて最も多く、Ⅰ-2期、Ⅲ-2期がそれぞれ18.6%と8.5%である。したがって、Ⅰ-2期からⅢ期までが量的なピークであり、これが単純に遺跡の盛んな時期を表すとすれば、この時期がそれに当たることになろう。そのうちで最も栄えた時期はⅢ-1期であることが知られる。

碗と小碗・小皿の比率は多少の凹凸はあるが、碗が50%程度を占め、残り50%前後が小碗と小皿である。Ⅱ期では小碗・小皿で57%を占めるが、Ⅲ-1期には小碗・小皿の量が大幅に減って、碗が半数以上を占めるようになってくる(Ⅲ-2期には碗が50%ほどに減少し、小皿が45%前後に回復してくるが、この時期には全体の数が減っているため、ここでは除外しておく)。

小碗と小皿の機能・用途はよくわからない部分があるが、両者共に灯明皿として使われた痕跡が残っているものがあり、そうした用途をもっている。いずれにせよ両者共に器としての機能・用途をもっていたことは確かである。小碗の高台部分が欠落して、小皿に変化すると考えられる部分もあるが、小皿は時期が下ると共に扁平になり、Ⅲ期には器形から、器としての機能をもっていたか否かが疑わしいものまである。こうした段階では小皿の機能の一部が失われたことが、その数の減少傾向として現れるのであろう。

2. かわらけを出土する遺跡

先に検討した建物の規模に加えて、かわらけの出土量(比率)から、遺跡の性格を検討してみよう。鎌倉時代から室町時代にかけて、かわらけを大量に出土する遺跡のあることは広く知られている。こうしたかわらけは一括して多量に廃棄されている例があることから、こうした出土状態は大規模な供応を伴う会合の痕跡を示すものと理解されている。そうしたかわらけの大量出土に表される宴会の風習は、本来は都の貴族風の習慣であったが、地方の武士にとっても主従の絆を固める大切な儀式として、広く受け入れられたと考えられている(註1)。

この地域でも多量にかわらけが出土している遺跡が知られている。幸い各遺跡からどの程度の比率でかわらけが出土しているかの調査がされているので(菊川シンポジウム実行委員会 2005)それを参考に、先の建物群の規模と合わせ考えてみたい。

各遺跡から出土した土器に占めるかわらけの比率をみると、駿府城二の丸下層では全出土量の実に96.93%がかわらけである。この調査地点は石を配した園池と、そこに張り出した釣殿風の建物をもった建物が発見されている。武田氏による駿河府中の攻撃で焼失したと考えられるこの屋敷は、今川氏総

領の屋敷跡ではないが、それに近い、近親の屋敷（（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009）だと推定されている。

横地氏の総領屋敷と推定されている殿ヶ谷遺跡でも96.59%を占めている。（これらをA類とする）。これに近接して、横地域周辺の遺跡群の一角を為す五郎兵衛遺跡では53.04%、才坂A遺跡では45.0%、諏訪下遺跡では51.3%である。これらの遺跡は横地氏の一族あるいは重臣の屋敷と推定されており、本体ほどではないが、やはり、かわらけが、出土陶磁器の半数ほどの比率を占めていることがわかる（B1類）。同じような屋敷と推定されている伊平遺跡では14.42%であり（B2類）、B類とした屋敷にも出土量（比率）に差のあることが知られる。

元富士大宮司館跡・大畑上屋敷遺跡などではやはり80%を占めている。しかし太田切遺跡は13.6%の出土量で、伊平遺跡の場合と良く似ている。太田切遺跡では隣接する地域が飯田氏の館跡とされており、やはり総領館に近接する遺跡だと考えてもよいだろう。こうした館では、宴会を主催する機会が少なかったのかもしれない。

瀬名川遺跡では40.1%、石成遺跡では26.5%である（B2類）。これに対して一般的な農民の集落と考えられている牛岡遺跡ではかわらけは全く出土していない。上反方遺跡では3%弱である（こうした遺跡をC類とする）。大きな建物が検出された藤守遺跡でもかわらけの出土は認められていないが、ここでは調査面積も限定されており、屋敷の中での発掘された地点の問題もあろう。寺家前遺跡からは全体の出土点数の39%に当たるかわらけが出土している（註2）。

こうしてみると、A類とした、地域の拠点となるような、有力な豪族の屋敷からは多量なかわらけが出土しており、その比率は80～90%を超えている。客人を招いて盛大な饗応が行われていたことを示している。B1類とした、A類居館の一族・重臣の屋敷でも50%を超えているが、こうした屋敷の中にはかわらけの出土が少ない遺跡もある。伊平遺跡・太田切遺跡がそうである。屋敷の主の家臣団における位置を表しているのかもしれないが、明らかではない。B2類とした瀬名川遺跡のように有力な領主の遺跡と直接連続していない遺跡はB1類に比較すれば、相対的に自立した領主の屋敷であろうが、ここでも、かなりの量のかわらけを出土している。この類にはB1類に匹敵する量のかわらけを出土している遺跡（瀬名川遺跡）もあるが、石成遺跡で見ると、出土比率が比較的少ない遺跡も含まれている。したがって、遺跡によって、かわらけの出土量（比率）にかなりの差があるということになる。これはB2類とした遺跡の階層にかなりの幅があることを推定させる。館の主の地位あるいは立場を反映しているのであろう。寺家前遺跡のかわらけの出土量も多くはないが、やはりB2類としたもので、独立した地方の豪族屋敷の在り方を示しているのであろう。

かわらけにあわせて、陶磁器の出土量を比較することにしよう。中世後期（戦国時代）を含めて、都市と田舎では消費量に大きな差があることを小野正敏氏が指摘している（小野 1997）。都市では1㎡当たりの陶磁器の出土量は10個体を超すほどだとされている。また、出土する陶磁器の組み合わせにも遺跡の性格によってさほどの違いはないことも述べられている。これは当然流通の問題も絡んでいることで、中世の研究でしばしば指摘されている広範囲の活発な商品流通は都市部でのことであって、田舎では流通の勢いが小さかったことも推定されている。もちろん、その地方・地方による違いは多いはずであるが、この地域ではどうであろうか。先の『静岡県の中世社会』から資料を拾ってみると、特殊な事例を除くと、横地氏の殿ヶ谷遺跡が3.29個/㎡が最も多く、続いて見附端城遺跡でも1.73個/㎡と高く、他は元富士大宮司館跡・伊平遺跡あるいは小川城跡でも0.6個/㎡程度、寺家前遺跡でも0.6/㎡ほどである。したがって、やはり、この地域では領主層の屋敷であっても、陶磁器の出土量はさほど多くはないことが知られる。

表6 中世土器一覧

遺種別集計		
項目	破片数	胴体数
山形陶類	1,835	1,122
山形陶	899	508
小皿	642	483
小瓶	294	131
土師質土器類	1,725	72
小かわらけ	1,460	86
織物	43	5
その他	22	1
青磁類 (知多)	10	13
茶碗類	4	6
鉢類	6	7
黒瓦陶器類	4	4
蓋	1	4
傘類	3	
東遠江系	11	0
鉢	11	
茶碗	4	
瀬戸・美濃系	494	
天目茶碗	58	
陶類	53	
皿類	65	
甗類	4	
御飯類	5	
摺鉢	235	
傘・飯類	27	
仏具類	2	
その他	4	
不明	41	
質量集計	249	
青磁	160	
皿類	9	
その他	15	
白磁	22	
陶類	25	
皿類	22	
茶碗	10	
その他	6	
青白磁	1	
茶碗	1	
その他	1	
志保系	189	
天目茶碗	5	
陶類	7	
皿類	20	
御飯	3	
甗類	1	
摺鉢	48	
傘・飯類	7	
仏具類	7	
その他	6	
不明	6	
初山系	17	
天目茶碗	11	
皿類	4	
摺鉢	1	
その他	1	
合計	4,443	
調査面積 (㎡)	6,999	
㎡あたり点数	0.63	

質量集計分種一覧

品類名	分類	破片数		備考		
		破片数	胴体数			
青磁	龍泉窯系	A1類	1			
		A2類	24			
		A4類	6			
		B1類	37			
		B2類	15			
		B3類	4			
		B4類	11			
		C1類	11			
		D1類	7			
		D2類	2			
		E類	6			
		F類	18			
		皿類	龍泉窯系	芦原皿	2	
				桜花皿	3	
				皿	5	
		同安窯系				
白磁	陶類	B類	3			
		DV類	7			
		V類	2			
		樽類	2			
		IX類	2	口瓦類		
		皿類	陶類	IX類	2	口瓦類
				IX類	7	
				B群	8	
				C1群	2	
		青白磁	傘類	陶類	1	
合計			187			

山形陶類分種一覧

	東遠江系															
	1-1期		1-2期		目黒		目-1期		目-2期		目-3期		不明	合計		
	破片	胴体	破片	胴体	破片	胴体	破片	胴体	破片	胴体	破片	胴体				
山形陶	22	49	141	110	13	45	308	236	71	69		3	341	896	503	
小瓶	11	25	202	103	82	2	1	13					6	294	131	
小皿					17	5	9	117	372	29	84		1	491	642	483
合計	33	74	343	230	80	56	425	609	113	144	0	4	838	1,832	1,117	
	瀬美・湖西系															
	1-2期		目黒		目-1期		目-2期		不明		合計					
	破片	胴体	破片	胴体	破片	胴体	破片	胴体	破片	胴体	破片	胴体				
山形陶			4		14		6	99	8	99		32				
小瓶		4									0	4				
小皿										4	0	4				
合計	0	4	0	4	0	14	0	6	99	12	99	40				
	尾巻系 (知多)															
	1b~2型式		4型式		5型式		時期不明		合計							
	破片	胴体	破片	胴体	破片	胴体	破片	胴体	破片	胴体						
山形陶			4		1	3	3	5								
小瓶		2								2						

山形陶類 合計			
	破片数	胴体	割合
東遠江系	1,832	1,117	94.7%
瀬美・湖西系	99	40	5.1%
尾巻系	3	7	0.2%
合計	1,934	1,164	

※1 山形陶を伴う時期を上層2期、それ以降 (戦国時代~江戸時代) を上層1期と区分したが、本表では中世後半 (戦国時代末) までの土器を扱った。

※2 山形陶以外の遺物の分類及び年代層は菊川町教育委員会「積地城跡発掘調査報告資料編」2009による。

※3 山形陶類分種一覧表中の時期区分は瀬美・湖西及び東遠江製品は松井氏編年 (昭和1992)、尾巻 (知多) 製品は中野氏編年 (中野1994) による。また、1~1期のように複数時期でしか識別できなかったものは表記した。

※4 かわらけは大半が小破片であるため、中世と近世のものとを区別することができなかった。したがって掲載した数値は出土したかわらけ全てを対象としている。

3. 輸入陶磁および古瀬戸前期の器種組成について

寺家前遺跡から出土した陶・磁器類で圧倒的に多いのは山茶碗であるが、ここではそれに伴った白磁・青磁あるいは古瀬戸陶器の器種組成について簡単に整理をしてみよう。

青磁は圧倒的に碗と皿であり、なかでも龍泉窯系の青磁はすべてが碗であった。したがって青磁と山茶碗はいわば食膳具だということになる。これに対して白磁は碗・皿に加えて壺が9点含まれている。出土総数が少ないので比率はあまり意味をもたないが、壺が白磁全体の出土量の1/4近くを占めている。したがって、白磁は青磁や山茶碗とは異なった用途・機能をもった部分があることが推定できる。

また、古瀬戸の前期段階では寺家前遺跡から10点の壺類が出土しており、古瀬戸前期段階全体の実に75%を占めている。したがって、白磁・古瀬戸には壺が多く含まれていることになる。しばしば指摘されているように、これらの壺は特殊な宴会の場で、あるいは、おそらく部屋の飾り（威信具）として使われたものであったと考えられる。したがって、白磁あるいは古瀬戸の壺と青磁の碗とは使われ方が大きく異なっていたものであろう。部屋の飾り物としては、おそらく12世紀段階には白磁の壺が主役であり、13世紀段階には青磁が、さらにこれに新たに古瀬戸の壺が加わったと考えてもよいのであろう。

白磁の壺を出した遺跡は遠江・駿河地域で21遺跡を数える（註3）が（菊川シンポジウム実行委員会 2005）、このうち複数の白磁壺を出土しているのは、磐田市見付端城・野際遺跡、菊川市殿ヶ谷遺跡、島田市山王前遺跡・落合遺跡・石成遺跡、清水市太田切遺跡、元富士大宮司館跡、裾野市大畑上屋敷遺跡、葛山居館跡の8箇所の遺跡である。この他に、伊豆では三島大社境内あるいは御所之内遺跡群などに集中している。

これらの遺跡は遠江国の守護所跡に比定されている見付端城、あるいは石成遺跡やそれに近接する山王前遺跡・落合遺跡など大津の御厨跡の一部に、さらに横地氏一族の居館に比定されている横地城関連遺跡、同じく富士浅間宮の大宮司家の居館跡などいずれも最上位の在地領主層の居館あるいはそれに関わる遺跡だと考えられている。

また、次に挙げる古瀬戸前期の壺を出土している遺跡とも重複しているものが多い（註4）。

古瀬戸前期の壺を出土した遺跡は遠江・駿河では33遺跡を数えるが、ある程度の量（複数個）をまとめて出土しているのは10遺跡である。やはり見付端城、野際遺跡、横地氏関連の遺跡群、石成遺跡など大津御厨に関わる遺跡群、さらには小川・道場田遺跡、元富士浅間大宮司館跡などであり、伊豆ではこれに御所之内遺跡群・三島大社などが挙げられる。藤澤氏が指摘しているように古瀬戸前期段階の遺物は生産地に隣接する東海地方でも一般の集落跡から出土するものは少なく（藤澤 2002）、多くは中世墓などの宗教関係の遺跡あるいは鎌倉の居館跡から出土するものが多いらしい。やはりこれらの壺類は武士を含めた在地の領主層の屋敷を飾った装飾品（威信財）であったと考えてよいのであろう。輸入品を含めて、供膳用の陶磁器では量とはともかく、遺跡の性格によって大きく変わらないことが指摘されている（青木 2004）が、やはり壺などの威信財は領主層の屋敷にみられるもので、そうした白磁の壺9点、古瀬戸壺6点を出土した寺家前遺跡の性格を在地領主の屋敷であったと考えてよいだろう（註5）。

古瀬戸前期・中期段階は出土遺跡も多くはなく、その出土量も少ないが、器種構成にも大きな偏りがあり、四耳壺・瓶子・梅瓶など壺類が圧倒的な存在である。これに対して古瀬戸後期には器種構成も豊かになり、天目茶碗・平碗・皿などが急激に増加する。これに対して壺はむしろ減少する傾向を示している。中でも古瀬戸後期のⅡ期、Ⅲ期には天目茶碗・碗・小皿・盤など各器種が現れ、Ⅳ期には延べ数量が急激に増加する傾向がみえている。こうした瀬戸製品の出土状況は藤澤氏が述べた（藤澤 2005）遠江あるいは駿河西部での在り方と基本的には一致しているようである。

註

1. かわらけには在地の土器生産の伝統を引くロクロかわらけと、都風を表現する手捏ねのかわらけとがあることはよく知られているが、出土するかわらけの大半は在地で製作されたロクロかわらけで、手捏ねのかわらけは横地域下遺跡に代表される。地域の最上位に位置する遺跡での出土が中心である。寺家前遺跡では手捏ねのかわらけの出土は認められなかった。
2. 寺家前遺跡出土のかわらけには、中世前期のものと同近世のものとの差が充分把握されていない部分がある。したがって、ここで示した37%（かわらけの占める割合）は精査が進めば多少減ることが予測される。
3. 『静岡県の中世社会』資料編で示された一覧表を基にし、白磁器が出土している遺跡のうち14～15世紀が中心となる原川遺跡あるいは駿府城跡・小川・道場田遺跡などの遺跡をここでは除外し、12～13世紀代の輸入陶磁を中心に出土している遺跡を主として取り上げた。
4. 白磁を出土する遺跡と、古瀬戸前期の甕を出土する遺跡でも、規模の大きな遺跡では調査地点によっては両者が重複しないことがあるが、これらにはたとえば横地域下遺跡群あるいは藍山の御所之内遺跡群さらには大津御野に關係するとみられている大津谷の各遺跡などがそうである。これらでは個々の遺跡での存続時期あるいは地点の変化など様々な要素があり、基本的には両者は重複していると考えてよい。
5. 寺家前遺跡からは白磁、青磁、古瀬戸等の他に青白磁の合子が出土している（図版81）。出土例の多くないもので、やはり「威信財」と考えられるものであろう。

第3節 考察

今回の発掘調査は、第二東名高速道路建設に伴う発掘調査として始まり、当該地が上下本線と上り線パーキングエリア（藤枝P.A.）の予定地であったことから、調査対象地が66,787㎡（註1）という広大な面積について考古学的な記録保存の調査を必要とすることになったのである。そのため、遺構・遺物など、ともに当初の予想を上回る成果が挙げられたといえる。

岡部・藤枝地区では、これまでに第二東名高速道路建設を起因とする12遺跡の調査を実施してきた（註2）。岡部地区では、平成11年度から入野東古墳群・入野高岸古窯（No.76～78地点）の確認調査を開始した。藤枝地区では、平成9年より助宗古窯群（No.86地点）と寺島大谷遺跡・寺島大谷古墳（No.87地点）に始まり、当該地から葉梨川を挟んで東側には中ノ合イセ山遺跡（No.79地点）、中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡（No.80地点）、寺家前遺跡（No.81地点）の西側に隣接する衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古窯群（No.82・83地点）や、その西側の丘陵上では花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳群（No.84地点）の発掘調査が行われた。平成18年度までにすべての現地での発掘調査が終わり、その後、上記のうち4冊の報告書が刊行された。本書は藤枝地区では4冊目の報告書にあたる。今後、平成25年度までの間に、順次、発掘調査報告書が刊行される予定であり、成果の全容が明らかになるであろう。

本編は寺家前遺跡の調査成果のうち、奈良・平安時代と中世から近世までの遺構・遺物についてまとめた。なかでも水田域で見つかった条里制地割をもつ水田は、葉梨川中流域では初見であった。2010年に刊行された『藤枝市史』では志太平野の古代東海道と条里地割推定図が示されたが（矢田2010）、新たに葉梨の谷に条里制地割が加わることとなった（図161）。奈良時代以降、11世紀後半に築かれた上層2期の2群・3群屋敷地はこの区画の影響を強く受けており、敷地や建物の方向が一致する（第2章第2節）。この区画は現代まで葉梨川流域周辺に表層条里として残っている。

寺家前遺跡では集落域において奈良～平安時代の遺構はほとんど検出されなかった。しかし周辺の調査では当該期の遺構が見つかっており、その詳細は『衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古窯群』（2010）に掲載している。寺家前遺跡の条里水田と衣原遺跡の位置関係は、図162に示した通りである。衣原古墳

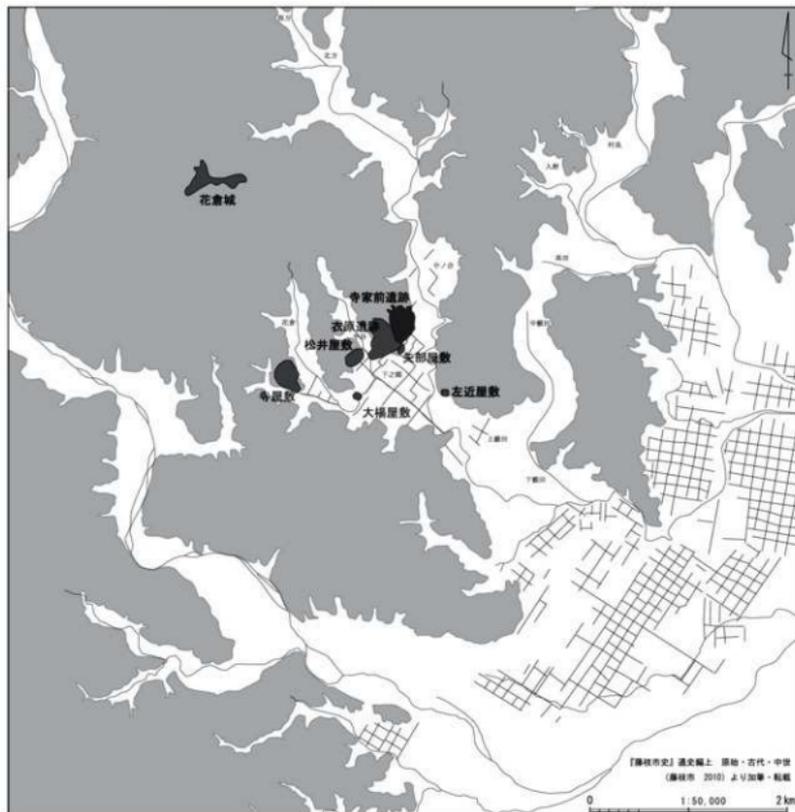


図 161 粟梨地区周辺の条里区画

群が所在する丘陵を挟んで南西側に張り出した低丘陵には、奈良時代の年代ととらえている横口付炭窯が2基発見された（衣原2号窯・衣原3号窯）。さらに半谷川に面する斜面地には複数軒切り合った堅穴住居が見つかった。丘陵平坦部には柱穴も数多く見つかったが抽出はできなかった。おそらくこの時期の掘立柱建物も含まれているであろう。奈良～平安時代の当地の様相は、いまひとつ明確になっていないが、もう少し広域な視点をもって在り方を検討する必要がある。

もうひとつの成果として、上層2期とした中世の屋敷地群が発見されたことは特筆すべきことである。調査前から当地の周辺には「矢部屋敷」や「松井屋敷」、「大楊屋敷」、花倉川流域には「寺屋敷」など、今川氏に関連する中世の城館遺跡の包蔵地が推定されていた。半谷川を挟んだ西側には長慶寺（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 115P）があり、その背後にある烏帽子形山には花倉城が存在する（図 161）。当初から、その関連遺構が見つかる可能性が指摘されていたところであるが、実際には、それよりも遡る時期の屋敷地群や土器等が発見されたのである。粟梨地区に残っている中世文書は、今川

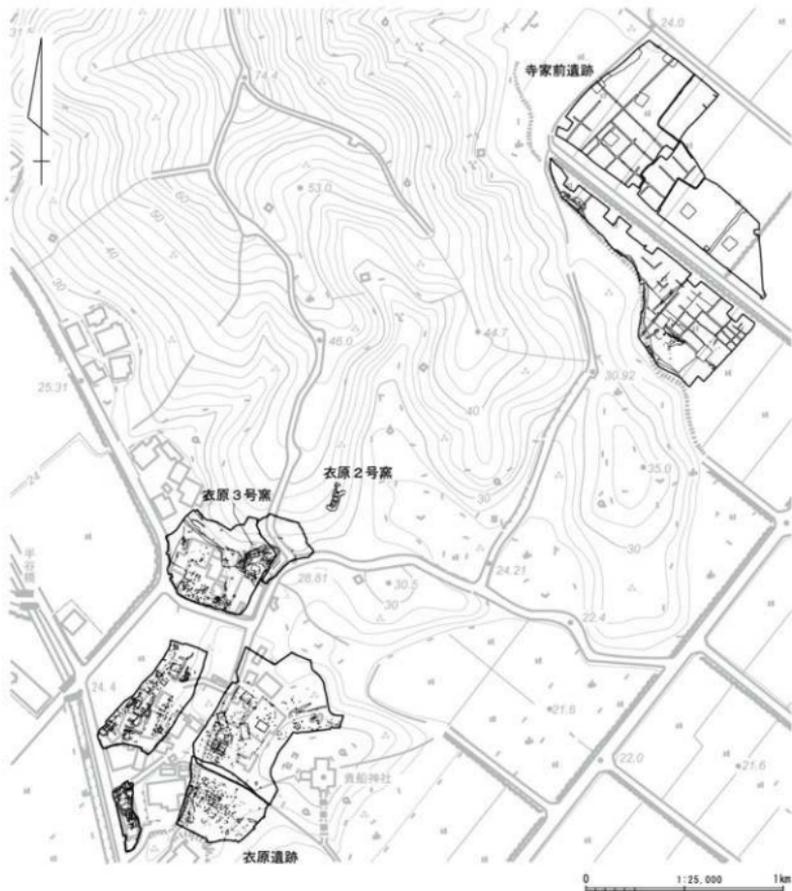


図 162 奈良～平安時代遺構図（寺家前遺跡・衣原遺跡）

期以降のもので、それよりも古い文書は存在しない(註3)。文字資料として残っていない屋敷地の主は、一体誰であったのか。その謎を解明する資料は、残念ながら見つかっておらず、発掘調査のなかでも人物の特定に至る資料は発見されなかった。しかし出土品のなかには「花押」の墨書がある山茶碗が複数あった(巻頭図版5)。「花押」は屋敷地の主を表すものであろう。

さらに興味深い事実としてあるのは、14世紀半ばに今川氏が葉梨荘を領地として与えられ当地に入ってくる以前に、すでに屋敷地や水田などの開発がなされており、今川氏はこの開発された地に入って、さらに再開発をしながら領地を広げて行ったということである(註4)。前述したように、今川期よりも古い文書は存在せず、それ以前の葉梨の谷の歴史を示す文字資料がない。そのようななかで、今回の

屋敷地群や様々な出土品の発見は、葉梨の谷の歴史を紐解く手掛かりのひとつとなるであろう。

いずれにしても、今川期以前に葉梨荘に開発領主として存在した人物がいたこと、その人物は「威信具」を持ち、「花押」を書くことができたこと、区画を持つ屋敷地を構えていたことなどから、それ相応の人物であったことがうかがえる。

弥生時代後期後半に初めて当地に開発の手が入り、集落と水田が営まれてきた寺家前遺跡は、その後、集落の場所を転々と変えながら葉梨の谷を動き、古墳時代後期にはまた集落として利用され、奈良時代から平安時代を経て、11世紀後半にまた主要な居住地として定着したことが解った。今後、本遺跡の「弥生時代、古墳時代編」をまとめて行く中で、葉梨の谷に展開していた集落の変遷についても考えて行く必要がある。

ひとまず、寺家前遺跡の「古代、中～近世編」としてまとめたが、さらに資料検討を行っていくなかで、新たに解った事実や修正が必要な場合は、今後刊行する報告書で訂正を加えて行くこととする。寺家前遺跡の報告書の刊行は、これ以降、遺構編として「弥生時代、古墳時代編」、遺物編として2冊を予定している。

最後にあたり、本編の条里制地割や中世～近世屋敷地、さらには出土須恵器や山茶碗に至るまでの所見は、平野吾郎氏の知見・指導に基づくものであることを申し添えたい。寺家前遺跡の調査成果がここまで詳細に考察できるに及んだことは、平野氏の豊富な知識と考察力によることに外ならない。本書執筆分は、以下の通りである。第1章1節1・・・及川 司、第1章1節2～3節2・・・松川理治、第2章2節・3節1(1)～(2)(才)・第3章1節～2節2(2)・・・平野吾郎、第1章4～5節・第2章1節・3節1・3節(2)(カ)～(ケ)・第3章3節(第4章を除くその他)・・・中川律子

末尾ながら本編刊行に至るまでの間、資料整理や調査指導に関わって来られた多くの諸氏に感謝したい。

註

1. 寺家前遺跡の調査対象面積は、確認調査実施前に「66,787 m²」としている。その後、実際に着手した箇所が年度毎に異なるため、調査後の調査対象面積は若干変更となっている。
2. 岡部・藤枝地区の確認調査の各対象地点や本調査の経過と概要については、岡部地区は『入野東古墳群・入野高岸古墳』(2007)、藤枝地区については『衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古案群』(第1分冊)(2010)の第1章総論に詳細がある。
3. 藤枝市史編さん委員会の湯之上隆教授(静岡大学)や藤枝市郷土博物館の榎原靖弘氏のご教示による。
4. 静岡大学湯之上隆教授による調査指導の際にご教示をいただいた。

第4章 理化学分析

1. 寺家前遺跡におけるトイレ遺構分析

株式会社 古環境研究所

(1) はじめに

トイレ遺構等の糞便の堆積物は、寄生虫卵密度、花粉群集組成、種実群集組成において特異性を示すことから、他の堆積物とは区別される。したがって、これらの分析を総合的に行うことで、トイレ遺構を識別することが可能である。また、その遺体群集から今まで以上に食べた食物を直接的に探ることもできる。

ここでは、寺家前遺跡で検出された土坑の堆積物について、寄生虫卵、花粉分析および種実同定をあわせて行い、トイレ跡の可能性について検討する。

(2) 試料

分析試料は、A-1 区の土坑 SE532 より採取された堆積物 7 点で、上位から No.7、No.8、No.9、No.10、No.11、No.12、No.13 下の各層準より採取された。

(3) 寄生虫卵分析

人、動物などに寄生する寄生虫の卵殻は堆積物中に残存しやすい。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度が高くなる。また、トイレ遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く、他の堆積物と識別することができトイレ遺構を確認することも可能である。さらに、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることもできる。なお、この分野の研究歴はまだ浅く分析例は少ない。

ア. 方法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

- 1) サンプルを採量する。
- 2) 脱イオン水を加え攪拌する。
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
- 4) 25%フッ化水素酸を加え 30 分静置。(2・3 度混和)
- 5) 水洗後サンプルを二分する。
- 6) 二分したサンプルの一方にアセトリス処理を施す。
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
- 8) 検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2 分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるといった操作を 3 回繰り返して行った。

イ. 結果

出現した寄生虫卵は、2 分類群である。これらの学名と和名および粒数を表 7 に示し、試料 1 cm³ 中の寄生虫卵数をダイアグラムにし図 164 に示す。なお、出現した分類群は写真に示した。

下位より、No.13 下からは回虫卵が検出された。No.12 では寄生虫卵および明らかな消化残査は検出されなかった。No.11、No.10、No.9、No.8 および No.7 からは回虫卵と鞭虫卵が少量検出された。



図 163 SE532 位置図

表7 寄生虫卵分析結果

分類群		No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13下
学名	和名							
<i>Helminth eggs</i>	寄生虫卵							
<i>Ascaris</i>	回虫卵	3	1		1	6		1
<i>Trichuris</i>	鞭虫卵	1	3	1	2	5		
Total	計	4	4	1	3	11	0	1
試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度		3.6	3.2	0.8	2.1	8.8	0.0	1.1
		×10	×10	×10	×10	×10	×10	×10
明らかな消化残渣		(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
試料1cm ³ 中の花粉密度		2.4	3.9	2.6	2.7	2.5	3.0	2.7
		×10 ⁴						

(4) 花粉分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。

ア. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で糠などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離(1500rpm、2分間)の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

イ. 結果

出現した分類群は、樹木花粉35、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉27、シダ植物胞子2形態の計67である。これらの学名と和名および粒数を表8に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図165に示す。なお、主要な分類群は写真に示した。

以下に出現した分類群を記す。

[樹木花粉]

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、マツ属単管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-

表B 花粉分析結果

学名	分類群	和名	分類群										
			No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13 T				
Arboreal pollen		樹木花粉											
<i>Podocarpus</i>		マキ属					1	1					
<i>Abies</i>		モミ属		1			1	3	1	1			
<i>Tsuga</i>		ツガ属	5	2	5	3	6	4	1				
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属俣館管束亜属	9	12	5	7	12	9	3				
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属俣館管束亜属		1									
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	16	9	14	15	14	17	23				
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ	3										
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチキ科-イヌギヤ科-ヒノキ科	3		1	3	1						
<i>Salix</i>		ヤナギ属	1						1				
<i>Juglans</i>		クルミ属											1
<i>Platanus/Hedera</i>		ワカヅクニ	3		1				1				
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	1					3	1				
<i>Betula</i>		カバノキ属	1	1	1	1	1	1	1	7			
<i>Corylus</i>		ハシバミ属				1	1			2	1		
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシロ属-アサダ	6	5	2				1	1	1		
<i>Castanea cremata</i>		タリ	38	41	33	24	39	8	11				
<i>Castanopsis</i>		シイ属	20	16	26	19	24	19	11				
<i>Fagus</i>		ブナ属	2	1					2	2	2		
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	3	8	11	7	13	5	8				
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	32	43	38	28	32	39	37				
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-クヤキ	1	2					2	1			
<i>Celtis-Platananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ	2	2									1
<i>Sambucus</i>		サンショウ属			1								
<i>Ilex</i>		モチノキ属		2	2	2	1						
Celastraceae		ニシキギ科	2					1	3	1			
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ					1						
<i>Sapindus</i>		ムクロジ属	3										
<i>Vitis</i>		ブドウ属	11			8	5			2	5		
<i>Elaeagnus</i>		グミ属	2					1	1				
<i>Diospyros</i>		カキ属		1				3	1				
Oleaceae		モクセイ科	1	1	1				2	1			
<i>Clethra barbinervis</i>		リョウブ		1	4								
<i>Ericaceae</i>		ツツジ科	1						1				
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属	2	7	10	40	13	147	16				
<i>Ulmus</i>		ニカイガズラ属	15	5	1	1	2	8	1				
Arboreal / Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉											
Moraceae-Urticaceae		タワウソ科-イラクサ科	3		3	4	5	1	1				
Rosaceae		バラ科	69	49	10	3	4	3	1				
Nonarboreal pollen		草本花粉	2	2	2	1	1	1	1				
<i>Alisma</i>		サジメノコガク属								1			
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属	1	1	2	1	1					2	
Gramineae		イネ科	74	128	104	94	128	103	123				
<i>Oryza type</i>		イネ属型	10	9	9	10	17	7	13				
Cyperaceae		カヤブクダシ科	9	8	9	11	9	8	20				
<i>Ancistrum bristak</i>		イボクキ			1	1							2
<i>Monochoria</i>		ミズアオイ属						1	1	2			
<i>Polygonum</i>		タデ属			2								
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節	1	1	3	2	1	1	6				
<i>Rumex</i>		キンギン属	1	1	1	2	1	1	1				
<i>Polygonum</i>		ツバ属								1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒコ科	5	2	2	2	2	1	2				
Caryophyllaceae		ナデシコ科	2	2	1	1	1	1	1				
<i>Ranunculus</i>		キンボクダシ属	2				1						
Cruciferae		アブラナ科	5	1			2		6				
<i>Dumburra</i>		ノアズキ属		1					1				
<i>Ficus</i>		イチジク											
Hydrocotylidaceae		チドメダケササ科	3	3	2	5	6		2				
Apidoseae		セリ科	3	3	1	2	1	3	4				
Labiatae		シソ科					1						
Solanaceae		ナス科											
<i>Plumbago</i>		オモハロ属		1				16	3	1			
Rubiaceae		アザミ科	3	12	1								
Violariaceae		オミナシ科	1					1	1				
Lactucoideae		タンポポ科	2	6	6	2	13	1	2				
Asteroidae		キク科	3	2	4	5	3	1	4				
<i>Artemisia</i>		ヨモギ科	36	41	47	39	41	20	24				
Fern spore		シダ植物胞子											
Monoilate type spore		単葉植物胞子	3	7	8	19	7	5	19				
Trilate type spore		三葉植物胞子	42	39	72	60	41	97	117				
Arboreal pollen		樹木花粉	176	187	172	159	177	273	196				
Arboreal / Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	74	51	15	7	10	5	2				
Nonarboreal pollen		草本花粉	152	230	197	198	266	173	257				
Total pollen		合計花粉	472	438	394	364	433	451	366				
Total pollen		合計花粉	2.4	3.9	5.6	2.3	2.5	3.9	2.7				
		試料中の花粉密度	$\times 10^4$										
Unknown pollen		未同定花粉	20	16	17	12	8	9	13				
Fern spore		シダ植物胞子	45	46	80	79	48	102	136				

ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、サンショウ属、モチノキ属、ニシキギ科、トチノキ、ムクロジ属、ブドウ属、グミ属、カキ属、モクセイ科、リョウブ、ツツジ科、ニワトコ属-ガマズミ属、スイカズラ属
〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、バラ科、マメ科

[草本花粉]

サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、アブラナ科、ノアズキ属、ササガ属、ノブドウ、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、ナス科、オオバコ属、アカネ科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

単条溝胞子、三条溝胞子

花粉構成と花粉組成の変化から、下位より3つの花粉分帯を設定した。

1) I帯 (No.13下)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉のイネ科が優占し、イネ属型、ソバ属、ヨモギ属、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ属、アブラナ科、セリ亜科、キク亜科が伴われる。樹木花粉はスギ、コナラ属アカガシ亜属が多く、次いでカバノキ属、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、ニワトコ属—ガマズミ属が出現する。

2) II帯 (No.12, No.11, No.10, No.9)

No.12では草本花粉に対し樹木花粉の占める割合が高いが、No.11、No.10およびNo.9は逆に草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ科が多く、イネ属型、ソバ属、ヨモギ属が伴われる。樹木花粉はニワトコ属—ガマズミ属が多い。他にクリ、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、スギ、マツ属複雑管束亜属が出現する。

3) III帯 (No.8, No.7)

No.8では草本花粉の占める割合が高いが、No.7は樹木花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ科が優占し、イネ属型、ソバ属、ヨモギ属が伴われる。樹木花粉はクリ、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、スギ、マツ属複雑管束亜属が出現する。樹木・草本花粉を含むバラ科が高率に出現している。

(5) 種実同定

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

A. 方法

試料(堆積物)に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

- 1) 試料 20 cm³に水を加え放置し、泥化を行う。
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25 mmの篩で水洗選別を行う。
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

イ. 結果

樹木4、草本19の計23が同定された。学名、和名および粒数を表9に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

[樹木]

キイチゴ属 *Rubus* 核 バラ科

表9 種実同定結果

学名	分類群		部位	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	下
	和名										
Arbor		樹木									
<i>Rubus</i>	*	キイチゴ属	核								3
Rosaceae		バラ科	核								1
<i>Vitis</i>	*	ブドウ属	種子	2							1
<i>Eurya</i> Thunb.		ヒサカキ	種子	2							1
Herb		草本									
<i>Alisma canaliculatum</i> A. Br. et Bouche		ヘラオモダカ	果実		1						
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属	果実		4						
<i>Oryza sativa</i> L.	**	イネ	穎(破片)			1					
Gramineae		イネ科	穎	2							2
<i>Scirpus</i>		ホタルイ属	果実	1							
<i>Cyperus</i>		カヤツリグサ属	果実							1	
Cyperaceae		カヤツリグサ科	果実							1	1
<i>Aneilema keiskei</i> Husk.		イボクサ	種子								1
<i>Monochoria vaginalis</i> Presl var. <i>plantaginea</i> Solms Laub.		コナギ	種子							2	
Liliaceae		ユリ科	種子	1							
<i>Polygonum prfoliatum</i> L.		イシミカフ	種子		2	4	2		1		3
<i>Polygonum</i>		タデ属	果実						1		1
<i>Rumex</i>		キンギン属	果実						1		
Amaranthus		ヒユ属	種子	2							
<i>Mollugo pentaphylla</i> L.		ザクロソウ	種子							1	
Caryophyllaceae		ナデシロ科	種子						2		1
<i>Oxalis</i>		カタバミ属	種子						3		1
<i>Viola</i>		スミレ属	種子						1		
<i>Melothria japonica</i> Maxim.		スズメウリ	種子	6	1	1					
Total		合計		16	8	8	12	6	5	11	
Unknown		不明種実		2	0	2	0	0	0	0	

**栽培植物

*有用(食用)植物

(200x1/40, 25mm鏡)

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。

バラ科 Rosaceae 核

黄褐色で腎臓形を呈す。表面はやや粗い。

ブドウ属 *Vitis* 種子 ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端が尖る。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

ヒサカキ *Eurya thunb.* 種子 ツバキ科

種子は心臓形を呈する。背面は長楕円状・狭3角形状など様々な形がある。どの形もへその方に薄い。

へそを中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる。

[草本]

ヘラオモダカ *Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche 果実 オモダカ科

黄褐色で倒卵形を呈す。背部には縦方向に1本の深い溝がある。

オモダカ属 *Sagittaria* 果実 オモダカ科

淡褐色～黄褐色で歪んだ倒卵形を呈す。周囲は翼状である。

イネ *Oryza sativa* L. 穎 イネ科

穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものは無かった。

イネ科 Gramineae 穎

灰褐色～茶褐色で紡錘形を呈す。腹面はやや平ら。

ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起がある。

カヤツリグサ属 *Cyperus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で狭倒卵形を呈す。表面はやや粗い。断面は三角形である。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

イボクサ *Aneilema Keisak* Hassk. 種子 ツユクサ科

黒褐色で楕円形を呈す。腹部に一文字状のへそがあり、側面に窪んだ発芽孔がある。

コナギ *Monochoria vaginalis* Presl var. *plantaginea* Solms-Laub. 種子 ミズアオイ科

淡褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に8~10本程度の隆起があり、その間には横方向に微細な隆線がある。種皮は薄く透き通る。

ユリ科 *Liliaceae* 種子

有翼種子で広卵倒形や倒卵状三角形を呈し、扁平で種皮は粗面である。

イシミカワ *Polygonum perfoliatum* L. 果実 タデ科

黒色で、やや光沢がある。円形を呈し、一端にへそ部がある。断面は円形に近い三角形である。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

黒褐色で先端が尖る卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

ギシギシ属 *Rumex* 果実 タデ科

茶褐色で頂端が尖る卵形を呈す。断面は三角形、表面には光沢がある。翼状の花被の残るものもある。

ヒユ属 *Amaranthus* 種子 ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込みへそがある。断面は両凸レンズ形である。

ザクロソウ *Mollugo pentaphylla* L. 種子 ザクロソウ科

黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一箇所が切れ込み白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある。

ナデシコ科 *Caryophyllaceae* 種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科

茶褐色で楕円形を呈し、上端が尖る。両面には横方向に6~8本の隆起が走る。

スマレ属 *Viola* 果実 スマレ科

下端が尖る倒卵形を呈す。基部の側面にへそがあり、そこから上端まで筋が走る。

スズメウリ *Melothria japonica* Maxim. 種子 ウリ科

黄褐色で卵形を呈す。表面はやや粗い。

各試料より検出された種実群集の特徴を以下に記す。

1) No.7

樹木のブドウ属2、バラ科1、草本のイネ科2、ホタルイ属1、ユリ科1、ヒユ属2、スズメウリ6が検出された。

2) No.8

草本のヘラオモダカ1、オモダカ属4、イシミカワ2、スズメウリ1が検出された。

3) No.9

草本のイネ類片、イシミカワ4、タデ属1、スマレ属1、スズメウリ1が検出された。

4) No.10

草本のカヤツリグサ科1、コナギ2、イシミカワ2、タデ属1、ザクロソウ1、ナデシコ科2、カタバミ3が検出された。

5) No.11

草本のイネ科2、カヤツリグサ属1、ギシギシ属1、ナデシコ科1が検出された。

6) No.12

樹木のバラ科1、ブドウ属1、ヒサカキ1、草本のイシミカワ、カタバミ属1が検出された。

7) №13下

樹木のキイチゴ属、草本のカヤツリグサ科1、イボクサ1、イシミカワ3、タデ属1、ナデシコ科1、カタバミ属1が検出された。

(6) 考察

ア. トイレ遺構の可能性について

№12からは寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかったが、他の試料からは回虫卵ないし鞭虫卵が低密度で検出された。花粉密度は全体に高く、栽培植物を含むイネ科を主に人里植物ないし耕地雑草の性格を持つものが多く検出された。種実の検出密度は低く、食用となるものも少ない。花粉よりも保存性の低い寄生虫卵や種実は分解された可能性があるものの、花粉群集ならびに種実群集は、いづれも人里植物ないし耕地雑草や栽培植物が主体である。以上のことから、分析の対象となった各試料に糞の堆積物が含まれている可能性は低いと考えられる。したがって、本遺構がトイレ遺構である蓋然性は低いと判断される。なお、寄生虫卵が低密度で検出されることから、調査地は居住域の汚染の及ぶ範囲であったと考えられる。

イ. 周辺の植生と環境

花粉分析の結果をもとに、その分帯に沿って植生と環境の変遷を推定する。

1) I帯 (№13下)

この時期、SE532 近辺は、イネ科、ヨモギ属などの人里植物ないし耕地雑草が優勢な環境であったと考えられる。とくに、イネ属型、ソバ属が検出されることから、水田や畑が分布していたと推定される。また、オモダカ属やミズアオイ属は抽水植物であるため、土坑内は比較的湿潤な環境であり、滞水していた可能性が高い。なお周辺地域には、スギ、コナラ属アカガシ亜属など、スギ林と照葉樹林が分布していたと推定される。

2) II帯 (№12、№11、№10、№9)

この時期のSE532 近辺は、下帯と同様にイネ科、ヨモギ属などの人里植物ないし耕地雑草が多く生育する環境であったと考えられる。ここでもイネ属型やソバ属が検出されることから、水田や畑の分布が推定される。また、オモダカ属やミズアオイ属が出現することから、土坑内はこの時期も比較的湿潤な状態であり、滞水していた可能性が高い。周辺地域の森林は、マツ属複雑管束亜属、スギ、クリ、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、ニワトコ属—ガマズミ属などが分布しており、二次林要素が増加したと推定される。

3) III帯 (№8、№7)

SE532 近辺は、イネ科、ヨモギ属、バラ科などの人里植物ないし耕地雑草が優勢な環境であり、イネ属型、ソバ属の出現から、水田や畑の分布が推定される。オモダカ属やミズアオイ属の出現より、土坑内は相変わらず比較的湿潤な環境であり、滞水していた可能性が高い。周辺地域には、マツ属複雑管束亜属、スギ、クリ、シイ属、コナラ属アカガシ亜属などの森林が分布し、二次林要素も多かったと推定される。

(7) まとめ

寺家前遺跡において検出された土坑 SE532 について、寄生虫卵分析、花粉分析および種実同定をあわせて行いトイレ遺構の可能性を検討した。その結果、寄生虫卵が低密度で検出されたが、花粉群集や種実群集は人里植物ないし耕地雑草や栽培植物が主体であることから、本遺構がトイレ遺構である蓋然性は低いと判断された。なお、花粉分析の結果から、近辺には水田と畑が分布し、下部堆積層の時期は照

葉樹林が分布しており、上部堆積層の時期にはクリやニワトコ属-ガズミ属などの二次林要素が増加したことが認められた。

参考文献

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Journal of Archaeological Science*, 19, p. 231-245.

金原正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本』第10巻 古代資料研究の方法 角川書店 p. 248-262.

金原正明 1999 「寄生虫」『考古学と動物学』考古学と自然科学2 同成社 p. 151-158.

金原正明・金原正子 1992 「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構-藤原京7条1坊-』奈良国立文化財研究所 p. 14-15.

金原正明・松井章・金原正子 1994 「便所堆積物から探る古代人の食生活」『助成研究報告(平成4年度)』財団法人味の素文化センター p.35-48

金子清俊・谷口博一 1987 「線形動物・扇形動物」『医動物学』新版臨床検査講座8 医歯薬出版 p. 9-55.

笠原安夫 1985 『日本雑草図説』養賢堂 494p.

笠原安夫 1988 「作物および田畑雑草種類」『弥生文化の研究』第2巻生業 雄山閣出版 p. 131-139.

南木睦彦 1991 「栽培植物」『古墳時代の研究』第4巻生産と流通1 雄山閣出版株式会社 p. 165-174.

南木睦彦 1992 「低産地遺跡の種実」『月刊考古学ジャーナル』No. 355 ニューサイエンス社 p. 18-22.

南木睦彦 1993 「葉・果実・種子」『日本第四紀学会編 第四紀試料分析法』東京大学出版会 p. 276-283.

中村純 1973 『花粉分析』古今書院 p. 82-110.

中村純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として」『第四紀研究』13 p. 187-193.

中村純 1977 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号 p. 21-30.

中村純 1980 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集 91p.

島倉己三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 60p.

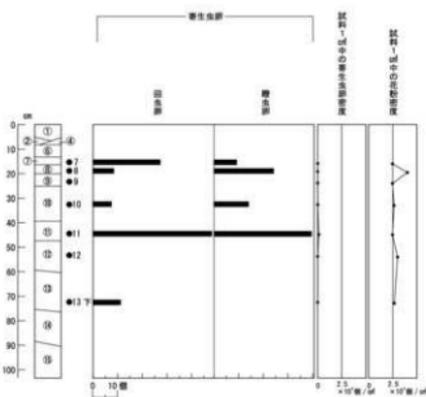


図 164 SE532 における寄生虫卵ダイアグラム

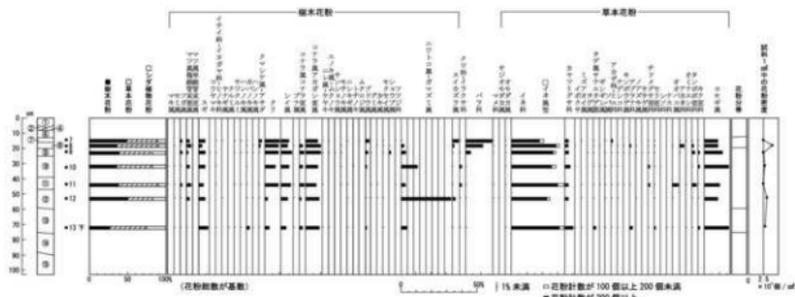
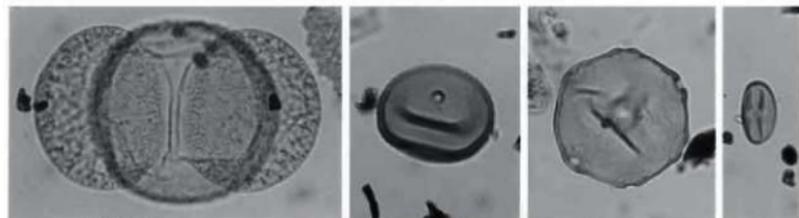


図 165 SE532 における花粉ダイアグラム

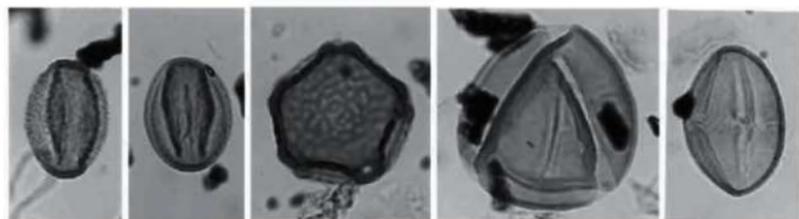


1 マツ属放射管束亜属

2 スギ

3 クルミ属

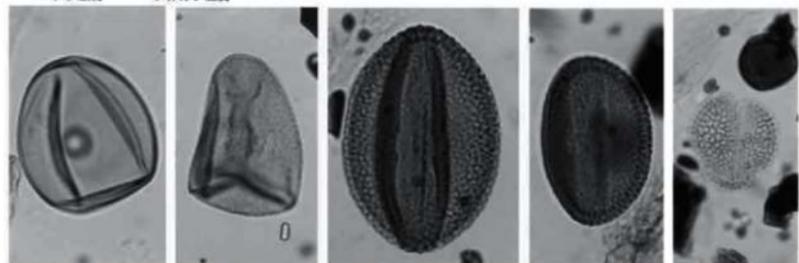
4 クリ

5 コナラ属
コナラ亜属6 コナラ属
アカガシ亜属

7 ニレ属-ケヤキ

8 カキ属

9 バラ科



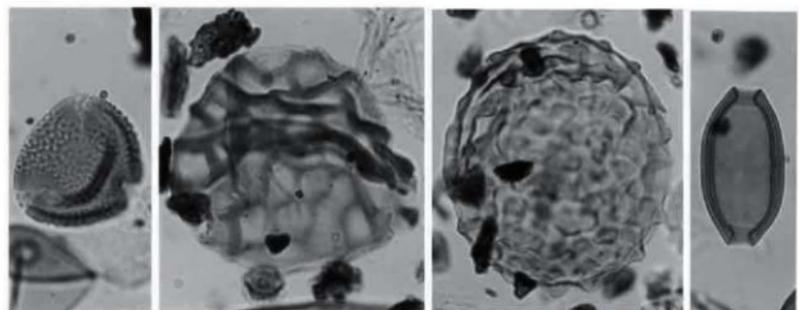
10 イネ属型

11 カヤツリグサ科

12 ソバ属

13 ソバ属

14 アブラナ科



15 ノアズキ属

16 ササゲ属

17 回虫卵

18 鞭虫卵

— 10 μ m

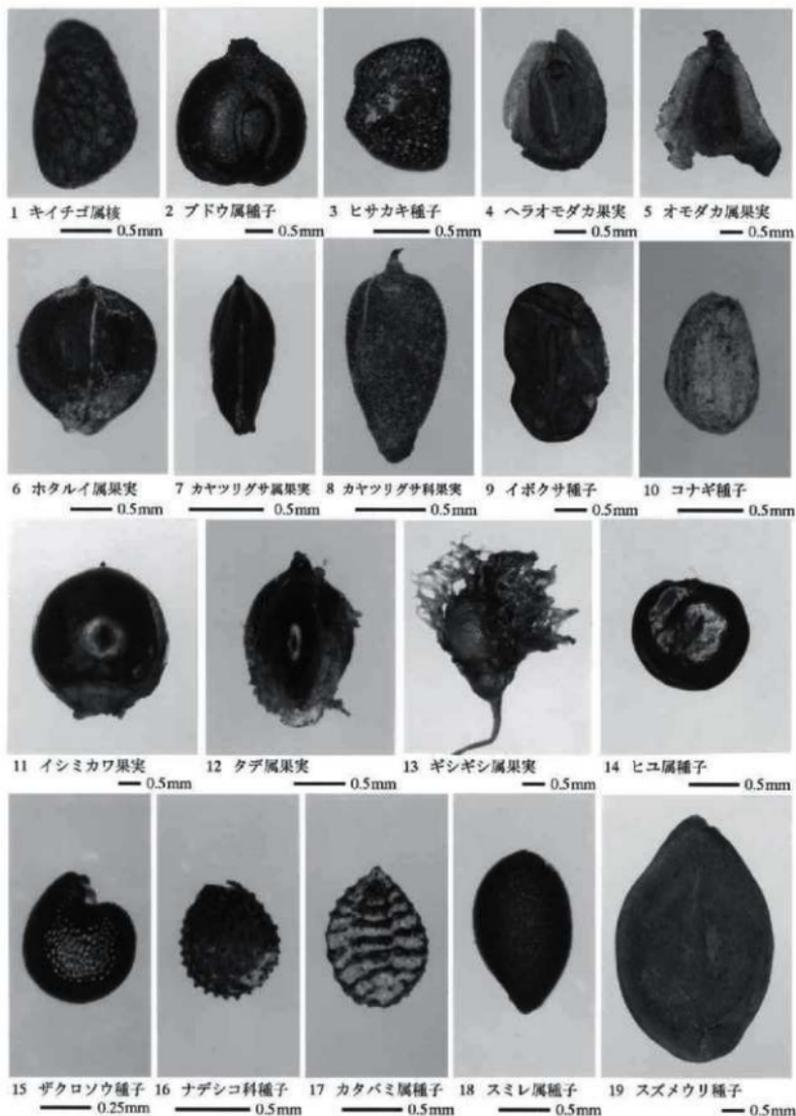


写真 33 SE532 種実

2. 寺家前遺跡井戸遺構の花粉化石

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

寺家前遺跡において行われた発掘調査で中世の12世紀後半～13世紀初頃と考えられている井戸跡が検出され、土壌試料が採取された。以下にはこの土壌試料を用いて行った花粉分析の結果について示し、井戸周辺の古植生について検討した。

(2) 試料と分析方法

試料は図166に示した井戸の埋積土層断面より採取された5試料である。各試料について、6層試料は暗灰色の砂質シルト、7層(上部と下部)は黒灰色粘土、10層(上部と下部)は黒灰色のシルト質粘土である。時期は先にも記したが出土遺物から12世紀後半～13世紀初頃と考えられている。花粉分析はこれら5試料について以下のような手順に従って行った。

試料(湿重約4～5g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂などを除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え30分間放置する。水洗後、重液分離(臭化亜鉛溶液:比重2.1を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。次に、酢酸処理、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフランニンにて染色を施した。

(3) 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉33、草本花粉30、形態分類を含むシダ植物胞子4の総計67である。これら花粉・胞子の一覧を表10に、またそれらの分布を図167に示した。なお分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数として百分率で示してある。また、図および表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括していれている。

検鏡の結果、最も多く検出されたのはシイノキ属-マテバシイ属(以後シイ類と略す)で、出現率は40%前後を示しており、最上部では50%を越えている。次いで10～20%の出現率を示しているスギが多く観察されている。イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科(以後ヒノキ類と略す)、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属は10%前後、ツガ属、コウヤマキ属、クリ属は5%前後の出現率を示している。草本類では15%前後の出現率を示すイネ科が最も多く、ヨモギ属は最下部試料でやや多く産出している。その他では水生植物のオモダカ属やミズアオイ属などが若干得られており、ソバ属が7層上部より、ゴマ属が10層上部より検出されている。またシダ植物の単条型胞子が15%前後の出現率を示している。なお10層試料より回虫卵や鞭虫卵といった寄生虫卵が若干観察されている。

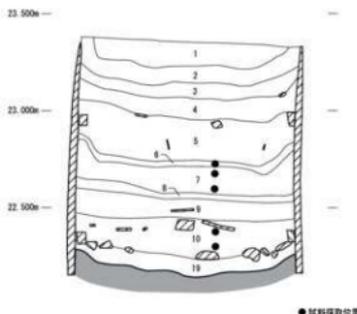


図166 SE8036 土層断面および試料採取層序

(4) 井戸および遺跡周辺の古植生

時期については先にも記したが出土遺物から中世の12世紀後半～13世紀初頃と考えられている。この時期の遺跡周辺丘陵部の古植生はシイ類を主体にアカガシ亜属やモチノキ属などを交えた照葉樹林が広く成立していたとみられる。またスギ林がこの丘陵部斜面を中心に分布していたと推測され、ツガ属やコウヤマキ属、ヒノキ類などを含めた温帯性針葉樹林が成立していたとみられる。さらにコナラ亜属を中心にクマシデ属-アサダ属、クリ属、ニレ属-ケヤキ属、カエデ属などを交えた落葉広葉樹林も一部に成立していたとみられ、林縁部などには中・低木類のニシキギ科やグミ属、ウコギ科、イボタノキ属などが生育していたと推測される。

草本類についてみると、イネ科が最も多く、その形態から多くがイネである可能性が高いと判断され、遺跡周辺の水田から風により供給されているのではないかとと思われる。また水生植物のサジモダカ属やオモダカ属、ミズアオイ属などは水田雑草を含む分類群であることから、水田土壌も洪水時などに流れ込んでいる可能性が推察され、これによりイネを含め水生植物の花粉が井戸内に供給されたのではないかとと思われる。この井戸周辺にはツユクサ属、アカザ科-ヒユ科、オオバコ属などの雑草類が生育していたとみられる。

わずかではあるがソバ属が7層上部より、またゴマ属が10層上部より得られている。こうしたことから中世(12世紀後半～13世紀初頃)の寺家前遺跡周辺では水田稲作と共にソバやゴマの栽培も行われていた可能性が考えられる。

(5) おわりに

先にも記したが10層試料より若干の寄生虫卵が観察されており、中世の本遺跡は回虫や鞭虫などの寄生虫に悩まされていた可能性が推察される。

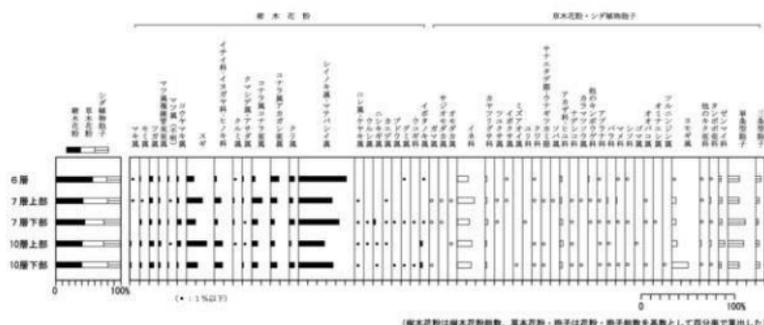
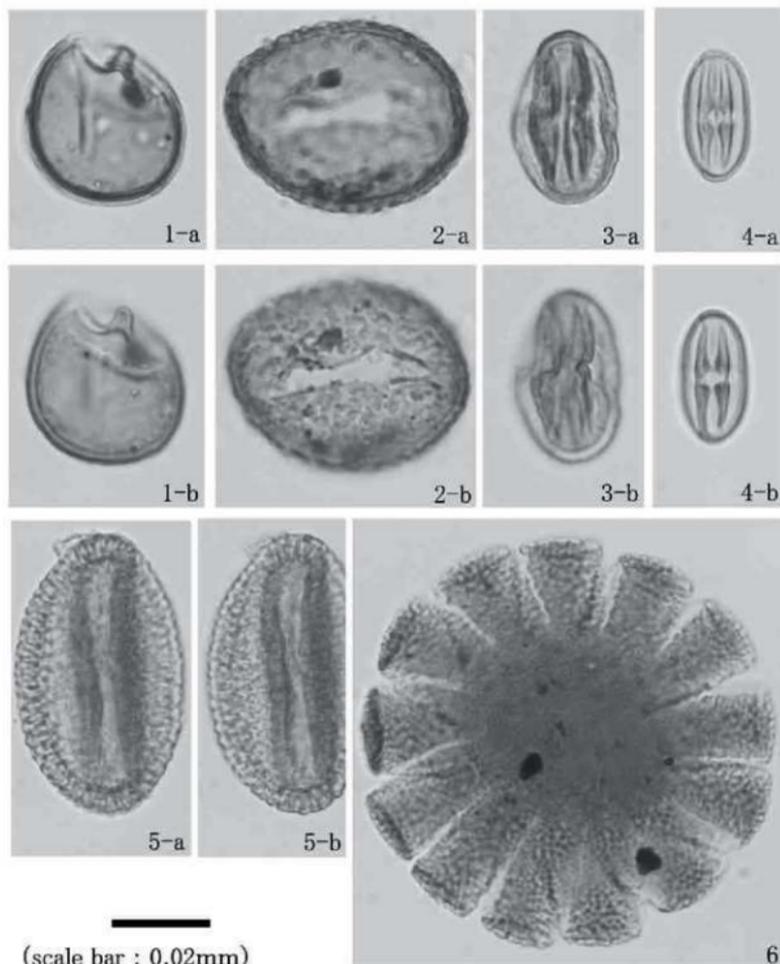


図 167 SE8036 の主要花粉化石分布図

表 10 産出花粉化石一覧表

和名	学名	6層		7層		10層	
		上部	下部	上部	下部	上部	下部
樹木							
マキ属	<i>Podocarpus</i>	1	1	-	-	2	3
スギ属	<i>Abies</i>	2	1	4	2	4	4
ツグ属	<i>Tsuga</i>	7	8	5	6	11	11
マツ属短葉木亞属	<i>Pinus subgen. Diplostron</i>	3	3	6	4	5	5
マツ属(不明)	<i>Pinus (Unknown)</i>	3	2	4	1	3	3
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	3	7	13	6	4	4
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> B. Don	14	37	21	26	26	26
イナイレ科-イヌガヤ科-ヒノキ科 T.-C.		4	15	6	11	20	20
ヤブヤブ属	<i>Salla</i>	-	-	1	-	-	-
ケルミ属	<i>Juglans</i>	1	4	3	1	-	-
クマシダ属-アサダ属	<i>Carpinus-Ostrya</i>	3	3	2	1	3	3
ハンパニ属	<i>Corylus</i>	-	-	1	-	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	-	-	-	1	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	-	1	-	-	-
フナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	-	1	-	-	-	-
コナラ属-コナラ亜属	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	5	24	15	8	14	14
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	15	14	8	5	17	17
クリ属	<i>Castanea</i>	11	7	13	2	12	12
シノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis-Paonia</i>	84	77	93	34	82	82
ニレ属-ケヤキ属	<i>Elmox-Zelkova</i>	-	1	2	1	1	1
ヤブシロヨリ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	-	-	1	-	-
セツダン属	<i>Melia</i>	-	-	1	-	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	-	-	1	1	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	1	-	-	-
ニシキギ科	Celastraceae	-	-	3	1	2	2
カエデ属	<i>Acer</i>	-	1	1	1	-	-
ムクロジ属	<i>Sapindus</i>	-	-	-	-	1	1
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	-	1	-	1	1
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	1	-	1	-	1	1
ウコギ科	Araliaceae	-	-	1	1	2	2
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	1	-	1	2	3	3
クナギ属	<i>Clerodendron</i>	-	-	-	1	-	-
アズミ属	<i>Viburnum</i>	-	1	-	-	-	-
草本							
ギョウ属	<i>Typha</i>	-	1	2	-	1	1
ヤジオモダカ属	<i>Alisma</i>	-	1	1	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	1	-	2	-	-
イネ科	Gramineae	33	89	58	46	79	79
カヤツリガサ科	Cyperaceae	4	9	11	3	7	7
ツユクサ属	<i>Gamnelia</i>	-	2	1	-	-	-
イボクサ属	<i>Anelima</i>	2	1	-	-	-	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	-	-	-	-	1	1
ユリ科	Liliaceae	-	-	1	-	-	-
ワラ科	Woraceae	1	4	-	1	1	1
ギンゴクシ属	<i>Rumex</i>	-	-	-	-	1	1
ヤブエタダ属-ウナギツカミ属	<i>Polygomon</i> sect. <i>Persicaria-Echinocalon</i>	-	1	-	2	2	2
ソノ属	<i>Polygonum</i>	-	4	-	-	-	-
アカザ科-セコ科	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	6	8	13	9	14	14
ナツシロ科	Caryophyllaceae	-	4	2	1	2	2
カワマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	1	-	-	1	1
他のキンポウゲ科	Other Ranunculaceae	3	1	3	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	2	4	3	1	4	4
バラ科	Rosaceae	-	5	2	1	2	2
マメ科	Leguminosae	2	5	4	-	2	2
ツルクネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	-	-	1	-	-
セウ科	Umbelliferae	-	2	-	-	-	-
シソ科	Labiatae	1	-	1	-	1	1
ゴウモ属	<i>Sciumm</i>	-	-	-	1	-	-
オオバコ属	<i>Plantago</i>	-	1	1	-	1	1
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	-	-	2	-	-	-
ウルニシジミ属	<i>Cobsonopsis</i>	-	-	-	-	1	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	1	27	23	18	98	98
他のキク亜科	Other Tubuliflorae	2	4	4	4	3	3
シシトビ草科	Liguliflorae	2	6	1	5	3	3
シダ植物							
ヒカゲノカズリ属	<i>Lycopodium</i>	-	1	-	-	-	-
ゼンマイ科	Onuandaceae	8	17	18	19	17	17
裸蕨類胞子	Nonolete spore	37	66	90	50	68	68
三葉草類胞子	Trilete spore	16	19	19	9	26	26
草本花粉	Arboreal pollen	159	207	209	118	216	216
草本花粉	Nonarboreal pollen	59	181	133	95	224	224
シダ植物胞子	Spores	41	103	124	78	113	113
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	279	491	466	291	553	553
不明花粉	Unknown pollen	23	28	25	14	28	28

T.-C. 12Taxaceae-Gymnataceaeae-Cyperaceae等以外



(scale bar : 0.02mm)

- 1 : スギ PLC.SS 4148 7層上部 5 : ソバ属 PLC.SS 4153 7層上部
 2 : コウヤマキ属 PLC.SS 4152 7層上部 6 : ゴマ属 PLC.SS 4154 10層上部
 3 : コナラ属アカガシ亜属 PLC.SS 4151 7層上部
 4 : シイノキ属-マテバシイ属 PLC.SS 4147 7層上部

3. 珪藻化石群集

黒澤 一男 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

珪藻は淡水から海水に至るほとんどすべての水域に生息し、水域生態系の一次生産者として重要な位置を占めている。微小(0.01～0.5mm程度)ながら珪酸体からなる殻を形成するため、化石として地層中によく保存される。また種類ごとに様々な水域に適応し生息するため古環境の指標としてもよく利用されている。

ここでは静岡県藤枝市の寺家前遺跡より採取された試料を用いて珪藻化石群集を調べ、その堆積環境について検討する。

(2) 試料及び分析方法

分析には、寺家前遺跡E-3区のSE8036から採取された5試料(第10層下部・上部、第7層下部・上部、第6層)を用いて、以下の珪藻分析を行った。

- ① 試料を潤滑重量で約1g程度取り出し、秤量した後にトルビーカーに移し、30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。
- ② 反応終了後、水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てた。この作業は上澄み液が透明になるまで7回以上繰り返し行った。
- ③ ビーカーに残った残渣は遠心管に回収した。
- ④ マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し、乾燥した。乾燥後にマウントメディア(封入剤)で封入し、プレパラートを作成した。
- ⑤ 各プレパラートを光学顕微鏡下400～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数を行った。なお、珪藻化石が少ない試料に関してはプレパラート全面について精査した。

(3) 珪藻化石の環境指標種群について

珪藻化石の環境指標種群は、主に安藤(1990)により設定された環境指標種群に基づいた。安藤(1990)は淡水域における環境指標種群を設定した。なお環境指標種群以外の珪藻種については広布種として扱った。また、破片であるため属レベルで同定した分類群は不明種として扱った。以下に安藤(1990)において設定された環境指標種群の概要を記す。

上流性河川指標種群(J) 河川上流の渓谷部に集中して出現する種群。

中～下流性河川指標種群(K) 中～下流域、すなわち河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群。

最下流性河川指標種群(L) 最下流域の三角洲の部分に集中して出現する種群。

湖沼浮遊性指標種群(M) 水深が1.5m以上で、水生植物が水底には生息していない湖沼に生息する種群。

湖沼沼沢湿地指標種群(N) 湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群。

沼沢湿地付着生指標種群(O) 水深が1m内外で、植物が一面に繁茂しているところおよび湿地において付着状態で優勢な出現が見られる種群。

高層湿原指標種群(P) ミズゴケを主とした植物群落および泥炭地の発達が見られる場所に出現する種群。

陸域指標種群(Q) 前述の水域に対して、陸域を生息域として生活している種群(陸生珪藻)。

表 11 SE8036における珪藻化石産出表

分類群	種群	第6層		第7層		第10層	
		上部	下部	上部	下部	上部	下部
<i>Achnanthes inflata</i>	W	-	-	15	-	1	-
<i>Caloneis bacillum</i>	W	-	-	-	1	1	-
C. spp.	?	-	-	1	-	-	-
<i>Cymbella aspera</i>	0	-	16	9	1	-	-
C. tumida	W	-	7	94	12	8	-
<i>Diploneis yatsukanaensis</i>	W	-	-	-	-	1	2
<i>Eunotia muscioides</i>	W	-	-	-	-	1	-
E. pectinalis	0	1	131	26	23	97	-
E. pectinalis var. minor	0	-	-	-	-	1	-
E. praerupta var. bidens	0	-	1	3	-	2	-
E. spp.	?	-	33	11	4	32	-
<i>Frustulia rhomboides</i> var. <i>capitata</i>	W	-	2	1	3	6	-
<i>Gomphonema acuminatum</i>	0	-	-	13	-	17	-
G. angustatum	W	-	-	-	-	3	-
G. saepe	W	-	-	1	-	-	-
G. gracile	0	-	2	1	-	-	-
G. parvulum	W	-	-	1	-	-	-
G. pseudomajus	W	-	1	-	-	-	-
G. sphaerophorum	W	-	2	3	1	9	-
G. spp.	?	-	-	3	-	1	-
<i>Gyrosigma acuminatum</i>	W	-	-	-	1	2	-
G. spp.	?	-	-	-	1	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Q	1	3	16	5	5	-
<i>Melosira roessumi</i>	Q	-	1	-	-	-	-
M. ruttneri	Q	-	-	-	-	1	-
<i>Navicula mutica</i>	Q	-	1	-	-	1	-
N. pusio	W	-	1	-	-	1	-
N. spp.	?	-	-	-	-	1	-
<i>Neidium</i> spp.	?	-	-	-	1	1	-
<i>Pinnularia acropapularia</i>	0	-	-	-	3	-	-
P. borealis	Q	-	-	3	2	1	-
P. gibbs	0	-	1	-	2	-	-
P. microstauron	W	-	-	3	1	-	-
P. viridis	0	-	5	4	3	2	-
P. spp.	?	-	1	-	-	2	-
<i>Rhopalodia gibbs</i>	W	-	-	1	-	-	-
R. gibberula	W	-	1	-	4	-	-
<i>Stauroneis acuta</i>	W	-	-	-	1	-	-
S. phoenixcenteron	0	-	-	-	-	1	-
<i>Strirella</i> spp.	?	-	-	-	1	-	-
<i>Synedra ulna</i>	W	-	-	3	1	4	-
沼沢湿地付着生	(O)	1	156	56	33	119	-
塘	(Q)	1	5	9	7	8	-
広布種	(W)	-	14	122	26	38	-
不明	(?)	-	34	15	7	37	-
珪藻殻数		2	209	202	73	202	

(4) 珪藻化石群集の特徴 (図 168・表 11)

本研究において検出された珪藻化石は、41分類群17属30種3亜種である。これらの珪藻種から設定された環境指標種群は、広布種を含め3種群である。珪藻殻および環境指標種群の出現状況より、2帯の珪藻化石分帯に区分される。以下に分帯ごとに種群の出現状況の特徴と堆積環境について述べる。

【1帯(第10層下部・上部,第7層下部・上部)】

堆積物1g中の珪藻殻数は $2.04 \times 10^4 \sim 2.03 \times 10^5$ 個、完形殻の出現率は約31～49%となる。これらの試料からは、*Eunotia pectinalis*や*Pinnularia viridis*などの沼沢湿地付着生指標種群が特徴的に検出されている。また、陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*が随伴して検出されている。第7層下部では沼沢湿地付着生指標種群の*Eunotia pectinalis*が減少し、広布種の*Cymbella tumida*が優占する。

これらのことから堆積環境は湿地環境であると推定される。

【2帯(第6層)】

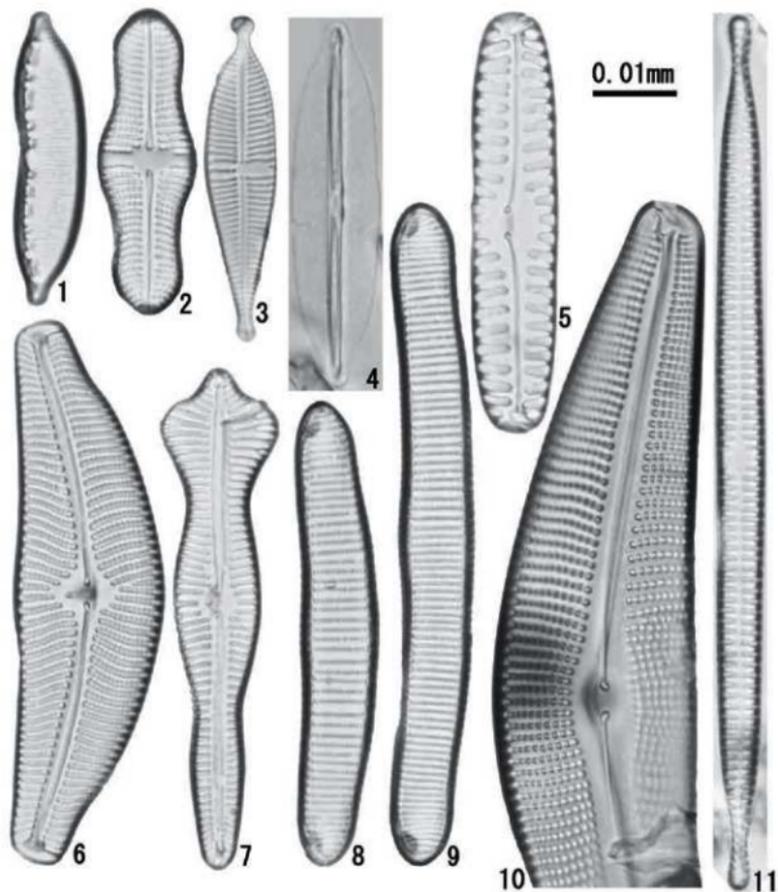
検出された珪藻殻数は2個と少ないため、珪藻化石より環境を推定することはできない。

(5) 考察

寺家前遺跡の堆積物試料を用いて珪藻分析を行った結果について考察する。

第10層と第7層においては湖沼沼沢湿地付着生指標種群が特徴的に検出されている。これらのことから、第10層と第7層堆積時にはSE8036の井戸内に水が存在していたと考えられる。また珪藻は水生植物であるため、光のない環境下には生育できない。よって本層堆積時には開放的な井戸が存在していたと考えられる。

第6層では堆積環境を推定するのに十分な珪藻を検出することができなかった。珪藻殻が少ない理由として、珪藻が生育できない環境下であった可能性が考えられる。珪藻は水生植物であるため、水や光のない環境下では生育できない。よって乾燥した陸域もしくは光の閉ざされた環境下であった可能性が考えられ、第6層堆積時には井戸内に水が存在していなかったもしくは蓋を閉められた閉鎖的な状態であったと考えられる。



- | | |
|------------------------------------|---|
| 1. <i>Hantzschia amphioxys</i> | 2. <i>Achnanthes inflata</i> |
| 3. <i>Gomphonema sphaerophorum</i> | 4. <i>Frustulia rhomboides</i> var. <i>capitata</i> |
| 5. <i>Pinnularia borealis</i> | 6. <i>Cymbella tumida</i> |
| 7. <i>Gomphonema acuminatum</i> | 8-9. <i>Eunotia pectinalis</i> |
| 10. <i>Cymbella aspera</i> | 11. <i>Synedra ulna</i> |
- (10;第7層上部,1·2·4~6·8·9·11;第7層下部,3·7;第10層下部)

4. 放射性炭素年代測定

(株) 加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

寺家前遺跡は、静岡県藤枝市中ノ合（北緯 34° 53′ 56.3703″、東経 138° 14′ 49.9982″）に所在する。

(2) 測定の意義

出土遺構の年代を明らかにするとともに、周辺で検出した遺構との年代観の比較を行う。

(3) 測定対象試料

土坑 1615 ①から出土した木炭（1：IAAA-71117）、土坑 2818 から出土した木炭（2：IAAA-71118）、焼壁土坑 6176 から出土した木炭 2 点（3・4：IAAA-71119・71120）、SR6400 から出土した土器内面の付着炭化物 2 点（5・6：IAAA-71121・71122）、溝 6290 から出土した土器内面の付着炭化物（7：IAAA-71123）、水田畦畔 SK422 から出土した木片（8・9：IAAA-71124・71125）、885 の柱根（10：IAAA-71126）、3573 の柱根（11：IAAA-71127）、10127-1 の礎版（12：IAAA-71128）、10240 の礎版（13：IAAA-71129）、自然堤防の後輩湿地内に集積した木製品（14・15：IAAA-71130・71131）、溝状遺構の竪板（16・17：IAAA-71132・71133）、合計 17 点である。対象試料 8～17 は、採取後ホウ酸ホウ砂水溶液に含浸され、保存された。

(4) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 0.001～1N の水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅 1g と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で 30 分、850℃で 2 時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(5) 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。134 個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により ¹³C/¹²C の測定も同時に行う。

表 12 放射炭素年代測定結果

IAA Code No	試料	BP年代および標準の誤差	IAA Code No	試料	BP年代および標準の誤差
IAA-71117	試料形態 : 木炭	Libby Age(yrBP) : 460 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -27.4 ± 0.62 $\Delta 14(\text{‰})$ = -56.1 ± 3.7 pMC(N) = 94.39 ± 0.37	IAA-71120	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 270 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -22.70 ± 0.82 $\Delta 14(\text{‰})$ = -32.6 ± 3.5 pMC(N) = 96.74 ± 0.35
	試料名(番号) : 1	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = 93.93 ± 0.35 Age (yrBP) : 500 ± 0		(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = 97.20 ± 0.31 Age (yrBP) : 230 ± 30	
IAA-71118	試料形態 : 木炭	Libby Age(yrBP) : 810 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -25.4 ± 0.51 $\Delta 14(\text{‰})$ = -61.9 ± 3.3 pMC(N) = 93.81 ± 0.33	IAA-71127	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 610 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -26.96 ± 0.43 $\Delta 14(\text{‰})$ = -72.7 ± 3.8 pMC(N) = 92.73 ± 0.38
試料名(番号) : 2	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = -62.6 ± 3.1 pMC(N) = 93.74 ± 0.31 Age (yrBP) : 520 ± 30	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = -74.7 ± 3.6 pMC(N) = 92.53 ± 0.36 Age (yrBP) : 620 ± 30	IAA-71128	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 1,950 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -24.05 ± 0.57 $\Delta 14(\text{‰})$ = -215.3 ± 3.3 pMC(N) = 78.47 ± 0.33
IAA-71119	試料形態 : 木炭	Libby Age(yrBP) : 1270 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -26.4 ± 0.45 $\Delta 14(\text{‰})$ = -85.35 ± 0.31 pMC(N) = -149 ± 2.8	IAA-71129	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 1,910 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -25.01 ± 0.64 $\Delta 14(\text{‰})$ = -211.7 ± 3.0 pMC(N) = 78.83 ± 0.30
試料名(番号) : 3	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = 85.11 ± 0.30 Age (yrBP) : 1290 ± 30	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = 78.83 ± 0.29 Age (yrBP) : 1,910 ± 30	IAA-71130	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 1,960 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -23.94 ± 0.52 $\Delta 14(\text{‰})$ = -214.1 ± 3.6 pMC(N) = 78.59 ± 0.36
IAA-71120	試料形態 : 木炭	Libby Age(yrBP) : 1250 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -27.5 ± 0.53 $\Delta 14(\text{‰})$ = -145 ± 3.1 pMC(N) = 85.54 ± 0.31	IAA-71131	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 1,780 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -27.88 ± 0.63 $\Delta 14(\text{‰})$ = -199.0 ± 3.4 pMC(N) = -80.10 ± 0.34
試料名(番号) : 4	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = -149.0 ± 2.9 pMC(N) = 85.10 ± 0.29 Age (yrBP) : 1,300 ± 30	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = -203.8 ± 3.2 pMC(N) = 79.62 ± 0.32 Age (yrBP) : 1,830 ± 30	IAA-71132	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 1,960 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -23.37 ± 0.49 $\Delta 14(\text{‰})$ = -218.2 ± 3.6 pMC(N) = 78.18 ± 0.36
IAA-71121	試料形態 : 炭化物	Libby Age(yrBP) : 1,910 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -25.97 ± 0.51 $\Delta 14(\text{‰})$ = -211.5 ± 2.7 pMC(N) = 78.89 ± 0.27	IAA-71133	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 1,960 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -23.62 ± 0.50 $\Delta 14(\text{‰})$ = -216.4 ± 3.2 pMC(N) = 78.56 ± 0.32
試料名(番号) : 5	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = 78.70 ± 0.26 Age (yrBP) : 1,920 ± 30	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = -215.5 ± 3.3 pMC(N) = 78.45 ± 0.35 Age (yrBP) : 1,950 ± 40	IAA-71134	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 1,910 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -25.01 ± 0.64 $\Delta 14(\text{‰})$ = -211.7 ± 3.0 pMC(N) = 78.83 ± 0.30
IAA-71122	試料形態 : 炭化物	Libby Age(yrBP) : 1,800 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -27.48 ± 0.54 $\Delta 14(\text{‰})$ = -200.8 ± 3.0 pMC(N) = 79.92 ± 0.30	IAA-71135	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 1,960 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -23.94 ± 0.52 $\Delta 14(\text{‰})$ = -214.1 ± 3.6 pMC(N) = 78.59 ± 0.36
試料名(番号) : 6	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = -204.8 ± 2.9 pMC(N) = 79.52 ± 0.29 Age (yrBP) : 1,840 ± 30	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = -215.5 ± 3.3 pMC(N) = 78.45 ± 0.35 Age (yrBP) : 1,950 ± 40	IAA-71136	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 1,960 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -23.62 ± 0.50 $\Delta 14(\text{‰})$ = -216.4 ± 3.2 pMC(N) = 78.56 ± 0.32
IAA-71123	試料形態 : 炭化物	Libby Age(yrBP) : 2,940 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -24.94 ± 0.52 $\Delta 14(\text{‰})$ = -223.8 ± 3.0 pMC(N) = 77.62 ± 0.30	IAA-71137	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 1,960 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -23.62 ± 0.50 $\Delta 14(\text{‰})$ = -216.4 ± 3.2 pMC(N) = 78.56 ± 0.32
試料名(番号) : 7	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = -222.3 ± 2.9 pMC(N) = 77.77 ± 0.29 Age (yrBP) : 2,020 ± 30	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = -214.2 ± 3.1 pMC(N) = 78.58 ± 0.31 Age (yrBP) : 1,910 ± 30	IAA-71138	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 1,850 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -23.41 ± 0.90 $\Delta 14(\text{‰})$ = -205.9 ± 3.8 pMC(N) = 79.41 ± 0.38
IAA-71124	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 1,870 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -27.08 ± 0.69 $\Delta 14(\text{‰})$ = -207.8 ± 3.1 pMC(N) = 79.22 ± 0.31	IAA-71139	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 1,850 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -23.41 ± 0.90 $\Delta 14(\text{‰})$ = -205.9 ± 3.8 pMC(N) = 79.41 ± 0.38
試料名(番号) : 8	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = -211.2 ± 2.9 pMC(N) = 78.88 ± 0.29 Age (yrBP) : 1,910 ± 30	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = -203.3 ± 3.5 pMC(N) = 79.67 ± 0.35 Age (yrBP) : 1,830 ± 30	IAA-71140	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 1,850 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -23.41 ± 0.90 $\Delta 14(\text{‰})$ = -205.9 ± 3.8 pMC(N) = 79.41 ± 0.38
IAA-71125	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 1,850 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -23.41 ± 0.90 $\Delta 14(\text{‰})$ = -205.9 ± 3.8 pMC(N) = 79.41 ± 0.38	IAA-71141	試料形態 : 木片	Libby Age(yrBP) : 1,850 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加算誤差) = -23.41 ± 0.90 $\Delta 14(\text{‰})$ = -205.9 ± 3.8 pMC(N) = 79.41 ± 0.38
試料名(番号) : 9	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC(N) = -203.3 ± 3.5 pMC(N) = 79.67 ± 0.35 Age (yrBP) : 1,830 ± 30				

(6) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として測る ^{14}C 年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS 測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_s - ^{14}\text{A}_0) / ^{14}\text{A}_0] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_s - ^{13}\text{A}_{\text{ref}}) / ^{13}\text{A}_{\text{ref}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 $^{14}\text{A}_s$: 試料炭素の ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)_s または ($^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$)_s

$^{14}\text{A}_0$: 標準現代炭素の ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)₀ または ($^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$)₀

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{A}_s = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に [加速器] と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{A}_0$) に換算した上で計算した値である。(1) 式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{A}_0 = ^{14}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_0 \text{ として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{A}_0 \text{ として } ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_s - ^{14}\text{A}_0) / ^{14}\text{A}_0] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{13}\text{C}$ に相当する BP 年代値が比較的良好にその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \text{ (‰)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいは pMC により、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

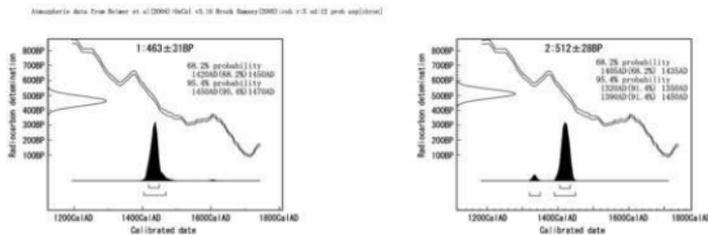
- 5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。
- 6) 校正暦年代の計算では、IntCal10データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCal3.10 校正プログラム (Bronk Ransley1995 Bronk Ransley 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001) を使用した。

(7) 測定結果

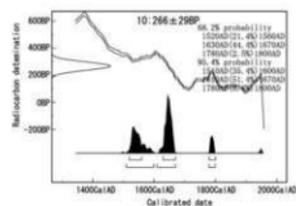
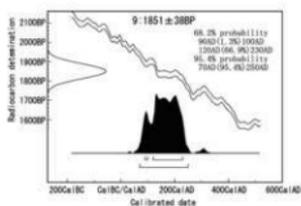
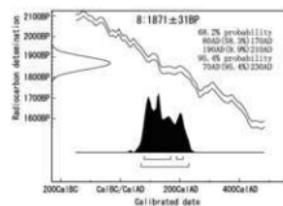
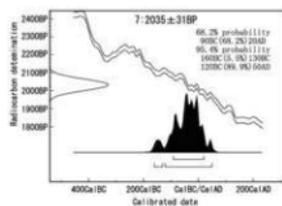
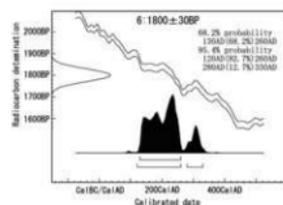
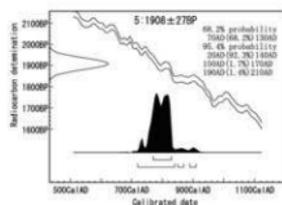
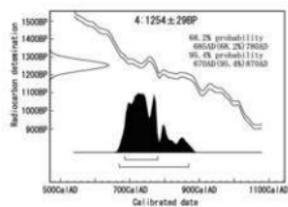
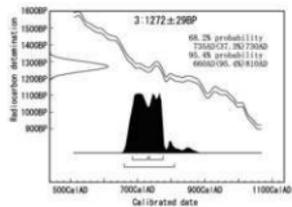
^{14}C 年代は、土坑 1615①から出土した木炭（1：IAAA-71117）が $460 \pm 30\text{yrBP}$ 、土坑 2818 から出土した木炭（2：IAAA-71118）が $510 \pm 30\text{yrBP}$ 、焼壁土坑 6176 から出土した木炭 2点が $1270 \pm 30\text{yrBP}$ （3：IAAA-71119）、 $1250 \pm 30\text{yrBP}$ （4：IAAA-71120）、SR6400 から出土した土器内面の炭化物 2点が $1910 \pm 30\text{yrBP}$ （5：IAAA-71121）、 $1800 \pm 30\text{yrBP}$ （6：IAAA-71122）、溝 6290 から出土した土器内面の付着炭化物（7：IAAA-71123）が $2040 \pm 30\text{yrBP}$ 、水田畦畔 SK422 から出土した木片 2点が $1870 \pm 30\text{yrBP}$ （8：IAAA-71124）、 $1850 \pm 40\text{yrBP}$ （9：IAAA-71125）、885 の柱根（10：IAAA-71126）が $270 \pm 30\text{yrBP}$ 、3573 の柱根（11：IAAA-71127）が $610 \pm 30\text{yrBP}$ 、10127-1 の礎版（12：IAAA-71128）が $1950 \pm 30\text{yrBP}$ 、10240 の礎版（13：IAAA-71129）が $1910 \pm 30\text{yrBP}$ 、自然堤防の後輩湿地内に集積した木製品 2点が $1930 \pm 40\text{yrBP}$ （14：IAAA-71130）、 $1780 \pm 30\text{yrBP}$ （15：IAAA-71131）、溝状遺構の塹板が $1980 \pm 40\text{yrBP}$ （16：IAAA-71132）、 $1960 \pm 30\text{yrBP}$ （17：IAAA-71133）である。暦年較正年代（ $1\sigma = 68.2\%$ ）は、1が $1420 \sim 1450\text{AD}$ 、2が $1405 \sim 1435\text{AD}$ 、3が $685 \sim 730\text{AD}$ （37.3%）・ $735 \sim 775\text{AD}$ （30.9%）、4が $685 \sim 780\text{AD}$ 、5が $70 \sim 130\text{AD}$ 、6が $130 \sim 260\text{AD}$ 、7が $90\text{BC} \sim 20\text{AD}$ 、8が $80 \sim 170\text{AD}$ （58.3%）・ $190 \sim 210\text{AD}$ （9.9%）、9が $90 \sim 100\text{AD}$ （1.3%）・ $120 \sim 230\text{AD}$ （66.9%）、10が $1520 \sim 1560\text{AD}$ （21.4%）・ $1630 \sim 1670\text{AD}$ （44.4%）・ $1780 \sim 1800\text{AD}$ （2.5%）、11が $1300 \sim 1330\text{AD}$ （27.1%）・ $1335 \sim 1365\text{AD}$ （28.0%）・ $1380 \sim 1400\text{AD}$ （13.1%）、12が $0 \sim 85\text{AD}$ 、13が $60 \sim 130\text{AD}$ 、14が $20 \sim 90\text{AD}$ （53.8%）・ $100 \sim 125\text{AD}$ （14.4%）、15が $170 \sim 200\text{AD}$ （6.4%）・ $210 \sim 330\text{AD}$ （61.8%）、16が $40 \sim 30\text{BC}$ （3.6%）・ $20\text{BC} \sim 70\text{AD}$ （64.6%）、17が $0 \sim 75\text{AD}$ である。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代である。

参考文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

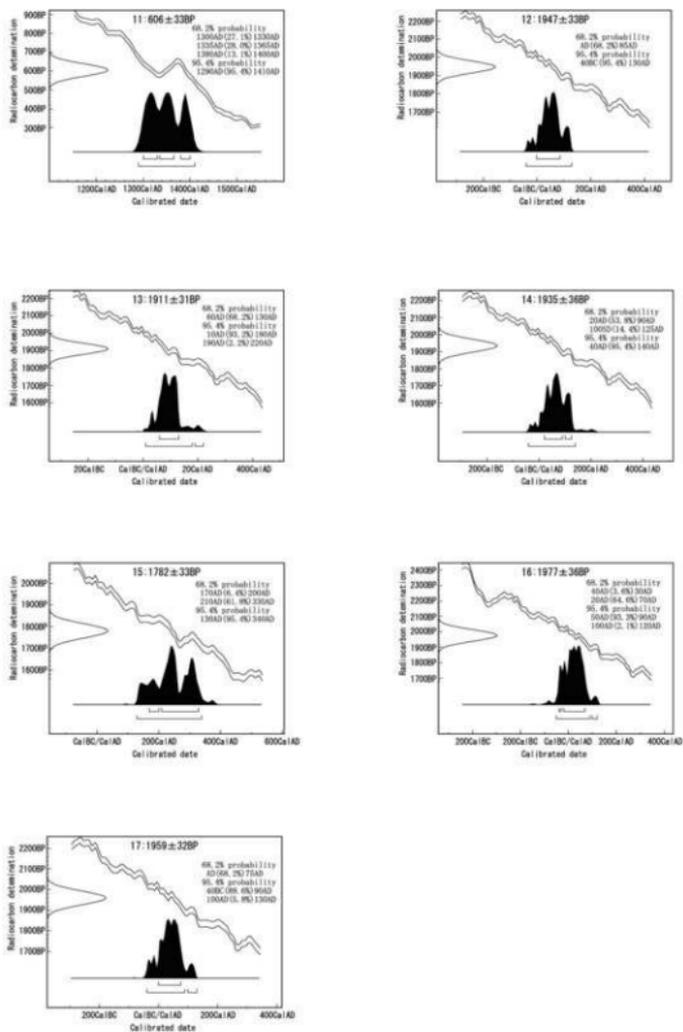


Atmospheric data from Reimer et al (2004) (hCa) v3.10 Brook Basin(2000):rob r:5 at 12 prop (strn)



使用プログラム hCa v3.10

Atmospheric data from Taylor et al (2004) :0GaI, x3, 10 Brook Hansen(2005):ish x:6 ad:12 prob sup:(true)



使用プログラム 0aGal v3.10

図 171 暦年較正 3

5. 寺家前遺跡から出土した古代～近世の木製品の樹種

小川とみ・鈴木三男（東北大学植物園）

静岡県藤枝市、志太平野の北東に位置する寺家前遺跡は弥生時代から近・現代までの集落・生産遺跡で、ここから各時代の大量の木材・木製品が出土している。寺家前遺跡ではこれら出土品のうち、古代～近世までの出土木材・木製品 231 点の樹種を調べた結果を報告する。

樹種同定に用いたプレパラートは（旧）財団法人静岡埋蔵文化財調査研究所および静岡県埋蔵文化財センターが作成し、小川・鈴木が光学顕微鏡により、観察同定したものである。これらのプレパラートは静岡県埋蔵文化財センターに所蔵されてある。

（1）同定された樹種

全 231 点の出土木材から 25 の樹種が同定された。以下にその同定の根拠となった材形質と材質を概略し、寺家前遺跡から出土した遺物を紹介する。

1) モミ属 *Abies* マツ科

挿写真 36:1a ~ c (木材番号 12488)

早材部と晩材部が明確に異なり年輪が明瞭な針葉樹材で、垂直・水平両樹脂道とももたない。年輪幅は一般に広く、仮道管は整然と並び、早材から晩材への移行は緩やかでスギに似る。放射組織は、単列で放射柔細胞のみからなる。放射柔細胞の水平壁及び垂直壁に多くの単穿孔（モミ型壁孔）が見られる。分野壁孔は小型のスピ型で、一分野に 2 から 4 個ある。以上の形質から、マツ科のモミ属の材と同定した。

我が国に分布するモミ属の樹木は北海道にトドマツ、本州の亜高山帯にアオモリトドマツ、シラベ、冷温帯にウラジロモミ、そして暖温帯にモミがあり、材構造は互いによく似ていて、材構造での樹種の識別はできないが、本州、四国、九州の低山地から山地帯に広く分布するモミ *Abies firma* Siebold et Zucc. がもっとも普通なものである。モミは成長が早く、幹がまっすぐに立つので大材が得易く、加工も容易でスギやヒノキと同じ用途の代用品に用いられることが多いようである。当遺跡出土のモミ属材は中世の井戸枠材 1 点、近世の曲物の底蓋板 2 点と用途不明品の板・棒状材 3 点である。古代以前で平野部の遺跡の出土材の場合はモミと考えることができるが、中世以降、特に近世に至っては奥地林の開発が進んでいることからウラジロモミやシラベなどが流通していた可能性は否定できない。

2) カラマツ *Larix kaempferi* (Lamb.) Car. マツ科

挿写真 36:2a ~ c (木材番号 13142)

垂直・水平の樹脂道をもち、年輪が明瞭な針葉樹材で、早材から晩材への移行は急激、晩材部は一般に幅が狭い。早材部仮道管は径が大きく、薄壁、放射面では有縁壁孔が対列状に 2 列に並ぶ。放射組織は単列と紡錘形があり、柔細胞、放射仮道管、それに水平樹脂道を囲む分泌細胞からなる。放射柔細胞の水平及び垂直壁は多数の単壁孔があるモミ型である。放射仮道管は放射組織の上下辺に 1 ~ 2 細胞層あり、有縁壁孔は小型、有縁部の断面はなだらかである。分野壁孔は小型でトウヒ型～ヒノキ型、1 分野に 2 ~ 5 個ある。以上の形質からカラマツ属のカラマツ材と同定した。

カラマツは中部地方の山岳を中心に分布し、富士山では 3 合目～5 合目くらいの高さで優先する。木理は通直で肌目は粗く、重硬、加工性は中くらい、耐朽性は強い。建築材、土木用材、パルプ材などに使われる。当遺跡出土材は近世の曲物底板 1 点で、近世における奥地林の開発と流通の結果を表していると言える。

3) トウヒ属 *Picea* マツ科

挿写真 36:3a ~ c (木材番号 13129)

水平・垂直の両樹脂道をもつ針葉樹材で、晩材は量多くなく、早材から晩材への移行は緩やかで年輪はカラマツより目立たない。早材の仮道管径は小型で、晩材とは壁の厚さの違いで区別される。放射組織は単列と紡錘形があり、柔細胞、放射仮道管、それに水平樹脂道を囲む分泌細胞からなる。放射組織の上下縁辺には放射仮道管があり、孔口の狭い有縁壁孔が見られ、有縁部の断面は角張ることでカラマツから区別される。分野壁孔はトウヒ型で小さく、1分野に2～5個ある。これらの形質からトウヒ属の材と同定した。

本州中部に分布するトウヒ属の樹木にはトウヒ、バラモミ、ハリモミなどいくつかの種があるが、量的にやや多いのはトウヒである。これらは冷温帯から亜高山帯にかけて生育することと現在でもほとんど植林はされていないことから、奥地の天然林を伐りだして木材を商品として流通させたものと考えられる。トウヒの材は肌目美しく、木理通直、割裂性が良く、軽軟で切削加工が容易で仕上がりがよく、建築材、器具材などに用いられる。本遺跡出土材は曲物の側板と底板4点と用途不明材1点で、奥地林からの供給の結果と考えられる。

4) アカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc. マツ科

挿写真 37:4a～c (木材番号 12824)

年輪が明瞭な針葉樹材で、水平・垂直両樹脂道をもつ。早材部、晩材部とも幅広く、早材から晩材への移行はやや緩やかで、年輪は明瞭である。放射組織は単列と紡錘形があり、柔細胞、放射仮道管、それに水平樹脂道を囲む分泌細胞からなる。放射組織の上下に1～数層の放射仮道管があり、その細胞内壁には顕著な鋸歯状肥厚がある。放射柔組織の水平壁は平滑で、分野壁孔は大型の窓状で1分野に1個存在する。以上の形質より、マツ科のマツ属のアカマツの材と同定した。

アカマツは本州から九州までの低地から山地にかけて広く分布する針葉樹で、陽光地、二次林に多い。材は木理通直、肌目は粗く、心材の保存性は良く、特に水湿に強いので、建築材(特に基礎、土台回りなど)、土木用材、器具材などに幅広い用途があるほか、杭木などの特用がある。本遺跡出土材は近世の自在鉤、棟札、柱、板状、棒状の木材など5点である。

5) スギ *Cryptomeria japonica* (Linn. f.) D. Don スギ科

挿写真 37:5a～c (木材番号 12822)

水平・垂直の両樹脂道をもたない針葉樹材で、早材から晩材への移行は緩やか～やや急で、年輪幅は広いものから非常に狭いものまでの変異があり、明瞭である。樹脂細胞は晩材部に接線方向にややまとまりながら散在している。放射組織は、単列で放射柔細胞のみからなる。水平壁、垂直壁は平滑で壁孔は見られない。分野壁孔は大型のスギ型で1分野あたり通常2個あり、開孔部の長軸は水平に近い方向になる。以上の形質より、スギ科のスギの材と同定した。

スギ材は青森県南部から九州屋久島まで広く分布し、特に本州日本海側と東海地方に多い。成長が早く、大材が得易く、建築材を始め、各種器具材に縄文時代以来、北陸、東海地方でよく利用されてきている。当遺跡では今回調べた中世から近世までどの時代からも多数が出土し、合計で調べた231点のうち131点がスギである。用途は井戸の構造材が54点、曲物、折敷、組み物(桶)などの容器が24点、大足、下駄、扇、箸、しゃもじ、脚台、そして用途が不明の板材、棒材などである。

6) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科

挿写真 37:6a～c (木材番号 8726)

水平・垂直の両樹脂道をもたない針葉樹材で、早材から晩材への移行は急で年輪界は明瞭だが、晩材部の量が少ないので年輪そのものは大きく目立たない。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて散在し、その水平壁は数珠状に肥厚する。放射組織は単列で、放射柔組織のみからなり、分野壁孔は中型のヒノキ～トウヒ型で、1分野に2個ある。これらの形質から、ヒノキ科ヒノキ属のヒノキと同定した。

ヒノキは関東地方北部から九州屋久島まで広く分布するが、特に中部地方の山地帯に多い。わが国の針葉樹類中でもっとも材質が優れたものの一つで、古代の畿内地方を中心に大型の建築物の建築材や各種器具材、細工物、木簡や形代、斎串、曲物など、広く用いられてきている。当遺跡からは古代～近世まで少しずつであるが連続して出土している。出土材は曲物の側板、底盖板など8点、扇？、木簡、用途不明材など合計12点である。

7) サワラ *Chamaecyparis pisifera* Siebold et Zucc. ヒノキ科

挿写真 38:7a～c (木材番号 9968)

ヒノキ同様、水平・垂直樹脂道を欠き、仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材で、早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は少ない。樹脂細胞は晩材部付近に散在し、水平壁は数珠状を呈する。分野壁孔は中型のヒノキ型～スギ型で、1分野当たり普通2個存在し、ヒノキよりもやや孔口が大きく、開口部の長軸は水平に近くなる。以上の形質からヒノキ属のサワラの材と同定した。

サワラは本州中部の山地帯上部に分布するが資源量は多くない。材は木理通直で割裂性良く、ヒノキより軽軟で切削加工は容易であるが、光沢、香りはない。水湿に強いので桶類に、また、香りがないので飯びつや箸に用いられる。ヒノキに比べ材質は劣り、ヒノキの代用とされるほか、スギ同様の用途がある。本遺跡出土材は中世と近世のもので、曲物の側板、底板が7点、組み物の桶が2点、下駄が1点である。

8) ネズコ *Thuja standishii* (Gordon) Carr. ヒノキ科

挿写真 38:8a～c (木材番号 12231)

水平・垂直樹脂道を欠き、仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材で、年輪はやや広く、早材から晩材への移行はなだらかで、幅の広い年輪では晩材部は厚い。早材部仮道管はヒノキ、サワラより細い。樹脂細胞は晩材部付近に散在し、水平壁は数珠状を呈する。放射組織は柔細胞のみから成り、分野壁孔はヒノキ、サワラより小さく、スギ型で、1分野当たり2～4個ある。以上の形質からヒノキ科のネズコの材と同定した。

ネズコ(別名クロベ)は青森県以南の本州、紀伊、四国の山地帯上部、冷温帯に分布する。材は木理通直で肌目粗く、割裂性良く、軽軟で切削加工は容易で、水湿に強い。建築材、指物、曲物、桶、箱物、家具などに用いられる。当遺跡出土材は中～近世の桶1点である。

9) アスナロ *Thujopsis dolabrata* (Lin. Fil.) Siebold et Zucc. ヒノキ科

挿写真 38:9a～c (木材番号 13136)

水平・垂直樹脂道を欠き、仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材で、早材から晩材への移行はやや急、幅の狭い年輪ではヒノキ同様晩材部は少ない。ネズコ同様、早材部仮道管はヒノキ、サワラより細い。樹脂細胞は晩材部付近に散在し、水平壁は数珠状を呈する。放射組織は柔細胞のみから成り、分野壁孔はヒノキ、サワラより小さく、ヒノキ型～トウヒ型で、1分野当たり2～4個ある。以上の形質からヒノキ科のアスナロの材と同定した。

アスナロは日本特産の樹種で、基準変種の狭義のアスナロと変種のヒノキアスナロがある。いずれも樹高30m、幹径80cmになる高木で、狭義のアスナロは東北南部以南の本州、四国、九州に分布する。変種のヒノキアスナロは道南から東北地方、佐渡、能登半島に分布し、青森では「ヒバ」、能登では「アテ」とよばれる。両者には椀果の形態の違いがあるのみで材質等に大きな差はない。材は木理通直で肌目は精、やや軽軟で割裂容易、芳香を持ち、加工性は良く、仕上がりは美しい。特に水湿に強い。建築材の骨格部分のみならず装飾的部分、各種器具材、特に桶など水回りに使うものに特用され、土木用材としても重要である。当遺跡出土材は平安時代の斎串が1点、中～近世の曲物が2点である。

10) イヌマキ属 *Podocarpus* マキ科

挿写真 39:10a ~ c (木材番号 9091)

材が均質で年輪界のはっきりしない針葉樹材で、早材から晩材への移行は大変緩やかで、晩材部は年輪界附近の数細胞しか認められない。樹脂細胞が多く、年輪内全体に均一に散在するが、スギ科やヒノキ科のもののように黒褐色の樹脂様物質が蓄積されることはないで、横断面では見つけにくい。また樹脂細胞の水平壁はイヌガヤと違い、薄く平滑で、数珠状に肥厚することはない。放射組織は背の低い単列で、柔細胞のみから成り、分野壁孔は、小型のヒノキからトウヒ型、1分野あたり1~2個存在する。以上の形質から、マキ科のイヌマキ属の材と同定した。

イヌマキ属には関東地方南部以南の沿岸部の温暖地に生育するイヌマキ *Podocarpus macrophyllus* (Thunb.) Lambert とさらに紀伊半島南部より南西に分布するナギ *Podocarpus nagi* (Thunb.) Zoll. Et Moritz の2種があるが、その分布から当遺跡出土材はイヌマキと考えられる。イヌマキの材は年輪が不明瞭で木理通直、硬く緻密で粘りがあり特に水湿に強く、また、シロアリにも強い。本遺跡出土材は古代~中世の板状、棒状の部材など6点である。

11) ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

挿写真 39:11a ~ c (木材番号 9956)

断面楕円形の単独あるいは2個複合した道管が均一に散在する散孔材で、年輪界は目立たない。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状に配列する。らせん肥厚は見られない。放射組織は単列異性で道管との壁孔は交互状に密にある。これらの形質からヤナギ科ヤナギ属の材と同定した。

ヤナギ属は低木~高木になる落葉樹で、我が国には非常に多くの樹種があり、材構造は互いに近似していて樹種の区別はできない。木材は一般に軽軟で、割裂自在、耐朽性に劣る。箱物などの利用がある。当遺跡出土材は中~近世の下駄1点である。

12) カバノキ属 *Betula* カバノキ科

挿写真 39:12a ~ c (木材番号 9956)

中型で楕円形の単独あるいは2、3個放射方向に複合した道管が密度低く均一に分布する散孔材で年輪界は目立たない。道管の穿孔は横棒数が多くない階段状、道管相互の壁孔は微細な小孔紋で交互状に密にある。放射組織は1~4細胞幅のほぼ同性で、接線面では端正な紡錘形となる。これらの形質からカバノキ科カバノキ属の材と同定した。

日本には亜高山帯から山地帯に分布するダケカンバ、山地帯に分布するウダイカンバやシラカンバをはじめ、カバノキ属には多くの樹種がある。材構造は互いに似ていて樹種の識別は困難である。材質はいずれも堅硬緻密で粘りがあって割裂困難である。家具、指物、漆器木地、柄物、櫛、楽器などの材質を活かした用途がある。当遺跡出土材は近世の横櫛1点である。

13) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科

挿写真 40:13a ~ c (木材番号 9450)

年輪のはじめに円~卵形の大道管が1~3層に並び、そこから順次径を減じ、晩材部では薄壁多角形の小道管が火炎状の紋をなす環孔材である。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状にやや隙間を開けて配列する。らせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状及び単細胞幅の独立帯状で、晩材部で目立つ。放射組織は単列同性で背は低い。道管-放射組織間壁孔は不定形の楕円形で大振り、柵状にきちんと並ぶことはない。これらの形質からブナ科のクリの材と同定した。

クリは北海道石狩低地周辺から九州鹿児島までの冷温帯から暖温帯に広く分布する落葉高木で、幹直径1m以上、樹高30mほどとなる。材質は堅く、割裂が容易で心材は耐久力つよく水湿に特に強い。大材が得られるので大型建造物から一般の家屋の大黒柱や土台回り、屋根葺き材(くれこば)などに用いられるほか、家具、農具、などさまざまな部分に用いられ、また水湿に強いことから土木用材や鉄道

枕木などの特用があった。当遺跡出土材は古代～近世の建築材、横椽、下駄、漆器碗の他板状、棒状の木材など9点である。

14) コジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky ブナ科

挿写真 40:14a ~ c (木材番号 12779)

年輪の始めに丸い中～大型の道管が間隔を置いて1～3層並び、晩材部ではクリ同様薄壁多角形の小道管が集まって火炎状となる放射孔材～環孔材で、年輪界は目立たない。道管の穿孔は単一、側壁の穿孔は丸い小孔紋で交互状、木部柔組織は散在状及び単接線状である。放射組織は単列同性と集合放射組織の2型がある。道管-放射組織間壁孔は楕円形でしばしば縦に槽状に並ぶ。これらの形質からシイ属のコジイの材と同定した。スダジイからは集合放射組織が存在することで区別される。

コジイ(別名ツブラジイ)は関東地方南部以西の暖地に分布する常緑高木で、照葉樹林の主要な要素である。スダジイが海岸部に多いのに対し、これは内陸部に多い。材はやや硬めで緻密、割裂容易であるが肌目は粗く保存性は低い。建築材、器具材(柄物など)、下駄、薪炭材などに用いる。本遺跡出土材は中～近世の組み下駄1点である。

14') クリ/シイ *Castanea/Castanopsis* ブナ科

クリとシイ属の材構造での区別は主に道管の配列である。クリの大道管は年輪界に沿ってまんべんなく分布するのに対し、シイ属では間隔を置いてあるが、乾燥したりして内部構造の保存の悪い出土材ではこの区別を明確にすることができない。中世の棒状の用途不明材1点がこれであった。

15) ブナ属 *Fagus* ブナ科

挿写真 40:15a ~ c (木材番号 8719)

薄壁多角形の道管が均一に分布する散孔材で、道管の大きさは年輪界に向かって順次小さくなる。道管は数個が様々な方向に複合し、密にあるが、年輪界付近では小さくなるので密度が低く見える。穿孔は単一及び横椽が10本くらいと数の少ない階段状で、道管内壁にらせん肥厚はない。木部柔組織は散在状及び短接線状で、晩材部でやや目立つ。放射組織は1～数細胞幅の狭く背の低いものから10細胞以上となり肉眼で見えるほど幅広く背の高い大きなものまであり、ほぼ同性である。これらの形質からブナ属の材と同定した。

ブナ属には北海道南部から九州鹿児島県までの冷温帯に広く分布するブナ *Fagus crenata* Blume と本州の太平洋側、四国、九州の冷温帯下部から暖温帯上部に分布するイヌブナ *Fagus japonica* Maxim. があるが、材構造は互いによく似ていて識別は困難である。いずれも幹直径1m、樹高30mに達する落葉大高木である。ブナの材は堅硬緻密で割裂が容易で保存性は低い加工性はよく、建築材、家具材、器具材など広く用いられる。イヌブナの材はブナに比べると脆く、材質は劣るが、ブナ同様の用途があるが資源が限られており、あまり利用されない。本遺跡出土材は漆器碗9点で、中～近世のものが3点、近世のものが6点である。

16) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

挿写真 41:16a ~ c (木材番号 9028)

中型で丸い厚壁の道管がゆるくまとまりながら放射方向に年輪を越えて配列する放射孔材で、木部柔組織は独立帯状で接線状に多数配列してよく目立つ。道管の穿孔は単一、道管内壁にらせん肥厚はない。放射組織は単列のものと複合放射組織があり、道管-放射組織間壁孔は縦に長い楕円形で槽状に配列する。これらの形質からブナ科のコナラ属のうち、常緑のカシ類であるアカガシ亜属の材と同定した。

アカガシ亜属(カシ類)はブナ科コナラ属のうち、アカガシ、シラカシ、イチイガシなど常緑の樹種からなる亜属で、全国の暖温帯以南に広く分布し、照葉樹林の主要な要素である。多数の種があり、材構造による個々の種の識別は困難である。いずれの材も硬く緻密で強靱で粘りがあり、加工性には難がある

が、建築材、各種器具材、車輻材、柄物など広い用途がある。当遺跡出土材は古代の板状の材1点である。

17) ケヤキ *Zelkova serrate* Thunb. ニレ科

挿写真 41:17a ~ c (木材番号 9034)

丸～楕円形の大道管が年輪のはじめに1層に並び、孔圏外では薄壁多角形の小道管が多数集まって波状の紋をなす環孔材で、道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、小道管には顕著ならせん肥厚がある。放射組織は1～8細胞幅ほどで背はあまり高くなく、上下辺にしばしば大型の結晶細胞をもつ。これらの形質からニレ科のケヤキの材と同定した。

ケヤキは本州北端から四国、九州の全域の平地～山地帯に広く分布する落葉高木で、時に幹が3mに達する巨木となる。材は肌目やや粗で堅硬、強靱、弾力があり、加工性良く、時に美しい木目が出る。大型建築物の構造材、彫刻材、漆器木地等の特用の他、家具、器具などあらゆる用途がある。当遺跡出土材は中～近世の漆器椀5点である。

18) モクレン属 *Magnolia* モクレン科

写真図版 41:18a ~ c (木材番号 8717)

薄壁多角形～楕円形の小道管が単独あるいは放射方向に2～4個複合して均一に分布する散孔材で、年輪界付近で道管径はやや小さくなり、道管量が少なくなる。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は階段状、らせん肥厚はない。放射組織は2～3細胞でスマートな紡錘形、同性である。以上の形質からモクレン属の材と同定した。

モクレン属には全国の冷温帯から暖温帯上部にかけて広く分布するホオノキ、それよりもやや標高の低いところに多いコブシ、コブシよりもやや標高が高く、また日本海側の多雪地帯に多いタムシバなどが分布する。ホオノキ、コブシは幹径50cm、樹高15mを超える落葉高木で、特にホオノキでは幹が通直で樹高は優に20mを超える。ホオノキの材は軽軟緻密で木理通直、肌目は精で早晚材の差が少なく年輪が目立たないので加工性がよい良質の材である。建築、各種器具材に用いられるが、下駄、版木、小細工ものの特用がある。当遺跡出土材は近世の漆椀3点である。

19) シキミ *Illicium religiosum* Siebold et Zucc. シキミ科

写真図版 42:19a ~ c (木材番号 9961)

薄壁多角形の微細な道管が単独で年輪内に均一に分布する散孔材で、年輪界は全く目立たない。道管の穿孔は横棒がとて多い階段状である。放射組織は1～2細胞幅で背は高くなく、典型的な異性で、多列部は平伏細胞、単列部は直立細胞からなり、多列部は単列部よりわずかに幅広いだけである。これらの形質からシキミ科のシキミの材と同定した。

シキミは暖温帯の照葉樹林を特徴づける樹種の一つで、千葉県南部以西に分布する常緑低木～小高木である。材は堅く緻密で粘りがあり、割れにくく、小細工もの、柄物などに使われる。当遺跡出土材は中世の柄と思われる棒状材1点である。

20) カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Siebold et Zucc. カツラ科

挿写真 42:20a ~ c (木材番号 13128)

薄壁多角形の小道管が単独で均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たない。道管の穿孔は横棒が10～20本程度の階段状である。放射組織は1～2細胞幅で背は高くない。典型的な異性で、多列部は平伏細胞、単列部は直立細胞からなる。これらの形質からカツラ科のカツラの材と同定した。

カツラは全国の冷温帯に分布する落葉高木で水湿地を好み、時に幹が多数に別れ、「千本柱」とも称されることもある。材は軽軟で木理通直、靱性があって加工しやすく、各種器具材に広く用いられる。当遺跡出土材は近世の用途不明の板材1点である。

21) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科

挿写真 42:21a～c (木材番号 9548)

薄壁で多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、年輪界は全く目立たない。道管はほぼ単独で、穿孔は横棒の多い階段状である。木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織はほぼ単列の異性で、背は比較的高く、平伏細胞及び背の大変高い直立細胞からなる。これらの形質からツバキ科のサカキの材と同定した。

サカキは黒葉樹林を特徴づける常緑小高木で、関東南部以西に分布し、西南日本では普遍的な樹種であり、幹径 30 cm、樹高 8 m くらいになる。材は堅く粘りがあり、割裂困難で、萌芽枝がまっすぐによく伸びることから柄物に重用される。当遺跡出土材は時期不明の根材と思われるもの 1 点である。

22) トチノキ *Aesculus trubinata* Blume トチノキ科

挿写真 43:22a～c (木材番号 8999)

薄壁で楕円形の小道管が単独あるいは数個が放射方向に複合して散在する散孔材で、木部柔組織は目立たない。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、内壁に弱いらせん肥厚がある。放射組織は単列同性で背が低く、層階状配列する。これらの形質からトチノキ科のトチノキの材と同定した。

トチノキは北海道南部から九州にかけての温帯に広く分布する落葉高木で、時に直径 2 m、樹高 30 m を超える巨木となる。種子は有毒のサポニンを含むがこれを晒して取り除けば優良なデンプンが多量に取れる。材は肌理細かく柔らかく、加工性に優れるが狂いが出やすく、また保存性も低い。しかし大材が得られるので建築の大きな板を必要とする部分、大型の刳物、挽物、漆器木地などに縄文時代から非常によく利用されてきている。本遺跡出土材は中～近世の漆板 2 点である。

23) ツツジ属 *Rhododendron* ツツジ科

挿写真 43:23a～c (木材番号 13127)

ごく微細な断面多角形の道管がほぼ単独で均一に分布する散孔材で年輪界は全く目立たない。道管の穿孔は横棒が 10 本程度の階段状。放射組織は単列で直立細胞のみからなるものが大部分を占め、3～5 胞幅の多列の放射組織が不均一に出現する。これらの形質からツツジ科のツツジ属のうち、シャクナゲなどのような小高木になる樹種を除いた、ヤマツツジやミツバツツジの仲間材であることがわかる。

ツツジ属の材は硬く粘りがあるが資源が少ないのでほとんど利用されない。当遺跡出土材は近世の丸木の枝材 1 点で、庭にあったツツジを伐ったようなものである。

24) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科

挿写真 43:24a～c (木材番号 13160)

丸い大道管が年輪始めに 1～2 層に並び、孔圏外では厚壁の小道管が単独あるいは数個、放射方向に複合したものがまばらに散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は微小孔紋で密に分布し、螺旋肥厚はない。放射組織は 2 細胞幅で同性、背は低い。これらの形質からトネリコ属の材と同定した。

トネリコ属には北海道から本州北部の冷温帯の山地に多いアオダモ、湿地に多いヤチダモ、本州から九州の冷温帯から暖温帯に分布するシオジ、ヤマトアオダモ、マルバアオダモなど、小高木から高木となるものまでいくつかの種があるが材構造での識別は困難である。シオジの材はやや軽軟で強く弾力があり、木理通直で美しく、保存性が高く加工も容易である。床柱、床板などの建築材、和洋家具、タンス、農具、柄類、各種器具材、楽器、ラケット枠、スキーなど運動具の用途がある。当遺跡出土材は中～近世の漆器椀 3 点、挽物の皿 1 点、それに用途不明材 1 点である。

25) 竹類 *Bamboosidae* イネ科

SE93 からの近世と看做される出土品は外見から太さがある有節の遺物であり、竹類であることが見て取れたが、組織切片でも竹類であることが確認された。

(2) 古代～中世の寺家前遺跡出土木材の樹種構成の特徴

表13に、出土した231点の時期別の出土数を示した。樹種を調べた資料の6割がスギで占められ、次いで多かったのはヒノキ(5.6%)、サワラ(4.3%)で、針葉樹全体で10樹種187点(81%)。広葉樹(竹類も含む)は15樹種もあるが総数44点(19%)に過ぎない。今回の結果で改めて確認されたことはスギ材の古代～近世までどの時期も一貫して多用され続けていたことだろう。東海地方では弥生時代にスギ材を多用した資源利用が顕著となるが、それが近世までずっと続いてきたということである。弥生時代はもちろん、その後も少なくとも中世までは利用された杉材は天然林由来であると考えられる。現在でも愛鷹山塊や天城連山にはスギ天然林があるが、古い時代においてそれらの産地からスギを得たということではなく、登呂遺跡で見つかったスギ埋没林のごとく、当時の東海地方の平野部とその周囲の山地丘陵部には豊富なスギ資源が存在しており、それらを利用した結果の表れといえる。試料数が十分でないのははっきりと言い切ることはできないが、古代から中世へと続くこの杉材利用は近世になるとその比率(44点中7点)が落ちてくるように見える。これは一つにはスギ天然林資源の枯渇を意味し、一方では商業経済の発達による奥地林開発で、これまで市場に出回らなかつたトウヒ属やカラマツ、それに二次林の発達により増えたアカマツなどが利用されるようになったからと読むこともできる。また、近世の「スギ材」が人工林に由来することも十分考えられる。

数は少ないもののスギ同様に古代～近世まで利用されてきた樹木としてヒノキ、クリ、イヌマキ属等を挙げることができる。これらはいずれもスギ同様弥生時代から利用されてきた木材でその用途もほとんど変わっていない。一方、先ほど挙げたトウヒ属・アカマツ等の他に近世になって用いられるようになった樹種にブナ属・モクレン属などがある。いずれも漆器碗の木地で、特にブナの漆器碗は古代の終わり頃から使われはじめ、近世で最も多量に生産されるようになったもので、今回の結果はそれをはっきりと示しているといえる。

出土木材の樹種毎の用途を示したのが表14である。スギ材が非常に広い用途にたくさん使われていることはこの表でよくわかるが、「容器」とされたものは曲物、桶、折敷などである。遺物として出土する場合、組み物や曲物はそれぞれの部材

がバラバラになって出土するのが一般的である。これらに使用されている樹種はスギを筆頭にサワラ、ヒノキ、アスナロ、ネズコ、トウヒ属、モミ属、カラマツと多岐にわたる。一般的に、桶なり、曲物なりを見ると、底蓋板と側板は同じ樹種で作られているものと考えますが、今回、底板と側板が組みあって出土した曲物1115～1117(平安～中世?)では底板はスギ(木材番号8721)で側板はヒノキ(木材番号8722、8723)であることが確認でき、底板と側板の素材は必ずしも同じ樹種であるということではないことが遺物からも確認された。

一方、挽物の漆器碗については全22点で6樹種が同定されたが、中世はケヤキが3点、トネリコ属が1点であるのに対し、近世ではブナ属が6点、モクレン属が3点、

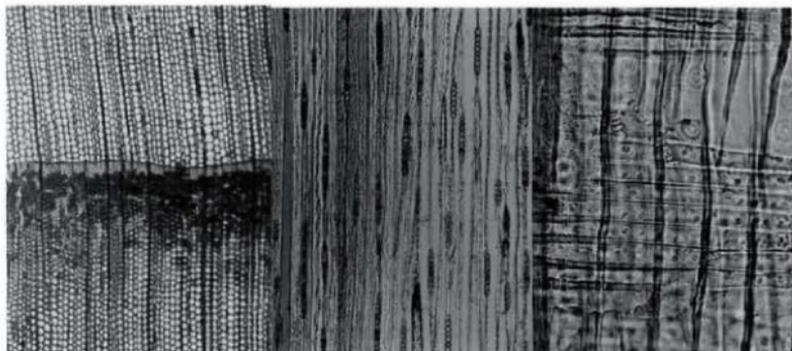
表13 出土木材の樹種別出土時期

樹種	古代	古代～中世	中世	中世～近世	近世	時期不詳	総計
タリ	1		2	2	3	1	9
アカガシ属	1						1
ケヤキ			3	2			5
トネリコ属			2	2			4
クリ/スダジイ			1				1
シキミ			1				1
ヤナギ属				1			1
コジイ				3			3
サカキ						1	1
トチノキ				1	1		2
カツラ					1		1
オハバノキ属					1		1
ツツジ属					1		1
竹類					1		1
モクレン属					3		3
ブナ属				3	6		9
スギ	23	12	72	17	7	6	137
ヒノキ	3	1	3	3	2	1	13
イヌマキ属	1	1	1	1		2	6
アスナロ	1		3	2			3
サワラ			3	5	2		10
モミ属			1		5		6
ネズコ				1			1
カラマツ					1		1
アカマツ					5		5
トウヒ属					5		5
総計	30	14	89	43	41	11	231

トチノキが1点と、全く樹種が異なっている。中世～近世とされたものが残りの8点でモクレン属を除く中世、近世の樹種他クリ1点がある。近世の漆器碗にはケヤキ-トチノキ-ブナという材質に応じた使用階層の違いがあることが指摘されているが、中世と近世の樹種の対比がそのようなものの反映なのか、あるいは市場経済の発展による流通の結果なのかは興味ある問題である。

表 14 出土木製品の樹種別用途

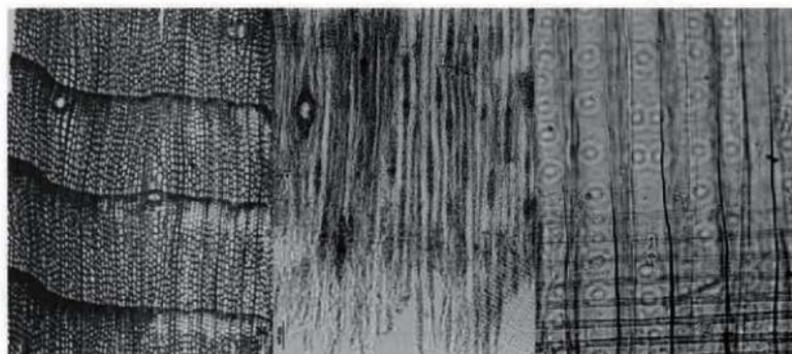
樹種	容器	井戸材	張身具	農具	建築材	土木材	運搬具	工具	祭祀具	食器具	家具	押込具	調理具	紡織具	木片	用途不明	総計
モミ属	2	1														3	6
カラマツ	1																1
トウヒ属	4															1	5
アカマツ					2								1			2	5
スギ	25	34	6	8	2	5	2	1	1	2	1		1	1		29	137
ヒノキ	8		1													3	13
サワラ	9		1														10
スズコ	1																1
アスナロ	2								1								3
イヌマキ属																6	6
ヤナギ属			1														1
カバノキ属			1														1
クリ	1		1		1			1								5	9
コジイ			3														3
クリノスダジイ																1	1
ブナ属	9																9
アカガシ属	5															1	1
ケヤキ																	5
モクレン属	3																3
シキミ																	1
カツラ																1	1
サカキ														1			1
トチノキ	2																2
ツツジ属																	1
トネリコ属	3																1
竹類																	1
総計	75	69	14	8	5	5	2	2	2	2	1	1	1	1	1	56	231



1a. モミ属 12488 木口×30.

1b. 同 板目×60.

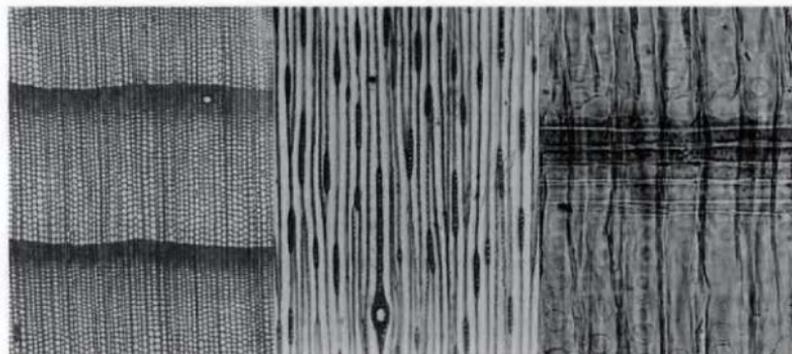
1c. 同 柁目×240.



2a. カラマツ 13142 木口×30.

2b. 同 板目×60.

2c. 同 柁目×240.



3a. トウヒ属 13129 木口×30.

3b. 同 板目×60.

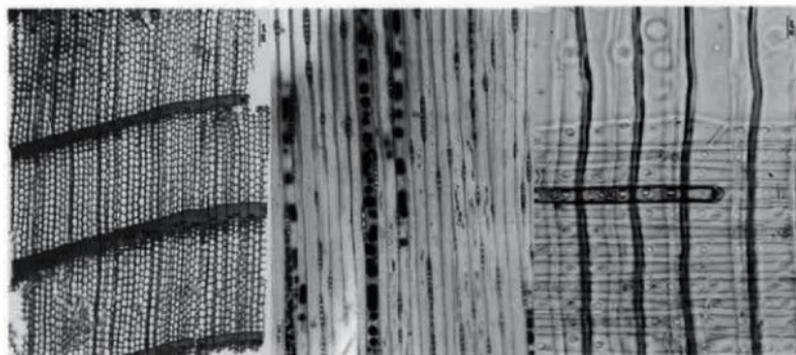
3c. 同 柁目×240.



4a. アカマツ 12824 木口×30.

4b. 同 板目×60.

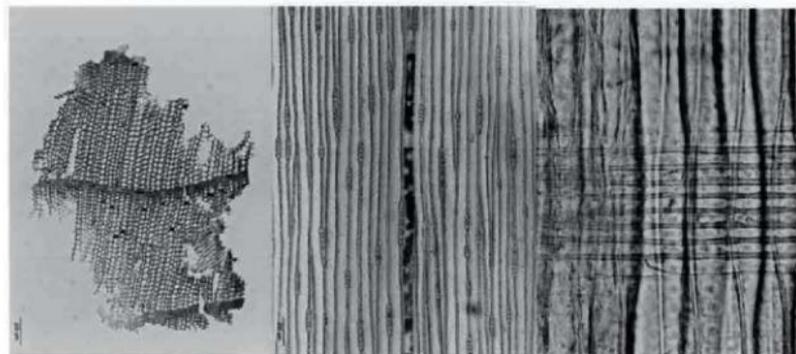
4c. 同 柁目×240.



5a. スギ 12822 木口×30.

5b. 同 板目×60.

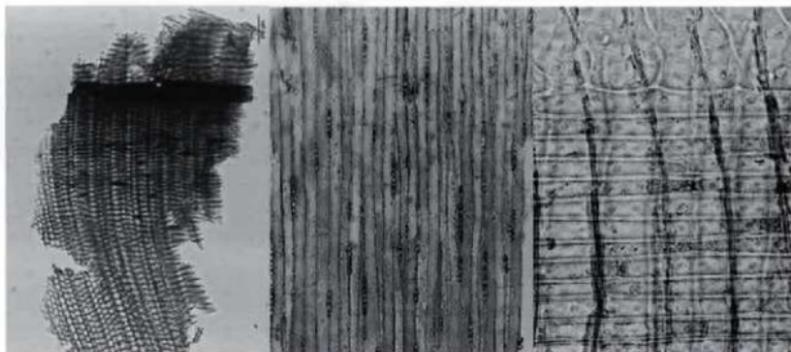
5c. 同 柁目×240.



6a. ヒノキ 8726 木口×30.

6b. 同 板目×60.

6c. 同 柁目×240.



7a. サワラ 9968 木口×30.

7b. 同 板目×60.

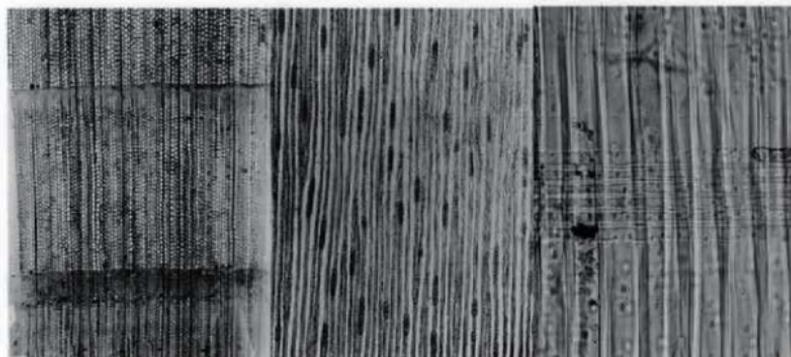
7c. 同 柀目×240.



8a. ネズコ 12231 木口×30.

8b. 同 板目×60.

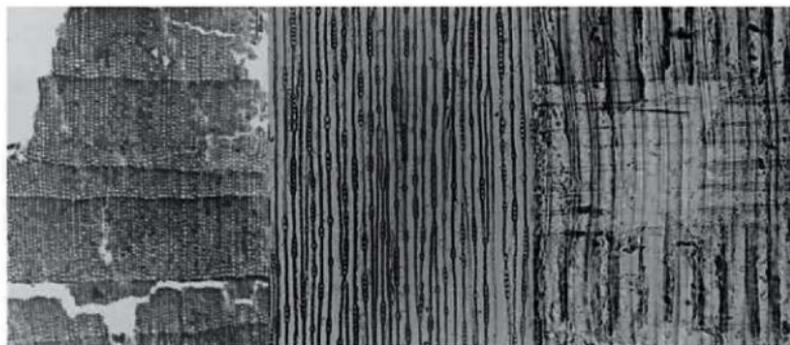
8c. 同 柀目×240.



9a. アスナロ 13136 木口×30.

9b. 同 板目×60.

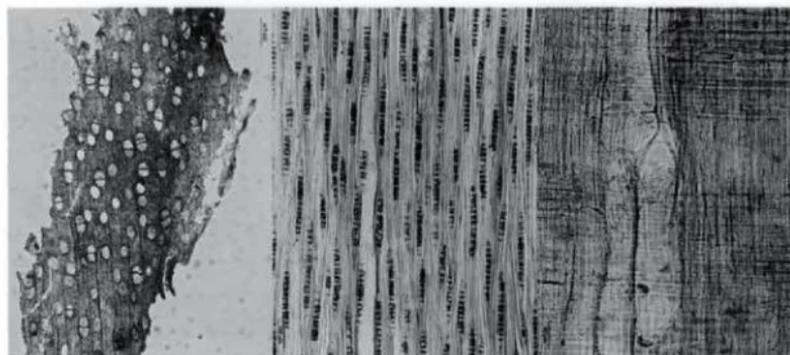
9c. 同 柀目×240.



10a. イヌマキ属 9091 木口×30.

10b. 同 板目×60.

10c. 同 柁目×240.



11a. ヤナギ属 9956 木口×30.

11b. 同 板目×60.

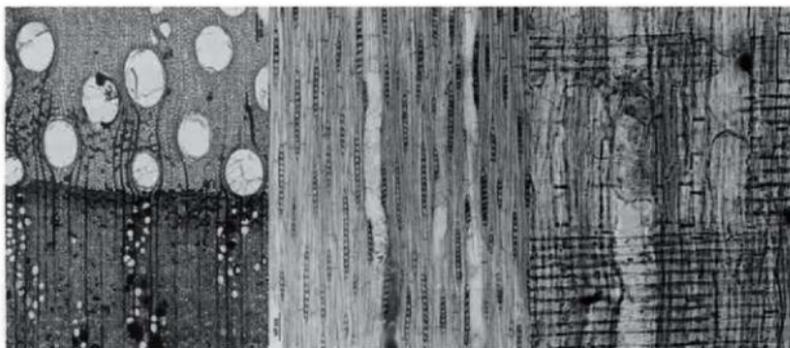
11c. 同 柁目×120.



12a. カバノキ属 9932 木口×30.

12b. 同 板目×60.

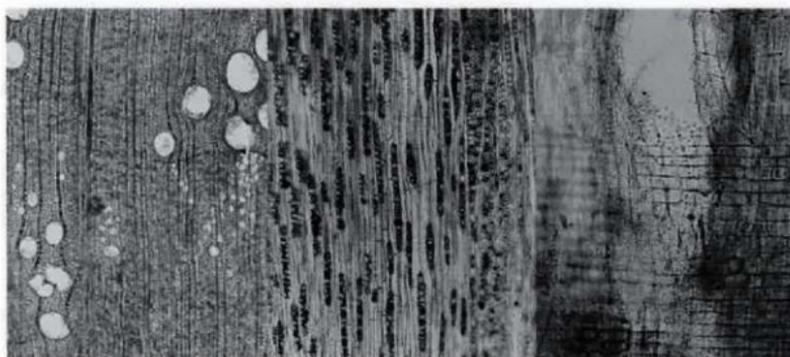
12c. 同 柁目×120.



13a. クリ 9450 木口×30.

13b. 同 板目×60.

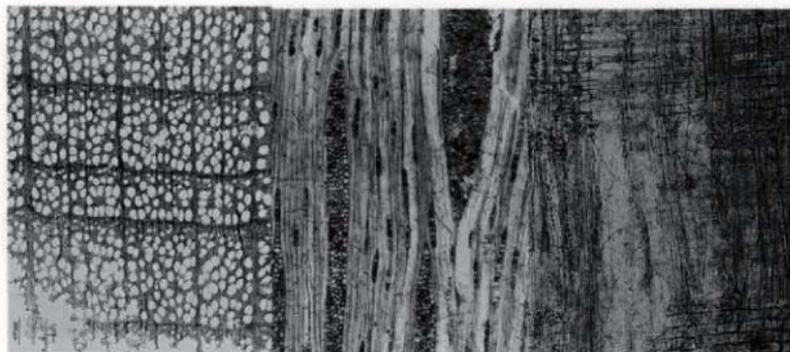
13c. 同 柁目×120.



14a. コジイ 12779 木口×30.

14b. 同 板目×60.

14c. 同 柁目×120.



15a. プナ属 8719 木口×30.

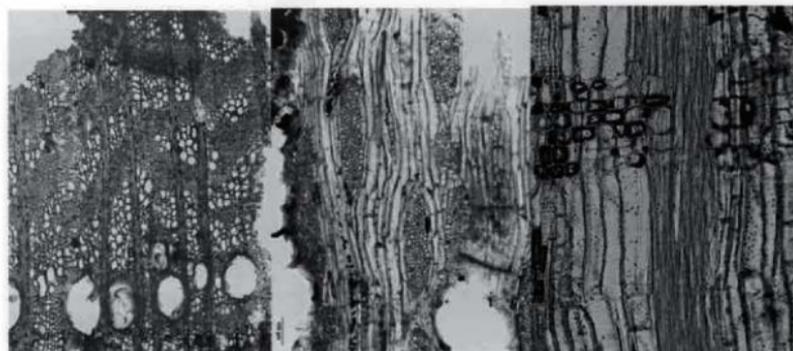
15b. 同 板目×60.

15c. 同 柁目×120.



16a. アカガシ亜属 9028 木口×30. 16b. 同 板目×60.

16c. 同 柁目×120.



17a. ケヤキ 9034 木口×30. 17b. 同 板目×60.

17c. 同 柁目×120.



18a. モクレン属 8717 木口×30. 18b. 同 板目×60.

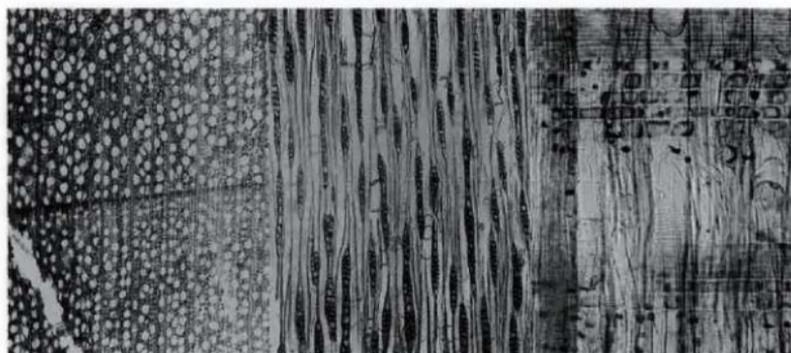
18c. 同 柁目×120.



19a. シキミ 9961 木口×30.

19b. 同 板目×60.

19c. 同 柎目×120.



20a. カツラ 13128 木口×30.

20b. 同 板目×60.

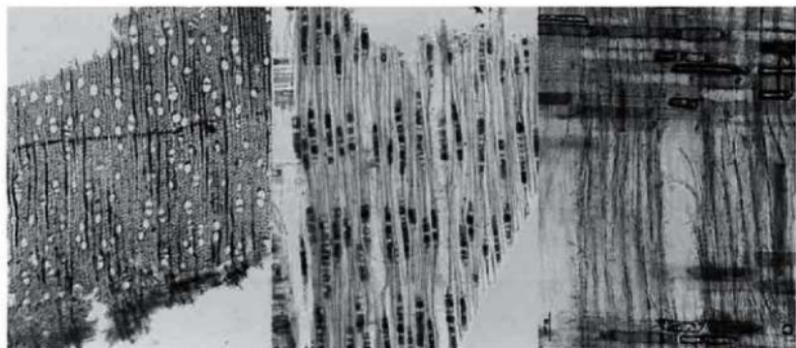
20c. 同 柎目×120.



21a. サカキ 9548 木口×30.

21b. 同 板目×60.

21c. 同 柎目×120.



22a. トチノキ 8999 木口×30.

22b. 同 板目×60.

22c. 同 柱目×120.



23a. ツツジ属 13127 木口×30.

23b. 同 板目×60.

23c. 同 柱目×120.



24a. トネリコ属 13160 木口×30.

24b. 同 板目×60.

24c. 同 柱目×120.

表 15 出土土器観察表

標識No	図版No	区	遺構層位	種類	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色澤	様式	備考	
1		F-2	3D309	山系陶	碗	—	0.90	0.00	30	赤(白色胎, 1~2mm 白色線文)	3D7/1灰白	1-1	東洋土系	
2	43	F-2	3D309	山系陶	小碗	8.0	4.2	2.95	95	赤(白色胎, 1~2mm 白色線文)	55/ 灰	1-2	東洋土系 スノコ胎	
3	43	F-2	3D309	山系陶	碗	(14.4)	0.33	4.9	40	赤(白色胎少)	56/ 灰	III-1	東洋土系 内面紅土線文	
4		F-2	3D309	山系陶	碗	(15.3)	0.99	3.30	30	赤(白色胎)	56/ 灰	III-1	東洋土系 スノコ胎	
5		F-2	3D309	山系陶	碗	(14.5)	8.35	4.25		口縁部~ 底部50	5D5/1灰	III-1	東洋土系 釜みあり	
6- 893		F-2	3D309	山系陶	碗	—	8.15	0.40		赤(白色胎, 20粒粒, 1~2mm白色線, 1~2mm 点文)	2.3D7/1灰白	III-2	東洋土系	
7		F-2	3D309	山系陶	小碗	08.0	0.90	2.0	60	赤(白色胎, 1~2mm 白色線文)	2.3D5/1黄灰	III-1	東洋土系 釜みあり	
8	80	F-2	3D309	曹磁	碗	—		02.40	5	赤	2.3D5/2灰オリーブ	III-6	越前土系	
9		F-2	3D364	山系陶	碗	—	7.5	0.55		底面50	4D86/2灰黄陶	1-2	東洋土系 底面紅土線文	
10-106		F-2	3D364	山系陶	碗	—	06.20	03.70		底面50	2.3D7/1灰白	III-1	東洋土系	
11	86	F-2	3D364	山系陶	小碗	08.35	3.95	02.40		口縁部~ 底面50	2.3D7/1灰白	1-2	東洋土系 器蓋 スノコ胎	
12		F-2	3D364	山系陶	小碗	7.0	4.15	1.75	100	赤(白色胎, 20粒粒, 10mm線文)	2D5/1黄灰	III-1	東洋土系 釜みあり	
13	43	F-2	3D369	河内陶器	碗	(15.2)	7.0	7.1		口縁部~ 底面100	2.3D7/1灰白			
14		F-2	3D392	山系陶	碗	(16.80)	6.7	6.0		口縁部~ 底面100	56/ 灰	1-2	東洋土系 釜みあり	
15	43	F-2	3D392	山系陶	輪形器	(14.1)	7.4	6.5		口縁部~ 底面100	5D6/1灰	1-1	東洋土系 釜み多い 輪花4箇所	
16	86	F-2	3D373	山系陶	碗	—	06.50	01.40		底面50	赤(白色胎, 赤色粒)	2.3D6/1灰	II	東洋土系 器蓋
17	43	F-2	3D373	河内陶器	小碗	8.2	4.2	3.2	95	赤(白色胎)	3D7/1灰白			
18	85	F-2	3D402	山系陶	碗	(16.4)	03.90	(03.80)	30	赤(白色胎, 1mm白色 線, 10mm点線)	2.3D86/1灰	1-1	東洋土系 器蓋	
19	85	F-2	3D402	山系陶	碗	—	7.7	02.95		口縁部~ 底面100	5D5.5/1灰	1-1	東洋土系 器蓋 内面紅土線文	
20		F-2	3D402	山系陶	碗	(17.2)	07.40	07.40		口縁部~ 底面100	2.3D5/2黄陶	1-1	東洋土系	
21		F-2	3D402	山系陶	碗	—	(7.39)	(4.4)		口縁部~ 底面50	赤(白色胎, 1~2mm 白色線, 3mm白色線)	56/ 灰	1-1	東洋土系
22	44	F-2	3D402	山系陶	碗	16.7	7.8	6.4		口縁部~ 底面100	赤(白色胎, 3mm白色 線, 黄色粒, 3~5mm 灰色線)	5D6/1灰	1-1	東洋土系
23		F-2	3D402	山系陶	碗	—	7.4	03.0	30	赤(白色胎, 1~2mm 白色線)	55/ 灰	1-2	東洋土系	
24	44	F-2	3D402	山系陶	碗	(16.8)	06.40	5.9	40	赤(白色胎, 1~2mm 白色線)	55/ 灰	1-1	東洋土系	
25	44	F-2	3D402	山系陶	碗	(16.8)	7.1	6.2		口縁部~ 底面50	赤(白色胎, 1~2mm 白色線)	2.3D7/1灰白	1-1	東洋土系 釜み多い
26		F-2	3D402	山系陶	碗	(17.7)	7.45	5.40		口縁部~ 底面100	赤(白色胎, 3mm白色 線, 黄色線)	1D85/1黄陶	1-1	東洋土系 器+内面紅土 線 釜み多い
27		F-2	3D402	山系陶	碗	—	7.65	04.10		口縁部~ 底面100	赤(白色胎, 2~3mm 白色線, 3mm白色線)	55/ 灰	1-1	東洋土系
28		F-2	3D402	山系陶	碗	(17.6)	07.30	7.9	20	赤(白色胎, 1~2mm 白色線)	2.3D7/1灰白	1-1	東洋土系 釜みあり	
29		F-2	3D402	山系陶	碗	—	06.90	03.1		口縁部~ 底面100	赤(白色胎, 1~2mm 白色線)	56/ 灰	1-2	東洋土系(器蓋の線文) 釜みあり スノコ胎
30		F-2	3D402	山系陶	碗	(14.2)	03.30	2.9		口縁部~ 底面50	赤(白色胎, 1~2mm 白色線)	2D6/1黄灰	1-2	東洋土系
31		F-2	3D402	山系陶	小碗	(14.0)	03.10	2.40	15	赤(白色胎, 1~2mm 白色線)	56/ 黄灰	1-2	東洋土系	
32-497		F-2	3D402	山系陶	碗	—	(7.0)	(03.75)		中~下部(白色胎, 灰色 粒, 1~2mm白色 点文, 1~2mm白色線 文)	2.3D5/1灰白	3変式	河内系 内面紅土 線 釜み多い	

表 15 出土土器観察表

標識No.	発掘No.	区	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	高さ	残存率(%)	胎土	色調	様式	備考	
33	F-2		S01452	山系鏡	小鏡	(10.1)	(5.7)	3.2	100	滑石白土、1~2mm 白色磁石	015/016	I-2	東漢江流 全体に薄く残存	
34-908	79	F-2	S01452	白磁	天輪鏡	(16.0)	-	(3.3)	100	滑石白土、茶褐色 磁石	019/020/01	II類		
35	F-2		S03049	瓦葺陶器	鏡	(16.4)	(7.2)	5.7	60	滑石白土、灰色色 磁石	016/016			
36	F-2		S03049	山系鏡	鏡	(7.0)	(3.9)	底径30	100	滑石白土	067/01	I-1	東漢江流、スノコ類	
37	44		S03049	山系鏡	鏡	15.90	6.9	5.0	80	滑石白土、灰色色、 1~2mm白色磁石	067/01	II類	東漢江流 遺跡あり、スノコ類	
38	F-2		S03049	山系鏡	鏡	(16.2)	(7.7)	4.65	30	滑石白土、褐色、 1mm白色磁石	017/016/01	III類	東漢江流	
39	F-2		S02452	山系鏡	鏡	-	7.5	(3.8)	底径90	滑石白土	067/01	I-2	東漢江流、スノコ類	
40	F-2		S02452	山系鏡	小鏡	-	(4.85)	(1.90)	底径20	滑石白土	067/01	I-2	東漢江流	
41	F-2		S01452	山系鏡	小鏡	(9.8)	-	(2.0)	100	100	滑石白土	015/016	III類	東漢江流
42-903	F-2		S02452	山系鏡	片口鉢	(29.3)	(13.9)	(13.0)	20	滑石白土、灰色色	2.017/016/01		奈良-瀬西系	
43	F-2		S02452	山系鏡	鏡	-	(6.0)	(2.1)	底径30	滑石白土、1~2mm 白色磁石	067/01	III類	東漢江流	
44	45	F-2	S02679	山系鏡	鏡	(16.4)	(6.9)	6.0	30	滑石白土	067/01	I-2	東漢江流	
45	F-2		S02679	山系鏡	鏡	-	6.4	(3.2)	底径100	滑石白土、1~1.5mm 灰色白色磁石	067/01	I-2	東漢江流	
46	F-2		S02679	山系鏡	鏡	-	6.65	(2.5)	底径100	滑石白土	057/016/01	II類	東漢江流、 スノコ類	
47	46	F-2	S02679	山系鏡	鏡	-	5.9	(3.6)	底径90	滑石白土	7.016/016	III類	東漢江流、 スノコ類	
48	F-2		S02679	山系鏡	鏡	(15.45)	(6.7)	4.65	底径40	滑石白土、1~2mm 白色磁石	1016/016	III類	遺跡あり	
49	F-2		S02679	山系鏡	鏡	-	7.15	(4.1)	底径90	滑石白土、1~2mm 白色磁石	057/01	II類	東漢江流、 スノコ類	
50	F-2		S02679	山系鏡	鏡	(15.1)	(4.2)	4.9	35	滑石白土、1~2mm 白色磁石	067/01	III類	東漢江流、 スノコ類	
51-909	F-2		S02679	山系鏡	鏡	-	5.9	(2.3)	底径100	滑石白土	067/016/01	III類	奈良-瀬西系	
52	F-2		S02679	山系鏡	鏡	-	(6.7)	(3.8)	底径95	滑石白土、灰色色、 1~2mm白色磁石	067/01	III類	東漢江流	
53	F-2		S02679	山系鏡	鏡	(13.15)	6.3	4.75	100	100	滑石白土、灰色色、 2~12mm白色磁石	067/01	III類	東漢江流 胎土 内底磁石類
54-902	F-2		S02679	山系鏡	鏡	(16.0)	7.1	5.2	100	100	滑石白土	017/016/01	III類	奈良-瀬西系 胎土類、遺跡あり スノコ類、スノコ類
55	55	F-2	S02679	山系鏡	鏡	(14.1)	(6.9)	5.8	30	滑石白土、1~2mm 茶褐色、1~2mm灰色 磁石	2.017/016/01	III類	東漢江流、スノコ類	
56	44	F-2	S02679	山系鏡	小鏡	6.0	4.3	2.4	100	滑石白土、1mm白色 磁石	067/01	III類	東漢江流、遺跡あり 胎土類、胎土類、胎土類、 胎土類、胎土類	
57	F-2		S02679	山系鏡	小鏡	(7.85)	(4.15)	2.2	30	滑石白土	057/01	III類	東漢江流	
58	F-2		S02679	山系鏡	小鏡	(7.90)	(3.85)	2.95	40	滑石白土	067/01	III類	東漢江流、 遺跡あり	
59	84	F-2	S02679	山系鏡	小鏡	7.95	4.65	2.2	100	滑石白土	067/01	III類	東漢江流	
60	84	F-2	S02679	山系鏡	小鏡	7.65	4.9	2.1	100	100	滑石白土	057/01	III類	東漢江流
61	44	F-2	S02679	山系鏡	小鏡	6.0	4.6	2.3	95	滑石白土	067/01	III類	東漢江流	
62	84	F-2	S02679	山系鏡	小鏡	7.7	5.05	1.95	100	100	滑石白土	2.016/016/01	III類	東漢江流 内底磁石類
63	F-2		S02679	山系鏡	小鏡	(9.25)	(4.8)	4.4	20	滑石白土	057/01	III類	東漢江流 内底磁石類	
64	F-2		S02679	山系鏡	小鏡	(7.0)	3.8	2.15	100	100	滑石白土、1~2mm 白色磁石	067/01	III類	東漢江流
65	45	F-2	S02679	山系鏡	小鏡	6.95	4.35	1.55	100	100	滑石白土	057/016/01	III類	東漢江流
66	F-2		S02679	山系鏡	小鏡	(8.2)	(4.8)	3.8	100	100	滑石白土、1~2mm 白色磁石	067/01	III類	東漢江流 胎土類
67	F-2		S02679	山系鏡	小鏡	(7.40)	(4.05)	4.9	100	100	滑石白土	057/01	III類	東漢江流 胎土類
68	F-2		S02679	山系鏡	片口鉢	-	(7.05)	3.6	底径10	底径10	057/016/01	I類	奈良-瀬西系	

表 15 出土土器観察表

標識No.	図版No.	区	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色澤	様式	備考
69		F-2	S02679	古志戸瓦	甕	-	(17.8)	2.43	8	赤(白色粒,1~1mm 灰色粒,白色粒)	2.0B5/2B赤		
70	41	F-3	S02679	山系陶	小瓶	(8.20)	3.7	2.10	60	赤(白色粒,灰色粒, 1~2mm白色粒)	S5/灰	Ⅱ-1	東洋江式
71	43	F-2	S0927	瀬戸	鉢鉢 口凸外底	-	3.20	(1.4)	底面50	赤(白色粒少,1mm灰色 粒)	赤(100/100/14子 内(不明)	大型1	私用磁
72		F-2	S0927	古志戸瓦	鉢鉢小瓶	(16.5)	(5.4)	(2.7)	40	赤(白色粒多)	白磁(赤黄 緑,2.0B4/2B赤)	黄赤	鉄線の痕行跡付
73-802		F-2	S0927	古瀬戸	四耳甕	-	-	-	第一-第三 30	赤(白色粒,2mm灰色 粒,1mm白色粒)	赤(100/100/14子 内(2.0B7/100白)	赤	鉄線付(10.0)cm 外面に磁線の型押し文
74		F-2	S0334	山系陶	片口鉢	(19.5)	-	(5.6)	以縁部20	赤(白色粒,灰色粒, 1~4mm白色粒)	S7/灰白	Ⅱ式1	知多系
75	43	F-2	S0334	山系陶	片口鉢	(19.8)	-	(5.30)	以縁部30	赤(白色粒,灰色粒, 1~3mm白色粒-白色粒)	赤(100/100/14子 内(2.0B6/100灰)	1	知多系
76		F-2	S0334	土師器	甕	(20.4)	-	(3.2)	以縁部20	赤(灰色粒,1~2mm 赤褐色粒-灰色粒)	10B6/2B白		最大径(24.0)cm
77		F-2	S0334	山系陶	小瓶	(8.1)	(4.8)	1.8	40	赤(白色粒,1~2mm 白色粒)	2.0B5/2B赤	Ⅱ-1	東洋江式
78		F-2	S0334	山系陶	甕	-	(6.5)	(2.6)	20	赤(白色粒)	S6/灰	Ⅱ-1	東洋江式
79		F-2	S0376	山系陶	小瓶	(8.40)	(3.10)	2.4	以縁部~ 底面50	赤(白色粒)	2.0B6/2B赤	1-2	東洋江式
80	43	F-2	S0376	山系陶	小瓶	(9.4)	(3.1)	2.95	底面50~ 底面100	赤(白色粒,1~1mm 白色粒)	S6/灰	1-2	東洋江式 赤褐色片
81		F-3	S0334	山系陶	甕	-	(8.4)	(3.2)	底面50	赤(白色粒,灰色粒)	S6/灰	1-2	東洋江式
82		F-2	S0376	山系陶	甕	(14.0)	(6.70)	6.8	40	赤(白色粒,1~2mm 白色粒,1~4mm灰色 粒)	S6/灰	1-2	東洋江式
83	43	F-2	S0376	山系陶	小瓶	(8.6)	(4.1)	2.50	以縁部~ 底面100	赤(白色粒,1~2mm 白色粒)	S7/灰白	1-1	東洋江式 赤褐色片
84	43	F-2	S0376	山系陶	小瓶	(8.7)	(4.9)	(4.8)	以縁部~ 底面100	赤(白色粒,1~1mm 白色粒,褐色粒,1mm 白色粒)	10B5/2B黄緑	1-2	東洋江式 赤褐色片
85		F-2	S0668	山系陶	小瓶	(7.5)	(4.4)	1.7	10	赤(白色粒)	S16/灰	Ⅱ-1	東洋江式
86	85	F-3	S0967	山系陶	甕	-	7.0	(3.2)	底面100	赤(白色粒,灰色粒)	S6/灰	Ⅱ-1	東洋江式 器蓋 スノコ付
87		F-3	S0967	山系陶	甕	-	6.3	(2.6)	底面50	赤(白色粒,1~1mm 白色粒-赤褐色粒)	S7/灰	Ⅱ-1	東洋江式 器蓋 スノコ付
88		F-3	S0967	山系陶	小瓶	(8.8)	(4.4)	2.5	50	赤(白色粒,1~1mm 白色粒-褐色粒)	S7/灰	Ⅱ	東洋江式 器蓋 灯明蓋
89	85	F-3	S0967	山系陶	小瓶	8.2	3.7	2.4	100	赤(白色粒,灰色粒)	2.0B/黄灰	Ⅱ	東洋江式 器蓋
90	85	F-3	S0967	山系陶	小瓶	-	3.5	2.1	90	赤(白色粒,灰色粒, 1~2mm白色粒)	S7/灰	Ⅱ-1	東洋江式 器蓋 灯明蓋 赤褐色片、外面磁付
91	85	F-3	S0967	山系陶	小瓶	-	3.7	(1.6)	底面100	赤(白色粒,灰色粒, 1~2mm白色粒)	S16/灰白	Ⅱ-1	東洋江式 器蓋
92	86	F-3	S0967	山系陶	小瓶	8.0	(4.4)	2.3	100	赤(白色粒)	S16/灰	Ⅱ-1	東洋江式 器蓋
93	86	F-3	S0967	山系陶	小瓶	7.8	(4.0)	2.2	100	赤(白色粒,2mm白色 粒,1~4mm赤褐色粒)	S16/灰	Ⅱ-1	東洋江式 私用磁
94		F-3	S0967	山系陶	小瓶	8.0	(4.1)	2.2	100	赤(白色粒,1~1mm 灰色粒)	S6/灰	Ⅱ-1	東洋江式
95	86	F-3	S0967	山系陶	小瓶	8.7	(4.25)	2.15	100	赤	10B6/100灰	Ⅱ-1	東洋江式 灯明蓋 内面磁付
96		F-3	S0967	山系陶	小瓶	(7.2)	(2.7)	2.2	40	赤(白色粒,灰色粒, 1~3mm白色粒)	S7/灰白	Ⅱ-1	東洋江式
97		F-3	S0967	土師器	片口鉢	(19.8)	(10.10)	(11.2)	以縁部~ 底面20	赤(白色粒,灰色粒, 1~4mm白色粒,1~5mm 白色粒)	S7/灰		
98	85	F-3	S0967	山系陶	甕	-	6.1	(3.4)	底面100	赤(白色粒,2mm白色 粒)	2.0B/100灰	Ⅱ-1	東洋江式 器蓋-私用磁付(内面 磁付 内面磁付)

表 15 出土土器観察表

種別%	図柄%	区	遺構 層位	種類	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色調	様式	備考	
99	F-3	S0907	山系銅	碗	(18.2)	17.0	7.3	25	破(白色胎)	S7/灰白	I-1	東洋式 スノコ型		
100	F-3	S0907	山系銅	碗	-	6.4	(3.8)	底面0	破(白色胎)	S6/灰	III-1	東洋式 器蓋 スノコ型		
101	F-2	S0907	山系銅	碗	-	6.5	(3.3)	底面100	破(白色胎, 3mm白色 線少)	E.015/10黄	I-2	東洋式		
102	F-3	S0907	山系銅	小碗	(9.3)	(4.9)	2.40	口縁10~ 底面30	破(白色胎)	E.077/灰白	I-2	東洋式 スノコ型		
103	F-2	S0907	山系銅	碗	-	(7.0)	(3.0)	底面30	破(白色胎)	E.016/10黄	III-3	東洋式		
104	F-2	S0907	山系銅	碗	-	7.6	(2.5)	底面0	破	E.077/灰白	III-1	東洋式		
105	48	F-2	S0907	山系銅	小瓶	7.7	3.7	1.8	40	破(白色胎)	S7/灰白	III-1	東洋式 スノコ型 内山銅製 磁石埋込	
106	48	F-2	S0908	山系銅	碗	(17.0)	8.3	16.3	口縁20~ 底面30	破(白色胎, 3mm白色 線)	S7/灰白	I-2	東洋式	
107	F-2	S0913	山系銅	碗	(22.0)	-	(3.3)	口縁23	破(白色胎, 1mm白色 線少)	S6/灰		東洋式		
108	F-2	S0912	山系銅	碗	(18.5)	-	(4.0)	口縁23	破(白色胎, 1mm白色 線)	S6/灰		東洋式		
109	F-2	S0912	山系銅	碗	-	18.2	(3.0)	底面30	破(白色胎, 灰色胎)	D7/灰白	I-2	東洋式		
110	F-2	S0979	山系銅	碗	(14.0)	-	(3.2)	0	破(白色胎, 2mm灰 白色線少)	S6/灰	I-2~III-3	東洋式		
111	F-3	S0913	山系銅	碗	-	18.3	(2.2)	20	破(白色胎, 1~2mm 白色線-褐色線少)	S5/灰	I-2	東洋式 スノコ型		
112	F-3	S0910	山系銅	小碗	(16.9)	16.0	3.0	25	破(白色-褐色-灰色 胎-1~3mm褐色 線)	E.072/灰白	I-2	東洋式		
113	F-3	S0912	山系銅	小瓶	(7.4)	3.0	(1.9)	口縁19~ 底面30	破	S7/灰白	II	東洋式 スノコ型		
116	48	F-3	S0913	山系銅	碗	(15.9)	6.5	(5.0)	口縁5~ 底面100	破(白色胎, 3mm白色 線)	S6/灰	III-1	東洋式 器蓋 内山銅製	
117	F-3	S0913	山系銅	碗	(18.2)	(7.4)	(3.4)	40	破(白色胎, 1~2mm 白色線)	1016/10	III-1	東洋式		
118	48	F-2	S0913	山系銅	碗	16.23	7.0	4.7	90	破(白色胎, 2~3mm 褐色線)	S6/灰	III-1	東洋式 スノコ型	
119	48	F-3	S0913	山系銅	碗	-	6.3	(2.2)	底面100	破(白色胎)	1016/10	III-3	東洋式 器蓋 スノコ型	
120	48	F-3	S0913	山系銅	小瓶	7.5	3.8	2.15	100	破(白色胎, 1mm白色 線)	D7/10	III-1	東洋式	
121	F-2	S0920	山系銅	碗	(16.2)	16.0	(4.9)	特殊60~ 底面60	破(白色胎)	1016/10埋没	III-1	東洋式 スノコ型		
122	43	F-2	S0915	山系銅	碗	13.4	3.6	3.5	90	破(白色胎, 褐色胎, 1~2mm白色線, 5mm 砂線)	S7/灰白	I-2	東洋式	
123	F-3	S0915	山系銅	小碗	9.2	4.7	3.3	90	破(白色胎, 1mm白色 線様)	S6/灰	I-2	東洋式		
124	F-2	S0915	山系銅	小碗	(18.2)	(5.9)	2.85	40	破(白色胎, 3mm白色 線, 3mm褐色線)	D8/10	I-2	東洋式		
125	F-3	S0976	山系銅	碗	-	7.2	(4.3)	底面0	破(白色胎, 7mm砂 線)	S6/灰	I-2	東洋式		
126	48	F-3	S0979	山系銅	碗	-	6.6	(2.1)	特殊10~ 底面100	破(白色胎)	S5/灰	III-1	東洋式 器蓋 内山銅製	
127	F-3	S09126	山系銅	小碗	(18.6)	(5.0)	(2.7)	特殊10~ 底面30	破(白色胎, 3mm白色 線)	S6/灰	I-2~III-3	東洋式		
128	48	F-3	S0979	山系銅	碗	16.1	7.4	5.5	100	破(白色胎多, 褐色胎, 2~3mm砂線少)	E.006/10オリーブ灰	III-1	東洋式	
129	48	F-2	S0979	山系銅	小瓶	8.0	3.6	2.3	95	破(白色胎少)	S7/灰白	III-1	東洋式 内山銅製	
130	F-3	S0906	山系銅	碗	-	(7.2)	(2.2)	底面30	破(白色胎少)	E.015/10黄	I-2	東洋式 スノコ型		
131	F-2	S0906	山系銅	碗	-	18.4	2.9	底面30	破(白色胎)	S6/灰	I-2	東洋式 スノコ型		
132	F-2	S0906	山系銅	碗	-	18.4	(2.9)	底面100	破(白色胎)	E.006/10オリーブ灰	I-1	東洋式 スノコ型		
133	F-2	S0906	山系銅	碗	-	(7.0)	(2.1)	底面100	破(白色胎, 赤褐色胎, 白色胎土胎)	S4/灰	III-1	東洋式 特殊		
134	F-2	S0906	山系銅	碗	-	6.7	(2.4)	底面100	破(白色胎, 褐色胎)	D7/10灰白	III-1	東洋式 器蓋 内山銅製		

表 15 出土土器観察表

標高%	図面%	区	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色澤	様式	備考	
145	08	F-3	2E306	山系陶	小瓶	7.45	3.9	4.95	100	赤(白色粒, 1~2mm 白色微塵)	56/ 灰	器-1	東洋式系 内面磨光	
146		F-1	2F149	山系陶	碗	-	(7.3)	(1.5)	20	赤(白色粒少)	576.5/13灰白	器-1	東洋式系 内面磨光	
147		F-1	惣地層	須恵器	杯蓋	-	-	(3.3)	20	赤(白色粒)	577/ 灰白		幅内器種(位.1)ow 器のみあり	
148		F-1	惣地層	須恵器	杯蓋	(19.2)	-	(1.3)	10	赤(白色微塵)	581/ 灰			
149	09	F-1	惣地層	須恵器	杯蓋	18.8	-	3.45	20	赤(白色粒少, 1mm白色 微塵)	575/13灰		幅内器種(位.2)ow 外面自然焼	
150		F-1	惣地層	須恵器	杯身	-	(8.8)	(1.4)	20	赤(白色粒, 1~2mm 白色微塵)	56/ 灰		器のみあり	
151		F-1	惣地層	須恵器	杯身	-	(8.9)	(1.3)	45	赤(白色粒)	2.376/13黄灰			
152		F-1	惣地層	須恵器	杯身	-	(11.4)	(4.4)	底面20	赤(白色微塵)	56/ 灰			
153		F-1	惣地層	瓦輪陶器	碗	-	(7.4)	(2.4)	底面40	赤(白粒少, 1~2mm 灰白微塵)	2.377/13灰白		瓦輪の管縁のみ	
154		F-1	惣地層	瓦輪陶器	碗	-	(8.4)	(2.4)	20	赤(白色粒, 1~2mm 白色微塵, 5mm砂)	10786/3成黄焼		管付者	
155		F-1	惣地層	瓦輪陶器	瓦輪蓋	-	(7.2)	(4.3)		赤(白粒少, 1~2mm 灰白微塵)	2.377/13灰白			
156		F-1	惣地層	須恵器	壺	-	(18.2)	(11.4)	唇面20~ 底面50	赤(白色粒少)	574/13灰		最大径(位.4)ow	
157		F-1	惣地層	山系陶	碗	-	7.4	(2.1)	底面20	赤(白色粒)	7.376/13灰	1-2	東洋式系	
158		F-1	惣地層	山系陶	碗	(11.3)	(5.1)	4.2		以縁部~ 底面20	赤(白色, 黒色粒)	576/13灰	器-2	東洋式系
159		F-1	惣地層	山系陶	碗	(11.2)	6.7	4.4		以縁部~ 底面40	赤(白色粒, 1~2mm 褐色微塵)	576/13灰	器-2	東洋式系
160		F-1	惣地層	山系陶	碗	(11.1)	6.9)	3.5	15	赤(白色粒, 黒色粒)	2.377/13灰白	器-2	東洋式系	
161		F-1	惣地層	山系陶	碗	(11.7)	(3.5)	4.6)	以縁部~ 底面20	赤(白色粒, 2mm褐色 微塵, 5mm砂)	55/ 灰	器-2	東洋式系 幅内器種 器-1, 器-2 のみあり	
162		F-1	惣地層	山系陶	碗	(15.4)	6.6)	3.9	5	赤(白色粒)	56/ 灰	器-2	東洋式系	
163		F-1	惣地層	山系陶	小瓶	-	(5.7)	(1.3)	底面25	赤(白色粒, 2mm白色 微塵)	7.376/13灰	器-2	東洋式系 器のみあり	
164		F-1	惣地層	山系陶	小瓶	8.2)	(4.4)	2.15		以縁部~ 底面25	赤(白色粒, 褐色粒, 1~2mm白色微塵~褐色 微塵少)	2.377/成黄焼	器-1	東洋式系
165		F-1	惣地層	山系陶	小瓶	(7.9)	(4.9)	1.6		以縁部~ 底面20	赤(白色粒, 2mm白色 微塵)	56/ 灰	器-1	東洋式系 幅内器種
166		F-1	惣地層	山系陶	小瓶	(7.7)	(4.4)	1.4		以縁部~ 底面20	赤(5mm砂)	56/ 灰	器-2	東洋式系
167		F-1	惣地層	山系陶	小瓶	3.4	(4.4)	1.2)	20	赤(白色粒)	2.377/13灰白	器-2	東洋式系	
168	09	F-1	惣地層	山系陶	小瓶	3.7	3.8	1.6		以縁部~ 底面100	赤(5mm砂, 1mm砂少)	575/13黄灰	器-2	東洋式系 内面磨光
169		F-1	惣地層	山系陶	片口鉢	(36.8)	(18.2)	14.5		以縁部~ 底面10	赤(白色粒, 1~5mm 白色微塵, 1~5mm褐色 微塵)	577/13灰白	1部~ 5部式	知事系 内面磨光
170		F-1	惣地層	瓦片	壺	(26.5)	-	(5.4)	以縁部20	赤(白色粒, 5mm褐色 微塵, 1~2mm白色微塵少)	5747/13黄灰 輪.2.375/13黄灰		器のみあり	
171	09	F-1	惣地層	瓦片	壺	(18.8)	(18.8)	(16.7)	以縁部~ 底面5	赤(白色粒, 1~5mm 褐色, 1~2mm白色微塵)	5748/23成黄 輪.2.373/13成黄微塵	6部式	最大径(26.8)ow 数輪	
172		F-1	5B9	須恵器	杯蓋	(14.4)	-	(1.9)	底面20	赤(白色粒, 黒色粒)	577/13灰白			
173		F-1	5B9	須恵器	杯身	(19.2)	(12.4)	6.75	5	赤(白色微塵)	1078/13灰			
174	6-20	9B33	須恵器	杯身	-	(16.4)	(1.5)	底面20	赤(白色粒少)	576/13灰				
175		F-1	5B33	山系陶	碗	-	(7.5)	(1.7)	底面40	赤(白色粒, 1~2mm 灰白色)	56/ 灰	器-1	東洋式系 器のみあり 内面磨光	
176		F-1	4306	山系陶	小瓶	-	4.15	(2.3)	底面100	赤(白色粒, 褐色粒)	577/ 灰白	1-2	東洋式系	
177		F-1	7層水田	須恵器	杯蓋	-	-	(2.5)	幅内器種	赤(白色粒)	56/ 灰		幅内器種(位.3)ow	
178		F-1	7層水田	須恵器	杯蓋	-	-	(1.4)	幅内器種100	赤(白色粒多)	55/ 灰		幅内器種(位.5)ow 数輪	
179		F-1	7層水田	須恵器	杯蓋	(14.2)	-	2.9	25	赤(白色粒)	56/ 灰		幅内器種(位.1)ow	
180	08	F-1	7層水田	須恵器	杯蓋	10.6	-	2.6	95	赤(白色粒, 灰白色粒, 1~2mm白色微塵)	576/13黄灰		幅内器種(位.4)ow 器のみあり	
181		F-1	7層水田	須恵器	杯蓋	(14.4)	-	(2.4)	以縁部10	赤(白色粒, 灰白色粒)	2.377/13灰白			

表 15 出土土器観察表

種別%	図柄%	区	遺構 層位	種類	器種名	口径	底径	高さ	残存率(%)	胎土	色調	様式	備考
182	3-1	7層木田	遊樂器	杯身	(16.4)	-	12.0	20	底面0	赤(白色胎)	55/灰		
183	3-1	7層木田	遊樂器	杯身	-	(9.3)	12.1	20	赤(白色胎, 2mm白色 線)	55/灰			
184	3-1	7層木田	遊樂器	杯身	-	(8.2)	12.3	40	赤(白色胎)	56/灰		外面磨面(1)	
185	3-1	7層木田	遊樂器	杯身	-	(6.4)	12.15	20	赤(白色胎)	57/灰白		外面磨面(1)	
186	3-1	7層木田	遊樂器	杯身	-	(7.4)	11.1	20	赤(白色胎)	59W/灰		外面磨面(1)	
187	3-1	7層木田	遊樂器	杯身	-	(8.4)	11.4	20	赤(白色胎, 1mm白色 線, 1~2mm白色線)	57/灰白		磨面(1)	
188	3-1	7層木田	遊樂器	杯身	-	(8.3)	12.0	25	赤(白色胎)	54/灰			
189	3-1	7層木田	遊樂器	杯身	-	(8.4)	12.15	20	赤(白色胎)	57/灰白		外面磨面(1)	
190	3-1	7層木田	遊樂器	杯身	-	(9.4)	11.7	20	赤(白色胎)	57/灰白		磨面(1)	
191	3-1	7層木田	遊樂器	杯身	-	(5.4)	12.4	底面0	赤(白色胎, 灰色胎)	57/灰白		磨面(1)	
192	3-2	6-7層木田?	遊樂器	杯身	-	(1.4)	(2.4)	残高10~ 底面0	赤(白色胎, 1mm白色 線)	59/灰		底面磨面	
193	3-2	6-7層木田端	遊樂器	杯身	-	(1.5)	1.2	36	赤(白色胎)	55/灰		磨面(1)	
194	3-2	7層木田 横竹上端部	遊樂器	杯身	-	(1.2)	(1.4)	底面0	赤(白色胎, 灰色胎)	55/灰			
195	3-2	6-7層木田?	遊樂器	杯身	(8.4)	(1.4)	1.90	15線5~ 底面0	赤	2.07/灰白			
196	3-1	7層木田	灰胎陶器	碗	(11.4)	-	(1.4)	10	赤(白色胎, 1~3mm 白色線)	赤・白・灰 (陶7, 57/灰白 内: 2.55/1裏底 (陶2, 59/1裏底)			
197	3-1	7層木田	灰胎陶器	碗	-	(6.4)	(2.4)	30	赤(白色胎, 3mm白色 線)	2.07/灰白			
198	3-2	7層木田	灰胎陶器	碗	-	(6.4)	(1.4)	20	赤(白色胎)	59/灰			
199	48	3-1	7層木田	灰胎陶器	碗	(15.4)	(2.4)	2.7	20	赤(白色胎, 灰色胎)	57/灰白		
200	4	7層木田	灰胎陶器	碗	-	(1.4)	(2.4)	50	赤(白色胎, 灰色胎)	59/灰			
201	3-2	7層木田	山瓦筒	筒	-	(7.4)	3.1	40	赤(白色胎, 1~2mm 白色線)	2.07/灰白		1-1	
202	3-2	7層木田	山瓦筒	筒	-	(8.4)	(1.4)	残高~ 底面0	赤(白色胎)	57/灰白		1-2	
203	3-2	7層木田	山瓦筒	筒	(15.7)	-	(1.2)	20	赤(白色胎, 1~2mm 白色線)	内: 59/灰		灰胎(1)	
204	3-2	7層木田	山瓦筒	筒	-	(8.7)	(2.4)	20	赤(白色胎, 1~2mm 白色線)	59W/裏底		■	
205	48	3-2	7層木田	山瓦筒	小皿	(8.4)	(1.4)	2.95	15線20~ 底面0	赤(白色胎, 灰色胎, 3mm線)	2.06/灰		1-2~ 目上
206	3-2	7層木田	山瓦筒	筒	-	(7.4)	(2.4)	底面0	赤(白色胎, 灰色胎)	57/灰白		■	
207	3-2	7層木田	山瓦筒	小皿	-	(1.4)	(1.15)	残高10~ 底面0	赤(白色胎, 5mm線)	56/灰		■1-2	
208	3-2	7層木田	山瓦筒	筒	-	(6.4)	(1.4)	20	赤(白色胎)	59/灰		■1	
209	3-1	534	遊樂器	杯身	-	(7.9)	(1.7)	50	赤(白色胎, 1~2mm 白色線)	56/灰		■1	
210	3-1	534	山瓦筒	筒	-	(8.4)	(1.4)	30	赤(白色胎, 3mm白色 線)	59/灰		■1	
211	48	3-1	534	山瓦筒	筒	(11.1)	(1.7)	4.9	15線10~ 底面0	赤(白色胎, 灰色胎)	57/灰白		■2
212	48	3-1	534	山瓦筒	筒	(15.4)	(1.4)	4.4	15線20~ 底面0	赤(5~3mm線)	55/灰		■2
213	49	3-1	534	山瓦筒	小皿	7.9	4.8	1.65	15線40~ 底面100	赤(1mm線)	2.06/灰白		■3
214	49	3-1	534	山瓦筒	小皿	7.45	3.8	1.75	残高70~ 底面100	赤(白色胎)	56/灰		■3
215	3-1	534	香罏	罏	-	(1.2)	(2.4)	残高20~ 底面0	赤(白色胎, 2mm線)	赤・白・灰 陶2・505・1オリーブ 灰		51線	
216	36	3-1	535B	山瓦筒	筒	(13.4)	(8.4)	(1.4)	底面0	赤(白色胎, 灰色胎)	56/灰		1-1
217	37	3-2	5F100	小・中・大17		11.4	4.0	2.8	15線40~ 底面100	赤(白色胎, 1~2mm 白色線, 1~1mm白色 線)	59W/5裏底		磨面(1)
218	37	3-2	5F100	小・中・大17		11.4	4.25	2.8	100	赤(褐色胎, 1~2mm 白色線)	2.08/12.01・磨		全体に磨面
219	37	3-2	5F100	小・中・大17		(13.7)	(1.35)	2.45	40	赤(白色胎, 褐色胎, 1~2mm白色線)	2.08/7裏底		全体に磨面
220	37	3-2	5F100	小・中・大17		11.35	4.75	2.95	15線75~ 底面100	赤(褐色胎, 1~3mm 褐色線, 1/5白色線)	597/4底		全体に磨面(1)

表 15 出土土器観察表

探検号	区画No.	区	遺構 層位	種類	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色澤	様式	備考
293	27	F-2	3F1426	F4+G17		(11.25)	8.3	(2.63)	口縁部～ 底面90	灰(褐色胎,1～2mm 褐色織り)	2.10R74黄		全体に磨滅
294		F-2	3F1427	F4+G17		(11.6)	(5.1)	3.5	40	灰(白色胎,褐色胎)	2.10T23黄		全体に磨滅
295		F-2	3F1428	F4+G17		(16.75)	(4.2)	(3.15)		灰(白色胎,褐色胎, 1～2mm褐色織り)	10R72/142.5白+黄褐色		全体に磨滅
296	27	F-2	3F3069	F4+G17		(11.5)	5.45	3.15	口縁部～ 底面90	灰(白色胎多,褐色胎, 1～2mm褐色織,1～2mm 白色織り)	10R72/142.5白+黄褐色		全体に磨滅
297	27	F-2	3F3069	F4+G17		(16.55)	(5.55)	3.15	口縁部～ 底面90	灰(白色胎,褐色胎, 1～2mm褐色織り)	10R72/142.5白+黄褐色		全体に磨滅
298		F-2	3F1145	山系溝	小皿	(2.0)	(2.9)	2.1	30	灰(白色胎,褐色胎)	内40D7/14C		
299		F-2	3F1145	山系溝	碗	-	(6.4)	(1.4)	底面20	灰(白色胎,1～2mm 白色織り)	内40D3/14C	群-I	裏面打痕
300		F-1	3F292	F4+G17		(8.5)	(4.8)	2.4	20	灰(赤褐色胎)	5R74黄		
301		F-1	3F292	志戸瓦	碗	-	2.7	(2.2)	底面90	灰(白色胎)	外:2.10T1/4.10黄 2.10R6/142.5白+黄 胎(胎:3.10T2黄+ブルー 内:1胎)3/4.5(胎:オ リーブ)	大型4編	
302		F-2	3F1294	F4+G17	有明蓋	(12.4)	-	3.6	15	灰(白色胎,褐色胎, 1～2mm褐色織+褐色 織り)	10R72/142.5白+黄褐色		内面打痕
303		F-2	3F1808	山系溝	碗	(15.4)	(2.3)	4.2	20	灰(白色胎,1～2mm 赤褐色織+白色織り)	10R65/28黄褐色		
304		F-2	3F1812	山系溝	碗	-	(2.7)	(2.2)	底面90	灰(白色胎,灰色胎)	5T2/14C白		スノコ型
305	29	F-1	3X164	志戸瓦	丸瓶	(16.2)	5.25	6.9	口縁部～ 底面100	灰(白色胎,灰色胎)	外:2.10R2/28黄 2.10R6/142.5白+黄 胎(胎:3.10T1/7.1黄 内:1胎)7.10R1.7/1黄	大型4編	
306		F-1	3X164	志戸瓦	丸瓶	-	4.7	(2.4)	底面30～ 底面100	灰(白色胎,1～2mm 白色織り)	外:10R12/14C 胎(胎:3.10T1黄 内:1A.5黄)	大型3編	
307		F-1	3X164	志戸瓦	丸瓶	-	(5.2)	(4.5)	底面10～ 底面30	灰(白色胎多,1mm白色 織+褐色織り)	5R6/14C 胎:3.10T2/28黄 3/1.5黄	大型6編	
308		F-1	3X164	志戸瓦	丸瓶	-	(4.8)	(2.4)	10	灰(白色胎)	外:2.10T1黄褐色 胎(胎:10R2/14C黄 内:1胎)10R1.7/1黄	大型7編	
309	29	F-1	3X164	志戸瓦	小鉢	8.65	4.4	4.5	口縁部～ 底面90	灰(白色胎多,1～2mm 白色織,5mm黄褐色 織り)	外:2.10R2/142.5白+黄 胎(胎:10R1/7黄 内:1胎)7.10R2/28C		
310	29	F-1	3X164	志戸瓦	香炉	-	(6.8)	(4.4)	底面30～ 底面90	灰(白色胎,1～2mm 白色織り)	外:10R6/142.5白+黄 胎(胎:10R2/14C黄 内:2.10R1.6/2.5白+赤 織,7.10R6/142.5白+ 黄)	大型4編	
311	29	F-1	3X164	志戸瓦	香炉	(14.8)	(5.8)	6.1	口縁部～ 底面90	灰(白色胎,1～2mm 白色織,2.5mm黄褐色 織り)	2.10R7/28黄	大型4編	内面裏打痕存在
312		F-1	3X164	志戸瓦	香炉	(14.4)	(6.1)	6.8	60	灰(白色胎,5mm白色 織り)	2.10R6/142.5白+黄 胎(胎:10R2/14C黄)	大型4	裏面あり 内面裏打痕存在
313		F-1	3X164	志戸瓦	香炉?	-	(6.4)	(4.35)	30	灰(白色胎,1～2mm 白色織,5mm白色織り)	10R6/28黄褐色 胎:10R2/14C黄 10R1.7/1黄	大型3編	内面裏打痕存在 底面時の裏に黄褐色
314	29	F-1	3X164	志戸瓦	香炉	(16.25)	(6.9)	5.2	口縁部～ 底面90	灰(白色胎多,1～2mm 白色織り)	外:10R6/28C黄褐色 胎:10R2/14C黄	大型4編	

表 15 出土土器観察表

種別%	図形%	区	遺構 層位	種類	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色調	様式	備考
		F-1	S3164	志戸瓦	香炉	109.0	96.90	5.60	40	赤(白赤胎)	赤-2.006/312.51+黄 (胎)014/300オリーブ 内-10005/312.51+黄 胎 (胎)012/4黄		
		F-1	S3164	山形網	小瓶	78.00	6.50	2.60	30	赤(白赤胎)	S7/ 灰白	1-2	表面は赤、底は黒しい
		F-1	S3164	山形網	瓶	-	96.30	1.95	30	赤(白赤胎)	S7/ 灰白	皿-1	表面-黒褐色
	皿	F-1	S3164	志戸瓦	仏蘭瓦	8.45	5.4	6.2	口径20～ 底径30	赤(白赤胎)	赤-2.006/312.51+黄 (胎)015/300オリーブ 0100/3黄胎 内-10005/312.51+黄 胎	大器4種	表面径4.05cm
		F-1	S3164	志戸瓦	丸人瓦?	(95.1)	(11.0)	9.4	18	赤(白赤胎少, 2mm白色 線少)	赤-2.017/100白 (胎)009/7/1黄 胎016+黄 内-2.017/100白 (胎)009/7/1黄	大器3種	
		F-1	S3164	志戸瓦	小瓶?	(7.2)	(4.0)	2.2	40	赤(白赤胎)	赤-3004/20黄 (胎)009/312.51+赤 胎 内-2.006/20黄	大器4種	
		F-1	S3164	舟形瓦17		(2.8)	(4.3)	1.6	30	赤(白赤胎少)	赤-2.006/312.51+黄 内-006/42.51+黄		
	皿	F-1	S3164	舟形瓦17		8.4	5.6	2.00	口径20～ 底径100	赤(白～2mm褐色線)	2.007/312.51+黄 胎007/100白		底は黒しい
		F-1	S3164	舟形瓦17		(8.2)	(4.0)	1.9	20	赤(褐色胎, 1～3mm褐色 線少)	赤-10007/312.51+黄 内-007/42.51+黄		
		F-1	S3164	舟形瓦17		(8.0)	(5.3)	2.20	40	赤(白赤胎, 赤褐色胎, 1～3mm褐色線)	2.017/20黄		
		F-1	S3164	舟形瓦17		(8.2)	(6.1)	2.20	30	赤(白～2mm褐色線)	赤-2.007/42.51+ 黄 赤-2.006/100白 内-2.007/42.51+黄		底は赤い
		F-1	S3164	舟形瓦17		(8.6)	(4.2)	2.1	25	赤	赤-0007/42.51+黄 内-2.006/42.51+黄		
		F-1	S3164	舟形瓦17		8.2	4.2	2.05	25	赤(白赤胎, 2mm褐色 線)	赤-2.017/20黄 (胎)006/42.51+黄 内-2.006/312.51+黄		底は赤黒しい
		F-1	S3164	舟形瓦17		(8.0)	(4.3)	2.3	50	赤	赤-0006/42.51+黄 内-007/42.51+黄		底は赤い?
		F-1	S3164	舟形瓦17		(8.0)	(4.0)	2.1	40	赤(白赤胎少, 2mm褐色 線)	赤-2.006/312.51+黄 内-007/42.51+黄胎		底は赤黒しい
		F-1	S3164	舟形瓦17		(8.0)	(4.0)	2.25	口径20～ 底径100	赤	2.006/42.51+黄 S7/ 灰白		
		F-1	S3164	肥前	横網	-	14.0	(3.40)	30	赤(白赤胎)	赤-00/ 灰白 (胎)2.007/100緑灰 内-006/100灰 (胎)2.009/100緑灰		
		F-1	S3164	肥前	丸網?	-	4.15	(2.1)	口径100	赤	胎: 009/100白 底径: 2.007/100緑灰		
		F-1	S3164	肥前	横網?	-	(6.1)	(2.60)	30	赤(白赤胎, 1mm白色 線)	赤-0006/312.51+黄 (胎)009/100白 内-006/42黄		
		F-1	S3164	肥前	輪瓦	-	(8.0)	(2.10)	40	赤(白赤胎少)	赤-2.006/100白 内-2.006/100白 (胎)2.014/300オリーブ		

表 15 出土土器観察表

洋図№	図版№	区	遺構 層位	種別	器種名	口径	高さ	器高	保存率(%)	胎土	色澤	様式	備考
333		E-1	S3164	灰皿		—	(7.7)	(2.4)	底面90	赤(白色)紅少, 3mm白色 線(線)	赤:377/146白 内:(線)2.378/312.5 1-黄 委付工.374/290オ サーブ		宮内東陽館
336		E-1	S3164	灰皿	菊籠	—	(6.4)	(3.20)	40	赤(白色)紅少, 3mm白色 線(線)	赤:2.378/290白 内:(線)2.378/312.5 黄 委付工.374/290オ サーブ	壁316	
337		E-1	S3164	灰皿	菊籠	—	(6.3)	(3.3)	30	赤(白色)紅, 1~2mm 白色線(少)	赤:2.378/290白 内:(線)2.378/312.5 黄 委付工.374/290オ サーブ	壁316	
339		E-1	S3164	灰皿	若緑輪先縁	(17.0)	—	(3.4)	20	赤	輪:2.307/1明オサー ブ		
339		E-1	S3164	灰皿	若緑輪先縁	—	(6.4)	(2.90)	底面90	赤(白色)紅, 1~2mm 白色線(線)	278/130白 輪:2.378/290白		
340	30	E-1	S3164	甕戸	文官茶碗	(16.4)	(4.4)	6.4	口縁部~ 底面90	赤:378/146白 内:(線)3.374/290 黄	壁46-7		
341	30	E-1	S3164	灰皿	足呂茶碗	(16.2)	(5.4)	6.4	口縁部~ 底面90	赤(白色)紅少, 1~2mm 白色線, 1~2mm(茶 線)	赤:2.377/290黄 内:(線)2.378/312.5 黄 委付工.374/290オ サーブ	壁7	
342		E-1	S3164	甕戸	陶文鏡	—	4.2	(3.4)	60	赤(1mm)白色線, 3mm 白色線(線)	赤:378/146白 内:(線)1092/3茶 内:(線)92/3茶	壁4	
343		E-1	S3164	灰皿	大皿	—	6.1	(2.2)	底面90	赤(白色)紅, 1~2mm 白色線(少)	赤:378/146白 内:(線)2.377/130白 内:(線)2.377/146白	壁316	
344	30	E-1	S3164	灰皿	香炉	(8.3)	5.9	2.95	口縁部~ 底面90	赤(白色)紅(少)	377/130白 輪:2.376/オサーブ 黄	壁9	内面おぼえ
345-364		E-1	S3164	器蓋	赤黄銅	—	—	—	347.3	赤(白色)紅, 3mm白色 線(少)	赤:377/146白 内:(線)3.374/黄	溝渠文	
346	30	E-1	S3164	甕戸	片口鉢	(15.4)	(6.7)	9.15	口縁部~ 底面90 (注128)	赤(白色)紅, 1~4mm 白色線(線)	赤:378/146白 内:(線)378/290白	壁8	足込みにエトナシ 色澤に様付者
347		E-1	S3164	甕戸	片口	—	(7.2)	(4.65)	底面90	赤(2mm)白色線(線)	赤:378/146白 内:(線)377/290白 内:(線)377/290白	壁4-6	足込みにエトナシ(2箇 所)
348		E-1	S3164	甕戸	罐鉢	—	(6.4)	(2.63)	25	赤(白色)紅, 1~2mm 白色線, 6高線)	輪:2.378/1赤 内:(線)7	大型17	スリ目(単位10本以上)
349		E-1	S3164	甕戸	罐鉢	(26.2)	—	(5.2)	5	赤(1~2mm)白色線(線)	輪:2.378/3茶 内:(線)377/290白	壁4	スリ目(単位12本以上)
350		E-1	S3164	甕戸	罐鉢	(34.4)	—	(6.4)	15	赤(白色)紅, 6高線, 1~3mm(茶高線)	輪:2.378/1茶 内:(線)377/290白	壁8	スリ目(単位11本)
351		E-1	S3164	甕戸	罐鉢	(35.2)	—	(3.20)	5	赤(白色)紅(少)	赤:(線)378/312.5 1-赤 内:(線)378/312.5 1-赤	壁9	スリ目(単位4本以上)
352		E-1	S3164	志戸瓦	罐鉢	(35.60)	—	(7.2)	10	赤(白色)紅, 1~2mm 白色線(少), 3mm白色 線(線)	赤:2.378/1茶 内:(線)377/290白	最大径45.4mm スリ目(単位10本)	
353		E-1	S3164	志戸瓦	罐鉢	(31.4)	—	(5.5)	5	赤(白色)紅, 1~2mm 白色線(線)	赤:2.378/1茶 内:(線)377/290白	スリ目(単位9本)	
354		E-1	S3164	志戸瓦	罐鉢	—	(16.4)	(12.1)	体部部~ 底面70	赤(白色)紅少, 1~3mm 白色線, 3mm白色線(線)	赤:378/146白 内:(線)3.374/290 黄 委付工.374/290オ サーブ	大型16	スリ目(単位11本)
355		E-1	S3164	志戸瓦	罐鉢	(31.4)	—	(10.3)	20	赤(白色)紅, 1~2mm 白色線(少)	赤:2.378/312.5 1-黄 内:(線)2.378/312.5 1-黄	スリ目(単位8本)	
356		E-1	S3164	志戸瓦	罐鉢	(34.5)	—	(8.99)	5	赤(白色)紅, 茶色紅, 2~3mm白色線-橙 色(茶高線), 2~3mm 白色線(線)	1098/312.5 1-黄 輪:378/312.5 1-黄 黄 委付工.374/290オ サーブ	大型16	スリ目(単位9本)
357		E-1	S3164	志戸瓦	罐鉢	(29.4)	—	(3.75)	5	赤(白色)紅, 茶色紅	赤:(線)2.378/312.5 1-黄 内:(線)2.378/312.5 1-黄	壁6	スリ目(単位4本以上)

表 15 出土土器観察表

種別No	図面No	区	遺構 層位	種類	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色調	様式	備考
306		F-1	S164	土師器	罐鉢	(20.13)	9.8	15.4	0	白赤胎、1~2mm 白色染、3~5mm(穴 確認)	2.0R3/20焼		メナ目(単位10枚)
370		F-1	S126 中層	青磁	碗	-	(3.9)	1.95	底面40	産	外:10T7/13C白 内:10T7.10T5/25Cオリーブ 内:10T10T5/2オリーブ 灰	A3焼	鉄胎土
371		F-1	S126 上層	青磁	鉢	-	-	-	20	産	外:10T5/2オリーブ灰	B3焼 復原	鉄胎土 明代 復原(土師器)
372	H	F-1	S126	青磁	碗	-	(3.9)	2.3	底面60	産(白色胎土)	外:5G/ 灰 内:10T2.50T5/1オリーブ 内:10T2.50T5/1オ リーブ灰	C3焼	鉄胎土 内底にナンブ文(蓮花十 吉祥文)焼
373		F-1	S126 中層	高麗	碗蓋	-	(6.4)	(4.15)	0	白赤胎土	外:10T6/13C白 内:10T5/3オリーブ 内:10T17/25黄	製3.4	内底に蓮花蓋の跡も 内底の軸に草織の跡も 出てた部分破損かと思われる
374		F-1	S126 中層	肥前	皿	-	(4.6)	(1.55)	20	産(白色胎土)	外:10T9/1明緑灰 受け:10R62/1黄灰		
375		F-1	S126 中層	肥前	碗蓋?	-	(4.4)	(1.5)	45	産	外:10T6/13C白 内:10T9/1明緑灰 受け:土師器(赤胎 内:土師器) 内:土師器		
376		F-1	S126 中層	肥前	鉢?	-	(6.9)	(2.35)	底面10	産	外: 灰白 内:10T9/1明緑灰 受け:10R/1黄灰		
377		F-1	S126 中層	肥前	鉢?	(14.1)	(7.95)	3.9	19	産	外:10T6/13C白 受け:10R/1黄灰 内:10R/1黄灰		
378		F-1	S126 中層	肥前	皿	(14.6)	(8.2)	3.15	底面10	産	外: 灰白 内:土師器(赤胎 受け:10T2.5オリーブ 灰)		
379		F-1	S126 上層	肥前	式部碗	-	(3.9)	(3.3)	底面20~ 底面30	産	外: 灰白 内:土師器(赤胎 受け:10R62/1黄灰)		
380		F-1	S126 中層	肥前	小碗	-	(3.9)	2.3	40	産	外:10T6/13C白 内:10T2.50T5/1オ リーブ灰 内:10T2.50T5/13C白		
381		F-1	S126 中層	肥前	小碗?	-	3.2	(2.4)	底面40~ 底面100	産	外:黄/ 灰白 受け:10R/1黄灰		底面外周に土師器の受け あり
382		F-1	S126 中層	肥前	湯瓶	-	(8.2)	(4.65)	30	産(白色胎)	外:10T7/13C白 内:10R62/1明黄灰 内:10T7/13C白+黄 胎 受け:10R/1黄灰		
383		F-1	S126 下層	肥前	瀬利湯呑	-	3.4	(2.15)	底面95	産	外:10T7/13C白 受け:10R/1黄灰		
384		F-1	S126 上層	肥前	瀬利湯呑	-	(3.9)	(2.3)	底面30	産	外:土師器(赤胎) 内:10R62/1黄灰 内:土師器(赤胎) 内:10T5/3オリーブ 灰		
385		F-1	S126 下層	肥前	瀬利湯呑	-	4.0	(2.75)	底面20	産	外:黄/ 灰白 内:10T7.50T5/1明緑 内:10T9/1明緑灰 内:10R62/1黄灰 内:10R62/1黄灰		
386		F-1	S126 中層	肥前	瀬利湯呑	(7.2)	-	(4.3)	20	産	外:10T10/ 灰白 受け:10R62/1黄灰 内:10R58/ 灰白 受け:10R64/1黄灰		
387		F-1	S126 中層	肥前	湯呑?	(8.9)	-	(3.4)	19	産(白色胎土)	外:土師器(赤胎) 受け:10R/1黄灰		
388		F-1	S126 下層	肥前	湯呑?	-	(3.4)	(2.75)	底面20	産	外:黄/ 灰白 受け:10R/1黄灰		

表 15 出土土器観察表

探検No.	図版No.	区	遺構 層位	種類	器種名	口径	高さ	器高	保存率(%)	胎土	色調	様式	備考
289		F-1	SX205 中層	高蓋	白明蓋	7.45	4.0	1.45	95	赤(白色胎,1mm白色 線少)	赤:208/180白 胎:107/180白 内:2,208/208白	図1-11	内径5.25cm
290	42	F-1	SX205	志戸瓦	白明蓋	17.80	3.5	2.3	口縁部～ 底部90%	赤(白色胎)	赤:208/48赤黄 胎:108/12赤赤		胎は意図的にうろ掘った 可能性あり
291		F-1	SX205 下層	志戸瓦	白明蓋	19.40	13.40	2.85	口縁部～ 底部20%	赤(白色胎)	赤:208/42赤赤黄 胎:108/42赤赤 内:208/20赤赤	大型4組	内径16.80cm 蓋ふちなし
292		F-1	SX205 中層	肥前	赤中フ	18.20	-	13.71	20	赤	赤:胎:胎:赤/赤白 内:胎:胎:胎:赤黄 内:赤/赤白		
293		F-1	SX205 上層	志戸瓦	赤中	-	17.40	3.90	20	赤(白色胎)	赤:胎:胎:赤:赤黄 胎:胎:胎:赤:赤 内:胎:胎:赤:赤黄 内:胎:胎:赤:赤黄	大型4組	
294	42	F-1	SX205	志戸瓦	蓋物の身	19.80	6.9	7.4	50	赤(白色胎,白色線, 2～3mmの線)	赤:208/32赤赤黄 胎:2,208/22赤赤 内:208/180白		
295-297	42	F-1	SX205	古瀬戸	瓶フ	-	-	-	底部20%	赤(白色胎,1mm白色 線少)	赤:胎:胎:赤:赤オリーブ 黄 赤:2,208/2オリーブ 内:2,207/208白		前段小径
298		F-1	SX205 上層	山系陶	瓶	-	56.23	13.70	20	赤(白色胎,1～2mm 白色線)	赤/赤		東道正派 スノコ前
299		F-1	SX205 中層	瓦輪陶器	水筒	-	7.45	1.40	90	赤(白色胎,1～2mm 白色線,2mm白色線 少)	赤:赤/赤白 内:208/180白		内面化粧
299		F-1	SX205 中層	山系陶	瓶	-	16.71	11.80	40	赤(白色胎,1mm白色 線,2～3mm白色線 少)	赤/赤白	1-2	東道正派
299		F-1	SX205 中層	山系陶	小瓶	-	14.10	11.20	50	赤(白色胎,1～2mm 白色線)	赤/赤		東道正派
300		F-1	SX205 中層	古瀬戸	蓋中	-	12.50	11.60	40	赤(1mm白色線,1mm 6光線)	赤/赤白		底部外面にトレンプ?
301		F-1	SX205 中層	山系陶	瓶	-	16.40	12.31	10	赤(白色胎多,1mm白色 線,3mm白色線)	赤:赤:赤:赤黄 内:赤:赤:赤黄 内:赤:赤:赤黄	1-2	東道正派 スノコ前
302		F-1	SX205 上層	山系陶	中瓶	-	12.41	1.2	90	赤(白色胎多,3mm白色 線)	赤:赤/赤白 内:208/180白	1-2	東道正派
303		F-1	SX205 中層	山系陶	鉢	-	-	-	25	赤(白色胎,赤色胎多, 1～2mm白色線)	赤/赤	1組	器面と断面に埋付着した 痕跡が見える
304		F-1	SX205 中層	瀬戸	大付茶碗	14.90	-	13.40	20	赤(1～2mm白色線,1mm 6光線)	赤:赤:赤:赤黄 胎:胎:胎:赤黄 内:胎:胎:赤:赤黄 内:胎:胎:赤:赤黄 内:胎:胎:赤:赤黄	大型19	
305		F-1	SX205 中層	瀬戸	大付茶碗	-	14.40	12.21	胎部部～ 底部6%	赤(白色胎)	赤:赤:赤:赤黄 胎:胎:胎:赤 内:胎:胎:赤 内:胎:胎:赤	型2	蓋ふちあり
306		F-1	SX205 中層	志戸瓦	大付茶碗	18.40	-	16.21	25	赤(白色胎,赤色胎, 赤丸,1mm白色線)	赤:赤:赤:赤黄 胎:胎:胎:赤オリーブ 内:胎:胎:赤:赤オリーブ	大型4組	二重蓋付(蓋輪の上に瓦 輪)
307		F-1	SX205	志戸瓦	瓦葺茶碗	14.70	-	12.60	5	赤(白色胎少)	胎:赤:赤:赤黄	大型4組	
308	42	F-1	SX205	志戸瓦	中瓶	18.20	4.8	6.4	口縁部～ 底部9%	赤(白色胎多)	赤:208/32赤赤黄 胎:胎:胎:赤:赤黄 赤:208/180白		
309		F-1	SX205 上層	志戸瓦	陶製中フ	18.2	14.40	6.2	20	赤(白色胎)	胎:胎:赤:赤黄 胎:赤:赤:赤黄 赤:赤:赤	大型4組	スノコ前?
310		F-1	SX205 上層	瀬戸	志野蓋	18.40	16.40	1.9	口縁部～ 底部50%	赤(白色胎,1～2mm 白色線)	赤/赤白	型2	
311	42	F-1	SX205 下層	瀬戸	志野蓋	18.70	16.50	2.0	40	赤(白色胎,1～2mm 白色線少)	赤:赤/赤白 内:胎:胎:赤:赤白 内:胎:胎:赤:赤白	型2	
312		F-1	SX205 上層	肥前	輪蓋中フ	-	-	-	25	赤(白色胎少)	赤:胎:胎:赤/赤白 内:胎:胎:赤/赤白 胎:胎:胎:赤		蓋の縁が折

表 15 出土土器観察表

標識No	図柄No	区	遺構 層位	種類	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色調	様式	備考	
413		F-1	S205 上層	志戸瓦	縁輪小皿	(10.4)	(4.4)	2.85	30	表(白色胎,1~3mm 白色線,6片線)	S7・R0/ 輪:015/30(オリーブ)			
414	41	F-1	S205 下層	志戸瓦	縁輪小皿	(16.7)	(4.7)	2.45	10	白線20~ 底面30	表(白色胎表)	2.0/6/25黄 輪:011/7(黄)	大型4後	内面裏面片線
415	41	F-1	S205 中層	志戸瓦	縁輪小皿	(18.9)	4.75	2.75	10	白線40~ 底面100	表(白色胎少,6片 片線)	外:1018/21(白)・黄 胎 内:輪:2.018/1(黄) 内:輪:2.018/2(白)・黄 輪:1.018/1(白)・黄 輪:1.018/2(白)・黄	大型4前	
416		F-1	S205 下層	志戸瓦	縁輪小皿	(12.2)	-	1.80	20		表(白色胎)	2.0/6/25黄 輪:2.018/25(オリーブ)	大型4後	
417		F-1	S205 下層	志戸瓦	割瓦	(13.25)	(3.4)	3.4	10	表(白色胎,1~3mm 白色線+褐色線)	0106/42(白)・黄 輪:2.018/42(白)・黄			
418		F-1	S205 下層	志戸瓦	片口鉢	(13.2)	(10.2)	10.4	25	(径17)	表(白色胎表,1mm白 色線少)	1018/21(白)・黄 胎 内:輪:1.018/1(黄) 輪:2.018/2(黄)	大型4前	
419		F-1	S205	高麗	片口鉢	-	-	-	-	白線70~ 底面3	表(白色胎)	輪:2.018/オリーブ 胎	器7	
420		F-1	S205 中層	高麗	片口鉢	-	(3.25)	5.0	20		表(白色胎,1~3mm 白色線少)	外:016/1(白) 胎 内:輪:015/オリーブ 胎 内:輪:015/オリーブ 胎 内:輪:015/オリーブ 胎 内:輪:015/オリーブ 胎	器11	
421		F-1	S205 中層	志戸瓦	縁輪	(11.2)	-	10.2	30	表(白色胎,1~3mm 白色線)	外:(輪)1012/2(黄) 胎 内:2.018/2(黄) 胎 内:1018/2(黄)	大型4前	最大径(15.0)cm	
422		F-1	S205	高麗	段鉢	(2.9)	(11.4)	9.0	20	表(白色胎+白色線表, 1~3mm白色線+白色 線,1mm片線)	外:014/23(黄) 胎 内:015/42(白)・黄 胎 内:015/42(白)・黄 胎 内:015/42(白)・黄 胎 内:015/42(白)・黄 胎	B型式	内面片線	
423		F-1	S205	瀬戸	縁鉢	(16.4)	-	(7.7)	5	表(白色胎少,1~3mm 片線)	外:(輪)0103/2(黄)・黄 胎 内:(輪)0103/1(黄)	器9	スリ目(単位3cm以上)	
424		F-1	S205	志願戸	縁鉢	-	10.7	(3.2)	25	表(白色胎,1mm片 線)	外:1004/23(黄) 胎 内:1004/1(黄)・黄 胎	器10	スリ目(単位2cm)	
425		F-1	S205	瀬戸	縁鉢	(13.4)	-	(7.1)	5	表(白色胎,1~3mm 片線少,3mm白色線)	輪:0103/2(黄)・黄 胎	器9	スリ目(単位3cm以上)	
426		F-1	S205 上層	志戸瓦	縁鉢	(23.3)	-	(7.4)	20	表(白色胎,3mm白色 線+6片白色線)	0105/42(白)・黄 胎		スリ目(単位3cm以上) (押痕)	
427		F-1	S205 中層	志戸瓦	縁鉢	(11.4)	-	(5.9)	20	表(白色胎表,1mm白 色線,3mm白色線,4mm 白色線)	外:1018/23(黄) 胎 内:0103/2(黄) 胎 内:1018/21(白)・黄 胎 内:1018/2(黄)	大型4前	スリ目(単位3cm)	
428		F-1	S205 上層	志戸瓦	縁鉢	-	10.8	(11.8)	10	白線20~ 底面75	表(白色胎,1~3mm 白色線,1~1.5mm褐色 線)	外:輪:0103/21(白)・ 黄 胎 内:輪:2.018/42(白) ・黄	大型4前	スリ目(単位7cm)
429		F-1	S205	F-4-5,17	片口鉢	(6.5)	(4.4)	2.5	40		表(褐色胎,1mm白色 線)	0106/42(白)・黄 胎	器12	
430		F-1	S205	F-4-5,17	片口鉢	(8.2)	(6.1)	2.1	25		表(白色胎少,1mm時 褐色線,3mm褐色 線)	外:1018/3(黄) 胎 内:0107/21(白)・黄 胎 内:1018/21(白)・黄 胎		
431		F-1	S205	F-4-5,17	片口鉢	(8.6)	(4.2)	1.6	10	白線20~ 底面30	表	外:2.0107/42(白)・黄 胎 内:0106/25(黄) 胎 内:0107/21(白)・黄 胎		摩滅重し!
432		F-1	S205	F-4-5,17	片口鉢	(11.4)	(3.4)	2.45	10	白線20~ 底面30	表(白色胎,1~3mm 褐色線+白色線+ 3mm白色線)	外:1018/21(白)・黄 胎 内:1018/21(白)・黄 胎		摩滅重し!
441		F-1	S212	瀬戸	天目茶碗	(11.4)	-	10.4)	10	白線~ 底面20	表(白色胎少)	2.0/6/25黄 輪:011/7(黄)	器6	
442	41	F-1	S212	瀬戸	平口茶碗	(8.2)	(3.4)	4.45	10	白線10~ 底面30	表(白色胎少,3mm片 線)	0103/1(白) 輪:016/2(黄)	器8	白線部に片線

表 15 出土土器観察表

発掘No	図版No	区	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	器高	保存率(%)	胎土	色澤	様式	備考
463		F-1	SX212	土7片	丸罎	-	(5.2)	(5.2)	30	表(白色紅, 1~2mm 白色線条, 2mm褐色 線条)	外(2. 595/290黄 胎) 内(7. 597/291 内(1)胎) 7. 598, 1/292	大塚4種	
464	41	F-1	SX212	土7片	香炉	(16.7)	(6.4)	5.45	口縁部~ 底部50	表(1~2mm白色紅, 1mm 褐色線条)	外(1095/293黄胎 内(1093/292黄胎 内(1095/293/294)黄 胎) 胎) 1092/292黄胎	大塚4種	
465	41	F-1	SX212	高蓋	仏蘭瓦	(6.4)	4.0	4.4	口縁部~ 腹部50	表(2mm白色紅, 白色 粒, 褐色線条)	外(2. 598/293胎 内(2. 597/292胎 内(2. 598/293胎 胎) 2. 597/292胎)	5B	
466		F-1	SX212	山系罎	罎	-	(7.4)	1.85	30	表(白色紅)	外(36/ 灰 内(37/ 灰白)	1-1	東道江派
467		F-1	SX212	山系罎	罎	-	(6.8)	(3.55)	30	表(白色紅少)	52/ 灰	群-1	東道江派 赤白灰土質
468		F-1	SX212	土4+5+7		(5.1)	(5.4)	2.30	30	表(白色紅, 2mm褐色 線条)	7. 596/32(291)胎	5B	器み寄り
469		F-1	SX212	古瀬戸	縁輪小皿	-	(3.8)	1.65	50	表(白色紅, 1~2mm 白色線, 褐色線条)	外(2. 598/292胎 内(2. 597/292胎)		
470		F-1	SX212	肥前	輪文罎	-	(5.4)	(2.3)	30	表			
471		F-1	SX212	土7片	系罎	(8.3)	-	(6.15)	20	表(白色紅条, 1~2mm 白色線,)	外(1092/292黄胎 胎) 1092/291 内(1096/292/291)黄 胎	大塚4種 器み寄り	
472		F-1	SX212	瀬戸	御存付大甕	(36.5)	-	(3.55)	5	表(白色紅, 1~2mm 白色線, 褐色少)	外(1)胎(296/297オリーブ 黄胎) 内(294/297オリーブ黄 胎) 胎(2. 594/297オリーブ 胎)	高野古	
473		F-1	SX212	土7片	種鉢	(13.6)	-	(7.55)	口縁部~ 腹部50	表(白色紅条, 2~4mm 白色線, 1mm白色線少)	外(2. 595/32(291)胎 内(2. 595/32(291)胎)	大塚4種	3/4目(単位9%)
474		F-1	SX212	定形	壺	(36.4)	-	8.55	-	表(白色紅条, 1~2mm 白色線)	外(297/29 内(2. 593/293)	9B式	
483+412	41	F-1	S0118	白磁	小蓋	7.95	2.45	2.4	70	表(白色紅)	胎(298/292胎 内(2. 598/292胎)	3B	底部外面に黒着
484		F-1	S0118	黄磁器	壺形	-	-	-	5	表(白色紅, 2mm白色 線, 褐色線条)	52/ 灰		器み寄り
485		F-1	S0118	綠釉	大冨系罎	(11.4)	-	4.1	20	表(白色紅)	外(298/292胎 胎) 52/ 灰 1095/291黄胎 内(32/ 灰 胎) 1093/291黄胎		下底の化粧層の2に黒 色の線条
486		F-1	S0118	土志7片	大冨系罎	(10.5)	5.45	-	10	表(白色紅, 2~4mm 白色線条)	外(1095/292胎+オリーブ 胎) 胎) 51/292胎+オリーブ 内(1094/292黄 胎) 胎) 292/292オリーブ		
487		F-1	S0118	吉志7片	縁輪小皿	(14.3)	(5.1)	2.45	20	表(白色紅, 2mm白色 線+白色線条)	2. 595/291黄胎 胎) 2. 593, 3/292胎胎)		
488		F-1	S0118	土7片	縁輪小皿	(14.5)	1.9	-	10	表(白色紅, 4mm白色 線条)	外(2. 595/292胎 胎) 1096/292胎 胎) 1092/292胎 内(2. 593/292胎 胎) 1092/292胎		
489		F-1	S0118	古瀬戸	縁輪小皿	(11.4)	-	2.55	10	表(白色紅, 2mm白色 線条)	外(2. 597, 5/292胎 胎) 7. 593/292胎 内(2. 597/292胎 胎) 7. 595/292胎+オリーブ	高野古	

表 15 出土土器觀察表

標本No.	段層No.	區	遺構層位	種類	器種名	口徑	底徑	器高	殘存率(%)	胎土	色澤	樣式	備考
499	F-1	S0118	小之心7			18.82	1.95	3.9	口緣50~ 底高100	白(白色胎, 1~2mm 白色雜, 2~3mm(灰色 雜粒))	10W7, 5/2K(白)		摩訶蓋(1)
491	F-1	S0118	古志門瓦	罐頭		225.50	-	5.2	19		2. 10W7/142. 251~黄 10W7/262. 251~黄		
492	F-1	S0118	溝汀 +高塚	長形鉢蓋		114.41	-	16.71	口緣~ 底高30	赤(白胎, 1~2mm 白色雜, 1~2mm 灰色, 1mm(灰色雜少))	赤-10R4/1(黄区 内)-10R5/2K(黄 雜)-10R3/2(黄少)		
503	F-2	SP283	山形碗	碗		117.70	72.25	6.4	口緣20~ 底高70	赤(白胎, 1~2mm 白色雜)	12/ 灰白	I-1	東瀛江流 内面量約殘片
504	F-2	SP283	山形碗	碗		117.31	-	14.25	30	赤(白胎, 1~2mm 灰色雜, 2mm(黄色 雜少))	16/ 灰	I	東瀛江流 量約蓋(1)
505	F-2	SP283	山形碗	碗		146.75	8.9	6.4	口緣71~ 底高100	赤(白胎, 1~2mm 白色雜)	16/ 灰	I-2	東瀛江流 内面量約殘片
506	F-2	SP283	山形碗	碗		-	17.71	12.83	修復~ 底高40	赤(白胎, 1~2mm 灰色雜)	12/ 灰	I-2	東瀛江流
507	F-2	SP283	山形碗	碗		118.4	4.45	6.15	口緣20~ 底高60	赤(白胎, 1~2mm 白色雜)	12/ 灰白	II	東瀛江流 内面量約殘片
508	F-2	SP446	山形碗	碗		-	18.05	13.0	20	赤(白胎)	16/ 灰	I-2	東瀛江流
509	F-2	SP213	瓦輪陶器	小碗		112.50	15.85	4.1	口緣20~ 底高60	赤(白胎, 1~2mm 白色雜)	12/ 1(灰白)		量約蓋
510	F-2	SP213	瓦輪陶器	碗		18.25	12.21	45		赤(白胎, 1~2mm 白色雜)	赤-16/ 灰 内-2. 10R/ 1(黄区)		量約殘片(1)
511	F-2	SP210	山形碗	碗		-	15.81	12.11	70	赤(白胎, 灰色胎, 1~2mm白色雜, 1~2mm 灰色雜)	12/ 1(灰白)	III-1	東瀛江流
512	F-2	SP715	山形碗	碗		118.41	-	14.71	40	赤(白胎, 1~2mm 白色雜)	赤-2. 10R/ 1(灰 内)-2. 10/ 1(灰白)	I	東瀛江流
513	F-2	SP258	山形碗	碗		115.81	17.41	6.1	20	赤(白胎)	赤-10R6/ 142. 251~黄 内-10R7/ 2(2. 251~黄 雜)	I-2	東瀛江流
514	F-2	SP173	山形碗	小碗		18.70	13.21	2.5	20	赤(白胎)	16/ 灰	I-2	東瀛江流 量約蓋
515	F-2	SP221	瓦輪陶器	小碗		-	16.03	12.71	25	赤(白胎, 1mm白色 雜)	赤-2. 12/ 1(灰白 内)-2. 10R/ 1(灰白 内)-1(灰)		量約殘片(1)
516	F-2	SP670	瓦輪陶器	小碗		13.2	16.21	4.1	40	赤(白胎, 1~2mm 白色雜)	赤-12/ 1(灰白 内)-16/ 灰		
517	F-2	SP662	山形碗	碗		-	18.70	11.85	底高30	赤(白胎, 1~2mm 白色雜)	15/ 灰	II	東瀛江流 入ノ少
518	F-2	SP768	山形碗	小碗		15.72	14.31	2.5	40	赤(白胎, 1~2mm 白色雜)	赤-16/ 灰 内-10R/ 1(灰)	I-2	東瀛江流 入ノ少
519	F-2	SP668	山形碗	小碗		-	14.25	17.70	40	赤(白胎, 1~2mm 白色雜)	12/ 灰白	I-2	東瀛江流
520	F-2	SP1936	山形碗	小碗		-	14.25	11.50	底高40	赤(白胎)	赤-2. 10R/ 1(黄区 内)-10/ 1(灰)	I-2	東瀛江流
521	F-2	SP658	山形碗	小碗		-	3.1	11.25	底高40	赤(白胎)	10R/ 1(黄区)	I-2	東瀛江流
522	F-2	SP1902	山形碗	碗		-	3.75	12.31	90	赤(白胎, 2mm白色 雜)	7. 10R/ 1(灰)	III-2	東瀛江流 入ノ少
523-585	F-2	SP116	山形碗	碗		-	17.41	12.41	底高40	赤(白胎, 1~2mm(灰色 雜)	10R/ 1(灰)	I-2	奈良-福西系 量約蓋
524-599	F-2	SP126	山形碗	碗		-	7.25	12.31	底高100	赤(白胎, 灰色胎, 1~2mm(灰色雜+白色 雜))	12/ 1(灰白)	II	奈良-福西系 量約蓋
525	F-2	SP649	瓦輪陶器	碗		115.51	-	12.71	5	赤(白胎, 1~2mm 白色雜, 2mm(灰色雜少))	赤-2. 12/ 1(灰白 内)-10R/ 1(灰)		溝汀+溝汀 内面量約, 外面(1)及(黄色 雜)
526	F-2	SP649	瓦輪陶器	碗		-	18.25	12.41	40	赤(白胎, 1~2mm 白色雜)	2. 12/ 1(灰白)		
527	F-2	SP649	瓦輪陶器	碗		-	15.91	12.31	20	赤(白胎, 1~2mm 白色雜)	12/ 灰白		
528	46	F-2	SP706	山形碗	小碗	17.21	14.41	1.7	25	赤(白胎, 1~2mm 白色雜)	16/ 灰	III-1	東瀛江流
529	46	F-2	SP934	山形碗	小碗	8.1	4.1	2.1	40	赤(白胎, 2mm白色 雜)	赤-2. 12/ 1(灰白 内)-10R/ 1(灰)	III-4	東瀛江流 入ノ少
530	46	F-2	SP656	山形碗	小碗	6.1	4.1	1.9	90	赤(白胎)	15/ 灰	III-4	東瀛江流
531	F-2	SP105 (1016)	小之心7			18.41	15.21	2.2	20	赤(赤胎, 1~2mm 灰色雜)	赤-2. 10R/ 6(黄 内)-2. 10R/ 1(黄雜)		

表 15 出土土器観察表

標高%	図号%	区	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色澤	様式	備考
532	F-2	SP1273	F-1+G-17			-	4.3	1.91	100	灰白色胎、1~2mm 褐色織	5107/6織		壁面美しい
533	F-2	SP64918	F-1+G-17			08.23	14.0	2.25	50	灰(褐色胎、褐色織)	2.107/1灰白		
543	F-2	SP1307	灰層階級	罎	(17.40)	(7.4)	06.23	20	100	灰(白色胎、1~2mm 白色織)	外:2.107/1灰白 胎:0.108/1灰白 内:107/1灰白 胎:0.107/1明才 サーブ灰		漆汁塗け
544	3A	F-1	F-1+G-17			08.03	4.0	2.2	30	灰(赤色胎、黒褐色織、 2mm中織)	5107/6織		
545	F-3	溝上	F-1+G-17			-	13.84	2.2	100	灰(赤褐色胎、1~2mm 赤褐色織)	5107/6織		壁面美しい
546	F-2	覆瓦	F-1+G-17			-	14.23	0.23	100	灰	7.1030/4浅黄織		全体に華麗
547	F-3	溝上	F-1+G-17			-	13.91	0.71	100	灰(白色胎、褐色織、 2mm褐色織、1~2mm 褐色織)	7.1037/41.51+織		壁面美しい
548	F-3	溝上	F-1+G-17			-	4.4	0.71	100	灰(赤褐色胎、1~2mm 赤褐色織)	7.1038/4浅黄織		壁面美しい
549	F-2		F-1+G-17			(13.45)	(5.3)	4.0	45	灰(赤褐色胎、1~2mm 赤褐色織)	7.1037/31.51+織		全体に華麗
550	F-2		F-1+G-17			(12.60)	(5.8)	13.8	30	灰(灰色胎、1~2mm 灰色織)	10103/3浅黄織		全体に華麗
551	F-2		F-1+G-17			08.03	03.80	2.5	100	以緑砂+ 底面50	5107/41.51+織		蓋のみあり
552	3A	F-2	覆瓦	F-1+G-17		08.23	4.3	2.3	60	灰(白色胎、1~2mm 灰色織)	2.1037/31.51+織		
553	3A	F-2	覆瓦	F-1+G-17		08.23	3.9	2.1	40	灰(白~赤褐色織)	10103/3浅黄織		
554	3A	F-1	F-1+G-17			08.1033	3.3	2.65	80	灰(褐色胎、1~2mm 褐色織)	7.1037/41.51+織		蓋のみあり
555	3A	F-2	覆瓦	F-1+G-17		9.0	05.0	2.6	50	灰	10103/4浅黄織		
556	3A	F-2	F-1+G-17			08.03	03.30	2.40	60	灰(赤色胎、灰色織)	5107/6織		蓋のみあり
557	F-2		F-1+G-17			08.03	03.30	2.40	25	灰(褐色胎、1~2mm 褐色織)	5107/6織 5107/41.51+織		壁面美しい
558	F-2	覆瓦	F-1+G-17			08.03	14.0	2.3	30	灰(赤色胎、1~2mm 白色織)	7.1037/41.51+織		全体に華麗
559	3A	F-2	F-1+G-17			(7.90)	4.5	(1.90)	100	以緑砂+ 底面50	赤:0106/41.51+織 内:1010/4織		蓋のみあり
560	F-2	覆瓦	F-1+G-17			08.23	14.30	1.3	75	灰(1mm褐色織)	5107/31.51+織		蓋のみ非常に美しい
561	F-2		F-1+G-17			7.6	4.1	1.45	100	以緑砂+ 底面100 6中織	5107/31.51+織		蓋のみあり
562	F-2		F-1+G-17			08.03	08.03	1.4	50	灰	10103/4浅黄織		蓋のみあり
563	F-1	土製器	罎			(21.9)	(21.1)	(3.15)	100	灰(灰白色胎+黄砂多量)	10103/31.51+黄織		外面残存多
564	F-3	土製器	罎			(20.40)	(20.4)	(8.20)	100	灰(灰白色胎+灰色胎+ 褐色織多量)	10107/31.51+黄織		全体に華麗
565	F-1	土製器	内耳罐			(23.1)	(18.9)	(3.60)	100	灰(灰色胎、1~2mm 灰色織、赤褐色織)	外:2.1035/41.51+織 内:2.1038/2黄織		外面残存多
566	F-2北	埴土	初出	天目茶碗	(11.0)	-	(5.9)	20	100	灰(白色胎、2mm中織、 赤胎)	外:503/4 胎:0104/200黄 織:2.1038/1黄織	大器	鉄脚
567	F-1	古瀬戸	天目茶碗			(11.0)	(5.0)	6.0	10	灰(白色胎多量、2mm白色 織)	外:1010/41.51+赤胎 胎:0102/2黄織 内:1010/41.51+赤胎	中器	鉄脚
568	F-1	古瀬戸	天目茶碗			(12.3)	-	(4.60)	10	灰(白色胎多量)	外:0104/31.51+赤胎 胎:51.51+赤胎	小器	鉄脚
569	F-1	古瀬戸	天目茶碗			-	(4.2)	(5.2)	100	灰(2mm中織、赤胎)	外:1010/200黄 胎:0102/2黄織	小器	鉄脚
570	F-3	SP1025	古瀬戸	天目茶碗		(12.40)	4.15	(6.60)	100	以緑砂+ 底面100	外:2.1018/100白 胎:0.1012/200黄 内:1010/7.1010/1黄		蓋のみ
571	6A	F-2	古瀬戸	瓶		(11.0)	-	(3.2)	40	灰	外:2.1017/200黄 胎:0.1017/200黄 内:2.1017/100白	1層 筋目小器	
572	F-1	古瀬戸	瓶			-	(13.0)	(3.40)	25	灰(灰白色胎、2~3mm 灰色織、2mm赤褐色織)	外:1017/100白 内:1018/10	小器	胴部(13.0)も

表 15 出土土器観察表

探検号	区画No.	区	遺構 層位	種別	器種名	口径	高さ	器高	残存率(%)	胎土	色澤	様式	備考	
396		E-1		初山	丸瓶	(16.25)	(5.7)	1.8	20	表(灰白色胎,黄褐色,1mm灰白色線)	外:2.019/3C,31-1(焼) 内:1019/5-23(黄褐色) 内:1019/5-23(黄褐色)	大型3段~4段		
397		E-1		瀬戸?	罐蓋	(16.1)	(5.7)	2.25	20	表(白色胎,1mm白色線少)	外:2019/1灰白 内:2.019/2(黄褐色) 内:1019/7.019/2(黄褐色)	大型3?	足底みにトナリ(2箇所)	
398		E-2		瀬戸+美濃	陶瓦蓋	(16.4)	-	(1.9)	10	表	2.019/4(焼) 2.019/2(黄褐色)	大型1		
399		E-2	瓦石	志戸瓦	輪蓋瓦	(8.8)	(5.8)	2.0	10	表(白色胎)	外:2.019/3(焼) 内:2.019/2(黄褐色) 外:2.019/3(焼) 内:2.019/2(黄褐色)	大型1		
400		E-1		奈良系	白明瓦	(8.8)	(5.7)	1.8	10	口縁部~底面50	外:2.017/2(黄褐色) 内:2.017/3(灰白) 内:1019/9/7/1(灰白)		内面裏面焼止り	
401		E-1		美濃	白明瓦	8.8	4.4	2.2	10	口縁部~底面100	外:2.017/2(黄褐色) 内:2.017/3(灰白) 内:1019/7.017/1(灰白)	型10	内面6.55cm 外面裏面焼止り	
402	6a	E-2		美濃	白明瓦	(7.4)	(3.45)	1.45	50	表(灰色胎)	外:2.017/1(灰白) 内:2.017/3(灰白) 内:1019/2.017/1(灰白)	型10+11	内面径5.1cm	
403		E-2		奈良	瓦蓋	(8.3)	-	2.9	10	表(灰白色胎少)	外:1019/4(焼) 内:1019/2.019/3(黄褐色)			
404		E-2		瀬戸	罐蓋瓦	(7.4)	4.3	2.0	10	口縁部~底面100	表(白色胎多)	2.019/2(灰白)	型8-11	
405		E-2		瀬戸	線輪1.5x1.5瓦	-	5.0	(1.4)	10	線部30~底面100	表	2.019/2(灰白)	大型1	内面に捺付者 底面外面に華蓋
406		E-2		志戸瓦	蓋物	-	7.9	(1.75)	80	表(1~3mm灰白色線)	外:2.019/2(灰白) 内:2.019/3(灰白) 内:2.019/2(灰白)		蓋物少	
407	6a			志戸瓦	蓋	(8.9)	(5.4)	7.1	20	表	外:2.007/3(焼)+フープ瓦 1019/5-12(2x)黄褐色 内:2.007/1(フープ瓦) 1019/7/2(2x)黄褐色			
408		E-1		美濃	小傘小 小瓶	-	5.4	(2.4)		表(白色胎,2mm白色線,3mm)	輪:2.015/4(黄褐色) 底:30/1(灰)	型5-7		
409		E-3		瀬戸	入子 (輪蓋瓦)	-	-	(1.45)	5	表(灰白色胎,1mm白色線)	底:1/1(灰白)	型蓋~中0	内面好付者	
410		E-2		肥前	染付小壺	(7.75)	3.25	4.3	95	表	2.016/7(黄褐色) 輪:1019/1(灰) 底:2.016/3(黄褐色) 染付:1019/1(黄褐色) 2.016/7(灰白)			
411		E-1		肥前	染付壺	-	(4.7)	(1.45)	20	表	底:1/1(灰白) 輪:50/7(1)焼+フープ瓦			
412		E-1		肥前	染付壺	-	(4.1)	(2.2)	20	表	1019/1(灰白) 輪:50/7(1)灰白 染付:50/6/7(黄褐色)			
413		跡上		肥前	染付壺	-	(6.8)	(1.4)	20	表(白色胎少)	2.016/1(灰白) 底:2.016/2(灰白) 染付:50/3/4(黄褐色)			
414		E-1		志戸瓦	陶器蓋物	(16.4)	-	(1.4)	10	表(灰白色胎少,3mm白色線)	内:2019/2(2x)黄褐色 口縁部~輪:1019/2(黄褐色)		鉄輪	
415		E-2		肥前	染付小壺	(12.4)	(6.55)	2.75	20	表	外:1019/2.017/1(焼)+フープ瓦 内:1019/2.017/1(焼)+フープ瓦 染付:2.019/3/1(黄褐色) 1019/3/2(黄褐色) 底:30/1(灰白)			

表 15 出土土器観察表

種別%	図柄%	区	遺構 層位	種類	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色調	様式	備考
616	F-2			肥前	酒戸	58.60	-	13.1	10	黄(灰白色)	外-080/506, 5/10 ア-17片 内-017/灰白 (080/506, 5/10ア-17) 灰-50/灰白		
617	F-2	埋瓦		肥前	発付蓋	-	5.3	1.85	底高100	黄	外-2, 018/180白 0270/180白 内-7, 027/141埋瓦 50/灰		
618	F-1			筑前	片口鉢	118.2	-	14.4	14鉢部	黄(灰白色), 灰白, 1~2mm(灰白色減少)	074灰		
619	F-1			筑前	片口鉢	129.7	115.60	16.0	30	黄(白色胎多, 1~2mm 減少)	外-10106/198灰 内-10105/218黄	6a型式	
620	F-1			筑前	片口鉢	126.0	115.4	9.2	16	黄(灰白色胎多, 1~2 mm(灰白色減少, 1mm右 片欠)	外-7, 0106/321, 211+埋 瓦-2, 010/198灰	6a型式	
621	F-1			筑前	片口鉢	131.7	-	14.40	5	黄(灰白色胎, 胎色胎 多, 1~2mm(灰白色少, 1mm右片欠)	外-0101/321, 211+埋 瓦(胎)1002/3埋瓦赤黄 内-7, 0103/3埋瓦 (胎)1002/3埋瓦赤黄	日原 8型式	
622	F-1			筑前	片口鉢	134.2	14.4	-	20	黄(灰白色胎, 灰白色 胎多, 1~2mm(灰白色少 灰白色減少)	077/180白		
623	F-2			志戸瓦	片口鉢?	-	58.60	14.4	20	黄(白色胎)	外-10106/4埋 (胎)1, 017/20黄 内-0802, 016/20黄 器-7, 0106/321, 211+埋 瓦		
624	F-2			筑前	片口鉢	113.4	106.60	6.1	30	黄(白色胎, 1mm(灰 白色減少)	外-2, 016/321, 211+埋 瓦-2, 017/20黄 内-2, 017/20黄	型10	トナシ埋-黄胎胎赤黄
625	F-2			筑前	片口鉢	112.70	98.2	9.13	14鉢部- 底高30	黄(灰白色胎, 灰白色 胎赤黄)	外-2, 016/3埋瓦 (胎)10106/4埋 内-(胎)10106/4埋	型6	
626	F-2			筑前	片口鉢	131.25	-	16.4	10	中胎赤(胎赤胎, 灰白 色胎多, 1~2mm(灰白 色減少, 1~2mm右片 欠)	外-50/灰 内-2, 0103/218灰	6a型式	
627	F-2			志戸瓦	片口鉢底	126.3	-	16.1	5	黄(灰白色胎, 1~2mm 灰白色減少, 1~2mm(灰 白色減少)	外-2, 016/321, 211+埋 瓦(胎)10106/180白 0103/20ア-17ア-17 内-025, 4ア-17ア-17	型1	
628	A-2a			志戸瓦	鉢鉢	127.0	-	13.7	9	黄(灰白色胎, 1~4mm 灰白色減少, 1mm右片 欠)	外-2, 0103/1埋瓦 内-7, 0104/218赤	大型4	埋鉢
629	A-2a			志戸瓦	鉢鉢	-	115.2	14.4	10	黄(灰白色胎, 1~2mm 灰白色減少)	2, 0107/42, 211+埋 瓦	埋瓦	スリ目(単位2cm以上)
630	F-2			志戸瓦	鉢鉢	127.4	-	16.1	20	黄(白色胎, 1mm(灰 白色減少)	外-2, 0103/42, 211+埋 瓦 内-2, 0104/321, 211+埋 瓦	埋地埋 スリ目(単位9~11cm)	
631	F-2			志戸瓦	鉢鉢	126.13	-	16.4	20	黄(灰白色胎, 1~2mm 灰白色減少, 2mm(灰白 色減少)	外-2, 0103/321, 211+埋 瓦 内-0103/321, 211+埋 瓦	スリ目(単位3cm)	
632	F-1			鉢上	志戸瓦	126.9	-	14.40	5	黄(灰白色胎, 2mm(灰 白色減少, 胎色減少)	胎-7, 0104/3埋 瓦		スリ目(単位7cm以上)
633	F-1			志戸瓦	鉢鉢	131.40	-	16.30	10	黄(灰白色胎多, 2~5 mm(灰白色減少, 1~2mm 褐色減少, 1mm(灰白色 減少))	0105/3赤黄		スリ目(単位12cm)
634	F-1			鉢戸	鉢鉢	126.1	-	16.40	5	黄(白色胎, 2mm(赤黄 色減少, 2~3mm右片欠)	0103/1埋赤黄	埋瓦部- 大型1	スリ目(単位9~12cm)
635	F-1			鉢戸	鉢鉢	-	116.4	6.9	20	赤口~2mm(赤胎多, 右片欠)	0104/180白 胎-2, 0103/1埋赤黄	埋瓦部- 大型1	胎部 埋瓦 スリ目(単位12cm以上)

表 15 出土土器観察表

洋図No	図版No	区	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色澤	様式	備考
636		F-2		甕戸 +高麗	罐鉢	—	0.80	6.4	40	赤(灰)白色胎,1~2mm 灰(赤)色粒	赤(灰)白 胎・赤(灰)黄 土	大型I	37日(単位204)
637		F-2		甕戸 +高麗	罐鉢	—	1.6(1)	0.9	30	赤(灰)白色胎,1~2mm 灰(白)色粒	赤(灰)白 胎・赤(灰)黄 土		37日(単位118)
638		F-1		甕戸 +高麗	罐鉢	—	0.80	3.8	25	赤(2mm石片,灰色粒 少)	1000/1灰白 胎・赤(灰)黄 土	灰黄赤一 大型I	
639		F-2		甕戸 +高麗	罐鉢	—	0.30	1.4	30	赤(白色粒,黑色粒, 1~2mm石片,1~2mm 白色粒少)	赤(1000/1)黄赤 内・赤(1000/2) 白胎	灰黄赤一 大型I	37日(単位118)
640		F-2	溝渠	甕戸 +高麗	罐鉢	—	0.20	0.30	30	赤(2mm白白色粒少)	1000/1黄赤 内	灰黄赤一 大型I	37日(単位118)
641		F-1		甕戸	罐鉢	—	0.9	0.4	30	赤(白色粒,2~3mm 灰色粒,1~2mm石 片少)	赤(1000/2)黄赤 内・赤(1000/1) 赤胎	大型I	37日(単位98)
642	48	F-2	埋瓦	甕戸	罐鉢	13.0	6.45	6.3	95	赤	赤(1000/1)灰 胎・赤(1000/2) 黄赤胎		庭前外溝に埋着
643		F-1		甕戸 +高麗	罐鉢	0.6(4)	—	0.6	5	赤(1mm,6~3mm石片)	1000/3黄赤 胎・赤(1000/2) 黄赤胎	大型I	37日(単位84以上)
644				甕戸	罐鉢	07.90	—	0.1	5	赤(1mm,6~3mm)	赤(1000/4)赤 胎・赤(1000/2) 黄赤胎	特形41	
645		F-2		甕赤	罐鉢	—	1.6(1)	11.80	20	赤(灰)白色胎,褐色粒, 灰色粒,1~2mm石 片,1~2mm石片少)	赤(1000/2)黄赤 胎・赤(1000/2) 黄赤胎	特	37日(単位11~12)
646		F-2		甕赤	甕	14.80	—	0.40	5	赤(灰)白色胎,1~2mm 灰(白)色粒少)	1000/1黄赤 胎	6a型式	
647		F-2	SP250	甕赤	甕	0.6(4)	—	11.80	20	赤(灰)白色胎,褐色粒, 1~2mm石片,1~2mm 灰色粒,1~2mm 石片)	赤(1000/2)黄赤 内・赤(1000/1) 黄赤胎	11型式	
648		F-1		高麗	甕	—	—	—	—	赤(灰)白色胎多,灰色 粒,1~2mm石片)	赤(500/1)灰 内・赤(1000/2) 黄赤胎		外面型押し文様
649		F-2	埋瓦	志戸瓦	甕	0.2(2)	—	0.40	口縁部	赤(白色粒,2mm白色 粒)	1000/1黄赤 胎	大型I	
650		F-1		志戸瓦	甕	—	—	—	20	赤(灰)白色胎多)	赤(1000/1)黄赤 内・赤(1000/2) 黄赤胎		
651	41	F-2	30334	古甕戸	天目茶碗	12.15	0.0	6.8	60	赤(白色粒+褐色粒+ 灰色粒)	赤(1000/1)灰 胎・赤(1000/2) 黄赤胎	黄赤	
652		F-2	30534	古甕	片口鉢	0.1(4)	—	0.4	口縁部	赤(白色粒,灰色粒, 1~2mm石片)	赤(1000/1)黄赤 内・赤(1000/2) 黄赤胎	黄赤	
653		F-2	30328	古甕戸	縁輪小甕	0.6(4)	—	1.40	20	赤(灰)白色胎,2mm石 片)	赤(1000/2)灰 胎・赤(1000/2) 黄赤胎	縁輪小	
654		F-2	30306	志戸瓦	縁輪小甕	11.0	5.3	2.4	40	赤(白色胎)	1000/1黄赤 胎・赤(1000/2) 黄赤胎		内面外縁直線
656		F-2	30306	志戸瓦	縁輪小甕	01.40	0.40	2.4	40	赤(白色胎)	1000/1(1.5)黄赤 胎・1000/2(1.5) 黄赤胎		内面使用痕
657	41	F-2	30305	高麗	灯明鉢	8.7	6.25	2.05	95	赤	1000/2(1.5)黄赤 胎・1000/1(1.5) 灰胎	特形	
658	41	F-1	30229 (30045)	甕戸	縁輪小甕	5.5	3.8	3.05	口縁部~ 底面部	赤(白色粒,2~3mm 灰色粒,2mm石片少)	1000/1灰白 胎・赤(1000/2) 黄赤胎		足跡に2~3mm痕
659		F-2	30196② (30161-101)	志戸瓦	縁輪小甕	0.4(2)	—	0.50	40	赤(白色粒,灰色粒)	1000/2(1.5)黄赤 胎・1000/2(1.5) 黄赤胎		型みあり(底面のみ)
660		F-2	30722	肥前	甕	—	0.2(4)	0.7	10	赤	5000/1灰白 胎・5000/1灰白 胎		
661		F-1	30200	志戸瓦	縁輪小甕	—	1.1(1)	0.4	20	赤(灰)白色胎)	赤(1000/2)黄赤 胎・赤(1000/2) 黄赤胎	大型I	

表 15 出土土器観察表

発掘層	図面No	区	遺構 層位	種類	器種名	口径	底径	高さ	残存率(%)	胎土	色調	様式	備考
662	84	F-2	SP106	土門瓦	圓錐	(5.13)	3.9	3.8	ほぼ20~ 底径100	泥	赤-2.016/成黄 (胎土.0193)/成赤黄 内:胎土.0191/成土 1+泥		最大径6.05cm 内面磨削有
663		F-1	SP105	甕戸	圓錐	(2.30)	-	3.4		赤(白色胎土,1mm石 屑)	0193/成赤黄		
664-967		F-1	SP207	甕戸	甕	(46.4)	-	(3.3)	3	赤(白色胎)	赤-7.0164/成黄 (胎土.0193)/成赤黄 内:胎土.0191/成土 1+泥 胎土.0193/成赤黄	20式	
665		F-1	SP169	甕戸	甕	(33.73)	-	7.4	5	赤(白色胎,1~2mm 白色胎土,成赤黄, 1~1mm白色胎,1~2mm 石屑,黄砂屑)	0193/成黄内	90式 ?	
666	69	F-2	SP1100	甕戸	甕	43.2	18.45	47.1	90	赤(赤白色胎,白色胎, 1~1.5mm白色胎+白色 胎+成赤黄) 胎:成赤黄 胎:成赤黄 内:胎土(成赤黄)	赤(成~成胎)0191/成 黄 (11~成胎)0193/成赤 黄 胎:0193/成赤黄 内:胎土(成赤黄)		胎土径41.2cm 体高径49.6cm 底径(磨上) 底径(磨下)
667	70	F-2		甕器部	甕蓋	13.58	-	3.5	60(磨下 径100)	赤(赤白色胎)	赤/灰		磨下径径13.13cm 底径未計
668	70	F-2		甕器部	甕蓋	16.5	-	3.2	95	赤(赤白色胎)	赤/灰		磨下径径13.40cm 底径未計
669		F-1		甕器部	甕蓋	-	-	(3.4)	天井部20 (磨下径 90)	赤(赤白色胎)	赤-7.0166/成土,成土 内:成赤黄(成赤黄)		磨下径径13.13cm 内面磨削
670		F-2		甕器部	甕蓋	-	-	(2.0)	天井部10 (磨下径 90)	赤(白色胎)	赤/灰		磨下径径13.40cm
671		F-1		甕器部	甕蓋	(14.4)	-	2.5	29(磨下 径90)	赤(赤白色胎,1~2mm 白色胎屑)	赤/灰 赤/灰		磨下径径13.73cm
672		F-1		甕器部	甕蓋	(12.53)	-	2.45	ほぼ2~ 天井部45 (磨下径 90)	赤(赤白色胎土,1~2 mm白色胎,2mm白色 胎屑)	赤/灰		磨下径径12.46cm 底径(磨上) 底径(磨下)
673	70	F-2		甕器部	甕蓋	(13.4)	-	2.5	40	赤(白色胎)	赤-7.016/成 内:成赤黄		磨下径径12.91cm
674	70	F-2		甕器部	甕蓋	13.8	-	4.15	40	泥	赤/灰		磨下径径13.25cm 底径未計 底径(磨下)
675	70	F-2		甕器部	甕蓋	15.2	-	3.45	40	赤(成~成胎屑)	成赤黄/成赤白		磨下径径12.45cm 胎土磨
676		F-2		甕器部	甕蓋	(13.4)	-	(2.2)	40	赤(白色胎屑)	成赤黄/成赤白		
677	70	F-2	SP339	甕器部	甕蓋	(12.4)	-	2.75	ほぼ5~ 天井部6 (磨下径 90)	赤(白色胎,成赤黄, 2mm白色胎屑)	赤/灰		磨下径径12.45cm 底径未計
678		F-1		甕器部	甕蓋	-	-	(2.43)	天井部60 (磨下径 90)	赤(白色胎屑)	赤/灰		磨下径径13.10cm
679		F-1		甕器部	甕蓋	-	-	(2.43)	天井部20 (磨下径 100)	赤(白色胎屑)	赤-017/成赤 内:成赤黄(成赤黄)		磨下径径13.40cm
680		F-1		甕器部	甕蓋	(12.4)	-	(1.4)	ほぼ2~ 体高10	赤(白色胎)	0196/成		
681		F-2		甕器部	甕身	(16.4)	(1.7)	成赤黄	赤(白色胎)	赤/灰白			
682		F-1		甕器部	甕身	(13.4)	(1.5)	成赤黄	赤(白色胎)	赤/灰			
683	70	F-2		甕器部	甕身	14.8	(1.4)	成赤黄	赤(白色胎)	赤/灰			底径未計
684		F-1		甕器部	甕身	-	(1.9)	(2.8)	成赤黄	赤(成赤胎,5mm石 屑)	赤/灰 赤/灰		
685		F-2		甕器部	甕身	(14.4)	(1.35)	成赤黄	赤(白色胎,1~2mm 白色胎屑)	赤/灰			
686		F-1		甕器部	甕身	-	(1.8)	(1.1)	成赤黄	赤(成赤胎)	赤/成 内:成赤白		
687		F-1		甕器部	甕身	-	(1.8)	(1.35)	成赤黄	赤(白色胎屑)	0196/成		厚縁
688	70	F-1		甕器部	甕身	18.0	(1.45)	成赤黄	ほぼ4~ 成赤黄130	赤(白色胎)	赤/灰		
689	70	F-1		甕器部	甕身	(11.4)	(1.4)	成赤黄	ほぼ20~ 成赤黄130	赤(1mm白色胎屑)	赤/成 内:成赤黄(成赤黄)		
690		F-1		甕器部	甕身	-	(1.2)	(2.0)	成赤黄	赤(白色胎)	成赤黄/成黄		
691		F-1		甕器部	甕身	-	(1.3)	(1.5)	成赤黄	赤(成赤胎)	成赤黄/成		
692	71	F-1		甕器部	甕身	(11.33)	(1.2)	成赤黄	赤(白色胎土,1~1mm 白色胎屑)	赤/灰			口縁部底径(磨上)

表 15 出土土器観察表

探検号	図版No.	区	遺構 層位	種類	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色澤	様式	備考
693	71	F-2		須恵器	長頸瓶	8.0	5.9	24.75	口縁100% 底部75%	赤(白色粘)	赤/黒/ 灰 内/黒/ 灰		頸部径4.6cm 最大径10.6cm
694		F-2		須恵器	長頸瓶	6.6(4)	-	(10.1)	口縁100% 底部80%	赤(白色粘)	黒/ 灰		頸部径4.1cm 最大径10.5cm 最大径10.5cm
695		F-2		須恵器	長頸瓶	-	-	(12.0)	40	赤(白色粘,黒色粘)	赤/黒/ 灰 内/黒/ 灰白		頸部径4.45cm 最大径径10.6cm 内外面自然釉付着
696		F-2		須恵器	長頸瓶	7.2(2)	4.4	-	口縁100% 底部80% 体部70% 底脚80%	赤(白色粘,灰白色粘)	黒/ 灰白		頸部径4.6cm 自然釉付着
697		F-2		須恵器	長頸瓶	7.5	-	(9.6D)	40	赤(白色粘,灰白色粘)	黒/ 灰		釜みあり
699	72	F-3		須恵器	長頸瓶	-	4.7	(11.9D)	体部70% 底脚80%	赤	赤/黒/ 灰 内/黒/ 灰		最大径110.4cm
699		F-2		須恵器	長頸瓶	-	4.75	(12.1)	40	赤(白色粘,灰白色粘, 1~5mm(灰白色粘)	赤/黒/ 灰 内/黒/ 灰		釜みあり
700	71	F-3		須恵器	長頸瓶	-	7.55	(21.6)	78	赤(白色粘)	赤/黒/ 灰 内/黒/ 灰		頸部径4.7cm 最大径112.4cm 自然釉
701		F-3		須恵器	壺	(3.43)	-	(7.8)	口縁100% 体部20% 底脚20%	赤(白色粘,1~1mm 白色粘,2~5mm(灰白色粘)	赤/黒/ 灰 内/黒/ 灰		頸部径3.4cm 最大径14.65cm 釜みあり
702		F-3		須恵器	長頸瓶	-	(6.3)	(5.6D)	体部30% 底脚80%	赤(白色粘)	赤/黒/ 灰 内/黒/ 灰白		整物箱
703	72	F-3		須恵器	小型壺	5.7	4.2	7.53	80	赤(1~5mm(灰白色粘)	黒/ 灰		頸部径3.45cm
704	71	F-3		須恵器	式口壺	10.7	-	(9.7)	20	赤(赤褐色粘)	赤(2.50/3.0オリーブ 灰) 内(2.50/3.0オリーブ 灰)		頸部径6.6cm
705	72	F-3		須恵器	陶片	(4.83)	-	(16.1D)	口縁100% 底脚100%	赤(白色粘,1~2mm 白色粘)	赤/黒/ 灰 内/黒/ 灰		釜み蓋し
706	72	F-1		須恵器	鉢	(16.2)	-	(9.5)	40	赤(灰白色粘)	赤/黒/ 灰/黒/ 灰白 内/黒/ 灰		最大径116.9cm 釜みあり
707		F-2		須恵器	杯身	(12.0)	(5.33)	3.6	口縁100% 底脚50%	赤(白色粘)	黒/ 灰		整物蓋し
708	63	F-3	SR924	須恵器	杯身	12.5	6.25	3.1	口縁100% 底脚100%	赤(白色粘,1~2mm 白色粘)	赤/黒/ 灰 内/黒/ 灰 内/黒/ 灰		整物蓋し
709		F-2		須恵器	杯身	(14.0)	(3.8)	4.43	20	赤(白色粘)	黒/ 灰白		内面整物
710	63	F-3	SR924	須恵器	杯身	13.0	6.2	3.7	100	赤(1mm(灰白色粘)	赤/黒/ 灰/黒 内(2.57/2.9黄 赤)		
711	71	F-3		須恵器	杯身	12.15	5.7	5.13	80	赤(白色粘)	赤(2.387/3.07 内(2.579/3.07)		
712	63	F-3	SR924	須恵器	杯身	12.7	6.35	4.35	100	赤(白色粘)	2.576/3.07黄 赤/黒/ 灰		内面に黒褐色
713		F-2		須恵器	杯身	(16.3)	-	(3.7)	10	赤(白色粘,1~2mm 灰白色粘,1mm(灰白色粘)	黒/ 灰		
714		F-2		須恵器	罎	(15.9)	(6.3)	6.35	40	赤(白色粘,灰白色粘, 1~2mm(灰白色粘)	黒/ 灰 内/黒/ 灰		
715		F-2		須恵器	罎	(15.8)	(6.4)	3.6	40	赤(白色粘,1~2mm 白色粘)	黒/ 灰白		
716		F-3		須恵器	罎	-	6.7	(2.8)	30	赤(白色粘)	黒/ 灰		
717		F-3		須恵器	罎	(16.4)	-	(4.9)	20	赤(白色粘,1~2mm 白色粘)	赤(2.575/4.0黄 赤)内(2.576/4.0黄 赤)		
718	71	F-3		須恵器	罎	(17.2)	(6.4)	5.2	50	赤(白色粘,3~5mm 白色粘)	黒/ 灰		
719		F-3		須恵器	罎	-	6.8	(3.6)	体部100% 底脚50%	赤(白色粘,1~2mm 白色粘)	2.387/3.07白		高台付
720		F-2		須恵器	罎	(15.8)	-	(3.7)	20	赤(白色粘)	黒/ 灰 内/黒/ 灰		底面整物
721	71	F-3	SR2	須恵器	罎	(13.2)	6.9	6.6	口縁100% 底脚80%	赤(白色粘,黒色粘, 1mm(灰白色粘,1mm 白色粘)	黒/ 灰 内/黒/ 灰		輪径4箇所以上 釜みあり
722		F-3		須恵器	罎	-	6.6	(4.4)	底脚80%	赤(白色粘,1~2mm 白色粘)	黒/ 灰		
723		F-2		須恵器	罎	-	(6.4)	(2.4)	20	赤(白色粘,1mm(灰白色粘)	2.387/3.07白		整物蓋し
724		F-1		須恵器	罎	-	(6.2)	(2.2)	底脚100%	赤(白色粘,1~2mm 白色粘)	2.387/3.07白		整物蓋し
725		F-1		須恵器	罎	-	(6.4)	(2.7)	体部100% 底脚100%	赤(白色粘,2~5mm(灰白色粘)	2.387/3.07白		整物蓋し

表 15 出土土器観察表

種別No	図録No	区	遺構 層位	種類	器種名	口径	底径	高さ	残存率(%)	胎土	色調	様式	備考
726		F-2	50000	灰釉陶器	甕	106.0	17.45	6.8	20	底(白色胎,1~2mm 白色粉末,3~5mm程度 確認)	外-2.016/20黄 内-1013/13C 内-1017/13C 内-1017/21C-15(黄地)		
727	71	F-5南側 遺構		灰釉陶器	甕	12.3	6.2	5.3	残存70~ 底部100	底(白色胎,1~2mm 白色粉末)	2.017/13C白		
728		F-2		灰釉陶器	甕	-	06.0	13.45	25	底(白色胎,1~2mm 白色粉末)	外-1013/13C 内-1017/13C		
729		F-2		灰釉陶器	甕	-	6.8	13.10	底 残存~ 底部30	底	胎/灰		底口縁凸
730		F-2		灰釉陶器	甕	-	12.0	2.9	30	底(白色胎少)	外-1010B/13C白 内-2.017/13C白		自然剥 底右縁凸状
731	71	F-2		灰釉陶器	小碗	112.0	06.0	4.4	40	底(白色胎,1~2mm 白色粉末)	2.016/13C		
732		F-3		灰釉陶器	甕	117.13	2.4	5.8	30	底(白色胎少)	外-1017/13C白 内-1017/13C白		高台正縁
733		F-3		灰釉陶器	甕	-	2.6	14.75	底 残存~ 底部30	底	胎/灰		器蓋 高台正縁 底右縁凸状
734	71	A-1		灰釉陶器	甕	114.05	7.25	5.1	60	底(白色胎,1~10mm 白色粉末)	外-1017/13C 内-2.017/13C		
735		A-1		灰釉陶器	甕	-	7.6	12.15	底部100	底(白色胎多,5~10mm 白色粉末,1~2mm白色 粉末)	胎/灰白		内面灰白色付着
736		A-1		灰釉陶器	甕	-	17.45	11.90	底部80	底(白色胎,1~5mm 白色粉末)	2.017/13C白		底右縁凸状
737		F-3		灰釉陶器	甕	114.1	15.75	2.45	底部30	底(白色胎,灰胎配)	外-1017/13C 内-1017/13C		底みあり 高台正縁
738		F-2		灰釉陶器	甕	-	08.0	13.45	20	底(白色胎,1~2mm 白色粉末)	外-1017/13C白 内-2.017/13C白		
739		F-3		灰釉陶器	甕	-	17.0	13.75	30	底(白色胎,1~5mm 白色粉末)	外-2.017/13C白 内-2.016/13C黄		
740	71	F-2		緑釉陶器	甕	-	06.0	11.90	底部10	底	胎:オリーブ(緑胎)		
741	71	F-3		緑釉陶器	甕	-	06.0	11.80	底部30	底(白色胎)	胎:2.0015/オリーブ 灰		
744		A-2		灰胎唐 磁器	広口壺	111.0	-	15.10	口縁~ 底部20	底(白色胎,1mm粉末少)	2.016/13C灰		
742		A-1		灰胎唐 磁器	広口壺	108.0	-	14.75	口縁~ 底部40	底(白色胎,1~2mm 白色粉末)	2.017/20黄		
745		F-2		灰胎唐 磁器	壺	115.0	-	14.0	20	底(白色胎多)	外-2.017/13C白 内-1017/13C白		
744		A-1		灰胎唐 磁器	広口壺	109.0	-	15.10	口縁~ 底部20	底(白色胎少,4~2mm 灰白粉末)	2.016/13C灰		底右縁凸
746		F-2		灰胎唐 磁器	壺	-	-	-	15	底(白色胎,1~2mm 白色粉末)	外-2.016/13C黄 内-1017/13C白		器蓋
747		F-3	埋溝北土層	山瓦類	甕	106.0	12.0	6.0	残存10~ 底部100	底(白色胎,1~2mm 白色粉末)	2.017/13C白	1-1	東洋式 丸ぶくれ
748	73	F-2		山瓦類	甕	117.1	7.2	5.5	60	底(白色・灰色・栗色・ 褐色胎,1~4mm灰白 粉末)	2.017/13C白	1-1	東洋式 丸ぶくれ
749		F-1		山瓦類	甕	106.0	12.10	6.2	口縁凸~ 底部25	底(白色・灰色胎, 1~2mm灰白粉末)	胎/灰	1-1	東洋式
750		F-3		山瓦類	甕	106.0	6.6	4.8	60	底(白色胎,1~2mm 白色粉末)	外-2.016/13C黄 内-2.017/13C白	1-1	東洋式
751		F-2		山瓦類	甕	-	6.3	14.45	底 残存~ 底部30	底(白色胎,1~6mm 白色粉末)	胎/灰	1-1	東洋式
752		F-2	埋溝	山瓦類	甕	106.0	12.0	5.8	40	底(白色・褐色胎, 1~2mm白色粉末)	胎/灰	1-1	東洋式
753		F-2		山瓦類	甕	114.1	17.75	6.1	30	底(白色・灰色・褐色 胎,1~6mm白色粉末)	2.016/13C	1-1	東洋式 内面磨削
754		F-3	溝上	山瓦類	甕	106.0	06.0	5.2	20	底(白色胎,1~4mm 白色粉末)	外-1017/13C白 内-1017/13C白 胎:1016/20黄 オリーブ	1-1	東洋式
755		A	埋溝北土層	山瓦類	甕	106.0	12.0	6.10	20	底(白色・褐色胎, 1~2mm白色粉末)	胎/灰	1-1	東洋式

表 15 出土土器観察表

標高%	図面%	区	遺構 層位	種別	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色澤	様式	備考	
756	73	中溝(埋 込)		山系陶	小碗	12.0	5.0	3.75	80	黄(1~2mm白色雜多)	T, B6/13C	1-1	東洋土系	
757	73	E-2		山系陶	小碗	9.8	5.2	3.3	95	黄(白色)	青-2, B5/14C 内-2, B5/14C	1-1	東洋土系 メノコ類 磁化磁多類	
758	73	E-2		山系陶	小碗	(16.65)	4.65	1.85	70	黄(白色)	M/ 灰	1-1	東洋土系	
759	73	E-2		山系陶	小碗	8.45	4.75	3.35	70	黄(白色)胎, 1~2mm 白色雜多)	M/ 灰	1-1	東洋土系	
760	74	E-3		山系陶	小碗	(10.5)	5.0	3.25	60	黄(白色)胎, 1~4mm 白色雜多)	青-1B6/14C 内-2, B7/14C白	1-1	東洋土系	
761	74	E-2		山系陶	小碗	(10.8)	4.8	3.2	70	黄(白色)胎, 1~4mm 白色雜多)	M/ 灰	1-1	東洋土系	
762	74	E-3		山系陶	小碗	(10.8)	(4.5)	3.2	80	黄(白色)胎, 1mm白色 雜多)	B7/13C白	1-1	東洋土系 内面全体に自然釉	
763	E-3	表土		山系陶	碗	(14.6)	(9.6)	6.0	30	黄(白色)胎, 1~2mm 白色雜多)	青-2/ 灰白 内-2, B5/ 灰	1-2	東洋土系	
764	E-3	表土		山系陶	碗	(17.4)	(7.8)	6.0	40	黄(白色)	青-1B6/14C 内-2, B5/14C	1-2	東洋土系 メノコ類	
765	74	E-3		山系陶	碗	(17.0)	7.4	6.0	70	黄(白色)	T, B5/13C	1-2	東洋土系 メノコ類	
766	E-3			山系陶	碗	(15.6)	(6.8)	6.0	40	黄(白色)	M/ 灰	1-2	東洋土系 メノコ類	
767	E-3	明黄褐色胎		山系陶	碗	-	(7.8)	(2.1)		体面~ 底面	黄(白色)胎, 1~4mm 白色雜多)	B7/13C白	1-2	東洋土系
768	E-3			山系陶	碗	(16.4)	7.6	6.1		口縁部~ 底面	黄(白色)胎, 2~2.5mm 白色雜多)	2, B3/13C白	1-2	東洋土系
769	74	A-2北		山系陶	小碗	(16.65)	4.18	2.30	80	黄(白色)胎, 1~2mm 白色雜多)	B7/13C	1-2	東洋土系	
770	74	A-2北		山系陶	小碗	9.55	4.7	3.25	70	黄(白色)胎, 1~2mm 白色雜多)	B7/ 灰白	1-2	東洋土系 メノコ類	
771	E-2			山系陶	小碗	(11.0)	(5.9)	(3.4)	20	黄(白色)胎, 2mm 白色雜多)	青-1B/ 灰 内-2, B6/ 灰	1-2	東洋土系 内面全体に自然釉	
772	E-2			山系陶	小碗	(8.7)	(4.9)	3.65	20	黄(白色)	B7/13C	1-2	東洋土系	
773	74	E-3	表土	山系陶	小碗	(8.2)	5.45	2.65	70	黄(1~2mm白色雜多)	2, B3/13C白	1-2	東洋土系	
774	E-3			山系陶	小碗	(8.8)	(4.8)	3.2	20	黄(白色)胎, 1mm白色 雜多)	青-1B6/14C 内-1B6B/14C	1-2	東洋土系	
775	74	E-3		山系陶	小碗	8.4	4.25	3.4	60	黄(白色)胎, 1~4mm 白色雜多)	B7/ 灰白	1-2	東洋土系	
776	74	E-3	黄褐色胎	山系陶	小碗	8.8	5.25	2.9	80	黄(白色)胎, 2~4mm 白色雜多)	B7/13C	1-2	東洋土系	
777	75	E-2		山系陶	有柄罐	11.3	5.8	3.2	70	黄	B7/13C	1-2	東洋土系 右側底小	
778	E-2			山系陶	小碗	(10.2)	(5.8)	2.8	30	黄(白色)胎, 1~2mm 白色雜多)	B7/13C	1-2	東洋土系	
779	E-3			山系陶	小碗	(8.6)	(5.1)	3.0	30	黄(白色)	M/ 灰	1-2	東洋土系	
780	E-3			山系陶	小碗	(8.7)	3.2	2.9	50	黄(白色)胎, 1mm白色 雜多)	T, B5/13C	1-2	東洋土系	
781	E-2			山系陶	小碗	(10.25)	(5.65)	2.4	50	黄(白色)胎, 2mm白色 雜多)	M/ 灰	1-2	東洋土系 メノコ類	
782	E-3			山系陶	小碗	(10.2)	(6.0)	(2.4)	20	黄(白色)	M/ 灰	1-2	東洋土系	
783	74	E-3		山系陶	小碗	(8.95)	5.2	2.75	45	黄(白色)	2, B6/14C	1-2	東洋土系	
784	75	E-3		山系陶	小碗	(10.2)	5.9	3.1	50	黄(白色)胎	青-1B/ 灰白 内-2, B6/ 灰 M/ 灰白	1-2	東洋土系	
785	75	E-2		山系陶	小碗	(10.35)	5.45	3.60	70	黄(白色)	青-2, B6/14C 内-2, B6/ 灰	1-2	東洋土系 器身著しい 磁化磁多類 メノコ類 内面全体に自然釉	
786	E-3	暗褐色 砂質胎		山系陶	小碗	(8.0)	(4.5)	3.1	40	黄(白色)胎	T, B6/13C	1-2	東洋土系	
787	75	E-2		山系陶	輪花碗	10.0	5.0	3.0	50	黄(1~2mm白色)	2, B6/14C	1-2	東洋土系 輪花文胎	
788	E-3	表土		山系陶	小碗	(8.2)	(4.2)	2.65	25	黄(白色)胎, 2mm白色 雜多)	青-1B/ 灰 内-2, B6/ 灰	1-2	東洋土系 内面全体に自然釉	
789	E-3			山系陶	小碗	(10.0)	(6.2)	2.6	40	黄(1~2mm白色)胎, 1mm 白色雜多)	2, B7/13C白	1-2	東洋土系	
790	E-3	黄褐色胎		山系陶	小碗	(8.4)	(4.4)	2.9	60	黄(白色)胎	M/ 灰	1-2	東洋土系	
791	75	E-2		山系陶	小碗	8.8	5.45	3.05	95	黄(白色)胎, 1~2mm 白色雜多)	B7/ 灰白	1-2	東洋土系 メノコ類	

表 15 出土土器觀察表

標識No	段階No	區	遺構 層位	種類	器種名	口徑	底徑	器高	殘存率(%)	胎土	色澤	樣式	備考
782	F-3	溝底色層	山形綱	小甕	10.0	8.2	3.1	40	破(白色胎, 1~2mm 白色雜質)	016/13K		I-2	東瀨江式 P4a型(1)
793	F-3		山形綱	小甕	10.4	5.4	3.1	50	破(白色胎)	2.016/13K(1)		I-2	東瀨江式
794	F-2		山形綱	小甕	10.8	14.0	2.7	20	破(白色胎)	2.016/13K(1)		I-2	東瀨江式 東山系分組
795	F-3		山形綱	小甕	10.4	15.0	12.90	25	破(白色胎)	外: 36/ 灰 内: 37/ 灰白		I-2	東瀨江式 Aノ29類
796	F-3	溝上	山形綱	小甕	10.3	15.0	3.1	40	破(白色胎, 1~2mm 白色雜質)	36/ 灰		I-2	東瀨江式 P4a型(1)類(1)
797	F-3		山形綱	小甕	10.8	15.0	2.10	40	破(白色胎, 1mm白色 雜質)	013/13K		I-2	東瀨江式
798	F-3		山形綱	小甕	10.3	15.3	2.10	40	破(白色胎, 1~2mm 白色雜質)	36/ 灰		I-2	東瀨江式
799	F-2		山形綱	小甕	10.0	15.0	3.0	破片20~ 底部40	破(白色胎)	017/13K(1)		I-2	東瀨江式
800	F-3		山形綱	輪花甕	10.2	-	15.3	30	破(白色胎)	36/ 灰		II	東瀨江式 山形區類
801	F-3		山形綱	甕	10.0	16.2	5.2	50	破(白色胎, 1~2mm 白色雜質)	外: 7. 316/ 灰 内: 016/13K		II	東瀨江式 山形區類
802	F-3		山形綱	甕	10.0	7.0	5.2	60	破(白色胎, 1mm白色 雜質)	35/ 灰		II	東瀨江式 Aノ29類 内山形区類(1)
803	F-3		山形綱	甕	10.4	15.0	5.1	40	破(白色胎, 1mm白色 雜質)	36/ 灰		II	東瀨江式 Aノ29類
804	F-1		山形綱	甕	-	16.0	12.10	破片25	破(白色胎, 1~2mm 白色雜質)	36/ 灰		II	東瀨江式
805	F-3	溝上	山形綱	甕	-	6.2	13.0	50	破(白色胎多, 1~2mm 白色雜質)	2.016/13K		II	東瀨江式 Aノ29類
806	F-3	溝上	山形綱	甕	-	16.0	12.90	30	破(白色胎)	外: 7. 316/216(1) 内: 2. 016/216(1)・破 2. 016/13K(1)		II	東瀨江式 Aノ29類
807	F-2		山形綱	小甕	10.4	14.0	2.7	30	破(白色胎)	37/ 灰白		I-2~II-2	東瀨江式
808	F-2		山形綱	小甕	6.25	4.2	2.4	90	破(白色胎, 2~3mm 白色雜質)	外: 2. 315/13K(1) 内: 37/ 灰白		I-2~II-2	東瀨江式 東山系(1)類(1)
809	F-2		山形綱	小甕	10.2	14.0	2.10	40	破	2.016/13K(1)		II	東瀨江式
810	F-2		山形綱	小甕	12.25	13.0	2.3	40	破(白色胎)	外: 7. 316/13K(1) 内: 37/ 灰白		II	東瀨江式
811	F-3		山形綱	甕	15.4	7.4	4.9	95	破(白色胎, 1~2mm 白色胎多, 5mm白色 雜質)	36/ 灰			東瀨江式
812	F-3		山形綱	甕	10.4	17.0	5.1	破片20~ 底部30	破(白色胎多)	外: 016/13K 内: 015/13K		III-1	東瀨江式
813	F-3	溝上	山形綱	甕	11.4	16.0	4.9	30	破(白色胎, 1~2mm 白色胎多)	外: 016/13K (破)7. 315/13K 内: 7. 316/13K		III-1	東瀨江式
814	F-3		山形綱	甕	10.0	17.2	5.5	40	破(白色胎, 1mm白色 雜質)	外: 37/ 灰白 内: 36/ 灰		III-1	東瀨江式
815	F-3		山形綱	甕	10.2	13.0	5.2	50	破(白色胎, 1~2mm 白色胎多)	外: 7. 316/13K 内: 016/13K		III-1	東瀨江式 東山系分組
816	F-2	埋土	山形綱	甕	10.0	17.0	5.3	25	破(白色胎)	36/ 灰		III-1	東瀨江式 Aノ29類
817	A	溝底土層	山形綱	甕	-	16.0	15.10	25	破(白色胎)	013/13K		III-1	東瀨江式 Aノ29類
818	F-3		山形綱	甕	10.4	5.4	5.1	30	破(白色胎, 1~2mm 白色胎)	外: 016/13K(1) 内: 016/13K(1)		III-1	東瀨江式
819	F-3		山形綱	小甕	10.2	3.3	2.3	100	破(白色胎, 1mm白色 雜質)	017/13K(1)		III-1	東瀨江式
820	F-3		山形綱	小甕	10.4	4.1	2.0	破片40~ 底部100	破(白色胎)	外: 36/ 灰 内: 37/ 灰白		III-1	東瀨江式
821	F-2		山形綱	小甕	10.0	14.0	2.3	30	破(白色胎, 灰色胎, 1~2mm灰色)	外: 35/ 灰 内: 36/ 灰		III-1	東瀨江式 溝ノ段(1)
822	F-3		山形綱	小甕	12.4	2.75	2.1	60	破(白色胎, 2~3mm 白色雜質)	36/ 灰		III-1	東瀨江式
823	F-2		山形綱	小甕	10.0	14.0	2.1	30	破(白色胎, 灰色胎, 灰色胎, 1~2mm半暗 色雜)	外: 2. 017/13K(1) 内: 016/13K		III-1	東瀨江式
824	F-3		山形綱	小甕	8.05	4.0	2.4	75	破(白色胎, 1mm白色 雜質)	37/ 灰白		III-1	東瀨江式

表 15 出土土器観察表

標高%	深部%	区	遺構 層位	種類	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色澤	様式	備考
825	76	F-3		山系陶	小瓶	5.8	2.75	2.4	70	赤(白色粒,白色線粒)	96/ 灰	群-1	東洋土系
826	77	F-2	覆土	山系陶	小瓶	(7.8)	4.15	2.1	口縁部~ 底部100	赤(白色粒,1mm白色 線粒)	96/ 灰	群-1	東洋土系
827	77	F-3		山系陶	小瓶	9.0	3.4	2.20	70	赤(白色線粒)	97/ 灰白	群-1	東洋土系
828		F-3		山系陶	小瓶	(7.8)	(3.6)	2.3	30	赤(3mm白色線粒)	2.107/灰白	群-1	東洋土系 内面裏付残片
829	77	F-3		山系陶	小瓶	(7.8)	4.2	2.4	60	赤(白色線粒)	2.108/灰白	群-1	東洋土系
830		F-3		山系陶	小瓶	(7.8)	(3.8)	2.45	60	赤(白色粒,5mm茶色線 粒)	107/1灰白	群-1	東洋土系
831	77	F-3		山系陶	小瓶	7.9	4.0	2.50	100	赤(白色粒,1~2mm 白色線粒)	96/ 灰	群-1	東洋土系
832	77	A-2	覆土の上層	山系陶	小瓶	(8.0)	4.3	2.1	70	赤(白色粒,灰色粒)	赤-107/1灰白 内-107/1灰白	群-1	東洋土系
833	77	F-3	溝底	山系陶	小瓶	8.5	2.5	2.5	90	赤	95/ 灰	群-1	東洋土系 内面裏付に障子
834		F-2		山系陶	小瓶	(7.8)	(4.0)	2.60	25	赤(白色粒)	104/1灰	群-1	東洋土系
835	77	A-1		山系陶	小瓶	7.8	4.4	2.90	100	赤(3mm粒)	2.109/2黄	群-1	東洋土系 底面裏付の底片
836		F-3		山系陶	小瓶	(8.0)	(3.6)	2.1	50	赤(白色粒,5mm白色 線粒)	2.106/1灰白	群-1	東洋土系
837	77	F-3		山系陶	小瓶	8.0	3.5	2.3	75	赤(白色粒,1mm白色 線粒)	106/1灰	群-1	東洋土系
838	77	F-3		山系陶	小瓶	8.1	3.8	2.5	90	赤(白色粒)	96/ 灰	群-1	東洋土系
839	77	F-3	表土	山系陶	小瓶	(7.8)	(3.8)	1.8	50	赤(白色粒,1~2mm 白色線粒)	96/ 灰	群-1	東洋土系 内面自然物
840		F-2		山系陶	小瓶	7.5	4.20	2.10	95	赤(白色粒,1mm白色 線粒)	96/ 灰	群-1	東洋土系
841	76	F-3		山系陶	小瓶	8.45	3.8	2.1	90	赤(白色粒,3mm白色 線粒)	96/ 灰	群-1	東洋土系
842		A-1		山系陶	小瓶	(8.3)	(4.0)	(2.20)	20	赤(白色粒,1~2mm 砂粒)	107/1灰白	群-1	東洋土系
843		F-3		山系陶	小瓶	(7.9)	3.3	2.90	50	赤	106/1灰白	群-1	東洋土系
844	76	F-3		山系陶	小瓶	8.4	3.4	2.3	75	赤(白色粒,1mm白色 線粒)	106/1灰白	群-1	東洋土系
845	76	F-3		山系陶	小瓶	7.90	3.90	2.30	100	赤(白色粒,1mm白色 線粒)	96/ 灰	群-1	東洋土系
846	76	A-2		山系陶	小瓶	8.0	4.85	1.85	90	赤(白色粒)	96/ 灰	群-1	東洋土系
847		A-1	障子	山系陶	小瓶	(8.20)	(4.60)	2.95	25	赤	2.107/2黄	群-1	東洋土系
848		B	障子	山系陶	瓶	(16.0)	(8.0)	4.3	65	赤(白色粒,1~2mm 白色線)	95/ 灰	群-2	東洋土系 スノコ瓶
849		A-1		山系陶	瓶	(14.20)	(6.90)	4.2	40	赤(白色粒,6mm茶色 粒+灰色粒,3mm白色 線粒)	95/ 灰	群-2	東洋土系 内面裏付残片
850		F-2		山系陶	瓶	(15.0)	(6.4)	(4.2)	20	赤(白色粒,1~2mm 灰色線)	95/ 灰	群-2	東洋土系
851		A-1		山系陶	瓶	--	(7.70)	(3.6)	30	赤(白色粒,1mm白色 線粒)	106/1灰	群-2	東洋土系 スノコ瓶 内面裏付残片 底面裏付
852		A-1		山系陶	瓶	(11.9)	(6.60)	4.20	40	赤(白色粒,5mm砂粒)	95/ 灰	群-2	東洋土系
853		F-3	褐色砂層	山系陶	瓶	(14.8)	(6.4)	5.0	40	赤(白色粒,1~2mm 白色線)	95/ 灰	群-2	東洋土系 スノコ瓶
854		A-1		山系陶	瓶	--	(8.20)	(3.1)	底面40	赤(白色粒,1mm白色 線粒)	96/ 灰	群-2	東洋土系 キエコウ瓶
855		A-1		山系陶	瓶	--	5.90	(2.4)	体部50~ 底面100	赤(白色粒多,1~2mm 白色線)	7.105/1灰	群-2	東洋土系
856		A-1		山系陶	瓶	--	(7.0)	(2.0)	20	赤(白色粒)	2.107/2黄	群-2	東洋土系
857		A-1		山系陶	瓶	--	(6.60)	(2.4)	30	赤(灰白色粒,3mm白色 線粒)	赤-107/1灰白 内-95/ 灰	群-2	東洋土系 底面裏付
858		F-2		山系陶	瓶	--	(7.4)	(1.9)	底面40	赤(白色粒,褐色粒)	赤-107/1灰白 内-106/1灰白	群-2	東洋土系 キエコウ瓶
859		A-1		山系陶	瓶	--	(6.8)	(2.7)	40	赤(白色粒,1mm白色 線)	105/1灰	群-2	東洋土系 キエコウ瓶
860		A-1		山系陶	瓶	--	(7.30)	(2.7)	体部~ 底面50	赤(白色粒,6mm白色 線粒)	2.107/1灰白	群-2	東洋土系

表 15 出土土器観察表

種別%	図柄%	区	遺構 層位	種類	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色調	様式	備考
961		A-2		山瓦綫	碗	-	16.80	11.4	30	赤(白胎, 白灰, 少量赤色 燻焼)	50G/140G	III-2	東海式 蓋付碗片板
962		A-1		山瓦綫	碗	-	15.40	13.5		赤(白胎, 1~2mm 白色燻, 少量赤色燻焼)	2.076/130G	III-2	東海式
963		A-1	黒色土層	山瓦綫	碗	-	16.80	12.20	底部30	赤(白胎, 少量燻焼)	118/130G	III-2	東海式 蓋付碗片板
964		A-1		山瓦綫	碗	-	6.70	11.80	底部100	赤(白胎, 少量燻, 少量赤 色燻焼)	90/ 瓦	III-2	東海式 蓋付碗片板
965		A-1		山瓦綫	小皿	18.40	14.60	1.8	25	赤(白胎, 少量燻砂 少)	2.076/100G(1)型	III-2	東海式 蓋付碗片板 蓋付碗片板に厚く残存
966		A-1		山瓦綫	小皿	18.80	13.80	1.75	75	赤(白胎, 少量燻少)	2.077/100G	III-2	東海式
967		F-2	埋瓦	山瓦綫	小皿	17.5	6.4	1.5	50	赤(白胎, 少量燻砂 燻)	外-1015G/100G 内-1016G/100G	III-2	東海式 蓋付碗片板
968		F-2		山瓦綫	小皿	17.60	3.8	2.2	40	赤(白胎燻)	118/130G	III-2	東海式 蓋付碗片板
969	78	F-2		山瓦綫	小皿	7.55	5.45	2.30	100	赤(白胎燻)	90/ 瓦	III-2	東海式 内蓋蓋付碗片板
970		F-2		山瓦綫	小皿	18.4	13.8	1.6	80	赤(白胎燻)	90/ 瓦	III-2	東海式 内蓋蓋付碗片板
971		A-1		山瓦綫	小皿	17.3	13.8	1.5	20	赤(白胎, 1~2mm 白色燻)	2.077/130G	III-2	東海式
972		F-2		山瓦綫	小皿	17.4	2.8	1.9	60	赤(白胎燻)	外-7.016/130G 内-7.017/130G	III-2	東海式 スノコ板
973		A-1		山瓦綫	小皿	17.6	4.6	1.95		白燻砂 -少量90	57/ 瓦白	III-2	東海式 蓋付碗片板 赤色燻土出し
974		F-2		山瓦綫	小皿	17.6	14.4	1.7	40	赤(白胎, 少量白色 燻)	55/ 瓦	III-2	東海式
975	78	F-2		山瓦綫	小皿	7.75	4.65	1.8	95	赤(白胎)	外-7.015/130G 内-52/ 瓦	III-2	東海式
976	78	A-1		山瓦綫	小皿	8.8	1.7	1.6	60	赤(白胎燻-少量砂)	1016G/210G(裏)	III-2	東海式 蓋付碗片 蓋付碗片
977	78	A	埋瓦粘土層	山瓦綫	小皿	17.70	1.2	1.3	70	赤(白胎, 1~2mm 赤褐色燻)	外-1015G/100G 内-1016/130G	III-2	東海式 蓋付碗片 蓋付碗片
978	78	A-1		山瓦綫	碗	14.1	3.8	4.00		白燻砂 -少量90	1016G/130G	III-2	東海式 スノコ板 自然蝕
979		A-1		山瓦綫	碗	18.40	16.8	3.95		白燻砂 -少量90	118/130G	III-2	東海式 蓋付碗片板
980		A-1		山瓦綫	碗	113.70	6.4	4.8		白燻砂 -少量100	2.075/130G	III-2	東海式
981		A-1		山瓦綫	碗	-	16.8	13.15	20	赤(白胎, 少量白色 燻)	118/130G	III-2	東海式
982		A-2	表層	山瓦綫	小皿	17.90	14.4	1.65	70	赤(白胎, 1~2mm 白色燻)	54/ 瓦	III-2	東海式 蓋付碗片 蓋付碗片
983	78	A-1		山瓦綫	小皿	7.55	5.1	1.6	95	赤(白胎, 少量白色 燻少)	106/100G	III-2	東海式 蓋付碗片 蓋付碗片
984		F-2		山瓦綫	小皿	17.4	15.9	1.5	20	赤(白胎)	1016G/210G(裏)	III-2	
985	73	F-2	埋瓦色土層	山瓦綫	小皿	9.45	4.8	2.90	70	赤(白胎, 少量白色 燻)	117/130G	1-2	東海-関西系 キエダ式 蓋付碗片板
987		A	埋瓦粘土層	山瓦綫	碗	18.9	-	15.5	20	赤(白胎, 1~2mm 白色燻)	117/130G		東海-関西系
988	73	F-2		山瓦綫	輪花碗	114.9	2.8	5.8	60	赤(白胎砂)	2.077/130G	1-2	東海-関西系 キエダ式
989		F-1		山瓦綫	碗	-	6.25	11.80	底部100	赤(白胎, 1~2mm 白色燻, 少量赤色燻 少)	58/ 瓦白	II	東海-関西系 蓋付碗片 キエダ式 内蓋蓋付碗片板
991	73	F-2		山瓦綫	碗	18.2	7.5	5.8	80	赤(白胎砂)	118/130G	III-1	東海-関西系 キエダ式
994	73	F-2		山瓦綫	碗	18.40	16.8	5.4		白燻砂 -少量100	57/ 瓦白 輪-1.3076/117サーフ 瓦	III-1	東海-関西系 キエダ式
995	73	F-2		山瓦綫	碗	-	18.2	14.4	40	赤(白胎, 1~2mm 白色燻)	2.077/130G	III-1	東海-関西系 キエダ式
998		F-2		山瓦綫	碗	-	-	15.70		赤(白胎, 1~2mm 白色燻, 1~2mm赤 燻)	2.078/130G	III-2	加多志 内蓋に自然蝕-蓋付碗片 板
999		A-1		山瓦綫	小皿	18.20	13.30	1.70		白燻砂 -少量90	2.078/130G 輪-7.015/117サーフ	III-2	東海-関西系

表 15 出土土器観察表

検出No	図版No	区	遺構 層位	種別	器種名	口径	高さ	器高	検出率(%)	胎土	色澤	様式	備考
901		E-3		山系陶	片口鉢	—	(11.0)	(7.0)	10	赤(白色胎, 1~2mm 白色雜少)	A7/ 灰白	B型式	知多系
902		E-3		山系陶	片口鉢	—	(7.0)	(8.0)	20	赤(白色胎)		B型式	知多系
903		E-1		山系陶	鉢	—	(11.70)	(3.3)	10	赤(白色胎, 1~2mm 灰色白雜少)	B7/ 灰白	3~ 4型式	知多系 外面最少量付着
904		E-3		山系陶	大鉢	(20.0)	—	(8.3)	10	赤(白色胎少)	T. 306/ 灰		器高=器口高
909	79	E-3		白磁	碗	(13.2)	—	(3.7)	5	赤(灰色胎)	輪-376/ 灰 輪-2. 377/ 灰白		小片のみ, 漆黒+緑きは押 定
910	79	A-1		白磁	蓋	—	(3.6)	(3.65)	10	赤(灰色胎)	輪-377/ 灰白 輪-2. 378/ 灰白	B型	蓋の縁を組, 蓋の穴が 大部分にも縁が磨る少
911	79	E-2	9F1009	白磁	蓋	(8.0)	—	(1.65)	30	赤	輪-376/ 灰白 輪-378/ 灰白	B型	
914	81	E-2		白磁	蓋	(11.3)	(7.1)	3.1	25	赤	輪-376/ 灰白 輪-38/ 灰白	C型	器高外面に急付
913	81	E-2		白磁	蓋	(12.65)	(7.2)	3.65	30	赤	輪-38/ 灰白 輪-38/ 灰白	C型	器高外面に急付
915	79	E-2		白磁	四耳壺	—	—	—	5	赤(灰色胎少)	輪-377/ 灰白 輪-38/ 灰白		最大径(23.95)cm
916		A-2北		白磁戸	四耳壺	—	—	—	10	赤(灰色胎少)	外: 輪(7. 376/ 20Cキ リープ 内: 2. 377/ 20Cキ リープ	B型	実測部分径(20.0)cm 実測部分の型押し文
918	80-81	E-2		青磁	碗	(13.2)	—	(3.55)	10	赤(青色胎多)	輪-2. 376. 5/ オキ リープ 輪-37/ 灰白	B型	同定系
919	79-80	E-3		青磁	蓋	(8.0)	—	(2.1)	10	口縁部10 赤(青色胎少)	輪-376/ 20Cキ リープ 輪-377/ 灰白		同定系
920	80	E-2	9F174	青磁	蓋	(11.4)	—	(1.3)	5	赤(白色胎, 灰色胎)	輪-376/ 灰 輪-377/ 灰白		同定系
921	79-80	E-3		青磁	碗	—	8.3	(3.8)	5	赤(灰白胎, 1mm白 雑, 1~2mm灰色胎)	輪-376/ 20Cキ リープ 輪-2. 376/ 灰	B型	同定系
922	80	A-1		青磁	碗	—	(4.8)	(2.45)	25	赤(1mm胎)	輪-374/ 10Cキ リープ 輪-377/ 灰白	B型	同定系
923	80	E-3	暗褐色土層	青磁	碗	(14.0)	—	(3.3)	20	赤(灰白色胎, 1mm白 雑)	輪-376/ 20Cキ リープ 輪-377/ 灰白	B型	同定系 ケン牧工具(厚径13.8)
924		E-2	9F200	青磁	碗	(16.0)	—	(2.8)	10	口縁部10 赤(青色胎少)	輪-2. 376/ 20Cキ リープ 輪-2. 376/ 灰白	A1型	器底系
925		A-1		青磁	碗	—	(5.1)	(2.0)	10	体部~ 口縁部10 赤	輪-2. 376/ 20Cキ リープ 輪-377/ 灰白	A~B型	器底系
926	80-81	E-2		青磁	碗	(17.9)	—	(3.65)	10	体部10 赤	輪-2. 376/ 20Cキ リープ 輪-2. 377/ 灰白	A2型	器底系
927	80-81	E-3		青磁	碗	—	—	(3.5)	5	赤(灰白色胎少)	輪-375/ 20Cキ リープ 輪-377/ 灰白	A2型	器底系
929	80	E-3	黄灰色土層	青磁	碗	—	—	—	5	赤(灰白色胎)	輪-2. 376/ オキ リープ 輪-38/ 灰白	A2型	器底系
929	80	E-3		青磁	碗	—	—	(3.9)	5	赤(灰色胎)	外: 輪(500/ 1オキ リープ 内: 輪(400/ 2オキ リープ 輪-38/ 灰白	A2型	器底系
930	80-81	E-2		青磁	小碗	(10.1)	(3.2)	(4.4)	40	赤	輪-2. 375/ オキ リープ 輪-37/ 灰白	A2型	器底系
931		A-1		青磁	碗	(16.8)	—	(3.1)	10	口縁部10 赤	輪-376/ オキ リープ 輪-37/ 灰白	B1型	器底系
932		A	7F4	青磁	碗	(14.3)	—	(1.9)	10	口縁部10 赤(灰色胎多)	輪-2. 376/ オキ リープ 輪-37/ 灰白	B1型	器底系

表 15 出土土器観察表

標識No	図面No	区	遺構 層位	種類	器種名	口径	底径	高さ	残存率(%)	胎土	色調	様式	備考
933	90	F-4		青磁	甕	(16.1)	-	(5.8)	口縁～ 底面50	黄(灰白色)少	外:(黒)10/10、1オリーブ Z灰 内:(黒)7.0/5/2/5オ リーブ 底:黒/灰白	III型	遊樂器系
934	90	F-1		青磁	甕	-	(5.1)	2.4	60	黄	胎:T.0/5/2/5オリーブ 底:10/6/1灰	III型	遊樂器系
935		F-2		青磁	甕	-	(5.5)	(2.8)	10	黄(灰白色)少	外:(黒)7.30/6/1/5灰 内:(黒)5/6/1オリーブ Z灰 底:黒/灰白	III型	遊樂器系
936		F-1		青磁	甕	-	(6.6)	(2.7)	10	黄	胎:T.50/6/1オリーブ 灰 底:10/7/1灰白	III型	遊樂器系 高石の残存が僅か、石のみ 目・壁等は推定
937		F-1		青磁	甕	-	(4.6)	(1.8)	93	黄	胎:黒/7/10/黒灰 底:10/7/1灰白	III型	遊樂器系 底面外面まで施釉
938	90	F-1		青磁	甕	-	-	(2.8)	5	黄(灰白色)少	外:(黒)10/5/1オリーブ Z灰 内:(黒)7.0/5/2/5オ リーブ 底:T.10/7/1灰白	III型	遊樂器系
939	90	F-2		青磁	甕	-	-	(3.6)	5	黄	胎:30/6/1オリーブZ灰 底:10/7/1灰	III型	遊樂器系 寸法の不明なため推定
940	90	F-2	37149 (3042)	青磁	甕	(13.5)	-	(5.8)	20	黄	胎:T.10/7.2/5 底:10/7/1灰	III型	遊樂器系
941	90	F-2		青磁	甕	-	(5.6)	2.2	底面30	黄(黒色)少	胎:30/7/1オリーブZ灰 底:10/7/1灰白	III型	遊樂器系 寸法の不明なため目・壁等は 推定
942	79	F-1		青磁	甕	-	-	-	-	黄	胎:10/7/7/10/黒灰 底:10/6/1灰白	III型	遊樂器系
943	79	F-2	37149	青磁	甕	(17.9)	-	(3.4)	口縁50	黄(黒色)少	胎:T.50/7/10/オリーブ Z灰 底:T.10/7/1灰白	III型	遊樂器系
944		F-1		青磁	甕	(13.3)	-	(7.2)	20	黄(黒色)灰白(赤鉄 少)	胎:30/6/1オリーブZ灰 底:10/6/1灰	III-F型	遊樂器系
945		F-2	跡上	青磁	甕	(16.3)	-	(4.2)	口縁50	黄(白色)少	外:(黒)10/6/2オリーブ Z灰 内:10/6/1灰 底:黒/灰	III型	遊樂器系
946		F-1		青磁	埴土蓋	-	(16.8)	(2.1)	20	黄(灰白色、白色)少	胎:10/6/2オリーブZ灰 底:10/6/1灰		遊樂器系
947	82	F-2		灰陶磁器	甕	(16.4)	2.0	4.6	口縁50～ 底面50	黄(白色)1～2mm 白色(赤鉄)	黒/灰白 胎:T.10/7.2/5オリーブ Z灰	III型	遊樂 内面施釉
948	82	F-3		灰陶磁器	甕	-	6.8	(2.5)	体高～ 底面80	黄(白色)1～2mm 白色(赤鉄)	T.10/6/1灰		遊樂 内面施釉
949	82	F-2	38100/4 砂藏	灰陶磁器	甕	-	7.0	(3.6)	体高～ 底面100	黄(白色)1～2mm 白色(赤鉄少)	T/6/1灰		遊樂 入ノ口部 内面施釉
950		F-3		山瓦類	甕	-	6.4	(2.7)	体高～ 底面60	黄(白色)少	T.10/6/1灰	III-1	灰流注系 遊樂
951	82	F-2		山瓦類	甕	-	6.8	(1.7)	40	黄(白色)1.5mm 白色(赤鉄)	黒/灰	III-1	灰流注系 遊樂、入ノ口部
952		F-3		山瓦類	小皿	(7.6)	4.2	2.6	50	黄(白色)少	T/10/1灰	III-1	灰流注系 遊樂
953	82	F-3		山瓦類	甕	-	-	-	底面 (一部)	黄(白色)少	T/6/1灰	III-1+2	灰流注系 遊樂
954	82	F-4		山瓦類	甕	-	6.0	(1.4)	体高～ 底面60	黄(白色)1～2mm 白色(赤鉄)	黒/灰	III-1	灰流注系 遊樂、入ノ口部
955	82	F-2		山瓦類	甕	-	5.6	(3.8)	体高～ 底面100	黄(白色)1.5mm 白色(赤鉄少)	10/7/1灰白	III-2	灰流注系 遊樂、入ノ口部
956	82	F-1		山瓦類	甕	(14.9)	(7.2)	4.25	口縁50～ 底面80	黄(白色)1.5mm 白色(赤鉄少)	T/5/1灰	III-1	灰流注系 遊樂
957	82	F-2	跡上	山瓦類	甕	-	6.8	(2.4)	底面100	黄(白色)1.5mm 白色(赤鉄)	10/6/1灰	III-1	灰流注系 遊樂、内面施釉
958	82	F-3		山瓦類	甕	-	(5.2)	(1.8)	20	黄(白色)少	黒/1灰	III-1	灰流注系、内面施釉 遊樂、入ノ口部
959	82	F-3		山瓦類	小皿	8.0	4.6	1.8	50	黄(白色)1.5mm 白色(赤鉄)	T/6/1灰	III-1	灰流注系 遊樂、内面施釉
960	82	F-3		山瓦類	小皿	-	3.8	(1.3)	20	黄(白色)1.5mm 白色(赤鉄少)	T/7.1灰白	III-1+2	灰流注系 遊樂
961		F-2		山瓦類	甕	(12.4)	-	(3.1)	20	黄	T/7.1灰白		灰流注系 遊樂

表 15 出土土器観察表

洋図№	図版№	区	遺構 層位	種類	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色澤	様式	備考
962		F-3		山系陶	碗	~	7.0	(2.5)	50	泥	M/ 灰	Ⅱ-1	東洋土系 器類 スノコ型
963	81	F-3		山系陶	碗	~	6.4	(1.5)	底割300	泥(白色胎,1~2mm 白色雜多)	T.D6/13C	Ⅱ-2	東洋土系 内山摩利 器類 スノコ型
964	82	F-3		山系陶	碗	~	6.6	(2.0)	30	泥(白色胎,1~2mm 白色雜多)	S16/13C	Ⅱ	東洋土系 器類
965		F-4		山系陶	小皿	58.23	(4.7)	2.2	25	泥(白色胎,1~2mm 白色雜多)	S7/ 灰白		東洋土系 器類 底部内山摩利
966	82	F-3		山系陶	碗	~	7.2	(2.8)	60	泥(白色胎,1~2mm 白色雜多)	S7/ 灰白	1-1	東洋土系 器類
967	83	A-1		山系陶	碗	~	(6.7)	(3.15)	体割~ 底割300	泥(白色胎)	S16/13C	Ⅱ	東洋土系 器類 底部着土)
968	83	F-3		山系陶	碗	(13.6)	7.0	5.2	40	泥(白色胎,1~2mm 白色雜多)	M/ 灰	Ⅱ-1	東洋土系 内山摩利 器類 スノコ型
969		F-3		山系陶	碗	~	(6.6)	(1.6)	体割~ 底割20	泥	2.D7/13C白	Ⅱ-1	東洋土系 器類
970	83	F-3		山系陶	碗	~	8.0	(4.2)	40	泥(白色胎,1~2mm 白色雜,5mm白色雜多)	T.D6/13C	Ⅱ-1	東洋土系 器類
971		F-3		山系陶	碗	~	7.0	(3.2)	体割~ 底割300	泥	S5/ 灰	Ⅱ-1	東洋土系 器類
972	83	F-3		山系陶	小皿	8.9	4.3	2.6	80	泥(白色胎,1mm白色 雜少)	T.D6/13C	1-2	東洋土系 器類 スノコ型
973	83	F-4		山系陶	碗	~	7.0	(1.9)	体割~ 底割60	泥(白色胎,1~2mm 白色雜多)	T.D6/13C	Ⅱ-1	東洋土系 スノコ型 器類 内山摩利
974	83	F-3		山系陶	碗	~	6.8	(1.7)	30	泥(白色胎,1~2mm 白色雜多)	M/ 灰	Ⅱ-1	東洋土系 スノコ型 器類 内山摩利
975	83	F-3		山系陶	碗	~	6.9	(2.5)	30	泥(白色胎,1~2mm 白色雜多)	T.D6/13C	Ⅱ-1	東洋土系 スノコ型 器類 内山摩利
976	83	F-3		山系陶	碗	~	(6.6)	(2.7)	30	泥(白色胎)	S7/13C白	Ⅱ-1	東洋土系 器類 内山摩利
977	83	F-3		山系陶	小皿	(7.6)	4.0	2.4	60	泥(白色胎)	T.D7/13C白	Ⅱ-1	東洋土系 器類 内山摩利<底割
978	83	F-3		山系陶	小皿	(7.6)	4.0	2.2	口縁割~ 底割100	泥(白色胎)	2.D7/13C白	Ⅱ-1	東洋土系 器類 内山摩利
979	83	F-3		山系陶	小皿	(8.2)	4.0	2.9	口縁割~ 底割100	泥(白色胎)	2.D8/13C白	Ⅱ-1	東洋土系 器類
980	83	F-3		山系陶	小皿	8.9	4.3	2.0	100	泥(白色胎,1~2mm 白色雜多)	M/ 灰	Ⅱ-1	東洋土系 器類 内山摩利
981	83	F-3		山系陶	小皿	(7.6)	3.8	2.2	60	泥(白色胎,1mm白色 雜多)	M/ 灰	Ⅱ-1	東洋土系 器類 内山摩利 器付者
982		F-3		山系陶	碗	~	7.2	(3.5)	体割~ 底割300	泥	S7/ 灰白	1-1	東洋土系 底部着土類 器類 スノコ型
983		F-3		山系陶	碗	~	7.0	(4.7)	体割~ 底割300	泥	H15/13C	1-1	東洋土系 底部着土類 器類 スノコ型
984	83	A-1		山系陶	碗	~	4.65	(1.6)	底割300	泥(白色胎,1~2mm 白色雜)	S7/ 灰白	1-2	東洋土系 器類
985		F-3		山系陶	碗	~	6.6	(3.6)	体割~ 底割300	泥	T.D6/13C	1-2	東洋土系 器類 スノコ型
986	83	F-3		山系陶	碗	~	6.4	(2.2)	20	泥(白色胎,1mm白色 雜)	M/ 灰	1-2	東洋土系 器類 スノコ型
987		F-3		山系陶	碗	~	(7.0)	(2.2)	底割50	泥(白色胎,1mm白色 雜多)	S16/13C	Ⅱ-1	東洋土系 器類
988	84	F-3		山系陶	碗	~	6.2	(3.2)	40	泥(白色胎,1~2mm 白色雜多)	M/ 灰	Ⅱ-1	東洋土系 スノコ型 器類 底部着土器付者)
989	84	F-3		山系陶	碗	~	7.2	(2.0)	20	泥(白色胎,1~2mm 白色雜多)	S16/13C	Ⅱ	東洋土系 器類 内山摩利
990	84	F-3		山系陶	碗	~	(6.2)	(2.0)	30	泥(白色胎,1~2mm 白色雜多)	T.D6/13C	Ⅱ-1	東洋土系 器類
991		F-3		山系陶	碗	~	~	(1.4)	10	泥(白色胎,1~2mm(白 色雜)	T.D6/ 灰	Ⅱ-1	東洋土系 器類
992	84	F-3		山系陶	小皿	8.4	3.8	2.4	60	泥(白色胎,1~2mm(白 色雜)	M/13C	Ⅱ-1	東洋土系 器類 内山摩利
993	84	F-3		山系陶	小皿	~	3.8	(1.7)	30	泥(白色胎,1mm白色 雜多)	M/ 灰	Ⅱ-1	東洋土系 器類 内山摩利
994	84	F-3		山系陶	小皿	7.0	4.0	2.3	60	泥(白色胎,1mm白色 雜多)	2.D7/13C白	Ⅱ-1	東洋土系 器類 内山摩利
995	84	F-3		山系陶	小皿	(7.6)	4.6	2.3	70	泥(白色胎,1mm白色 雜多)	S15/13C	Ⅱ-1	東洋土系 底部着土類 器類 内山摩利<底割

表 15 出土土器観察表

種別No	図録No	区	遺構 層位	種類	器種名	口径	底径	器高	残存率(%)	胎土	色澤	様式	備考
996	84	F-3		山瓦綫	小瓶	(7.8)	3.6	2.4	40	赤(白色胎)	55/灰	Ⅱ-1	東洋土系 白陶質
997	84	F-3		山瓦綫	小瓶	(8.4)	4.0	2.2	70	赤(白色胎, 1mm白色 雜質)	106/13C	Ⅱ-1	東洋土系, 内山礫粒 混雜, 内面全体に黒色
998		F-2	埋丸	山瓦綫	小瓶	(7.9)	(4.3)	(1.3)	40	赤	103/13C	Ⅱ-1	東洋土系 白陶質
999	84	F-3		山瓦綫	小瓶	-	3.6	(8.9)	底部100	赤(白色胎, 3mm白色 雜質)	56/灰	Ⅱ-1+2	東洋土系 白陶質, 内山礫粒
1000	84	F-1		山瓦綫	小瓶	-	(3.3)	(1.1)	底部30	赤(白色胎, 1mm白色 雜質)	2, 108/25C白	Ⅱ-1+2	東洋土系 白陶質, 内山礫粒
1001	84	F-3		山瓦綫	小瓶	-	3.8	(1.3)	底部100	赤(白色胎, 1~3mm 白色雜質)	56/灰	Ⅱ-1+2	東洋土系 白陶質, 内山礫粒
1002	84	F-3		山瓦綫	小瓶	-	5.0	(8.9)	30	赤(白色胎)	1038/13C白	Ⅱ-1+2	東洋土系 白陶質
1003	84	F-3		山瓦綫	瓶	-	6.8	(1.3)	底部30	赤(白色胎, 1~3mm 白色雜質)	2, 106/13C	Ⅱ-1	東洋土系, スノコ型 白陶質, 内山礫粒
1004	84	F-3		山瓦綫	小瓶	7.8	4.0	2.3	100	赤(白色胎多)	56/13C	Ⅱ-1	東洋土系 白陶質, 内山礫粒
1005	85	F-3		山瓦綫	小瓶	7.2	4.0	2.0	100	赤(白色胎, 3mm白色 雜質)	2, 106/13C	Ⅱ-1	東洋土系 白陶質
1006	85	F-3		山瓦綫	小瓶	7.8	3.4	1.8	100	赤(白色胎)	56/灰	Ⅱ-2	東洋土系 白陶質
1007		F-3		山瓦綫	瓶	-	-	(1.3)	底部15	赤	2, 105/13C灰	Ⅱ-1	東洋土系 白陶質
1008	85	F-3		山瓦綫	瓶	-	(7.3)	(2.1)	30	赤(白色胎, 1~3mm 白色雜質)	2, 106/13C	Ⅱ-1	東洋土系 白陶質
1009	85	F-3		山瓦綫	小瓶	7.6	4.0	2.9	60	赤(白色胎, 1~3mm 白色雜質)	106/13C	Ⅱ-1	東洋土系 白陶質, 内山礫粒
1010	85	F-3		山瓦綫	小瓶	7.8	4.2	2.3	70	赤(白色胎)	56/灰	Ⅱ-1	東洋土系 白陶質, 内山礫粒
1011		F-3		山瓦綫	小瓶	7.7	3.8	2.0	口径20~ 底部100	赤(白色胎)	106/13C	Ⅱ-1	東洋土系 白陶質, 内山礫粒
1012	85	F-3		山瓦綫	小瓶	7.8	3.6	1.8	60	赤(白色胎)	2, 106/灰	Ⅱ-1	東洋土系 白陶質, 内山礫粒
1013	87	F-3		山瓦綫	瓶	(8.4)	(8.3)	5.2	40	赤(白色胎)	2, 107/13C白	Ⅱ-1	東洋土系, 内山礫粒 多量の付着 高白陶質(ナカミ型 付合)
1014	87	F-3		山瓦綫	輪文瓶	(8.7)	(7.3)	11.0	口径20~ 底部30	赤(白色胎, 1~5mm 雜質)	2, 105/13C	1+2	東洋土系 私用磁 内面に用灰敷
1015		F-3		山瓦綫	瓶	-	(7.4)	(3.3)	30	赤(白色胎)	56/灰	Ⅱ-1	東洋土系 内山礫付着, スノコ型
1016		F-3		山瓦綫	瓶	-	(7.3)	(1.9)	28	赤(白色胎, 1~2mm 白色雜質)	54/灰	Ⅱ-1	東洋土系 スノコ型
1017	87	F-3		山瓦綫	小瓶	10.2	(5.0)	3.2	40	赤(白色胎, 1~3mm 白色雜質)	2, 107/13C白	1+2	東洋土系
1018	86	F-3		山瓦綫	小瓶	(8.6)	(3.3)	2.4	70	赤(白色胎少)	107/13C白	Ⅱ-1	東洋土系 白陶質
1019	87	F-4		山瓦綫	小瓶	(7.7)	(4.9)	1.35	38	赤(白色胎, 灰色胎)	106/13C	Ⅱ-2	白陶質 付着
1020	86	F-3		山瓦綫	瓶	-	(8.3)	(3.0)	30	赤(白色胎, 1~3mm 白色雜質, 5mm白色 雜質)	56/灰	Ⅱ	東洋土系 白陶質
1021	87	F-3		山瓦綫	瓶	-	6.0	(1.9)	底部100	赤(白色胎, 1~5mm 雜質)	56/灰	Ⅱ-1	東洋土系 私用磁, 底に黒色敷
1022	86	F-3		山瓦綫	瓶	-	6.4	(1.9)	底部30	赤(白色胎少)	2, 106/13C	Ⅱ-1	東洋土系 私用磁, 断面に墨付着
1023	86	F-3		山瓦綫	小瓶	-	4.35	(1.4)	底部30	赤(白色胎)	57/灰白	1+2+Ⅱ-1	東洋土系 私用磁, 底に黒色敷
1024	86	F-3	埋物色 點上層	山瓦綫	小瓶	(8.4)	(3.3)	2.7	30	赤(白色胎)	1030/13C白・黄緑	1+2+Ⅱ-1	東洋土系 白陶質
1025	86	F-2	埋丸	山瓦綫	小瓶	-	3.4	(1.4)	底部30	赤(白色胎)	2, 107/13C白	Ⅱ+Ⅱ-1	東洋土系 私用磁
1027	17	F-2	1374	小・中・大17		9.85	4.85	2.45	40	赤(白色胎, 3mm灰色 雜, 4~15mm茶褐色雜 質)	10307/13C白・黄緑		内面全体に黒い層付(内 面に比厚く付着) 底に黒い
1028	17	F-2	SP2702	小・中・大17		11.15	4.25	3.2	口径20~ 底部30	赤(褐色胎, 1~5mm 褐色雜, 灰色胎, 茶付, 5mm灰色雜質)			全体に茶漬
1029	56	F-2	3341	小・中・大17		(10.4)	(6.3)	3.5	30	赤(灰色胎, 赤色胎, 茶 色胎, 1~3mm白色雜質)	2, 10307/13C白・黄		

表 16 瀬戸美濃系施軸陶器一覧

器種名	古瀬戸前期			古瀬戸中期			古瀬戸後期				古瀬戸 計	後IV期 ～ 大塚	大塚製品				大塚 計	不明	合計				
	I	II	III	IV	I	II	III	IV	古IV	新			1期	2期	3期	4期				5期			
天目																							
天目茶碗					2			2	2	2	9	37	1		14					18		56	
反軸天目茶碗												0										2	
反軸平碗											1											1	
平碗								3	5	4	5	6			1							48	
丸碗												0										3	
輪花碗(入子)				1								1										1	
皿類																							
縁起小皿										4	4	9	18	2								20	
縁起はさみ皿													0		14							14	
丸皿													0			3	1					7	
縁反皿													0			2		1				3	
志野皿													0				2					2	
折縁深皿					1			1	1	1		3	3									3	
縁折皿												3	3									3	
椀皿													0			2	2					7	
大皿																							
直縁大皿										2	1		5									5	
折縁大皿													1									1	
盤類																							
煎皿																							
煎即目皿																							
椀鉢																							
椀鉢													39	54	15	4	4	2				24	92
壺・瓶類																							
四耳壺		2		2																		5	
口広有耳壺																						2	
垣母壺茶壺																						1	
茶壺																						0	
鉄胎水注																						1	
瓶子																						2	
瓶子I型																						1	
瓶子II型																						1	
梅瓶																						0	
平瓶																						0	
小瓶か小壺																						1	
壺類																						4	
神仏具																							
尊式花瓶																						1	
持蓮形香炉																						1	
鉢																							
鉢形鉢																						1	
鉢																						1	
その他																							
徳利																						2	
不明																							
不明																							
合計	13				6							173	195	81	72	17	31	7		127	91	694	

※ 1 I～II期のうちに複数時期でしか識別できなかったものは累分した。

表 17 墨書土器一覽

線図%	図形%	地区	グリッド	遺構 階位	種類	器種名	産地	型式	文字
11	86	E-2	109F-10	SR3964	山形陶	小皿	東海江	I-2	「上」
15	86	E-2	118F-4	SR3713	山形陶	碗	東海江	II	「器」
16	85	E-2	129A-9	SR2452	山形陶	碗	東海江	I-1	「口蓋」
19	85	E-2	129A-9	SR2452	山形陶	碗	東海江	I-1	
46	85	E-3	129G-10	SD0667	山形陶	碗	東海江	III-1	「大」
88		E-3	129G-10	SD0667	山形陶	小皿	東海江	II	
89	85	E-3	130G-1	SD0667	山形陶	小皿	東海江	II	「わ」
90	85	E-3	130G-1	SD0667	山形陶	小皿	東海江	III-1	
91	85	E-3	130G-1	SD0667	山形陶	小皿	東海江	III-1	「金(金?)法網」
92		E-3	130G-1	SD0667	山形陶	小皿	東海江	III-1	
98	85	E-3	129G-10	SD0667	山形陶	碗	東海江	III-1	花押
126	85	E-3	129H-8	SBS436	山形陶	碗	東海江	III-1	「十」
129	85	E-3	129J-8・129J-8	SP8438	山形陶	碗	東海江	III-1	「十」
136	86	E-3	129G-9	SR7609	山形陶	碗	東海江	III-1	「上」
144		E-3	129G-9	SR8036	山形陶	碗	東海江	III-1	「上」
719		E-3	129H-10		灰釉陶器	碗			
729		E-3	129G-9		灰釉陶器	碗			
733		E-3	130G-3		灰釉陶器	碗			
746		E-2	109F-10		灰釉陶器	壺			体部
947	82	E-2	109I-10		灰釉陶器	碗		X30	
948	82	E-3	130F-1		灰釉陶器	碗			「紙貫○」
949	82	E-3		SR10054	灰釉陶器	碗			花押
950		E-3	130G-1		山形陶	碗	東海江	III-1	—
951	82	E-3	129J-9		山形陶	碗	東海江	III-1	「一」
952		E-3	129H-7		山形陶	小皿	東海江	III-1	「一」
953	82	E-3	130G-1		山形陶	碗	東海江	III-1~2	
954	82	E-4	118A-8		山形陶	碗	東海江	III-1	「十」
955	82	E-2	129A-10		山形陶	碗	東海江	III-2	「十」
956	82	A-1	150C-1		山形陶	碗	東海江	III-1	「十」
957	82	A-2			山形陶	碗	東海江	III-1	
958	82	E-3	129H-10		山形陶	碗	東海江	III-1	「十」
959	82	E-3			山形陶	小皿	東海江	III-1	「十」
960	82	E-3	129H-10		山形陶	小皿	東海江	III-1~2	「十」
961		E-2	109F-10		灰釉陶器	碗			体部に「十」
962		E-3	130G-2		山形陶	碗	東海江	III-1	
963	82	E-3	129J-9		山形陶	碗	東海江	III-2	「萬」
964	82	E-3	130G-1		山形陶	碗	東海江	III	
965		E-3	130F-2		山形陶	碗	東海江	III-1	
966	82	E-3	130G-1		山形陶	碗	東海江	I-2	
967	83	A-1	150C-1		山形陶	碗	東海江	III	「官具」
968	83	E-3	129H-10		山形陶	碗	東海江	III-1	花押
969		E-3	130F-2		山形陶	碗	東海江	III-1	「足」
970	83	E-3	130F-1		山形陶	碗	東海江	III-1	
971		E-3	130F-1		山形陶	碗	東海江	III-1	「國(異体字)」
972	83	E-3	130B-3		山形陶	小皿	東海江	I-2	
973	83	E-4	90I-8		山形陶	碗	東海江	III-1	
974	83	E-3	129H-10		山形陶	碗	東海江	III-1	花押
975	83	E-3	130F-2		山形陶	碗	東海江	III-1	「口戸」
976	83	E-3	129J-9		山形陶	碗	東海江	III-1	
977	83	E-3	130F-2		山形陶	小皿	東海江	III-1	梵字
978	83	E-3	130F-1		山形陶	小皿	東海江	III-1	梵字
979	83	E-3	130F-1		山形陶	小皿	東海江	III-1	梵字
980	83	E-3	130F-2		山形陶	小皿	東海江	III-1	「大」
981	83	E-3	130F-1		山形陶	小皿	東海江	III-1	花押
982		E-3	130F-4		山形陶	碗	東海江	I-2	字
983		E-3	129E-9		山形陶	碗	東海江	I-2	「十」
984	83	A-1	170A-4		山形陶	碗	東海江	I-2	
985		E-3	149A-7		山形陶	碗	東海江	I-2	「万」
986	83	E-3	130G-1		山形陶	碗	東海江	I-2	
987		E-2	130F-1		山形陶	碗	東海江	III-1	
988	84	E-3	129J-9		山形陶	碗	東海江	III-1	
989	84	E-3	130G-3		山形陶	碗	東海江	III-1	花押
990	84	E-3	130F-1		山形陶	碗	東海江	III-3	
991		E-3	129G-10		山形陶	碗	東海江	III-3	
992	84	E-3	130G-3		山形陶	小皿	東海江	III-3	梵字
993	84	E-3	129G-10		山形陶	小皿	東海江	III-3	
994	84	E-3	129J-10		山形陶	小皿	東海江	III-3	梵字
995	84	E-3	130F-3		山形陶	小皿	東海江	III-3	梵字
996	84	E-3	130G-1		山形陶	小皿	東海江	III-3	梵字
997	84	E-3	149A-8		山形陶	小皿	東海江	III-3	「一」
998		E-2	118F-1		山形陶	小皿	東海江	III-3	
999	84	E-3	130F-1		山形陶	小皿	東海江	III-1~2	梵字
1000	84	E-4	110C-10		山形陶	小皿	東海江	III-1~2	記号

表 17 墨書土器一覧

神代№	図面№	地区	グリッド	遺構 層位	種別	器種名	産地	型式	文字
1001	84	E-3	130F-1		山茶碗	小皿	東海江	器-1~2	梵字
1002	84	E-3	130D-4		山茶碗	小皿	東海江	器-1~2	
1003	84	E-3	130F-1		山茶碗	碗	東海江	器-1	「上」
1004	84	E-3	130F-2		山茶碗	小皿	東海江	器-1	「上、〇〇」タキ
1005	85	E-3	130F-1		山茶碗	小皿	東海江	器-1	「上」
1006	85	E-3	129C-9		山茶碗	小皿	東海江	器-2	「上」
1007	85	E-3	130F-1		山茶碗	碗	東海江	器-1	内面にも墨書あり
1008	85	E-3	130F-1		山茶碗	碗	東海江	器-1	
1009	85	E-3	130F-1		山茶碗	小皿	東海江	器-1	「大」
1010	85	E-3	130F-1		山茶碗	小皿	東海江	器-1	「F」
1011	85	E-3	130F-1		山茶碗	小皿	東海江	器-1	
1012	85	E-3	130F-1		山茶碗	小皿	東海江	器-1	
1018	86	E-3	130F-1		山茶碗	小皿	東海江	器-1	
		E-3	130D-4		山茶碗	小皿	東海江	器-1~2	
		E-3	130F-2		山茶碗	碗	東海江	器-1	
		E-3	129H-10		山茶碗	小皿	東海江	器-1-2	
		E-3	130H-1		山茶碗	碗	東海江	器-1	
		E-3	130F-1		山茶碗	碗	東海江	器-1	
		E-3	129C-10	S2007	山茶碗	碗	東海江	器-1	
		E-3	120G-1	S2007	山茶碗	碗	東海江	器-1	

※「文字」の空欄は判読不明を表す

表 18 出土石製品観察表

神代№	図面№	区	器種名	遺構・層位	法量 (cm)				石材	備考
					長さ	幅	厚み	重さ (g)		
1029	97	確認その2	丸輪郭	40Tr・2層	124.433	161.001	9.603	127.401	褐色色粗粒砂岩	一石丸輪郭
1030	97	確認その2	丸輪郭	40Tr・2層	117.703	113.803	—	60701.01	褐色色中粒砂岩	一石丸輪郭
1031	97	確認その2	丸輪郭	40Tr・2層	113.703	113.703	9.280	23010.01	褐色色粗粒砂岩	丸輪
1032	97	E-2	丸輪郭	—	117.103	116.703	11.603	14090.01	灰色中粒砂岩	丸輪
1033	97	確認その2	丸輪郭	40Tr・2層	115.803	115.653	9.663	15080.01	褐色色中粒砂岩	丸輪
1034	98	確認その2	硯	黄灰褐色土	13.703	5.40	0.803	14.0	粘板岩	制作時の研磨痕跡著 盤面 制作時の研磨痕跡著
1035	98	確認その2	硯	TP2・3層	4.003	4.70	1.303	36.30	粘板岩	盤面 制作時の研磨痕跡著
1036	98	E-1	硯	S0118	11.40	6.70	1.303	153.01	黒色粘板岩	中央部分の摩耗著しい。外周欠損 中心部分をくまびらきして再利用か？
1037	98	E-3	硯	—	7.90	3.70	1.15	71.0	粘板岩砂岩	完全 制作時の研磨痕跡著
1038	98	E-2	硯?	—	8.00	6.90	1.00	13.90	褐色色風化粘板岩	
456・1039	62・98	E-1	硯?	SX205	2.50	4.80	1.50	115.01	黒色粘板岩	
1040	99	E-2	硯白	S0937	15.003	27.40	—	1232.01	赤褐色粗粒凝灰質砂岩	加工調布不明
1041	99	A-1	石鏡	—	2.20	123.603	—	89.01	—	磨面 磨面?
1042	99	E-1	石鉢	S0118	1.90	25.60	—	18604.01	灰色角礫粗粒砂岩	内側使用面・磨面
1043	99	E-1	小石	岩層層	1.20	1.20	1.10	—	緑緑灰色角礫チヤート	孔径0.3cm
1044	99	E-3	磨石	岩層層	2.00	1.90	1.50	—	緑緑灰色角礫チヤート	孔径0.9cm
1045	98	A-1	砥石	岩層層	23.20	12.70	3.90	1309.01	褐色色粗粒砂岩	
1046	98	E-2	砥石	S20719	14.80	29.40	8.30	3180.01	褐色色硬質中粒砂岩	
1047	98	E-2	砥石	S20679	18.80	19.50	9.40	2720.01	灰黄褐色粗粒砂岩	
1048	98	E-2	砥石	1118	12.50	19.50	4.70	390.01	灰黄褐色粗粒砂岩	
1049	98	A-1	砥石	1・2層	13.40	6.10	2.50	254.01	灰色粗粒砂岩	
482・1050	98	E-1	砥石	S3212	19.00	16.30	4.20	1640.01	灰色粗粒砂岩	
368・1051	98	E-1	砥石	S3164	21.30	10.20	8.90	2920.01	灰黄褐色硬質粗粒砂岩	
457・1052	62・99	E-1	砥石	SX205	5.40	4.30	1.20	152.01	褐色色角礫質砂岩	
1053	99	E-3	砥石	中世包含層	6.10	3.90	2.00	57.01	明褐色中粒砂岩	裏面は研磨面
1054	99	A-1	砥石	排水設備石敷直上	9.70	3.70	2.50	127.01	あざむ色粘板岩	小口面は磨面 上端と裏面は研磨面
456・1055	62・99	E-1	砥石	SX205	8.40	4.30	1.10	154.01	灰才シリーズの緑灰質粘板岩	縦から転用
1056	99	E-2	石板?	—	4.20	3.80	0.60	10.01	灰褐色粘板岩	研磨面は平頭
1057	99	A-1	砥石	岩層層	7.00	3.70	0.60	24.01	黄褐色粗粒砂岩	全体に磨面 上下端面・左右面は切断面
1058	99	E-2	砥石	SP1139	3.60	3.10	0.90	13.01	灰才シリーズの緑灰岩	
1059	99	E-4	砥石	中世包含層	3.80	3.60	0.50	12.01	暗褐色粗粒灰質粘板岩	裏面割縁 左右面は切断面
1060	99	E-4	砥石	6層	6.10	4.50	1.10	36.01	褐色色粗粒砂岩	左右面は切断面
1061	99	E-3	砥石	S20362	6.80	2.40	1.60	42.01	暗褐色粗粒砂岩	
369・1062	99	E-1	砥石	S3164	6.80	2.40	2.10	68.01	緑緑灰色硬質粗粒砂岩	
1063	99	E-2	砥石	—	4.20	3.80	1.05	21.01	—	使用面が黒く変色
1064	99	E-3	砥石	S20920	8.10	3.90	0.80	12.01	—	右面は切断面
1065	99	E-2	砥石	—	8.40	6.50	0.80	60.01	褐色色粗粒灰質粘板岩	両面使用 磨面著
1066	99	E-2	砥石	S20259	9.40	4.80	2.10	173.01	褐色色粗粒砂岩	
1067	99	E-3	砥石	S20920	5.50	3.30	1.90	52.01	褐色色粗粒砂岩	上端は切断面

表 19 出土木製品観察表

種別	図版	区	グリッド	遺構 層位	遺物名	年代	本取り	埋蔵	法量 (cm)			備考
									最大長 (口幅)	最大幅 (産程)	厚み (器高)	
114	47	E-3	1296-10	S09067	曲物 銅板	中世	板目	スギ	4.3	16.5	0.4	
115	47	E-3	1296-10	S09067	曲物 銅板	中世	板目	スギ	4.6	18.3	0.3	
116	47	E-3	1296-10	S09067	曲物 銅板	中世	板目	スギ	6.9	22.5	0.4	
117	47	E-3	1296-10	S09067	脚台	中世	板目	スギ	25.3	2.6	0.9	
118	47	E-3	1296-10	S09067	曲物 底板	中世	道縁目	ヒノキ	5.6	5.8	0.4	
119	47	E-3	1296-10	S09067	覆物 草鞋	中世	-	-	23.8	13.4		
120	47	E-3	1296-10	S09067	杓子	中世	板目	スギ	23.0	6.2	0.8	
121	47	E-3	1296-10	S09067	棒状木製品	中世	芯持材	タリ	25.7	2.8	2.2	
122	47	E-3	1296-10	S09067	扇	中世	板目	スギ	17.7	1.5	1.7	紙・子骨とも板目
123	47	E-3	1296-10	S09067	板状木製品	中世	板目	トネリコ属	7.8	1.1	0.4	
124	47	E-3	1296-10	S09067	扇?	中世	板目	ヒノキ	8.9	1.8	0.3	
125	47	E-3	1296-10	S09067	板状木製品	中世	板目	スギ	19.7	2.9	0.7	
216	50	A-1	1704-4	S8583	杭	平安	板目	スギ	101.8	7.0	4.7	同一個体 棒子取用
217	50	A-1	1704-4	S8583	杭	平安	板目	スギ				
218	50	A-1	1704-4	S8583	棒子	平安	板目	スギ	67.4	14.8	4.7	
219	50	A-2	1500-4	S8583	板状木製品	平安	板目	スギ	81.7	16.9	4.3	壁板材小
220	50	C	1310-4	S80	板状木製品	平安	板目	スギ	33.6	6.7	2.0	柄杓あり
221	50	C	1310-4	S80	板状木製品	平安	芯持材	イヌマキ属	19.9	8.7	3.4	
222	50	A-2	1500-4	S8583	板状木製品	平安	道縁目	スギ	43.3	10.4	2.1	
223	50	A-2	1500-4	S8583	板状木製品	平安	道縁目	スギ	48.5	7.8	1.9	
224	50	A-2	1500-4	S8583	用途不明品	平安	道縁目	スギ	4.9	8.2	3.2	
225	50	A-2	1500-4	S8583	板状木製品	平安	道縁目	スギ	31.4	14.0	2.6	
226	51	E-3	1296-9	S09036	井戸材 柱	中世	芯持材	スギ	115.4	12.6	11.9	
227	51	E-3	1296-9	S09036	井戸材 柱	中世	芯持材	スギ	117.4	12.0	12.1	
228	51	E-3	1296-9	S09036	井戸材 柱	中世	芯持材	スギ	121.3	12.4	11.2	
229	51	E-3	1296-9	S09036	井戸材 柱	中世	芯持材	スギ	122.1	11.2	8.9	
230	52	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	102.5	21.8	3.3	
231	52	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	127.7	15.2	5.1	
232	52	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	124.9	27.5	4.6	
233	52	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	99.6	15.4	4.4	
234	52	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	116.0	14.9	4.3	
235	52	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	122.4	15.2	4.4	
236	53	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	114.9	20.5	4.3	
237	53	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	124.1	30.3	5.4	
238	53	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	123.2	27.0	3.9	
239	53	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	118.9	18.0	4.4	
240	52	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	118.8	14.9	4.0	
241	52	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	115.1	15.5	4.0	
242	52	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	118.6	23.9	4.1	
243	52	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	118.6	33.0	5.4	
244	52	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	117.1	29.5	4.4	
245	51	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	123.0	16.8	5.6	
246	51	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	117.0	15.8	4.4	
247	51	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	121.1	27.7	5.5	
248	51	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	124.2	29.5	5.0	
249	51	E-3	1296-9	S09036	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	111.4	18.1	5.3	
250	53	E-3	1296-9	S09036	井戸材 枕木	中世	板目	スギ	7.0	108.9	3.2	
251	53	E-3	1296-9	S09036	井戸材 枕木	中世	板目	スギ	7.5	108.9	4.4	
252	53	E-3	1296-9	S09036	井戸材 枕木	中世	板目	スギ	7.3	108.7	3.6	
253	53	E-3	1296-9	S09036	井戸材 枕木	中世	板目	スギ	7.4	109.5	4.8	
254	53	E-3	1296-9	S09036	井戸材 枕木	中世	板目	スギ	7.0	108.8	4.4	
255	53	E-3	1296-9	S09036	井戸材 枕木	中世	板目	スギ	6.9	108.8	4.3	
256	53	E-3	1296-9	S09036	井戸材 枕木	中世	板目	スギ	6.6	109.6	4.1	
257	53	E-3	1296-9	S09036	井戸材 枕木	中世	板目	スギ	7.4	108.9	5.0	
258	54	E-3	1296-9	S09036	曲物 銅板	中世	板目	サワラ	104.7	2.9	0.3	
259	54	E-3	1296-9	S09036	折敷 底板	中世	板目	スギ	22.9	4.4	0.5	遺物
260	54	E-3	1296-9	S09036	折敷 底板	中世	板目	スギ	22.9	6.5	0.5	遺物
261	54	E-3	1296-9	S09036	板状木製品	中世	芯持材	イヌマキ属	29.8	12.0	8.9	角材 一部炭化
262	55	A-1	1700-3	S2558	井戸材 縦板	中世	道縁目	スギ	44.1	15.4	1.9	
263	55	A-1	1700-3	S2558	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	36.5	9.3	1.0	
264	55	A-1	1700-3	S2558	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	54.1	21.0	2.7	
265	55	A-1	1700-3	S2558	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	42.1	18.8	1.8	
266	55	A-1	1700-3	S2558	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	38.5	23.0	1.9	
267	55	A-1	1700-3	S2558	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	43.4	21.6	1.7	
268	55	A-1	1700-3	S2558	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	49.8	21.2	2.8	
269	55	A-1	1700-3	S2558	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	43.3	22.6	3.6	
270	55	A-1	1700-3	S2558	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	44.7	22.4	2.2	
271	55	A-1	1700-3	S2558	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	44.7	21.7	2.1	
272	55	A-1	1700-3	S2558	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	50.3	18.3	2.1	

表 19 出土木製品観察表

標識 種別	図面 順	区	グリッド	遺構 層位	遺物名	年代	木取り	樹種	寸法 (cm)			備考
									最大長 (口縁)	最大幅 (底縁)	厚み (器高)	
273	55	A-1	170B-3	SE558	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	53.9	17.3	2.2	
274	55	A-1	170B-3	SE558	井戸材 縦板	中世	透板目	スギ	46.1	22.8	1.4	
275	55	A-1	170B-3	SE558	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	31.1	15.5	1.4	
276	55	A-1	170B-3	SE558	井戸材 縦板	中世	透板目	スギ	43.9	15.0	1.3	
277	55	A-1	170B-3	SE558	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	48	22.1	1.1	
278	55	A-1	170B-3	SE558	井戸材 縦板	中世	板目	スギ	37.5	14.8	1.7	
279	56	A-1	170B-3	SE558	井戸材 枕木	中世	板目	スギ	62.3	7.4	2.6	
280	56	A-1	170B-3	SE558	井戸材 枕木	中世	板目	スギ	26.6	9.0	4.0	
281	56	A-1	170B-3	SE558	井戸材 枕木	中世	板目	スギ	49.2	4.6	2.9	
282	56	A-1	170B-3	SE558	井戸材 枕木	中世	透板目	スギ	74.2	5.2	4.1	
283	56	A-1	170B-3	SE558	曲物 底板	中世	板目	スギ	14.4	15.2	0.8	
284	56	A-1	170B-3	SE558	曲物 底板	中世	板目	ヒノキ	12.8	12.6	0.6	
285	56	A-1	170B-3	SE558	曲物 側板	中世	板目	サワラ	23.8	4.6	0.3	柄内か 284 とセットか
287	56	A-1	150D-1	SE281	板状木製品	中世	板目	タリ	7.0	5.1	3.0	
288	56	A-1	SE559	井戸材 曲物	中世	板目	ヒノキ	42.7	16.35	0.3		
359	60	E-1	5X164	挽物 椀	近世	横木取り板目	キタレン属	11.1	4.8	(2.3)	透板 蓋	
360	60	E-1	5X164	挽物 椀	近世	横木取り板目	ブナ属	16.23	5.6	(1.2)	透板 蓋	
361	60	E-1	5X164	挽物 椀	近世	横木取り板目	キタレン属	(11.8)	(5.0)	(2.0)	透板 蓋	
362	60	E-1	5X164	挽物 椀	近世	横木取り板目	ブナ属	(10.8)	5.1	(3.7)	透板 外面 3箇所等に家紋	
363	60	E-1	5X164	挽物 椀	近世	横木取り板目	ブナ属	(12.6)	5.9	(0.2)	透板 外面 3箇所等閉鎖に 家紋「丸」に並列し、 底縁に「十」	
364	60	E-1	5X164	挽物 椀	近世	横木取り板目	ブナ属	(12.6)	6.6	8.1	透板 外面 2箇所等に家紋「丸」に 横、底縁に「十」	
365	60	E-1	5X164	挽物 椀	近世	横木取り板目	トチノキ	(11.0)	(6.4)	(3.7)	透板	
366	60	E-1	5X164	椀付	近世	芯持材	アカマツ	39.2	17.0	16.3	柄孔あり	
367	60	E-1	5X164	下駄	近世	板目	タリ	21.3	9.3	4.0 前 3.0 約 1.0		
433	63	E-1	5X205	曲物 底板	近世	板目	セシ属	13.2	13.2	0.5		
434	63	E-1	5X205	曲物 底板	近世	板目	セシ属	13.2	9.5	0.8		
435	63	E-1	5X205	曲物 底板	近世	板目	トウヒ属	10.3	10.4	0.8		
436	63	E-1	5X205	曲物 底板	近世	板目	スギ	9.6	4.8	1.0		
437	63	E-1	5X205	曲物 側板	近世	板目	ヒノキ	1.9	17.7	0.8		
438	63	E-1	5X205	曲物 側板	近世	板目	サワラ	4.7	20.0	0.5		
439	63	E-1	5X205	曲物 側板	近世	板目	トウヒ属	13.8	5.4	0.3		
440	63	E-1	5X205	下駄	近世	板目	スギ	13.5	7.7	2.6 前 1.8 約 0.7		
441	63	E-1	5X205	曲物 側板	近世	板目	サワラ	2.5	12.3	0.3		
442	63	E-1	5X205	曲物 底板	近世	板目	-	6.7	6.7	0.3		
443	63	E-1	5X205	板状木製品	近世	板目	トウヒ属	10.9	1.5	0.9		
444	63	E-1	5X205	板状木製品	近世	板目	カツラ	6.4	6.1	1.7		
445	63	E-1	5X205	板状木製品	近世	板目	セシ属	13.2	1.9	0.8		
446	63	E-1	5X205	板状木製品	近世	板目	アカマツ	17.7	2.15	2.1	方形納あり	
447	63	E-1	5X205	板状木製品	近世	板目	セシ属	19.7	2.8	1.3		
448	63	E-1	5X205	板状木製品	近世	板目ウ	スギ	6.2	2.6	1.1		
449	63	E-1	5X205	板状木製品	近世	芯持材	ツツジ属	22.3	0.95			
450	63	E-1	5X205	板状木製品	近世	板目	セシ属	34.0	2.9	1.25		
451	63	E-1	5X205	自在鉤	近世	芯持材	アカマツ	36.2	3.4	3.1		
452	63	E-1	5X205	編具 錘	近世	芯持材	スギ	15.0	11.0	8.5		
453	63	E-1	5X205	板状木製品	近世	板目ウ	-	6.2	5.0	1.0		
454	63	E-1	5X205	板状木製品	近世	板目	ヒノキ	7.4	6.5	1.0		
455	63	E-1	5X205	竹製品	近世	-	タケ	8.2	2.2	0.6		
475	65	E-1	5X212	曲物 底板	近世	板目	トウヒ属	7.2	7.8	0.9		
476	65	E-1	5X212	曲物 底板	近世	透板目	トウヒ属	7.5	6.1	0.5	想定径 8.5 cm	
477	65	E-1	5X212	曲物 底板	近世	板目	カラマツ	7.2	4.5	0.6	想定径 9.0 cm	
478	65	E-1	5X212	椀付	近世	芯持材	タリ	25.7	6.9	5.0		
479	65	E-1	5X212	挽物 椀	近世	横木取り板目	ブナ属	(11.6)	5.2	(4.3)	透板 外面に「丸」ウの紋か	
480	65	E-1	5X212	板状木製品	近世	板目	スギ	27.2	12.0	0.8		
481	65	E-1	5X212	板状木製品	近世	透板目	スギ	26.7	1.9	1.4		
493	66	E-2	110E-1	SF1561	板状木製品	近世	透板目	タリ	34.9	7.2	3.15	
494	66	E-2	110E-1	SF1561	板状木製品	近世	板目	-	20.15	4.45	1.2	柄孔あり
495	66	E-2	110E-1	SF1561	板状木製品	近世	透板目	-	15.75	2.5	1.9	横?
496	66	E-2	110E-1	SF1561	椀付	近世	透板目	アカマツ	15.4	6.0	1.0	釘 (2箇所) 遺書
497	66	E-1	S893	竹製品	近世ウ	-	竹類	21.1	1.9	0.4		
498	66	E-2	110F-2	SE1820	挽物 椀	近世	横木取り板目	ブナ属	9.95	5.3	3.1	透板 外面 3箇所等閉鎖 に家紋「丸」に「松竹」
499	66	E-2	110F-2	SE1820	板状木製品	近世	板目	スギ	11.0	4.0	0.55	

表 19 出土木製品観察表

標本 No.	図版 No.	区	グリッド	通機 層位	遺物名	年代	本取り	埋蔵	法量 (cm)			備考	
									最大長 (口横)	最大幅 (産径)	厚み (器高)		
500	66	E-2	110F-2	SP1820	楕圓	古世	板目	カバノ寺藏	3.7	4.5	1.0		
501	66	E-2	110F-2	SP1820	板状木製品	古世	板目	アカマツ	5.5	2.8	1.4		
502	66	E-3	120F-8	0681	楕 (楕板)	古世	板目	-	19.8	15.7	3.7		
534	67	E-2	1091-10	SP1187	楕 (楕板)	中～古世	透経目	スギ	19.0	7.5	1.5	タガの圧痕	
535	67	E-2	1091-10	SP1187	楕 (楕板)	中～古世	透経目	スギ	19.1	8.5	1.3		
536	67	E-2	1091-10	SP1187	楕 (楕板)	中～古世	板目	サワラ	19.7	4.1	1.3		
537	67	E-2	1091-10	SP1187	楕 (楕板)	中～古世	透経目	スギ	19.5	5.7	1.4		
538	67	E-2	1091-10	SP1187	楕 (楕板)	中～古世	透経目	スギ	19.4	6.1	1.4		
539	67	E-2	1091-10	SP1187	楕 (楕板)	中～古世	透経目	ネズコ	19.6	5.4	1.7		
540	67	E-2	1091-10	SP1187	曲物 底板	中～古世	板目	スギ	20.3	16.5	2.0		
541	67	E-2	109F-10	SP3530	柱	中世	芯持材	タリ	44.4	17.7	18.3		
542	67	E-4	110B-7a	SK5001	曲物 底板	中世	板目	スギ	15.4	5.5	1.2		
1068	88	E-3	130F-4		下駄	時期不明 (中～古世)	板目	スギ	20.9	3.8	2.0	一本式 産直下駄	
1069	88	E-3	130F-2	中世包含層	下駄	中世	板目	スギ	20.9	5.0	2.3	一本式 産直下駄	
1070	89	E-3	130F-2		下駄	時期不明 (中～古世)	板目	サワラ	20.5	9.4	1.3	一本式 産直下駄	
1071	88	E-2	109F-9		下駄	中～古世	経目	コジイ	15.75	6.9	2.1	産直下駄	
1072	88	E-2	109F-9		下駄	中～古世	経目	ヤナギ	22.3	9.8	3.9	産直下駄	
1073	88	E-3	130F-1		曲物 新敷底板	時期不明 (中～古世)	経目	スギ	34.4	5.9	0.9		
1074	88	E-3	130F-1		曲物 新敷底板	時期不明 (中～古世)	経目	スギ	18.1	5.4	0.6		
1075	88	E-3	130F-1		曲物 新敷底板	時期不明 (中～古世)	経目	スギ	16.4	8.6	0.7		
1076	88	E-2	109F-9		曲物 新敷底板	時期不明 (中～古世)	経目	アスナロ	15.0	2.2	0.47		
1077	88	E-3	130F-1		葦簾	時期不明 (中～古世)	経目	スギ	17.1	5.4	0.4		
1078	88	E-2	109F-9		楕 (楕板)	中～古世	経目	サワラ	15.5	6.7	1.2	タガの圧痕	
1079	91	E-3	120F-10		曲物 底板	時期不明 (中～古世)	板目	スギ	36.6	3.3	0.4		
1080	91	E-3	130F-1	中世包含層	曲物 底板	中世	板目	スギ	27.8	3.9	1.0		
1081	91	E-3	130F-1		曲物 底板	時期不明 (中～古世)	板目	ヒノキ	20.0	4.2	0.7		
1082	91	E-3	130F-1		曲物 底板	時期不明 (中～古世)	経目	サワラ	10.4	2.9	0.7	黒色塗り残存	
1083	91	E-2	109F-9		曲物 底板	中～古世	透経目	アスナロ		19.2	0.6		
1085	91	E-3	143A-8		曲物 底板	時期不明 (中～古世)	経目	スギ	10.4	10.4	0.6		
1084	91	E-2	109F-6		曲物 底板	中～古世	板目	サワラ	10.3	19.2	0.8		
1086	89	E-3	130F-1	中世包含層	残物 椀	中世	横木取り経目	ケヤキ	(14.0)	7.6	(4.8)	透板	
1087	89	E-3	120F-10	中世包含層	残物 椀	中世	経目	ケヤキ	(12.0)	7.4	(1.8)	透板	
1088	89	A-1	170F-3		残物 椀	中～古世	横木取り経目	ケヤキ	(13.6)	8.0	(2.3)	透板	
1089	89	A-1	150F-3		残物 椀	中～古世	横木取り経目	ケヤキ	(12.9)	7.4	(2.3)	透板	
1090	89	A-2	130F-2		残物 椀	中世	横木取り経目	トネリコ属	(11.2)	8.6	(1.6)	透板透部	
1091	89	A-2	130A-2	水田	残物 椀	中世	横木取り経目	ケヤキ	(9.2)	(6.8)	(0.6)	内面黒漆塗りの上に赤褐色漆で縁物文様	
1092		E-1			残物 蓋	中～古世	横木取り経目	トネリコ属	(6.8)		(1.0)	透板	
1093	90	E-4	110D-8		残物 椀	中～古世	横木取り経目	タリ		8.7	(2.8)	透板	
1094	90	E-2	109F-9		残物 椀	中～古世	経目	ブナ属	12.4	6.4	4.9	透板(蓋)	
1095	91	A-1	150F-4		残物 椀	中～古世	板目	トネリコ属	(11.4)	7.8	(2.2)	透板	
1096	90	A-2	130A-1		残物 椀	中～古世	経目	-	(10.0)	7.0	(1.3)	透板	
1097	90	E-2	109F-9		残物 椀	中～古世	板目	トネリコ	15.0	9.7	5.2	透板(蓋)	
1098	91	E-2			残物 椀	時期不明 (中～古世)		ブナ属	(8.6)	4.2	(2.2)	透板 家紋1箇所	
1099	90	E-2	109F-9		残物 椀	中～古世	経目	ブナ属	(10.9)	5.4	(2.7)	透板 経部外面中央に赤漆で「中」	
1100	92	E-3	130F-1	中世包含層	柄々	中世	経目	タリ/ スタジオ	61.9	3.7	2.9		
1101	92	A-1	170F-3		棒状木製品	時期不明 (早～古世)		イヌマキ	56.8	2.0	2.1	有痕状	
1102	92	E-3	120F-10		棒状木製品	時期不明 (中～古世)		芯持材	タリ	24.5	2.8	2.5	
1103	92	E-3	120F-10		葺	時期不明 (中～古世)	板目	スギ	24.2	0.9	0.5		
1104	92	E-3	129F-9	中世包含層	板状木製品	中世	板目	スギ	4.2	16.2	1.5		
1105	92	E-2	109F-9		板状木製品	中～古世	透経目	スギ	4.9	9.2	0.8		
1106	92	A-1	150F-4		板状木製品	中～古世	経目	スギ	10.3	2.4	0.8		

表 19 出土木製品観察表

標識 No.	国産 No.	区	グリッド	遺構 層位	遺物名	年代	木取り	榫種	寸法 (cm)			備考
									最大長 (口縁)	最大幅 (建柱)	厚み (器高)	
1107	92	E-3	129H-10		棒状木製品	時期不明 (中～近世)	板目	スギ	17.6	3.7	3.4	
1108	92	E-3	129G-10	中世包合層	棒状木製品	中世	芯持材	シキミ	20.5	3.3	1.8	
1109	92	A-1	170A-4		板状木製品	時期不明 (平安～近世)	板目	スギ	11.9	2.4	0.6	
1110	92	A-1	170A-4		板状木製品	中～近世	板目	ヒノキ	8.7	4.3	0.7	
1111		A-1	150D-3	A531・534	板状木製品	中世	板目	スギ	9.3	3.7	0.6	
1112	92	E-2	129A-9		板状木製品	時期不明 (中～近世)	板目	スギ	12.6	3.3	1.6	
1113	92	E-3	130F-1		棒状木製品	時期不明 (中～近世)	板目	ヒノキ	11.9	0.6	0.4	
1114	93	A-2	150C-4		棒 (圓板)	時期不明 (平安～中世)	板目	スギ	16.2	7.1	2.5	
1115	93	A-2	150B-2		曲物 底板	平安	板目	スギ	16.4	16.1	0.9	同一個体?
1116	93	A-2	150B-2		曲物 側板	平安	板目	ヒノキ	9.9	4.1	0.5	
1117		A-2	150B-2		曲物 側板	平安	板目	ヒノキ	13.8	3.7	0.2	
1118	93	E-1		奈良群作土	曲物 側板	平安	板目	ヒノキ	3.4	5.7	0.4	
1119	93	A-1			曲物 底板	時期不明 (平安～中世)	道板目	スギ	7.2	23.8	1.4	駒孔あり
1120	93	A-1	170A-3		手駄	平安～中世	板目	スギ	20.4	5.2	2.1	一本式 滑車下駄
1121	93	A-1			曲物 底板	時期不明 (平安～中世)	板目	ヒノキ	52.3	7.1	1.5	
1122	93	A-1	170A-4		板状木製品	平安?	板目	スギ	47.4	12.3	5.9	
1123	93	A-1	170A-4		板状木製品	平安	板目	スギ	39.2	4.9	1.0	
1124	93	E-1	110H-6	7層	壺形	平安	板目	アサナロ	24.4	1.05	1.0	
1125	93	A-2	130B-3		楕圓	平安～中世	道板目	スギ	9.2	1.3	1.4	形代
1126	93	A-2	150B-5		水田 板状木製品	平安	板目	—	-8.0	3.3	0.5	
1127	94	A-2	150B-5		水田 板状木製品	平安	板目	アカガシ産	3.6	1.8	1.8	
1128	92	A-1	170A-4		板状木製品	平安	板目	スギ	14.8	4.1	1.3	
1129	94	E-1		7層	笥	平安	板目	スギ	2.85	11.55	0.55	
1130	94	A-1	150C-2	奈良群作土	大足 踏み板	平安	板目	スギ	56.5	16.8	1.9	
1131	94	A-2	150A-3		大足 履物	時期不明 (平安～中世)	板目	スギ	13.7	4.5	2.8	
1132	94	E-1	110F-9		大足 履物	平安～中世	板目	スギ	22.8	3.8	2.0	
1133	94	A-2	150B-5		大足 履物	平安	板目	スギ	20.4	3.3	2.9	棒型大足
1134	94	A-2	150B-5	7層	大足 杖木	平安	板目	スギ	16.8	2.7	0.9	棒型大足
1135	94	A-2	150B-5	7層	大足 杖木	平安	板目	スギ	12.8	3.5	1.2	棒型大足
1136	94	A-2	150B-5	7層	大足 杖木	平安	道板目	スギ	16.1	3.1	1.1	棒型大足
1137	94	A-2	150B-5	7層	大足 杖木	平安	板目	スギ	18.1	2.6	1.1	棒型大足
1138	94	A-2	150B-5	7層	大足 杖木	平安	板目	スギ	13.3	2.4	0.9	棒型大足
1139	95	E-4	111E-1		大足 履物	平安～中世	板目	スギ	22.2	5.0	1.4	
1140	95	E-4	110H-7	SK3001	板状木製品	中世	板目	スギ	19.0	3.9	1.6	大足 棒?
1141	95	E-4	110H-6		板状木製品	平安～中世	板目	スギ	17.2	3.6	1.5	大足 棒?
1142	95	E-4	110C-8		曲物 底板	平安～中世	板目	スギ		(15.7)	1.2	方形孔あり
1143	95	E-3	129F-10		曲物 底板	奈良～平安	道板目	スギ	61.6	11.3	1.4	
1144	95	E-3	129H-9		板状木製品	奈良～平安	板目	スギ	39.8	16.9	4.5	榫埋材 方定?
1145	95	E-3	129F-10		板状木製品	奈良～平安	板目	スギ	44.6	3.7	2.7	
1146	95	E-4	110H-7		棒状木製品	平安～中世	芯持材	イヌマキ属	15.0	3.6	3.45	有滑輪 フチノコウ
1147	95	E-4	110F-10		打付け札状木製品	奈良～平安	板目	スギ	16.6	2.2	0.9	「調」の札?
1148	95	E-1			木簡	時期不明 (奈良～中世)	道板目	ヒノキ	14.8	3.9	0.5	遺書
1149	95	E-4	110C-10		打付け札状木製品	中世	板目	スギ	11.0	2.8	0.6	
1150	96	E-2	109I-6		棒状木製品	時期不明	芯持材	イヌマキ属	63.7	2.8	2.7	
1151	96	B	151A-3		板状木製品	時期不明	板目	スギ	38.7	6.3	3.0	
1152	96	E-2	109I-6		棒状木製品	時期不明	芯持材	イヌマキ属	23.9	2.2	2.0	
1153	96	C-1	131B-5		板状木製品	時期不明	板目	スギ	3.9	12.8	2.2	
1154	96	E-2			側板 壺?	時期不明	板目	—	6.0	6.1	1.1	

表 20 出土銭貨観察表

種別No	図番No	区	グリッド	遺構・層位	銭貨名	年代	法量 (cm)		材質	備考
							径	厚み		
1155	100	E-2		SF1555	寛永通寶	新寛永	2.3	0.09	銅	
1156	100	E-2		SF1555	寛永通寶	新寛永	2.4	0.09 ~ 0.1	銅	
1157	100	E-2		SF1555	寛永通寶	新寛永	2.3	0.09	銅	
1158	100	F		SF-F3	輝府通寶	寛永	2.4	0.1	銅	
1159	100	F		SF-F3	輝府通寶	寛永	2.5	0.1	銅	
1160	100	F		SF-F3	水車通寶	徳治	0.15 ~ 0.18		銅	
1161	100	F		SF-F3	水車通寶		(2.4)	0.1 ~ 0.12	銅	
1162	103	E-3	130E-3	SF-E-3-1	水車通寶		2.4	0.1	銅	
1163	103	E-3	130E-3	SF-E-3-1	寛永通寶	新寛永	2.35	0.1	銅	
1164	103	E-3	130E-3	SF-E-3-1	寛永通寶	新寛永	2.3	0.1 ~ 0.11	銅	古文 寛保元 (1741) 年
1165	103	E-3	130E-3	SF-E-3-1	寛永通寶	古寛永	2.4	0.09	銅	
1166	103	E-3	130E-3	SF-E-3-1	文久永寶	景文	2.7	0.1 ~ 0.11	銅	
1167	103	E-3	130E-3	SF-E-3-1	寛永通寶	新寛永	2.3	0.08	銅	
1168	103	E-3	130E-3	SF-E-3-1	文久永寶	景文	2.65	0.09	銅	
1169	103	E-3	130E-3	SF-E-3-1	文久永寶	景文	2.7	0.1	銅	
1170	103	E-3	130E-3	SF-E-3-1	文久永寶	景文	2.7	0.07 ~ 0.1	銅	
1171	103	E-3	130E-3	SF-E-3-1	寛永通寶	新寛永	2.4	0.11	銅	
1172	103	E-3	130E-3	SF-E-3-1	寛永通寶	新寛永	2.3	0.09	銅	青小 天文2 (1737) 年
1173		E-2	1091-10	SF2437	水車通寶		2.5	0.09 ~ 0.12	銅	
1174		E-2	1091-10	SF2437	泉永通寶	寛永	2.4	0.1	銅	
1175		E-2	1091-10	SF2437	—		2.4	0.1	銅	文字判別不能
1176		E-2	1091-10	SF2437	元正通寶 ●●●● ●●●● ●●●●	寛永・寛永	2.5	0.11	銅	3枚揃書 3枚目は元正通寶小。
1177		E-2	130A-1	SF1055	水車通寶 ●●●●		2.6	0.1	銅	2枚揃書
1178		E-2	130A-1	SF1055	●●●●	寛永	2.4	0.12 ~ 0.15	銅	熊平元寶小
1179		E-2	130A-1	SF1055	元豊通寶	寛永	2.5	0.1	銅	
1180		E-2	130A-1	SF1055	●●●●	寛永	2.4	0.09 ~ 0.1	銅	
1181		E-2	130A-1	SF1055	水車通寶		2.5	0.1 ~ 0.13	銅	
1182	100	E-2	1091-8	SF2763	聖徳元寶	寛永	2.5	0.1	銅	
1183	100	E-2	1091-8	SF2763	嘉祐通寶	寛永	2.4	0.1	銅	
1184	100	E-2	1091-8	SF2763	淳化元寶?	行書	2.5	0.1	銅	
1185	100	E-2	1091-8	SF2763	洪武通寶		2.5	0.12	銅	
1186	100	E-2	1091-8	SF2763	水車通寶		2.5	0.11	銅	
1187	100	E-2	1091-8	SF2763	水車通寶		2.5	0.11 ~ 0.13	銅	
1188		A-1	150D-1	SE280	寛永通寶	新寛永	2.35	0.05	銅	
1189		A-1		SE280	寛永通寶	新寛永	2.3	0.02	銅	
1190		E-3		SP19483	天聖元寶	行書	(2.45)	0.08 ~ 0.1	銅	
1191		E-3	130B-1	SB6003	天祐通寶	行書	2.4	0.11	銅	
1192		E-2		1752	天聖元寶	寛永	2.4	0.09	銅	
1193		E-3	130B-1	SD3134	龍元重寶?	(2.3)	0.08 ~ 0.1	銅		
1194		E-2	1091-10	SP3049	洪武通寶		2.3	0.11 ~ 0.15	銅	
1195		E-1		SP265	寛永通寶	古寛永	2.5	0.1	銅	
1251	100			遺探	—		2.3	0.08 ~ 0.13	銅	近現代
1252	100			埴土	カワズ1銭貨銅圓		2.4	0.09 ~ 0.1	銅	昭和13年
1253	104	E-3	130E-1	中世層	富壽神寶		2.3	0.12	銅	816年制
1254	100	E-2	129A-8		●●●● ●●●● ●●●● ●●●● ●●●● ●●●●		2.4		銅	6枚揃書 六道銭
1255	100	確認その2		26Tr・3層	—		2.25	0.09 ~ 0.11	銅	文字判別不能
1256	103	E-3	130E-4		寛永通寶	古寛永	(2.45)	0.09	銅	
1257	103	E-2	129A-10		寛永通寶	古寛永?	2.5	0.2	銅	
1258	103	E-5			寛永通寶	古寛永	2.5	0.1	銅	
1259	103	E-2	1101-2		寛永通寶	古寛永	2.45	0.08	銅	
1260	103	E-4			寛永通寶		2.4	0.06 ~ 0.09	銅	
1261	103	E-2	109F-10	流路	寛永通寶	新寛永	2.2	0.08	銅	
1262	103	E-2	109E-9		寛永通寶	新寛永	2.4	0.05	銅	
1263	103	E-3	130E-1	欄瓦	寛永通寶	新寛永	2.2	0.05 ~ 0.08	銅	

表 21 出土金属製品観察表

標記No	図面No	区	グリッド	遺構・層位	遺物名	法量 (cm)			備考
						長さ	幅		
							幅	厚み	
1216	101	E-2	109F-9		釘	3.1	0.2~0.3	0.2	
1217	101	E-2	109E-10		釘	3.2	0.3~0.7	0.3	
1218	101	E-2		SP59	釘	(2.5)	0.4	0.6	
1219	101	E-2	109G-9		釘	(2.2)	0.4	0.3	
1220	101	E-2	129A-9		釘	(2.5)	-	-	
1221	101	E-2	109G-10		釘	(2.3)	0.5	0.4	
1222	101	E-2	110E-1		釘	(4.0)	0.6	0.6	
1223	101	E-2	109H-9		釘	(3.6)	0.4~0.7	0.4	
1224	101	E-2	109J-10		釘	(4.8)	0.5	0.6	
1225	101	E-2	109G-10		釘	(4.8)	0.6~0.9	0.4	
1226	101	E-2	109H-9		釘	(7.9)	0.5	0.5	
1227	101	E-2	109J-10		釘	9.2	0.3~0.8	0.3	
1228	101	E-2	110G-2		釘	(8.8)	0.6	0.4	
1228	102	A-1	150D-3	A534	板状鉄製品	3.3	4.4	0.6	
1229	102	E-2	109F-10	SP3599	不明鉄製品	(5.7)	0.5	0.1	
1241	102	E-2		SP2396-2	不明鉄製品	10.3	3.2	0.7	
1242	102	E-1		SD177	釘	(2.3)	0.4~1.1	0.5	
1243	102	E-3	129C-8	SP9637	棒管(扉首)	5.3	最大0.9 次量1.2	-	
1244・459	62・102	E-1		SK203	棒管(瓶口)	6.7	0.5~1.3	-	
1245	102	E-2	109I-6	SP2935	釘	(4.3)	頭部1.1 身部0.4	0.4	
1246	102	E-2		SP2654	釘	(6.8)	0.4	0.4	
1247	102	A-1	150D-1	A535	棒状鉄製品	10.7	0.4	0.4	
1248	102	E-3	129B-8	SP9920	不明鉄製品	(13.8)	6.1	0.4~0.8	
1249	102	E-2		SP1216	不明鉄製品	(5.7)	1.3	0.5	
1250	102	A-1		A535 北端部	板状鉄製品	7.4	8.5	0.3	
1250	104	E-2	109H-9		棒管(扉首)	6.3	最大1.1 次量1.6	-	
1291	104	E-2	109 I-7		棒管(扉首)	(3.4)	1.3	-	
1292	104	E-2	109E-9		棒管(瓶口)	6.1	0.5~1.2	-	
1293	104	E-2	109H-9		鎌	(10.0)	(2.2)	0.5	
1294	104	E-2	109E-9		鈔ウ	3.5	7.7	0.1	
1295	104	A-1	170A-5		棒状鉄製品	35.4	0.5	-	
1297	104	A-1	150C-2		棒状鉄製品	23.7	1.0	0.7	
1298	105	E-2	109J-9		不明鉄製品	(2.7)	1.3	0.3	
1299	105	E-2	110G-2		不明鉄製品	(3.4)	2.3	0.5	
1300	105	E-2	109I-9	覆瓦	不明鉄製品	(1.5)	0.7	0.2	
1301	104	E-3	130C-3		火打鎌	6.3	1.3	0.3	
1302	105	E-2	109I-8	覆瓦	不明鉄製品	(6.5)	0.4	2.7	
1303	105	確認その2		26Tr・3層	刀子	(5.3)	0.6~1.3	-	
1304	104・105	E-3	130E-1		刀子	5.2	0.1	0.1	
1305	105	E-2	110I-1		鋸	0.7	0.2~1.2	0.2	
1306	105	E-2	109E-10		不明鉄製品	(1.9)	0.4	0.3	
1307	105	F		表土	不明鉄製品	(4.8)	2.4	0.15	
1308	105	E-3	129B-9	覆瓦	不明鉄製品	(5.3)	0.9	0.3	
1309	105	A-1	150D-3		不明鉄製品	5.2	0.9	0.2	
1310	105	E-2	109J-9		不明鉄製品	(4.8)	最大2.1	0.6	
1311	104	A-1	150E-4		鉄線Ⅲ	1.3	1.2	-	
1312	104	A-1	150E-3		鉄線Ⅲ	1.1	1.1	-	
1313	104	A-1	170A-5		鉄線Ⅲ	1.3	1.2	-	
1314	104	A-1	170A-4		鉄線Ⅲ	1.2	1.1	-	
1315	105	E-4	111E-1		不明鉄製品	(3.4)	1.7	0.2	
1316	105	E-3		111E	不明鉄製品	3.8	1.3	0.25	
1317	105	E-2	130A-1		不明鉄製品	最大径2.0	0.1	0.6	
1318	104	E-2	109H-9		不明鉄製品	12.7	0.6~2.5	1.5~2.2	
1319	105	A-1	150C-2		板状鉄製品	4.1	1.5~2.5	0.3	
1321	105	E-2	110E-1	排水溝	不明鉄製品	(4.8)	(3.2)	0.6~0.8	
1320	105	E-3	130C-2		不明鉄製品	(4.6)	-	0.2	
1322	105	E-3	130D-1		不明鉄製品	(5.6)	2.2	0.4	
1323	106	E-4	90I-8		不明鉄製品	5.0	4.2	1.8	
1324	106	E-4	110A-9	古代包舎層	刀子	(8.3)	2.3	0.2	
1325	106	E-2	110G-2		刀子	11.3	0.9~1.2	-	
1326		C-1	1310A-4		刀子	13.3	0.8	-	
1327		E-5南側部	110J-7	6と7層の中間	刀子?	(11.6)	3.0~7.6	0.8~(0.9)	
1328	106	A-1	150E-3		棒管(扉首)	5.4	最大0.9 次量1.5×1.3	-	
1329	106	E-4	90J-8	中世包舎層	棒管(扉首)	(3.6)	最大幅1.0	-	
1330	106	E-2	129B-8	中世層	棒管(瓶口)	6.1	最大幅1.2	-	
1331	106	E-4	110B-10	中世包舎層	不明鉄製品	5.7	1.3	0.2~0.3	
1332	106	A-1	150E-3		馬鋸(扉)	26.9	1.7~1.4	0.4~0.8	
1334	106	E-5	110J-7	5層	釘	(8.0)	0.6~0.9	0.4	
1335	106	E-5南側部	110J-7	5層	釘	(6.9)	0.4~0.7	0.7	

表 22 出土鉄器観察表

検出No	図版No	区	グリッド	遺構・層位	遺物名	全長	鉄身部			頭部			茎部			備考
							長さ	幅	厚み	長さ	幅	厚み	長さ	幅	厚み	
1229	100	E-5 南側②	130A-7	灰砂②・6と8層の中間	鉄鏝	20.3				0.4~1.1	0.2~0.3	-				
1230	100	A-2	150D-5	6・7層水田?	鉄鏝 (12.1)					0.3~1.4	-	-				
1231	100	E-4	110B-8	6層	鉄鏝	3.8				0.5~1.2	0.1~0.2	-				磨又式
1232	100	E-4	110B-9	5層	鉄鏝 (4.8)					0.4~0.6	0.2	-				磨又式
1233	100	A-2	150A-2	7層水田	鉄鏝 (10.4)					0.7~5.8	-	-				磨又式
1234	100	C-1	130C-4N		鉄鏝	14.3				0.3~5.9	-	-				磨又式
1235	100	E-4	110B-6		鉄鏝 (9.6)					0.3~1.3	0.3~0.4	-				
1236	100	A-2	130E-1	7層	鉄鏝 (9.3)					0.3~1.5	-	-				
1237	100	A-2	150A-2		鉄鏝 (7.3)					0.3~1.9	-	-				
1240	102	E-3	120D-8	SPN198	鉄鏝 (3.7)					-	0.5	0.4	-	0.3	0.4	
1296	105	確認その2		28Tr・3層	鉄鏝?	(7.0)				-	0.6~0.8	0.3~0.5				
1333	106	E-4	111E-1	中世包含層	鉄鏝?	(12.7)	1.2~2.8	0.7~1.5	-							

表 23 出土陶瓦観察表

検出No	図版No	区	グリッド	遺構層位	遺物名	年代	法量 (cm)						備考	
							残存長	体部高	体部幅	体部厚	脚部幅	尾部幅		尾部厚
460	62	E-1		SK205 上流層	土瓦 (陶質)	奈良時代(口跡)~近世	7.0	7.25	1.15~2.45	325~2.35	5.2	1.3	1.4	体部の上半と尾部の失脚、および右後脚全欠

表 24 出土瓦観察表

検出No	図版No	区	グリッド	遺構層位	遺物名	法量 (cm)					備考	
						全長	最大幅	厚み	直径	高さ		
1330	107	E-1		SK205	埴子の土瓦	(5.40)	(5.25)	(1.75)				
1337	107	E-2			平瓦	(7.90)	(5.90)	(1.80)				裏に布目あり
1338	107	E-3	120A-9	E-2区境・柳	調印瓦	(8.40)	(6.30)	(2.40)				
1339	107	E-4	110C-3	溝跡中	埴子の土瓦	(5.30)	(5.30)	(1.65)				
1340	107	E-2	110I-1		丸瓦	(5.70)	(3.60)	(2.25)	-			裏に布目あり
1341	107	E-2	109I-9		平瓦	(10.00)	(9.50)	(1.80)				裏に布目あり
1342	107	E-2	109I-9		丸瓦	(9.60)	(8.70)	(2.50)	(14.20)			裏に布目あり
1343	107	E-2	120B-9		軒丸瓦	(14.80)	(14.60)	2.90	14.40	(11.00)		裏に布目あり。外側に工具の調整痕
1344	107	E-2			表土除去	(10.00)	(8.70)	2.50	15.40	(5.00)		

表 25 出土羽口観察表

検出No	図版No	区	グリッド	遺構層位	遺物名	法量 (cm)					備考
						全長	最大幅	厚み	内径	外径	
1345	107	E-3	129J-9		輪郭口	(5.05)	(4.95)	(2.50)	(3.20)	(8.20)	全体被熱している
1346	107	E-2	120A-10		輪郭口	(4.90)	(4.70)	(2.70)	(3.40)	(9.60)	全体被熱している
1347	107	E-3	129J-9		輪郭口	(3.70)	(3.20)	(2.20)	(2.40)	(6.30)	上端部は変色している。付着物あり

表 26 出土土玉観察表

検出No	図版No	区	グリッド	遺構層位	遺物名	法量 (cm)				備考
						全長	最大幅	内径	重量 (g)	
1348	107	E-2	110E-1		土玉	0.60	0.85	0.20~0.30	1g以下	

表 27 出土土鏝観察表

検出No	図版No	区	グリッド	遺構層位	遺物名	法量 (cm)				備考
						全長	最大幅	内径	重量 (g)	
1349	107	E-5	130A-7	河津内	土鏝	3.70	2.15	1.00	15	
1350	107	E-1	110C~D	50118	土鏝	4.40	2.60	0.90~1.00	27	指道痕あり

表 28 掘立柱建物一覧

上層 1 期		グリッド	長軸方向	間数		規模 (m)		桁+梁	面積 (㎡)	柱径
遺構名	区			梁	桁	梁	桁			
SH101	E-1	110R+C-1	N-6F Ⅱ	1	1	1.7	1.8	1.06	3.06	
SH102	E-1	110C-1	N-4F Ⅱ-E	1	2	1.7	1.7	1.00	2.89	
SH103	E-1	110C-2	N-3F Ⅱ-E	1	2	1.5	1.7	1.13	2.55	
SH104	E-1	110C-2	N-6F Ⅱ	(2)	2	2.0	2.3	1.15	4.60	
SH105	E-1	110C+D-2	N-2F Ⅱ-E	(2)	2	1.7	2.0	1.18	3.40	
SH106	E-1	110C+D-2	N-3F Ⅱ-E	2	(2)	2.0	2.1	1.05	4.20	
SH107	E-1	110D-2	N-4F Ⅱ-E	1	1	1.0	1.3	1.30	1.30	
SH108	E-1	110D-2+3	N-3F Ⅱ-E	(2)	(2)	2.1	2.1	1.00	4.41	
SH109	E-1	110C-3	N-1F Ⅱ-E	(2)	2	2.0	2.2	1.10	4.40	
SH201	E-3	129B-8	N-6F Ⅱ	2	2	2.4	2.9	1.21	6.96	
SH202	E-3	129B-8	N-6F Ⅱ	2	2	2.0	3.8	1.90	7.60	
SH203	E-3	129B-8	N-7F Ⅱ	2	2	2.1	2.9	1.38	6.09	
SH204	E-3	129C-7+8	N-7F Ⅱ-E	1	2	1.6	2.8	1.75	4.48	

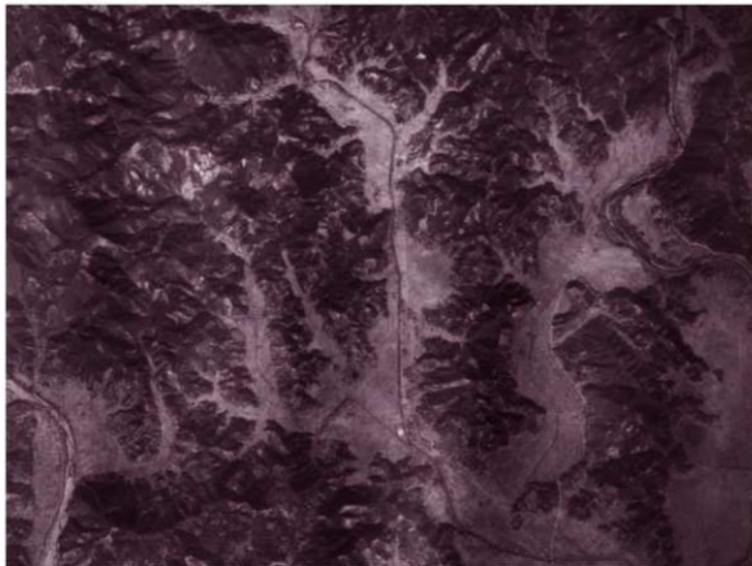
上層 2 期		グリッド	長軸方向	間数		規模 (m)		桁+梁	面積 (㎡)	柱径
遺構名	区			梁	桁	梁	桁			
SH101	E-2	109J-9・10 129A-9	N-3F Ⅱ-E	3	5	5.6	9.0	1.61	50.40	SP582 (柱径) SP669・SP700 (礎)
SH102	E-2	109J-9 129A-9	N-2F Ⅱ-E	3	5	6.1	9.2	1.51	56.12	SP2388 (柱径) SP746・777 (礎)
SH103	E-2	109I-9・10 109J-9・10	N-3F Ⅱ-E	3	4	4.8	6.4	1.33	30.72	
SH104	E-2	109I-9・10 109J-9・10	N-5F Ⅱ	4	4	4.0	5.8	1.45	23.20	
SH105	E-2	109I-9・10 109J-9・10	N-6F Ⅱ	3	5	3.8	5.4	1.42	20.32	
SH122	E-2	130A-1 130B-1	N-2F Ⅱ-E	2	3	3.2	4.0	1.25	12.80	SP3078 (柱径)
SH129	E-2	109F+G-10 110F+G-1	N-4F Ⅱ	2	2	2.3	2.5	1.09	5.75	SP3635 (柱径)
SH135	E-2	109I-9 109J-9,10	N-6F Ⅱ	2	5	3.5	6.6	1.89	23.10	SP2399 (柱径) SP2649 (礎)
SH138	E-2	109I-10 110I-1	N-2F Ⅱ-E	2	3	2.7	3.6	1.33	9.72	
SH141	E-2	109I-10	N-3I Ⅱ-E	2	2	2.2	2.5	1.14	5.50	
SH142	E-2	109I-10	N-3F Ⅱ-E	2	2	1.8	2.0	1.11	3.51	
SH151	E-2	110H-3	N-7F Ⅱ	2	2	2.6	2.8	1.08	7.28	
SH152	E-2	110H-3	N-8F Ⅱ	2	2	2.4	2.6	1.08	6.24	
SH153	E-2	110J-1 130A-1+2	N-1F Ⅱ-E	3	4	4.0	5.4	1.35	21.60	
SH154	E-2	130A-1	N-3F Ⅱ-E	2	4	3.7	5.0	1.35	18.50	SP2985・SP3004 (柱径)
SH161	E-2	109F-10	N-6F Ⅱ	1	2	2.2	3.3	1.5	7.26	SP1185 (柱径)
SH162	E-2	109F-10	N-4F Ⅱ-E	2	2	2.3	2.6	1.13	5.98	
SH163	E-2	109F-10	N-3F Ⅱ-E	2	2	2.7	3.4	1.28	9.18	
SH164	E-2	109F+G-10 110F+G-1	N-2F Ⅱ-E	2	2	2.3	3.0	1.30	6.90	
SH165	E-2	109H-7	N-1F Ⅱ-E	2	2	2.6	2.7	1.04	7.02	
SH166	E-2	109I-8 109J-8	N-2F Ⅱ-E	2	2	3.1	4.2	1.35	13.02	
SH201	E-3	129C-7	N-2F Ⅱ-E	--	3	--	5.4	--	--	
SH202	E-3	129D-7 129C+D-8	N-2F Ⅱ-E	2	5	3.1	6.5	2.10	20.15	
SH203	E-3	129D-7+8	N-2F Ⅱ-E	2	3	3.3	6.3	1.91	20.79	
SH204	E-3	129D-7+8	N-3F Ⅱ-E	(2)	3	3.6	6.6	1.83	23.76	
SH205	E-3	130C-2	N-3F Ⅱ-E	2	2	4.1	4.2	1.02	17.22	
SH206	E-3	130C+D-2 130C-3	N-5F Ⅱ	2	2	3.6	4.2	1.17	15.12	
SH207	E-3	129D-10 130C+D+E-1	N-3F Ⅱ-E	4	5	7.1	10.4	1.86	74.05	
SH207-2	E-3	129D+E-10 130C+E-1	N-3F Ⅱ-E	4	5	6.8	9.9	1.45	67.65	
SH208	E-3	129D+E-10 130F-1	N-5F Ⅱ	4	4	5.3	8.7	1.65	45.74	
SH209	E-3	129E+F-10 130F-1	N-5F Ⅱ	4	5	5.9	9.6	1.63	56.64	
SH210	E-3	129G+H-8	N-5F Ⅱ	2	2	5.1	3.5	1.13	10.85	

参考文献

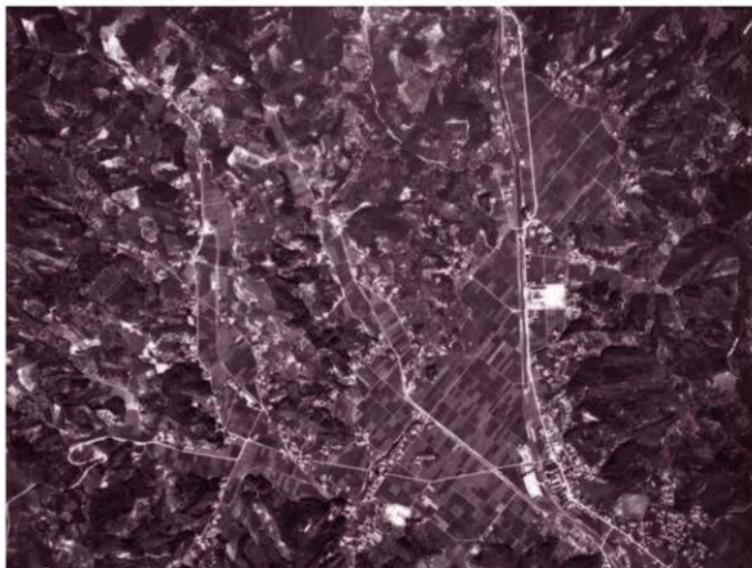
- 青木 修 2004 「島田市大津地区の中世遺跡群」『設立20周年記念論集』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 足立順司 1991 「かわらけと内耳鍋について」『原川遺跡』IV（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 池谷初恵 2008 「伊豆における北条氏の館跡について」『金沢文庫研究』321号
- 磐田市教育委員会 1986 『玉越遺跡』
- 小野正敏 1997 『戦国城下町の考古学』講談社
- 小野正敏 2000 「遠江の出土陶磁器組成の特徴－貿易陶磁を中心に－」『横地域跡』総合調査報告書 菊川町教育委員会
- 大川敬夫他 1984 『太田切遺跡・飯田遺跡』清水市教育委員会
- 加藤理文 1999 「元島遺跡出土の煮沸用土師質土器について」『元島遺跡』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鎌方正樹 2003 『井戸の考古学』同成社
- 河合 修 1998 「屋敷地の様相－特に12・13世紀をとりあげて－」『静岡の考古学』静岡の考古学編集委員会
- 河合 修 2001 「榛原郡金谷町横岡字釜谷の灰軸系陶器について」『研究紀要』8
- 河合 修 2004 「旗指雲の展開と山茶碗の発生」『創立20周年記念論文集』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 菊川シンポジウム実行委員会 2005 『陶磁器からみる静岡の中世社会』資料編 菊川シンポジウム実行委員会
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993 『新堀遺跡』
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 『石成遺跡』
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 『牛岡遺跡1・頭地遺跡』
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2002 『藤守遺跡』
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004 『ミヨウガ原遺跡他』
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007 『入野東古墳群・入野高岸古墳』
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009 『上志戸呂古墳』
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009 『駿府城内遺跡』
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古墳群』
- 斉藤慎一 2006 『中世武士の城』吉川弘文館
- 静岡県教育委員会 1983 『駿府城内埋蔵文化財発掘調査報告』
- 静岡県教育委員会 1981 『静岡県文化財調査報告書第23集 静岡の中世城館跡』
- 渋谷昌彦 2007 「藤枝市助宗古窯跡群の灰軸陶器生産と遠江・駿河の編年」『静岡県考古学研究』39号 静岡県考古学会
- 鈴木正貴 2002 「中世集落と鍛冶」『東海の中世集落を考える』考古学フォーラム尾張大会資料集
- 玉井哲雄 1996 「武家の住宅」『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会
- 榎原靖弘 2008 「中世社会の胎動－荘園の設置－」『藤枝市史 通史編上 原始・古代・中世』藤枝市
- 土 隆一編 1974 『静岡県の地質』静岡県
- 松井一明 1993 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』25号 静岡県考古学会
- 中野晴久 1997 「瓷器系中世陶器の生産」『研究紀要』5 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 中野晴久 2005 「常滑・渥美窯」『静岡の中世社会』菊川シンポジウム実行委員会
- 長谷川銀藏 1978 「埋め戻し・埋め方について」『民俗文化』177号 滋賀民俗学会
- 服部実善 2001 「南関東における中近世建物遺構の変遷」『埋もれた中近世の住まい』同成社
- 原 廣志 1999 「横地域関連遺跡群と周辺の遺跡の特徴について」『横地域跡』総合調査報告書 菊川町教育委員会
- 袋井市教育委員会 1995 『坂尻遺跡』
- 藤枝市郷土博物館 2005 『静岡県藤枝市 飯沼沢古墳群・飯沼沢遺跡・飯沼堤ノ坪遺跡・飯沼堤ノ坪古墳』藤枝市教育委員会
- 藤枝市・岡部町教育委員会 1999 中学校社会科資料集『わが郷土 藤枝・岡部』
- 藤枝市史編纂委員会 1971 『藤枝市史 上巻』藤枝市

- 藤枝市埋蔵文化財調査事務所 1981 『国道1号藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査報告書第6冊
上蔵田モミダ道路・上蔵田川の丁遺跡・島内遺跡』 藤枝市教育委員会
- 藤枝市埋蔵文化財調査事務所 1981 『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』 藤枝市教育委員会
- 藤枝市史編纂委員会 2007 『藤枝市史 資料編1 考古』 藤枝市
- 藤枝市史編纂委員会 2010 『藤枝市史 通史編上 原始・古代・中世』 藤枝市
- 藤枝市埋蔵文化財調査事務所 1981 『国道1号藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査報告書第4冊 宮塚遺跡・潮城跡』
藤枝市教育委員会
- 藤枝市埋蔵文化財調査事務所 1980 『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書1』 藤枝市教育委員会
- 藤枝市埋蔵文化財調査事務所 1980 『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』 藤枝市教育委員会
- 藤枝市郷土博物館 2003 『高田観音前1・2号墳発掘調査報告書』 藤枝市教育委員会
- 藤澤良祐 2000 「遠江出土の瀬戸・美濃焼」『横地城跡』総合調査報告書 菊川町教育委員会
- 藤澤良祐 2005 「中世の施軸陶器」『東洋陶磁史』
- 藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』5 三重県埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 2002 「中世の施軸陶器」『東洋陶磁史』東洋陶磁学会
- 藤澤良祐 2002 「中世の施軸陶器—古瀬戸の生産と流通—」『東洋陶磁史』東洋陶磁学会
- 増井義己 1978 「志太平野の群集墳」『静岡県考古学研究』4号 静岡県考古学会
- 松井一明 1993 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』№.25 静岡県考古学会
- 松井一明 2009 「東海地域における中世石塔の出現と展開」
『東海地域における中世石塔の出現と展開—花崗岩製石塔と在地産石塔—』石造物研究会
- 松井一明・溝口彰啓 2002 「中世集落の地域性（遠江国註・東部）」『東海の中世集落を考える』
第9回東海考古学フォーラム尾張大会資料集
- 松井一明 2006 「遠江・駿河の中世鍋・瓦質土器」『鈔鉄・鋳物製鍋釜の関係を探る』
文部省科学研究費報告「中世考古学の総合的研究」
- 丸杉俊一郎 2002 「中世集落の地域性（遠江国西部）」『東海の中世集落を考える』
第9回東海考古学フォーラム尾張大会資料集
- 森田 勉 1982 「14世紀から16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁』第2号 貿易陶磁研究会
- 八木勝行 1990 「志太地域における律令期氣息器について」『年報・紀要』№.2 藤枝市郷土博物館
- 矢田 勝 2008 「志太平野の桑里」『藤枝市史 通史編上 原始・古代・中世』 藤枝市
- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究紀要』4号 九州歴史資料館
- 吉岡康暢 2000 「職の文化」『日本通史』第8巻 岩波書店
- 李 剛 1999 「中国古代名窯簡介」『古瓷発掘』浙江省人民美術出版社
- 李 錫経・李 知宴 1982 「珠光青磁（柿目面花文青磁）についての研究浅説」『貿易陶磁研究』第2号 貿易陶磁研究会
- 渡瀬 治 1989 『富沢原・千福馬場添大畑・桃園入の洞』裾野市教育委員会

写真図版



1. 藤枝市北東部空中写真 (1946年10月27日米軍撮影)



2. 藤枝市栗梨地区空中写真 (1962年9月9日国土地理院撮影)

図版 2

寺家前遺跡



1. 寺家前遺跡遠景（西から）



2. 寺家前遺跡遠景（南東から）



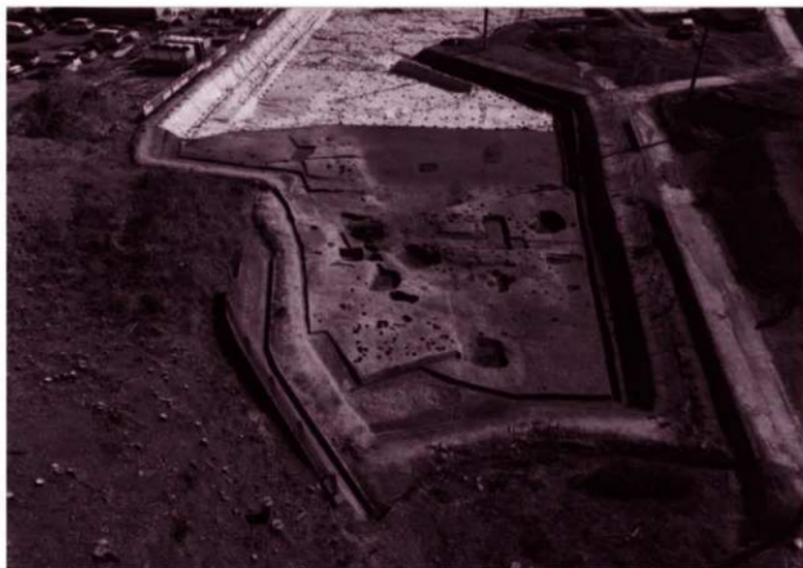
中～近世調査面全景 (A-1区・E-1・2・3・5区)

図版 4

A区・C区・E-4区



奈良～平安時代条里調査面全景 (A区・C区・E-4区)



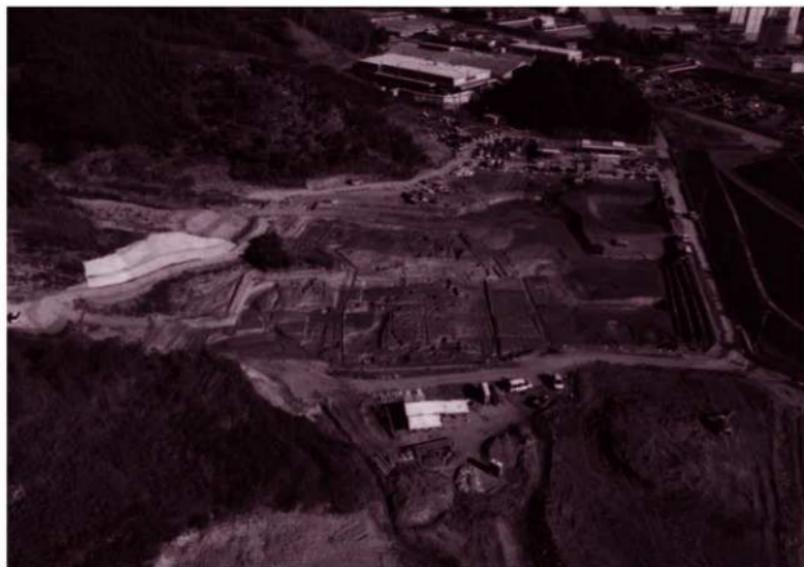
1. E-1 区 中～近世調査面遠景（西から）



2. E-1 区 中～近世調査面全景

図版 6

E-2 区



1. E-2 区 中～近世調査面遠景（南西から）



2. E-2 区 中～近世調査面（北東部分）遠景（北西から）



1. E-2 区 中～近世調査面（北東部分）全景



2. E-2 区 中～近世調査面全景

図版 8

E-3 区



1. E-3 区 中～近世調査面遠景（南から）



2. E-3 区 中～近世調査面全景



1. A-1 区 中～近世調査面遠景（北東から）



2. A-1 区 中～近世調査面遠景（南西から）

図版 10

A-1区



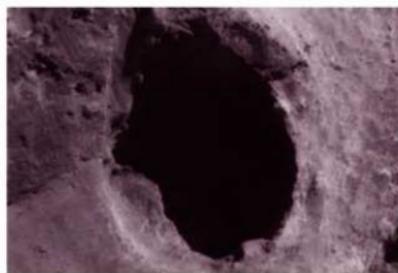
1. A-1区 中～近世調査面全景（北東から）



2. A-1区 中～近世調査面全景（北東から）



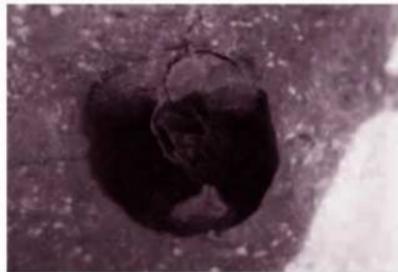
1. E-1 区 近世掘立柱建物群遠景 (南西から)



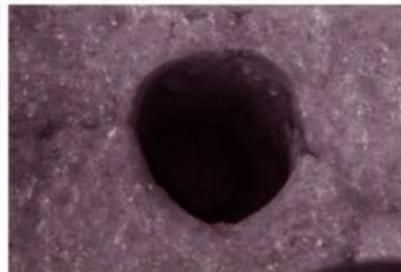
2. E-1 区 近世掘立柱建物 SH102 柱穴 SP95 (西北から)



3. E-1 区 近世掘立柱建物 SH103 柱穴 SP337 (北から)



4. E-1 区 近世掘立柱建物 SH105 柱穴 SP222 (南から)



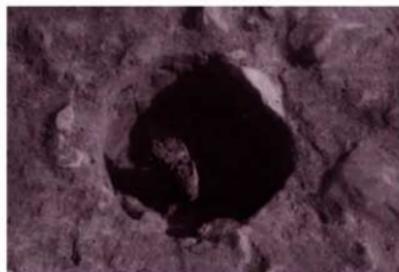
5. E-1 区 近世掘立柱建物 SH107 柱穴 SP150 (東から)

図版 12

E-3 区



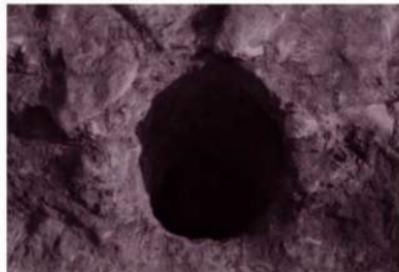
1. E-3 区 近世据立柱建物群全景（東から）



2. E-3 区 近世据立柱建物 SH201 柱穴 SP8476（南西から）



3. E-3 区 近世据立柱建物（南東から）



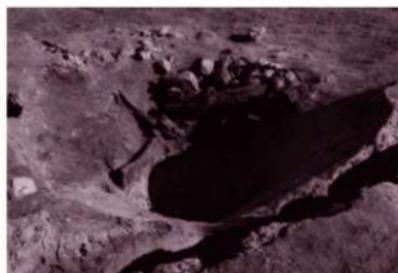
4. E-3 区 近世据立柱建物 SH202 柱穴 SP9086（西から）



5. E-3 区 近世据立柱建物 SH204 柱穴 SP8309（西から）



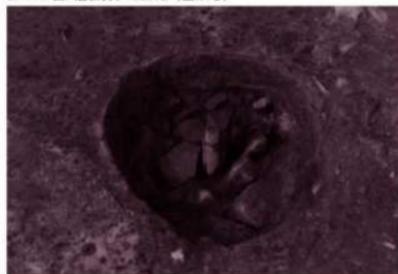
1. E-3区 近世遺構群 (西から)



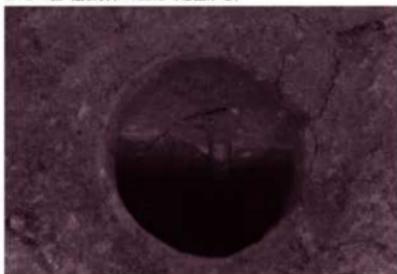
2. A-1区 近世井戸 SE532 (西から)



3. E-1区 近世井戸 SE292 (北西から)



4. E-3区 近世井戸 SE8360 (南東から)



5. E-3区 近世井戸 SE8247 (南から)

図版 14

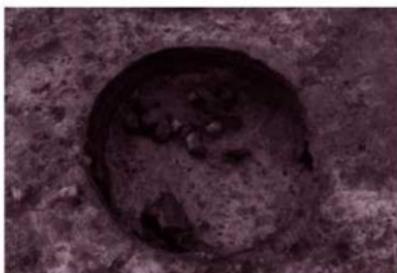
E-3 区



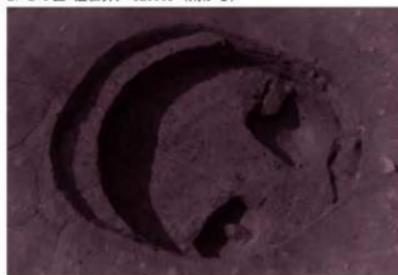
1. E-3 区 近世井戸 SE8680 (南東から)



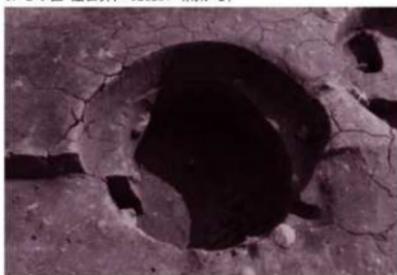
2. E-3 区 近世井戸 SE8608 (南から)



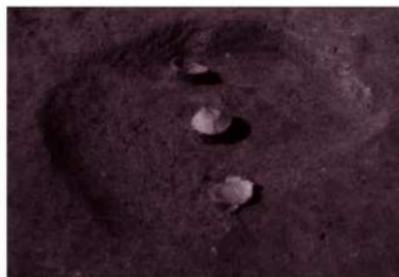
3. E-3 区 近世井戸 SE8281 (南から)



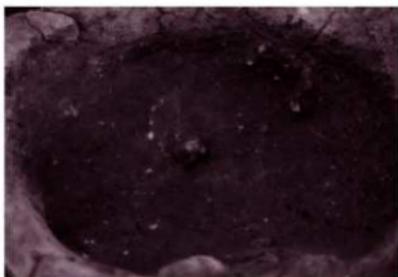
4. E-3 区 近世井戸 SE8609 (南東から)



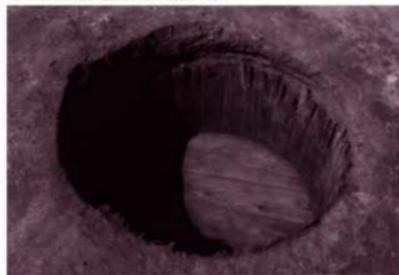
5. E-3 区 近世井戸 SE8610 (北西から)



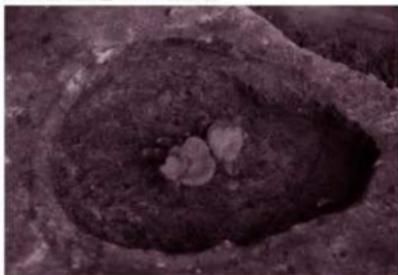
1. E-2区 近世墓 SF1426 (東から)



2. E-2区 近世墓 SF2437 (東から)



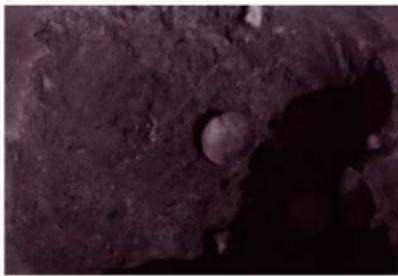
3. E-2区 近世墓 SF1137 (東から)



4. E-2区 近世墓 SF3089 (西から)



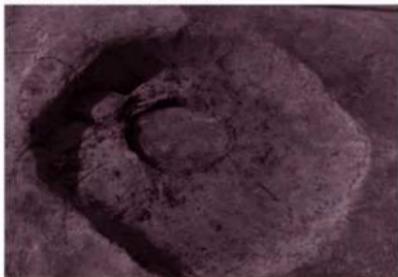
5. E-2区 近世墓 SF2763 (西から)



6. E-2区 近世墓 SF1055 (南から)



7. E-3区 近世墓 SF9089・SF9090 (東から)



8. E-3区 近世墓 SF9091 (東から)

図版 16

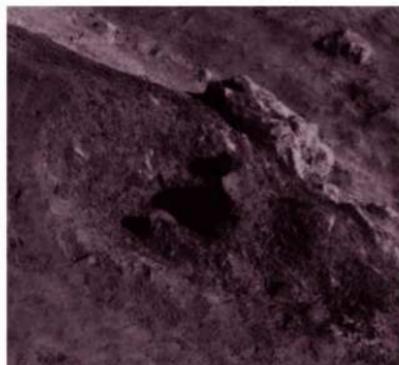
E-2区・E-3区・F区



1. E-2区 近世墓 (北西から)



2. E-3区 近世墓 銭貨出土状況



3. F区 近世墓 SF-F3-1 遺物出土状況 (西から)



4. F区 近世墓 SF-F3-1 完掘状況 (西から)



5. F区 近世墓 SF-F3-2 完掘状況 (東から)



6. F区 近世墓 SF-F3-3 半掘状況 (北西から)



1. A-1 区 近世以降道路遺構遠景 A535・536・537 (南から)



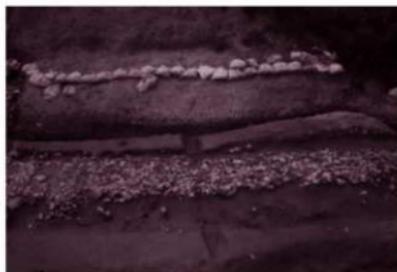
2. A-1 区 近世以降道路遺構遠景 A535・536・537 (北から)

図版 18

A-1 区



1. A-1 区 近世以降道路遺構 A535・536・537 (南から)



2. A-1 区 近世以降道路遺構 A535 上面 (東から)



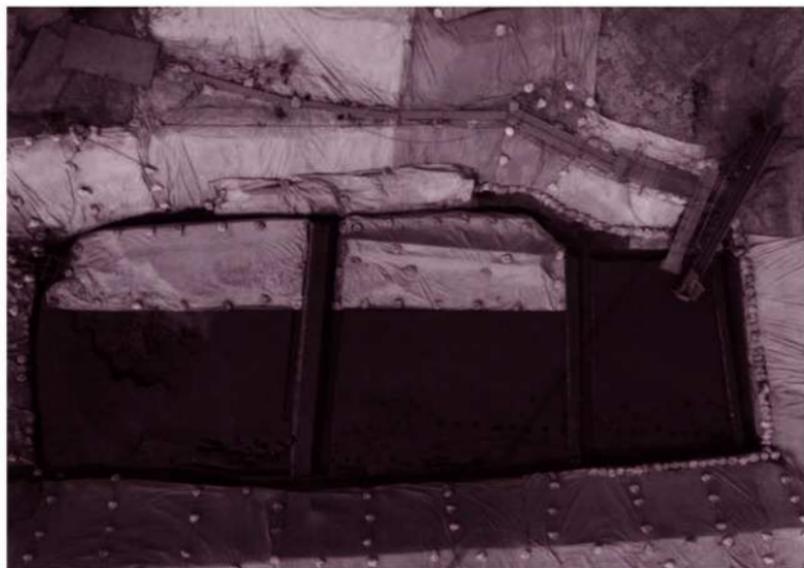
3. A-1 区 近世以降道路遺構 A535 側溝内硬核出状況 (東から)



4. A-1 区 近世以降道路遺構 A535 下面 (東から)



5. A-1 区 近世以降道路遺構 A535 下面排水溝 (南西から)



1. E-5区② 近世水田畦畔全景



2. E-5区② 近世水田畦畔 流木出土状況 (南西から)



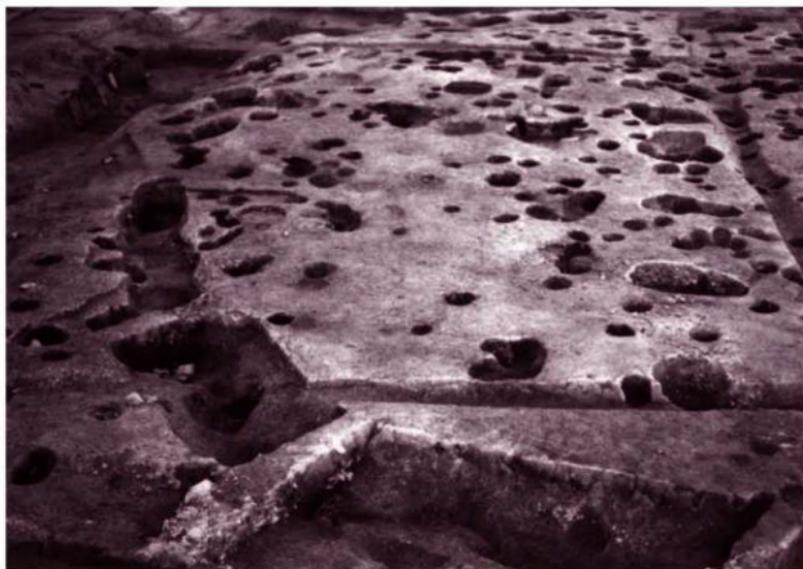
3. E-5区② 近世水田畦畔 杭列検出状況 (北東から)



4. E-5区② 近世水田畦畔 完備状況 (南西から)



1. E-2区 中世据立柱建物1群遠景（西から）



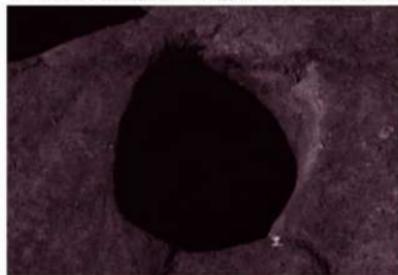
2. E-2区 中世据立柱建物1群近景（南西から）



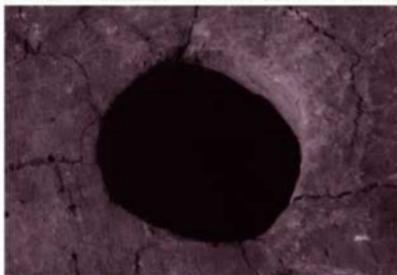
1. E-2 区 中世掘立柱建物 SH101 柱穴 SP699 半截状況 (南から)



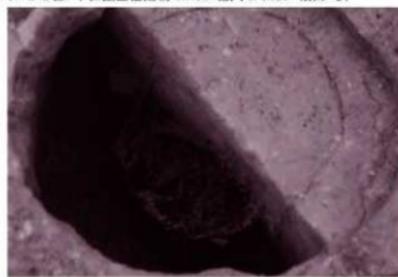
2. E-2 区 中世掘立柱建物 SH104・SH135 柱穴 SP2403 (西から)



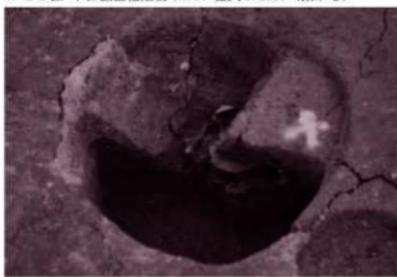
3. E-2 区 中世掘立柱建物 SH153 柱穴 SP3025 (東から)



4. E-2 区 中世掘立柱建物 SH154 柱穴 SP2985 (東から)



5. E-2 区 中世掘立柱建物 SA102-C 柱穴 SP1041 半截状況 (南から)



6. E-2 区 中世掘立柱建物 SA102-C 柱穴 SP885 半截状況 (南から)



7. E-2 区 中世区画溝 S02452 土層断面 (南東から)



8. E-2 区 中世区画溝 S02452 (南から)



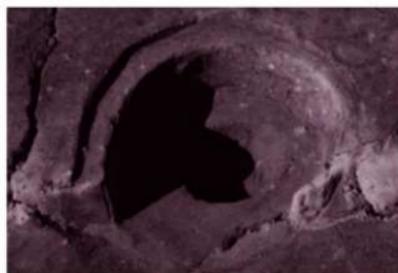
1. E-3 区 中～近世調査面遠景（北から）



2. E-3 区 中世獨立柱建物 2 群（東から）



1. E-3 区 中世据立柱建物 SH205 (南東から)



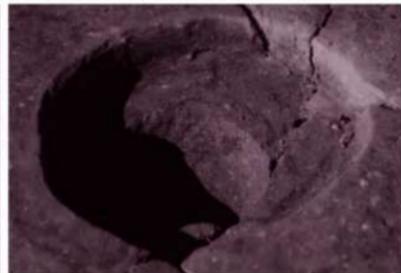
2. E-3 区 中世据立柱建物 SH205 柱穴 SP8504 (東から)



3. E-3 区 中世据立柱建物 SH205 柱穴 SP9120 (東から)



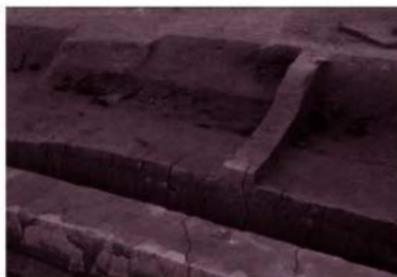
4. E-3 区 中世据立柱建物 SH206 柱穴 SP9100 (東から)



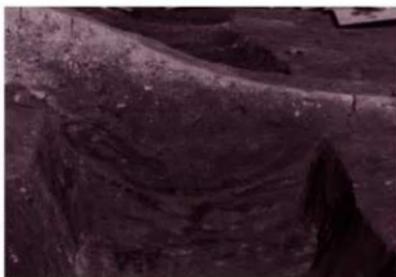
5. E-3 区 中世横列 SA204 柱穴 SP8503 (東から)

図版 24

E-2区・E-3区



1. E-3区 中世区画溝 SD9067 (東から)



2. E-3区 中世区画溝 SD9067 土層断面 (南から)



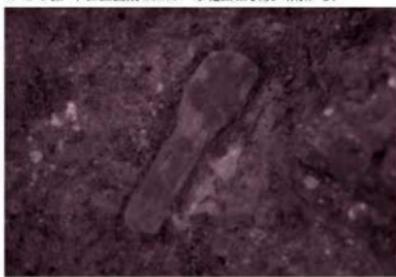
3. E-3区 中世区画溝 SD9067 草鞋出土状況 (北から)



4. E-3区 中世区画溝 SD9067 草鞋出土状況 (南から)



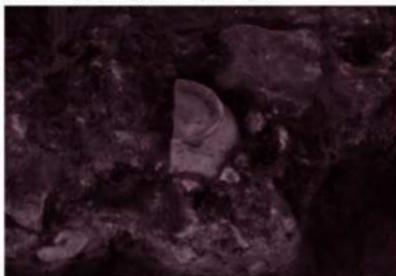
5. E-3区 中世区画溝 SD9067 扇出土状況 (南から)



6. E-3区 中世区画溝 SD9067 杓子出土状況



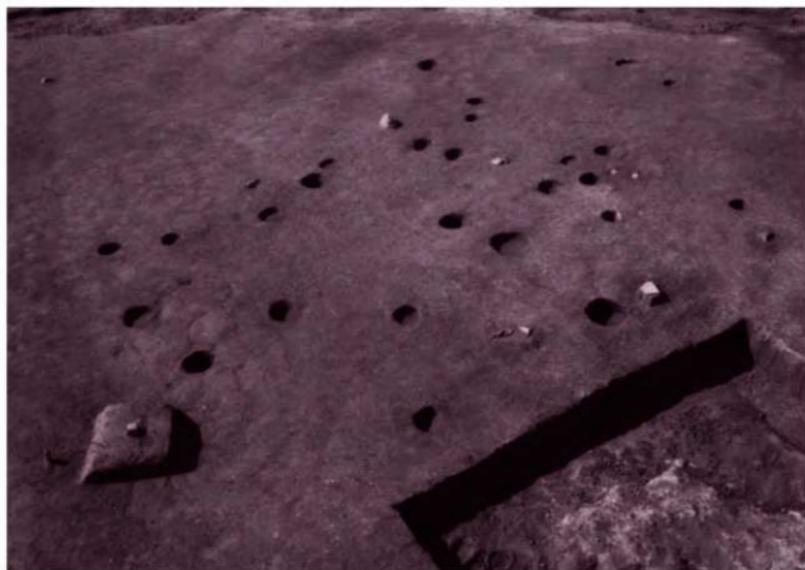
7. E-3区 中世区画溝 SD8183 (西南から)



8. E-2区 中世区画溝 SD3134 山茶碗出土状況



1. E-3 区 中世据立柱建物 SH202 ~ 204 (南東から)

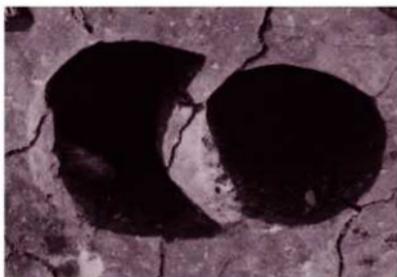


2. E-3 区 中世据立柱建物 SH210 (東から)

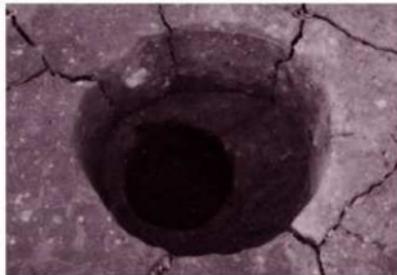
E-3 区



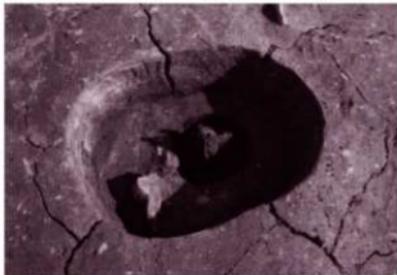
1. E-3 区 中世掘立柱建物 SH202 柱穴 SP8943 (東から)



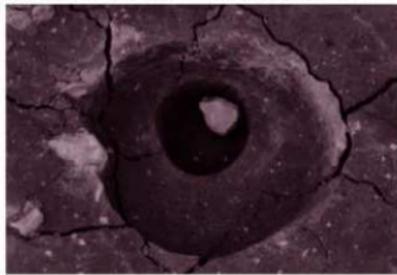
2. E-3 区 中世掘立柱建物 SH203 柱穴 SP8911・SP8912 (東から)



3. E-3 区 中世掘立柱建物 SH203 柱穴 SP8212 (南から)



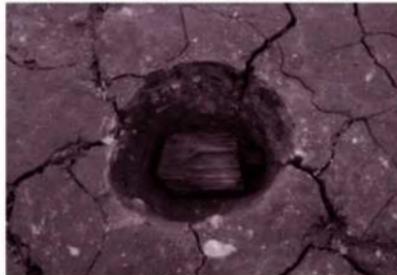
4. E-3 区 中世掘立柱建物 SH203 柱穴 SP8206 (南東から)



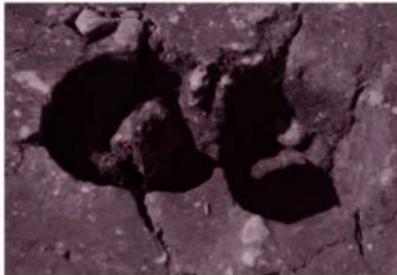
5. E-3 区 中世掘立柱建物 SH203 柱穴 SP8198 (南から)



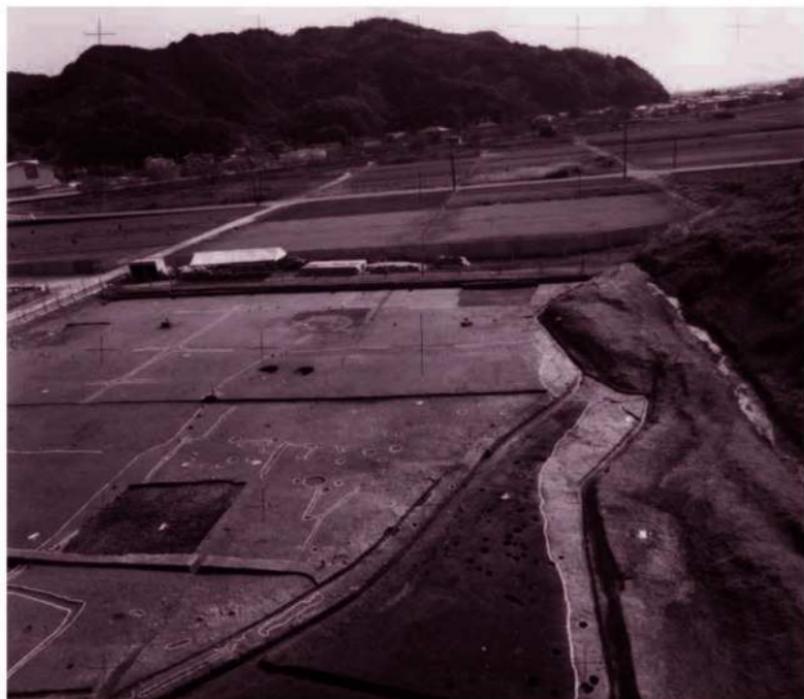
6. E-3 区 中世掘立柱建物 SH203 柱穴 SP8200 (南東から)



7. E-3 区 中世掘立柱建物 SH203 柱穴 SP8199 (東から)



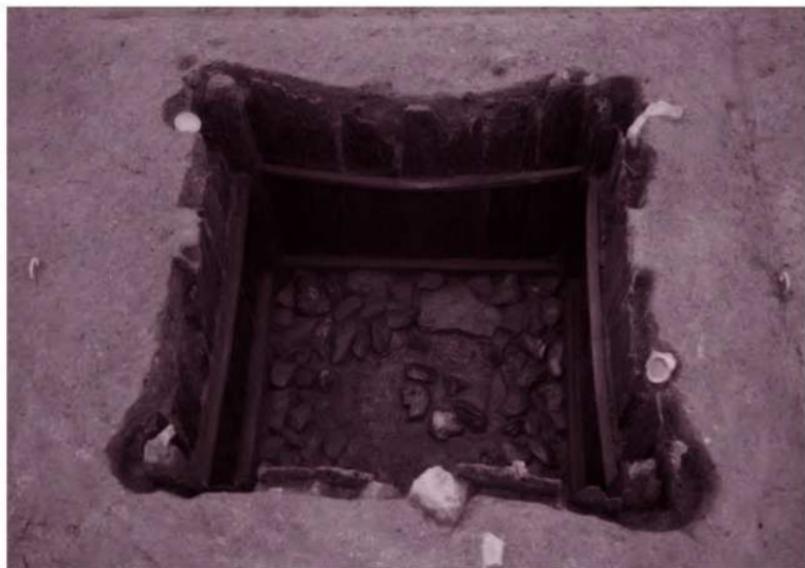
8. E-3 区 中世掘立柱建物 SA203 柱穴 SP8684・SP8683 (東から)



1. A-1 区 中世掘立柱建物 3 群遠景 (北西から)



2. A-1 区 中世掘立柱建物 3 群全景



1. E-3 区 中世井戸 SE8036 (南東から)



2. E-3 区 中世井戸 SE8036 遺物出土状況 (南東から)



3. E-3 区 中世井戸 SE8036 南側支柱木組状況 (北から)



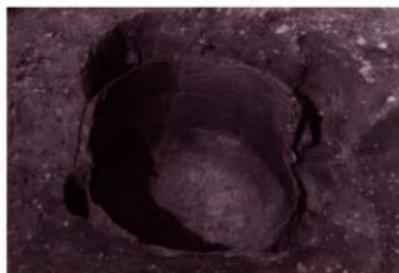
4. E-3 区 中世井戸 SE8036 井戸枠北西面縦板状況 (北西から)



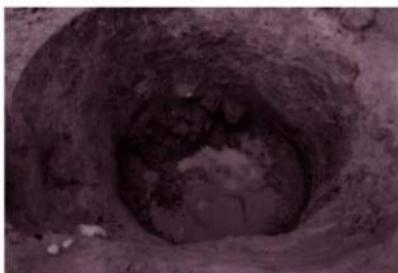
5. E-3 区 中世井戸 SE8036 井戸枠北西面縦板除去後 (北西から)



1. A-1区 中世井戸 SE558 (北から)



2. A-1区 中世井戸 SE559 (南西から)



3. A-1区 中世井戸 SE281 (西から)



4. E-1区 中世井戸 SE169 (西から)



5. E-2区 中世井戸 SE1539 (南から)

図版 30

E-1区・E-3区



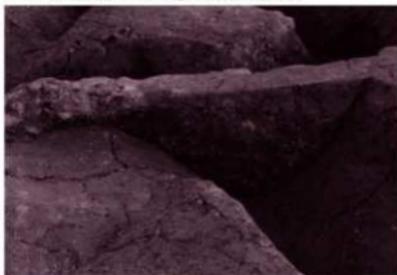
1. E-1区 近世溝 SD118 (北東から)



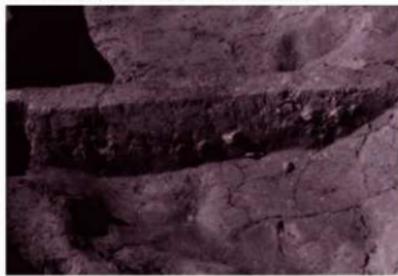
2. E-1区 近世溝 SD118 土鍾出土状況 (東から)



3. E-1区 近世溝 SD118 遺物出土状況 (北西から)



4. E-3区 SR8192 土層断面 (西から)



5. E-3区 SR8192 土層断面 (東から)



6. E-3区 SR-1 遺物出土状況 (南から)



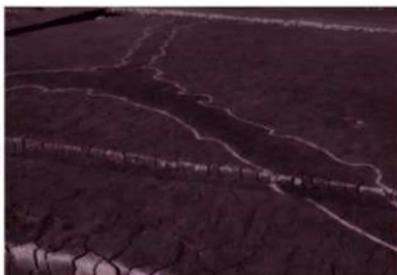
7. E-3区 SR8045 山茶碗出土状況 (西から)



8. E-3区 SR8045 山茶碗出土状況 (東から)



1. E-4 区 中世水田畦畔 SK5001 (南から)



2. E-4 区 中世水田畦畔 (南東から)



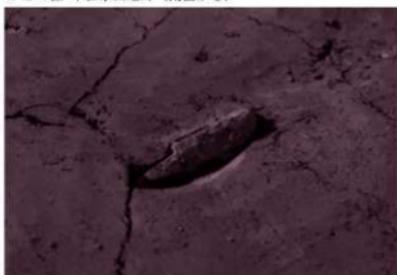
3. E-4 区 中世水田畦畔 SK5001 (南東から)



4. E-4 区 中世水田畦畔 (南西から)



5. E-4 区 中世水田面 (西から)



6. E-4 区 中世水田面 鉄器出土状況



7. E-4 区 中世水田畦畔 馬骨出土状況



8. E-4 区 中世水田面 木製品出土状況

図版 32

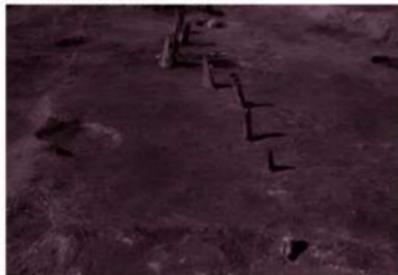
E-1 区



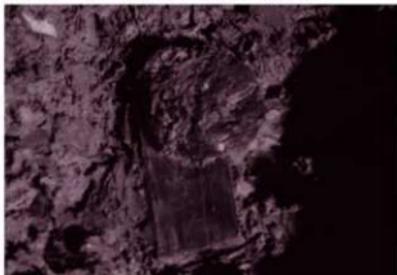
1. E-1 区 近世不明遺構 SX164 (南から)



2. E-1 区 近世不明遺構 SX164 土層断面 (南から)



3. E-1 区 近世不明遺構 SX164 東脇 枕列 (東から)



4. E-1 区 近世不明遺構 SX164 漆検出土状況



5. E-1 区 近世不明遺構 SE103 土層断面 (東から)



6. E-1 区 近世不明遺構 SE102・SE103 土層断面 (西から)



7. E-1 区 近世不明遺構 SE105 土層断面 (東から)



8. E-1 区 近世不明遺構 SE106 土層断面 (南東から)



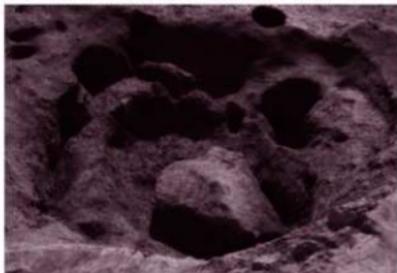
1. E-1区 近世不明遺構 SX212 杭列木組状況 (北から)



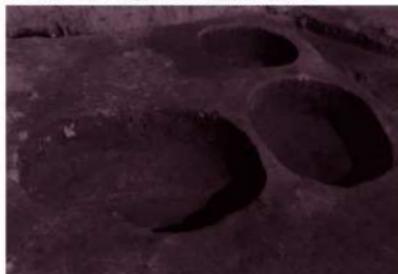
2. E-1区 近世不明遺構 SX212 杭列検出状況 (南東から)



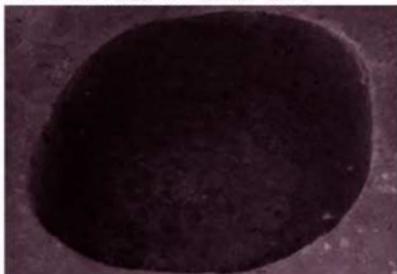
3. E-1区 近世不明遺構 SX212 土層断面 (東から)



4. E-1区 近世不明遺構 SX212 完掘状況 (東から)



5. E-1区 近世不明遺構 SX91~SX94 完掘状況 (南から)



6. E-1区 近世不明遺構 SX94 完掘状況 (南から)



7. E-1区 近世不明遺構 SX214 礎検出状況 (南から)



8. E-2区 近世不明遺構 SX3818 礎検出状況 (北東から)

図版 34

A-1 区



1. A-1 区 奈良～平安時代糸里水田遠景（南東から）



2. A-1 区 奈良～平安時代糸里水田全景



1. A-1 区 奈良～平安時代条里水田近景（東から）



2. A-1 区 条里水田大畦畔及び杭列 A556（南から）



3. A-1 区 条里水田大畦畔及び杭列 A556・A557（南から）



4. A-1 区 条里水田大畦畔 A557 流木出土状況（南から）



5. A-1 区 条里水田大畦畔 A557 大畦畔土層断面（南から）



1. A-2 区 奈良～平安時代条里水田遠景（北東から）



2. A-2 区 奈良～平安時代条里水田全景



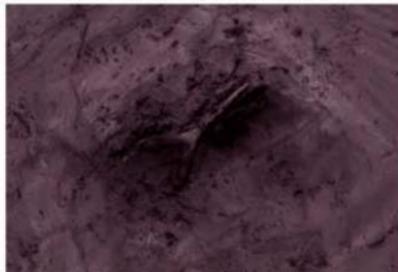
1. A-2 区 奈良～平安時代条里水田近景（北東から）



2. A-2 区 奈良～平安時代条里水田大畦畔（東から）



3. A-2 区 奈良～平安時代条里水田大畦畔 木製品出土状況（南から）



4. A-2 区 条里水田面 鉄鍬出土状況（南から）



5. A-2 区 奈良～平安時代条里水田大畦畔上の柱穴完掘状況（西から）



1. E-4区 奈良～平安時代桑里水田遠景（南西から）



2. E-4区 奈良～平安時代桑里水田全景



1. E-4 区 奈良～平安時代条里水田畦畔 (南から)



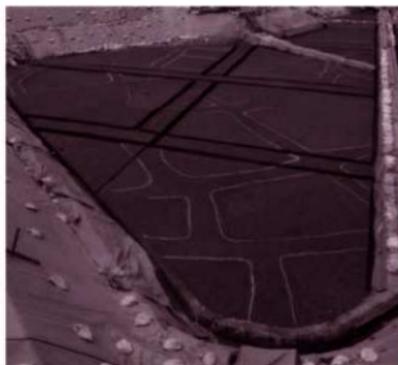
2. E-4 区 奈良～平安時代条里水田畦畔 (南から)



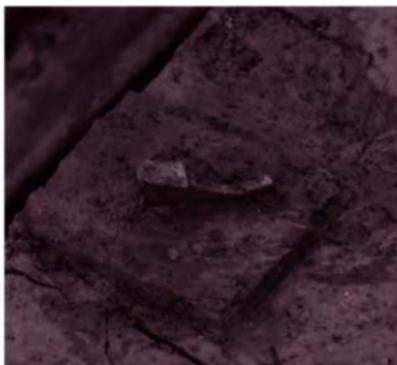
3. E-4 区 奈良～平安時代条里水田畦畔 (南から)



4. E-4 区 奈良～平安時代条里水田畦畔 (南から)



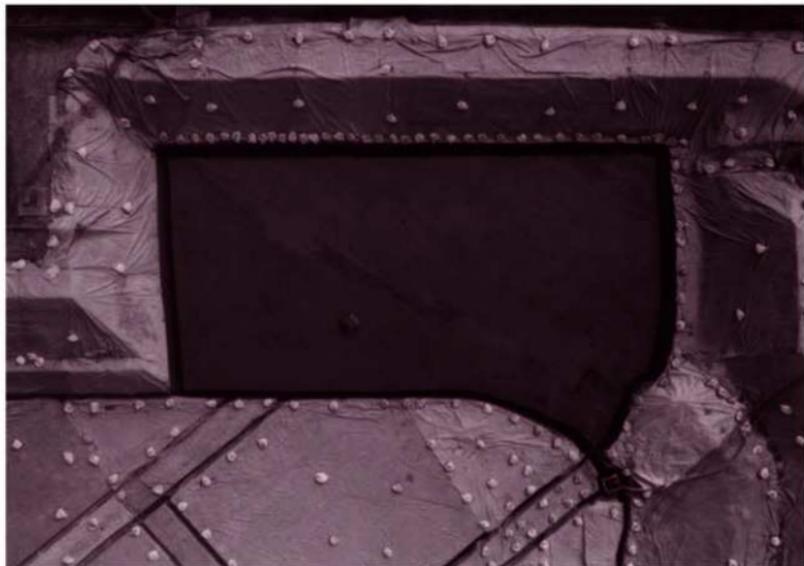
5. E-4 区 奈良～平安時代条里水田畦畔 (東から)



6. E-4 区 条里水田面 土師器臺出土状況 (南西から)

图版 40

E-5区①・C区



1. E-5区① 奈良～平安時代奈良水田全景



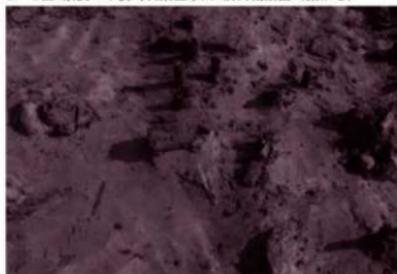
2. C区 奈良～平安時代奈良水田全景



1. C区 奈良～平安時代条里水田近景（南から）



2. C区 奈良～平安時代条里水田 杭列縦断面（東から）



3. C区 奈良～平安時代条里水田杭列 刀子出土状況（西から）



4. C区 奈良～平安時代条里水田杭列（西から）

図版 42

A-1 区



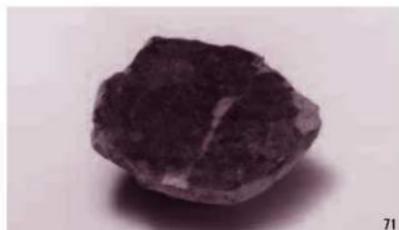
1. A-1 区 中世道路遺構全景 A531・A534



2. A-1 区 中世道路遺構近景 A531 (北東から)



3. A-1 区 中世道路遺構近景 A534 (北東から)



71



3



75



2



83



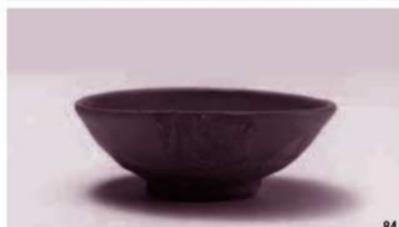
13



80



17



84

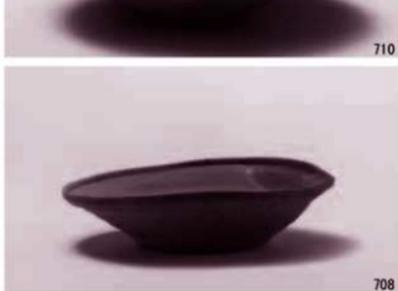


15

I 群区面清 S0937·清·流路出土土器

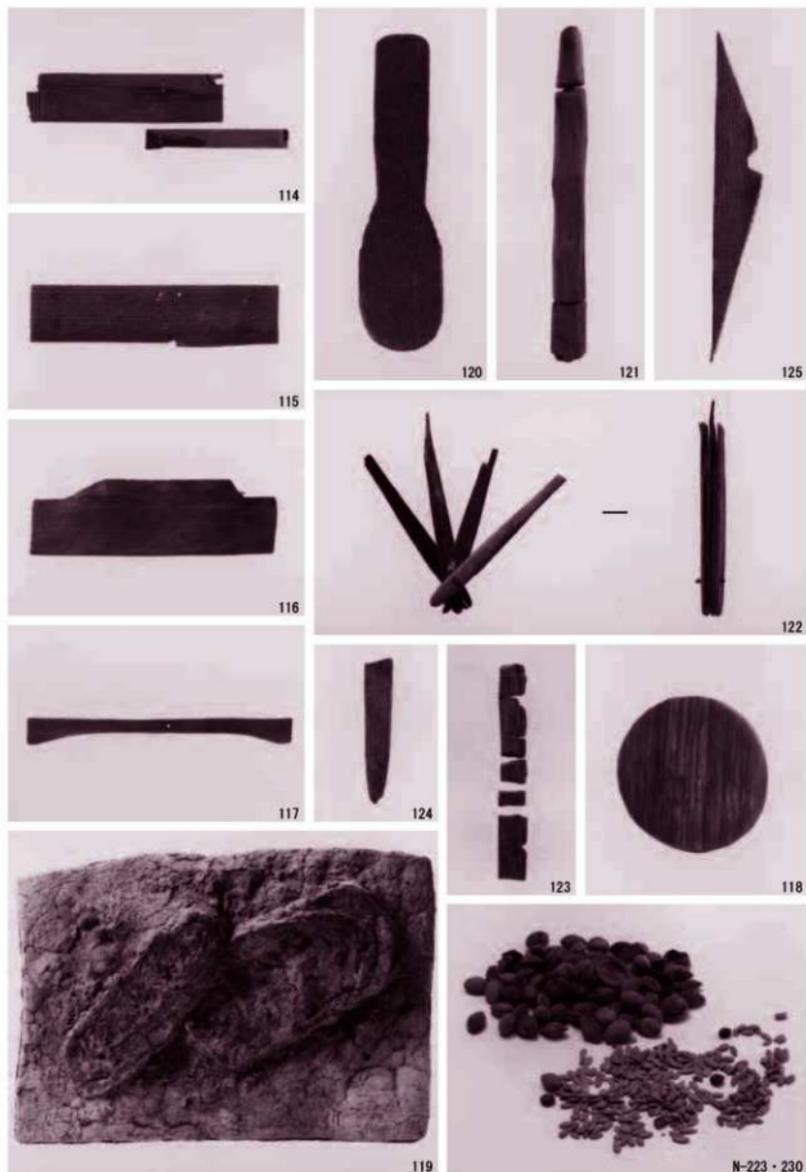
图版 44





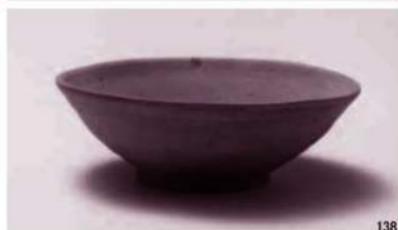
1 群区面清 S02679 · 2 群流路 · 出土土器

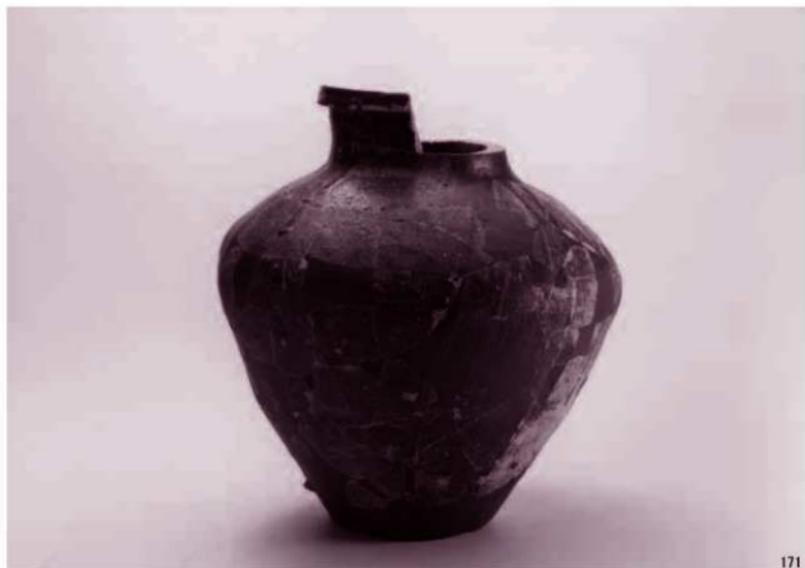




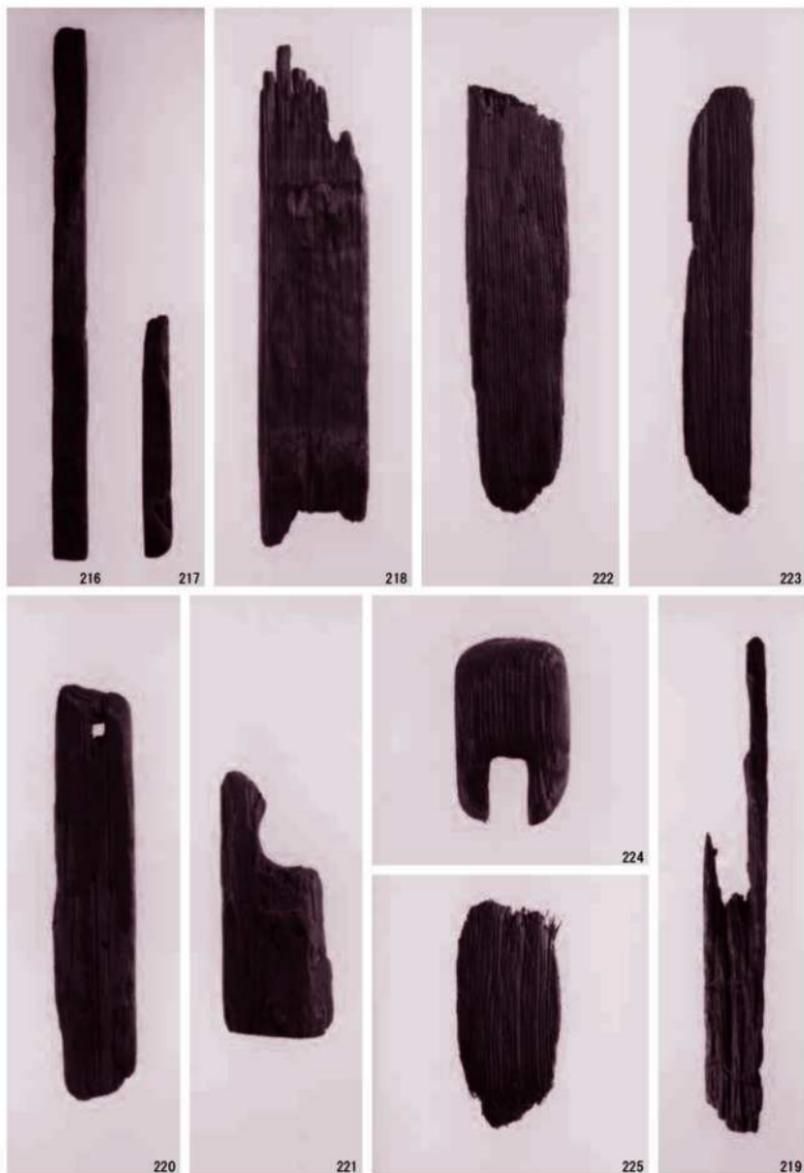
2 群区面溝 S09067 出土木製品・自然遺物

图版 48

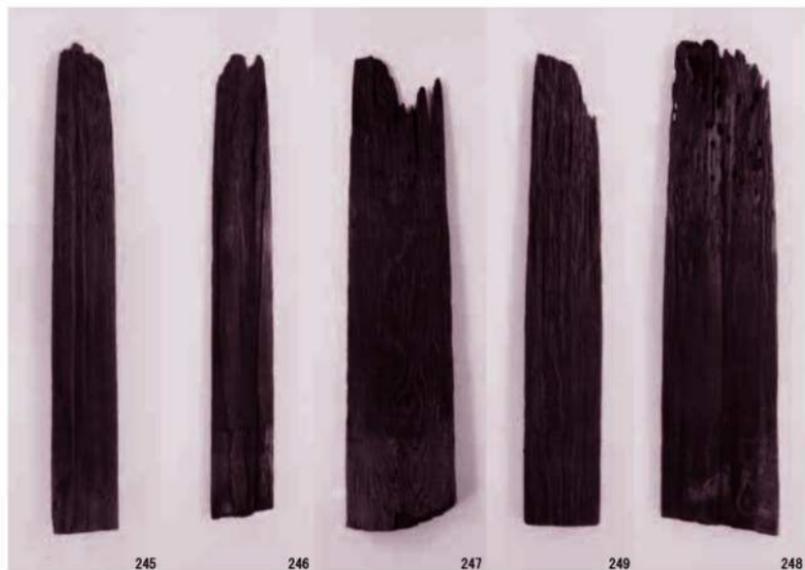




图版 50

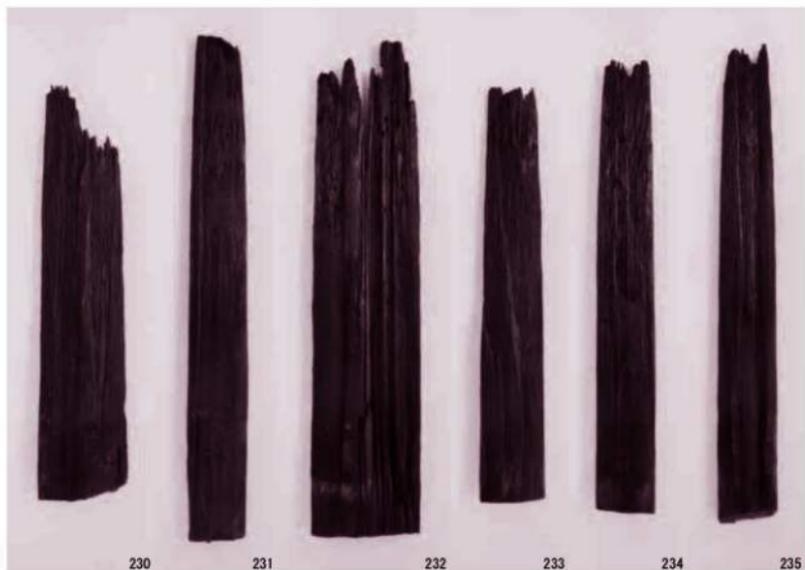
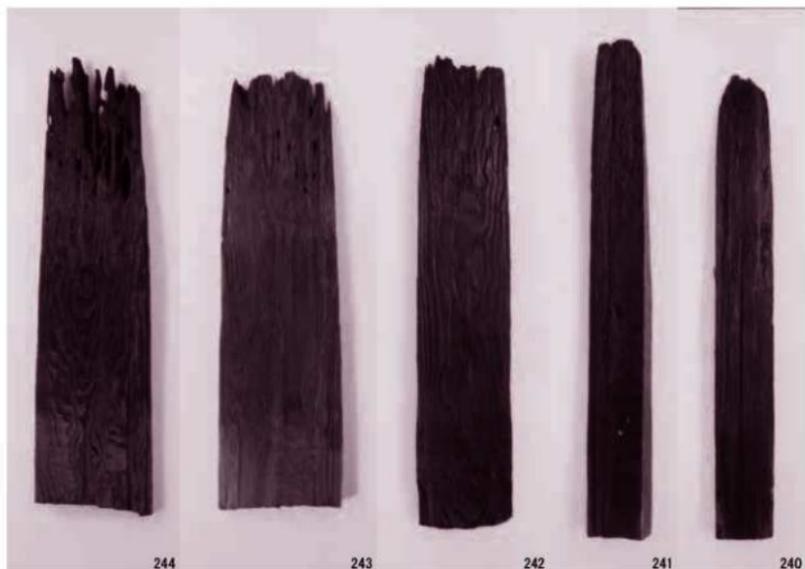


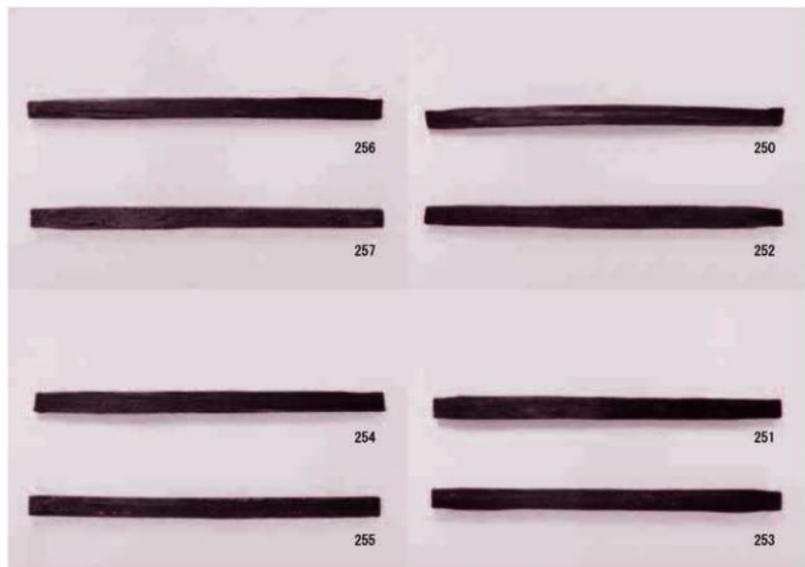
条里哇畔 SK583 · SK9 出土木製品

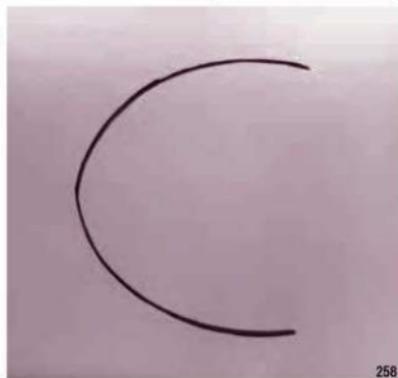
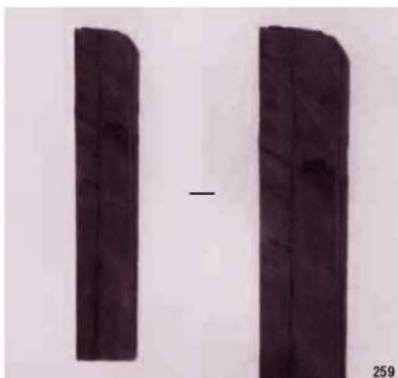
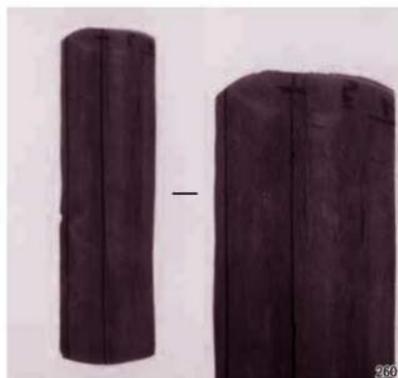
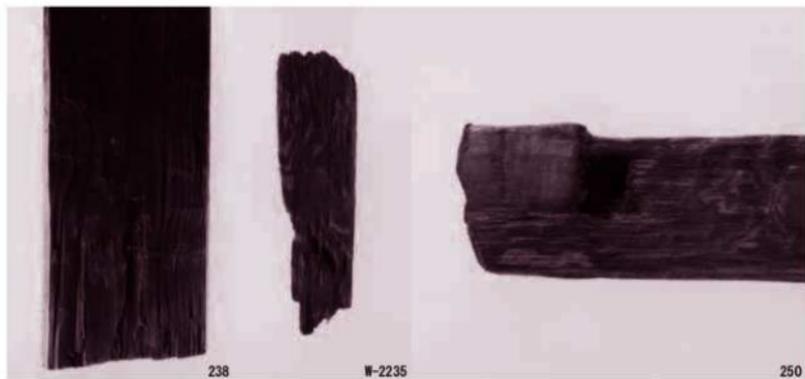


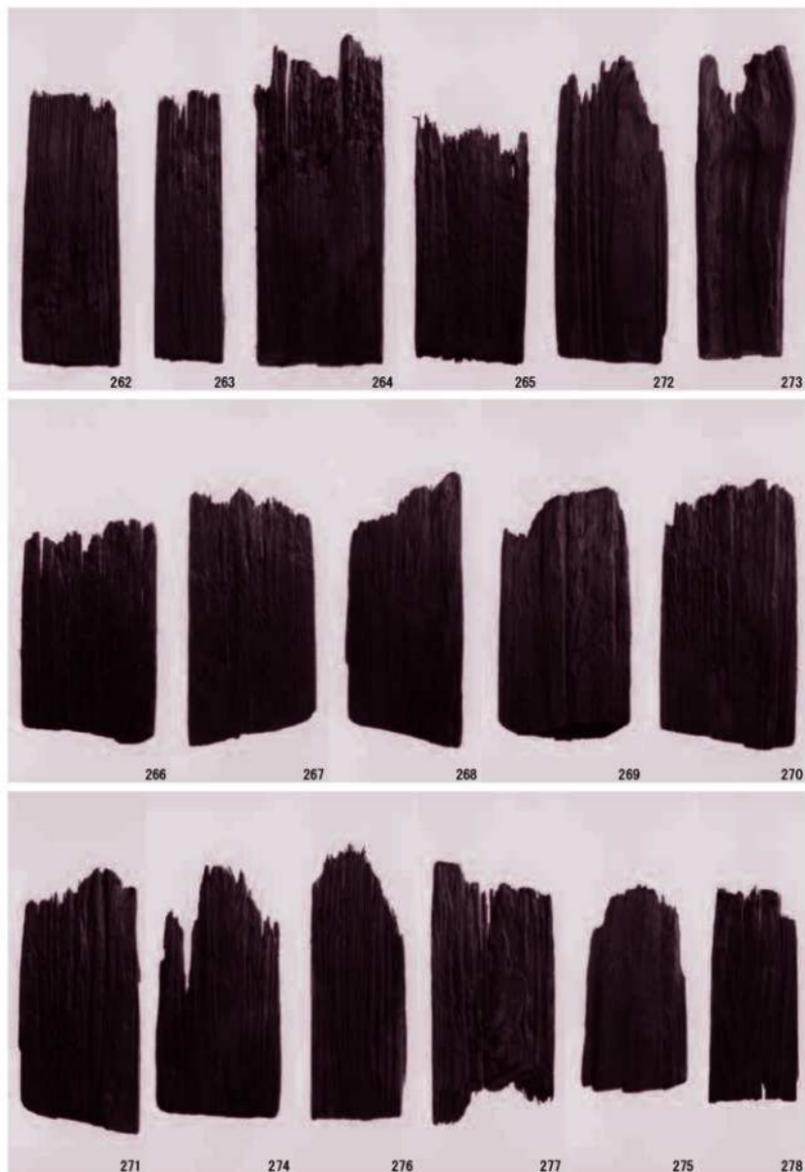
2 群井戸 SE8036 出土木製品 1

图版 52

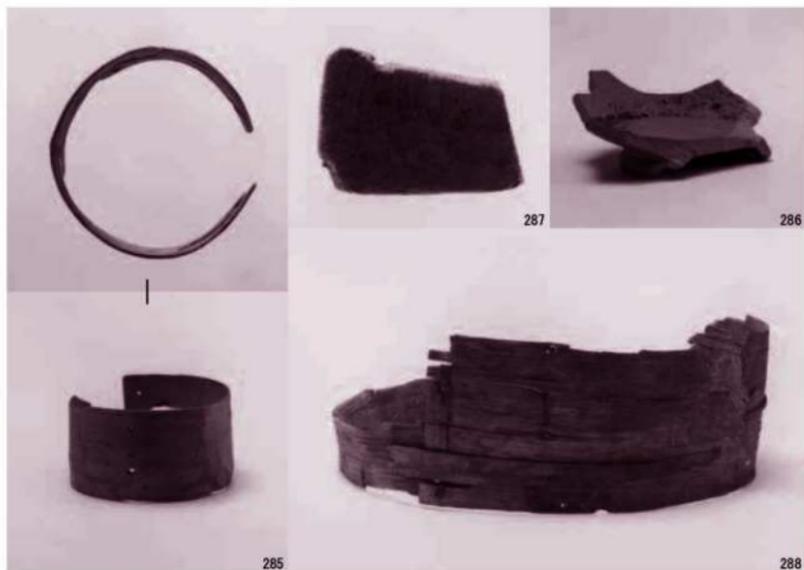
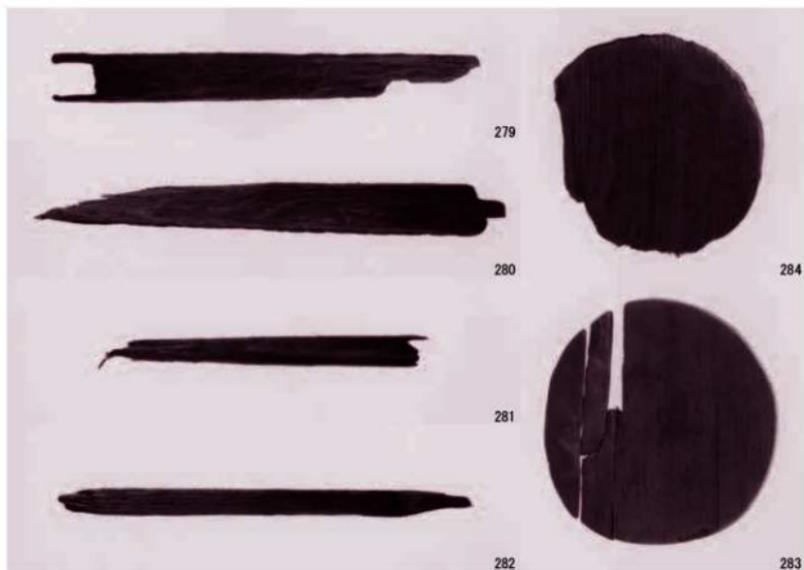








2 群井戸 SE558 出土木製品

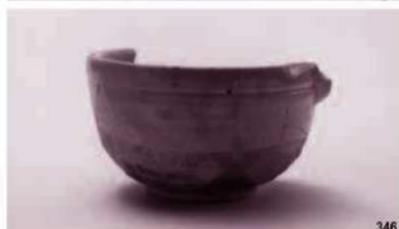


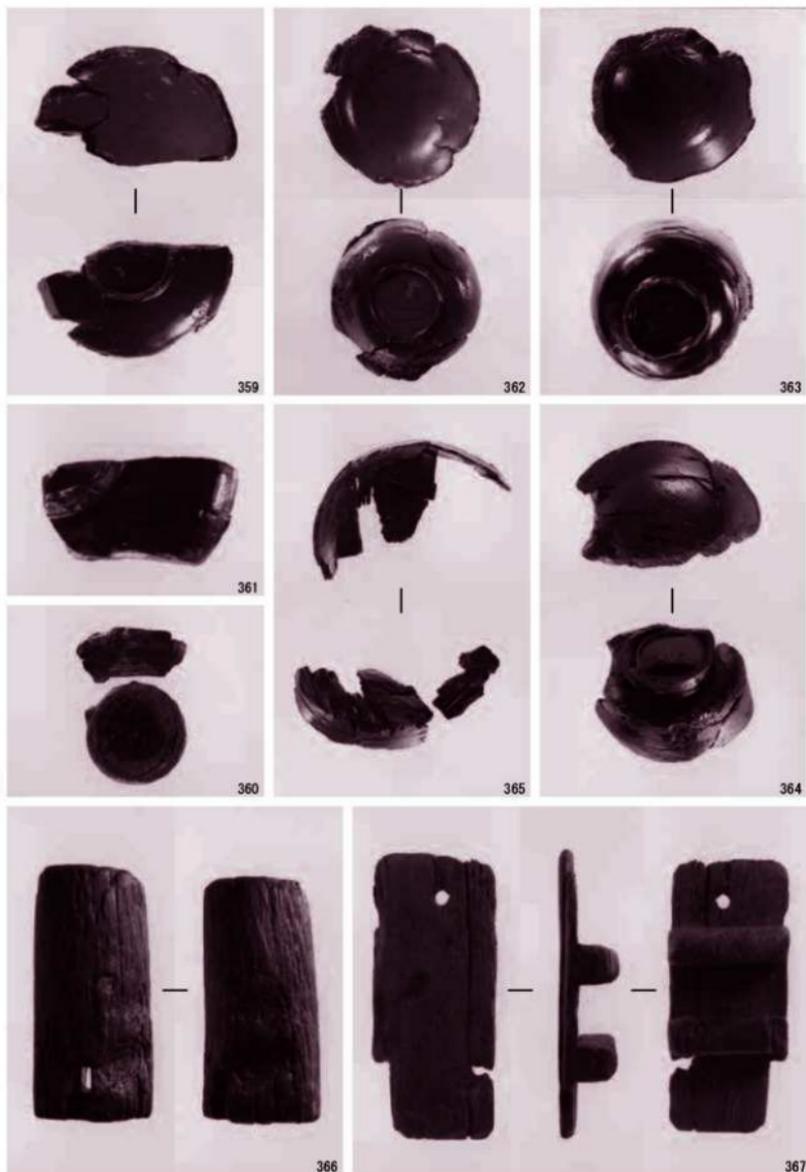
3 群井戸 SE558・SE281・SE559 出土木製品



図版 58









414



658



415



657



464



662



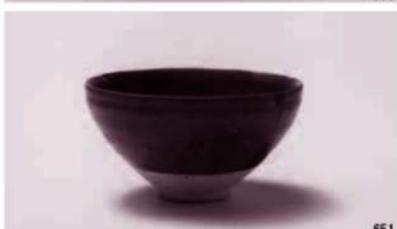
462



578

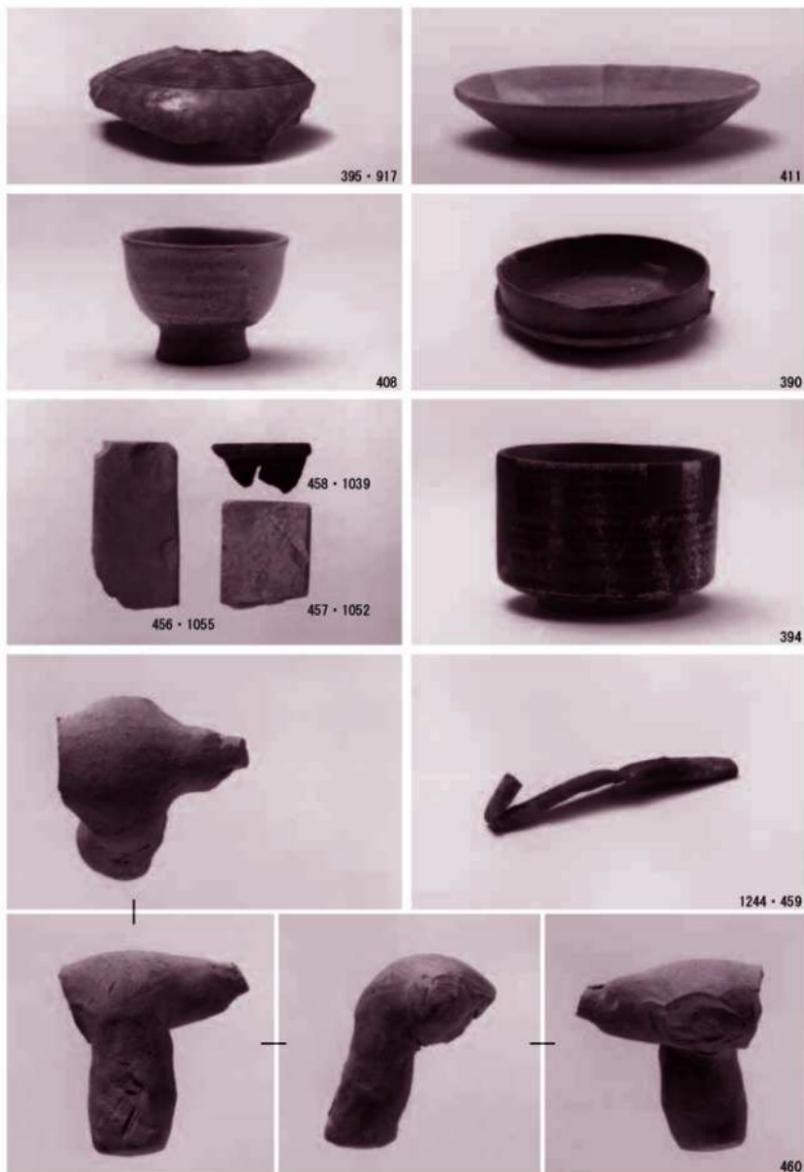


465

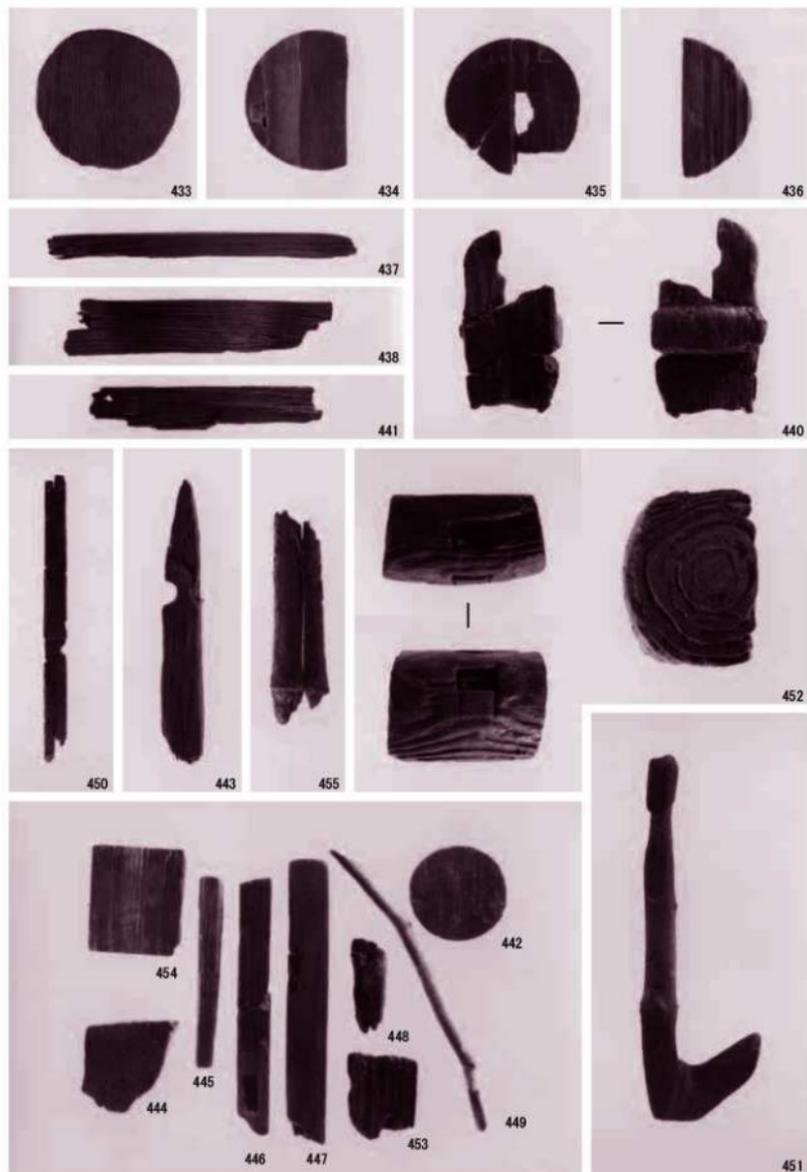


651

図版 62



SX205 出土土器・石製品・土製品・金属製品



SX205 出土木製品





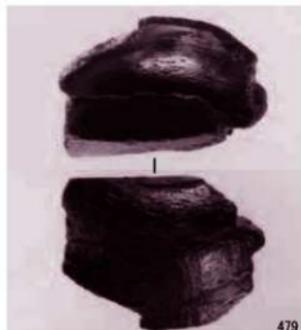
475



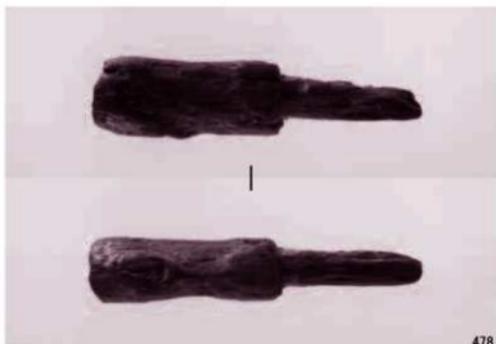
477



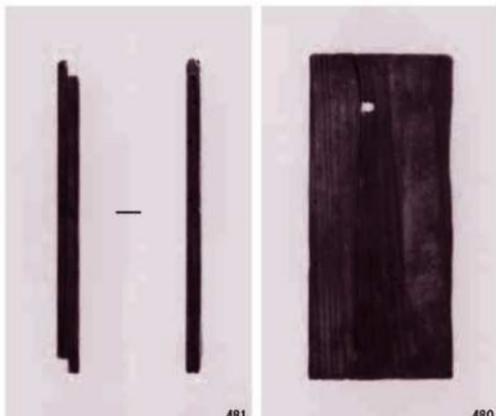
476



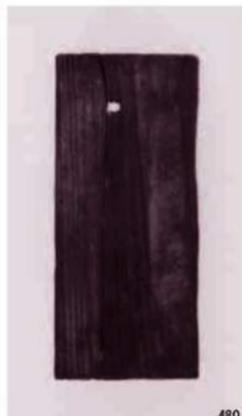
479



478



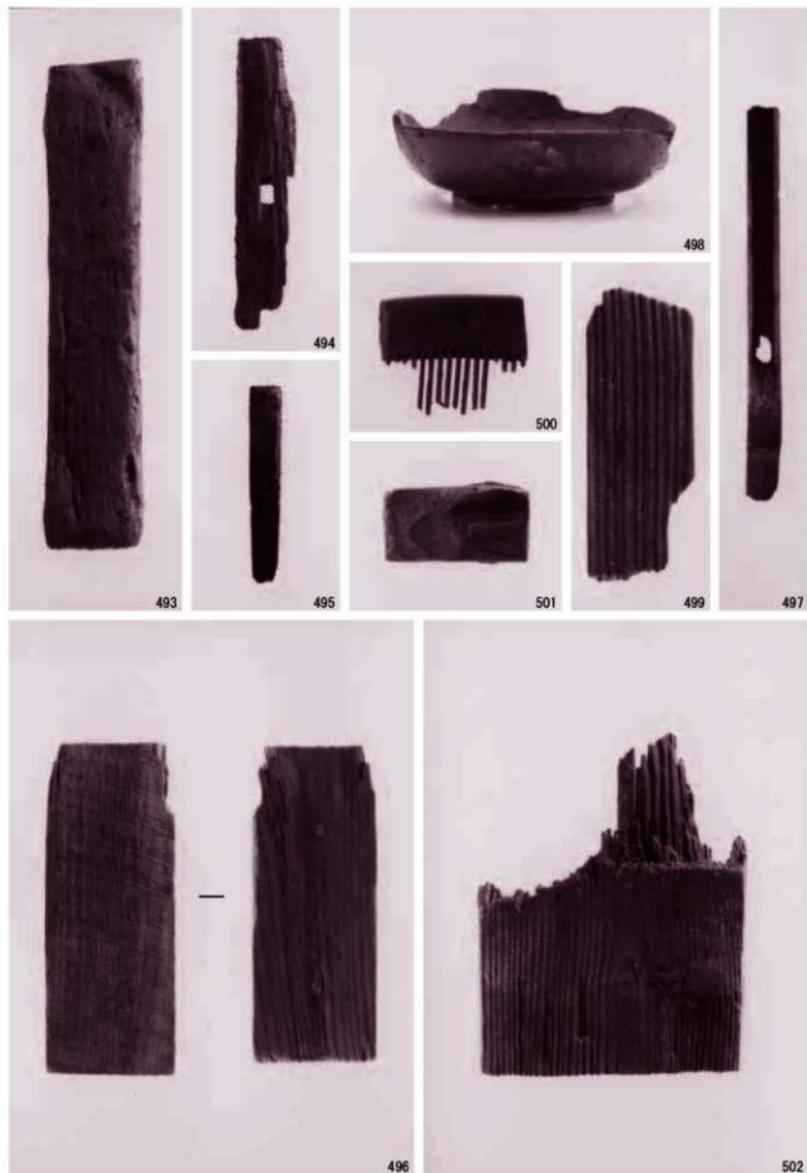
481

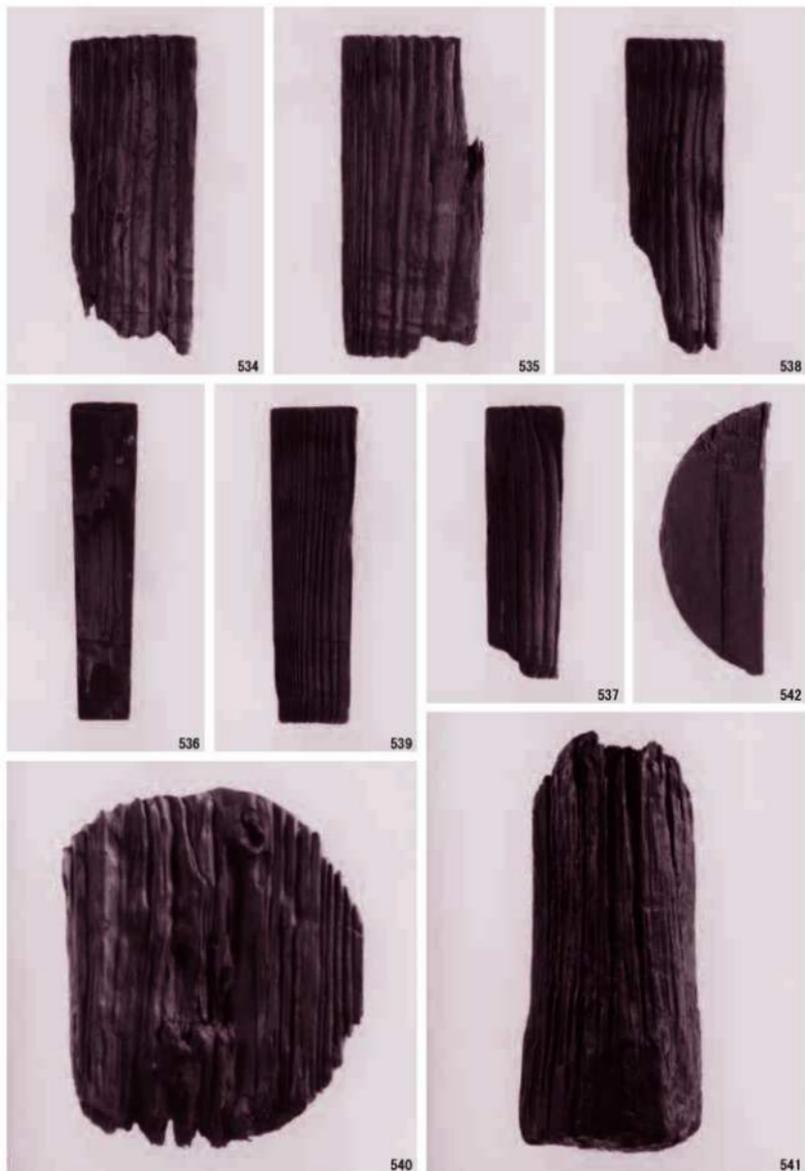


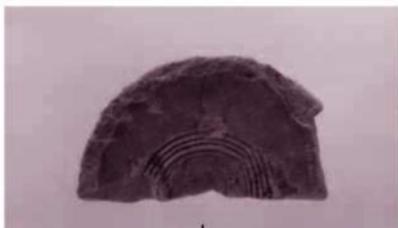
480

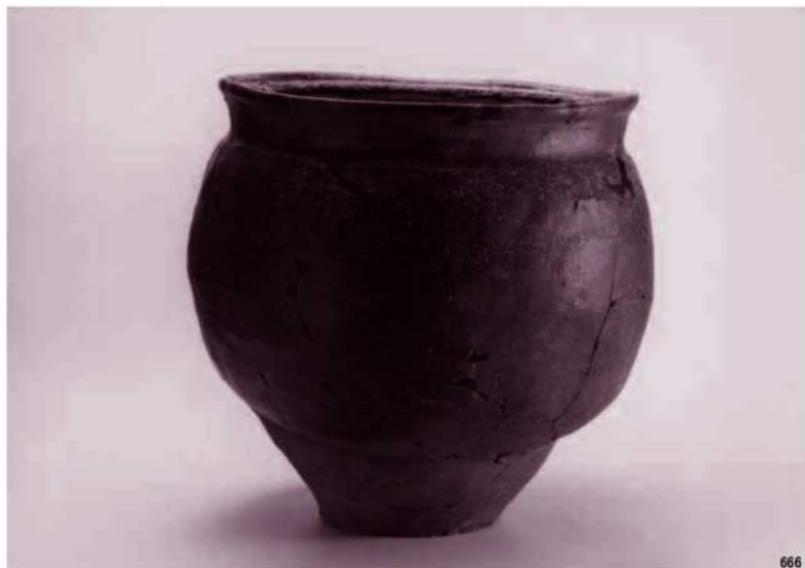


PT-24-25-38







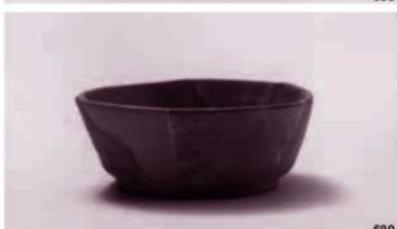
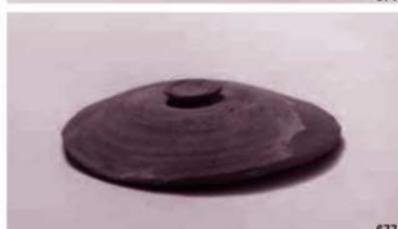
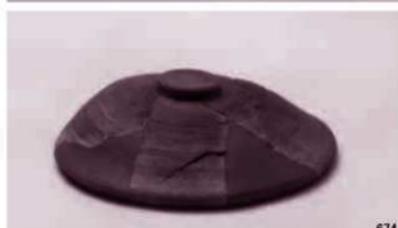
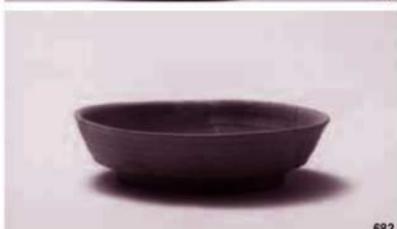
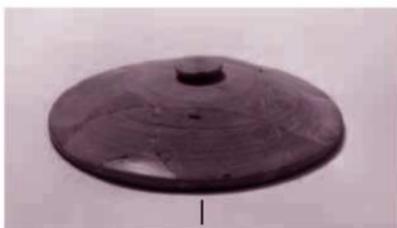


666

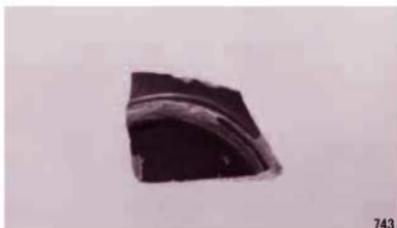
1. 包含层出土近世陶器 2



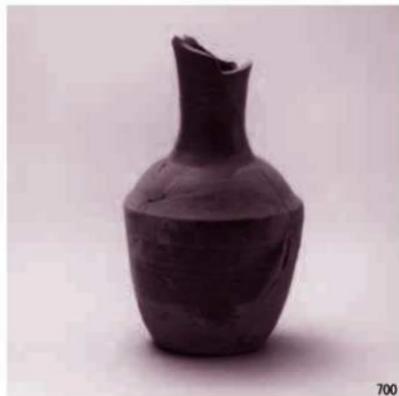
2. 包含层出土渥美产陶器

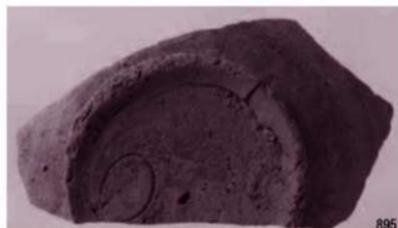


包含層出土須惠器 1



包含層出土須惠器 2・灰釉陶器・緑釉陶器





包含层出土山茶碗 1

图版 74



包含層出土山茶碗 2



793



777



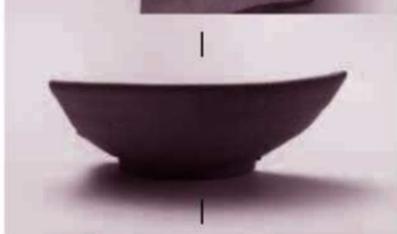
791



784



785



787



801





826



833



827



835



829



837



831



838

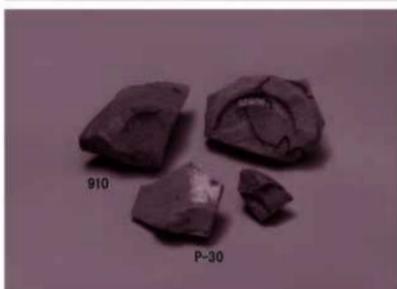
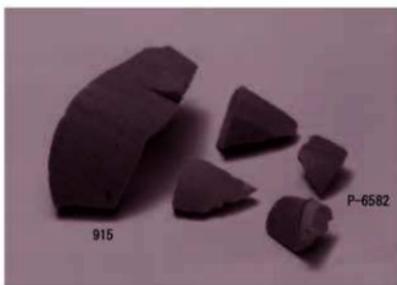


832



839

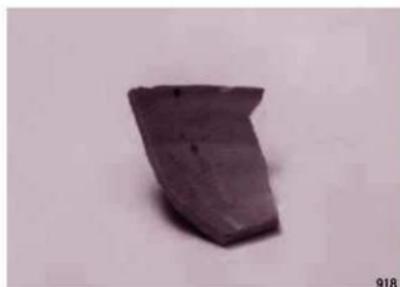




出土輸入陶磁 1



出土輸入陶磁 2



918



930



372



左 P-6233
中 P-2209
右 P-11311

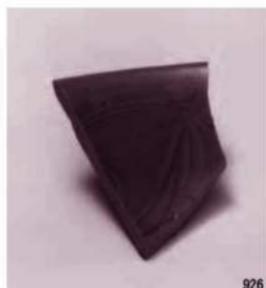


913

914



483 · 912



926

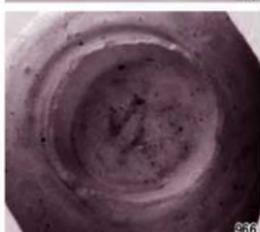
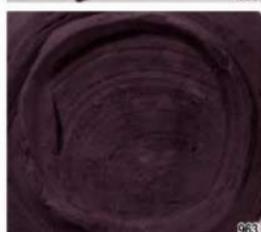
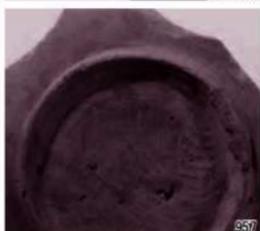
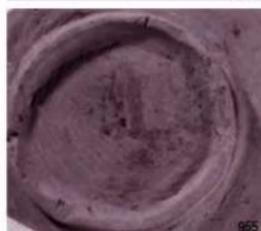
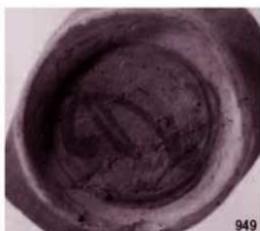
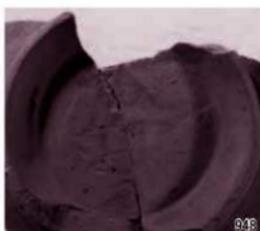


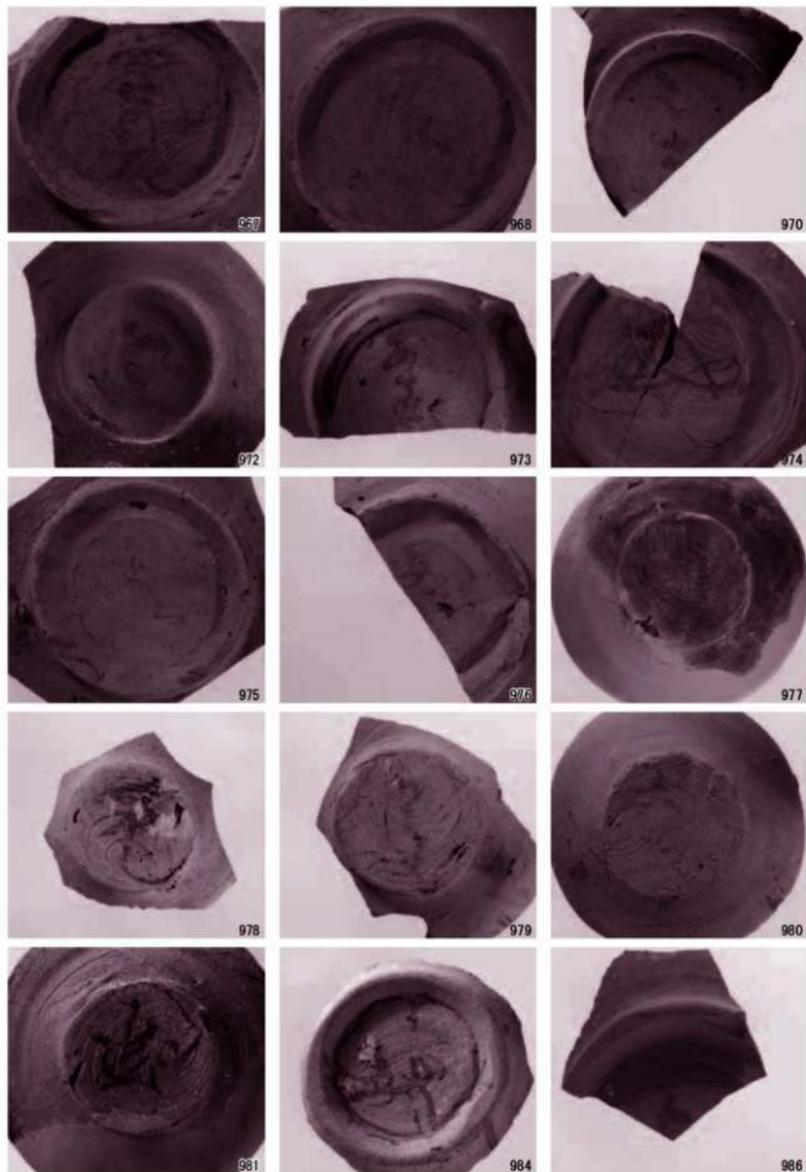
927



P-7596

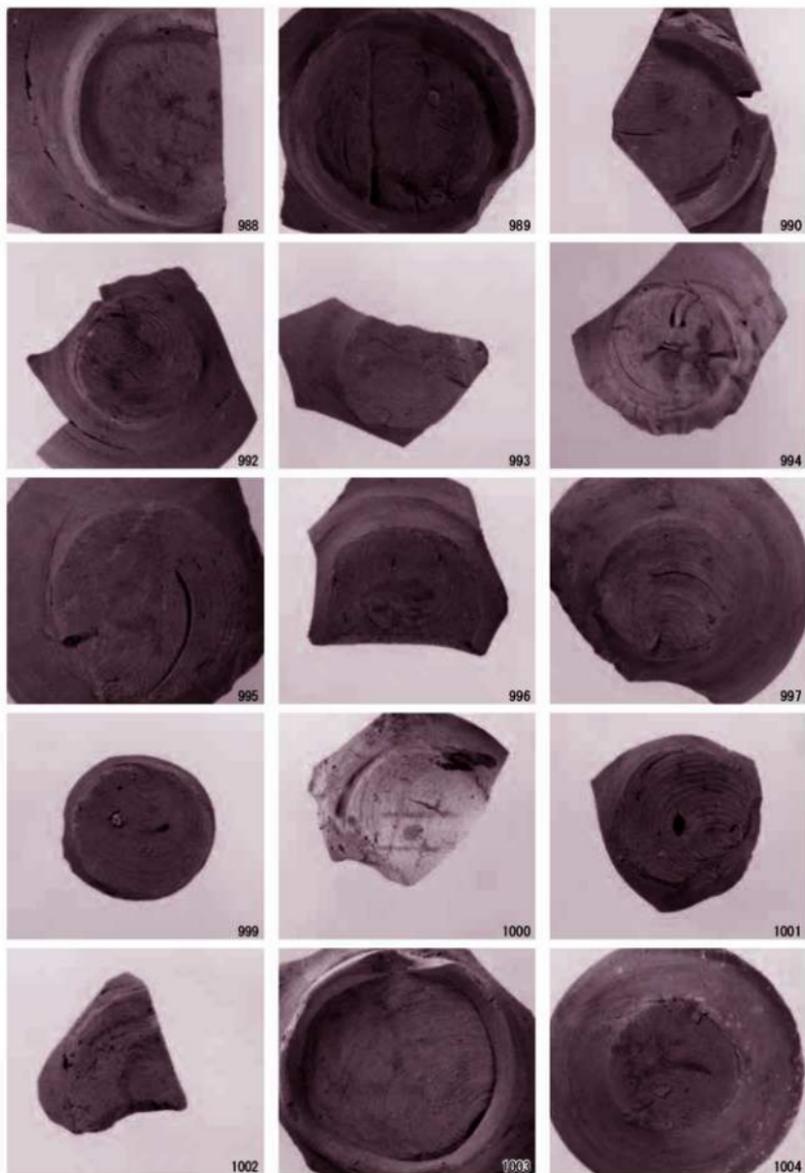
图版 82



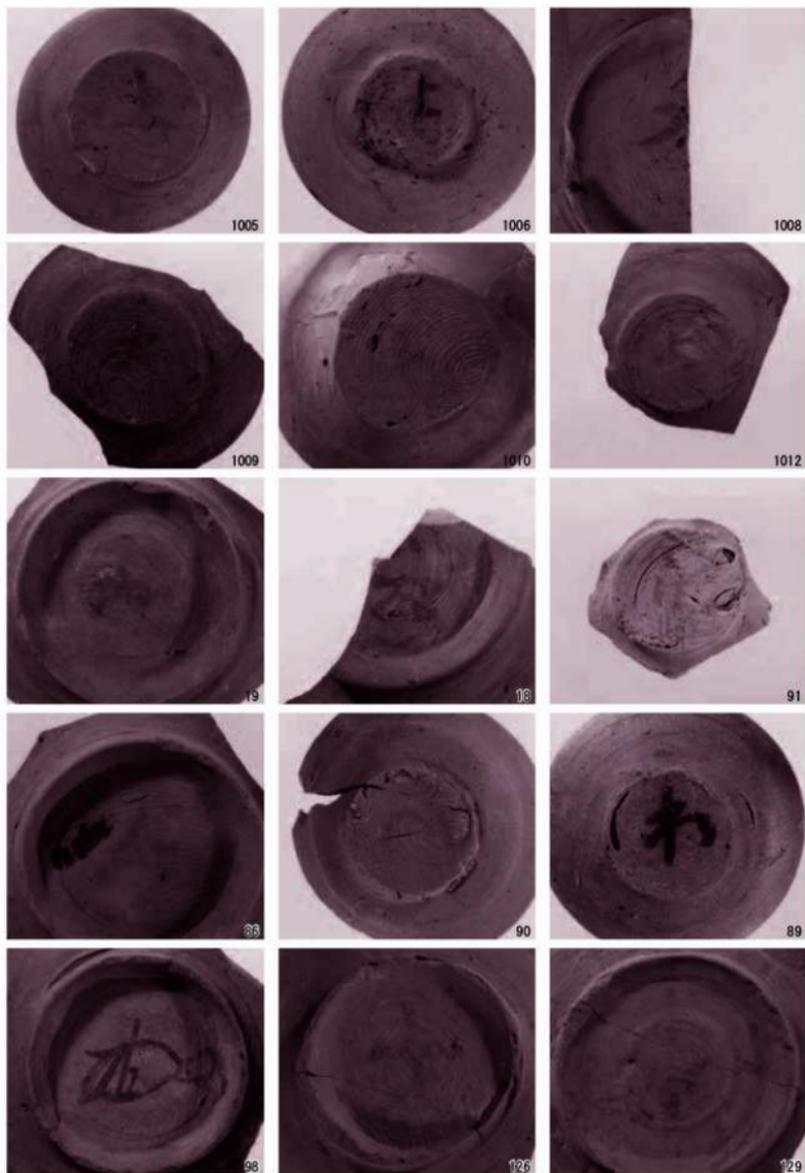


出土黑陶土器 2

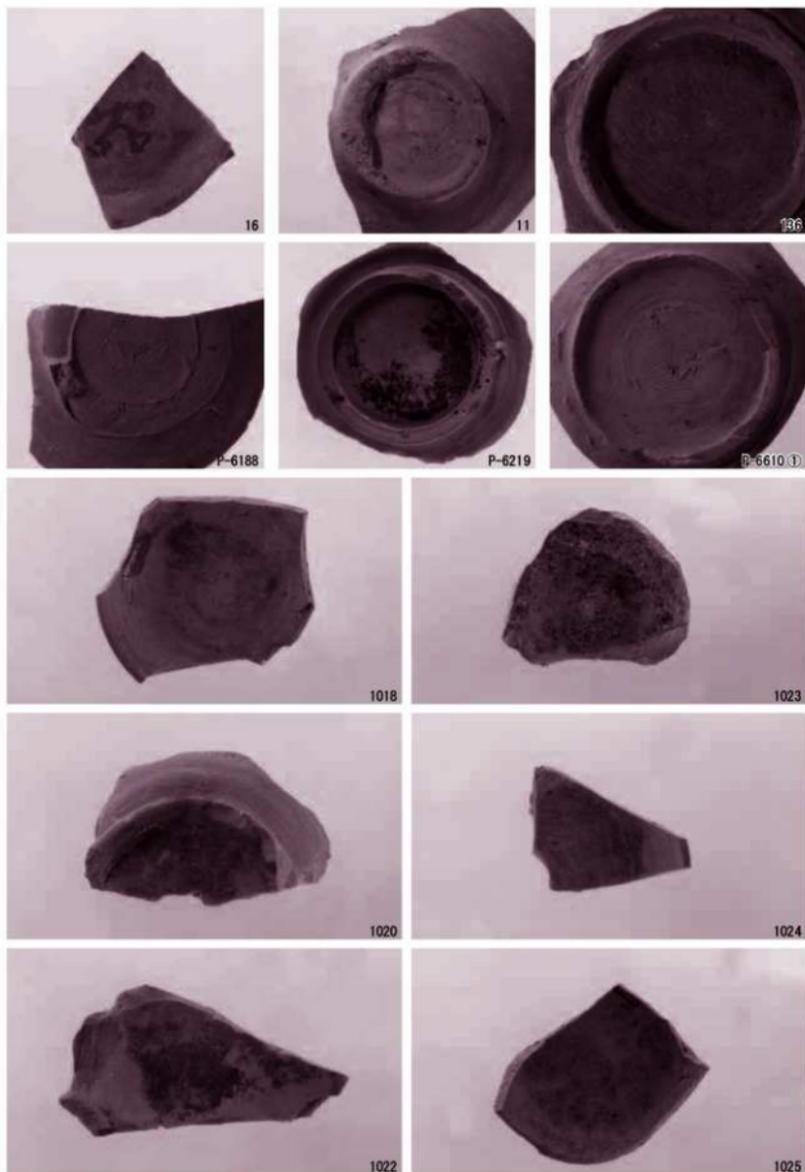
图版 84



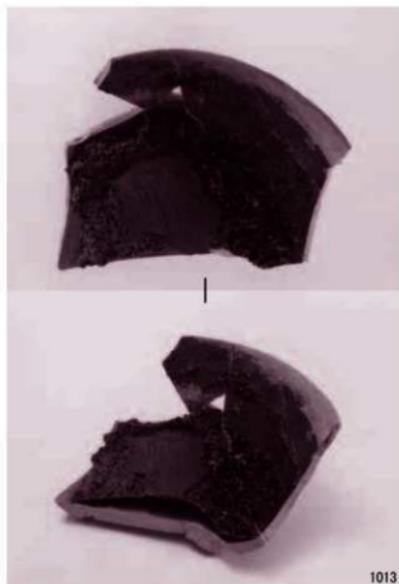
出土黑陶土器 3



出土黑陶器 4



出土墨書土器 5・灯明皿・乾用碗 1



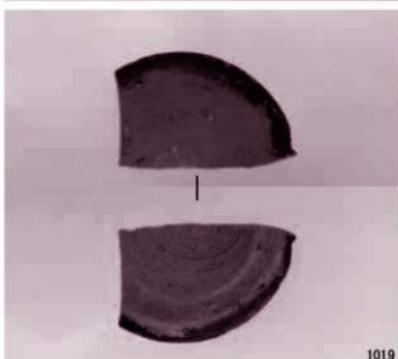
1013



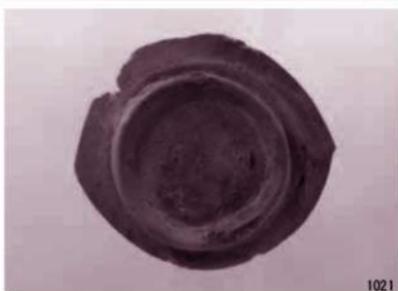
1017



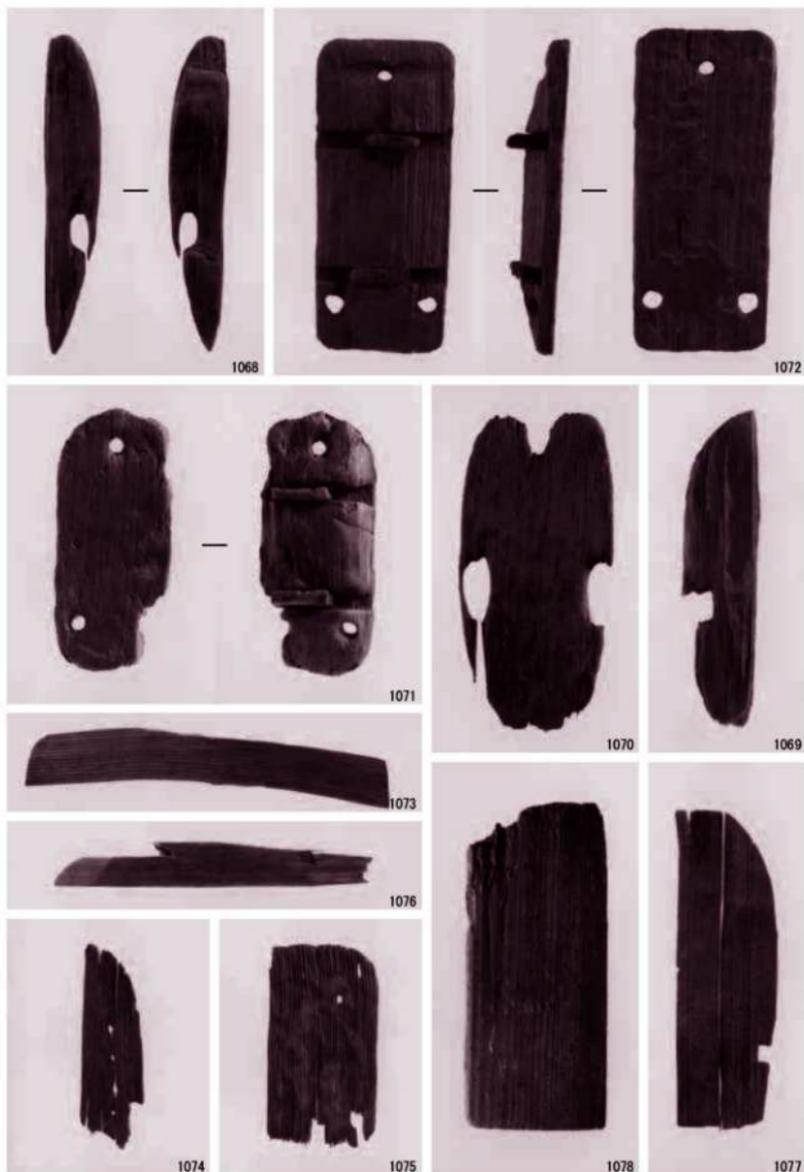
1014



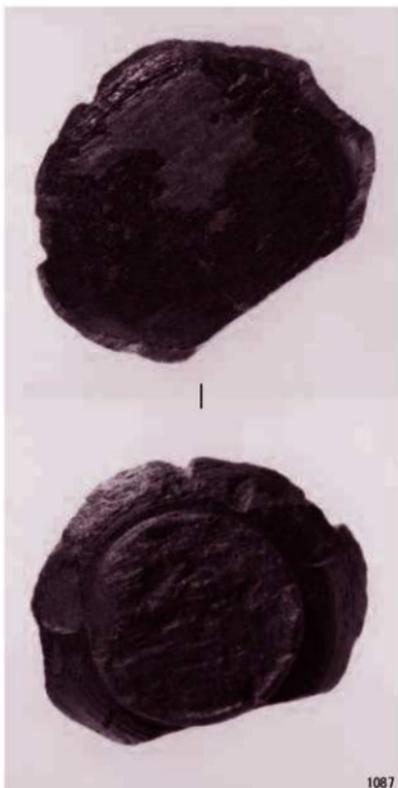
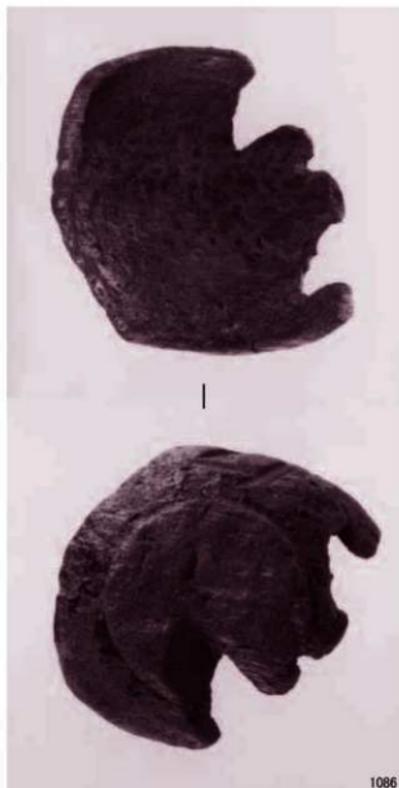
1019



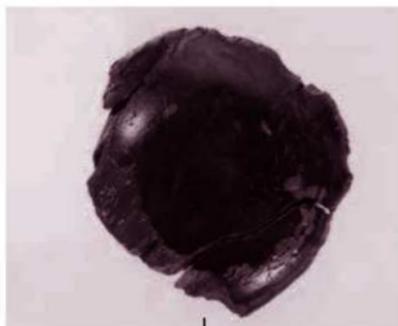
1021



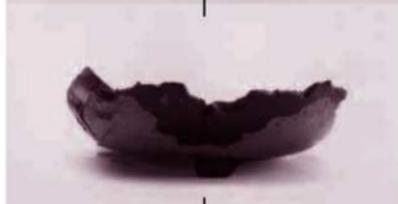
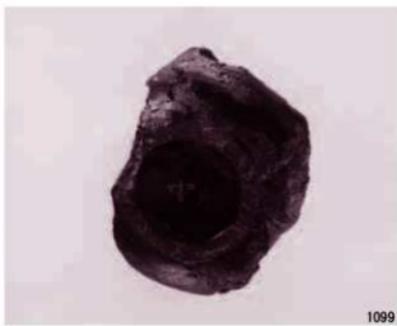
包含層出土下駄・折敷・金剛草履（中～近世）



包含层出土漆棺槌 1 (中~近世)



1099



1097



1096



1097



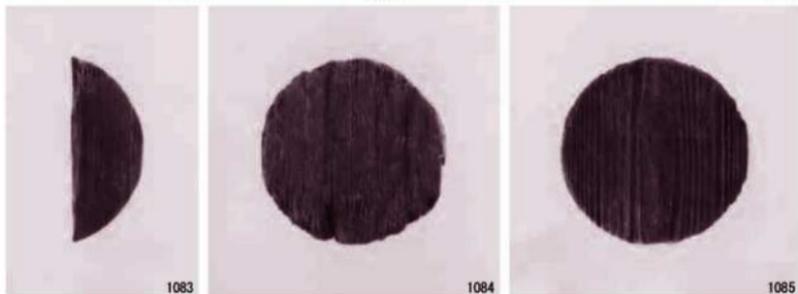
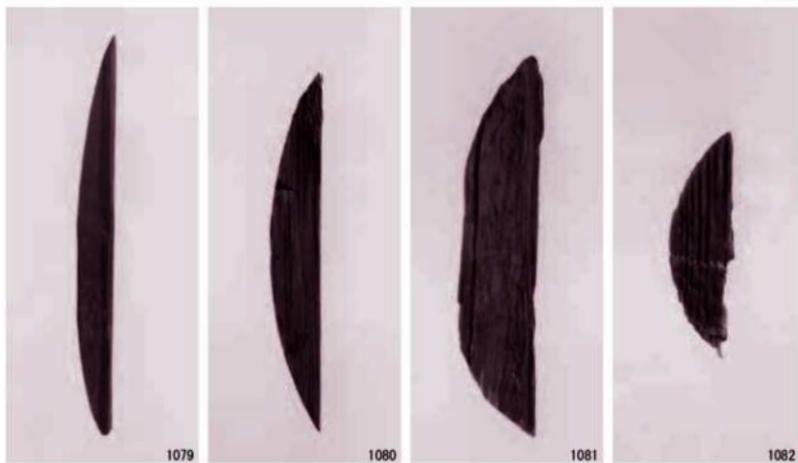
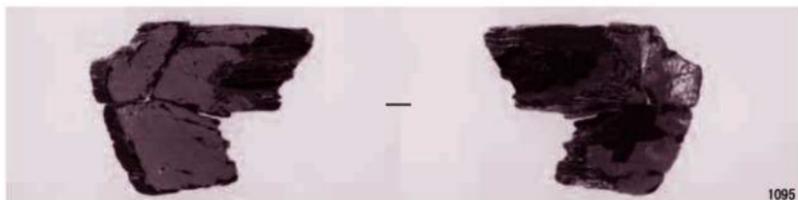
1094



1096



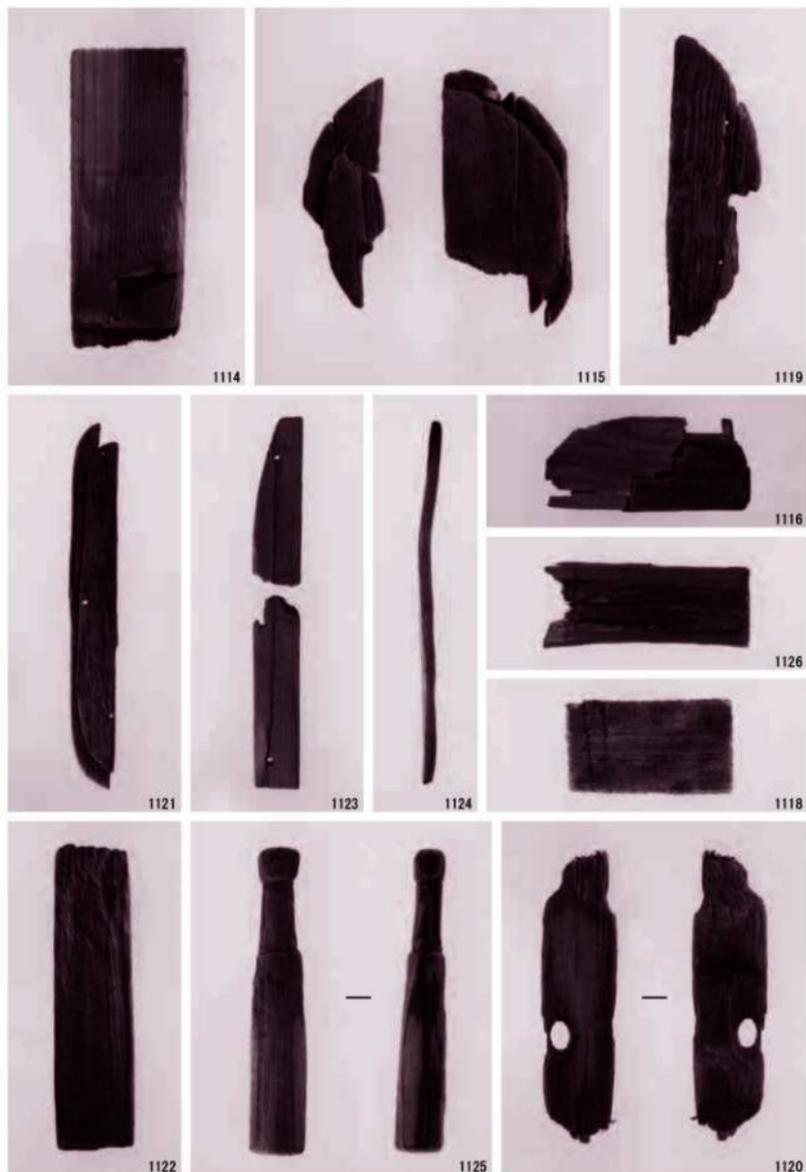
1093



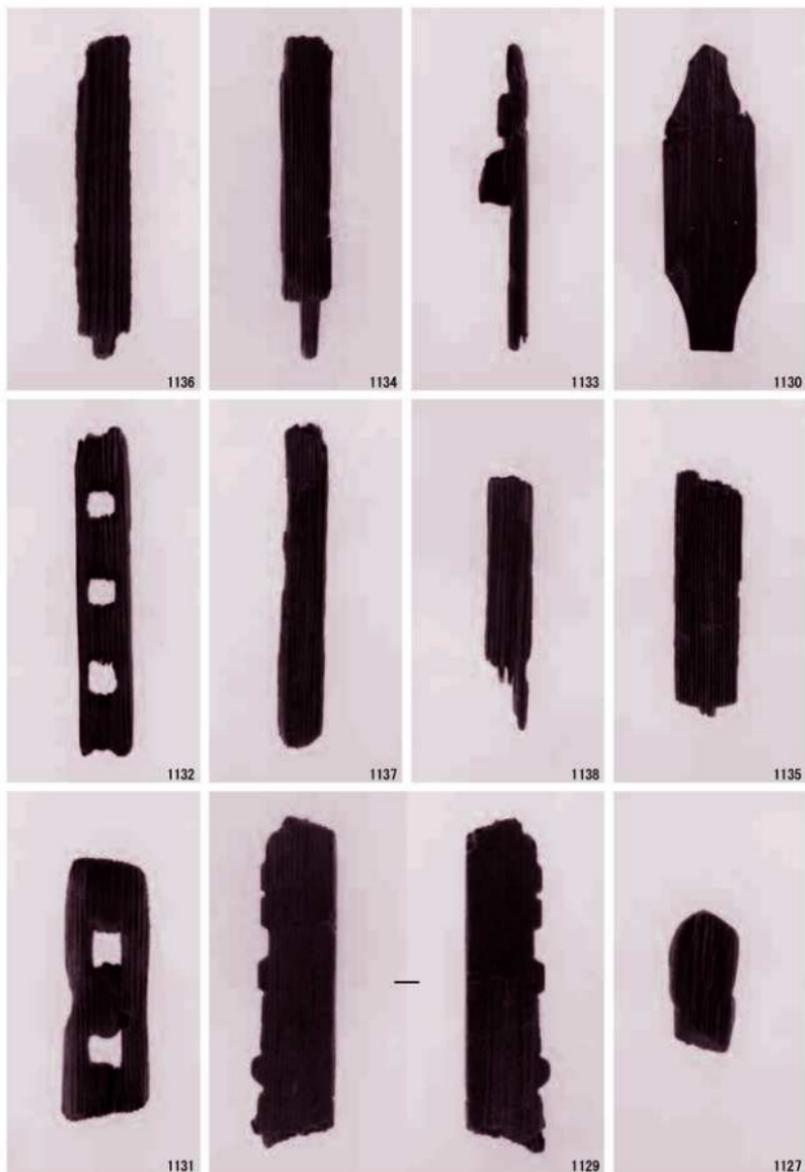
包含層出土漆棺他 3・曲物（中～近世）



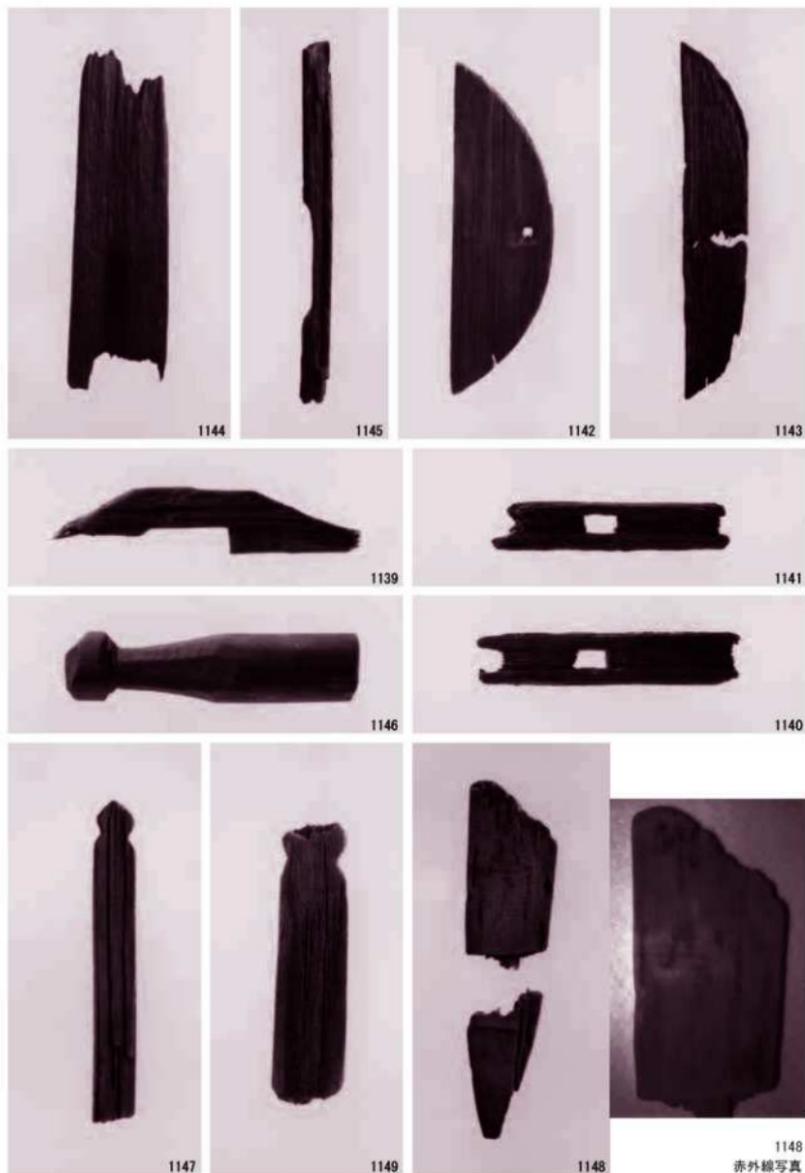
包含層出土用途不明木製品（中～近世）



7層出土木製品 (平安~中世)

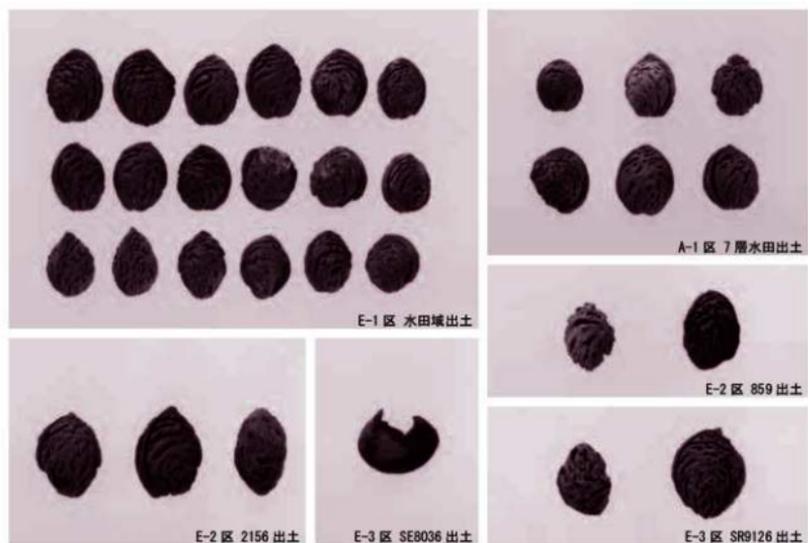
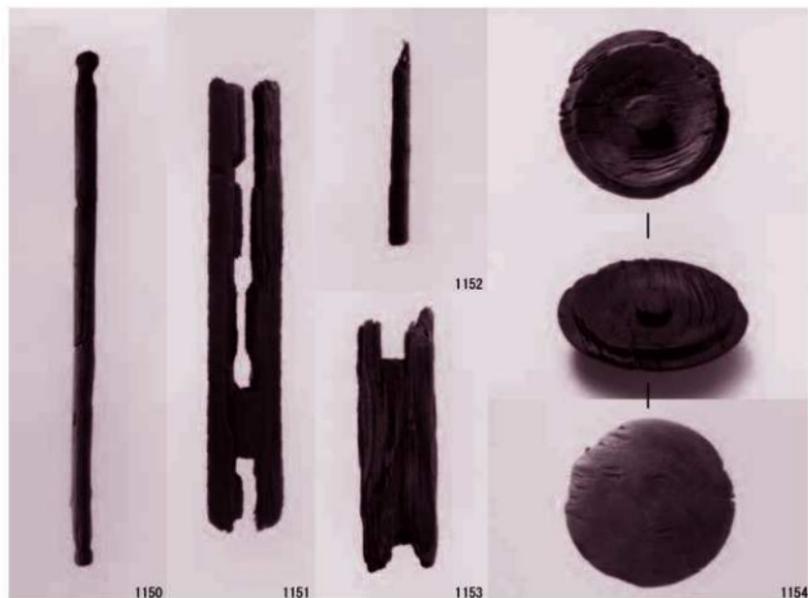


7層水田・包含層出土木製品（平安～中世）

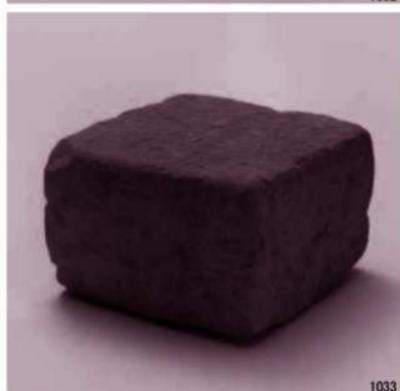
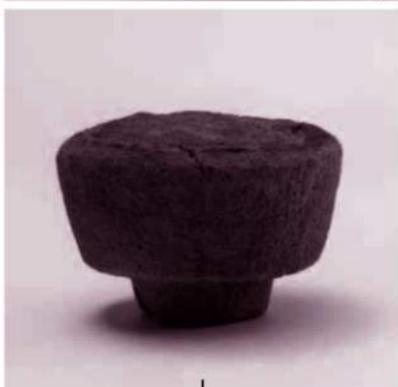


包含層出土木製品 (奈良～平安)

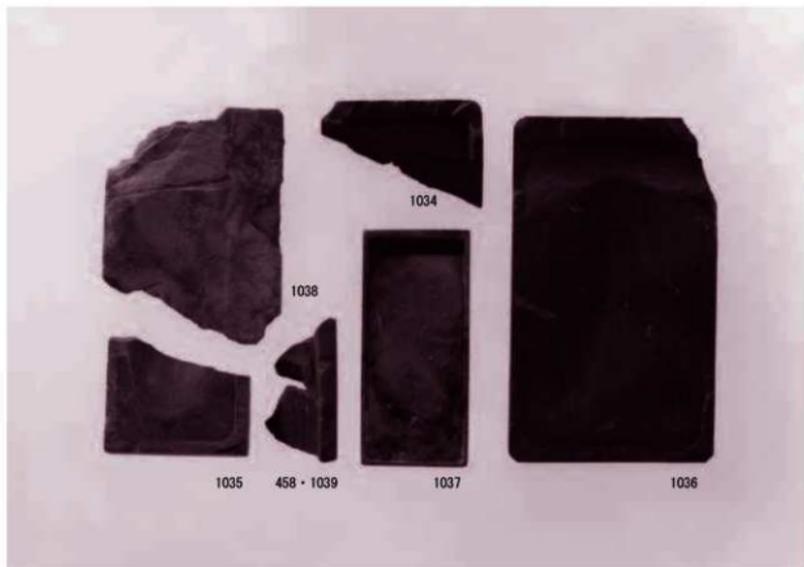
1148
赤外線写真



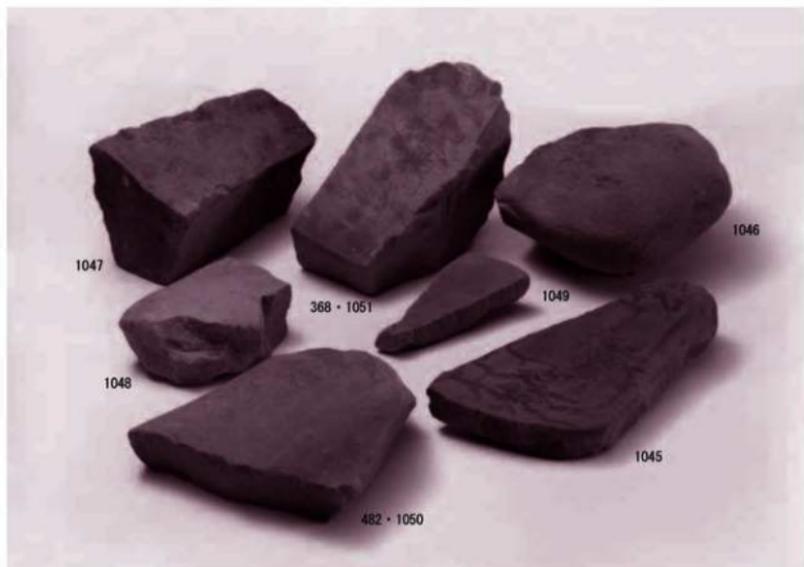
時期不明木製品・遺構出土種子他



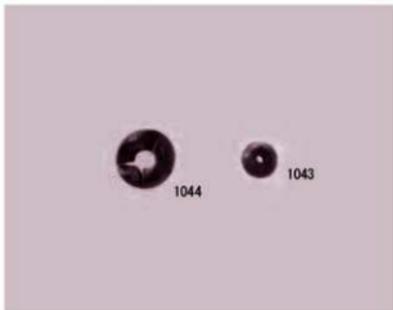
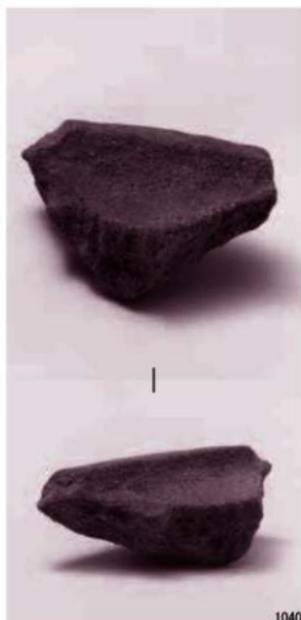
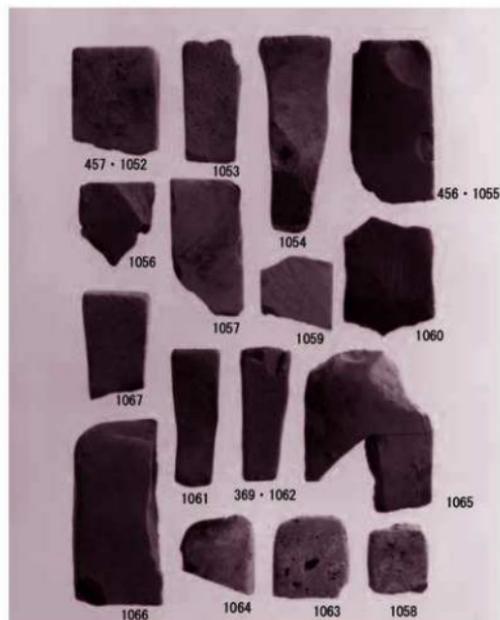
出土一石五輪塔・五輪塔



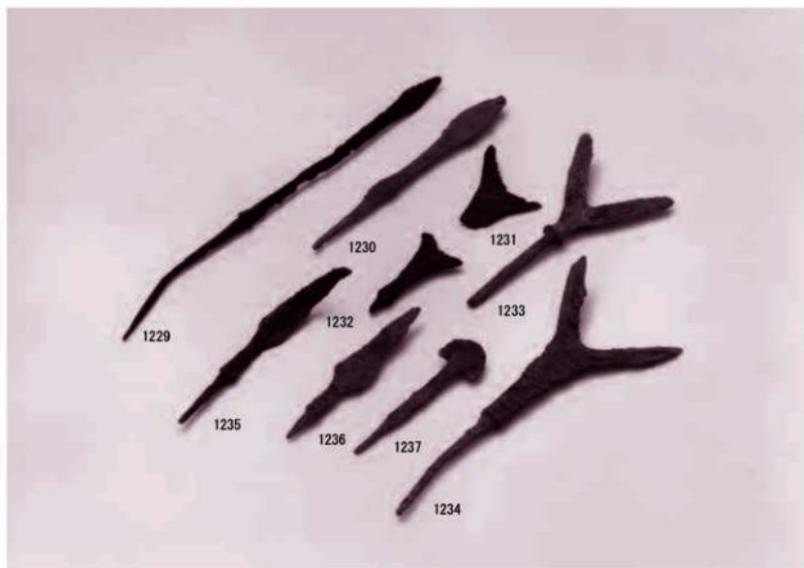
1. 出土硯



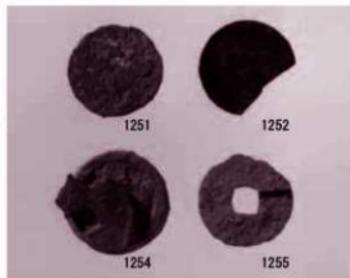
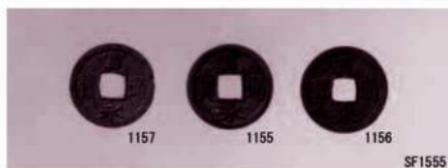
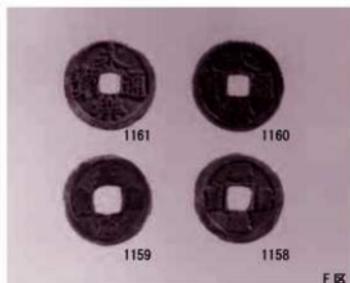
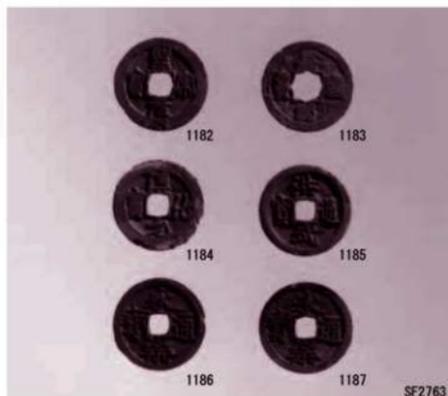
2. 出土硯石 1



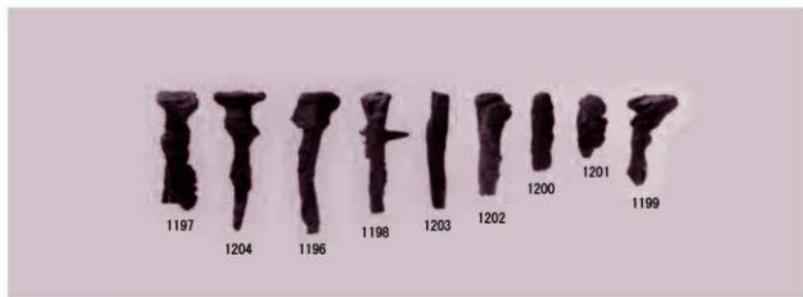
軽石集合



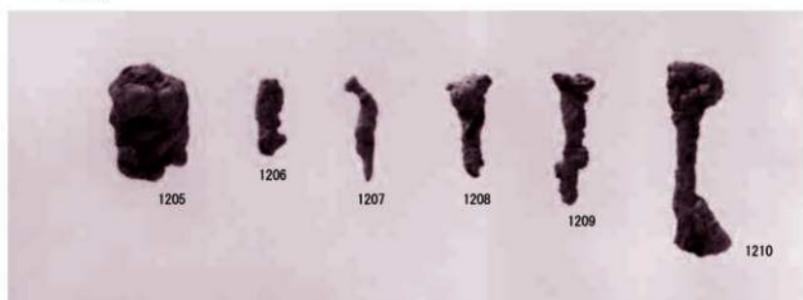
1. 出土铁戟



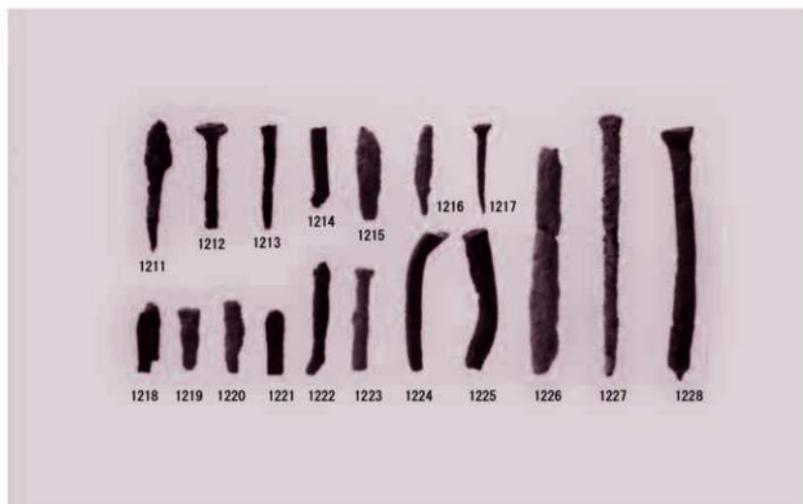
2. 近世墓他出土钱币



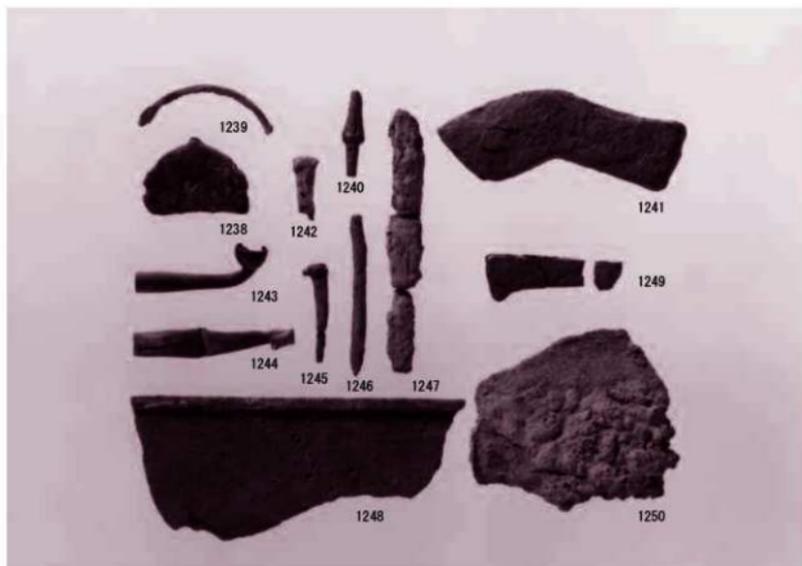
1. SF-F3出土釘



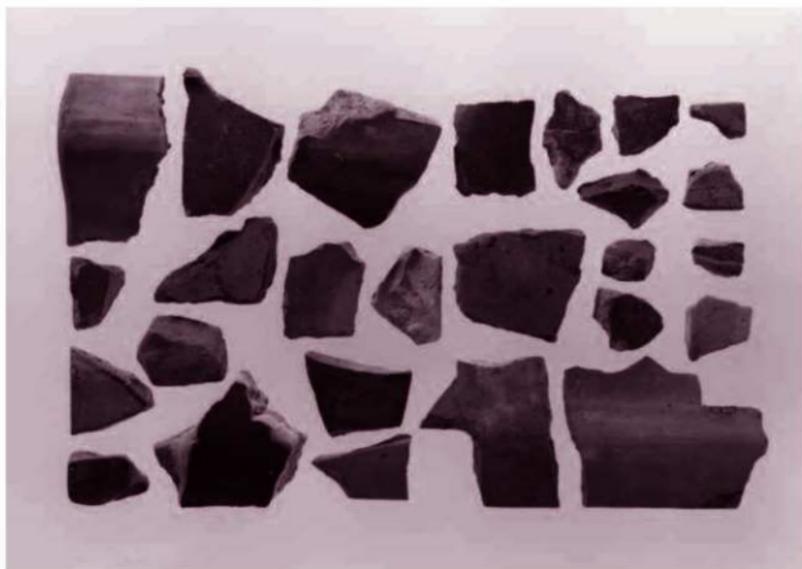
2. 包含層出土釘 1



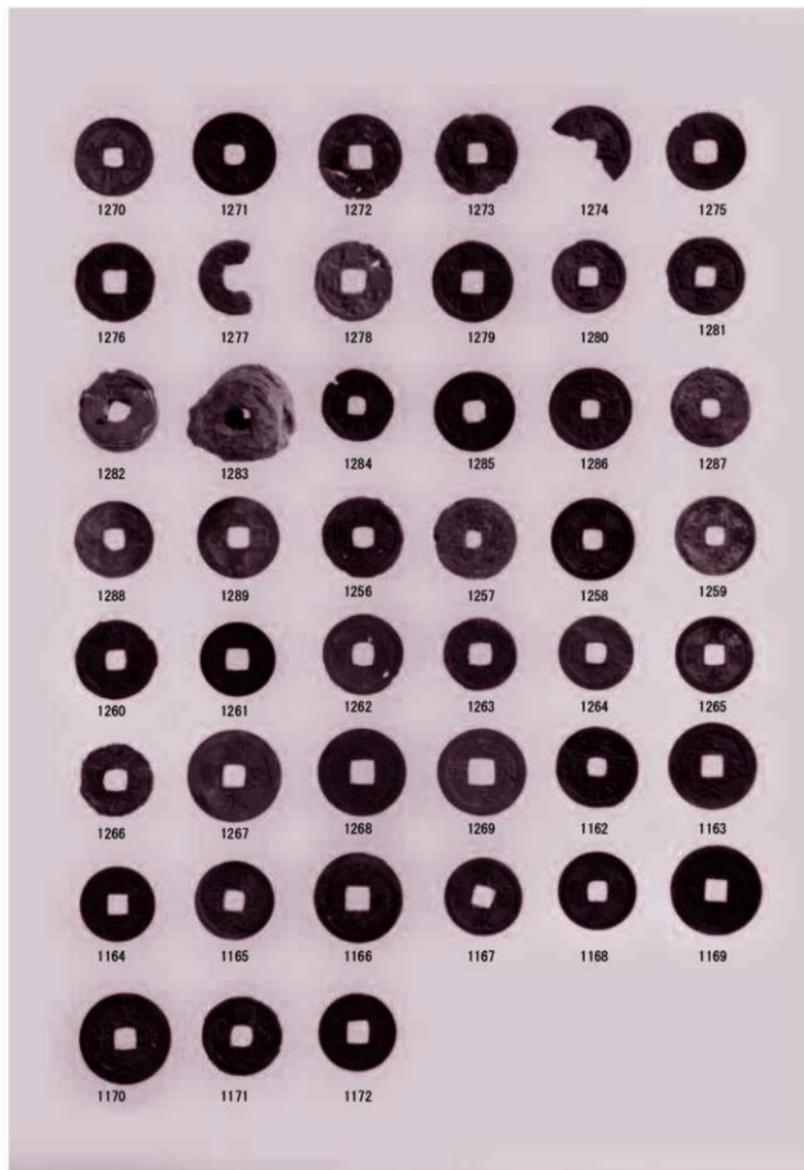
3. 包含層出土釘 2



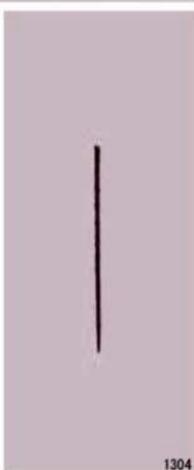
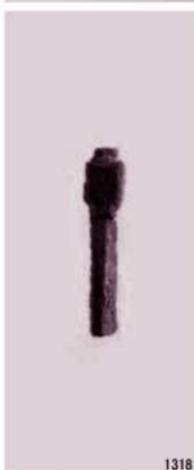
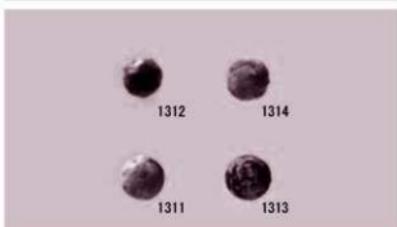
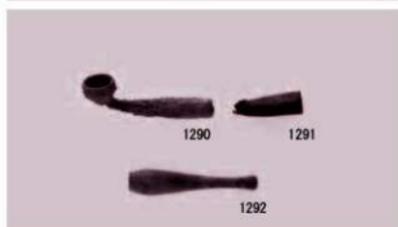
1. 遺構出土金属製品



2. 遺構出土瓦

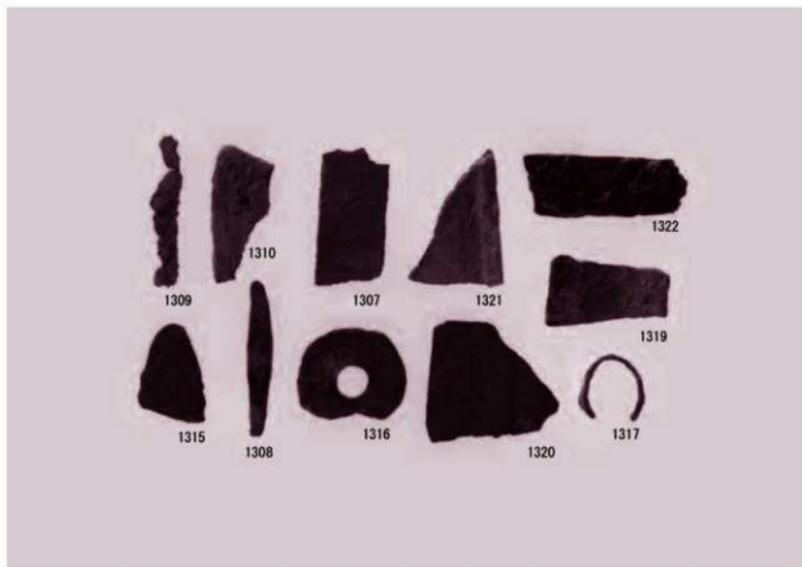


包含層出土錢貨（中～近世）

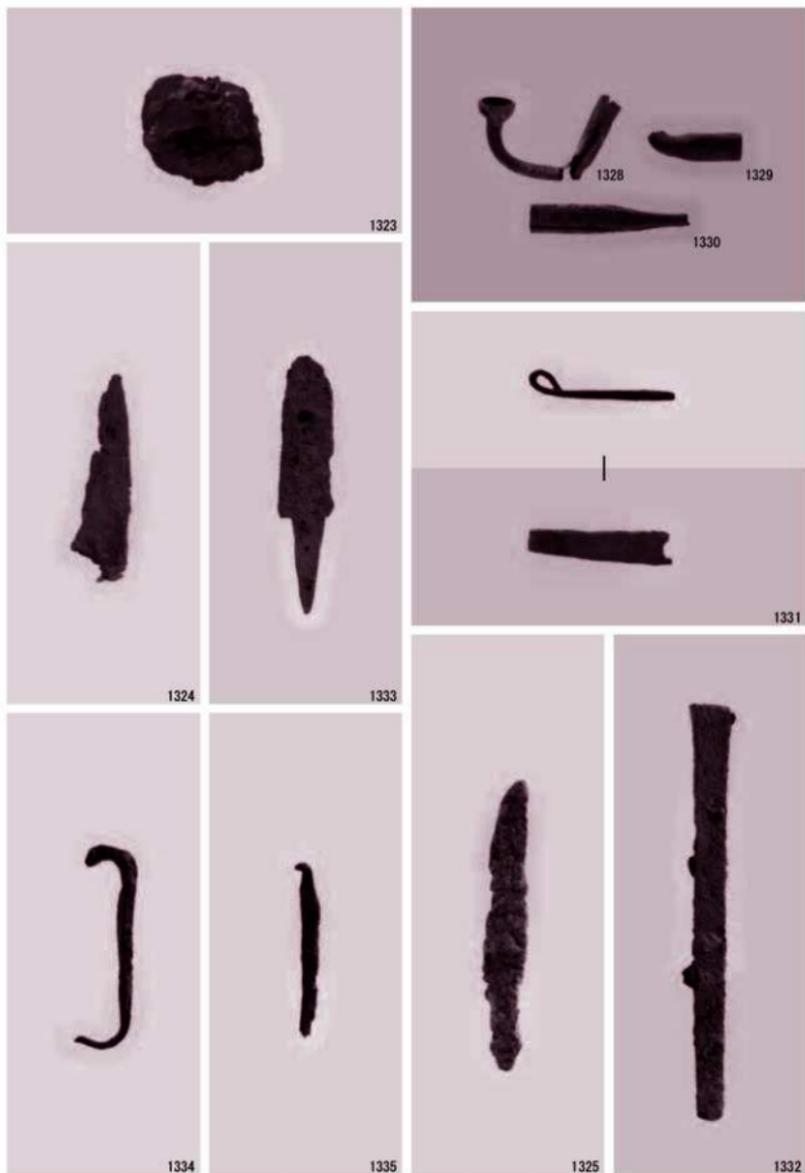




1. 包含层出土金属制品 2



2. 包含层出土金属制品 3



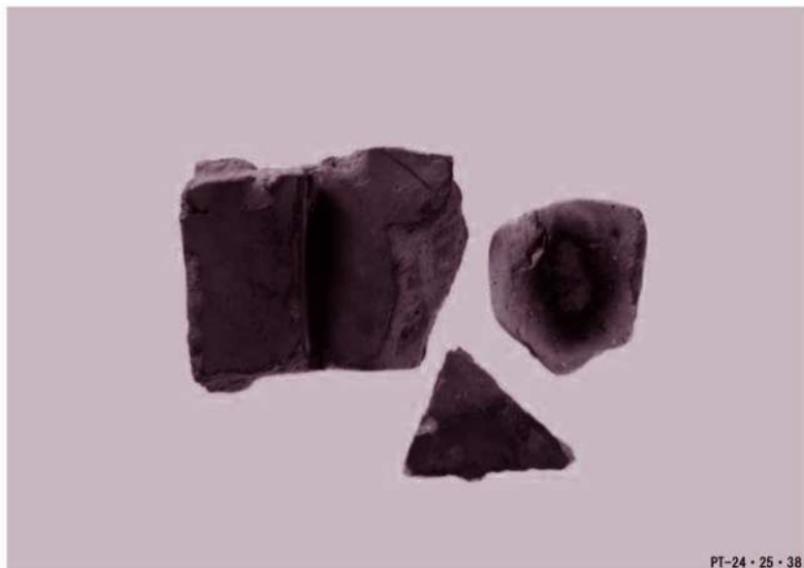
包含層出土金属製品 4



1. 出土瓦



2. 出土羽口・土錘他



PT-24 · 25 · 38

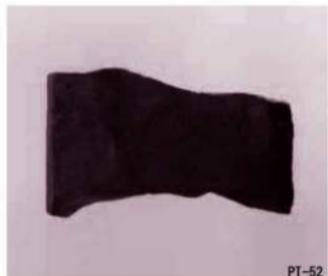
1. SX212 出土土製品



PT-5 · 6



PT-53



PT-52



PT-4



PT-98

2. 道横出土瓦

報告書抄録

ふりがな	じけまいいせきいち だいにとうめいなんばーはちじゅういちてん こだい・ちゅうへきんせいへん							
書名	寺家前遺跡 1 第二東名No.81 地点 古代・中～近世編							
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第19集							
編著者名	及川 司 中川津子 平野吾郎 松川理治							
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23番20号 TEL. 054-262-4261 (代)							
発行年月日	2012年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘理由
		市町	遺跡番号					
寺家前遺跡 確認調査 その1	静岡県静岡市中ノ谷 642-1号	22214		34° 53' 55"	138° 14' 51"	20000612 ～ 20000929	1,006	確認調査
寺家前遺跡 確認調査 その2	静岡県静岡市中ノ谷 642-1号	22214		34° 53' 55"	138° 14' 51"	20030929 ～ 20040325	1,665	確認調査
寺家前遺跡 本調査1期	静岡県静岡市中ノ谷 642-1号	22214		34° 53' 55"	138° 14' 51"	20001114 ～ 20010329	21,800	記録保存調査
寺家前遺跡 本調査 Ⅱ・Ⅲ期	静岡県静岡市中ノ谷 642-1号	22214		34° 53' 55"	138° 14' 51"	20030926 ～ 20070331	33,255	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				特記事項
寺家前遺跡	集落	弥生時代、古墳時代、 中世、近世	壇穴住居、竪立柱建物、溝、 井戸、堀列、土坑、瓦路	弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山薬陶、 陶磁器、陶瓦、土師、瓦、和川屋、磨製石斧、 砥石、石鏃、土輪、埴、陶製、銅器、 鉄片、鉄質、釘				
	水田	弥生時代、古墳時代、 奈良・平安時代、 中世、近世	板列大坪	銅、鋳、鎌、臼、西穴田下駄、大足、鎌稲杖、 杖、矢飯				染土割地帯をもつ水田を抽出した。
	墓	中世、近世	土丘墓	かわらけ、鉄質、釘				
要約	<p>当地の西側には市史跡である衣原古墳群が隣接し、鳥帽子形山から発生する丘陵上には寺家山古墳群の存在が知られていた。また周辺には今川氏に關連する屋敷跡の存在が想定され、北西の丘陵には「花倉の乱」の舞台となった花倉城もある。調査以前から付近に集落跡が存在することが想定されていた。しかしこれまで集落地域では大規模な発掘調査をする機会がなく、実態は不明であった。今回の調査では、弥生時代後期後半に初めてこの地に人の手が入り、集落と水田を開発した痕跡が見つかった。集落域では壇穴住居や竪立柱建物を検出した。水田域では低地一面に続く坪が見つかり、当時の土器や石器、埴薬材などの木製品が大量に出土した。水田は集落の東側に流れる菓梨川や背後の丘陵からの水が豊富であったと考えられる。その後、集落は一帯途絶え、古墳時代後期になると再び居住域となった。奈良～平安時代の遺構はごく僅かであったが、水田域では染土割地帯をもつ水田と大坪が抽出された。染土水田は菓梨中流域では初めての発見となった。やや時期をあけて、11世紀末になると再び居住域となり、廣や堀四等で区画された屋敷地が3箇所見つかった。屋敷地帯は12～13世紀代に最盛期であったようで、山薬陶を始めとする土器が数多く出土した。なかでも「花野」のある惣着土器は菓梨荘領主を表す可能性のあるものとして注目される。出土する陶磁器の年代から、屋敷地帯は14世紀以前も規模は縮小するもの存続していたと想定される。建武4年(1337)、足利尊氏が今川國征伐に意欲として「菓梨の庄」を奪取して以降、14世紀半ばには当地も大きな転機域となったであろう。近世以降は、小規模な集落と墓群が存在している。</p>							

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第19集

寺家前遺跡 I

第二東名No.81 地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

藤枝市-4

(古代・中～近世編)

平成24年3月26日

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002 静岡市駿河区谷田 23-20
TEL 054-262-4261 (代)
FAX 054-262-4266

印刷所 株式会社エムクリエイション
〒422-8032 静岡市駿河区有東 2-4-6
TEL 054-654-0018